THE CENTRAL REVIEW

中央公論

夏季特別號

第四十四年 第七號 第四百九十八號

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

夏季特別號

第四十四年　第七號　第四百九十

『超人子規』の藝術を讀まずして誰の藝術に就く

子規全集

東京市芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番
改造社

子規の全人格を仰げ

芭蕉以來の俳聖、萬葉以降の歌聖、明治文壇の先驅者正岡子規の偉業は、實に日本文學史上燦として不滅の光輝を放つ。然り、子規の藝術は正しく明治文壇に於ける一大革命であり、燦然たる大正の文藝を育んだ搖籃であつた。文豪夏目漱石の藝術も亦子規の閫閾より生れ、現代の俳句及び短歌にしてその源泉を子規に發せざるはない。明治文壇の空に輝く星辰は其數固より少くないが、併し巨大にして强力なるもの、子規を措いて何人があらうか。子規は斯く明治文壇の宗師たると共に、その人品極めて淸節高風、强烈なる魅力を有つた人格者であつた。されば子規の創作の何れにも些の塵影なく些の虛飾なく些の技巧なく、赤裸の子規居士そのものの現はれてゐないのはない。『子規全集』十八巻は、日本文學不朽の光輝であると共に、一代の覺者が人格の標章である。今や大衆の熾烈なる要求によつて、我社に於て普及版の刊行を見るに當り、われ等は眞に無上の歡喜を覺ゆ。偏に大衆の支持に俟つ。

（內容見本進呈）

子規の藝術を仰げ

1 俳句全集（第一卷）
2 俳句全集（第二卷）
3 俳句全集（第三卷）
4 俳論及俳話（上卷）
5 俳論及俳話（下卷）
6 歌論歌話及評論
7 和歌、新體詩、漢詩
8 隨筆（上卷）
9 隨筆（下卷）
10 小說、紀行、小品
11 少年時代創作篇（上卷）
12 少年時代創作篇（下卷）
13 編著（上卷）
14 編著（下卷）
15 書簡（上卷）
16 書簡（中卷）
17 書簡（下卷）
18 未發表作品及年譜、藏書目錄

第一回配本 **隨筆篇**（上卷）
仰臥漫錄・病牀六尺・松蘿玉液・墨汁一滴・堂々五百七十四頁

全十八卷 一冊壹圓
一時拂七十圓
〆切七月二十日

「超人子規」の藝術を讀まずして誰の藝術に就く

子規全集

子規の全人格を仰げ

芭蕉以來の俳聖、萬葉以降の歌聖、明治文壇の先驅者正岡子規の偉業は、實に日本文學史上燦として不滅の光輝を放つ。然り、子規の藝術は正しく明治文壇に於ける一大革命であり、燦然たる大正の文藝を育んだ搖籃であつた。文豪夏目漱石の藝術も亦子規の閫閾より生れ、現代の俳句及び短歌にしてその源泉を子規に發せざるはない。明治文壇の空に輝く星辰は其數固より少くないが、併し巨大にして强力なるもの、子規を措いて何人があらうか。子規は斯く明治文壇の宗師たると共に、その人品極めて清節高風、强烈なる魅力を有つた人格者であつた。されば子規の創作の何れにも些の塵影なく些の虚飾なく些の技巧なく、赤裸の子規居士そのものの現はれてゐないのはない。『子規全集』十八卷は、日本文學不朽の光輝であると共に、一代の覺者が人格の標章である。今や大衆の熾烈なる要求によつて、我社に於て普及版の刊行を見るに當り、われ等は眞に無上の歡喜を覺ゆ。偏に大衆の支持に俟つ。

（內容見本進呈）

子規の藝術を仰げ

1 俳句全集（第一卷）
2 俳句全集（第二卷）
3 俳句全集（第三卷）
4 俳論及俳話（上卷）
5 俳論及俳話（下卷）
6 歌論歌話及評論
7 和歌、新體詩、漢詩
8 隨筆（上卷）
9 隨筆（下卷）
10 小說、紀行、小品
11 少年時代創作篇（上卷）
12 少年時代創作篇（下卷）
13 編著（上卷）
14 編著（下卷）
15 書簡（上卷）
16 書簡（中卷）
17 書簡（下卷）
18 未發表作品及年譜、藏書目錄

第一回配本 隨筆篇（上卷）
仰臥漫錄・病牀六尺・堂々五百
松蘿玉液・墨汁一滴・七十四頁

全十八卷 一册壹圓
一時拂十七圓
〆切七月二十日

東京市芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番
改造社



Agfa
Cine Film
Negative
Agfa-Film
Agfa-Film
AGFA BERLIN
Agfa
Filmpack
12 Films


Agfa
Cine Film
Negative
Agfa-Film
Agfa-film
Agfa
Filmpack
12 Films
AGFA BERLIN



史的觀念論の諸問題

新刊

三木清著

菊判二九二頁　クロース裝函入　定價貳圓　送料書留廿七錢

今やマルクス主義理論の普及と共に、從來非歷史的な見方を習としてゐたこの國の人々の思惟にとつても、歷史の理論が最も重要なる問題となるに到つた。このとき觀念論哲學の諸體系がこの問題を如何に提出し、如何なる方法によつて、如何に解決しようと企てたかを認識することは、一般に大切であるのみならず、特に唯物論者にも必要であらう。然るに我等はこの方面に關する文獻をなほ殆ど全くもつてゐない。あたかも本書はこの缺陷を滿すべきものである。我等の有する輝ける理論家たる著者は、ここに於てもまたその勝れたる才能を發揮して、透徹せる理解と鋭利なる論理とをまことに鮮かに示してゐる。

最新刊

續哲學叢書(5)　新明正道著
社會學
四六判三一六頁　クロース裝函入　定價一圓五〇錢　送料書留一八錢

續哲學叢書(10)　戸坂潤著
科學方法論
四六判二八〇頁　クロース裝函入　定價一圓五〇錢　送料書留一八錢

フォールレンデル著　粟田賢三・吉野源三郎・古在由重共譯
西洋哲學史（第一卷）
四六判五〇二頁　クロース裝函入　定價二圓八〇錢　送料書留二七錢

穗積陳重著　法律進化論叢第三冊
慣習と法律
菊判二九四頁　クロース裝函入　定價二圓五〇錢　送料書留二七錢

宮崎先生　中田薰編
法制史論集
限定版六〇〇部　總カンバス裝　定價八圓　送料書留二七錢

圖書目錄及文庫目錄（既刊二百餘種內容詳解）進呈　乞御申込

岩波書店
東京神田南神保町　振替東京二六二四〇
電話九段二一〇八　二一〇九　一〇二二



並木　　平福百穂筆

文學博士 佐佐木信綱先生著 （増訂十版）

増訂 萬葉集選釋

▼四六判洋布裝全一册▼定價金參圓貳拾錢・送料拾六錢

現代萬葉學の泰斗たる佐佐木博士が萬葉集中より其の代表作たる長短歌約六百首を選び、之に平明適切なる評釋を加へたものであるが、從來の如き單に字義の解釋といふよりも、歌集としての萬葉集といふ點に重きを置き、歌としての面白みを解し、また味ふ事に最も力を盡されたのは本書の一大特色てある。加ふるに緒論には一般的の解題を試み、結論には總括的の評論をなし、更に萬葉の學書數百部を分類解説した『萬葉集研究書目解題』を添へた。

新古今集選釋

【好評第七版】
四六判布裝全一册
定價金貳圓五拾錢
送本料拾貳錢

本書また佐佐木博士が著された前書の姉妹編で、新古今集の秀歌を精選して明快なる評釋を施されたものである。且つ附錄とした「**六家集選**」は、同時代の代表的歌人たる西行、俊成、良經、慈圓、家隆、定家等の家集である『六家集』から特に其の秀歌を抄出したものである。從來、西行の『山家集』の外は流布本極めて乏しかつたが、本書によりて容易に他の五名匠の代表佳作にも接することが出來る

金子元臣先生著【増訂六版】
● **古今和歌集評釋**
定價金六圓八拾錢・送料廿四錢

鹽井正男先生著【第七版】
● **新古今集詳解**
定價金八圓五拾錢・送料廿四錢

金子元臣先生著【廿二版】
● 校註 **古今和歌集**
定價金壹圓參拾錢・送料拾錢

尾上八郎先生著【第五版】
● 校註 **新古今和歌集**
定價金壹圓八拾錢・送料拾貳錢

佐佐木信綱先生著
● 校註 **金槐和歌集**
定價金壹圓貳拾錢・送料拾錢

山内侯爵家藏（緞子裝卷子本）
● 紀貫之筆 **古今和歌集** 卷第二十
定價金拾貳圓・送料廿六錢
國寶的珍本である山内侯爵家の古今集を原寸大のコロタイプ版に複製し尾上博士の詳細なる解説を添ふ。

東京神田三河町二丁目十六番地 株式會社 **明治書院** 振替東京四九九一 出版目錄（進呈）

婦人公論

七月特輯
近代美人禮讃

私の戀愛と藝術

――私と女房への世評に答ふ――　藤原義江

我等のテナー藤原氏は秋子さんとの生活をぶちまけて敢然世評に答へる。戀と藝術と。壯烈な心を婦人公論を通して皆様に訴へる。

サラリー・マンはなぜ貧乏する？……前田[illegible]一
寶笑婦の顔……高田義一郎
關西の女を語る……谷崎潤一郎
良人を御用心なさい……下村千秋

小川早大投手を繞る插話……戸[illegible][illegible]三
綠蔭の大學街（大學評判記東北帝大の巻）……戸波恒郎
アパート事件……戸波恒郎
唄のマドロス……由利貞三

千里眼とはどんなものか……小熊虎之助
三越への令孃・奥様……大庭[illegible]
婦人職業としての寫眞技師……南實
夏の手藝……諸家
優美になり行く今年の水着……山脇敏子
夏の味覺……諸家
登山のシーズンを迎へて……黒田米子
避暑地の洋服……千種[illegible]子
山と海のスポーツ・ドレス……杉野芳子
アナトールの精神結婚……田内長太郎
海濱挿話……村上正雄
船舶無電物語……山西[illegible]生

創作

芥川さんの回顧……松村みね子
京都……渡邊均
花はくれなゐ……池谷信三郎
地に落ちた麥……掛井冴子
形影問はず（戯曲）……宇野千代
木がくれの巣……小島政二郎

大懸賞 近代美人寫眞募集

（詳細は七月號本誌に發表）

價七十錢・東京丸ビル・振替東京三四

中央公論社

總辭職と憲政常道

——(卷頭言)——

六月五日の新聞電報は英國保守黨内閣の總辭職を報じた。過般の總選擧に於て同黨の結果二百五十餘名を得たるに過ぎざる保守黨は、第一黨の地位を二百九十に垂んとする多數を擁たる勞働黨に譲り、假令第三黨の自由黨を聯合して過半數を制し得ても尚ほ勞働黨を超過すること僅々三十票足らずにとゞまるの事實に鑑み、所謂憲政の常道に鑑みて深く總辭職を決行したのだと云ふ。

英國に於て所謂憲政の常道とは、第一には選擧を公正に行ふことであり、第二は選擧の結果を有の儘に承認し事後に於てそれの不當なる紛更を試みざることであり、而して第三には其結果に附せらるる政治的效果の實現を相共に扶け就中新舊勢力の所謂新陳代謝を最も圓滑ならしむることである。斯くして始めて政權の實際的歸趨は完全に民間輿論の關知する所となる。之を外にして眞正の立憲政治はない。而して右の意味に於て英國保守黨内閣の這次の總辭職は固より憲政常道の一つの表現と認めらるるに十分である。

我國では今を距る五十年前、時の參議大隈重信に依つて亦同じ様な事の喝破されたことがある。明治十四年の大隈の密奏なるものには世間に種々の誤解がある。國會開設の奏議に添へて憲法案を捧呈したと云ふも謬りだが、奏議其ものに現實を無視する過激躁急の議論を含むと云ふも正當の見解ではない。斯んな事の詮索は別の機會に譲るとし、彼れが其結論として當局者の嚙り付きを排撃せる次の一句の如きは最も推賞に値するものと謂はねばならぬ。

> 立憲ノ政ハ政黨ノ政ナリ、政黨ノ爭ハ主義ノ爭ナリ。故ニ其主義國民過半數ノ保持スル所ト爲レハ其政黨政柄ヲ得ヘク、之ニ反スレハ政柄ヲ失フヘシ。是則チ立憲ノ眞政ニシテ又眞利ノ在ル所ナリ。……假令潔淸明白ノ心事ヲ以テ政ヲ天下ニ行フモ尚ホ或ハ戀權自利ノ心アルヲ疑ハル、ハ、是レ執政者ノ通患ナリ。然ルニ今ヤ立憲ノ政ヲ施サレントスル時ニ當リ、立憲國現行ノ通則ニ反シ其眞利ヲ捨テ、而テ却テ戀權ノ痕ヲ現ハサハ、執政者ニシテ爲ソ國人ノ爲ニ厭忌セラレサルヲ得ンヤ。……然リト雖モ權勢ヲ棄却スルハ古ヨリ人情ノ難スル所ニシテ、唯國家ヲ利スルニ熱渇スル者獨リ能ク之ヲ爲ス。政府ニ強大ノ威力ヲ蓄フル今日ノ執政者ニシテ勢威ニ眷戀セス立憲政治ノ眞體ヲ固定セハ、其德ヲ後昆ニ表示スルニ足ラン、又假令社會ノ毀譽ニ關セサルモ亦自ラ顧ミテ以テ中心ニ快然タルヲ得ン。世人常ニ曰フ邦國ノ治亂ハ多ク政治ノ慣習ニ生スト。果シテ然ラハ社會ノ秩序ヲ紊サスシテ靜穩ナル政黨更迭ノ新例ヲ定立シ、政治上ニ於テ國人康寧ノ慶福ヲ享有セシムルノ端緒ヲ啓カン事、是豈今日ノ執政者カ應爲ノ急務ニアラスヤ。

尤も起草者の大隈自身が後年内閣總理大臣としてこの所謂戀權の譏を免れ得なかつたのだから、今日深く田中義一輩の陋態を咎むべきでないかも知れぬが、さるにても運命の當然を從順に甘受して最も直截平明に事件を運んで行く英國の政界が羨ましい。

中央公論



第四十四年第七號
七月號
四百九十八號

現代の文明批評家及び哲學者の資格を論じて田中王堂氏を評價す

杉森孝次郎

一　現代の把握

A　列國の公分母

列國のことばに於いて現代の公分母を先づ問題とする。そしてそれは機械として發見、確認される。機械の別名は、この場合、産業革命だ。それの發生もしくは發達だ。

ロシヤとアメリカとを比見せよ。兩者間には、およそ二つの[illegible]相反する[illegible]の[illegible]の眼に先づつく。なぜか。ロシヤが最も意識的に、そして行動的に肯定するところのものは共產主義であり、否定するところのものは資本主義だ。けれどもそれはアメリカの反對だ。

しかしこの觀察は表面的だ。一九一七年秋以來、リエニンがいかに全露電化に熱誠努力したかは世間の記憶に新鮮だ。スターリンがいかに急進的にロシヤの工業化、機械產業化に熱誠し來たり、現になほしつゝあるかは世間に著名だ。科學的經營、フォード等を想起するまでもなく、現代のアメリカがいかに機械の信者、機械使用の信者、行者であるかは設問するだけ愚なほどだ。異なるところは經營の原則及び方法にある。手工業や農や狩を理想としない點に於いて、斷じて明白に機械產業の肯定者たる點に於いて、共產主義の總代表ロシヤと、資本主義の筆頭アメリカとは精確に歸一し、握手し、合流する。兩者は物質技術に於いては、したがつてまたその認識に於いては一だ。社會技術に於いてのみ、したがつてまたそのイデオロギーに於いてのみ兩者は相容れない。

ロシヤとイタリーとを比見する。一九一九年初、イタリーには始めてファシズムの結黨があつた。今日のイタリーは勿論それの發展だ。その結黨の事情はなんであつたか。それは勿論ロシヤ式共產主義の非常の國內的勃發に遇うて、最も急進的にそれを否定することにあつた。一九二二年秋、ムッソリーニの大規模のクーの成功もその事情はそれの極頂にほかならなかつた。即ち、ムッソリーニ統制のイタリーの存在理由は、すくなくともその一國內に於いてボルシエヸズムの存在すべからざる理由だ。その限りに於いて、極度の相反性があると見ねばならん。

しかしこれも表面的考察だ。ム氏のイタリーは極力富國策に從事し來たり、現にまたしつゝある。そしてその方法は斷じて科學的即ち機械だ。ム氏がロシヤに反して產業の國營を否定したのも、英米等に反して、ストライク及びロックアウトを違法として制定したのも、ことごとく動機を生產の最大能率化に有した。そして、北部ロムバールヂにすでに發達し

た機械産業のいやます發達をはかることと、殘餘の部分をも科學化することとはその主要方法であつた。それは現になほいよ〳〵發展しつゝある。

ロシヤと英米、またはイタリーと英米とを比見すれば、政治原則的に、議會主義の否定、肯定が意味するあらゆる差を示す。しかし産業革命の信、行者たる點に於いては、その發達段階上の後先別を除けば、要するに皆な大同だ。戰後のドイツは、政治的には著變したが、産業革命の猛烈なる發達的信、行者たる點に於いては、戰前の自己に優りこそすれすこしも劣らず、他列國に比してまた多くの點に於いて模範的でさへある。勿論、その政治的著變も、發達的産業革命への適應といふ性質を、他の多くの進化的性質と共に、しかも實は最も主として持つ。

日本が明治、大正の間に産業革命を開始し、現にその發達行程中にあることは特記するまでもない。ロシヤ化とアメリカ化が現代の日本に於いて著勢的だが、そのいづれもが産業革命の脈搏をば要するに打つ。もつと獨自的な、即ちもつと綜合的な見地からしても、現在の日本が發達的産業革命の肯定者たる特徴は確實だ。

現代の公分母が、その列國の公分母のかたちに於いて、産業革命の多少の發達段階として、即ち機械文化の或進化段階として發見されるのだ。

B　デモクラシ及びリベラリズムの衰微

デモクラシ及びそれとほゞ同義的な一成語としてのリベラリズムは、現代に於いて、あるひは最近代に於いて全く沈衰したおもむきがある。それは産業革命以來の資本主義をも、帝國主義をも、したがつて大戰をも、またしたがつてボルシエヰズムをも、さらにまたしたがつてファシズムをも防止することも、それらのものの發生後に制止することもできなかつた。デモクラシ及びリベラリズムは、これらの新興社會的諸勢力の前には、ほとんど無力そのものであつた。勿論、も

しかもそれらの[illegible]勢力の[illegible]デモクラシ[illegible]リベラリズムの名に於いての[illegible]國
にならないが、むしろ明白にその正反對のものであることは世のデモクラシ及びリベラリズムの宗徒のすくなくとも大部分者の信條、告白であるにかかはらずさうであつたのは、全くその兩者または實際上一者の無能、敗北を語る。いかにも、大戰はデモクラシの名に於いて、交戰兩派の一派が闘する限り、戰はれた。しかし、大戰の實質は帝國主義及び資本主義であつてデモクラシではなかつた。その「名に於いて」はリアルでなく、ノミナルであつた。全然さうだとはいへないが比較的にさうであつた。

デモクラシ及びリベラリズムはボルシエギズムのロシヤに於ける成功によつて一強打をうけ、ファシズムの成功によつてより以上もの強打をうけたことは無論だが、かへりみれば、これらはもつと幅廣く、底深き流れの一、二激越部分にほかならなかつた。デモクラシ及びリベラリズムの最も傳統的基礎確實なイギリスに於いてさへ、一九一八年十二月の總選擧を劃期として、自由黨は反對的勢力ですらなくなつた。勞働黨が反對黨たる常位を占め、與黨は保守黨によつて概ね獨占され、例外は勞働黨の與黨化によつてのみ構成される新歷史が始まつた。アメリカを見ても、ウヰルソン沒落の當時以來明白に、大勢と事情は民主黨の不利と、共和黨の有利を示す。共和黨は勿論右黨だ。

日本の議會に於ける右黨の勢力と、社會に於ける無産黨の人氣とは、そしてその中間勢力の不振とは、またデモクラシ及びリベラリズムの沈衰の一例だ。院内の直接行動化と、世上の議會不信任的氣分とがまた同一大勢を反映する。民政黨は、部分的現象を除いては、そしてともかくもといふ條件つきにて、日本に於けるデモクラシ及びリベラリズムの代表的勢力だ。

自由黨は現代に於いて、その財源をばブルジョアジーに求め、その演説をば平時つとめてプロレタリアート向きにするといふ不徹底、不純、無統一を犯しつつある。それゆゑ、いざといふ責任的、行動的時處に際會しては、僞善的で、弱い

といふことは事實だが、これは、しかし、現象の或ものであつて、實在のすべてではない。デモクラシ及びリベラリズムの衰運の原因はもつと歴史的、社會的だ。

デモクラシ及びリベラリズムは、勿論、主として政治史上の産物だが、それの起原は近世に屬する。それは、最も選擇的にいふならば十七世紀の英國にあつた。

フイッグスの發生は後年の自由黨の發生であつた。そのフイッグスは、しかるに勿論、ブルジョアジー・リベラルスであつた。そのブルジョアジーは手工業的生産階級であつた。そしてそのリベラルスは、必然、個人主義的自由主義者であつた。必然といふわけは、手工業的生産階級を本體とする指導意識、イデオロギー、心的習性は個人主義的自由主義たらざるをえない關係が明視されるからだ。狩や遊牧は閑問題として措き、農は方法に於いて天氣に依頼し、目的物に於いて生命の法則に適應する必要を有するがゆゑに、散漫主義、無責任主義、運命主義、神祕主義、自然崇拜等の習性を發達させる。手工業は、それのあらゆる關係に於いて個人を基準とし、條件とし、目的とし、そして反映する。手工業的生産及び分配即ち商の全盛時代がいかに個人を發見し、個人主義を發明したかは、それがどんなに深烈であり、高邁であつても驚くに足りないほどだ。

傳統的デモクラシ及びリベラリズムは、實に、十七世紀の英國の手工業全盛を事情とするものであつた。そのたましひは容易にミユテーションを許容しない。勿論、デモクラシ及びリベラリズムの原則の原則、本質の本質ともいふべきもの、精神そのものは發展的將來をそれの發生後持つたのみならず、今後なほ持つと察せられるが、その習性は手工業時代に適して超手工業時代即ち産業革命以後には不適だ。その理由は簡明だ。産業革命は集團主義に革命的新發達を與へるからだ。

機械を見よ。それはそれのあらゆる關係に於いて集團主義、社會主義、組織主義だ。分業が機械によつて必然發達を與へられたことは一大傾向の部分的一性質にすぎない。けれども、その分業だけでも機械の社會化力、集團主義化力、集團

形成り、組織能力を有力に誇示及び指示する。

機械は人間生活を直接個人主義のことばに於いては說明しえられないものとする。機械は人格を滿たするが、しかしそれはそれの未成達の段階に於いては個人主義の喪失を消極的特徴とする、そして外的能率を積極的特徴とする組織主義の專橫に機會を與へる。旅は路伴れ世は情け、一樹の陰一河の流れ袖振り合ふも他生の緣は機械時代には昔ばなしだ。電車、汽車の隣席を見よ。タイプの手紙では肉筆の直接個人主義または人格主義の情味は經驗されない。電話では顏色が與へる限りの刺戟、したがつてその刺戟が與へる限りの反應は缺ける。紙とインクから成り立つ刷り物―本、冊子、新聞、雜誌、宣傳文を直接には材料として、機會として世界的に結黨したり輿論を作り上げたりする。人は隱れて事が專ら顯動する。そこに人はある。しかしそれは集團人、組織人であつて個人ではない。およそかくの如き事情下に、傳統的のデモクラシ及びリベラリズムがいかに見るかげもないものと化し去るほかないかは多く考へて見るまでもない。思想家及び文人の類にして、滔々として凋落し去る群れの如き、または群れのなかにも、この考察を立證する效果あるものがもとよりすくなくない。わが王堂氏がこの關係に於いていかなるものであるかは後段に說く。ただ、讀者のなかには、かれの「徹底個人主義」をこの機會に自然に想起させられるものがあつて不思議でない。あるひは武者小路氏を聯想する讀者もあつて不思議でない。

機械は個人としての人の時代をはうむり去つて、事の時代を興こした。その事は社會行動としての事だ。その時代のすべての理論も、したがつて社會行動の理論だ。さうでないものは關心されず、保育されない。時代によつてだ。時代の發展力ある部分、發展的時代によつてだ。

しかし、この最後の點に關する考察の發展はここの要事でないとして、機械は外的能率を目的とする、また必然的に條件とする集團單位主義、組織的集團主義を曠古無比の高い程度に於いて發達させた。そもそも機械は、道具と異なつて、

個人にかかはらず行動する。道具は手から離れては靜死する。機械は工場を見、その輪轉機を見、汽車を見、時計を見てわかる通り頗る自動する。機械の發達は、一つの特徴に於いては、その自動率の增進だ。機械が有するこの自動性は社會に於ける機械の位置の上に重大なる幾多の效果として現はれる。その一つは、機械のゐるに、現代文化は個人にかかはらず行動するといふ事實だ。手工業的、道具產業的個人主義時代に發達した傳統的デモクラシ及びリベラリズムは、その機械知らずの初心もののゐるに、桃から生まれた桃太郎が與へうる不幸なる想像を例證するものの如くに、現實の機械時代に處しては、事しきりに志とたがふ。神聖なる、淸き一人一票を見よ。機械を事情とする大政黨主義、新聞政策、大會社、帝國の直接、間接の巨怪なる集團力的、組織的統制下に、勢力下にそれは全く骨拔きのもの化され、それの初志的標榜たる個人的自由は幽靈の如く影薄く、正體は集團組織的暴君のためのものであることを連續的に實示したではないか。一人一票が示した運命は傳統的デモクラシ及びリベラリズムが一般的に示した運命の一例證だ。

デモクラシ及びリベラリズムには勿論永久の發展的生命がある。社會原則としてそれ以上のものはありえないとさへ、その概念の最善構成を條件とすれば容易に、確實にいひうる。しかし、その意味のデモクラシ及びリベラリズムは現代に於いては未發達だ。さればこそ、リエニン一派はリエニン一派のことばに於いて、眞正のデモクラシはボルシエギズムによつてのみ可能だと斷言し、公唱し、ムツソリーニはまたかれ自身のことばに於いて、眞正のデモクラシはフアシズムによつてのみ可能だと主張する。デモクラシの自任的使徒は、現代に於いては、一見最も意外の邊にさへ發見され、そしてそれが必ずしも一概に無責任、無自覺ではなく、存在無理由では決してない。

要するに、デモクラシ及びリベラリズムが現代に十分なる存在理由を構成するためには、それは機械を十分に、それの社會關係にしたがつて、理解したものでなければならん。さうでないならば、それは刀槍弓の類をもつて現代の科學的戰鬪方法、巨艦、巨砲等に勇敢に及むかふに等しい。征意、鬪志はどんなに眞烈であつても成功しない。

C　唯物辯證法及びワトサニズムの全盛

唯物辯證法は唯物史觀、唯物論であると同時に革命イデオロギーだ。さうしたものの、たとひ部分的現象だとはしても全盛的現實はなにを意味するか。また、ワトサニズムといふことばは私の造語だが、さうもいひうべき行動主義の、同じく部分的現象だとはしても、發生と流行はなにを意味するか。それらのものの現在に於ける、及び將來に於ける社會的勢力としての深さ、廣さ、支配の明確なる認識は別の問題として、ともかくもそれらのものが現に發揮しつつある多少の社會的暗示力、誘引力、乃至廣く魅力はなにを原因とし、事情とする現象か。その答へも第一にまた最後的に機械の或關係、產業革命の或段階にあると私は考へる。

ヘーゲルの觀念的、唯理的辯證法をマールクスは唯物的に轉化した。かれをしてさうせしめた社會的事情は產業革命であつた。マールクスは產業革命をそれの最も新鮮潑溂たるところに於いて直視した。十九世紀のイギリスの產業革命出發直後の行程をかれはかれの性格と個人的事情とを條件として體察――體驗ではない――した。深刻なる同情をもつて觀察した。その同情は勿論勞働者にであつた。かれの性格は少年以來革命的であつた。かれの個人的事情內にはヘーゲルの辯證法的進化史觀の影響があつた。

唯物辯證法のイデオロギーはいかなる時に發生したか。前言した通り、それは產業革命直前ではなく、それの出發直後であつた。輪轉機を、汽車を、それの最高速度的運轉、進行時に見れば、ア・プリオリ的な、そして絕對的な能動力、決定力がそれらのものに想與されうる。十八世紀は產業革命を發明した時代であつた。そこに最も尖鋭化されたものは聰明であつた。創造的意識であつた。產業革命が或段階以上に發達すれば、そこには十分なる產を條件とする豐富なる閑の意識が、したがつて深義に於いての藝術的意識が必然、最も尖鋭化されるであらう。深義に於いてのとは認識・行動の或種類

の諸形をも含めてのといふことだ。その認識は物質認識及び社會認識の一切を含み、その行動は物質技術及び社會技術の一切を含む。

しかし、産業革命をそれの最も新奇旺盛な際に直察すれば、そこには十八世紀のやうな創造的見解も發達しえず、二十世紀も今後に屬するやうな超越的見解も發達しえない部分的可能はたしかにある。勿論、創造といひ、超越といふ、ここにては專ら機械を目的としての話だ。その部分的可能の一實現がマールクスにあつた。

場所のことばに於いては、唯物辯證法の生産者の注意は工場に集中した。そして人のことばに於いてはそれは勞働者に集中した。行動のことばに於いてはそれは勞働に集中した。技術、科學、組織、企業、經營、研究、消費等はパースペクチヴに於いて當面、至近ではなかつた。それは演繹論的にも斷言されうる。もしもそれらのものが前者と共に十分に視野内に收められたならば、唯物論の單純なる成立は不可能だ。

現代は機械づくめだ。朝起きてから、次ぎの朝起きるまで、先づもつて機械攻めの目的物たる位置に各人はある。寢具も工場、輸送機械を反映する。洗面諸品もさうだ。朝刊がまたもとより大いにさうだ。それはまた機械文化をインテンシヴに供給さへする。勤めさきの事務、作業は、それの場處と共に全然的に機械生産だと、物的特徴だけに注意すればほとんど概斷しうる。途中の道路、乗り物、視覺、聽覺を刺戟する實に多くのものがまた機械そのものにあらざれば機械を反映するなにものかだ。詩人も萬年筆に親しみ、國粹主義者も洋服に、靴に、自動車に親しむ。

居は氣を移すとは孟軻の言だが、いかにもその通り。機械は現代に於いて刻刻不斷的に人間を改宗しつつある。機械そのものの如くに人間を考へさせ、行動させる力を機械は、決して輕視すべからざる程度に於いて、發揮する。昔の生活が自然と人間とから成り立ち、もしくは道具と人間と自然とから成り立つたとするならば、今の生活は機械と人間と自然とから成り立つ。機械の氣移りがする。機械が習性征服のかたちに於いて人間の內的組織、したがつて人間の現象にまで進

展する。機械の默示的社會權威があるのだ。あるひは社會技術といひうる。唯物史觀はこれを反映する。

機械の方法は有效だ。それは最も確實に、インファリブルに有效だ。それの方法は客觀的だ。それは必ず五官にうつたへる式のものだ。信仰が山をも移すかいなかは問題とされる餘地があるが、機械がトンネルをあけ、坑をうがち、山を崩す力は問題とされる餘地もない。その機械の方法はまた極度に組織的だ。コミンテルンの細胞主義は精確にそれを反映する。機械の方法は絶對統制だ。いかに複雜なる機械も一つの目的に統一されてゐる。これもまたコミンテルンに、帝國主義に、大會社主義に顯著なる反映を持つ。

中世の封建主義、近世の個人主義を社會技術の原則の内に持ち續けたる最近代及び現代は、この機械の作用下に、露骨なる權力意思の大集團を發達させた。資本主義、帝國主義、共産主義はそれぞれにそれだ。唯物辯證法はこの過程の記述、說明、及び渦中の指導理論として無比の妥當性及び刺戟力をほとんど自明的に持つ。

ワトサンは刺戟、反應、行動のことばに於いて人間現象の一切を把握しうると主張する。かれの名に於いての行動主義の社會的勢力は大したものだとはいへない。しかし、かれの說が時代の位置と習性に最も經濟的にうつたへるたちのものであることは明白だ。經濟的にとは最小勞力を原因とする最大效果式にだ。その時代の位置とはなにか。それは科學殊に機械が與へた物的決定力の最も顯著なる史的一段階が身をもつて示すものだ。その時代の習性とはなにか。それは物的、感官認識的、客觀的形式に於いて機械がいかにもあざやかに規定力を示すことから自然に人間が學習した、獲得した同一傾向の習性だ。

客觀的規定力は機械が教育した現代の一本能だ。準本能的一物だ。制度變革はその客觀的規定力の代表的一物だ。プラグマチズムが十分にここまで進展しなかつたところに、プラグマチズムがその名に於いては忘れ去られた一因がある。ついでながら、わが王堂氏の過去の運命がここに聯想される或ものを持つ。

勿論、客觀的形式に於いての規定力卽ちコンヂショニングはまたワトサンに於ける一範疇、一根本概念だ。現代の唯物辯證法及び私のいはゆるワトサニズムの事情が機械に最も主として存することは再認をあたひする。

D 社會的見地の流行

社會主義の全盛ぶり、社會奉仕がり、すべてのまじめ及び不まじめの社會的、社會本位的言動はまさしく現代の一特徵だ。そしてそれの主原因が、事情的主原因が機械に存することは自明的だ。生產の物質技術的側面はすでに完全に機械化した。殘餘卽ち社會技術的側面が舊態依然たるところに現代の社會不安の總本源があるのだから、社會的見地の刺戟力が現代に於いて異常に强大であることはすこしも不思議でない。「徹底個人主義」的見地は社會を十分に適應させることによつてのみ、個人に適應させることによつてのみ眞に徹底しうるものであることも一つの系的自明理だ。リエニンの第三國際がマールクスの第一國際から識別される要點は後者には組織の必要の意識が明確に發達してゐることにある。第一國際の失敗と第三國際の成功の一大事情がまたそこにある。現代に於いて個人主義を徹底させる意思あるもの、またおのづから同樣の關係を把握せねばならん。

E 宗教的ボルシエギズム及びフアシズムの發生

人類は宗教的動物だと私は考へる。宗教とはなにか。それは集團主義を條件とする個人的、全人格的白熱だと、記述的であるよりも暗示的に私はここに定義する。改宗したといへば、その人の行動、思想の上に顯著な一變が生じたことを一特徵とするものであらねばならんこと、さうでないならばそれは改宗でもなんでもないことを、宗教の定義の一附註として私はここに記するであらう。

右の宗教の定義を假定するとき、なに人か、ボルシエギズム及びファシズムの現代に於ける宗教的二形式としての價値を否認することができよう。ボルシエギズムの一團は口に宗教を否定するが、かれら自身一つの新宗教團であり、ムッソリーニは自身ファシズムを新宗教呼ばはりしてゐる。

クリスト教は農業時代に發生し、發達し、近世の手工業時代に入つてくるしくも適應し、即ち宗教改革が意味する個人主義的、理知主義的再生をはかつて今日に及んだ。しかし、そのクリスト教も、産業革命以後の社會には不幸にして急進的不適を生じた。唯物辯證法及びワトサニズムの全盛の事情が機械であり、デモクラシ及びリベラリズムの衰微の事情がまた機械であるとするならば、その機械が、すくなくとも現代に於いて、クリスト教に不利なものであることは論理的に明白だ。そのクリスト教が久しく私有した白熱、集團主義を條件とする白熱が大戰後殊に急に釋放された。なにものかを材料とし、機會として白熱せねば自己がすまない人類の宗教的根本性能が、先づとらへたものはマールクシズムであつた。それは自然なことであつた。なぜなら、マールクシズムこそは、またリエニニズムこそは、多くの點に於いて、傳統的クリスト教の精確に逆手のものだ。後者に失望したものが前者に躍心することは自然的だ。

ファシズムも、手段に於いて直接行動、成功後の方法に於いて獨裁、この點に於いてボルシエギズムと同一だ。そしてその限りに於いてすくなくとも、それは機械を反映し、したがつて傳統的クリスト教を否定する。勿論、ロヨラ宗の如きは例外だ。

ナショナリズムが近代の一新宗教たる實力を久しく發揮したが、それも、大戰後急に沒落に傾いた。そもそもナショナリズムは、機械の發達によつて次第に制限されるほかない性質のものだ。コミンテルンが、また第一國際が、さらにまた第二國際ですらもが、文字通りに國際的、世界的であることは、この間の消息を語る。機械は國境を必然ノミナルなもの、過去のものに移し行く。發達的新生命がナショナリズムに宗教を見いだしえなくなつたのは事情明白だ。そのナショナリ

勿論、客觀的形式に於いての規定力卽ちコンヂショニングはまたワトサンに於ける一範疇、一根本概念だ。

現代の唯物辯證法及び私のいはゆるワトサニズムの事情が機械に最も主として存することは再認をあたひする。

D　社會的見地の流行

社會主義の全盛ぶり、社會奉仕がり、すべてのまじめ及び不まじめの社會的、社會本位的言動はまさしく現代の一特徵だ。そしてそれの主原因が、事情的主原因が機械に存することは自明的だ。生產の物質技術的側面はすでに完全に機械化した。殘餘卽ち社會技術的側面が舊態依然たるところに現代の社會不安の總本源があるのだから、社會的見地の刺戟力が現代に於いて異常に强大であることはすこしも不思議でない。「徹底個人主義」的見地は社會を十分に適應させることによつてのみ、個人に適應させることによつてのみ眞に徹底しうるものであることも一つの系的自明理だ。リエニンの第三國際がマールクスの第一國際から識別される要點は後者には組織の必要の意識が明確に發達してゐることにある。第一國際の失敗と第三國際の成功の一大事情がまたそこにある。現代に於いて個人主義を徹底させる意思あるもの、またおのづから同樣の關係を把握せねばならん。

E　宗敎的ボルシエギズム及びフアシズムの發生

人類は宗敎的動物だと私は考へる。宗敎とはなにか。それは集團主義を條件とする個人的、全人格的白熱だと、記述的であるよりも暗示的に私はここに定義する。改宗したといへば、その人の行動、思想の上に顯著な一變が生じたことを一特徵とするものであらねばならんこと、さうでないならばそれは改宗でもなんでもないことを、宗敎の定義の一附註として私はここに記するであらう。

右の宗教の定義を假定するとき、なに人か、ボルシエヰズム及びファシズムの現代における宗教的一形式としての位置を否認することができよう。ボルシエヰズムの一面は口に宗教を否定するが、それ自身一つの新宗教體であり、ムッソリーニは自身ファシズムを新宗教呼ばはりしてゐる。

クリスト教は農業時代に發生し、發達し、近世の手工業時代に入つてくるしくも適應し、即ち宗教改革が意味する個人主義的、理知主義的再生をはかつて今日に及んだ。しかし、そのクリスト教も、産業革命以後の社會には不幸にして急進的不適を生じた。唯物辯證法及びワトサニズムの全盛の事情が機械であり、デモクラシ及びリベラリズムの衰微の事情がまた機械であるとするならば、その機械が、すくなくとも現代に於いて、クリスト教に不利なものであることは論理的に明白だ。そのクリスト教が久しく私有した白熱、集團主義を條件とする白熱が大戰後殊に急に釋放された。なにものかを材料とし、機會として白熱せねば自己がすまない人類の宗教的根本性能が、先づとらへたものはマールクシズムであつた。それは自然なことであつた。なぜなら、マールクシズムこそは、またリエニニズムこそは、多くの點に於いて、傳統的クリスト教の精確に逆手のものだ。後者に失望したものが前者に歸心することは自然的だ。

ファシズムも、手段に於いて直接行動、成功後の方法に於いて獨裁、この點に於いてボルシエヰズムと同一だ。そしてその限りに於いてすくなくとも、それは機械を反映し、したがつて傳統的クリスト教を否定する。勿論、ロヨラ宗の如きは例外だ。

ナショナリズムが近代の一新宗教たる實力を久しく發揮したが、それも、大戰後急に沒落に傾いた。そもそもナショナリズムは、機械の發達によつて次第に制限されるほかない性質のものだ。コミンテルンが、また第一國際が、さらにまた第二國際ですらもが、文字通りに國際的、世界的であることは、この間の消息を語る。機械は國境を必然ノミナルなもの、過去のものに移し行く。發達的新生命がナショナリズムに宗教を見いだしえなくなつたのは事情明白だ。そのナショナリ

ズムが釋放した熱量を、マールクシズム及びリエニニズムは先づとらへた。

デモクラシ及びリベラリズムが久しく近代の一新宗教で事實上あつたことは著明だが、それの衰徴も前記の通り最近代の事實だ。その釋放熱がまた機械宗を形成した關係も思索される。

F　機械の人間性への不調節

現代は機械の人間性への不調節に於いて顯著だ。

消費制限を條件とする生產制限、逆にまた生產制限を條件とする消費制限の存在はその一現象だ。しかし、その生產制限は機械時代なればこそ出來る藝だ。機械はそれほどにも限りなき生產能力を持つ。現代に於ける生產制限は、原因を社會技術に於ける手工業時代及び農業時代に持つ。

機械は大生產を可能にする。機械は發達するにしたがつていよ〳〵自動する。產と閑が機械時代の特徵であらねばならん。しかし現代は必ずしもさうなつてゐない。權力意思による生產及び分配の制限が一大原因をそこに形成してゐる。

現代は生產の物的方法をば機械に一任するが、生產及び分配の社會技術的部分をば機械以前時代の慣制に概任してゐる。ここに機械と人間性との間なる最大不調節が、無產、無特權者が關する限り、構成されてゐる。

機械の究極的存在理由は明確だ。しかし現代に於けるそれの未實現は顯著だ。

G　半機械時代

これを要するに、現代は半機械時代と名づけうべき位置にある。產業革命の發達がこの程度または段階にまで來たが、そのさきへ進んでゐないのだ。機械の社會理論が現代なほ甚だしく未發達だ。これは現代に機械に對する社會統制、機械

の社會政策が未發達であることの結果であると信ずるに原因だ。

二　文明批評家及び哲學者としての王堂氏

現代の文明批評家の資格は勿論現代に對するかれの把握力の優秀、强大にあらねばならん。わが王堂氏を見るに、かれの根本聰明と根本識力と根本知能とは、すくなくともわが日本の史上に於いて極めてまれに見られる階級に屬するものであるにかかはらず、不幸にしてかれは現代の把握を怠つてゐる。この點、玉に瑕であるよりもむしろ玉杯にして底を缺くものだ。王堂氏はルネサンスをば把握してゐる。したがつて科學、實驗主義、デモクラシ、ナショナリズム等をば確實に把握してゐる。しかし、かれは最も惜むらしくも産業革命に關する研究を比較的に甚だ不十分に準備してゐる。かれは「如何にしたならばわたくし共は近世文化を正しく生活することが出來るかはわたくし共に取りて最も嚴肅にして、而かも、最も焦眉の問題である。然し、わたくしの不思議に禁えないのは、其れにも拘はらず、こゝ六十年の長き歳月に亙りてわが國の有識者を以て自任し、他稱される總べてに依りて一度も此れが一つの問題とされなかつたこと、隨つて、其れの性質も究明されず、之れが解決方法も講じえられなかつたことである」（『現代文化の本質』序）といひ、「わたくしはこの書に於て近世文化の諸相に卽して、わが同胞に對つて、近世文化とは如何なることを意味するか、其れを眞の意味で生活するには如何なる覺悟と方法とを要するかを十分に指示し、說明し、主張したつもりである」（同上）といひ、「卿等は何物にも先立ちて正しく近世文化を生活しなければならぬ、である」（同上）と結語してゐる。かれの近世生活はルネサンス以來を意味する。「實に、ルネサンスは古代生活と、近世生活とを劃する劃線となつたのである。古代生活と、近世生活との相違は、決して一方に於て粗鬆であり、簡易であつたものが、他方に至つて緻密となり、複雜となつたやうな相違ではなくして、生活に關する理想そのものの性質の相違、隨つて其等を實現する方法の樣式の相違であつたのである。若し（誇張

に失する嫌ひあり、事實を誤解せしむる恐れはあるが」ニイチエの謂ふところの「價値の轉換」が人間の歴史に關して可なり許され得る程度に當てはまる場合が一度でもあつたとしたならば、其れは人間が古代生活より近世生活に移歩したこの場合に限られると思はれる」（同上書頁二一二）。ルネサンスの劃期的意義は勿論なほ限りもなき發展的認識を、評價をあたひするものではあるが、産業革命を積極的に問題としないことは、そしてそれの意義を十分に認識、評價の世界に發揚し來たらないことは、現代に於いて、殊にも大戰後の現代に於いて近世を論ずるものとしては致命的な不備だとさへいはねばならん。

哲學者たる資格は、唯一の正しき意味に於いては、文明批評家たる資格とほぼ同一だ。王堂氏は、哲學者といふことばの唯一の正しき意味に於いて、一個の優秀なる哲學者だ。かれが根本聰明に於いて卓越した個人であることが必然的にその資格を構成する。實に哲學者とは根本聰明に於ける卓越者の別稱以外のものではない。

現代の一文明批評家としての王堂氏の不備は、文明批評家と哲學者とはほぼ同義であるがゆゑに、現代の一哲學者としての王堂氏の不備を同時にほぼ意味する。しかし、精確には、現代の一哲學者としての王堂氏の資格は現代の一文明批評家としての王堂氏の資格以上だ。そのわけは簡明にして同時に悲痛だ。それは、現代のいはゆる哲學者の大部分は甚だしく本質的無資格者だからだ。哲學者といふことばの唯一の正しき意味に於いては、現代のいはゆる哲學者の壓倒的大部分は決してその名をあたひしない。その間にあつて、わが王堂氏は明確に卓然として本質的に哲學者たる光りを放つ。

現代の文明批評は、たとひジャーナリズムのかたちに於いてであつても、すべてを總和し、綜合すれば或程度の資格を生ずる。現代のいはゆる哲學は、そのほとんどすべてをどんなに集めても、組織しても哲學たる資格を生じない。材料が皆な死んでゐるからだ。文明批評は現代に於いていはゆる哲學よりはほとんど無限的に聰明であり、有生命であり、進んでゐる。そして、それは決していはゆるジャーナリズムのかたちに於いて存するのみではない。それは文明批評とこそ銘打たされ、實に多くの著書として存在する。廣義、眞義の社會科學的諸著述のなかに豐富にそれの存在がある。要すると

ころのものはいま一層の深徹と綜合だといふ概狀をそれは呈する。いはゆる哲學の幽靈同然のものとは全くわけがちがふ。

王堂氏も、いはゆる哲學からは積極的に學ぶべき多くのものをば決して持たない。しかしかれは社會諸科學の廣大なる分野、原野からしては進取すべき無限に多くのものを持つ。氏の著書がそれを立證する。

一哲學者としての王堂氏は考へる力、見る力をば持つ。不幸にしてかれは材料と目的物即ち對象とを比較的にあまりに無性して持つ。産業革命以後をかれは失敬したではないか。

しかしながら本質と原則の知力よりもありがたきものは人の世にない、文明批評家の存在理由は常に本質の發見及び發明にあり、哲學者の存在理由は常に原則の發見及び發明にある。王堂氏にはその二にして一、一にして二なる才能の素質があるのみならず教養もまた豐富にある。たとひかれが産業革命以後を十分に把握せざるが如き致命的怠慢は事實として寬恕する餘地はないとしても、身世限りあり、氏の半生の業績がすでに甚だ異彩、靈光あつたものであることは言はずもがな、現在の氏の生命と實力が創造的な、發見的及び發明的な多くのものを持つことは、氏の最近の著述『現代文化の本質』がこれを立證する。その最近の著に於ける最後の部分は、實質に於いて、したがつて當然的價值に於いて、氏の非常優秀なる、實に史上的優秀なる批判力及び原則力を確實に證示するものであると同時に、さうであることの内容的理由として、現代殊に日本の學界、思想界、文明批評の世界に與ふる破邪顯正の刺激、宣言及び唱說だ。

現在の日本の學界を見よ。その或大部分はカントの名に於いて考へ實は不考へし、他の或大部分はマールクスの名に於いてさうする。模倣も善し、崇拜も、信奉も善い。他が發見しまたは發明した善きものを模倣しないことは惡だ。他の優秀なる價值を相當に崇拜し、信奉しないことも惡だ。私は現在の日本の學界のシンセリチを疑ふものではない。そのカント主義も、そのマールクス主義も、意識的に自己を僞はり、欺いてなされつつあるものでないことは明白だ。ただ、そのシンセリチの知的内容が深い不滿足を刺激する。一言にして、それはあまりにも哲學的でなさすぎる。

哲學とは何かそのことばの最も正しき、發展的理解に於いては、それはすべての經驗に對する統一的再認だ。哲學より

も經驗、その生産者の經驗、なかんづく最も關心的な、實價的な經驗に出發すべきものはない。そしてまた、哲學よりも十分に、その經驗的出發點に再來すべきもの、歸復すべきものはない。哲學こそは經驗の最善の奉公者であらねばならん。けれども、その哲學の可能は本質的、原則的知力と共にであつて、斷じて單なる讀書と共にではない。讀書は必要だ。王堂氏のルネサンスに通じて産業革命に通じない原因も、後者に關する讀書の不足にあるとさへ診察される。しかしながらまた、單なる讀書主義よりも哲學的見地から見て絕望されべきものはない。光りをア・プリオリに讀書に期待することが日本の現在の學界の一大特徵だが、これは方法の根本に於ける過錯だ。このやうな方法に依るならば、例へばコパーニカス出現の瞬間前に、天文學と稱する古今の著作を讀破することが天文學者にとつて必要にして且つ十分なる條件だと信ずる人が、その點に於いて全く一個の迷信者にすぎないと同樣の意義しかそこには成り立たない。二に二足せば四だと考察し認識し、判斷する人は數學者だ。もしも現存する限りのいはゆる數學の文獻をすべて精讀しても、そのすべての文獻が二に二足せば四だといふ認識を缺き、その他の、要するに的はづれの認識のみのものであるならば——勿論これは假說だ——その人は斷じて非數學者だ。そして、假りに一册の數學書をも讀まないでも、もしも一人がかれの指を材料とし、眼前の現象を材料として二に二足せば四だといふ判斷を、十分なる理由の意識の實現を條件として、卽ち論證、實證、實驗といふ要するに同義語的方法を取つて構成するならば、かれは數學者だ。問題を直接に扱ふことが學徒の根本的方法であらねばならん。讀書は補助、參考の位置をつひに超越させられべきものでない。もしも大震火災かなにかですべての圖書館が燒失し、一册の本も手に入らなくなつたから學問、思索、哲學は休業だといふ場合があるならば、われらはその學問、思索、殊にも哲學をいかに評價すべきであるか。徹底的非哲學、反哲學、無哲學がそれの正當名稱だ。けれども、現代の日本のいはゆる學界、思想界、評論界を展望して、その非、反、無哲學の存在がなんといふ主體的、普遍的位置を示すことか。

王堂氏は、かくの如き現代にあつてア・プリオリの光りをば自分の內に有する稀有者の一人だ。かれにとつては讀書も、輿論も、大衆の聲も、「權威者」の宣言も、すべてはア・ポステリオリの光りを、それらのものが或光りを有する限りに於

いて、有するにすぎない。

圖書館は考へない。考へるものはわれら自身であるほかない。これを逆にして、自分は考へてはならん、本と他人が、或貫的壓倒力を精神分析的には原因として、わがために最初から最後まで責任をもつて、いな權威をもつて考へてくれるかの如くに態度し、方法するならば、すくなくともそこに必然缺くるところのものが一つある。それは統一だ。統一の缺乏、これは哲學の缺乏を意味する。論理は統一、原則もまた勿論統一だ。統一の根本的缺乏は論理、原則の缺乏を勿論不可避とする。そもそも學は同一の原理または法則と、理由の原理または法則とをつひに再認するものであるほかない。最初から自己を捨ててかかる態度及び方法は最初から、いな最初に於いて實に學的でないがゆゑに、いかなる雄辯と博識がその後の過程内に出現しやうとも、それは要するに無統一を反映し、自證するものであることをまぬかれえない。

いはゆる自然科學、物質認識の世界はすでに比較的に長足の進歩を遂げた。現代が最も必要とするものは第一に廣義社會認識だ。それの十分に學的な發達だ。しかるに、事實としては、その世界は、ただ機械文化ゆゑに大規模化されただけの殊差を示しつつ、即ち個人的利害及び熱情、個人的習性及び癖見の代はりに集團的利害及び熱情、集團的習性及び癖見を持つといふだけの殊差を示しつつ、同一の法則からは遙かに低く離れた各異の法則下に相當のイデオロギーを展開、陳列するに忙殺されてゐる概狀だ。この間にあつて、超過なる識力の持ちぬしたる人々の責務は重大だ。社會のために社會を助成し、眞理のために眞理を發揚する、眞知を發揚する責務がかれらのものだ。社會は、大衆は、組織される必要を永久に有するが如くに、指導される必要をまた不斷に持つ。王堂氏には、社會をそれの一角から、しかし展望に於いては廣汎に、知的に指導しうる一つの要件、頭腦の優秀はたしかに具備されてゐる。

哲學を日常生活の各種內容に即して發見し、發明する習性と訓練の發達が目下殊に必要だが、そのためにはその運動の創始を經營するもの、不可避的に少數である先覺者が、先達者が、先導者が必要だ。王堂氏はその極めて少數なるものの一人として當然期待される性質を示す。

日常生活の哲學的照破及び暖育は、現代の事だから格別非常の強調をもつて、エンファシスをもつて、制度に一要點を、目的物的一要點を確認せねばならん。制度に對する哲學的照破及び暖育を缺くやうなものは、現代にあつて、哲學のテをだも斷じて値ひしないものだ。最近、王堂氏に、この點に於いてまた新進境の注意すべきものがあることは社會の名、眞理の名に於いて慶せられる。

哲學は、哲學こそは、經驗を本質價にしたがうて統一する、知的側面からしてそれを企業する、唯一の機能者だ。いはゆる哲學の現代に於ける無力は酷明だ。いはゆる社會科學、社會認識の現代に於ける非哲學性も顯著だ。眞正哲學は現代に於いて、あまりにも幼稚であり、それの孤立的發生は認められるがそれの社會化は、社會化的發達は絶無といふを妥當とする。哲學者の關心は社會であらねばならん、社會を中心とした宇宙であらねばならん、勿論その關心の主體は不斷反省、不斷成長の自己であるほか斷じてないが、それは文字通り勿論の事としてだ。哲學革命が現代が最も深く必要とする第一物だ。他のすべての最善保存、最善廢棄、即ち最善進化的保存はそれの系として、適用として必然結果する。また、そこから、その眞認識の世界から來る保存でないならばその保存は無權威であり、それから來る變改でないならばその變改も同樣に全く無權威だ。統一が、先づ知的統一が要せられる現代だ。すでにその素質ある、また教養ある一人王堂氏の如きは、年齢にかかはらず、習性にかかはらず再起すべきだ。なぜなら、質は、質的非常優秀は、事實上稀出たるを如何にせん。太白は古人燭を秉つて夜遊せるはまことにゆゑあるなりといふた。生前一滴の思索力、社會はこれをその質的優秀者から作業化させて取る必要を持ち、常人はそれを最も豐果的に使用する義務を持つ。

日常生活を哲學の刺激とし、哲學を日常生活への反應とする新運動が翹望される、いな實に意思される。その日常生活は十分に個人關係的及び社會關係的基準のものとしてだ。その新運動の創業的少數者の内の一人たる位置を、私は、社會的見地からして王堂氏に再認することを悦ぶものである。

河上肇論

土田杏村

河上氏の存在形態の辨證法的批判

河上肇氏は、明治三十八年頃唯物史觀に關する一譯書を公にせられてからだけでも既に二十餘年を經過し、殆んど一貫してマルクス經濟學の解釋と祖述とに努められて來たが、その解釋の内容と主張の熱度とには大いなる變遷があつた。勿論その解釋は次第に深刻細密となつたし、その主張の熱度には過去と現在とで雲泥の相違が見られる。解釋の相違の一例を言へば、eintreten といふ語の翻譯にさへ進歩が見られた。また大正十年に初版の出た「唯物史觀研究」には、マルクスの思想として最も重要な唯物辨證法の思想が全く現はれてゐなかつた。氏の思想の進展に最も強い刺戟を與へたものは、福本和夫氏により批判を加へられ、「河上博士の唯物史觀より分離せざるべからず」を宣せられた時であつたと見ることが出來よう。河上氏はその時以來マルクス思想の根本基礎として唯物辨證法を取ることの必要を痛感し、その思想の自己清算が開始せられて、氏のマルクス思想の理解には一大變革が起つた。同時に、從來は冷靜な學究として大學の講座に立つ「研究」者として自己を反省してゐたものが、斯様な態度は實踐的なマルクス主義者にあり得ないことと信じられるやうになり、初めて階級的黨派的な經濟學者として自己を顧みられた。

官立大學の教授としての河上氏は、それ自身辨證法的の一對象物であつた。換言すれば、それ自身矛盾を含む現實的な對象物であつたのだ。官立大學の教授としては國家の存立性を疑ふものであつてならず、マルキシストの信ずる如くであれば、一の階級的利害を代表しその利害を執行する權力機關として存す

日常生活の哲學的照破及び暖育は、現代の事だから格別非常の强調をもつて、エンファシスをもつて、制度に一要點を、目的物的一要點を確認せねばならん。制度に對する哲學的照破及び暖育を缺くやうなものは、現代にあつて、哲學のテをだも斷じて値ひしないものだ。最近、王堂氏に、この點に於いてまた新進境の注意すべきものがあることは社會の名、眞理の名に於いて慶せられる。

哲學は、哲學こそは、經驗を本質價にしたがうて統一する、知的側面からしてそれを企業する、唯一の機能者だ。いはゆる哲學の現代に於ける無力は際明だ。いはゆる社會科學、社會認識の現代に於ける非哲學性も顯著だ。眞正哲學は現代に於いて、あまりにも幼稚であり、それの孤立的發生は認められるがそれの社會化は、社會化的發達は絕無といふを妥當とする。哲學者の關心は社會であらねばならん、社會を中心とした宇宙であらねばならん、勿論その關心の主體は不斷反省、不斷成長の自己であるほか斷じてないが、それは文字通り勿論の事としてだ。哲學革命が現代が最も深く必要とする第一物だ。他のすべての最善保存、最善廢棄、卽ち最善進化的保存はそれの系として、適用として必然結果する。また、そこから、その眞認識の世界から來る保存でないならばその保存は無權威であり、それから來る變改でないならばその變改も同樣に全く無權威だ。統一が、先づ知的統一が要せられる現代だ。すでにその素質ある、また敎養ある一人王堂氏の如きは、年齡にかかはらず、習性にかかはらず再起すべきだ。なぜなら、質は、質的非常優秀は、事實上稀出たるを如何にせん。太白は古人燭を秉つて夜遊せるはまことにゆゑあるなりといふた。生前一滴の思索力、社會はこれをその質的優秀者から作業化させて取る必要を持ち、當人はそれを最も豐果的に使用する義務を持つ。

日常生活を哲學の刺激とし、哲學を日常生活への反應とする新運動が翹望される、いな實に意思される。その日常生活は十分に個人關係的及び社會關係的基準のものとしてだ。その新運動の創業的少數者の內の一人たる位置を、私は、社會的見地からして王堂氏に再認することを悅ぶものである。

河上肇論

土田杏村

河上氏の存在形態の辨證法的批判

河上肇氏は、明治三十八年頃唯物史觀に關する一譯書を公にせられてからだけでも既に二十餘年を經過し、殆んど一貫してマルクス經濟學の解釋と祖述とに努められて來たが、その解釋の內容と主張の態度とには大いなる變遷があつた。勿論その解釋は次第に深刻細密となつたし、その主張の態度には過去と現在とで雲泥の相違が見られる。解釋の相違の一例を言へば、eintreten といふ語の翻譯にさへ進歩が見られた。また大正十年に初版の出た「唯物史觀研究」には、マルクスの思想として最も重要な唯物辨證法の思想が全く現はれてゐなかつた。氏の思想の進展に最も强い刺戟を與へたものは、福本和夫氏により批判を加へられ「河上博士の唯物史觀より分離せざるべからず」を宣せられた時であつたと見ることが出來よう。河上氏はその時以來マルクス思想の根本基礎として唯物辨證法を取ることの必要を痛感し、その思想の自己清算が開始せられて、氏のマルクス思想の理解には一大變革が起つた。同時に、從來は冷靜な學究として大學の講座に立つ「研究」者として自己を反省してゐたものが、斯樣な態度は實踐的なマルクス主義者にあり得ないことと信じられるやうになり、初めて階級的黨派的な經濟學者として自己を顧みられた。

官立大學の教授としての河上氏は、それ自身辨證法的の一對象物であつた。換言すれば、それ自身矛盾を含む現實的な對象物であつたのだ。官立大學の教授としては國家の存立性を疑ふものであつてならず、マルキシストの信ずる如くであれば、一の階級的利害を代表しその利害を執行する權力機關として存す

る國家の階級的政策を少なくも無意識的に擁護するものとして立たなければならない。然るに他面では氏はこれと對立する階級の利害を主張する實踐的戰鬪的な黨派的經濟學者として自らを顧みなければならない。二つの立場は當然矛盾を起す。そしてこの矛盾が十分に成熟した時には、氏は大學教授としての自己統一を破壞し、新らたなる段階に自らを位置せしめなければならなかつた。卽ち氏自身が唯物辨證法を證明したのである。隨つて氏が大學教授としての對象的統一を破壞するにいたらなかつた時には、マルキシストとしての氏の思想も亦十分に成熟しなかつたものといふべきである。教授としての氏の初期の思想が人道主義的であり、階級調和的の微溫的なものであつた所以である。

河上氏は、自己の思想の進展が少しも急速でなかつたことをいつて、自らは決して單なるマルクス狂信者でないことを主張せられるけれども、大學教授としての對象的統一が專ら氏の思想の進展を害してゐたのだ。恐らく氏が最初より教授でなかつたものならば、唯物辨證法に對する氏の理解ももつと早い時期に徹底せしめられたであらう。また大學に於ける氏の講義が、年毎に純粹のマルキシズムに近づかしめられ、最後には全く「マルクス學の祖述」となつたことも、必ずしも氏の「抗辯」による如く氏の思想が漸進的に轉化せしめられたことにその原因を歸せらるべきでなく、大學教授としての氏の地位が進められ、京大經濟學部の重鎭として最早他の教授に氣兼ねをしないでよい時に達したことの結果と見なければならない。今日マルクス主義を信奉しながら官立の大學專門學校に教鞭を取り、マルクス主義文獻を飜譯しマルクス主義者らしい論を成すものが多々あり、その中には河上氏の門弟も少なからぬけれども、此等の諸「研究」者は自己の地位を矛盾の成熟したものに達せしめない限りは、實踐的なマルキシストとしての思想も亦成熟しないものであり、河上氏が嘗つてあつた如く一個の日和見主義者であるに過ぎない。河上氏は今日退職した大學教授として國家より恩給を受け取つて居られるかどうかを私は知らない。併し河上氏が各會社への國家の補助金なるものを國家による資本家の公然たる擁護として攻撃せられた以上は、國家の恩給なるものも亦決して單純に國家勞働者に對する養老保護の意義のものではなくて十分に階級的の意義を持ち、しかも國費の巨大なる部分を費消するものであることを知られるに相違ない。また河上氏が今日氏の所謂「文筆勞働」によつて得られる報酬が普通熟練勞働者の勞働賃銀に比較してそれの幾千倍であるかを私は知らない。しかし資本家的に出版會社が相爭鬪する場合には、「意識

的には氏の良心的態度を抗拒するための宣言が、「無意識的」には一方の出版會社の資本家的利益を最も有利に保護するものになつてゐたことだけは、公然と社會の面前に於いて示された。斯様に論ずるのは、河上氏の人格に對しまたその學者的態度に對して非難を加へる意圖では決して無い。私は河上氏のイデオロギイを解剖し批判するために、歴史的社會的生活に於ける河上氏の地位を冷靜に解剖することが必要であつたのだ。

右の如くにして河上氏の今日の地位はまた依然として大いなる矛盾を含むものである。この矛盾が成熟してその地位を爆發せしめるまでは、河上氏の思想も亦純粹のマルキシストとして成熟したものであるといふことが出來ない。河上氏は言はれる「私は最初からのマルクス主義者でもなく、また簡單に唯物論者となりえたものでもない。だから私は、現在においてもなほ、無意識的には、過去の觀念論的空想の殘滓を少からず保菌してゐるであらうが、しかし意識的には、辨證法的唯物論の見地に立つて、マルクス主義レーニン主義を奉ずる一學徒として、」云々。しかしマルキシストが問題とするのは、河上氏自身が反省せられるところの「意識的」な、イデオロギッシュな觀念形態ではなくて、「無意識的」に位置する河上氏の現實的地位と、隨つてその現實的地位を基礎として河上氏が「無意識的」に行動するにいたる場合の觀念形態ではないのであるが、河上氏は今日尚ほその宣言の實踐に於いて觀念論的立場を離れてゐない。また「學徒」といふやうな中立的な、運動靜止的な地位が、實踐的戰鬪的なマルキシストにあり得るか。氏の主張するもの、内容は「意識的」には戰鬪的マルキシズムであつたとしても、氏の立場は依然として階級超越的な「學徒」の中立無風帶に置かれてゐる。なほ進んで言へば、氏は大學退職の直後に於いて「經濟學の教授達は資本家階級の學識ある番頭以外の何物でもない」といふレーニンの語を引用し、自らも熱心にその事を主張せられたが、然らばレーニンの論著を讀まれてゐた大學教授としての河上氏は、大學教授として「意識的」にこの語の意義を解し得なかつたか。こゝに自らは「意識的」と考へて居られる河上氏の觀念形態が、唯物辨證的に、「無意識的」なる氏の存在地位によつて顯著に限定せられてゐたことを認めなければならず、隨つて氏自身の證明せられる「意識的」な言說に對しての我々の信用程度を大いに調節することが必要となるのである。

私は河上氏評論の最初に於いてマルキシストとしての河上氏の存在形態現實形態を分析した。「意識的」マルキシズムの觀念形態に先行するものは、その觀念形態を懐抱するにいたるその主張者の存在形態現實形態なるが故である。次に私は河上氏の

觀念形態を分析批判して行きたい。私は過去に於いて河上氏の論著を可なりに多く讀み、氏の思想の推移を相當細密に知るものだと考へてゐる。併し今の小篇ではそれらの推移を論評する餘裕がない。今分析するものは現在の河上氏の觀念形態である。資料としては、最も新らしい「經濟學大綱」「第二貧乏物語」及び最近の氏の論文を取る。簡潔である必要のために一々引用箇所を示さないし、旁點を加へた場合もその事を斷り書きしない。

河上氏に對する學界當然の敬語として「博士」と稱すべきであるけれども、煩雜を避けて「氏」と稱する。また「辨證法」なる語をマルキシストは一般に「辯證法」と書くけれども、これは誤字であるから、私は今の小篇の中ではすべて「辨證法」の文字を取る。すべて河上氏の諒恕を乞ひたい。河上氏の思想としては、實際はマルクス、レニン思想以外の何物もない。河上的思想を絶無ならしめ、マルクス、レニン思想に出來るだけ純粹に歸依することが河上氏これまでの努力であつた。併し私は河上氏のマルクス、レニン解釋をマルクス、レニン的立場に於いても其儘に容認することが出來ない。殊に唯物辨證法に對する氏の理解には、なほ多大の未成熟要素が含まれてゐると考へるのだ。今は專ら河上氏文獻を基礎とし、これを氏の思想として分析批判する。全體を(1)氏の唯物辨證法に對する批判、(2)氏の經濟學方法論に對する批判、(3)その經濟學の內容に對する批判の三段節に分つこととするが、勿論唯物辨證法がその儘に經濟學の方法論であるから、(1)と(2)とを分つことは無意義であるともいへよう。ただ唯物辨證法はすべてのものに對する根本的論理である故、それの一部分としての經濟學方法論を區別したのである。

河上氏の唯物辨證法の理解批判

河上氏は新稿の筆を起される時に、それが「意識的」マルキシストとしての考察であつて、存在形態としての河上氏の上部構造の「無意識的」觀念形態であることを明らかにせられなかつた。歷史的社會の現實形態に直ちに目を注がなければならない實踐的マルキシストが、「書齋に招じ、火鉢をかこみ茶を酌んで、烟草をくゆらしながら、」屋外の「ひどい風」をよそに「靜かな氣持」で、まことに竹林の七賢人が日向ぼつこをしつゝ、淸談を交へる悠々閑々たる談議に耽られる所以である。こゝでも「無意識的」に、河上氏の地位は階級に關して中立的な、「書齋」的觀念的安全地帶に置かれたのだ。

河上氏によれば、地球は人間の頭の中から考へ出したものではなく、人間その他の生物の存在してゐなかつた頃から人間の意識に獨立して存在してゐたものだ。その如く人間は「彼等自

身の社會關係を意識的に統制することが出來ず、むしろ逆にかかる社會關係の制御のもとに無意識的に引きずられてゐる」ものであつて、「社會組織に對する人間の意識の關係は、この地球に對する人間の意識の關係と同じである。」「かくて現代社會の改造は、言はば地球の改造と同じである。」地球の改造？「この地球の改造が問題となつてゐる場合に」？ 我々は河上氏の言はれる如く地球の改造がかつて地球の上で問題にせられたことを聞いてゐない。天文學者によつてか、天上の創造神達によつてか。それはとにかく河上氏によれば、「將來構成さるべき地球の設計圖を描くといふことが、如何に愚かなことであるかは、(註。設計圖を描くことよりも、斯樣な思想を考へることの方が「如何に愚かなこと」ではないのか)明かであらう。改造さるべき地球はすでに與へられてゐるのであり、(註。地球儀として店頭にぶらさがつてゐるといふ意か)その地位には吾々の意識や意欲やでどうすることもできない諸條件が、前提されてゐるのである。」

河上氏は唯物辨證法の意義を解明せられるために、先づ足立博士の軟部解剖學の結論を引用した。足立氏は「過去數十年間、數知れぬ屍體の種々なる部分にわたつて、極めて忍耐強き解剖學的研究を繼續されたのであり、且つそれゆゑにこそ、日本人は西洋人に劣つてゐると同時に優つてゐるといふ、矛盾を含んだ、一の辨證法的結論に到達された。」それは「現實に向つて極力注意を拂」つた結果得た命題だ。右の辨證法的結論は、詳しくいへば、長掌筋に關しては、日本人は西洋人に劣り、長腓筋に關しては、日本人は西洋人に優れてゐる、といふのだ。そしてこの二つの命題は河上氏によれば相對立し、矛盾する。「辨證法は客觀世界の論理である。それは客觀世界からのみ汲み取り、導き出し、抽象しうるものであつて、逆に客觀世界へ適用さるべきものではない。」「かくて一切の事物は、自己の否定を齎らすべき要素を、それ自身のうちに包含してゐるのであり、そのために、それはその運動過程において、結局はそれ自身を否定するのである。かくて肯定はその反對物たる否定に轉化する。しかるに、かゝる否定により新たに定立されたる肯定は、やがてまたそれ自身を否定する。辨證法に謂ふところの否定の否定はかくして生じるのである。」「辨證法は、一切萬物の前に、ただ一つの例外をも許すことなく、その消滅性を宣告する。その前には、究極的なもの、絶對的なもの、××なものは、何一つとして存立しない。」「ヘーゲルの觀念論的辨證法は、それ自身のうちに矛盾を含んでゐた。それは、それ自身がまた辨證法的な運動をなすことにより、その反對物へ——マルクスの唯物

的辯證法へ——轉化すべき契機が、それ自身のうちに内包してゐたのである。」「人間の頭の中から地球や日月星辰やが生れ出るのではない。人間はもちろんのこと、一切の生物がまだこの地球上に發生しない以前から、地球そのものは存在してをる。それからずつと後になつて、この地球の上に始めて人間が發生し、その人間の頭腦へ地球や日月星辰やが反映して、それが人間の意識となり觀念となるのである。これは極めて理解し易いことだ。なほ地球や日月星辰やその他一切の外物は、皆な辯證法的に構成され辯證法的な運動をなしてゐるが故に、かゝる外的現象の人間的頭腦への忠實なる反映としての思惟もまた、必然的に辯證法時たらざるを得ない。これもまた極めて理解し易いことだ。」

右が河上氏の唯物辯證法なるものゝ中核であり、恐らくは以上の引用を以て大いなる誤りなしに河上氏の全論旨を傳へることが出來たと思ふ。しかしこの理解は、果して何等の誤謬もなしにマルクス、レニン主義を解明してゐるものであるか。また論理的に考へて、右の如き構成の理論形態はその儘に許容せられることが出來るか。私は直ちに次の疑問を掲げて氏の所説を檢討し、氏の明快なる答辯を要求するのである。

一、河上氏は、現代社會の改造は、地球の改造と同じことだといはれた。その意味は、社會科學上の問題は自然科學上の問題と同じく、與へられたものの解剖から出發し、觀念からは出發してならないといふのであらう。勿論のことである。社會の改造を論ずるものは必らず現實としての、事實としての社會の解剖に出發しなければならない。それを否定しようと欲する哲學者經濟學者は恐らく存在しない。しかしこの場合、河上氏が社會科學の科學的性質を自然科學の其れと同一のものだと考へ、社會科學の科學としての特異性を無視せられるならば、それは誤謬であらう。(福本氏はこの特異性を無視してゐない。)「地球の改造」とは何か。「將來構成さるべき地球の設計圖」とは何か。單なる天文學的存在物としての地球が、如何樣に改造し得られるといふのであるか。地球の自轉公轉は動かせない。地球の軌道は變革出來ない。地球の太陽その他の諸天體に對する力學的關係は改造出來ない。地球に關して我々は全然の無力者でありそれの必然性の一毫をも變革改造することは出來ないのだ。然るに社會は人間と人間との關係によつて成立した一の意味的存在である。その社會的成立には前提があり、社會の諸活動はこの前提より全く離叛することは出來ないが、隨つてその點で社會諸現象は社會的必然性を持つ一存在形態であるが、この前提は人間の關係が自らの中に内在せしめる意味であるが故に、人

間の努力により變革せしめられることが出來る。凡そ「改造」といふ語は、存在形態の必然性を克服することを意味する。動かし難い自然必然性の元の儘の進展に於いてある場合には、「改造」は考へられない。等しく存在形態ではあつても天體自然物としての地球の存在性と社會の其れとの間には、性質の上に根本的の相違が存する。

河上氏の言はれる「地球の改造」とは、地表上の人文地理的形態の改造を意味するのであるか。(實際は斯樣の場合に使用すべき語ではないけれども。)例へば常に洪水の起り易い河川を修理し、外海の波浪に對して港灣に防波堤を築く如きことを意味するのであるか。この場合には、地表の存在形態は單なる自然物として見られたのでなく、何等かの人間的價値を含むものとして、人間の社會的生活に關係せしめられ、その社會的生活の一部を占めるものとして見られてゐる。それ故に此等の人文地理的存在形態の變革は、結局はそれらの自然物が人間的價値を含むものとして人間生活に關係せしめられた、その價値關係的存在形態を變革することを意味するのである。自然物自身としては自然必然的推移があるのみで、その價値關係的存在形態が變革せしめられた前も後も、「改造」をいふことが出來ない。ひとり人間生活には改造がある。改造とは存在形態を離れ、その存在形態を支配し得べき「理想」を考へることだ。なほ言へば存在形態としての、現に在る社會形態に超越的であつて同時に內在的であり得る理念を考へることだ。その存在性を超えるものでなければ理想ではないし、その存在性に內在し得るものでなければ、その現實の理想ではないからだ。地球には理想も價値もない。隨つて地球には改造があり得ない。「將來構成さるべき地球の設計圖を描く。」私は河上氏の此等の思想が何を意味するかをさへ考へ得ない。河上氏が自然物の必然性にのみ止まるものならば、「社會の改造」は口にすべきでない。既に「社會問題」とさへもいふことが出來ない。「問題」とは存在の上への價値的看眼を意味するが故である。

二、河上氏があげられた日本人の優劣云々の命題は、正しく唯物辨證法を說明する例であるか。唯物辨證法的命題は、「矛盾に充ちた、排斥し合ふ、對立した諸傾向」を含み、肯定はその反對物たる否定に轉化するものでなければならぬ。然るに長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることと長蹠筋に關して日本人が西洋人に優ることゝは如何なる點で矛盾し、相對立するか。長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、それ自身の中に含む矛盾により、轉化して、長蹠筋に關し日本人が西洋人に優ることゝなり得るか。河上氏は普通の形式論理をさへ知つてゐ

られない。河上氏は右の命題を「かくて我は彼に優ると同時に劣るといふところの、それ自身に矛盾を含んだ、一個の命題」と呼ばれるけれども、いつの間にか優劣の關說せられてゐる長掌筋と長蹠筋とはわきへ打ち捨てられてゐる。二つの命題は全く別のものについての關說だ。これを合して一つの命題にしても、何等の矛盾をも含みはしない。河上氏は長い二本の足を持つてゐる、河上氏は短い二本の手を持つてゐる。この二つの命題が何の矛盾を含むか。河上氏は純粹のマルキシストにならうとする意識的努力を持つ、河上氏は觀念的經濟學者に止まらうとする無意識的傾向を持つ。この二つの命題にして初めて唯物辨證法的論理の對立になり得るのだ。

三、現實のものの性質を分析すれば、一つの命題に矛盾し、對立する命題は、河上氏の例を取れば、必ずしも二つだけではなく幾つでも事實の分析に卽して得られる筈である。例へば鼻の高さに關しては日本人と西洋人との間に優劣が無い、爪の色に關しては日本人と西洋人との優劣は無記であるともいへるのである。河上氏の論理を以てすれば、此等の命題もみなそれぞれに矛盾し對立する辨證法的命題であるか。結局運動は何れの方向に起り、此等の命題の何れが消滅し他に轉化しなければならぬのであるか。」

四、河上氏によれば、唯物辨證法的に對立するものは現實的に客觀世界より汲み取り、導き出し、抽象せられるのだ。卽ち足立氏の場合には、數十年間無數の屍體について忍耐強い解剖學的研究の結果この命題を得ることが出來たのだ。併し人間の努力はいかに偉大であり、その範圍をひろめ得ても、客觀世界の現象のすべてを盡くし、今後起るべき現象の一切を盡くすことが出來ない。然るに河上氏は「一切の事物」に就いて唯物辨證法の行はれて居ることを主張せられる。個々の現象についての分析の結果を一切のものに擴張し得る根據は何處にあるか。言ひ換へれば個々のものより「汲み取り」「導き出し」「抽象し」て一の包括的眞理を得るために必要な uniformity of nature（自然の一樣性）はいかにして證明せられたか。個々のものよりの歸納が一切のものを支配する法則となり得るには、先づこの「自然の一樣性」が容認せられなければならないが、「自然の一樣性」を歸納によつて證明することは循環論法となるが故に、それは思惟の要求であるといふより外はないではないか。そしてこの思惟の要求が客觀世界の形式と相對應する場合に、我々は思惟形式の或るもの、客觀世界に對する先驗性を主張するのだ。

五、斯樣に言へば河上氏は結局、「木の葉は青い」とか「ヨハンは人である」とか任意の定言を以て始めれば、個別的なるもの

は普遍的なるものである、甲は非甲である、となつて必らずその中に矛盾を含み、對立物の統一をなさざるを得ないといふであらう。この形式の判斷は普通に擴張判斷と呼ばれてゐる。即ちレニンによれば、擴張判斷は對立する矛盾の統一だといふのだ。併し斯くの如きは客觀世界の分析を俟つて初めて得られるものでない。擴張判斷が斯くの如き性質を持つことは、客觀世界によつて證明せられるまでも無く、判斷の論理的構造を思惟を以て分析すれば得られるものだ。結局この場合の甲は非甲であるは思惟の一つの形式であるに過ぎない。

六、一切のものが「自己の消滅を齎らすべき要素をそれ自身のうちに包含」するものならば、觀念形態も亦當然自己の消滅を見なければならない。ヘーゲルの辯證法は他へ轉化すべき契機をそれ自身のうちに内包してゐた。河上氏が斯く主張せられるものならば、それ自身一個の觀念形態である唯物辯證法は、またマルキシズムは、結局消滅し、他に轉化しなければならぬではないか。自己の消滅を豫想するものが、どうして自己の眞理性を主張し得るか。マルキシズムは自己を主張することによつて却て自己に弔鐘をならしてゐるものではないか。

斯くして私は河上氏の所謂唯物辯證法の自ら含む矛盾を分析し指摘した。矛盾を含むものは當然他に轉化しなければならない。河上氏が既に言はれた如く、「もちろん吾々は、マルクスが「資本論」を書いた時代には、遙に進んだ時代に生活してゐる。」マルクス經濟學の内容が擴張せられ、轉化せしめられると同樣に、その唯物辯證法も自らの含む矛盾を明らかにしつゝ、他に轉化しなければならぬのである。私はマルクスを自らの思索の偉大なる先覺と考へてゐる。そして唯物辯證法に批判を加へそれの矛盾を明らかにして、これをより一層眞實に近いものに進めなければならぬと考へてゐる。現代哲學はマルクス時代よりは大いに進歩した。唯物辯證法のみは「轉化」の外にあり、マルクス時代の哲學思想より一歩も他に動いてならないと固守せられてゐる河上氏の態度には賛成することが出來ない。隨つて河上氏の立論に反對するものならば直ちにブルジョア思想の味方であると斷定せられる河上氏の態度は、誇大妄想的であると斷じなければならない。第一、河上氏の思想が何時固定してゐたか。たえずぐらついて定まるところのない河上氏の思索が、ブルジョア思想とプロレタリア思想とを定め得る、神の如く正しい標準であり得るか。

河上氏經濟學の方法論的批判

河上氏によれば、「學問を現實的な基礎の上に据へようと思へ

ば、吾々は、何等の理論的構成を經ざる、何等思惟の加工を受けざる、最も根源的な事實を、研究にとつての最初の出發點としなければならぬ。」「それ故に、理念ではなく、たゞ外的現象のみが、吾々の出發點として役立つ。ところで、この外的現象をあるがまゝの姿で受取つたならば、言ひ換へれば、外界の事物が吾々の意識に反映することによつて直接に生ずる表象そのものは、いつでも種々な規定を受けてゐるところの或る具象的なものである。かゝる具象物が吾々の理論の前に豫め規定されて横はるのである。それは理論が産んだ結果ではなく、理論がその素材として最初に受取るところの前提である。そして、その意味において、吾々は、吾々の研究にとつての現實的の出發點は、社會的に規定せられた生産だといふのである。」「この現代社會に於ける生産は、種々の諸要素から成つてゐるが、その中で支配的地位を占めるものは資本家的生産であるが故に、氏の研究は「思惟に於ける一つの抽象である」資本家的生産に就いて專ら行はれる。

右の如く說かれる河上氏の經濟學方法論及びそれの出發點に對して、私は次の如く批評しよう。

一、河上氏は外的現象を出發點にすると言はれるが、外的現象は我々の意識により捕捉せられない限り認識の對象にならない。そこで河上氏は改めて「理論の前に豫め規定されて横はる」ものを、外的の事物が意識に反映して生じた「直接に生ずる表象そのもの」だとせられた。然らば氏の經濟學のまことの出發點は「外的現象」ではなくて意識において生ずる直接の「表象」である。これはマルクス、レニンが主張した唯物論的認識論であるか。河上氏の出發點は現象そのものではなくて、現象の表象だ。「直接に生ずる表象そのもの」といふと、マッハ主義の「直接經驗」「經驗の直接與件」といふと、其間に何の相違があるか。河上氏は依然として、レニンの排撃した經驗批判論の立場より離れてゐない。河上氏の出發點は唯物論ではなくて濃厚なる觀念論である。

二、表象がどうして學問の出發點になり得るか。學問的認識の出發點は必らず斷定でなければならぬ。「理論がその素材として最初に受取るところの前提」が表象であるならば、この表象を斷定に轉形せしめる方法は如何。外的現象を「社會的に規定された生産だとすることは、一の斷定ではないか。これを表象であるといつたとしても、その事は僞であると反對する人に對し、その事は眞であるといつて抗辯主張しなければならぬではないか。斷定以外の形式のものはこの抗辯主張の權利を持たない。

三、現實的出發點が社會的生産であるといふ事は、一の抽象的理論である。それは出發點たる以前に證明を要する。河上氏の出發點は結局一の理論に外ならぬ。

四、「最も支配的な地位を占めてゐる一つの面」として「抽象」するならば、「生産」は既に最も支配的な地位を占めるものではなく、「信用」がそれに代つての優支配地位を占める。我々は今マルクス生存の時代とは違つた經濟的世界を持つてゐる。唯物辨證法的に考へれば、マルクス時代に優支配的な面であつたものが現在まで變化しない筈はない。

河上氏經濟學の內容的批判

右の最後の一節は、直ちに河上氏の經濟學の內容に對する批判の根本的立場を定めるものだ。河上氏の經濟學はマルクス時代のマルクス經濟學と少しも變らず、「商品生産關係」を主たる分析對象にする。そして現代經濟社會に優支配的地位を占め現經濟社會の特色を決定しつゝあるところの「信用關係」に就いては誠に乏しいペエジが割かれ、また信用について氏の說かれるところも、信用に就き生産のがはより認識したものであり、既に生産を止揚した信用を、その止揚した立場に於いて認識する意味のものではない。

「全社會は時代には、資本家的生産の發展の極致を表示する。河上氏によつても、現經濟社會の特色は、異つた觀點からではあるが、とにかく事實としては認識せられてゐるのだ。併し斯く「發展の極致」に達したものは何故辨證法的に止揚せられてそれ以外の姿のものに轉化しないか。轉化した後の形態が何であるかは、マルクス時代の客觀世界の解剖によつては與へられない。生産は既に沒落したのだ。社會的生産が成立し個人的經濟行爲は沒落したといつても、なほ事實としては個人的經濟行爲は無くなつてゐない。たゞ個人的經濟行爲はもはや經濟社會に優支配的地位を占めるものではなくなつたのだ。こゝに社會的生産は個人的經濟行爲より說明せらるべきでなく、社會的生産自身の立場に於いて說明せられなければならぬ。同樣にして信用の機制は生産を止揚した。生産者的意味の所謂資本家は金融家と銀行との前に屈服せしめられたのだ。こゝに現經濟社會を現實的に解剖するものは、この優支配的地位に立つ信用を、信用自身の立場に於いて解剖しなければならない。

河上氏は銀行の機能を解剖して、第一、流通信用の機關、第二、資本信用の機關、第三、創業者利得を取得するものとした。この中の前二つは、銀行の機能を最も原始的に見たものであつて今は問題にならない。第三のものも株式會社の生産者的立場

ば、吾々は、何等の理論的構成を經ざる、何等思惟の加工を受けざる、最も根源的な事實を、研究にとつての最初の出發點としなければならぬ。」「それ故に、理念ではなく、たゞ外的現象のみが、吾々の出發點として役立つ。ところで、この外的現象をあるがまゝの姿で受取つたならば、言ひ換へれば、外界の事物が吾々の意識に反映することによつて直接に生ずる表象そのものは、いつでも種々な規定を受けてゐるところの或る具象的なものである。かゝる具象物が吾々の理論の前に豫め規定されて横はるのである。それは理論が産んだ結果ではなく、理論がその素材として最初に受取るところの前提である。そして、その意味において、吾々は、吾々の研究にとつての現實的の出發點は、社會的に規定せられた生産だといふのである。」この現代社會に於ける生産は、種々の諸要素から成つてゐるが、その中で支配的地位を占めるものは資本家的生産であるが故に、氏の研究は「思惟に於ける一つの抽象である」資本家的生産に就いて專ら行はれる。

右の如く說かれる河上氏の經濟學方法論及びそれの出發點に對して、私は次の如く批評しよう。

一、河上氏は外的現象を出發點にすると言はれるが、外的現象は我々の意識により捕捉せられない限り認識の對象にならない。そこで河上氏は改めて「理論の前に豫め規定されて横はるものを、外的の事物が意識に反映して生じた「直接に生ずる表象そのもの」だとせられた。然らば氏の經濟學のまことの出發點は「外的現象」ではなくて意識において生ずる直接の「表象」である。これはマルクス、レニンが主張した唯物論的認識論であるか。河上氏の出發點は現象そのものではなくて、現象の表象だ。「直接に生ずる表象そのもの」といふと、マッハ主義の「直接經驗」「經驗の直接與件」といふと、其間に何の相違があるか。河上氏は依然として、レニンの排撃した經驗批判論の立場より離れてゐない。河上氏の出發點は唯物論ではなくて濃厚なる觀念論である。

二、表象がどうして學問の出發點になり得るか。學問的認識の出發點は必らず斷定でなければならぬ。「理論がその素材として最初に受取るところの前提」が表象であるならば、この表象を斷定に轉形せしめる方法は如何。外的現象を「社會的に規定された生産だとすることは、一の斷定ではないか。これを表象であるといつたとしても、その事は僞であると反對する人に對し、その事は眞であるといつて抗辯主張しなければならぬではないか。斷定以外の形式のものはこの抗辯主張の權利を持たない。

三、現實的出發點が社會的生産であるといふ事は、一の抽象的理論である。それは出發點たる以前に證明を要する。河上氏の出發點は結局一の理論に外ならぬ。

四、「最も支配的な地位を占めてゐる一つの面」として「抽象」するならば、「生産」は既に最も支配的な地位を占めるものではなく、「信用」がそれに代つての優支配地位を占める。我々は今マルクス生存の時代とは違つた經濟的世界を持つてゐる。唯物辨證法的に考へれば、マルクス時代に優支配的な面であつたものが現在まで變化しない筈はない。

河上氏經濟學の內容的批判

右の最後の一節は、直ちに河上氏の經濟學の內容に對する批判の根本的立場を定めるものだ。河上氏の經濟學はマルクス時代のマルクス經濟學と少しも變らず、「商品生産關係」を主たる分析對象にする。そして現代經濟社會に優支配的地位を占め現經濟社會の特色を決定しつゝあるところの「信用關係」に就いては誠に乏しいペエジが割かれ、また信用について氏の說かれるところも、信用に就き生産のがはより認識したものであり、既に生産を止揚した信用を、その止揚した立場に於いて認識する意味のものではない。

「金融資本時代に、資本支配的生産の發展の極致が表示する」と河上氏によつても、現經濟社會の特色は、異つた觀點からではあるが、とにかく事實としては認識せられてゐるのだ。併し斯く「發展の極致」に達したものは何故辨證法的に止揚せられてそれ以外の姿のものに轉化しないか。轉化した後の形態が何であるかは、マルクス時代の客觀世界の解剖によつては與へられない。生産は既に沒落したのだ。社會的生産が成立し個人的經濟行爲は沒落したといつても、なほ事實としては個人的經濟行爲は無くなつてゐない。たゞ個人的經濟行爲はもはや經濟社會に優支配的地位を占めるものではなくなつたのだ。こゝに社會的生産は個人的經濟行爲より說明せらるべきでなく、社會的生産自身の立場に於いて說明せられなければならぬ。同樣にして信用の機制は生産を止揚した。生産者的意味の所謂資本家は金融家と銀行との前に屈服せしめられたのだ。こゝに現經濟社會を現實的に解剖するものは、この優支配的地位に立つ信用を、信用自身の立場に於いて解剖しなければならない。

河上氏は銀行の機能を解剖して、第一、流通信用の機關、第二、資本信用の機關、第三、創業者利得を取得するものとした。この中の前二つは、銀行の機能を最も原始的に見たものであつて今は問題にならない。第三のものも株式會社の生産者的な

を離れてゐない。河上氏は銀行を見るに「信用の利用」をなすもの、立場に止まつてゐる。我々が問題とするのは、何人かが銀行の發行する信用を「利用」することではなくて、銀行が社會的に統制せられず任意に信用を「發行」することの機能そのものだ。河上氏は「集中されたる巨大なる資力は、極めて少數なる金融資本家の支配に屬し」といつて、この事を發展最後の問題にせられたが、この事實の觀察は寧ろ逆である。銀行は漸次に自らへ資本を集中するのではなく、最初より集中統一せられた形式のものとして、任意に自らより外へ、信用を發行付與するのだ。金融家の集中的支配は、今や經濟社會の結果ではなくて正に新らしい出發點になつたのだ。それがマルクス生存時代とは違ひ、マルクスが知らなかつた、現經濟社會の特異性である。

要するに我々は、河上氏の取るマルクスを越えてマルキシズムをより現實的に進めなければならない。唯物辨證法の理解に於いて、また社會經濟學の全構造に於いて。マルクス生存時の十九世紀末經濟社會にマドロスパイプをくはえて回想的となることは、辨證法を實踐する思想者の極力排撃するものだ。

大學無用論

室伏高信

一九四〇年頃のこと、二人の男が、そのうち一人はまだ青年であつたが、本郷のある廣い通りを歩きながらの會話。——

「これが、あの、赤門の跡だつたな。」

「赤門？　お稻荷さんのことかい？」

「ううん、大學だよ、君、君だつて大學つてものゝあつた位ひは知つてゐるだらう。」

「うん、話に聞いたよ、江戸の昌平黌とか、明治の大學校とか。」

「その大學だよ、これが。それからこの赤門つてやつが大學の中の大學で、昔は中々鳴らしたものだ、最高學府といつたね。先生は夏でもフロツクコオトを着て、うや〳〵しく歩るいたぜ。中には講義の前に柏手を打つて勿體をつけた博士もあつたよ。……なんでもこの先生だよ、今では神官になつてゐるといふ話だが、自分のうちでは、毎朝神棚へ蟲けらを一疋づゝあげてね、おゝわれ等の貧き祖先よ、あなたと私とは因果の法則によつて結ばれてゐる。あなたがこの世になかつたなら、このわが輩の存在もなかつたらう！　とか何とかおほだらけたことをいつてね、蟲けらの前に柏手を打つたのは。」

「すると、大學教授つて、やつぱり牧師さんの氣狂じみたやうなものだつたね？」

「まあ、さういつたやうなものか、といふと、まだその頃の大學の先生で生きてゐる人があるから困るがね……牧師が神の名においてお賽錢をもうけ、政治家が人民の名において賄賂をかせぎ、大學教授が學問の名においてノオトの切り賣りをしさ…」

「切り賣つて、切り賣りするほど肉があつたかね？」

「そりお君、考へても見給へ、水天宮のやうにいくらでも同じものを賣ればいゝじあないか。何んでも或る先生は、二十年も

同じノオト――まるで乞食の着物のやうにぼろ〲になつたノオトをもつてきては、毎年こいつを教育勅語のやうに讀みあげたといふよ。節をつけて、ゆつくり〲ね。○○さんて、そら社會民主黨の總裁になつた人があつたらう、あの人なんぞもイリイの原論を三十年もつゞけたんで、しまひには棒暗記をして本なしでべら〲横文字の講釋をやつたつていふよ、はなはほきいち以上だね。」

「學生はその間に何をしてゐたんだい？」

「學生か、學生はペン蟲つてね、ペンにインキをつけて、ノオトブックに字を書いてゐたよ。」

「作文かい？」

「ううん、作文なんか、學生にできるもんかね、文科大學の學生だつて作文一つ書けないのが多かつたよ。」

「じあ筆耕かい？」

「まあ筆耕さ、その頃女子大學出のもの、間に筆耕團が出來た位ひだつた……つまり先生の柏手や乞食の着物を筆記したんだよ。」

「ふうん、その頃――その頃つていつたつてまだ十年そこ〲だが、いくら時代のテムポが早いからつていつて、そんな大昔でもなからうに？」

「大してね。」

「それに、その時代にあ、印刷機械はもうあつたらう？」

「そりあ、あつたさ、君だつて印刷機械が十五世紀だつたかに發明された位ひは知つてゐるだらう。ね、その時代なら仕方がないさ。アダム・スクリブナアがチョウサアの詩を書いたやうに、學生が柏手や乞食の着物を筆記するもね。だが、そんな時代は十五世紀の中頃で終つた筈だよ。」

「それからは？」

「それからだつてね、印刷機械はまだ例の手刷器時代が長くつづいたよ。キャクストンからウヰリアム・モリスまでの間がこれさ。それは一人の職工が何から何までやつたものだ。だから大量生產つてわけにはゆかなかつたね。でも、ダニエル・デフオね、あの男なんざあ、なんでも三百册も本を書いたといふぜ。それからペエル・チユウマ、あれも五六百册から書いてゐるよ。」

「十年前の印刷文明は？」

「十年前にあ、もう素晴らしいものさ。その頃だつて文明の沒落なんて途方もないことといふ氣狂ひはあつたがね、文明は花盛りだつたよ。ホアルフェデエル型といふやつの出來たのもそれよりかずつと前だつたし、それからたしか東京日日新聞だつたと思ふが、ニッポン・ウルトラ・ライトニング・プレスといふのを

貸入れてね、何んでも一時間十二萬の速度といつたよ。」

「一時間十二萬？」

「うん、一時間に十二萬よ。その時代にさ、まだ大學があつたんだよ。いゝか、君、も一度いふが一時間十二萬！　この時代に學生は何をしてゐたと思ふね？　最高科學の府つていつてね、科學を自分獨りで背負つてゐるやうな大學でね、驚いたよ、學生はまだコツ〳〵と字を書いてゐたよ。アダム・スクリブナアのやうにね。それもチョウサアの詩のやうな立派なものなら樂しみもあらうといふものだが、どうだね、柏手や乞食の着物を書いてゐたといふから驚くぢあないか。」

「馬鹿ばかりが學生になつたのかい？」

「うん、まあ、そういつたやうなわけかなあ。君、も一度いふが、一時間十二萬の時代だつたよ。その時代に學生は何枚書くと思ふ？　二時間に五六頁だよ。それを圓本流に詰めこんで見給へ、まあ一時間せい〴〵一頁だね。新聞頁にすると四十分の一頁位ひかね。で、十二萬枚書くにあ、どうしても四百八十萬時間位ひかゝるわけだ。つまり九十六萬日、二千六百六十六年かかるわけだ。だから時代能率からいふと、學生のやつてゐる仕事は四百八十萬分の一の能率さ。時勢後れといふ點からいふと四百八十萬倍といふわけだ。」

「驚いたね。」

「まだ、君、驚くなあ早いよ。ね君、その意味をだ、やつてゐる學生は一人もゐないよ。それが君四萬二千人だよ。四萬二千人の青年がその時代能率から見て四百八十萬分の一の能率で押へつけられてゐたんだからね。大抵の秀才だつて馬鹿にならうぢあないか。だから眞面目に——そうだ、くそ眞面目に學校生活の五年もやつてきたものは、世間に出て見ると、まるで田舍者の紐育見物でね、たゞおらあ！　おらあ！　つていつてゐるばかりさ、どこかの總理大臣のやうにね。」

「その頃圓本つてものが流行つたつていふぢあないか？」

「とても流行つたよ。何んでも評判のやつは四十萬人も會員があつてね、出版成金、小說家の成金も續出さ。それから小說家が有頂天になつて立派な邸宅を建てたり、いや、社會主義者までが大邸宅を建てたよ。そらこないだ山の手の方を散步したらう、あの時コケコッコウのトサカのやうな塗つた赤い家が貸家になつてゐたらう、あれなぞもその頃圓本成金の○○といふ文士の建てたものだつたよ。」

「大學の講義をなぜ圓本にしなかつたね？」

「うん、すればよかつたさ。だが、圓本にして見給へ、一年間の講義が二十頁位ひにたゞむよ。そいつを君千頁一圓にして見

給へ、一年分の講義が二錢になつてしまうからな。」
「大學教授の値打ちは金二錢か？」
「一年にね。」
「でも四萬二千の學生があると八百四十圓、印税がその一割として八十四圓……」
「ところが本なら一種一册で、つまり一學科一人で足りるからね……」
「本なんぞ出さないつていふ、見識の人もあつたらう？」
「あつたよ。本にするとあらが見える……いゝかね、學生は無批判だが、世間は批判する、ブック・レビュウが流行る、隨分無茶苦茶をいふやつもあるからね。……それにだ、本にすると一度で終り、二十年も同じ本を出すわけにや行くまいじやないか。またそれに、くりかへしていふが、本なら一學科一册の本でいいよ。」
「一學科一册？」
「そう、一學科一册。……たとへばだ、哲學概論だね、これは西田幾太郎が一册出す、ほかのへぼ教授のものなんざお讀む學生もないだらうし出版する本屋もないだらう。つまり三千五百何十人の大學教授のうちで一册の書物に價ひするものが例へば多く見積つて百人あるとする、あとの三千四百何十人はアウト・オブ・ワアクになるわけだ。」
「その頃、もうラヂオもあつた筈だが？」
「あつたよ。ラヂオも、トオキイも、飛行機も、矢張り評論家なぞは現代は機械と速度の時代だとか、ラヂオ、キネマ、ストオリイの時代とか、またはリンドバアク式に人間は翼をもつたとかいつてゐたよ。」
「なぜまたラヂオで大學の講義を放送しなかつたもんだらう？」
「そりあ、ラヂオでやればよかつた、中繼放送でもしたらね。でも、二十年も前の乞食の着物を放送されちあ聽く方でたまらないからね。」
「それあ君、新進のちやき〲をもつてくれば……」
「新進んてやつがまた怪しいんだよ。何んでも伯林あたりで三年もストラッセン・メエチェンを買つてくると、直ぐに新進で、教授で、博士だからね。……講義に出る前の晩くらひに仕入れたてのノオトをもつていつて、二時間たゝないうちに種切れになつて、まだ鐘も鳴らないうちに、今日は用があるとか何とか學生をだまして、質問の出ない前にさつさと鞄をかゝへて引きあげる位ひが關の山……」
「でもラヂオでやるなら幾らでもその道の一流の人をつれてこられるぢあないか？」

「ところが、そこにまた二大障碍があるさ。第一はだ、ラヂオの監督は政府に屬しだ、お上のお氣に向かないことは一切いはせないよ。つまりラヂオは官報だよ。お上のための拍手の機關だよ。ラヂオなんかにうつかり聽きとれてゐたまへ、むしろ聽きとれるやうな名講演のあつたためしもないし、官報ラヂオぢあるべき筈もないんだが。……それからもう一つ、ラヂオでやると、やつぱり、そら、例の三千四百何十人がいらなくなるよ。百人位ひのおべんちやら教授のほかにはね。」
「ぢあ、やつぱり先生の失業救濟のために、大學が必要だつたと、君はいふのか？」
「まあ、そういつたやうなわけさ。」
「そんなら、ロイド・ジヨオジでもつれてきて、道を造つたり、橋をかけたりして、大學の先生を使つたらよかつたらうに？」
「その代りに、日本の文部省では大學を濫造したんだ。何んでも大學と名のつくものが五十幾つとあつた。」
「最高學府が三十幾つも？」
「うん、最高が何十もあつちやおかしいがね。世間じあ最低位ひにしか思つちあゐなかつたが、自分じあ最高つてね、矢つ張りブルジヨア最高頭腦とでもいふやつだつたか。……そう〳〵、なんでも大學の規則書を見ると、大學は學問の最高府にして、國家に須要なる人物を養成するといつたやうな、即ちこのやうな文句があつたと思ふね。つまりブルジヨア國家に須要な人物ね……」
「ぢや、大學卒業生はみんな役人にでもなつたんか？」
「はじめはね、はじめは大抵役人——その頃は官員さんといつたよ、その官員さんになつたもんだ。高等官何等を振り出しに、課長、局長、次官、大臣、樞密顧問、老衰といつた具合にね。マルクスの所謂ブルジアジイの執行委員つていふやつさ。それから後になつては直接銀行とか會社とか、まあ、お金持ちのぢき〳〵の手代さ。マホガニイの前に一日中腰掛けて、お札の勘定をして、お帳面をつけて、そろばんをぱち〳〵はじいて、それから腕節の强いのが會社の用心棒さ。」
「でも、君、赤化教授といふものがあつたつていふじあないか。」
「あつたよ、そら、あの社會民主黨の執行委員になつてゐる〇〇君なぞがその赤化といふやつさ。それから日本〇〇黨の長老河下終博士なぞがそれだ。」
「その連中も講義を——そうだ、その拍手を打つたわけか？」
「うん、打つたよ、二十年もつゞけてね。もちろん、はじめはマルクスぢあなかつたんだがね、そら例のラスキンさ。ラスキンの藝術・人道主義さ。ところが、今じあマルクスもすたりもの

だが、その頃はえらい流行つたよ。マルクス、レエニン、ディアレチイイクつていつてね。頭の一番い、學生がマルクス・ボオイ、二番目が文學青年、三番目が野球狂ひ、それから最後が柔道、撃劍、相撲部といはれたものだ。」

「大學にも流行が入つたんだね？」

「そうだよ、監獄の窓からも風が這入るやうに、大學の窓から世間の流行がちつとばかり這入つたんだよ。そうだ、囚人がわづかな風でも嬉れしがるやうに、四百八十萬倍も時勢に後れてゐた學生たちのことだらう、忽ち喜んだね。マルクス曰く、レエニン曰く、プレハノフ曰く、それからブハリン、デボオリン、ヴァルガ、等々、丸で屁のやうな毛唐どもの名前でもロオマ法王のやうに押し戴いて、パンフレットかリイフレットの一、二册も讀むと、机を叩いて有頂天になつて、アウフヘエベンだとか、エアケムプフエンだとか、唐人の世迷言をしやべりたてたものだ。この流行の間にあつて多少血の氣のあるものや、人氣取りやが、例の赤化教授となつたつて、ちつともおかしいことはないじあないか。」

「で、その赤化はどうなつたんだ、大學が西瓜のやうに中から眞赤にでもなつたんか？」

「なに、君、たわいもないことだよ、カント、そうだ、あの大カントでさへもウェルネルの前には忽ち君子ひよう變だつたらう。それさ。マルクスが流行し出すと、おれは十年も前からマルクスを研究してゐたんだといひ出した倫理學の大先生もあつたが、お上の手が入るとなると、マルクスで大分原稿稼ぎをしたものまでが、何におれはマルクスを研究しただけとかいつてね、ろくく研究もしてゐないくせに、その研究さへ止めてしまつたものが多かつたよ。」

「でも、大學から放逐されたのもあるといふじあないか？」

「あつたよ、あつたが大山鳴動さ、ほんの五六人だつたかね。」

「それで大學はもとの柏手に逆もどりか？」

「そうだよ、柏手とスパイさ。大學教授の中にスパイがゐたよ。學生の中にあむろんさ。いや例の〇〇黨事件の一方の巨魁の、例の〇〇だつてスパイだつたといふよ。何んでも時の伯爵で相當政界に勢力もあり、政界の惑星だといはれてゐた、〇〇と親類筋だもんだから、表面は〇〇黨の指導者、その實はスパイでね、……だから見給へ、いつでもいよく檢擧といふ瀬戸際には忽ち姿をかくしてしまつたから。それから、學生が中々油斷がならなかつたんだよ、もう十人も集まつて何か相談すると、直ぐに警視廳へ筒拔だつたつていふよ。」

「で、大學は反動に……」

―君、なか〳〵だよ。大學は反動にきまつてゐるよ、教育と大學は反動の巣窟さ。社會主義者にいはせると、ブルジョア科學とか、科學の階級性とかいふがね。科學なんてものは階級どころか、黨派だよ。プロレタリア科學――といつてももう一昔前の流行だがね。それにだつて社會民主主義もあれば、ボルもあり、小兒病もあり、第二、第三、第四インタナショナルといふやつもあつたし。それからアナキズムだらう、サンヂカリズムだらう、ギルドだらう、ゴムパだらう、いやもう、十人十黨だよ。――むろん、これは監獄外の話さ。青天白日のもと百鳥聲を競ふやうなものだ。大學、いや、この學問の牢屋の中では、だが、みんな拍手さ。政府はそのために大學を造つたんだ。大學教授の失業救濟も目的の一つかしらないが、この失業者連を雇傭する目的はだね、その拍手さ。」

「だれのための？」

「分つてゐるじやあないか、拍手といつてもいゝし、拍手といつてもいゝし、もしくは思想善導といつてもいゝよ。要するに青年の血の氣をなくし、闘爭性をくぢき、聰明を奪ひ、それから先づマホガニィの前でお札の勘定をする機械――人造人間とすることだよ。たゞ機械と違つてゐるところは、能率が足りないといふだけさ。」

「でも、この文明の時代、[illegible]、宣傳された愛、世界、ホアルホテニエル、それからニッポン・ルトラ・ライトニング・アレス、それから岡本、またそれからラヂオ文明の時代に、まあよくも大學になんぞ這入るアナクロが――それも年々何萬とあつたものだね？」

「君は福澤諭吉の學問のすゝめといふ本を讀んだことがないと見える？」

「その本がどうしたといふのか？」

「その本にかういふことが書いてあるよ、――人は生れながらにして貴賤貧富の別なし。たゞ學問をつとめて物事をよく知るものは貴人となり、無學なるものは貧人となり、下人となるなりと。どうだ、うまいことが書いてあるだらう。いゝか、學問すると貴人になるんだつて。今でこそ大學へなぞ這入らうといふやうな奴は貴人じやあなくて奇人に見えるが、その頃はそれでよかつたんだ。その福澤先生が矢張り大學をはじめた一人だといふことを考へて見給へ、意味深々だね。どうだ、それじあ、野心のある青年は大學へ這入らないわけにはゆかないじやあないか。岡本の廣告を見てゐると、つい買つて見たくなるし、銀座へ出るとカフェーへ這入りたくなるやうにね、青年がついふら〳〵とするんだね。貴人！　君いゝぢやないか。プロレタリ

アになるよりは貴人！　貴人の方がまあいゝからね。」
「でも、みんな貴人にあなれまいが？」
「そりやあそうさ、みんな貴人になつたら、つまり下人の方が少なくなつて、その方が値打ちがあがるわけさ。」
「君は、大學の卒業生が年々一萬二千もあるといつたね、たしか？」
「うん、いつたよ。で、カウツキイは知識階級を論じたプロシユウルのうちで知識もまた一つの商品だといつたことがあるがね。そんなことは分りきつたことだと君はいふのか？　その分りきつたことを勿體ぶつていふのが學者なんだよ。分りきつたことを分らないやうにいふのが。時々希臘語を使つて、それに振假名をしてね。そうでもしないと今の學者たちにお書くことはないんだよ。で、知識は一つの商品でいゝが、無知識じあ商品にもなれないんさ。その商品にもならんやうなものを各大學で毎年一萬二千づゝも濫造だね、つまり大量生産的に粗製濫造をやつたんだ。だから大學市場はがた〱さ。丁度その頃流行つたセキセイインコのやうにね。僕等は大學卒業生のことをインテレクチユアル・インコといつたものだ、その實あまりインテレクチユアルでもなかつたんだがなあ……」
「教授の方は？」
「それも似たりよつたりさ。何んでもその頃はアメリカ繁榮の全盛時代で、ある東方主義者さへ、アメリカといふ本を書いた位ひだつたが、そのアメリカで煉瓦工一日の賃銀三十圓といふ時だ、日本の大學教授は一番多くて一ケ月四、五百圓、その四五百圓になる頃にはもう停年でお拂ひ箱、それからひどいのになると一ケ月驚くなかれ二十圓！　といふのもたしかあつたよ。それが君、物質萬能の時代だらう、二十圓の大學教授だつて物質崇拜に變りはなかつたんだよ。で、われ〱の仲間ではプロフエッサアなんて呼ぶものはなかつたね。プロとか、プロへとか――プロフエッサア、プロレタリアアト、プロスチチユウトを三位一體的に呼んだ人まであつたよ。」
「それじあ、いくら何が何でも大學もだん〱すたれたらうなあ？」
「ところが、そこへ野球といふやつが流行りだした。大學はまるで野球のクラブのやうになつたよ。早慶戦が滿都の人氣をあつめてゐた頃はすごかつたものだよ。」
「政府がよくだまつて見てゐたね？」
「いや、政府はだまつて見てゐたどころじあない、奬勵したたよ、どし〱。學生に運動させて、スポオツの方へ人氣を轉換させたのさ。運動に熱中するものが自然馬鹿になり、眞理に對

して目を閉ぢ、精神的な闘爭力をにぶくする位ひのことは、おらが首相にも分つてゐたんだねえ。」
一でも學問がお留守になつたら相手の先生が困るだらう？」
「相手なんかあ、もうどうせだめだつたんだよ。學生が馬鹿にしてね。そこで學校商賣からいふと、例の福澤式貴人がきゝ目がなくなるといふことだ。直ぐに目をつけたのが野球熱さ。ジプシイの親父がどこの乞食の子か分らないやうな娘の人氣を喰ひものにするやうにね、大學は野球選手をちやほやして、一方にあ、雄辯會なんかの費用を削つてさ、野球の選手に月給三百圓づゝもやつてゐたところもあるし、ユニフォムはくれる、試驗の點は甘くする、將來は保障する、等々さ。選手の方もまたいゝ氣になつて、たかゞゴム毬の投げつこ位ひで一角英雄氣取りをして、それで青年時代の勉強盛りをゴム毬で暮してさ、まあ小猫がじやれてゐるやうなものさ。それでまた選手になれない連中ときたら、活動のエキストラ見たいに、明治神宮外苑でたゞワイ／＼騷いで暮したのさ。卒業してからは大部分は就職難。就職したものでも六十圓か七十圓で下宿かアパアト住ひ。それから女房も貰えず、せい／＼フロインディンで、あとは産兒制限、不平、不安、社會民衆黨、々々。」
「じあ、大學も亦お終ひにあ、全く没落者だね？」
「うん、君の知つてゐるとほりさ。大學なんぞへ行くもんのはごろりとなくなつたよ。學士さんなんかお嫁にやれないといつた時代もあることはあつたんだが、もう五、六年前にあ、學士さんなら娘をかくそつていふ風になつたよ。……尤もお蔭で政府は大部費用が助かるし、それに田舍の親だちが無駄な學費の代りに圓本ですんだり、ラヂオですむやうになつたからね。」
「大學はその後どうなつたんだつけ？」
「君の目の前にあるとほりさ。見給へ、この赤門の中を。こゝに四百人もの教授と、何千人の學生が通つた時代もあつたし、一時は天下の青年にとつて羨望の的となつたものだつたが、何んといふ運命の神の無慈悲なことか！　こゝは今は肥料の積場になつたよ。でも、その頃教授だつた○○農學博士だけはまだこゝに所長として殘つて、肥料の管理――そうだ、肥料の公平な分配のために働いてゐるよ。こゝは三河島に近いのでね。」

對支帝國主義の屈折と極東市場戰

高橋龜吉

一　對支「强硬政策」失敗の意義

田中內閣の所謂「對支强硬政策」は、六千數百萬圓の巨費と幾多の軍人及在留民の生命とを犧牲にしながら、結局、その收穫せしものは、支那の排日貨運動を益々巧妙にし、愈々組織的に訓練したに止つた。加ふるに、その「强硬政策」の終末は「餘りの屈辱協定に軍部極度に憤慨す」――東京朝日新聞三月二十九日――と云ふが如く武斷派の面目を丸潰しにした「日支協定」であつて、明かに、對支武斷政策の失敗なりしことを最も雄辯に確認したものであつた。斯樣にして、我が朝野の對支政策は、今やその根本方針の一大轉換を餘儀なくせられつゝある。現に、去る五月十三日發の東日北平特電は、我が對支政策の根本方針が次の如く更新せられたと報じてゐる。「我が外務省は……南京、漢口兩事件協定及び通商條約改訂に關する起草協定調印を機に、芳澤公使を招き、……滿蒙鐵道問題及び通商條約改訂問題につき、それ〴〵實情聽取の上、愼重審議を重ねた結果、在來の我が對支政策に一大改變を加へ、支那の誤解を招き排日風潮を擴大するが如き一切の積極政策を中止して、專ら危地に陷れる對支貿易の促進をはかると云ふ新對支政策の樹立に決せる趣である」云々。この報道の示す方向に、我が對支政策の轉向しつゝあることは恐らく必至の情勢であらう。果して然らば、ここに問題となるは、思ふに次の二點である。（一）何故に我が對支武斷政策は失敗したか。（二）右（一）の結果今後の我が對支關係、わけてもその經濟關係は如何なる影響を蒙るであらうか。

若しも、田中內閣對支武斷政策の失敗原因が、單なる戰術上の錯誤に過ぎなかつたものだとせば、その結果は必しも我が從

家の對支政策の根本を覆ふものではない。之に反し、若しも、その失敗原因が、世界の歴史發展の必然性に根源するものなりとせば、我が從來の對支政策は、根本的にその方針を變革せざるを得なくなる筈である。然るに、田中外交に由つて示された對支武斷政策の失敗原因は、以下述べるが如く、前者ではなくして、後者のそれである。之れ、已述の如く所謂「對支强硬政策」の失敗するや、之に次いで、對支政策の根本方針の改革が傳へられ、筆者亦それを事實なるべしと信ぜんとする所以である。

なる程、これ迄、我が經濟の對外發展は、文字通り「國旗に從つて」伸長して來た。この故に又、我が資本家階級の間には、その經濟的發展を、依然、我が優秀なる「軍隊」の力に依賴せんとするもの多く、たま／＼この資本家的利害は、封建的尙武精神を繼承せる軍閥の意向と合流して、永く我國に「軍國主義」的精神を横溢せしめた。之れ、今日に於ても尙ほ、一部の人々の間に「對支强硬政策」が根强く主張せられ來つた所以である。

さり乍ら、その後に於ける世界資本主義の發展、就中歐洲戰爭及びその後に於ける發展は、軍隊のメリツトに多大の變化を及ぼした。わけても、支那に對してさうであつた。思ふに、その主なる事情は之を左の諸點に纏め得るであらう。

(1)列强の帝國主義的勢力の均衡が複雜となり、此間に於て從來の如く武斷的解決を圖らんとせば、外交の困難から、世界を敵とする覺悟を必要とすること愈々大となつたこと。現に、獨逸が遂に世界を敵にするに至つた理由は之れであつた。

(2)かうなると、已存の帝國主義的繩張を破つて新にその仲間に入るためにも、又、他の强國の新たなる帝國主義的進出を防止するためにも、有力な手段となつたものは「門戸解放」「機會均等」主義であつた。

(3)此の(2)の主義は更に、進んで被壓迫民族の解放運動を助け、その力と合流して已存の帝國主義勢力を打倒し、その獨占を破り、以て、その經濟活動の自由範圍を擴大せんとする、新しき戰術を發達せしめた。就中後れて東洋に進出する必要に迫られた米國が、この種の戰術に主力を傾注した。

(4)さり乍ら、以上(2)及(3)の新しき戰術が最も有效に成功したのは、未だ完全に殖民地化せざる諸國、即ち、半殖民地的狀態に於ける諸國に於てゞあつた。例へば、トルコ、ペルシヤ、支那、就中、支那に於てさうであつた。蓋し、これ等の諸國に於ては、反帝國主義運動の名に於て、被壓迫國民自らの反抗を助け、以て、已存の帝國主義的獨占を最も容易に打破り、その利益に均霑し得るからである。斯樣にして、專らダラー帝國主義

の東洋進出戰と合流して、半殖民地國の解放運動は進展し、就中、支那に於て、その勢ひを強大にした。

(5)加ふるに、一九一七年露國勞農革命成功後に於ては、プロレタリアーの立場から、反帝國主義運動は熾烈化し、以上(4)と合流して、益々、半殖民地的國家に於ける反帝國主義運動を大にした。

而して、以上の如き諸情勢が相寄つて、遂に、東洋半殖民地國(就中支那のそれを)を解放運動にまで進展するに至つた所以は、內部的には、支那國民が自覺して、その不平等的桎梏を脫却せんとする運動に必死となるに至つたことであるが、此の傾向を益々助長發展せしめたものは、更に外部的には此の種解放政策を最も有利とする米國が、その巨大の富を擁して、歐洲戰後、世界外交の覇權を握つたことに在る。換言せば、世界の外交が舊帝國主義國(英、獨、佛、日、露)に代り、米國に由つてリードせられるに至つたからである。而して、斯く、支那に對する列强帝國主義が、武斷的獨占傾向から、機會均等的解放政策に一轉した劃期をなすものは(卽ち、米國外交の勝利を劃せるものは)、一九二〇—二一年のワシントン會議に於ける「九箇國條約」であつた。例へば、此の條約は、支那の主權、獨立、領土の保全を契ひ、竝に「支那の全領土に亘り、各國民の商業上の機會均等主義を有效に確立し、且つ維持する爲め努力す」べきことを約し、之を確保する各種の條約を締結してゐる。

加ふるに、右の如き支那解放の傾向は、更に、獨逸が戰敗のため戰前の帝國主義的特權のすべてを失へることに由つて助成せられた。蓋し、獨逸はかくて米國と共同利害に立ち、共に、英日佛等の特權を打破することを有利とし、しかも自らは何等失ふものを有せざるに至つたからだ。

この秋に於て、支那の解放運動は更に露國の革命運動に由つて最後の推進力を惠まれた。蓋し、露國は世界資本主義打倒の槓杆として、支那に於ける打倒帝國主義運動の成功にその主力を注ぎ、以て、支那民衆の自覺心に、强烈なる爆發力を詰め込み、その反帝國主義運動に巧妙なる戰術と、强固なる組織とを與へたのであつた。

以上の如くにして支那に對する各國の武斷的進出は世界を敵に廻す覺悟のない限り、封ぜられて了つた。しかも列强の利害は已述の如く相反して、支那に對する帝國主義的共同一致の動作は到底期待出來ない。否、各國ともに虎視眈々として各國の虛を衝かんとしてゐる。最早、支那は、各國個々の此の上の侵略を少しも恐れる必要はない。果してさうと定まれば、區々たる武力は最早何等の懲罰力を持たないのである。而して、懲罰

力を失つた武力は、實は、既得權擁護の役にすら立たないものである。否、却つて反對の結果を齎らす兇器と化し去るのである。何となれば、支那は斯かる場合には、武力的復仇を恐れることなしに、例の峻烈得意のボイコットを大規模に敢行して、その相手國の商品販路を破壞し、已得權擁護の利益よりも更に大なる損失を當該國に與へるに至るからである。現に、最近年、英國や日本が、支那の反帝國主義運動に對し、所謂「既得權擁護」のため出兵するや、何れもボイコットのために却つて貿易上多大の打擊を蒙り、遂に屈辱的協定を以つてその撤兵を餘儀なくせられるに至つてゐる。疑もなく、武斷的對支發展時代は過ぎ去つたのである。而して、武斷主義の失墜は、やがて既得權の喪失を意味すること已述の如くである。然らば、既得權の喪失は此際、列强の對支經濟關係に如何なることを意味するか。

二、特權的對支經濟發展時代の消滅

一體、これ迄、支那に於て、列强の經濟力が支那人に打勝ち、グンぐと發展し來つた根因は何處にあつたか。それは、多くの人々が誤解したがるが如く、支那の經濟實力が劣つてゐたからでは決してなく、寧ろ、各種の不平等條約の結果、支那に於ては、自國企業よりも却つて外國企業の力が各種の方面に於て有利に發展せられ來つたことに起因する。例へば、いまこの主なる點を左に列擧して見るであらう。

(1)治外法權の脅迫の下に、外人の横暴常に支那人を不利の位地に置くこと。

(2)關稅權の束縛のため、殆んど自由貿易に等しき低率の輸入稅にて中國產業は外國產業の競爭に曝露せられたから、外國への中國輸出品は高率の關稅を課せられてゐること。

(3)加ふるに、中國品は內地各省各地の厘金稅(通過稅)を無制限に課せられるに反し、外國品は條約に由り海關通過後之を全國に輸送するも、その厘金稅は僅かに百分の七・五に過ぎない。然るに、いま各省の通過稅徵收個所を見るに、その數全國總計七百數十個所に上り、これ等各所に於て徵收せられる中國商品の通過稅は平均百分の二十六七の多きに及ぶと云ふ。この結果、例へばこゝに上海に於て元價一圓の中國及外國の兩商品ありとして、之れが奧地に輸送せられる場合には、厘金稅を加へて外國品は一圓七錢五厘なるに對し、中國品は一圓二十六七錢となるに至るのである。ために、外國品が如何に有利に、中國品が如何に販賣上不利なるかは說明を要せないであらう。

(I)支那に於て支那人自らの企業の發展を阻む原因の更に著しきものは、產業の發達、競爭上重大關係のある交通事業並に金融

事業の多くを外國人に占有せられてゐることである。就中その大なるは鐵道の外人所有許容、及び沿岸航行權の喪失である。例へば鐵道は初め露國に東清鐵道布設權を強要せられたるに端を發し、その後獨逸は膠州鐵道を、佛國は滇越鐵道を獲得した。加ふるに、各國何れも之を自國船に獨占せる沿岸航行權を外國船の自由に委せるを以て、運輸交通上の實權の少からぬ部分は外國人に之を掌握せられてゐる。のみでなく、外國銀行は支那に於て單に預金吸收の自由を有するのみならず、銀行紙幣の發行權を持つてゐるのである。斯樣にして、金融の支配權も亦、少からず外人に掌握せられてゐる。

(5)更に、支那は又、條約に由つて、自國産業を特に保護する自由をも剝奪せられてゐる。例へば馬關の日清條約に由り(最惠國條約に由り各國此の利益に均霑してゐる)若し自國産業に課稅を輕減する場合には外國企業にも之を均霑せしむべしと約してゐるが如きである。このため、現に、光緒十六年支那政府は航業發達政策として招商輪航公司の減稅を許さんとしたが、中米條約に害せられて之を實行し得ず、數年前製糖會社がその發達のため免稅を要求したが日本亦條約に由り之を要求したのであつた。

(6)その他、鑛山開發權、電車、瓦斯、電燈等の布設權、等々の特權の下に外國經濟力は特殊の勢力を支那に扶植してゐる。

以上に由つて、支那に於ける外國資本の優越が、如何に不平等條約に由る各種の「特權」に依存せるところ多きかを容易に看取し得るであらう。然るに、前項已述の如く、支那に於て武斷的外交時代の過ぎ去りしことは、次いで、早かれ晩かれ、これ等の特權的對支經濟發展時代の消滅すべきことを意味してゐる。現に、關稅自主權については已にその一部は實施せられ、その他についても、英米その他は、早くもその準備を整へつゝあり、日本亦、最近の閣議に於て、日支通商條約改訂の根本方針に關し、「日支兩國は相互平等に立ち、日本は主義として關稅自主權を認め、治外法權を認めるものである」と云ふに一致せりと傳へてゐる。尤も、全部の既得特權を放棄するに至るまでには幾多の曲折はあるであらう。その過程に於ては又、武斷的意見が再び擡頭することもあらう。だが、結局に於て、それ等特權を永く維持し得べからざることは、恰かも約三十年前に於て、英國その他が日本について實踐せしところと同一である。

三、對支帝國主義の屈折

左翼公式主義者は、日本の對支帝國主義は必然に戰爭を導くと主張する。しかし、若し、以上已述の事實にして間違ひなし

とせば、宛から、英露の日本に對せし帝國主義的政策が、その後、屈折して、日本を完全なる獨立國とし、相互平等國扱にし來れるが如く、日本の對支態度も亦、それに似た經路を執るべきことが、少くとも、考へ得られる。

思ふに、日本の朝野は、對支二十一箇條事件の蹉跌、膠洲灣占領の幻滅、シベリヤ出兵の失敗、及び今度の田中内閣の對支「强硬政策」の不成功に鑑み、この上、積極的に武斷政策に由つて、その帝國主義的野心を擴充せんとするが如き意向の成功見込無きことを漸くに自覺するに至つたものゝ如くである。卽ち、新たなる帝國主義的要求を携げて、支那と武斷的に事を構えると云ふが如きことは、現在の客觀狀勢からは、殆んど想像することは出來ない。こゝに於て、若し、日本が、支那問題を中心に「戰爭」をやる場合起るべしとせば、そは蓋し、左の二點以外にはないであらう。

（一）支那が日本の已得權（就中滿蒙のそれ）を非常手段を以て回收せんとする場合、

（二）外國が支那に新に武斷的帝國主義政策を樹立し、日本の利益を脅かす場合、

（一）は或は支那單獨にて、或は米國乃至は露國のバックに由つて、將來起り得ることが考へ得られる。が、しかし、此の要求が、干戈を呼ぶに至るには、前提として、支那それ自身の國力の充實が必要であり、かゝる事情の下に於てのみ、平和的解決の出來るのが、從來の外交の教へるところである。

一層、帝國主義戰爭の必然論の基礎をなし、現に、大多數帝國主義戰爭の原因となつた主なる場合は、前記（一）の場合ではなくて、（二）の場合であつた。卽ち、征服者と被征服者との間に於ける戰ひではなくて、或る弱少國に對する優越權を、二個以上の强國が相爭奪することよりして、帝國主義戰爭は起きるのである。從つて又、若し、日本の對支帝國主義が、必然に戰爭を導くと云ふ場合には、主として、此の種の戰爭である筈である。

然るに、支那に於ける列强の帝國主義戰は、以上第一及第二項已述の如き事情から、此の種の危機を著しく少くしてゐる。蓋し、いまや、世界、就中東洋方面に於ける列國外交をリードする實力を有するものは米國である。而して、米國の此の指導的位地は、資本主義が世界を支配する限り、近く、動搖すべしとは考へられない。ところで、米國ダラー外交の支那に要求する點は、英日佛その他の、支那に於ける既得帝國主義的特權を打破して、その門戸を解放せしめ、機會均等の基礎の上に、自由にその强大なるダラーを進出せしめんとするに在る。ダラーの支那進出には此際、此の解放政策に乘ずることが、最も有利であるからである。斯くて、米國の威力と半殖民地國の自覺と

は、遂に此の解放政策を支配的ならしめたこと、及びその劃期をなすものは、一九二一年ワシントンに於ける九箇國條約なること、等々については已に本論第一項に述べた通りである。

斯様のわけで、支那に於て、前掲(二)の如き戰爭が必然だと云ふ傾向は、ダラー外交のリードする限り、愈々その危險を減滅しつゝある。否、反對に、各國は、ダラー外交に對抗して、對支經濟關係を向上さすためには、從來の對支態度を改めて、新たなる陣容を整へざるを得ざる事情に迫られ、着々として、その方向に進みつゝあるかの如く見受けられる。

即ち、對支武斷政策を撤去して支那民衆の信任を購ひ、特權に由る發展の代りに、それ〴〵の經濟實力に由つて、平和的に支那に雄飛せんとする競爭である。云ふ迄もなく、列强の此種の對支政策をリードしたものは米國であるが、しかし、時勢の變遷を逸早く認めて、從來の特權的對支發展政策から經濟實力戰に轉移したものは英國であつた。(尤も獨逸は、歐洲戰爭の結果、最も早く此の種の經濟戰に轉入せること已述の如くである)流石の英國保守黨も先年の廣東、上海を中心とする支那の對英ボヰコットに手を燒いて、早くも、武斷政策を捨て、特權放棄を覺悟して、經濟實力戰に力を注ぐに至つたのであつた。

然るに、これ等の教訓に由つて、夙に、對支武斷政策の時代錯誤なることを承知すべき筈の日本が、田中内閣を代辯として最後まで周知の如き武斷政策を採用せし所以は何處にあつたか。筆者は此の點につき、昨夏、濟南出兵を批評して當時次の如く述べておいた。

「英國の對支政策は、日本のそれに比すれば少からず「自由主義的」ではあるが、しかし米國のそれに比すれば著しく武斷的である。思ふに、その根因は要するに次の二點に在る。即ち、米國よりも著しく武斷的なるわけは、英國の對支已得權が米國に比し遙かに多いからだ。かつて武力に由つて贏ち得た既得の「特權」を守らうとすれば矢張り武力に由る外に方法はないからだ。之に反し、日本の對支政策に比すれば英國のそれが遙かに進歩的であり自由主義的であるわけは英國の經濟力が日本のそれより遙かに强大であるからだ。例へば、英國の對支輸出及び對支投資は、今日の「特權」を失ふも、前途尚ほ少からぬ發展餘地あるに拘らず、日本のそれは、今日の「特權」を失へば、その前途の發展力は極めて限られる事情に在る。斯様のわけで英國の對支政策は常に日米の中間にある。以上英米の對支政策に比すれば、周知の如く、日本のそれは、常に著しく「武斷的」である。しかも、已述の如く、その「武斷政策」が結局、排日貨の外何ものゝ收穫をも齎らさゞること明かなるにも拘らず、依然、我が對支政策は武斷主義を續けてゐる。蓋し、我が經濟(從來の)の對支發展は、既得の「特權」をモギ取られゝば、その殆んど全部が、その發展力を喪失するに至るからだ。而して發展力を維持する唯一の力は、いまも昔も、その「武力」以外にない。

之れ我が帝國主義者が、英米の如き「自由主義的」態度を以て、支那に臨み得ず、ことゝゝに、……武斷的政策を弄する所以である。しかし乍ら、此の我が對支武斷政策は、或る一派の信ずるが如く、日本帝國主義の對支「進出」を指標する意義を有するものでは決してない。反對に、私見に由れば、それは、宛かも、溺れるものが藁をも掴まんとする場合の如く、我が帝國主義者の漸く「希望」を失ひつゝある焦燥を示すものに外ならない。見よ、武斷政策の背後にある人々を、彼等には、いま「武力」に由つて對支發展を所期し得る自信はない。少くともその自信は浮草の如く動搖してゐる。だが、英米の如く、スッ裸な「經濟力」で以て、今後に於ける對支發展を期待する力は、現在の（如き政治と經濟の下にある）日本經濟にはない。こゝに於て、致方なしに、十を失ふよりも八を失ふの方法を……と云ふの意味に於て、極力現狀維持の目的の下に、武斷政策を採つてゐるに過ぎない。」云々。

案の如く、その後の經過の實證する如く、その對支出兵は失敗して、已述の如き屈辱的協定に由つて撤兵し、しかも、對支通商條約の訂結交渉の根本精神は、從來の如き武斷主義に由る既得權擁護の代りに、「日支兩國は相互平等に立ち、日本は主義として關稅自主權を認め、治外法權を認めることゝなり、從來の既得權の少からぬものは之を返戾するの餘儀なきに至つた。さうする外に、列强の間に伍して、此際、我が對支經濟關係を進展し得る見込なきことが、實踐的に明かとなつたからである。然り、先きに對支强硬政策を第一に主張せし大阪商人、實業家は、いまや、實踐に教へられて、我が政府の右の如き新對支政策を歡迎するに至つたと傳へられる。又、軍閥者流對支强硬主義者も、濟南事件の屈辱的結果と、而して、排日貨に伴ふ我が貿易の惡化、同貨相場の下落の壓迫等に教へられて、流石に、對支武斷主義更改の必要を認めざるを得ざるに至つた。云ふ迄もなく、これ等一連の我が對支政策の更改は、從來の如き特權的對支經濟發展策の代りに、經濟實力に由る對支發展策を餘儀なく採用するに至つたことを語るものである。

斯樣にして、從來の如き特權的掩護の下に於ける列强の對支資本戰は、いまや、それ等の掩護物を離れ、その軍事的着彈距離以外に遠く進出して、素裸の資本戰に愈々主力を集中するに至りつゝある。

四、日本今後の對支經濟戰鬪力如何

顧るに、從來に於ける日本の對支經濟進出力は、專ら本論第二項已述の如き帝國主義的特權（武力に由つて贏ち得た）に依存してゐた。現に、滿洲に於ける經濟的發展すら、滿鐵の資本は外資に由るところ多く、その使用する鐵道、機械等の材料亦、その多くを歐米よりの輸入品に依存してゐた。然り、從來の日本は、その資本の力に於て、その經濟的技能に於て、列强、歐

米列強の敵ではなく、唯だ、僅かに、專らその特權に由つて、支那に對し優越の位地を占め得たに過ぎなかつた。然るに、以上已述の如く、今後に於ける列強の對支經濟戰は、主として、その經濟實力に依存するに到りつゝある。加ふるに關稅自主權の回復、治外法權の撤廢等に由り、支那產業は、恰かも條約改正實施後の日本の如く、今後、その所要の保護を得て、急速なる發展をなし得る位地に在る。而して、斯くの如き支那產業の發達のため、最大の脅威を蒙るものは日本である。何となれば、歐米の產業は已に精工業に進出し、且つその產業種類も精巧なる機械乃至化學工業にて、到底、駈け出しの支那產業が一朝一夕にして之と競爭し得る位地に上り得ることは困難であるが、日本の對支輸出品の大部分は、粗工業乃至それに少し毛の生へた位ひのもの多く、直ちに、支那產業の競爭に曝露せられる事情に在るからだ。

果して然らば、已述の如き列強の對支經濟戰の變化は、實は、日本にとつては致命的打擊だと云はざるを得ない。恐らく、今後、支那產業の發達と共に、米國の資本は、滔々として支那に入るであらう。歐米の商品は、或は生產設備用として、或は交通設備用として巨大の販路を支那に見出すであらう。しかし、日本には斯くの如き資本も、斯くの如き生產設備用商品もない。

此間に於て日本の有する對支經濟關係發達の唯一の方法は、その技術を磨き、その經營法に發達して、支那四億民衆の生活用購買力に最善最廉の商品を供給すると共に、併せて、支那民衆の信賴し得べき友人となり、共同者となつて、歐米の資本を利用しつゝ、所謂合辨事業に由つて、支那產業の發展に共力することであると思ふ。尠くとも、資本家的對支經濟政策の實行的方法としては此の外に策はないであらう。

さり乍ら、若し眞に、日支經濟關係の親善と發達とを希ひ、之に由つて日本經濟界の發達を企圖せんとするならば、右の如き方法と行方とに於て、日本が列強の對支經濟戰の間に立つと云ふことは、必しも悲觀するに値せぬ。蓋し、英國の對獨、對佛その他の對歐經濟關係は、要するに、今後の日支經濟關係に外ならないからである。しかし、英國がかつてその對歐經濟關係に於て有せしが如き有利の位地を、日本が對支關係に於て獲得し得んがためには、我が經濟政策は今後之に對應すべく根本的に改革せられねばならぬ。卽ち、第一には從來の如き保護や特權や政治的擁護に由る經濟的發達の代りに、丸裸の經濟競爭に於て優越し得る經濟實力を涵養することである。第二には從來の如く武力的優越に過大の力を注ぐ代りに、その經濟實力の優越に全力を擧げることである。而して、最後に、その經濟的優越の基本は、之を尸位素餐の資本家階級に求むべきでなく、之を現實產業に從事する現業者群に求むべきである。換言せば、今日の資本家本位の政治經濟の代りに、現業者群本位の政治と經濟とを建設することである。

政界裏面の巨頭

馬場恒吾

英國人がボルドウィンの保守黨内閣に倦いた以上に、吾々は田中義一の政友會内閣に倦いてゐる。ボルドウィンは人心の傾向を察して、議員の任期が盡くるを待ずして議會を解散し、そして保守黨が絶對過半數を失ふと、直ちに辭職した。田中首相は昨年の總選擧に於て絶對過半數を得なかつたけれど辭職せず、其後、他派の議員に對して、妥協、誘惑、其他の如何はしき手段を盡くして衆議院に於ける多數を築き上げた。此多數は不自然の多數だと云はれるけれども、多數は多數である。吾々は衆議院に於て内閣を倒す望みを有せず、そして、田中内閣は貴族院の不信任投票を無視するが故に、茲に立憲的な内閣の倒壞の方法は皆無となる。

然らば現在の歡迎せられざる内閣はいつ迄も吾々の頭上に居据るであらうか。若しさうとすれば、吾々の心は憂鬱になる。吾々は絶望的な氣分になる。併し幸か不幸か、日本の如き立憲政治の未發達の國に於ては、其所に議會以外の力で内閣の倒される例が、屢々繰り返へされた。溺れんとする者は藁をも掴む。吾々は此内閣を辭職せしむべき力を何處にか發見せんとする。そして、先づ政界裏面の巨頭の中に、誰れか此内閣を倒し得るものはなきやと物色する。例へば第三次桂内閣の時に山本權兵衞伯が桂の處に怒鳴り込んだのが、桂辭職の一原因になつた。今の世に權兵衞の役を勤める者があればよいと思ふ。

當の政友會内閣は權兵衞の出でざるをよい事にして内閣居据りの準備に忙がしい。準備とは内閣を改造して陣容を新たにする事である。而して入閣を承諾せしむべく、白羽の矢を立てられたのは陸軍大將宇垣一成氏と新黨總裁床次竹二郎氏である。

一ケ月程前に、田中首相の參謀格たる遞信大臣久原房之助氏は宇垣を訪ねて、田中内閣を内部より援助して吳れと云つた。内部から援助すると云ふのは内閣に入つて大臣になれと云ふ意

味に解せられる。宇垣は
「君との取引は困る」
と答へた。それは久原が商人出身であり、久原との交渉は商取引の色を帯びると云ふ意味であつたであらう。久原は自分は田中首相の意を受けて來たものであり、首相自身も逢ひ度がつてゐる故に、首相にも逢つて呉れと云ふ話しであつた。其後、田中首相から宇垣に向つて會見の申込みがあつたが、宇垣の方に差支があつて會見せず、宇垣が特命檢閱の爲めに關西に出立する時、久原が停車場に驅け付けて、暫らく密談してゐたと云ふが、其內容は判らぬ。

床次の入閣も亦改造の筋書の一つだ。床次を入れると云ふよりは、新黨二十八名の代議士を政府與黨となす事に依つて、政府は衆議院の絕對多數を占める。以て來るべき議會をも押し切ることが來る。床次自身が來るよりは、寧ろ此二十八名が來る事を歡迎する。若し床次來らずんば、八九名の代議士を引き拔いて見せる。子に引かされる親心、床次も來るであらうと政府筋は觀測する。

政府と床次の間に立つてゐるのは矢張久原である。久原が直接に床次に會はずとも、久原と緣故の深い大谷尊由師が床次には會つてゐる。だから連絡は取れてゐると察せられる。

不戰條約問題で樞密院が八ヶ間敷かつたとき、久原は突如として伊東巳代治伯を訪ねた。そしてそれから樞密院とも諒解がついたと云ふ報道が傳はり出した。此事は今迄樞密院との交渉係であつた原法相などに當然不快の念を起さしめたであらう。

かうして四方に手を延ばす處を見ると、久原が田中內閣の大立物なるかの如く見える。久原自身は或は內閣の大黑柱を以て任じてゐるかもしれない。併し此所に喜劇も悲劇も含まれてゐる。田中首相が內閣改造を志ざす所以は以て內閣の壽命を延ばす目的である事は云ふ迄もない。陣容を新たにして次ぎの議會に臨むと云ふのが唯一の趣旨である。此趣旨に添ふ爲めには、田中內閣は久原を犧牲に供すべき必要に迫られてゐる。驚くべき事實は田中それ自身が久原遞相の自發的に辭職を申出る事を望んでゐる事である。併し田中は久原に向つて、辭職して呉れとは云ひ出し兼ねてゐる。

其所に田中の性格の弱さ、若しくは強さが存在する。腹の中にある事を思ひ切つて白狀する事が出來ぬと云へば、それは性格の弱さである。云ひ度い事も我慢して云はぬと云へば、それは性格の強さである。田中が何にも云はないが故に、久原は今でも行く〳〵は外務大臣にならんと望んでゐる。久原を外務大臣にする事は田中が今は少しも考へて居らぬ事である。彼れは

西園寺公から釘をさゝれて、久原を外務大臣にはせぬ事に決心してゐる。併し其事もまだ久原に話して居らぬ。あれほど水魚の交りを結んでゐるかの如く見える田中と久原の間に、これほどの隔りが存在するかと思へば、吾々は、政治家の生活が割合に秋風落莫たるものだと云ふ感に打たれる。

田中は總理大臣たる外に、外務大臣を兼ねてゐる所に眞實の趣味を有つてゐる。外國の大公使に應接して、世界的な政治家を氣取ることは彼れの虚榮心を滿足せしめる。だから、專任外相を置くと云ひながら、彼れ自身は進んで外相兼任を解く事を欲しない。それ處ではない。今回始めて設置される拓務大臣をも彼れは兼任する。それが、内閣改造が急速に運ばぬ故に、已むを得ず、一時兼任するかの如く世間には見せてあるが、田中は初めからそれを兼任する意志であつた。其證據として擧げられて居るのは、此兼任がまだ問題にならなかつた當時より、外務省の小村欣一侯を拓務次官に選定してあつた事である。田中首相が別に拓務大臣を置く積りならば、次官を誰れにするかは、其省の大臣に決定さすべきである。それを初めから自分で決定した事が、田中に兼任の下心があつたからだと云はれる。

かうして澤山の大臣を兼ね度がる心理狀態は普通人には、諒解出來ぬ事柄であるが、官僚には直ちに判る。一たび官界に身を投じた者は、其履歴に一つでも光輝ある肩書を加へんとする。大臣の肩書は燦然たる光を放つ。それが即ち官僚心理であると云はれる。

功名心もこゝまではまだ罪はない。併し田中首相の功名心を滿足せしめる爲めに、潰れるべき内閣が潰れず、革新さるべき政治が革新されないと云ふ場合には、それを只の功名心として一笑に付す事が出來ない。

田中内閣は潰れるべき理由を限りなく有つてゐる。若しそれが立憲的な内閣であつたならば、或は責任を知る内閣であつたならば、今迄に幾度も潰れてゐなければならぬ。其理由は餘りに明白であるが故に、茲にはそれを書く事を止めて、事實問題として果してそれが潰れるか否かを考へる。

内閣は不戰條約の問題に關して樞密院の諒解を得たと稱してゐる。併し其諒解が果して諒解になるか否かは疑問として殘る。内閣側の云ふ所に依れば、不戰條約中の「人民の名に於て」と云ふ文句は憲法上の疑義がある故に、それは日本國内には適用せぬ事にして、其意味を發表する。併し不戰條約其物は其儘に批准を奏請する。内地で發表する文句が、不戰條約の效力に差障りのないやうに其文句を考案中であると云ふのである。只一つしかない批准を、内地と外國とで、異つた作用をなさしめ

ると云ふが如き、さうした巧妙な使ひ分けが出來るものか、常識では到底不可能な事を、政府は可能と信ずる。少くともそれを可能だと云つて居る。

それが可能としても、茲に内閣に危險な政界裏面の巨頭が一人ある。それは平沼副議長でもなく、伊東伯金子子でもない。不戰條約を調印した内田康哉伯である。内田は此條約が憲法上に疑義のあるものとして、其中の或條項が留保せられる場合には責任を取る等と決心してゐる。先頃の事であるが、内田は外務省に行つて、憤慨した。今頃になつて此條約に留保的文句を付けるとは怪しからん。自分が調印に出掛ける前に自分は陛下に拜謁して、此條約は御覽に供してあるのだ。それを今更非難する樞密院も怪しからんが、それに屈從する政府も怪しからんと云ふのである。外務省の連中はそんな事があつたのなら、今少し早く云つて呉れゝばよいのに、今になつてはどうにもならぬとこぼしてゐる。

内田伯は原内閣の外務大臣であつた。其當時、衆議院では犬養毅氏に、内密の話しを議場に持ち出されて、ひどく窘められたのであるが、それ丈けに彼れには初心な正直さと、それから出る生一本な所がある。彼れは政府の命を受けて不戰條約を調印しに行つた。調印して歸つて來ると、其政府は只政權に噛り付いて居り度い爲めに、樞密院に對して平身低頭、御無理御尤と意久地なく折れて了ふ。同時に彼れ自身は憲法上疑義のある條約に調印したと云ふ履歴を付けられる。彼れの面目は踏み潰される。それ故に彼れは男らしく責任を取つて、辭職せんとする。調印者さへ辭職するときに、調印を命令した政府が安閑として居らるべき筈がない。茲に田中内閣が潰れゝば、内田は殊勳者として國民に感謝される。

かうした事情がある爲めに床次は入閣を決心しかねてゐる。田中内閣に入閣する。それが翌日倒れると云つたのでは彼れは恰も内閣の葬式を行ふ爲めに入閣したやうになつて、如何に好人物の彼れとしても餘りに感心した役廻りでないからである。

床次氏が如何に進退すべきかに付いては彼れ自身も迷つてゐると云はれるが、それは現在の政情の下には迷ふのが當然である。彼れの理想は天下を取る事である。民政黨に居れば濱口總裁が天下を取るのであつて自分が天下を取るのでない。それ故に彼れは民政黨を脱黨した。所ろで今政友會に入つた所で、彼れは田中の下に奉仕する外はない。濱口の下に奉仕するのと何の異る所ぞ。如何にも獨立の世帶を張り得ざるが故に、政友會に入つた如く見える。それを忍ぶのは彼れの苦しむ所である。尤も第三黨として今の世に善處するのは甚だ困難だ。ロイド・

ジョージの如き政治的天才を以てしても、自由黨を隆盛にならしめる事は困難だ。獨りで天下を取る事は絶對に不可能だ。それ故に床次としては政友、民政、何方かへ復歸するより外はないと、これは殆んど爭ふ餘地のない論理だと見える。

この議論は立憲政治が順調に行はれる國と時代に關する限り正しい。併し今日の日本に立憲政治が順調に行はれてゐると云ふ程の大膽な者は誰れもおるまい　政府は自分の政策を行はれないでも辭職せず、貴族院に不信任を議決されても辭職せず、そして辭職せざらんが爲めには樞密院をして極度に增長せしめる。立憲政治は變調を呈してゐる。これ爭ふべからざる事實だ。

立憲政治が變調を呈してゐるとき、如何なる變態內閣が出來ても、それを不思議とするに當らない。吾々は床次內閣の成立を希望しない。殊に今の元老西園寺公が健在であつて、內閣奏請の役を勤める間は、政權は憲政常道論に從つて移動するであらう。併し目前の利害得失はどうあつても、政治家の出所進退は國民の期待に添ふやうにするのが、結局其政治家を活かすものである。だから床次としても今日の國民の大部分から、毛蟲の如く厭がられてゐる田中內閣に入つて、一日でも其壽命を延ばす手傳をする如きは、益々其前途を暗くする事になる。

床次氏と並んで、田中內閣が入閣せしめんとしてゐるのは、前に云つた宇垣大將である。其周圍の人の云ふ所を綜合して見るに、宇垣は入閣しないであらう。彼れが入閣すれば、床次の場合と同じく、彼れの政治的將來がフイになる惧れがある。

宇垣は將來のある政治家として、各方面から嘱目されてゐる。政友會と民政黨とから引張り凧の形ちである。だが、彼れは今尚陸軍の現職にあるが故に、表面に立ちて政治的活動をしない　彼れに[redacted]進出をする場合には、彼れは軍服を脫いて、衆議院議員として選擧に出でるのが當然の順序である。又さうして徹底的にやるのが彼れの性質である。

現在の立場に居つては、彼れは田中內閣を倒す手助けはしない。それには、彼れと田中とが餘りに深い關係の下に置かれてゐる。田中が陸軍に居た時代の花々しき活動は大低宇垣の劃策に出たものである。その事は陸軍部內では誰れでも知つてゐる事柄である。此支柱が田中に如何なる效果があつたかは、陸軍に於ける田中の手腕の鮮やかさと、政治家としての田中の頓馬さとを比較すれば判る。田中もそれを知つてゐるかの如く、田中內閣成立の前夜、田中は午前二時に宇垣を陸軍大臣官邸に訪ねて、宇垣に陸相として殘つて與れと賴んだ。宇垣は陸軍大臣とは云へ、若槻內閣の閣僚であつた故に、彼れも亦內閣の責任

を分擔するのが本筋であると云つて、それを斷つた。

宇垣は實行力のある政治家だ。彼れが陸軍大臣であつたとき、四個師團の陸軍整理をやつた事がそれを證明する。日本の軍備は明治天皇に奏上して決定された所の、陸軍二十五師團、海軍五十萬噸が理想標準であつた。歷代の政治家が、之を金科玉條として、誰れもそれに手を觸れるものがなかつた。併し時勢は進み、陸軍は兵員の數を賴りにするよりは、兵器の精銳に注目する必要を見出した。宇垣は二十五個師團の傳統的目標も、時代の進步に屈從せねばならぬと斷定して、二十一個師團であつた陸軍を十七個師團に減少した。此大膽な行き方が陸軍部內の保守派を驚倒せしめた。

それよりも、陸軍部內を驚かした事は、彼れが陸軍の巨頭を一齊に豫備役に編入した事である。彼れは後進に途を開く爲めに、大將級の整理をする。それには手腕の有無、功績の有無を問題にしない。只年功の順で、上から順次に退いて貰ふと宣言した。其豫備役に編入さるべき豫告の中に田中義一大將の名があつた。田中が政友會總裁になる事を急いだのは、陸軍死官の斧が頭上に見えたからである。陸軍を罷められて後の政友會入りは面白くない。政友會入りを決定して後に、豫備役編入を此方から申込んだ方がよいと田中は此方針で行動したのである。

宇垣は田中に對する情誼を忘れない。だから時々會つて色々な事を注意する。蓋し田中をして終りを全ふせしめ度いのであらう。それだからと云つて、彼れの頭は、田中內閣の政治が邪道に陷りつゝある事を見逃すには餘りに聰明である。だからその內閣に入つて、自分の將來をフイにする事には躊躇するであらう。日本の暗き前途を考へるとき、彼れの働き場所は外にあるだらうと思はれる。

政界裏面の巨頭に、曾つて私が書いた小泉策太郎氏がある。議會の閉會後、彼れは屢々田中と往來した。一時は政友會復歸の噂もあつたが、今は復歸しないと田中に通告して、伊豆の鄕里に引込んでゐる。併し田中との私的交情は變らない。田中は祕書官にも聞かせ度くないと云ふ祕密の用事を、小泉には賴む。小泉に會へは、己れも淋しいから歸つて吳れと淚ぐんで話す。小泉も亦復歸の意志はあつた。政友會內閣が倒れた瞬間に復歸せんと思つてゐた。小泉は議會後には田中內閣は潰れるものと見てゐた。其時は田中の統制が破れて、政友會は蜂の巢をつゝいた如く亂れる。其場合に、政友會の中堅所ろを纏めて、政友會の陣容を立て直ほす必要がある。其所に彼れの働き場所があると思つたのであるが田中內閣は辭職せず、政友會の淸算の時期未だ來らず、小泉の復歸も中止になつたのである。

尤も小泉にしては、田中內閣が辭職せずとも、政友會の淸黨運動が成功すれば復歸したのであらう。彼れが政友會を出たの

は久原入閣に反對した結果である。久原が内閣に居るのでは彼れの復歸の面目が立たぬ、然るに田中は久原を罷めさす勇氣がない。田中の性格は凡てを未解決の儘に殘すと云ふ流儀である。だから小泉としては復黨せんと欲しても出來ない立場に居る。

田中が未解決の儘と云ふ方針は金の輸出解禁問題にも現はれてゐる。金解禁をなさんとするが如く、せざるが如く、少しく金解禁の匂をさした時、株の暴落を見て、政府は忽ち金解禁の意志なき事を發表した。

金解禁の問題は經濟問題として取扱ふには餘りに重大化して來た。經濟界が危急を告げるとき、政府が紙幣を增發せしめて、一時の危機を防ぐ。それが度重なれば、日本の紙幣が木の葉の如く下落する。米一升百萬圓と云ふ事にでもならばそれこそ重大な社會問題になる。日本は歐洲大陸國の經驗したやうな紙幣暴落の途を行くか否か、今は其運命の岐路に立つてゐる。

小泉は體驗的に、政治は經濟なりと信じてゐる。彼れは田中首相に對して金解禁に關して忠告した事がある。日本の財界は金解禁に脅えてゐる。恰も頭の上に大きな石を吊されてゐるやうな心持で居る。之を安心せしめる爲めには、此石を今一度山に上げて永久に金解禁をせぬと云ふ事にするより外はない。併しそんな事が實行出來るものでない。世界各國金解禁をしてゐるのに、日本許りが仲間外れになる事は不可能だ。だからどうせ落さねばならぬ石だ。寧ろ今落して、財界の脅威を取り去るべきだと。併し田中は此說を採用しない、未解決の儘が彼れの奧の手である。

金解禁では反對黨の民政黨も煮え切らぬ。金解禁の準備を行ふと云ふのが黨の方針である。所ろで此準備なるものが到底行はれるものでない。金解禁をして金融恐慌が起るものとすれば、徹底的な準備をしても金融恐慌が起る。畢竟するに金融恐慌を解禁の前にするか後にするかの差別のみだ。準備して金解禁をすると云ふのは、事實としては解禁延期說になる。民政黨は今迄政友會の解禁尙早論に反對して來たかの如く信ぜられた。それが今日尙準備後の解禁論を唱へるのは稍生溫るい感じを與へる。

併し民政黨にも解禁卽行論者も居る。例へば山本達雄男の如きは六ケ月位の豫告を與へて卽時斷行せよと云ふ說だ。此六ケ月間に整理さるべき銀行は整理される。變動すべき物價は變動する。そして金融恐慌は防ぎ得られる。それを防ぎ得ない財政當局者は餘程無能の政治家だ。其方法は金解禁に際しての金融引締めを全國一齊に行へば金融恐慌を起す惧れがある。それを間引き的に、飛び〳〵に地方宛に金融を引締めると、金融緊縮の程度が、適當に浸潤して、金融恐慌は起らずに濟む。此事は日露戰後に彼れが大藏大臣として實驗した處であると。

山本は幾度か濱口を説いて金解禁の斷行を民政黨の方針として聲明せしめんとした。併し濱口はそれを採用しない。田中の未解決病に對して濱口には愼重を尊び過ぎる病氣がある。

西園寺公が人に云つた事がある。自分は政治家として誇りとすべき何等の功績はないが、山本を政界に引張り出した事丈けは、自慢してもよいと。山本の手腕は財界に絶對的な信用を博してゐる。日本の財政が危機に際した場合には、引込み思案の山本も或は再び何處かに引張り出されるであらう。

金解禁の即行論をする人に、前首相の若槻禮次郎氏がある。彼れは云ふ。金解禁は畢竟するに度胸の問題だ。恐いと思へば無限に恐い。併し愈々解禁して、度胸が定まつて、これから奮發してやると決心すれば、存外何でもなく濟むかもしれぬ。今のやうに、人心を恐怖状態に置いては、經濟界は萎縮して、出るべき元氣をも出さない。寧ろ解禁を斷行して、早く經濟界を立て直した方がよいと。

併し引込み思案の點に於ては若槻も山本と異らない。彼れは、黨の幹部が組織されてゐる以上は、傍から口を出すべきものではないと遠慮してゐる。それは一應尤もな態度だと思はれるが、若槻ほど頭が聰明で、才氣縱横の政治家は現代の日本に稀れである。世人は彼れに勇氣がない事、押しが強くない事、金を作る事が下手な事を擧げて、大政治家の資格がないやうに云ふ。正直に告白すると、私は彼れが非難される此等の點で、彼れに共鳴してゐる。蠻勇を振つて、押しが強くて、是が非でも政權に噛り付く。其爲めには惡錢を集める事を恥ぢとせぬ。さうした事は神經の鋭敏な若槻には出來ぬ。併し立憲政治は人心の向背を鋭敏に神經に感じる事に依つて初めて行はれる。人心が去つてゐるを知らず、或は知つて知らぬ顔をする厚顔無恥の者は、立憲政治を托される資格はない。

若槻は金を作るのが下手だと云はれる。若槻自身も告白して云ふ。自分は頭を下げて、金を作りに行くのは、身を切られるよりも辛らいと、つくぐ〵厭だと云ふやうな顔をする。私はかうした政治家が現代の政界に容れられなければ、改革すべきは其政治家の方ではなくして、政界の方にあると直感する。

小泉、山本、若槻、各々其立場を異にしてゐるが金解禁を斷行すると云ふ意見に一致してゐる事が奇妙だ。そして彼等はかうして日本を破産の危險から救はんと願つてゐる。彼等は相互の間には往來してゐない。何れも表面に活躍しないで居る。

政界の表面に浮んでゐる政治家が水の泡より空虚であるとき、吾々は裏面の巨頭を思ふ。彼等は水面より隱れたる暗礁のやうなものだ。政府の船は暗礁に乘り上げて沈沒するかもしれない。併し暗礁が水面に浮き上る時、それは飛躍する時代の爲めに飛石の役を勤めるであらう。

省線電車を繞る

所得鬪爭の鳥瞰

猪間驥一

結論　之は東京だけの問題ではない……

一　省線電車の乘客と東京郊外の人口增加

十何年か昔の記憶である。當時のキング級の雜誌に、「懸賞ものは附け」の課題が出てゐた……「出來たことならしやうが無いものは？」と。

當月の應募解答に、「娘の腹の子」なんて云ふ樣な平凡なのに混つて一つの傑作があつた。曰く「東京驛！」

その傑作たる所以は東京驛のあのゴテゴテした不恰好な建築や不便極まる建て方を見れば、今以て依然失はれないこと確實だが、當時此の解答に、アッと云つた人々の感情の中には、出來たばかりの東京驛に對して「人氣少い三菱ヶ原の眞中にあんなダヾッ廣い停車場を拵へてどうするんだ」と云ふ嘲笑が多分に含まれてゐた事を否定出來ない。この一般市民の感情が右の解答を一層傑作たらしめたのだつた。

それから十數年たつた今日、その傑作たる所以の一半は無くなつて終つた。朝夕のラッシュ・アワーに呑吐される省線電車の乘降客の群を見る時、東京驛の手狹を喞つ意味で「出來たものだ仕方がない」と云ふ者はあらうとも、誰がまたダヾッ廣いと罵らう。それ程までに東京驛は發達した。それ程までに省線電車は發達した。驛の手狹を喞つものは、獨り東京驛はかりではない。

此の乘降客の混雜の程度を正確に測る爲めに、東京鐵道局では、去る五月二十二日、省線電車乘客の潮流調査を行つた。結果として現れた乘客總數は、百十八萬五千。この前大正十二年の六月七日に調査した時は總數四十六萬であつたから、震災を

挾んで正に二倍半の激增だ。而も此の百十八萬五千の中で定期券乘客は六十萬二千、普通切符の五十萬九千よりも遙かに多いのは、省電の利用者は通勤者通學者が絕對多數を占めた事を物語つて居り、また次に揭げる最も主要な三つの驛の朝夕のラッシユ・アワーに於ける降車客統計は、通勤者が如何に郊外に多く居住して、朝は都心へ、夕は郊外へと、時計の振子のやうな生活をしてるかを明示するものがある。

	午前七時—十時 降車客數	午後四時—七時 降車客數
東京驛	二六、六六九	八、〇一四
新宿	一三、三五〇	二二、五七一
池袋	四、五六六	一一、九五四

省線電車利用者の斯うした統計を、さうあるべき筈とばかり裏附けるものは、東京郊外の人口增加の數字である。日本の人口が年々猛烈な勢で殖えて行く事は、誰知らぬ者無き事實であるが、一體國内のどの部分に最も增加が激しいかと云へば、全く此の東京隣接の郡部なのだ。大正九年と十四年と二回の國勢調査の間に、日本の人口は三百七十七萬四千を增した。其の内七十五萬五千、卽ち總數の約五分の一は、實に全國面積の千二百分の一に足りないところの、僅か二十方里を占めるに過ぎないところの、而して省線電車に貫通されてゐるところの荏原、豐多摩、北豐島の三郡で增加したのである。三郡の人口は大正十四年に百六十六萬七千、五年間に八割二分からの激增だ。全國の人口增加率六分七厘に較べて如何にその甚しきかを見よ。

同じ期間に東京市は十七萬七千からの人口減少を見た。これは全く震災の影響で、その大部分が上記の郊外人口增加に貢獻してる事は疑ひない。閑靜と安い家賃を求めて東京から流れ出る住民、その後を狙つて移り行く小商人、疲弊した農村に見切りをつけて、東京へでも行つたらと鄕關を出て、都門に入らうとする前一歩、こゝに草鞋の紐を解く人々によつて、前回の國勢調査から四年を經た今日、郊外地の人口は更に一層の增加を來してゐる。

斯くてこゝに現出したのが、北は赤羽、南は六鄕、東は市川、西は荻窪、廣袤二十方里に亙る世界に稀なダヾッ廣い平べッたい大都會である。ダヾッ廣い大東京の發生が、省線電車（及び其他雨後の筍の樣に續出した郊外電車）の發達を持ち來するのだが、同時に省線電車の便利、殊に定期券の低運賃が、郊外人口の增加を促進し、東京を愈よダヾッ廣くさせつゝあると云ふ逆の關係も亦認めざるを得ないのである。

二　郊外の人口氾濫に北叟笑む人々

東京の人口は省線電車郊外電車の停車場を堤防の決潰點こして、斯く郊外に氾濫した。氾濫によつて將來されたものは何？ ……藁葺屋根の隣りの文化住宅、坪六十圓で建つた貸家。井戸掘屋。勝手道具一式屋。『貸地御案内』……自動車が汚穢車に鼻を押へられてクラクソンばかりやけに鳴らしてる。馬の小便が果物屋の店先に流れ込んだ……曲り屈つた道路。ゴム靴屋。眞ッ暗な生垣の横道……一五八九番地の隣は七六番地だ……ラヂオ屋。『屋内電氣工事一切請負』。『生み立て玉子アリ』。……昭四・六の電柱、電柱。瓦斯埋管跡の砂利、砂利。『ゴミステベカラズ』……バー。カフエー。權兵衛は太い指に實印を刻つた金指輪をはめた。息子の田子作は表通のカフエ・アマリヽスのウエートレスに熱くなつてるけな。『……内閣が變る時にや、何れ三業地の指定があるんでがすがナ、この邊の土地もナ、運動次第でナ……』……說敎强盗。講談强盗。『猛犬あり、御注意』……村の町昇格祝。二部敎授。町村債の累增。家屋税付加税の增徵……等々々等々々。自給自足經濟と金融資本主義のジャヅ。機械文明と我國古來の淳風美俗のカクテール……

けれども郊外の人口增加が齎した最も大きな永續的の變化と云ふならば、まづ地價の騰貴に指を屈せねばなるまい。十年前にまだ十何圓かで買へた土地が、今日では百圓を越すと云ふ所は、一寸郊外を回つて見ればザラである。東京驛へ一時間內外で來られる土地で、借地料月に坪十三錢以下のところが若しあつたら、御目にかゝりたい。その十三錢十五錢とする土地が、また四五年前迄は五錢六錢で借りられた有樣だつたのだ。

土着のお百姓さん達は、風を望んで田畑を埋め藪を切開いて宅地を拵へた。小金の餘裕のある者はドシドシとそこに貸家を建てた。その結果として現れた東京及び省線貫通の三郡(荏原、豐多摩、北豐島)の所得統計の興味ある對照を次に示さう。

	所得總額				内貸家貸宅地所得			
	東京市		三郡		東京市		三郡	
	實額	指數	實額	指數	實額	指數	實額	指數
大正十年	三一六、〇六八千圓	一〇〇%	七〇、五九〇千圓	一〇〇%	三七、二二九千圓	一〇〇%	七、九八八千圓	一〇〇%
大正十四年	三一五、〇八四千圓	九九%	一六一、一六千圓	二二八%	四七、四〇二千圓	一二七%	二九、一一九千圓	三六五%
昭和二年	二九八、九六〇千圓	九四%	一五三、一七千圓	二一五%	五一、六八二千圓	一三八%	三五、四九七千圓	四四四%

これは所得税を課せられる基礎所得の統計だから、脫税者も多い事だし、免税點以下の所得者の所得が判らないし、またその免税點も昭和元年から引き上げられてゐて、完全な比較は出來

ない譯だが、本稿の目的のためには今暫くそれらの點を無視して考へても、結論は一向に變らない。即ち此の期間に、

一、課税所得の總額は東京市では些か減少してゐるが、三郡では二倍半近くに增してゐる。

二、其の所得の内で家賃地代の收入はと云ふと、

a. 東京市でも、總所得の減少に拘らず增加してゐる。但しその程度は四割增に足りない見當だ。

b. 然るに隣接三郡では、增しも增したり、四倍半近くに達して、所得總額の增加率を遙かに拔いてゐる。

省線電車の社會的に爲した功績は實に莫大なものである。それは日毎の通學に顏見合す子女の間に、幾千組かの戀愛を成就さしてやつた(その幾組かを私自身も知つてゐる)。それはまた幾百人かの人生の倦怠者敗殘者を、永遠の休息に送り屆ける道を開いてもやつた。度々の衝突と停電と脫線とで新聞種を供給した。功績は甚だ大なるものがあるが、それらすべてを立超えての功績と云ふならば、省線が多數の郊外土地家屋成金を發生せしめた事を擧げなければならないのである。

三　所得削減の不安に戰く人々

郊外に溢れた人口の中には、赤瓦の家根の下にピアノを飾つて、子供にパヽさんマヽさんと呼ばすwell-to-doの人々も無論多い。けれども大多數がnot-well-to-do 小所得者であることは云ふ迄も無い。大正十四年に荏原豐多摩北豐島三郡の第三種所得税納税者は八萬千五百人、この中には親の家にゐる納税者もあるのだが假に一戸一人の割合として勘定しても、三郡戸數三十七萬三千戸の二割二分弱に過ぎない。七割八分強の家庭は年收八百圓以下の生活者である(脫税免税等の關係で必ずしも正確ではないが)。此の比例は今日でも改善されてゐるとは思へない。

斯う云ふ人々がその所得の重要部分を上納して、前章に述べた樣な地主家主の富を爲さしめた。而も人口の流入は止る所を知らない勢である。空地は益々減少し、地代は益々値上されて之に伴ふ紛擾は郊外地を特色付ける社會相となつてゐる。尤も家賃は近頃多少低落模樣だ。空家貸家の增加は誰が目にも著しい。併し此空家の增加による家賃の低落を、郊外住民の生活安定への傾向と判ずるならば些か見當外れであらう。一軒の家を持つて世帶を張るに耐えない人々の增加、更に一層の低家賃を求めて新開地や舊開地のスラムに落ち行く人々の淚の痕を、斜に貼られた貸家札に見るべきである。

併し斯くして住居を定めた郊外の人々にとつて、そこは安ん

じて赴任出来る地であらうか。否々、そこにはいつ來る[illegible]ない電車賃の値上と云ふ恐ろしいものがある。總計[illegible]千、省電乘客の六%を占め無賃乘車を許される鐵道職員並に其の家族にあらざる限り（斷つて置くが私は鐵道關係者の無賃乘車をそれ程非難はしない。尤も高等官などは人並みに遠慮する方がいゝと思ふが、一般の從業員にとつてはパスは彼等の高からざる賃銀の中に勘定さるべき給與なのだ。そんなら鐵道從業員以外の勞務者の低賃銀はどうすると云ふかも知れないが、それは鐵道職員並に上げる事を考へた方がいゝではないか？）賃率引上は彼等を壓す夢魔である。その夢魔が昨年は實際に飛び出したのだから遣り切れない。昨年九月九日東京朝日の鐵箒欄に現れた投書に次の樣なのがあつた。

◇一度ならず問題を引起しては引込めた省線定期値上案が到頭眞物になつた。殊に三等一ヶ年定期を六ヶ月の倍とする案は絶對に不贊成である。……

◇不便を忍んで郊外に住ふ者に一人として電車賃を考へてゐない者は無い。殊になるべく經濟にするため、割引率の多い一年定期券を利用する者に取り、此度の値上案は經濟上正に大問題である。一定の收入しか無い無産階級乃至中產階級は家賃の値上にも等しい壓迫の爲めに、再び不健康な都會地に舞ひ戻るか、或は元々乏しい衣食の費を節してこれに充て、折角移住して來た目的の健康を犧牲にせねばならないのだ。……

◇二等定期の値上結構である。たゞ四等があつたらデッキでも屋根の上でも辛抱してゐたい連中、これより下のない生活をしてゐる者を行かさないでもらひたい（郊外生者）

まことに此の投書の云ふ通りで、少しの間違ひも無い。けれども郊外生に對して本當にお氣の毒なことには、朝日の鐵箒欄は省議を決した鐵道當局を拘束する力が無い事である！　さうして之からも度々斯う云ふ事は起ると觀念しないならば、その人は郊外に住む資格は無いのだ。

だがこゝにもう一つ新聞記事を引用しよう。之を見ると省線電車賃を引上げられて脅威を感ずるのは通勤者許りではない事が判る。

定期券値上に反對の陳情

湘南の各町長連が けふ小川鐵相訪問

今回の省線定期券値上案は……小川鐵相の胸三寸で實施されるところまで運んだが何しろこの不景氣に値上するのは社會的に影響が大きく湘南方面からの通勤者は多大の痛擊を受けその上同地方の繁榮に關すると云ふので値上反對運動の火の手をあげてゐたが四日午前鎌倉町長平塚町長茅ヶ崎町長を初め十數名は鐵道省幹部を訪ひ値上反對の陳情をし小川鐵相不在のため、鳥居秘書官に面會大臣に傳達方を依賴したが更に猛烈な運動に着手すると意氣込んでゐる。（昨年九月四日東京日日夕刊）

地主だつて、家主だつて、酒屋肴屋八百屋だつてあんまり安心してはゐられないのだ。

省電の値上を心配してなければならないのは右の人々だが、その一方に省電が今の賃率でゐるのに脅威を感じてる人々がある。その最たるものは東京市の電氣局だ。東京市電は大正十三年乘客數、四億九千六百三十萬、乘車賃收入三千百七十萬圓を絕頂として、客數も收入も年々グングンと減少し、昨昭和三年は四億四千五百萬人二千九百十萬圓と云ふ情けない狀態に立至つた。いつ迄もこんな勢で減少することは無いかも知れないが、兎に角市電にとつては大問題である。減少の主な原因には乘合自動車の發達と云ふ事もあるが、何と云つても省電が客を引浚つて行つた事を第一に考へねばならぬ。減少が大正十四年に殊に著しかつたなどは、省線の所謂「の」の字運轉の完成に歸せしむべきであらう。省線電車の遠距離乘客に對しては市電としてもう如何とも爲し得ないが、市內を十錢や五錢、定期ではもつと低率で運轉されるのは、市電の最も苦痛とする所である。

所で問題はこゝでまだお終ひにならない。市電の乘車賃收入減は、當局者をして電車賃値上に眞劍の考慮を拂はしめつゝある事を讀者は折々新聞で瞥見されるであらう。脅威を感ずる者は果して誰ぞやだ。だが、幸か不幸か市電の値上は省電と違つて、當局の一存では行かない。市會と云ふ人氣を氣にする面倒な機關がある。當局が若し此の難關の抵抗を打ち克ち難く感ずるならば、經營難切拔の鋒先は何處に向けられる？……こゝ迄云へば讀者はもう御察しのことであらう……市電總罷業の一回や二回、無いと云ふ事を誰が保證し得ようか？

四　問題は、何處へ往く？

以上に述べ來つたのは、省線電車に象徵された交通機關の發達に伴ふ大東京の膨脹過程に橫はる混亂の相である。これを見て、資本主義社會の無政府狀態が、こゝにも現象形態を採つて現れたのだ、と云ふならそれ迄の話だ。拋つて置いて混亂を愈々收拾出來なくさせろ、と云ふなら益々以てそれ迄の話だ。けれども實際の所は、人がさう／＼これをその儘に拋つて置くものではない。

郊外の土着の地主家主に對する新入住民の反擊は、現に私がこの稿を書いてゐる最中、白熱的に戰はれつゝある府下七十ケ町村の町村會議員選擧戰に濃厚に現れ來つた。一體前に揭げた統計の樣に地主家主の收入が增したからと云つて、若し彼等がその町村の發達に對し十分な負擔をするなら實は問題は無い

のだ。問題は殺到する新入人口の増加により多大の利得を得ながら、町村會に占める在來の勢力を利用して、負擔を新入住民に課するところに起る。五月二十九日三十日の選擧を前にして、至る所の候補者演説會で聞かれるのは、町村費負擔均衡の叫びである。

どうしたら負擔の正しい分配が行はれるか？　之は難しい問題ではあるが、萬人の見る所、土地の値上げに對してもつと負擔を課していゝと云ふのは動かない處だ。とすれば、地租附加税の増徴は先づ第一歩だ。現に東京近傍では地租附加税の額は家屋税附加税や所得税營業税附加税に比し餘りに少い。土地増加税の新設も一案だ。大阪市は毎年の豫算に之を計上して、政府の認可の下るのを待つてゐる。けれども附加税附加税ばかりでは、負擔均衡を圖る妙用も出來ず、いつ迄立つても市町村財政の一本立ちは出來ない。かと云つて、土地増價税の様な新説の創設は困難でもあり、實行にも難點がある。そこで思ひ起さざるを得ないのは、地租の委譲である。

前議會でとうとう握潰された政友會内閣の地租委譲案は、いろんな缺點を含んでゐた事は確かである。殊に大都市自治制の見地から見れば、府縣知事が課税標準たる賃貸價格を決定するのは面白くない。之はどうしても都制或は特別市制の制定を急ぎ、大東京の意義を具體にする市町村を一團の自治體に統一して、之に課税標準の全部を委託し、特に[illegible]に際し、賃貸價格查定を更改し、課税を行つて郊外地發展に關し、都市自身が地主と喜びを共にする様にすべきであつた。

けれども、こゝ迄徹底しないにしても、政友會内閣案でも、兎も角一歩の進歩ではあつたのだ。内閣の不人氣がたゝつて不成立に終り、次期議會に提出されるかどうかも判らぬと云ふのは遺憾至極である。而もその行つ詰つた理由に建艦費財源の問題があつたのは諦め切れぬ。日本には軍備縮少を大前提として内政改革を叫ぶ政治家は無いのだらうか？

次に省線電車の賃率の問題だ。シドニイ・ウエッブは地方自治體を消費の強制的團體であると云ふが、その然る所以は都市の交通機關の上に最も確かに現れてゐる。都市の住民は生活維持の上から、そこに設けられた交通機關の利用を否應無しに強制されるのだ。從つてその利用賃率は住民の最も切實な問題となるのだが、之が決定に當つて、省線電車の如く利用者の意思が反映される途が少しも無いのは、まことにおかしな事である。このおかしさは貨物の運賃率に就ては、荷主側の意見を參酌する途が、微かながら既に設けられてあると云ふ事實を知る時、一層おかしさを加へるのである。鐵道は數年前に運賃

の問題が喧しくなつてから、全國三十七の運輸事務所所管區毎に運輸委員會と云ふ諸問機關を設け、商業會議所議員府縣商工課長、主なる運送店主と云ふ様な人達を委員にして貨物の運賃規定に關して意嚮を徴するやうにした、貨物に就て斯く手厚い(?)途を講じながら、人間の輸送は鐵道省幹部の專斷でいゝと云ふ理窟は果して成り立つだらうか?

省線電車の電車賃の高低が單り省電乘客ばかりの問題でないことは、前章で述べた通りだ。大東京を縱横に縫ふ路面電車、乘合自動車、地下鐵道、高架鐵道、郊外電車は、經營者相互の間とその利用者の間に極めて微妙な關係を持しつゝ走り廻つてゐる。たゞに賃率の問題のみに限らない。系統の善惡設備の完不完、運轉の確否、經營の巧拙。それらは互に影響を及ぼさし合ふものであり、消費者利用者かち云へば、是非統一連絡があつて吳れなくては困るものである。大東京の市民に對して責任を有し、全交通機關を統制するところのコムミチー、さうしたものゝ設立が考へらるべきではないか?

× × ×

私は本稿最初の三章に於て、省線電車に依つて捲き起された東京隣接三郡の所得鬪爭のすがたを、ありの儘に述べて來て、此の一章で結論に及んだ次第である。與へられた紙數が既に盡きたから筆をこゝに擱くが、併し若しも論歩を更に一轉することが許されるならば、此の結論を今一應抽象して一般化した形に於て問題とすることが出來るであらう。——それは、發達し行く大都市の土地政策と獨立財源に關する問題である。大都市に於ける電燈電力瓦斯交通機關等公益企業の統制に關する問題である。

斯く問題を一般化して定立して來るならば、それはたゞに一省線電車のみの問題ではない。東京市隣接三郡のみの問題ではない。それは實に、急激に勃興し來れる我が大都市のすべてが、いろ〳〵な形でもつて當面しつゝあり、解決を迫られつゝあるところの大問題なのである。

殺人犯人の保釋と白色恐怖

片山哲

□

山本宣治君殺人犯黒田保久二は豫審終結決定と同時に突如保釋出獄を許された。その報道は世人を可なり驚かした。殺人犯人の保釋は豫審終結はおろか、第一審の事實調が終つた時でも滅多に許されるものでない。それればかりではなく、黒田に對する食事衣服の差入物が毎日山を爲す程であり、且つ辯護をしてやらうと申込む辯護士の數又百名以上に及んだと謂ふ話である。犯行當時弊衣破帽の黒田は入獄後、見違へるばかり立派な姿になり、豫審廷に出る時は大抵差入れて貰つた紋付羽織袴のりゆうとした國士然たる身なりであつたさうだ。

差入物の山積や、辯護の申込百名以上はまあ別としても、問題は陪審法制定の今日、被告犯人が陪審を拒絶するや否や判明しない以前に漫然と保釋を許可したといふ法律問題と、極左無産黨議員の殺人犯に對し特別待遇をなすのではないかと謂ふ二點にあることと勿論である。

我々は故なき拘留に對しては大いに反對する。刑事訴訟法に於ても「拘留は二ヶ月を期間とす」と規定されてゐる、處がこの原則が常に破られがちである。所謂繼續の必要ある場合には之を更新することが出來るといふ例外規定が原則の樣に常に行はれてゐる。殺人犯の如き重罪犯人に對しても、その犯人の人格性行の如何に依つて保釋を許すといふ大方針を建てるならば、今後もこの黒田の例に倣ひドシドシ許可したがよからう。處が實際は非常に相違してゐる、市井茶飯事に於ける輕罪小事件より、評判息子の酒亂親爺傷害事件の如きに到るまで、保釋は極めて嚴重に取扱はれ、大抵は不許可の方針に極まつてゐる。區裁判所の事件などに到つては、第一審の事實の取調べが終つた後、判決言渡しと同時に保釋が許される例になつてゐる。處が黒田は、殺人犯人たる黒田保久二のみは何故に豫審決定と同時に保釋出獄を許されたのであらうか。我々はその不公平に驚く、しかしそこに原因があり、又我々の研究題目が存在するわけである。

□

歴史の示す如く各國はその國に勃興し來つた革命思想の暴威に對し細心の注意と異常の焦慮を拂ひ來つたこと勿論である。或は法律の上より、或は實際上の取扱の點から、革命思想赤化運動に對し極度に神經を働かして、微細なる動きをも洩さじと見詰めてをつたこと今更ら多言を要しない。法規は具體的事實を豫想し之を事前に鎭壓せんとしてをるのであるが、之に對し行政司法の官憲はその既に起つた事件に對し色々と手心を加へ、且つ積極的に極めて偏破なる處置をとつた歷史的多々の事實に遭遇するのである。そこで我々は第一段として社會運動をば反動的に取締らんとした各法規の二三を一應檢討する必要がある。

I　カリフオルニア州法律（一九一九年四月發布）

第一條　本法に使用する「クリミナル・サンジカリズム」なる語は産業的所有權、又は産業統制に關する變革、或は政治的變革を成就するの手段として犯罪サボタージ、或は違法的暴行又は違法的脅迫手段を鼓吹、敎示し或は援助煽動する指合を爲す等の統轄運動をいふ。

第二條　左の一に該當する者は重罪犯として一年以上十四年以下の禁錮に處す。

(1)　産業的所有權等産業政治に關する變革を完成するの手段として犯罪的革命主義或は犯罪怠業暴行又は脅迫手段に出づるべき旨をそれぞれ鼓吹敎唆援助煽動したるもの。

(2)　前項の意思をもつて實行に着手遂行せしめ、又は之を勸誘するために肉筆、印刷に依り、それぞれ小册子、書類、貼札等を編輯又は出版、頒布したるもの。

(3)　第一項の目的を以て結社を組織し又は之に加盟し會員となりたるもの。

II　ケンタッキー州一九二〇年三月の法律によれば、犯罪的産業革命主義の宣傳を爲し刊行物を頒布し、結社を組織したる者等に對しては二十一ケ年以内の禁錮に處する旨の規定がある。

III　ニューヨーク州、一九〇九年の法律

これは無政府主義者の言論を禁止するための法律であつて、それによれば、言論文書を以て暴力に依り政府を顚覆するの必要なることを鼓吹し敎唆煽動したる者、又は無政府主義の適當なることを指示するの目的を以て、不法行爲を煽動したる者、ともに重罪と認め十年以下の懲役又は五千弗以下の罰金、又は兩刑を併合せられてゐる。

IV　米國に於ける無政府主義者取締法

これは一九一九年十月の法律であつて、米國上院司法委員會は無政府主義者其他總ての政府顚覆の計畫を援助する者の行爲を更に嚴密に取締るために、總ての危險なる宣傳及び赤旗の公揭等を禁止するの法律である。この法律の刑罰は大體二十年以下の禁錮又は二萬弗以下の罰金に處せられる規定となつてゐる。

V　其他内亂犯罪に關する佛、伊、墺等の刑罰法規はそれぞれ可なり詳細なる規定をおいてゐる。我國に於ても問題となつてゐるかの治安維持法がこれに當るものであつて、特に外國法と違つて目立つて注意せられる點は、何等かの不法違法手段が無くとも、たゞ治安維持法

に記載してあるが如き目的を以て結社を組織し又は結社を組織するために協議準備を爲したこと等が、それ〲處刑せられると謂ふ點である。この點に關しては我々は既に諸ゆる機會にその不當なことを論及してゐるが故にこゝでは省略するが、何れにしても各國はそれ〲過激なる社會運動に對しては、色々なる方法をもつて彈壓暴壓し、法規制定に依つて豫防の城塞を築いてをつたことは明白である。

□

法規の制定如何に係らず、反動的白色テロが一切の革命運動者に向つて、その暴壓を集中傾倒したといふことはこれ又蔽ふべからざる事實である。もしそれ白色テロを一切の革命主義者に對する支配階級の彈壓なりと總稱するならば、ロシアに於ける一八二五年時代に於けるデカブリストに對する暴壓にまで遡る必要があるであらう。十八世紀末葉ロシアもカタリナ女帝即位の當時に於ては、西歐諸國の如く立憲政治の自由思想が漸次研究せられ、フランス亡命客などが緣となつて專制暴壓國も、將に共和國轉換の疾風に捲き込まれんとする一飛沫が見えんとしたけれども、事前にデカブリスト一派は首領以下悉く逮捕せられ死刑、流刑等、總てが根こそぎの極慘刑に處せられた。アレキサンダー一世、ニコラス一世の時代に於ても、無政府主義的革命運動が學生又は勞働者の群の中へ侵入したけれども一八五[illegible]年し[illegible]年時代に於けるロシア當局の彈壓振りは物凄いものであつた。ニコラス一世時代の文相ウナラフはフランス革命の餘波を受けて西歐諸國より流れ來る自由思想伸進のために、學生に對し盛んに國家主義反動教育を鼓吹し、言論出版の自由を極度に壓迫した。ツルゲネーフは極度同志を集め西歐の時事を論じたと謂ふ廉に依り屢々逮捕處刑せられ、ドストエフスキー又同樣シベリア流刑に處せられた。

逆流として興る革命思想も一時露土戰爭に依つて、愛國的、パンスラヴ民族的運動へと方向轉換を餘儀なくせられた。しかしその世界的思潮の動きは遠慮なくロシア專制國にも侵入し來つた故に、政府の彈壓は愈々峻烈に其度を加へ來り、言論出版の自由は悉く封鎖せられた。この暴壓に對して「人民の意思」黨なる結社が現はれ白色恐怖に對し政治上の恐怖主義を戰術としたものであつた。この時代にアレキサンダー二世の冬宮に於ける事件も勃發したのである。アレキサンダー三世の時代は正に暴壓の頂上で反動の巨頭ドミトリ・トルストイを內相に任命し、荒れ狂ふ暴風の如き彈壓を開始して「人民の意思黨」も、「黑分黨」をも悉く蹴散らし、各大學の自治制を剝奪し、學生の諸ゆる結社を悉く禁止して了つた。もし大學生にしてこの命令に反抗するならば直ちに學生たる地位を奪ひ、之を一兵卒に貶した。法科文科の科目は悉く國家主義中心の學問に變更せられ、勞働階級の子弟は中學校以上に進むことを禁じられた。當時政治構成の中心は、內相、法相、宗敎監の三頭政治に依る專制組織におかれて、之を批判するもの、抗議するもの、反逆するもの悉く投獄せられ死刑又は流刑に處せられた。政治犯に對する審判の手續は極めて專制的であつた、殆んど審問の手續を爲さず辯解の機會を與へずして、それ〲處刑せられた。當時の記錄

歴史の示す如く各國はその國に勃興し來つた革命思想の暴擧に對し細心の注意と異常の焦慮を拂ひ來つたこと勿論である。或は法律の上より、或は實際上の取扱の點から、革命思想赤化運動に對し極度に神經を働かして、微細なる動きをも洩さじと見詰めてをつたこと今更ら多言を要しない。法規は具體的事實を豫想し之を事前に鎭壓せんとしてをるのであるが、之に對し行政司法の官憲はその既に起つた事件に對し色々と手心を加へ、且つ積極的に極めて偏頗なる處置をとつた歷史的多々の事實に遭遇するのである。そこで我々は第一段として社會運動をば反動的に取締らんとした各法規の二三を一應檢討する必要がある。

I　カリフオルニア州法律(一九一九年四月發布)

第一條　本法に使用する「クリミナル・サンジカリズム」なる語は産業的所有權、又は産業統制に關する變革、或は政治的變革を成就するの手段として犯罪サボタージ、或は違法的暴行又は違法的脅迫手段を鼓吹、教示し或は援助煽動する指令を爲す等の統轄運動をいふ。

第二條　左の一に該當する者は重罪犯として一年以上十四年以下の禁錮に處す。

(1)　産業的所有權等産業政治に關する變革を完成するの手段として犯罪的革命主義或は犯罪怠業暴行又は脅迫手段に出づるべき旨をそれぞれ鼓吹教唆援助煽動したるもの。

(2)　前項の意思をもつて實行に着手遂行せしめ、又は之を勸誘するために肉筆、印刷に依り、それぞれ小冊子、書類、貼札等を編輯又は出版、頒布したるもの。

(3)　第一項の目的を以て結社を組織し又は之に加盟し會員となりたるもの。

II　ケンタツキー州一九二〇年三月の法律によれば、犯罪的産業革命主義の宣傳を爲し刊行物を頒布し、結社を組織したる者等に對しては二十一ヶ年以内の禁錮に處する旨の規定がある。

III　ニユーヨーク州、一九〇九年の法律

これは無政府主義者の言論を禁止するための法律であつて、それによれば、言論文書を以て暴力に依り政府を顚覆するの必要なることを鼓吹し教唆煽動したる者、又は無政府主義の適當なることを指示するの目的を以て、不法行爲を煽動したる者、ともに重罪と認め十年以下の懲役又は五千弗以下の罰金、又は兩刑を併合せられてゐる。

IV　米國に於ける無政府主義者取締法

これは一九一九年十月の法律であつて、米國上院司法委員會は無政府主義者其他總ての政府顚覆の計畫を援助する者の行爲を更に厳密に取締るために、總ての危險なる宣傳及び赤旗の公揭等を禁止するの法律である。この法律の刑罰は大體二十年以下の禁錮又は二萬弗以下の罰金に處せられる規定となつてゐる。

V　其他内亂犯罪に關する佛、伊、墺等の刑罰法規はそれぞれ可なり詳細なる規定をおいてゐる。我國に於ても問題となつてゐるかの治安維持法がこれに當るものであつて、特に外國法と違つて目立つて注意せられる點は、何等かの不法違法手段が無くとも、たゞ治安維持法

に記載してあるが如き目的を以て結社を組織し又は結社を組織するために協議準備を爲したこと等が、それ〳〵處刑せられると云ふ點である。この點に關しては我々は既に諸ゆる機會にその不當なことを論及してゐるが故にこゝでは省略するが、何れにしても各國はそれ〳〵過激なる社會運動に對しては、色々なる方法をもつて彈壓暴壓し、法規制定に依つて豫防の城寨を築いてをつたことは明白である。

□

法規の制定如何に係らず、反動的白色テロが一切の革命運動者に向つて、その暴壓を集中傾倒したといふことはこれ又蔽ふべからざる事實である。もしそれ白色テロを一切の革命主義者に對する支配階級の彈壓なりと總稱するならば、ロシアに於ける一八二五年時代に於けるデカブリストに對する暴壓にまで遡る必要があるであらう。十八世紀末葉ロシアもカタリナ女帝即位の當時に於ては、西歐諸國の如く立憲政治の自由思想が漸次研究せられ、フランス亡命客などが緣となつて專制暴壓國も、將に共和國轉換の疾風に捲き込まれんとする一飛沫が見えんとしたけれども、事前にデカブリスト一派は首領以下悉く逮捕せられ死刑、流刑等、總てが根こそぎの極慘刑に處せられた。アレキサンダー一世、ニコラス一世の時代に於ても、無政府主義的革命運動が學生又は勞働者の群の中へ侵入したけれども一八五〇年乃至六〇年時代に於けるロシア當局の彈壓振りは物凄いものであつた。ニコラス一世時代の文相ウナラフはフランス革命の餘波を受けて西歐諸國より流れ來る自由思想の浸潤のために、學生に對し盛んに國家主義的教育を鼓吹し、言論出版の自由を極度に壓迫した。ツルゲネーフは往々同志を集め西歐の時事を論じたと謂ふ廉に依り屢々逮捕處刑せられ、ドストエフスキー又同樣シベリア流刑に處せられた。

澎湃として興る革命思想も一時露土戰爭に依つて、愛國的、パンスラヴ民族的運動へと方向轉換を餘儀なくせられた。しかしその世界的思潮の動きは遠慮なくロシア專制國にも侵入し來つた故に、政府の彈壓は愈々峻烈に其度を加へ來り、言論出版の自由は悉く封鎖せられた。この暴壓に對して「人民の意思」黨なる結社が現はれ白色恐怖に對し政治上の恐怖主義を戰術としたものであつた。この時代にアレキサンダー二世の冬宮に於ける事件も勃發したのである。アレキサンダー三世の時代は正に暴壓の頂上で反動の巨頭ドミトリ・トルストイを內相に任命し、荒れ狂ふ暴風の如き彈壓を開始して「人民の意思黨」も、「黑分黨」なるも悉く蹴散らし、各大學の自治制を剝奪し、學生の諸ゆる結社を悉く禁止して了つた。もし大學生にしてこの命令に反抗するならば直ちに學生たる地位を奪ひ、之を一兵卒に貶した。法科文科の科目は悉く國家主義中心の學問に變更せられ、勞働階級の子弟は中學校以上に進むことを禁じられた。當時政治構成の中心は、內相、法相、宗敎監の三頭政治に依る專制組織におかれて、之を批判するもの、抗議するもの、反逆するもの悉く投獄せられ死刑又は流刑に處せられた。政治犯に對する審判の手續は極めて專擅的であつた、殆んど審問の手續を爲さず辯解の機會を與へずして、それ〳〵處刑せられた。當時の記錄

によれば、突如として行衛不明になつた青年學生の數が夥しく、その行衛を探索せんとする兩親・親戚、愛人等に對しても何等說明を與へず、不得要領に之を追ひ返したといふことである。又彼等學生の行爲を見るに、日刊新聞をもつてをつたとか、宣言文を撒布せんとしたとか、斯樣なことだけで或は死刑に或は終身刑に、流刑に處せられたのであつた。ニコラス二世の時代になつてから、尙この學生騷擾事件は猛烈になつてきた、一八八九年一萬三千人の學生が大ストライキを起したので政府は悉くの學生を强制的に兵卒となし、之に加擔した敎授を罷免した事件があり、一九〇五年の一月には、數萬の勞働者群が、從順謙讓の美德を發揮しつゝ請願に來たのを、コザック騎兵の劍の爲めに蹴散らされた慘事もあつた。舊ロシアに於ける慘虐事件は一再にして止まるものでない、專制暴壓、白色恐怖は今日の共和黨治下の政治を促進したものであつて、そこに少しも合理的進展、民衆の自主的自治的轉廻解放の無かつたことを。我等は常に嘆ずるものである。極端より極端へ、暴壓恐怖より勞農獨裁へ、と急轉直下したロシアの政治史、社會史を繙くの時、我等は、ロシアに於てはロシア獨特の歷史的事實と社會的構成要素とがあつた故に、それが基となつて今日のロシアが出現したことを考へなければならぬ。この極端轉廻は一律に歷史の異る他國に適用せられるべきでないことは識者の充分に理解せられることであらう。

□

一九一九年一月十五日、伯林に於てカール・リープクネヒト及びローザ・ルクセンブルグが官憲のために殺害せられた事件も、我々の記憶から去ることの出來ない悲痛事である。この事件は既に我國に於ても充分に紹介せられてゐる故に詳細することを避けるが、この犯人は如何に處斷せられたかを知る必要がある。時の政府はこの殺人事件をそのまゝ暗から暗に葬むることが出來ず、一時逃亡せしめたと謂はれてなつたが後形式的に裁判を開き、投獄はしたけれども程なく之を釋放したのであつた。獨逸に於ける之等の事件も可なり多い、統計に依れば一九二四年一月から一九二五年四月末日迄の獨逸法廷に現はれたる思想事件は九百八十一件あり、起訴人員七千餘人、その中處罰せられた者が五千七百八十六人に及ぶと謂はれてゐる。

其他アメリカ、スペイン、ポーランド、ルーマニア等に於てもそれ〴〵暴壓事件がその當時の世人を驚かしたこと勿論である。しかし反動の波瀾は何んと謂つても伊太利に於て頂上に達してゐることは申すまでもないことである。白色テロの宗家伊太利に於ける白色恐怖狀態を記述すべき紙數をもたぬ故に、それは讀者諸君の想像に委せることゝしやう。

□

我國に於ける白色テロに關する犯罪事件を記述したいのであるが、それは一般社會運動に關する刑事々件とそれ〴〵刑期を對照することに依つて取扱方につき如何なる相違があつたか、待遇が如何に違つてゐるかを研究批判して貰ひたい。

一、大杉榮等殺害事件

大正十二年九月十六日夜大杉榮、同人妻伊藤野枝、宗一少年が麹町憲兵分隊長甘粕大尉及び森曹長等のため、憲兵司令部で絞殺せられた事件である。十二月八日軍法會議で裁判の結果

首魁　甘粕大尉　懲役十年
　　　森　曹長　同　三年
平井伍長　鴨志田上等兵等無罪

其後甘粕大尉が假出獄をして洋行した等のことは當時の新聞紙で發表せられてゐる通りである。

二、平澤計七等殺害事件

震災當時に於ける龜戸事件と稱せられるもので、遂に犯人不明又は犯罪を構成せず。

三、堺利彦氏に對する殺人豫備事件

大正十一年一月十八日比、社會主義者撲滅のためまづ堺氏を殺害せんと計畫し留守宅を訪問せし退出の處を逮捕さる。大塚某に對する事件。判決東京區裁判所懲役六月、三年間執行猶豫。

四、岡山に於けるメーデー妨害事件

十四名の國粹會員が大正十一年五月一日メーデーに演說會場に亂入し暴行をなしたる事件、犯人太田某に對し略式罰金三十圓。

五、高尾平兵衛事件

大正十二年六月廿六日、高尾平兵衛を狙擊即死せしめたる米村赤化防止團長の刑罰は一年六月、二年間の執行猶豫となる。これは正當防衛でその程度を越したるものとの認定を受く。

六、大杉遺骨奪取事件

大正十二年十二月十六日、葬儀場の祭壇より大杉の遺骨を奪取せし下島繁蔵に係る事件、判決は懲役六月。

□

思想運動に基づく犯罪に對し如何なる科刑をなしてなつたか、參考のため二三摘記して見やう。

一、大正十一年十二月、日本無產黨組織に關する秘密結社治安警察法違反事件、被告人川内唯彦、東京地方裁判所懲役八月。

二、群馬共產黨事件

大正十三年前橋地方に於ける秘密結社事件、被告十一人に對し九人まで執行猶豫となつたがあとは實刑、但し治安警察法違反被告事件。

三、旭川秘密結社鐵斷者事件

大正十一年八月下旬、被告人四名、無罪一人であとは全部懲役六ケ月。

四、廣島治安維持令違反事件

震災後發布せられたる緊急勅令に觸れた事件、第一審懲役二年であつたが、第二審では十月に減刑せられた。自識に類した文書が市內に添付したものであつた。

五、大阪ギロッチン團事件

無政府主義者等の殺害事件、被告人十二名に對し死刑、無期、懲役十五年、八年、三年の刑を科せられた。

六、長野秘密結社事件

大正十三年一月一日(二)名の中一名執行猶豫、大正十二年より十三

年にわたる二回目(十名の中一名執行猶豫)、第三回目(四名の中全部實刑)等の治警法違反事件があつた。

七、福田大將狙撃事件

和田久太郎は大正十四年九月無期懲役の判決を受く、其他省略する。

尚この外に類別をして見れば勞働運動並に勞働爭議に基く主要犯罪事件は大正十一年に七件、十二年に七件、十三年に十九件、十四年も十九件、十五年四十一件である。又小作運動並びに爭議に基く事件は大正十一年に二件、十二年に五件、十三年に十件、十四年十件、十五年二十一件といふ様になつてゐる。

□

黑田保久二の刑事裁判が如何に取扱はれるであらうか。今の處黑田は陪審を受けるや又は拒絶するや不明である、その何れかに依つて裁判の進行は一層の社會的興味を曳くであらう。殊に内相は議會に於て議論の末殺害があつたと說明してゐるし、警視廳では又黑田は正當防禦のためにやつたのだと附け加へてゐるのであるから、その眞相も程なく國民の前に公開せられるであらう。何れにしろ社會的感興のつきぬ思想裁判事件である。特に豫審決定と同時にこの重罪犯人が保釋となつて出獄したこと、更に白色恐怖の反動的傾向が益々濃厚且つ露骨にならんとしつゝあるの時思想對立の白兵戰を如何に審判せられるか、我々はその進行を凝視注目せんとするのみである。我々はたゞその審判が眞理の前に公平無私忠實ならんことを希ふのみである。

「ミニヨンヌリイ」

武林無想庵

まだ氷に閉されてゐたバイカル湖畔の四十トンネルは別として、汽車の窓から十何日ブッとほしに、否應なく見せつけられた洪大無邊な白樺の林、これが武者さんのやうな方だつたら、どんなに喜ばれるであらうなど、考へさせられた、全く想像を絶した數量の白樺の林、そいつが二尺ざしのやうに大股に視界を通りすぎた後、さて、いよ／＼ある朝敦賀へついて見ると、一足とびに天地乾坤がちゞこまつて了ひました。

これが果してあの七年前に立去つた、あのむびにも忘れ得なかつた日本なのであらうか？　なんといふ思ひがけないミニヨンな國だつたのだらう！　なんといふ意外千萬に小刻みな山河と又人間だつたのだらう！

緑色の絨氈で包んだやうな、した、るばかり瑞々しい山々、同時に鼻のつかへるほど窮屈に押しせまつた山々、せ、こましい谷川、その間に點在した鳥籠のやうな家々、水田に股まで沒したヒエマキもどきの點景人物、實際、僕は日本をもうすこし大きく頭の中へ描いてゐたものです。

今シベリアを二尺ざしのやうに通りすぎたと云ひましたが、敦賀からオモチャのやうな列車に乗つたが最後、それが一分づゝ刻まれた、忽ち一寸の天地となつて了つたぢやありませんか？

日本はまつたく特殊國だ、まつたく蓬萊の仙境だと、米原まで來る途中、僕は本當に夢に夢みる心地でしたよ。さうして同車した丸髷、被布を着た老人、下駄をはいた男女、そのあまりに小さくいた〳〵しいまでに華車な人間たちが、どうしてもこの世の人とは思はれなくて、どうしても博物館中の彫刻人形のやうにのみ思はれて、一層夢見心地を深めるばかりでしたよ。

就中、桃色の手がらをかけた丸髷です。まア、なんといふ美しさでせう？　僕はこの瞬間までこんな美しいものがこの世の中に存在してゐることをば十年來まつたく忘れはてゝゐたのでした。十年來といふのは、その頃は僕の今日の妻と云へども、やつぱりかうした丸髷なるものをばその小さな頭の上へいかにも重さうに戴いてゐたからです。さうしてその今日の僕の妻は、現在最も新しいパリジエンヌとして斷髮をふり動かしつゝ歐羅巴に殘つてゐるからです。さうしてその歐羅巴の女は斷髮があたり前になつて、斷髮でない方が却つて目立つやうになつて了つてゐるからです。

斷髮と丸髷！　僕の突差の驚きは、まづこの對照からはじまつたわけです。

チヨン髷をきりすてゝから、日本の男性はもう何十年になるでせう？　さうして女性の方はといふと、そのうちには僕の妻のやうな極端なパリジエンヌもゐるし、同時に又かうした三百年以前の戰國時代にはじまつた舊習をばそのまゝに頭上にのせてゐるお嫁さんもゐるのです。

日本は果して新しいのでせうか？　それとも古いのでせうか？　或はたゞ新しいとか古いとかいふ簡單な文字で片づけ得られる國でせうか？　國ではないのでせうか？

なるほど西洋人には到底理解のできない國民であることが、まづ第一にしみ〴〵と感じられました。

シベリア鐵道に馴れた習慣性から、昔は隨分距離があつた筈の東海道線が、いやにわけもなく通りすぎて了ひました。又昔は甚だ風景絶佳であつた筈の、濱名湖とか、駿河灣とか、富士箱根とか、大磯小磯とかいふところが、それが天氣清

調であつたにも拘らず、ひどくボンヤリした印象で通りすぎて了ひました。

尤も又僕はこんな筈ではなかつたがと思ひました。並木の松の色がドス黑いのです。山々はすべて霞を隔てゝゐるのです。海の色は薄ぼけてゐるのです。さうしてこんな景色を西歐人と同じやうな油繪具でぬりこくらうとしつゝある日本の畫家が笑ひたくなりました。

かつて瑞西や南フランスや伊太利を旅した時でした。西歐南歐の風景は決して絹地の上へ毛筆で描ける景色では斷然ないと思ひました。さうして今度は正にその反對を感じたわけなのです。

クッキリとして濃艶な南歐の碧海碧空に馴れた者の目には、美はたとへ同じ美であつても、富士を中心にした駿河灣の風光美は、とても色彩のない影のうすい、さうしてたゞ徒らに模糊縹渺としたものにすぎません。

なにゆゑに西洋人が日本の藝術品を愛するか？ それはかれ等の想像の及ばぬほど、卽ちかれ等の美の概念を超越した、全く特殊の或物がそこに見出されるからだらうと思ひます。さうしてそれが富士山です。さうしてそれが廣重です。

で、景色はまアそれでいゝとして、僕は日本の停車場のやうにガヤ〳〵ワヤ〳〵と喧騷を極める停車場を見た事がないやうな氣がしました。七年前だつて、やつぱりこの通りだつたに相違なかつたんでせうが、あんまり靜かな外國の停車場ばかり見つけてゐたせいか、なぜこんなにやかましくなければならぬのか、それが不思議でたまらなくなるほど、今更のやうに驚きました。

日本人は實際デリケートな神經の持主です。さうしてそのデリケートな神經の末梢が、一々それ〴〵に小うるさくそれ相應の要求をば時をきらはず提出するのです。それゆゑにかれ等は停車場へ着く毎に、その土地〳〵の名物と稱するものを買ひたくなるばかりでなく、それ茶がほしい、それ、すし、それ、サンドウヰッチと、短距離と短時間の間にも[illegible]のべつにさま〴〵な要求を感ずるものと見えます。さうしてそれに應じた商人達の、これもまた必死となつてその關心

をそゝり立てせき立てる聲々が、實際耳を聾するばかりでした。僕は爰にも又日本人の特殊性を發見しました。

下駄の音のやかましい停車場、物賣りのすさまじい停車場、――これは外國人の全く想像がつかぬ停車場です。

さて、とう〳〵東京へ着きました。

何たるこれはまた變りやうでせう？ いや、變るといふ動詞はこの場合僕には適切ではありません。變るといふことは何かそこに變らない本質があつて、その本質が外界の影響を受けて、卽ち風化とか酸化とか云つたやうな意味で變形することなんですが、僕の今目前に見せつけられた東京は、決してそれは地震以前の東京が地震といふ外界からの影響によつてかく變形した東京ではありません。

つまり、新しく出現した東京です。日本に生まれて、さうして三十年前以上そこに住んだ僕にとつて、未だ曾て生まれてから一度も見た事のない東京なんです。

昔新橋驛へ到着した西洋人を馬車にのせて、銀座通りをすぎても、日本橋通りをすぎても、そこが日本で一番進んだ東京の第一流の街道であることに心づかず、その西洋人はしきりと、東京はまだですか、東京はまだですかときいたとか云ひます。それはその西洋人が東京をばやはり巴里のやうな倫敦のやうな西洋で所謂本當の都市と思ひ込んで、それが單なる村落の集合だとは夢にも知らなかつたおやまりの結果にすぎませんが、僕のはそれとは全く別な意味です。

僕にとつては東京が村落の集合であらうとなからうと、そんな事が問題ではありません。數學の基礎から人間の生活を割出し得ない東洋人に向つて、いくら西洋人のつくる都會をつくれと云つたつて、それは恐らく無理でせう。それだからして東洋人の頭が西洋人に後れてゐたわけではなかつたのです。たゞそれが西洋人の模倣をした場合にのみ到底勝目がないといふだけの話です。ですから模倣さへしなければそれですみます。東洋人には西洋人の窺ひ知られざる他の一面があるのですから、それさへ自發的に展開して行けばそれでよかつたのです。

ところが明治以降の東京文明はその反對の方向へむかつて突進して了つたのです。つまり徒らなる西歐文明の模倣にばかり浮身をやつして了つたのです。

アメリカの文明は決して西歐文明の模倣ではないのです。たゞその文明の展開にすぎないのです。東京文明はアメリカ文明の模倣です。どこまで進んで見たところで、模倣はいつまでも模倣です。さうしてその文明の中から「人間生活」といふ人間にとつて一番肝腎な生活そのものがぬけて行くばかりです。それは模倣は生命を殺すものだからです。

生まれてから未だ曾て僕の見たことのない東京とは、さうした意味の東京なんです。あまりに眞の生命を失つて了つたやうに感じられる、もぬけの殼の東京です。

僕の今度到着した東京には、雜然たるさまざまの建物ばかり出たらめに押合ひへし合ひしてゐるところの、どこの國とも一寸見當のつきかねる、エタイの知れぬ殺風景きはまつた一種の殖民地氣分だけが、尤も優勢に跳梁跋扈してゐるんぢやありませんか？

僕はガッカリして了ひました。

なるほど酒は昔のまゝの味がします。天麩羅は昔のまゝの味がします。米の飯も昔のまゝの味かします。けれども人は決してパンのみで生きられるものではありません。そんな野暮は今更云つたつて仕方がないかも知れませんが、あんまりだから云はずにはゐられないのです。

マルチン・ルーテルが獨逸の片田舍から羅馬へ行つて見てビックリしたやうに、僕は巴里の貧乏生活からぬけ出して、この大東京へやつて來て見て、東京の贅澤さには全く百驚を喫して了ひました。東京人はみんな相場師になつて了つたんぢやないでせうか？

かういふ生活に比べたら、巴里人も伯林人も、なんといふシミつたれた人間どもでせう？ かれ等は一錢二錢といふ具

だコマヵな錢勘定をしながら、できるだけムダのない生活ばかり追ひかけて暮らしてゐます。

もちろんかれ等は貧乏です。貧乏なるが故にシミつたれです。併しかれ等にはかれ等として立派な生活があります。かれ等は決していやく働いてはをりません。たとへいくら働いて見たところで、かれ等自身大ブルジョアになれないことをかれ等は充分に知つてゐます。それにも拘らず、かれ等は實によく毎日の生活を樂しんでゐます。試に日曜日郊外へ行つて御覽なさい。一日のかれ等の行樂ぶりは全く羨ましい位です。

まん六年フランスに生活して、僕はまだフランスの勞働者達のよつぱらつたところだの、喧嘩口論してゐるところなど、ほとんど見たことがありません。昔大杉君はフランスの勞働者を無氣力だと云はれたことがありますが、あれはとんでもない誤解だつたのです。

フランスの勞働者達はなぜあんなにおとなしいのでせうか？ かれ等はみんな人間の生活といふものを熟知してゐるからです。二百年前に世界へ向つて絶叫した、かれ等の自由と平等と同胞愛とは、今日と云へどもかれ等の日常の行動のうちに、猶且つ潑剌と具現されてゐます。

翻つて今日の東京人はどうでせうか？ かれ等は果して生活を樂んでゐるでせうか？ 樂しむといふことは、午後の三時から夜十時まで劇場で暮らすといふ意味ではありません。自分の仕事を拋出してまで、野球の應援に赴くといふ意味ではありません。きりつめた一日の勞働生活のうちから、出來るだけの餘裕を見出す事なのです。さうしてその餘裕こそは人間の自由です。今日の日本人には果して自由があるでせうか？

その國の個々人にさう云つた自由のない事はその國民の恥辱です。ズボラでなければ、脫線しなければ、勞働を廢止しなければ、どうしても生存の自由がきり出せない民族は不幸です。

お互に個々人の自由を認めた後、はじめてそこに平等があります。さうしてそれが本當の同胞愛といふものです。ブル

ジョアジイはかくして歐米に發達ました。ところがそのブルジョアジイは不幸にしてその中から經濟的に資本主義といふものを産み出したゝめ、理想の平等がいつのまにか對立する二つの階級として結果する不合理を齎したわけです。それゆゑにかれ等歐米人の今日の努力は、いかにして現存の不平等を本來の平等に還さうかといふ一點にかゝつてゐます。さうして飽までも個々人の自由生存を確立しようと精進に精進を重ねてゐる最中です。

たとへラディオが瞬間毎に全世界を放送されまはつても、それはたゞそれだけの話です。日本は歐米とは全く本質的に國情を異にしてゐます。一千七百九十三年は日本には存在しなかつた出來事です。日本民族の存在するかぎり、恐らく逢着する氣づかひのない出來事だらうと思ひます。歐米の發足點は併しそこにあります。さうして日本はたゞその結果としての皮相を模倣したにすぎません。模倣は必ず附燒刄です。附燒刄は必ずはがれます。さうして現れて來なければならないのは勿論その地金であるべき筈ではありませんか？

まア、併し、さういふ堅苦しい話はやめませう。

とにかく、日本人は一口に云ふと、全くミニヨンですよ。ミニヨンといふとフランス語で、人形のやうに小さくて可愛らしいといふ意味です。たつた一つの難は色澤のばかに悪い事ですが、目鼻立と云ひ、皮膚と云ひ、肩の恰好と云ひ、姿と云ひ、その小刻みな一擧一動と云ひ、日本以外の他の民族に比べると、その小さゝ、纖細さ、敏捷さが、人間はなれがして、とても目立ちます。

昔、キップリングが長崎へ來た時、こんな民族にも憲法があるさうだ、と云つたと云つて、高山樗牛が大變おこつてゐましたが、あれは今日にして考へて見ると、決して侮蔑の意味で云つたんではなかつたんだらうと想像されます。たつた六年フランスにゐたゞけの僕でさへ、たま／＼歸つて見た故國が、やつぱりさう云つた風に感じられますから。それほど日本人は可愛らしい人種なんです。

で、この可愛らしさはどこから出て來てゐるのかと思ふと、それは全く地理學的の根抵から、どうも出て來てゐるんぢやないかと思はれてならないのです。それが證據には支那人や朝鮮人は全く同じ様な目鼻立をしてゐるくせに、その一擧一動が本質的にちがひます。かれ等はどこまでも大陸的です。日本人のどこまでも島國的であるのとは反對にです。さうしてその島國的と云ふのが、英國の島國的といふのとは又全然別で、これは何としても彼此の山水や氣候を比較した上でないと、どうしてもわかりません。と云ふのは、日本の山水や氣候は實際世界には二つと存在しさうもないからです。要するに、日本人は類を絶してミニヨンですよ。

畏多い話ですが、たとへば日本の皇室です。これを佛語や英語に譯すと、アンペルールとなり、エムペラアとなります。併しそれでは外國人には本當によくわかりません。よしそれを支那語に譯して帝と云つたつて、われわれの尊崇する皇室の意味は盡せません。ですからやはりこれをミカドと云つて、外國語には決して飜譯できない言葉として考へなければなりません。

僕は日本の藝術品のうち三月のお雛様が一番すきです。あんな可愛らしい美しいものは全く世界にはありません。あれがわれわれの一番敬愛して置かないミカドではないでせうか？　あゝいふ藝術品を有する國民に、何の必要があつて一千七百九十三年以降の西洋歴史が持出されるのでせう？

勿論、研究はあくまで徹底的でなければなりませんが、それは同時に飽までも他山の石としてゞす。こちらの珠玉をあちらの石で磨かんが爲なんです。さうして石を玉にとりかへる爲ではありません。

西洋人でさへ心ある者は、日本の歐米化をしきりに嘆いてゐます。さうしてその先驅者はラフカディオ・ヘルンですが、現に僕の妻がマアテルリンクに逢つた時、僕の妻が純日本の服裝をしてゐた事を大へんに喜んで、かう妻の扇面へ書いてくれました。

Je croyais que le classique Japon n'existait plus. C'était une erreur. Je l'ai vu aujourd'hui（わたしは古典的日本がもう存在しないものと思つてゐた。それはまちがひであつた。わたしはけふそれを目撃した。）

心ある西洋人はみんなかう思つてゐるのです。

ところが今日の東京はどうでせう？　東京驛を中心とした丸の内はもうどこを押しても日本の音は出ません。銀座通りの通行者は洋服と稱する歐米人の服裝をしてゐます。建物や服裝はどうでもいゝとして、かれ等の物の考へ方は果して本當の日本人らしい考へ方をしてゐるでせうか？　新聞を見ても雜誌を見ても、みんなアメリカニズムといふ本場の歐羅巴人さへ眉を顰めつゝあるところのものでなくんば幸です。

僕は六年フランスにゐて、フランスの事物を見聞しました。さうして見聞すればするに隨つて、日一日と日本と西洋とのヒラキが大きくなる事を感じました。洋行當時とてもハイカラだつた僕は、心が落ちつくに從つて、向ふの生活に馴れれば馴れるに隨つて、自分の日本人たる自覺がだん〳〵深くなつて行きました。さうして今歸つて見て驚いたのです。外國に於ける日本人が日ましに日本人たる自覺を增して行きつゝあるに反して、本國に於ける日本人は日進月步の勢ひで日本人たる自覺を失つて行きつゝあるのぢやないかと感じられたからです

そこにどんなに口あたりのいゝ酒があるからと云つて、飮んだ者はみんな醉ッぱらつて狂態を演じなければならないといふ義務はありません。同樣に機械文明がどんなに人間の生活を簡便にし豐富にするからと云つて、人間は必ずしも機械に左右されてのみ暮らさなければならないといふ義務はありません。酒をのむのは人間です。機械を驅使するのは人間です。ヴィクトル・マルゲリットではありませんが、Ton corps est à toi（お前のからだはお前のものです。さうして人間の肉體が凡ゆる機械のうち最も精巧を極めた機械です。

澎湃たる二十世紀の機械文明の大思潮！　これに對してわれ〳〵大和民族はどう處分しなければならないでせうか？

アメリカ人にはアメリカ人としての處分法があります。ロシア人にはロシア人としてのそれがあります。獨逸人には、フランス人には、それ／＼その國民としてのそれがあります。もうかうなつた以上は、單なる模倣ではすまなくなりました。國民としての、民族としてのオリジナリテがこれから要求されることになります。

繰返して云ひますが、日本人はミニヨンです。さうして日本人から可愛らしさが失はれた時、そこにはもう日本人は存在しないのです。お雛樣にかしづく女の子がゐなくなつたら、日本は滅亡と覺悟しなければなりません。數學からはじまつた西洋の機械文明は、今日とう／＼その行きづまつたところで、識者の間にはしきりと第四次元の世界が要求されつゝあります。第三次元の機械文明は二十世紀の產物として人間といふ個性を一々悉く細胞化するところの一大レギアザンとして假定されてゐます。レギアザンとは舊約聖書中の大怪物です。機械は怪物です。それが人間の手におへなくなるに隨つて、いよ／＼怪物化するのです。さうして今日は正にその時代なのであります。さうしてその怪物の退治をはじめてゐるのが今日の西洋です。

ところが日本はどうでせう？　一生懸命に今この民族の骨を折つてゐるところのものは、さうした怪物の退治どころではなく、却つて今更らしくその怪物の養成ではありますまいか？　さうしてそれは無理はありません。いゝ加減のバケモノの引込んだ時分になつてから、後ればせに接木した怪物だつたから。向ふがすでにマンモスになつてゐる時代に、こちらはまだわづかに象にさへ到達してゐないといふ結果になつてゐるからです。

ミミズは一次以上の世界を知りません。犬は二次以上の世界を認めません。さうして今日までの人間は三次以上の世界を要求しなかつたものです。さうして鬼の首でもとつたやうに細胞よばゝりしてゐます。

フランスではそのレギアザンの特效藥として、即ち生野銀山として、猫入らずとして、スチイルといふものを提供しはじめてゐます。スチイルとは英語ではスタイルの事ですが、意味は大變ちがひます。これを日本語なンぞに譯したら、文體

なンぞこといふ事になつて、こゝ／＼意味がわからなくなりますから、譯さざる原名のまゝ、たゞスチイルと云つて置きます。

スチイルは器械に累せられないばかりでなく、器械そのもの生命をも了解して、さうして人間の本然に返します。

そこが恰も器械の方から云ふと第四次元の世界に該當することになるのです。

スチイルのシャンピオンは澤山ゐますが、いかなる時代の思潮もいつも文士が先驅してゐるやうに、この運動もやはり文士によつて先立たれてゐます。

アン・リネアは道徳の世界に關して、まづそれを論じてゐました。さうして道徳といふものをば根本的に科學から遊離させて了ひました。「道徳は學ではない。道徳は藝術だ」

マアテルリンクは科學を信ずれば人間の將來赴くべきところは白蟻の世界よりない事を感じて、それから脱却するための第四次元を説きました。併しかれの逢着したところは、サン・ドニの虚無的キリスト教と佛説の涅槃までゞす。

米國や愛蘭士から巴里へ移住したトランジションの一團があります。又アンドレ・ブルトンを元祖としたシユレアリストの一團もあります。かれ等はすべて若き四次元論者です。

スチイルといふものを意譯して見ると、恐らく「文章は經國の大業」といふことになるでせう。

僕の今度發見した日本のミニヨンヌリイは、恰もその第四次元の立場に立つての言明です。

敦賀をはなれて、汽車は江州の水田中を走つてゐました。所謂江州米の產地です。日本で優良の米を出す水田です。水田には太古のまゝに、前述の如く股まで水中に沒した青人草がゐました。さうしてその青人草こそはわれ／＼の皇室と最も密接の關係を有する大和民族だつたのです。古事記以來、皇室の恒に配慮せられるところのものは、何よりもまづこの水田中の青人草だつたのです。日露の役に明治天皇は何と仰せになつたでせう？

子らはみないくさの庭にいではてゝ翁やひとり山田もるらん

ではなかつたでせうか？

アメリカ人にはアメリカ人としての處分法があります。ロシア人にはロシア人としてのそれがあります。獨逸人には、フランス人には、それ〴〵その國民としてのそれがあります。もうかうなつた以上は、單なる模倣ではすまなくなりました。國民としての、民族としてのオリジナリテがこれから要求されることになります。

繰返して云ひますが、日本人はミニヨンです。さうして日本人から可愛らしさが失はれた時、そこにはもう日本人は存在しないのです。お雛様にかしづく女の子がゐなくなつたら、日本は滅亡と覺悟しなければなりません。數學からはじまつた西洋の機械文明は、今日とう〳〵その行きづまつたところで、識者の間にはしきりと第四次元の世界か要求されつゝあります。第三次元の機械文明は二十世紀の産物として人間といふ個性を一々悉く細胞化するところの一大レギアザンとして假定されてゐます。レギアザンとは舊約聖書中の大怪物です。機械は怪物です。それが人間の手におへなくなるに隨つて、いよ〳〵怪物化するのです。さうして今日は正にその時代なのであります。さうしてその怪物の退治をはじめてゐるのが今日の西洋です。

ところが日本はどうでせう？　一生懸命に今この民族の骨を折つてゐるところのものは、さうした怪物の退治どころではなく、却つて今更らしくその怪物の養成ではありますまいか？　さうしてそれは無理はありません。いゝ加減のバケモノの引込んだ時分になつてから、後ればせに接木した怪物だつたから。向ふがすでにマンモスになつてゐる時代に、こちらはまだわづかに象にさへ到達してゐないといふ結果になつてゐるからです。

ミミズは一次以上の世界を知りません。犬は二次以上の世界を認めません。さうして今日までの人間は三次以上の世界を要求しなかつたものです。さうして鬼の首でもとつたやうに細胞よばゝりしてゐます。

フランスではそのレギアザンの特效藥として、即ち生野銀山として、猫入らずとして、スチイルといふものを提供しはじめてゐます。スチイルとは英語ではスタイルの事ですが、意味は大變ちがひます。これを日本語なンぞに譯したら、文體

なンゼンスといふ事になつて、ますます意味がわからなくなりますから、譯さざる呼名のまゝたゞスチイルと云つて置きます。

スチイルは器械に累せられないばかりでなく、器械そのものを解剖さへしてゐます。さうして人間の本然に返ります。

そこが恰も器械の方から云ふと第四次元の世界に該當することになるのです。

スチイルのシャンピオンは澤山ゐますが、いかなる時代の思潮もいつも文士が先驅してゐるやうに、この運動もやはり文士によつて先立たれてゐます。

アン・リネアは道德の世界に關して、まづそれを論じてゐました。さうして道德といふものをば根本的に科學から遊離させて了ひました。「道德は學ではない。道德は藝術だ。」

マアテルリンクは科學を信ずれば人間の將來赴くべきところは白蟻の世界よりない事を感じて、それから脫却するための第四次元を說きました。併しかれの逢着したところは、サン・ドニの虛無的キリスト敎と佛說の涅槃までゞす。

米國や愛蘭土から巴里へ移住したトランジションの一團があります。又アンドレ・ブルトンを元祖としたシユレアリストの一團もあります。かれ等はすべて若き四次元論者です。

スチイルといふものを意譯して見ると、恐らく「文章は經國の大業」といふことになるでせう。

僕の今度發見した日本のミニヨンヌリイは、恰もその第四次元の立場に立つての言明です。

敦賀をはなれて、汽車は江州の水田中を走つてゐました。所謂江州米の產地です。日本で優良の米を出す水田です。水田には太古のまゝに、前述の如く股まで水中に沒した青人草がゐました。さうしてその青人草こそはわれわれの皇室と最も密接の關係を有する大和民族だつたのです。古事記以來、皇室の恒に配慮せられるところのものは、何よりもまづこの水田中の青人草だつたのです。日露の役に明治天皇は何と仰せになつたでせう?

子らはみないくさの庭にいではてゝ翁やひとり山田もるらん

ではなかつたでせうか?

皇室と水田、水田と青人草、この關係が外國人にはどうしてもわかりません。何となれば外國には日本人のやうにして米を食ふ人種がないからです。よし米そのものは食つても、印度人や支那人の米の食ひ方は日本人とは全然別です。それゆゑ支那人も印度人も日本のミニヨンヌリイは不可解です。

ポール・ヴレリイは申します。「パンを食ひ、葡萄酒をのむ人種であつて、はじめてそこにカトリックがある」と、僕は至言だと思ひました。僕のミニヨンヌリイも勿論さう云つた意味です。「江州米や肥後米を珍重する民族であつて、そこにはじめて豐葦原瑞穂國がある。さうしてそこの水田を耕す青人草ときつてもきれぬ皇室がある。」僕が若しヴレリイだつたらきつとさう云ふでせう。

斷つて置きますが、僕は所謂國粹主義者ぢやありません。所謂ファシストぢやありません。同時に左傾も右傾もしない人間です。常に中道を踏んであやまるまいと努力しつゝある人間です。

先日敦賀で巡査に、「あなたはダダイストですか。」ときかれました。僕は、「さうぢやありません。」と答へました。すると、巡査は、「それぢや何主義ですか？」ときゝました。僕は、「何主義だか自分ぢやわかりません。」と答へました。實際、僕は自分の何主義たるやを解しない人間です。又何主義たるかを解しなくても一向差支ないと信じてゐる人間です。

僕は今度フランスでこの先妻子と共に生活を續けるために、それに必要な仕事を日本へ求めに來た人間です。僕はフランス語の本を讀む事がすきです。さうして羅典民族の文明をば死ぬまで研究しつゞけて、それをさつき申上げた他山の石として、日本人に提供したいと願つてゐる人間です。

巴里は金持の遊び場にできてるところぢやありません。巴里ほど本屋と骨董屋の澤山あるところはないのです。それほど人間の考へた事と人間のこしらへたものを珍重するところは、外には全く見當りません。

アメリカは過去を有せぬ國です。歐羅巴は過去の滅びない國です。さうして東洋は過去の滅びて了つた國々が多いやうです。僕は、日本が東洋に屬するかぎり、その過去の滅びた國々の轍を履まないことを、切に／＼希望してやみません。

イギリス總選擧の結果と勞働黨内閣

後藤信夫

一

ナポレオン戰爭終結當時（一八一五年）以來、イギリスが一九二九年に於ける程に重大な時機に置かれた事はない、と云ふラスキーの見方は（『イェイル・リヴィウ』三月號所載、『一九二九年に於けるイギリス』）今日のイギリスが經濟的に、又社會的に、如何に大なる危機に面しつゝあるかを適當に理解する上に、確かに一つの光りを投げる。それと同時に、此の一九二九年のイギリスと一八一五年のイギリスと對比せしむると云ふ事は、おのづから、今こそイギリスは、百餘年前にあつた如く、一つの轉機の上にあるのではあるまいかと云ふ期待を人に抱かしめないでは置かない。一八一五年のその世界に在つた人々は、勿論、彼等の置かれた社會が如何なる方向に向つて、如何なる速度で動きつゝあるかを明確に意識しなかつた。併し後世の歴史家は、何時も、此の一八一五年をイギリスの經濟的（資本主義的）又は社會的發展史上に一時期を劃する重大なる變動時代の中心に置く。一九二九年がイギリスの歴史の上で、一八一五年と相似た樣な意義を持つであらうか何うかは、併し、云ふ迄もなく、後世の批判にまたなければならない。

二

選擧の終つてその結果の明かになつてしまつた今日、如何に選擧が戰はれたかと云ふ事を敍述する事は興味のない事柄である。のみならず大體に於て、今次の選擧は非常に平靜に、或は無關心の裡に行はれたとさへも云はれて居るのであるから、萬一ロイド・ジョージが彼一流の失業救濟案を掲げて大聲に選擧場

裡に現れなかつたならば、此度びの選擧は一層生氣のないものとなつて居たかも知れない。此點に於てロイド・ジョージは彼自身が如何に鋭く政治心理を見透す力を有するかを、言ひ換へれば優秀なる政治役者であるかを證明したと同時に、選擧の重要なる問題を失業救濟に集中せしめる事によつて一つの貢獻をなしたと云はなければならない。ブレルスフォードの如きは「ニュー・リパブリック」(五月十五日)ロイド・ジョージの大見得はイギリス全般に亘つて失業問題に對する態度を一變せしめたとさへも云つて居る。四年間の保守黨内閣の消極的對失業政策の下に置かれ、寧ろ陰慘なその負擔に馴致せられてしまつた人心を一變せしめて、積極的に此の問題を料理しやうと、少くとも人々をして考へしめたと云ふ事は、何れにしてもロイド・ジョージの貢獻と見なければならない。勞働黨は年來此の問題を常に重要政策の中心としてたて、來た唯一の政黨である。自由黨の失業救濟案として掲げられた方策の殆んど全ては曾つて勞働側の提唱したものである、——そしてその提案を全く省みる事をしなくして握りつぶしてしまつたのは實に聯立内閣の首相ロイド・ジョージその人なのだ——とさへ云はれて居る。(「レィバー・ブレツテイン」五月號)併し、若し、ロイド・ジョージが、他の二政黨を出し拔いてあれ程に大きな見振りを以て此の問題を擔ぎ出さなかつたならば、到底此の問題は、實際に扱はれた樣に積極的に重大な問題とせられずに終つたかも知れない。

華々しさに於て自由黨と太刀打ちの出來る唯一の政黨は共產黨であつた。何の政黨の政綱も一樣に生氣に乏しいと思ふ人は、宜しく共產黨の對選擧宣言を一讀すべきであるとさへ云はれた。併し此の政黨は候補者の數も少なく、初めから殆んど問題にせられずに葬られた傾きがある。「勞働者の革命政府は土地、炭坑、鐵道、大工場、造船工場、銀行、外國貿易その他を國有化するであらう。小投資家、勞働組合及び消費組合を除いては何等の賠償をも仕拂ふ事なしに」と云ふ樣な言葉や「イギリスを勞働者サヴエート共和國となし、サヴエート社會主義共和國聯邦と聯合せしめるであらう」等と云ふ約束がイギリスの有權者に省みられなかつたのであらう。

三

候補者の指名は五月二十日になされ、投票は同三十日に行はれ、結果は三十日、三十一日に發表せられた。

その結果は次の如きものである。

		候補者數
勞働黨	二八七	五七〇

保守黨	二五七	五八八
自由黨	五七	五一一
共產黨	—	二五
其他	九	三一
計	六一〇	一七二五

(總議席は六一五である。殘りの五議席は此の文執筆當時なほ不明である。)

一九二四年總選擧前及び今次の總選擧前の議會解散當時の各派議員數と今回の結果とを次に比較する。

	一九二四年解散當時	一九二九年解散當時	一九二九年總選擧得票(一部不明)
保守黨	二五八	三九六	二八七
勞働黨	一九三	一六〇	二五七
自由黨	一五八	四六	五七
其他	五	七	九
欠員	一	六	—

勞働黨が著しく進出した事に疑ふ餘地はない。保守黨が明瞭に敗北したと云ふ事も議論のない所である。併し、自由黨の依然たる無勢力は、その屢ゝ稱へられたる自由主義復興の聲を餘りにも裏切つたものとして世人——その自由黨員たると然らざるとを問はず——の期待に著しく叛いた。人々が此の總選擧の結果に就いて最も驚いた點は、實に此の點であつたと報ぜられて居る。特に次に擧げるが如く、總得票數に於て自由黨は二四パーセントを越えたものを得て居るのであるから、(議席數に於ては自由黨は九パーセント強を示めして居るに過ぎない。)

	一九二四年總得票	(議員數)	一九二九年總得票(概算)
保守黨	七、三八五、一三九	(四〇二)	八、五七五、〇〇〇
勞働黨	五、四八七、六二〇	(一五一)	八、三三七、〇〇〇
自由黨	二、九八二、五六三	(四一)	五、二三八、〇〇〇

(新議會成立當時の各派議員數とその議會解散當時のそれとの相異は補欠選擧の結果の變動のためである)

之は殆んど各々の選擧區が一區一議員制の小選擧區であると云ふ事實に基く事は云ふ迄もない。一九二四年當時投票數を增加し乍ら而も議員數に少からぬ減少を見た勞働黨が抱いた不平を今や自由黨が味ひつゝある。選擧區制改正の聲が再び盛に唱へられ出すであらうと云ふ事は疑ふ餘地のない事柄である。それにしても自由黨の凋落は餘りにも甚しきものとして人の注目を引いたのである。そして自由黨が兎も角その議員數を增加せしめ乍らも僅四十六議席の地盤の半數近くを失つたと云ふ事は自由黨その物の甚だ不安定なる事を想はしめる。

裡に現れなかつたならば、此度びの選擧は一層生氣のないものとなつて居たかも知れない。此點に於てロイド・ジョージは彼自身が如何に鋭く政治心理を見透す力を有するかを、言ひ換へれば優秀なる政治役者であるかを證明したと同時に、選擧の重要なる問題を失業救濟に集中せしめる事によつて一つの貢獻をなしたと云はなければならない。ブレルスフオードの如きは『ニユー・リパブリック』(五月十五日)ロイド・ジョージの大見得はイギリス全般に亘つて失業問題に對する態度を一變せしめたとさへも云つて居る。四年間の保守黨内閣の消極的對失業政策の下に置かれ、寧ろ陰慘なその負擔に馴致せられてしまつた人心を一變せしめて、積極的に此の問題を料理しやうと、少くとも人々をして考へしめたと云ふ事は、何れにしてもロイド・ジョージの貢獻と見なければならない。勞働黨は年來此の問題を常に重要政策の中心としてたて、來た唯一の政黨である。自由黨の失業救濟案として掲げられた方策の殆んど全ては曾つて勞働側の提唱したものである、――そしてその提案を全く省みる事をしなくして握りつぶしてしまつたのは實に聯立内閣の首相ロイド・ジョージその人なのだ――とさへ云はれて居る。(『レイバー・フレッテイン』(五月號)併し、若し、ロイド・ジョージが、他の二政黨を出し抜いてあれ程に大きな見振りを以て此の問題を擔ぎ出さなかつたならば、到底此の問題は、實際に扱はれた樣に積極的に重大な問題とせられずに終つたかも知れない。

華々しさに於て自由黨と太刀打ちの出來る唯一の政黨は共産黨であつた。何の政黨の政綱も一樣に生氣に乏しいと思ふ人は、宜しく共産黨の對選擧宣言を一讀すべきであるとさへ云はれた。併し此の政黨は候補者の數も少なく、初めから殆んど問題にせられずに葬られた傾きがある。『勞働者の革命政府は土地、炭坑、鐵道、大工場、造船工場、銀行、外國貿易その他を國有化するであらう。小投資家、勞働組合及び消費組合を除いては何等の賠償をも仕拂ふ事なしに』と云ふ樣な言葉や『イギリスを勞働者サヴエート共和國となし、サヴエート社會主義共和國聯邦と聯合せしめるであらう』等と云ふ約束がイギリスの有權者に省みられなかつたのであらう。

三

候補者の指名は五月二十日になされ、投票は同三十日に行はれ、結果は三十日、三十一日に發表せられた。

その結果は次の如きものである。

		候補者數
勞働黨	二八七	五七〇

保守黨	二五七	五八八
自由黨	五七	五一一
共産黨	―	二五
其他	九	三一
計	六一〇	一七二五

（總議席は六一五である。殘りの五議席は此の文執筆當時なほ不明である。）

一九二四年總選擧前及び今次の總選擧前の議會解散當時の各派議員數と今回の結果とを次に比較する。

	一九二四年解散當時	一九二九年解散當時	一九二九年總選擧得票（一部不明）
保守黨	二五八	三九六	二八七
勞働黨	一九三	一六〇	二五七
自由黨	一五八	四六	五七
其他	五	七	九
欠員	一	六	―

勞働黨が著しく進出した事に疑ふ餘地はない。保守黨が明瞭に敗北したと云ふ事も議論のない所である。併し、自由黨の依然たる無勢力は、その屢々稱へられたる自由主義復興の聲を餘りにも裏切つたものとして世人――その自由黨員たると然らざるとを問はず――の期待に著しく叛いた。人々が此の總選擧の結果に就いて最も驚いた點は、實に此の點であつたと稱せられて居る。特に次に舉げるが如く、總得票數に於て自由黨は二四パーセントを越えたものを得て居るのであるから、（議席數に於ては自由黨は九パーセント強を示めして居るに過ぎない。）

	一九二四年總得票（議員數）	一九二九年總得票（概算）
保守黨	七、三八五、一三九（四〇二）	八、五七五、〇〇〇
勞働黨	五、四八七、六二〇（一五一）	八、三三七、〇〇〇
自由黨	二、九八二、五六三（四一）	五、二三八、〇〇〇

（新議會成立當時の各派議員數とその議會解散當時のそれとの相異は補欠選擧の結果の變動のためである）

之は殆んど全々の選擧區が一區一議員制の小選擧區であると云ふ事實に基く事は云ふ迄もない。一九二四年當時投票數を增加し乍ら而も議員數に少からぬ減少を見た勞働黨が抱いた不平を今や自由黨が味ひつゝある。選擧區制改正の聲が再び盛に唱へられ出すであらうと云ふ事は疑ふ餘地のない事柄である。それにしても自由黨の凋落は餘りにも甚しきものとして人の注目を引いたのである。そして自由黨が兎も角その議員數を增加せしめ乍らも尚四十六議席の地盤の半數近くを失つたと云ふ事は自由黨その物の甚だ不安定なる事を想はしめる。

裡に現れなかつたならば、此度びの選擧は一層生氣のないものとなつて居たかも知れない。此點に於てロイド・ジョージは彼自身が如何に鋭く政治心理を見透す力を有するかを、言ひ換へれば優秀なる政治役者であるかを證明したと同時に、選擧の重要なる問題を失業救濟に集中せしめる事によつて一つの貢獻をなしたと云はなければならない。ブレルスフォードの如きは『ニュー・リパブリック』(五月十五日)ロイド・ジョージの大見得はイギリス全般に亘つて失業問題に對する態度を一變せしめたとさへも云つて居る。四年間の保守黨內閣の消極的對失業政策の下に置かれ、寧ろ陰慘なその負擔に馴致せられてしまつた人心を一變せしめて、積極的に此の問題を料理しやうと、少くとも人々をして考へしめたと云ふ事は、何れにしてもロイド・ジョージの貢獻と見なければならない。勞働黨は年來此の問題を常に重要政策の中心としてたて、來た唯一の政黨である。自由黨の失業救濟案として掲げられた方策の殆んど全ては曾つて勞働側の提唱したものである、――そしてその提案を全く省みる事をしなくして握りつぶしてしまつたのは實に聯立內閣の首相ロイド・ジョージその人なのだ――とさへ云はれて居る。(『レイバー・ブレッテイン』五月號)併し、若し、ロイド・ジョージが、他の二政黨を出し拔いてあれ程に大きな見振りを以て此の問題を擔ぎ出さなかつたならば、到底此の問題は、實際に扱はれた樣に積極的に重大な問題とせられずに終つたかも知れない。

華々しさに於て自由黨と太刀打ちの出來る唯一の政黨は共產黨であつた。何の政黨の政綱も一樣に生氣に乏しいと思ふ人は、宜しく共產黨の對選擧宣言を一讀すべきであるとさへ云はれた。併し此の政黨は候補者の數も少なく、初めから殆んど問題にせられずに葬られた傾きがある。『勞働者の革命政府は土地、炭坑、鐵道、大工場、造船工場、銀行、外國貿易その他を國有化するであらう。小投資家、勞働組合及び消費組合を除いては何等の賠償をも仕拂ふ事なしに』と云ふ樣な言葉や『イギリスを勞働者サヴエート共和國となし、サヴエート社會主義共和國聯邦と聯合せしめるであらう』等と云ふ約束がイギリスの有權者に省みられなかつたのであらう。

三

候補者の指名は五月二十日になされ、投票は同三十日に行はれ、結果は三十一日に發表せられた。

その結果は次の如きものである。

		候補者數
勞働黨	二八七	五七〇

保守黨	二五七	五八八
自由黨	五七	五一一
共產黨	—	二五
其他	九	三一
計	六一〇	一七二五

(總議席は六一五である。殘りの五議席は此の文執筆當時なほ不明である。)

一九二四年總選擧前及び今次の總選擧前の議會解散當時の各派議員數と今回の結果とを次に比較する。

	一九二四年解散當時	一九二九年解散當時	一九二九年總選擧得票（一部不明）
保守黨	二五八	三九六	二八七
勞働黨	一九三	一六〇	二五七
自由黨	一五八	四六	五七
其他	五	七	九
欠員	一	六	—

勞働黨が著しく進出した事に疑ふ餘地はない。保守黨が明瞭に敗北したと云ふ事も議論のない所である。併し、自由黨の依然たる無勢力は、その屢々稱へられたる自由主義復興の聲を餘りにも裏切つたものとして世人——その自由黨員たると然らざるとを問はず——の期待に著しく叛いた。人々が此の總選擧の結果に就いて最も驚いた點は、實に此の點であつたと報ぜられて居る。特に次に擧げるが如く、總得票數に於て自由黨は二四パーセントを越えたものを得て居るのであるから、(議席數に於ては自由黨は九パーセント強を示めして居るに過ぎない。)

	一九二四年總得票	(議員數)	一九二九年總得票(概算)
保守黨	七、三八五、一三九	(四〇二)	八、五七五、〇〇〇
勞働黨	五、四八七、六二〇	(一五一)	八、三三七、〇〇〇
自由黨	二、九八二、五六三	(四一)	五、二三八、〇〇〇

(新議會成立當時の各派議員數とその議會解散當時のそれとの相異は補欠選擧の結果の變動のためである)

之は殆んど各々の選擧區が一區一議員制の小選擧區であると云ふ事實に基く事は云ふ迄もない。一九二四年當時投票數を增加し乍ら而も議員數に少からぬ減少を見た勞働黨が抱いた不平を今や自由黨が味ひつゝある。選擧區制改正の聲が再び盛に唱へられ出すであらうと云ふ事は疑ふ餘地のない事柄である。それにしても自由黨の凋落は餘りにも甚しきものとして人の注目を引いたのである。そして自由黨が兎も角その議員數を增加せしめ乍らも尚四十六議席の地盤の半數近くを失つたと云ふ事は自由黨その物の甚だ不安定なる事を想はしめる。

然らば華々しかりしロイド・ジョージ一黨の奮戰と無限に費されたる選擧費とは結局に於て如何なる結果を齎したのであるか。それは要するに反勞働黨側の投票を二分したのに過ぎない。「實際に於て諸君有權者のなすべき選擇は二つしかない。勞働黨に投票し國有案の危險に面し、苛斂誅求に甘んずるか、此大なる困難の打續く年に亙つて確固たる價値ある結果を齎した保守黨政府に再び信任を與へるかの二つである。三黨候補者の鼎立する選擧區に於て自由黨の當選の望みは全くない。それ故、國有案に不賛成なる自由黨員は宜しく保守黨議員に投票し投票の分裂よりする、勞働黨議員の當選を防がなければならない。」之は最初の政府黨のラヂオを通じての政見發表の時なされた率直なる訴へである。結果よりして、保守黨の杞憂の決して無意味のものでなかつた事は明らかである。外相(前)チエンバレンが、勞働黨の進出は一に全く自由黨の責任であると云つたのは何よりも先づ此の事であると考へられる。九つの舊選擧區の内の八つ迄を保守黨で抑へ、而もその中から四人迄の内閣員を出して居た、謂はゞ保守黨代々の地盤であつたバーミンガムで、自黨勞働大臣のスティール・メイトランドが落選したのみならず、自分自身も僅かに四三票の差を以て辛うじて當選し得たと云ふが如き苦戰の後の事であるから少からず憤慨して居た當座の事でもあらうが、確かに此の八ッ當りは當つて居る見解である。

四

勞働黨の進出の一原因が反勞働黨側の陣營の二分せられた事にあると云ふ事は、上述の通りである。併し乍らそれが勞働階級の不斷の選擧區各々に於ける政治的鬪爭の賜物であつたと云ふ事は論ずるまでもない事である。特に此度の如く比較的平靜裡に行はれた選擧に於ては日常の鬪爭の結果は最も露骨に現はれると見るべきであらう。

イギリスの勞働運動史を繙く人は、それが決して單純に向上の一路をたどつて來たものでないと云ふ事を識るであらう。恐慌が勞働組合を壓迫して、急激に組織勞働者の勢力を減少せしめた事は屢々である。又意識的になされたる法律的壓迫が勞働組合を窮地に陷れた事も一度や二度ではない。併し、不況が經濟的鬪爭の希望を薄弱ならしめ、資本家の攻勢が勞働者の地位を危からしめた時、或は又勞働組合壓迫が法律を通して明確に宣言せられた時、何時も勞働階級の反撥は政治的領域に於ける進出となつて現れ出でた事を我々は見るのである。我々はかのタッフ・ヴェイル判決(一九〇一年)が勞働黨の確立を齎し、一九一九年以來の炭坑爭議を中心とした勞働階級の經濟的方面に於

ける敗北が、やがては勞働黨の一九二三年に於ける一大躍進を生み、續いて一九二四年の勞働黨內閣を造り出すに少からぬ動因であつた事を識る。保守黨の絕對多數を擁せる新議會の現出(一九二四年)は勞働階級をして一時その勢力を經濟的鬪爭に向けしむる結果を歸した。その結果が一九二六年の全國的ストライキに於いて最高潮に達したと云ふ事は人の知る所である。併し、政府を背景にせず議會の多數をも賴む能はざる此の鬪爭が無慘なる敗北に終つた時、再び眼は政治的方面に轉ぜられた。特に橫車を通して造り上げられた勞働組合壓迫の新法案の出でたと云ふ事は、勞働階級の日常鬪爭を一層熱意あるものたらしめたのである。

來るべき總選擧のために長い時間に亘る準備がなされつゝあつた。選擧區選擧區毎に蝨殺しに地盤を擴張するがために、勞働階級のランク・エンド・ファイルが何の位努力を拂ひつゝあつたかを識る人は、決して此の度びの一大進出の、單なる儲物でないと云ふ事を認めないわけには行かないであらう。

かの全國的ストライキの結果が實際に於て如何なるものであつたかを、人は今こそ識る。勞働黨の勝利は各選擧にあつて、朝に夕に宣傳と說得に從事しつゝあつた。勞働階級のランク・エンド・ファイルの努力の報酬であり、勞働黨が持つ、地方地方に網の如く行きとゞいた準備の機關である。

併し乍ら現在に於ける[illegible]、[illegible]、二黨以上勞働黨の得票を增加せしめる事は不可能であらう、さうして[illegible]勞働が一致した時、勞働黨は再び、そして當分の間は、第一黨となりうる望みがないのではあるまいかと云ふ疑ひがない事はない。自分は此の點について何等の憶測をなさうとは思はない。たゞ今次の勞働黨總得票が分つて、即ち一九二〇年末に於ける總組織勞働者數と略々相等しいと云ふ事實を擧げるに止める。即ちシトラインの擧げる所によれば總組合員數八、三三四、〇〇〇——內男六、九九四、〇〇〇、女、一、三四〇——であつた。

次に勞働黨發達の經過を知る上に役立つべく、それの數的變遷を示す。因に一九〇〇年は勞働代表委員會の出來た年であり、一九〇六年はそれが勞働黨となつた年である。

總選擧	候補者數	當選者數	得票數	勞働黨々員數
一九〇〇	一五	二	六二、六九八	三七五、九三一
一九〇六	五〇	二九	三二三、一九五	九二一、二八〇
一九一〇(一月)	七八	四〇	五〇五、六九〇	一、四三〇、五三九
一九一〇(十二月)	五六	四二	三七〇、八〇二	一、四三〇、五三九
一九一八	三六一	五七	二、二四四、九四五	三、〇一三、一二九
一九二二	四一四	一四二	四、二三六、七三三	三、三一一、〇三六

然らば華々しかりしロイド・ジョージ一黨の奮戰と無限に費されたる選擧費とは結局に於て如何なる結果を齎したのであるか。それは要するに反勞働黨側の投票を二分したのに過ぎない。

「實際に於て諸君有權者のなすべき選擇は二つしかない。勞働黨に投票し國有案の危險に面し、苛斂誅求に甘んずるか、此大なる困難の打續く年に亙つて確固たる價値ある結果を齎した保守黨政府に再び信任を與へるかの二つである。三黨候補者の鼎立する選擧區に於て自由黨の當選の望みは全くない。それ故、國有案に不贊成なる自由黨員は宜しく保守黨議員に投票し投票の分裂よりする、勞働黨議員の當選を防がなければならない。」之は最初の政府黨のラヂオを通じての政見發表の時なされた率直なる訴へである。結果よりして、保守黨の杞憂の決して無意味のものでなかつた事は明らかである。外相(前)チエンバレンが、勞働黨の進出は一に全く自由黨の責任であると云つたのは何よりも先づ此の事であると考へられる。九つの舊選擧區の内の八つ迄を保守黨で抑へ、而もその中から四人迄の内閣員を出して居た、謂はゞ保守黨代々の地盤であつたバーミンガムで、自黨勞働大臣のスティール・メイトランドが落選したのみならず、自分自身も僅かに四三票の差を以て辛うじて當選し得たと云ふが如き苦戰の後の事であるから少からず憤慨して居た當座の事でもあらうが、確かに此の八ツ當りは當つて居る見解である。

四

勞働黨の進出の一原因が反勞働黨側の陣營の二分せられた事にあると云ふ事は、上述の通りである。併し乍らそれが勞働階級の不斷の選擧區各々に於ける政治的闘爭の賜物であつたと云ふ事は論ずるまでもない事である。特に此度の如く比較的平靜裡に行はれた選擧に於ては日常の闘爭の結果は最も露骨に現はれると見るべきであらう。

イギリスの勞働運動史を繙く人は、それが決して單純に向上の一路をたどつて來たものでないと云ふ事を識るであらう。恐慌が勞働組合を壓迫して、急激に組織勞働者の勢力を減少せしめた事は屢々である。又意識的になされたる法律的壓迫が勞働組合を窮地に陷れた事も一度や二度ではない。併し、不況が經濟的闘爭の希望を薄弱ならしめ、資本家の攻勢が勞働者の地位を危からしめた時、或は又勞働組合壓迫が法律を通して明確に宣言せられた時、何時も勞働階級の反撥は政治的領域に於ける進出となつて現れ出でた事を我々は見るのである。我々はかのタッフ・ヴェイル判決(一九〇一年)が勞働黨の確立を齎し、一九一九年以來の炭坑爭議を中心とした勞働階級の經濟的方面に於

ける敗北が、やがては勞働黨の一九二三年に於ける一大躍進を生み、續いて一九二四年の勞働黨內閣を造り出すに少からぬ動因であつた事を識る。保守黨の絶對多數を擁せる新議會の現出(一九二四年)は勞働階級をして一時その勢力を經濟的鬪爭に向けしむる結果を齎した。その結果が一九二六年の全國的ストライキに於いて最高潮に達したと云ふ事は人の知る所である。併し、政府を背景にせず議會の多數をも賴む能はざる此の鬪爭が無慘なる敗北に終つた時、再び眼は政治的方面に轉ぜられた。特に横車を通して造り上げられた勞働組合壓迫の新法案の出でたと云ふ事は、勞働階級の日常鬪爭を一層熱意あるものたらしめたのである。

來るべき總選擧のために長い時間に亙る準備がなされつゝあつた。選擧區選擧區每に亟殺しに地盤を擴張するがために、勞働階級のランク・エンド・ファイルが何の位努力を拂ひつゝあつたかを識る人は、決して此の度びの一大進出の、單なる儲物でないと云ふ事を認めないわけには行かないであらう。

かの全國的ストライキの結果が實際に於て如何なるものであつたかを、人は今こそ識る。勞働黨の勝利は各選擧にあつて、朝に夕に宣傳と說得に從事しつゝあつた。勞働階級のランク・エンド・ファイルの努力の報酬であり、勞働黨が持つ、地方地方

に組の如く行き[illegible]對にこれを併し乍ら如何に保守黨議員[illegible]、之以上保守黨の投票を增加せしめる事は不可能であらう、さうして將來は保守黨內閣が一致した時、勞働黨は再び、そして當分の間は、第一黨となりうる望みがないのではあるまいかと云ふ疑ひがない事はない。たゞ自分は此の點について何等の憶測をなさうとは思はない。

今次の勞働黨總得票が合つて、卽ち一九二〇年末に於ける總組織勞働者數と略々相等しいと云ふ事實を擧げるに止める。卽ちシトラインの擧げる所によれば總組合員數八、三三四、〇〇〇――內男六、九九四、〇〇〇、女、一、三四〇――であつた。

次に勞働黨發達の經過を知る上に役立つべく、それの數的變遷を示す。因に一九〇〇年は勞働代表委員會の出來た年であり、一九〇六年はそれが勞働黨となつた年である。

總選擧	候補者數	當選者數	得票數	勞働黨々員數
一九〇〇	一五	二	六二、六九八	三七五、九三一
一九〇六	五〇	二九	三二三、一九五	九二一、二八〇
一九一〇(一月)	七八	四〇	五〇五、六九〇	一、四三〇、五三九
一九一〇(十二月)	五六	四二	三七〇、八〇二	一、四三〇、五三九
一九一八	三六一	五七	二、二四四、九四五	三、〇一三、一二九
一九二三	四一四	一四二	四、二三六、七三三	三、三一一、〇三六

然らば華々しかりしロイド・ジョージ一黨の奮戰と無限に費されたる選擧費とは結局に於て如何なる結果を齎したのであるか。それは要するに反勞働黨側の投票を二分したのに過ぎない。『實際に於て諸君有權者のなすべき選擇は二つしかない。勞働黨に投票し國有案の危險に面し、苛斂誅求に甘んずるか、此大なる困難の打續く年に亙つて確固たる價値ある結果を齎した保守黨政府に再び信任を與へるかの二つである。三黨候補者の鼎立する選擧區に於て自由黨の當選の望みは全くない。それ故、國有案に不贊成なる自由黨員は宜しく保守黨議員に投票し投票の分裂よりする、勞働黨議員の當選を防がなければならない。』之は最初の政府黨のラヂオを通じての政見發表の時なされた率直なる訴へである。結果よりして、保守黨の杞憂の決して無意味のものでなかつた事は明らかである。外相(前)チエンバレンが、勞働黨の進出は一に全く自由黨の責任であると云つたのは何よりも先づ此の事であると考へられる。九つの舊選擧區の内の八つ迄を保守黨で抑へ、而もその中から四人迄の内閣員を出して居た、謂はゞ保守黨代々の地盤であつたバーミンガムで、自黨勞働大臣のスティール・メイトランドが落選したのみならず、自分自身も僅かに四三票の差を以て辛うじて當選し得たと云ふが如き苦戰の後の事であるから少からず憤慨して居た當座の事でもあらうが、確かに此の八ッ當りは當つて居る見解である。

四

勞働黨の進出の一原因が反勞働黨側の陣營の二分せられた事にあると云ふ事は、上述の通りである。併し乍らそれが勞働階級の不斷の選擧區各々に於ける政治的鬪爭の賜物であつたと云ふ事は論ずるまでもない事である。特に此度の如く比較的平靜裡に行はれた選擧に於ては日常の鬪爭の結果は最も露骨に現はれると見るべきであらう。

イギリスの勞働運動史を繙く人は、それが決して單純に向上の一路をたどつて來たものでないと云ふ事を識るであらう。恐慌が勞働組合を壓迫して、急激に組織勞働者の勢力を減少せしめた事は屢々である。又意識的になされたる法律的壓迫が勞働組合を窮地に陷れた事も一度や二度ではない。併し、不況が經濟的鬪爭の希望を薄弱ならしめ、資本家の攻勢が勞働者の地位を危からしめた時、或は又勞働組合壓迫が法律を通して明確に宣言せられた時、何時も勞働階級の反撥は政治的領域に於ける進出となつて現れ出でた事を我々は見るのである。我々はかのタッフ・ヴェイル制決(一九〇一年)が勞働黨の確立を齎し、一九一九年以來の炭坑爭議を中心とした勞働階級の經濟的方面に於

ける敗北が、やがては勞働黨の一九二二年に於ける一大躍進を生み、續いて一九二四年の勞働黨內閣を造り出すに少からぬ動因であつた事を識る。保守黨の絕對多數を擁せる新議會の現出(一九二四年)は勞働階級をして一時その勢力を經濟的鬪爭に向けしむる結果を歸した。その結果が一九二六年の全國的ストライキに於いて最高潮に達したと云ふ事は人の知る所である。併し、政府を背景にせず議會の多數をも賴む能はざる此の鬪爭が無慘なる敗北に終つた時、再び眼は政治的方面に轉ぜられた。特に橫車を通して造り上げられた勞働組合壓迫の新法案の出でたと云ふ事は、勞働階級の日常鬪爭を一層熱意あるものたらしめたのである。

來るべき總選擧のために長い時間に亙る準備がなされつゝあつた。選擧區選擧區每に虱殺しに地盤を擴張するがために、勞働階級のランク・エンド・ファイルが何の位努力を拂ひつゝあつたかを識る人は、決して此の度びの一大進出の、單なる儲物でないと云ふ事を認めないわけには行かないであらう。

かの全國的ストライキの結果が實際に於て如何なるものであつたかを、人は今こそ識る。勞働黨の勝利は各選擧にあつて、朝に夕に宣傳と說得に從事しつゝあつた。勞働階級のランク・エンド・ファイルの努力の報酬であり、勞働黨が持つ、地方地方

この調の如く行きこゝいふた傾向で發現される。

併し斯の如何に急に延長、終りで……、これ以上勞働黨の投票を增加せしめる事は不可能であらう、さうして將來保守自由が一致した時、勞働黨は再び、そして當分の間は、第一黨となりうる望みがないのではあるまいかと云ふ疑ひがない事はない。たゞ自分は此の點について何等の臆測をなさうとは思はない。今次の勞働黨總得票が分つて、即ち一九二〇年末に於ける總組織勞働者數と略々相等しいと云ふ事實を擧げるに止める。即ちシトラインの擧げる所によれば總組合員數八、三三四、〇〇〇——內男六、九九四、〇〇〇、女一、三四〇〇——であつた。

次に勞働黨發達の經過を知る上に役立つべく、それの數的變遷を示す。因に一九〇〇年は勞働代表委員會の出來た年であり、一九〇六年はそれが勞働黨となつた年である。

總選擧	候補者數	當選者數	得票數	勞働黨々員數
一九〇〇	一五	二	六二、六九八	三七五、九三一
一九〇六	五〇	二九	三二三、一九五	九二一、二八〇
一九一〇(一月)	七八	四〇	五〇五、六九〇	一、四三〇、五三九
一九一〇(十二月)	五六	四二	三七〇、八〇二	一、四三〇、五三九
一九一八	三六一	五七	二、二四四、九四五	三、〇一三、一二九
一九二二	四一四	一四二	四、二三六、七三三	三、三一一、〇三六

然らば華々しかりしロイド・ジョージ一黨の奮戰と無限に費されたる選擧費とは結局に於て如何なる結果を齎したのであるか。それは要するに反勞働黨側の投票を二分したのに過ぎない。「實際に於て諸君有權者のなすべき選擇は二つしかない。勞働黨に投票し國有案の危險に面し、苛斂誅求に甘んずるか、此大なる困難の打續く年に亙つて確固たる價値ある結果を齎した保守黨政府に再び信任を與へるかの二つである。三黨候補者の鼎立する選擧區に於て自由黨の當選の望みは全くない。それ故、國有案に不賛成なる自由黨員は宜しく保守黨議員に投票し投票の分裂よりする、勞働黨議員の當選を防がなければならない。」之は最初の政府黨のラヂオを通じての政見發表の時なされた率直なる訴へである。結果よりして、保守黨の杞憂の決して無意味のものでなかつた事は明らかである。外相(前)チエンバレンが、勞働黨の進出は一に全く自由黨の責任であると云つたのは何よりも先づ此の事であると考へられる。九つの舊選擧區の内の八つ迄を保守黨で抑へ、而もその中から四人迄の内閣員を出して居た、謂はゞ保守黨代々の地盤であつたバーミンガムで、自黨勞働大臣のスティール・メイトランドが落選したのみならず、自分自身も僅かに四三票の差を以て辛うじて當選し得たと云ふが如き苦戰の後の事であるから少からず憤慨して居た當座の事でもあらうが、確かに此の八ッ當りは當つて居る見解である。

四

勞働黨の進出の一原因が反勞働黨側の陣營の二分せられた事にあると云ふ事は、上述の通りである。併し乍らそれが勞働階級の不斷の選擧區各々に於ける政治的鬪爭の賜物であつたと云ふ事は論ずるまでもない事である。特に此度の如く比較的平靜裡に行はれた選擧に於ては日常の鬪爭の結果は最も露骨に現はれると見るべきであらう。

イギリスの勞働運動史を繙く人は、それが決して單純に向上の一路をたどつて來たものでないと云ふ事を識るであらう。恐慌が勞働組合を壓迫して、急激に組織勞働者の勢力を減少せしめた事は屢々である。又意識的になされたる法律的壓迫が勞働組合を窮地に陷れた事も一度や二度ではない。併し、不況が經濟的鬪爭の希望を薄弱ならしめ、資本家の攻勢が勞働者の地位を危からしめた時、或は又勞働組合壓迫が法律を通して明確に宣言せられた時、何時も勞働階級の反撥は政治的領域に於ける進出となつて現れ出でた事を我々は見るのである。我々はかのタッフ・ヴェィル判決(一九〇一年)が勞働黨の確立を齎し、一九一九年以來の炭坑爭議を中心とした勞働階級の經濟的方面に於

ける敗北が、やがては勞働黨の一九二二年に於ける一大躍進を生み、續いて一九二四年の勞働黨内閣を造り出すに少なからぬ動因であつた事を識る。保守黨の絶對多數を擁せる新議會の現出(一九二四年)は勞働階級をして一時その勢力を經濟的鬪爭に向けしむる結果を齎した。その結果が一九二六年の全國的ストライキに於いて最高潮に達したと云ふ事は人の知る所である。併し、政府を背景にせず議會の多數をも頼む能はざる此の鬪爭が無慘なる敗北に終つた時、再び眼は政治的方面に轉ぜられた。特に横車を通して造り上げられた勞働組合壓迫の新法案の出でたと云ふ事は、勞働階級の日常鬪爭を一層熱意あるものたらしめたのである。

來るべき總選擧のために長い時間に亙る準備がなされつゝあつた。選擧區選擧區毎に亟殺しに地盤を擴張するがために、勞働階級のランク・エンド・ファイルが何の位努力を拂ひつゝあつたかを識る人は、決して此の度びの一大進出の、單なる儲物でないと云ふ事を認めないわけには行かないであらう。

かの全國的ストライキの結果が實際に於て如何なるものであつたかを、人は今こそ識る。勞働黨の勝利は各選擧にあつて、朝に夕に宣傳と說得に從事しつゝあつた。勞働階級のランク・エンド・ファイルの努力の報酬であり、勞働黨が持つ、地方地方に斯の如く行きさへしたら優位の地位にある。

併し乍ら選擧に於ける得票數の斯りをしても、之以上に保守黨の投票を增加せしめる事は不可能であらう、さうして將來反勞働黨が一致した時、勞働黨は再び、そして當分の間は、第一黨となりうる望みがないのではあるまいかと云ふ疑ひがない事はない。

自分は此の點について何等の憶測をなさうとは思はない。たゞ今次の勞働黨總得票が分つて、即ち一九二〇年末に於ける總組織勞働者數と略々相等しいと云ふ事實を擧げるに止める。即ちシトラインの擧げる所によれば總組合員數八、三三四、〇〇〇――内男六、九九四、〇〇〇、女、一、三四〇――であつた。

次に勞働黨發達の經過を知る上に役立つべく、それの數的變遷を示す。因に一九〇〇年は勞働代表委員會の出來た年であり、一九〇六年はそれが勞働黨となつた年である。

總選擧	候補者數	當選者數	得票數	勞働黨々員數
一九〇〇	一五	二	六二、六九八	三七五、九三一
一九〇六	五〇	二九	三二三、一九五	九二一、二八〇
一九一〇(一月)	七八	四〇	五〇五、六九〇	一、四三〇、五三九
一九一〇(十二月)	五六	四二	三七〇、八〇二	一、四三〇、五三九
一九一八	三六一	五七	二、二四四、九四五	三、〇一三、一二九
一九二三	四一四	一四二	四、二三六、七三三	三、三一一、〇三六

然らば華々しかりしロイド・ジョージ一黨の奮戰と無限に費されたる選擧費とは結局に於て如何なる結果を齎したのであるか。それは要するに反勞働黨側の投票を二分したのに過ぎない。「實際に於て諸君有權者のなすべき選擇は二つしかない。勞働黨に投票し國有案の危險に面し、苛斂誅求に甘んずるか、此大なる困難の打續く年に亙つて確固たる價値ある結果を齎した保守黨政府に再び信任を與へるかの二つである。三黨候補者の鼎立する選擧區に於て自由黨の當選の望みは全くない。それ故、國有案に不賛成なる自由黨員は宜しく保守黨議員に投票し投票の分裂よりする、勞働黨議員の當選を防がなければならない。」之は最初の政府黨のラヂオを通じての政見發表の時なされた率直なる訴へである。結果よりして、保守黨の杞憂の決して無意味のものでなかつた事は明らかである。外相(前)チエンバレンが、勞働黨の進出は一に全く自由黨の責任であると云つたのは何よりも先づ此の事であると考へられる。九つの舊選擧區の内の八つ迄を保守黨で抑へ、而もその中から四人迄の內閣員を出して居た、謂はゞ保守黨代々の地盤であつたバーミンガムで、自黨勞働大臣のスティール・メイトランドが落選したのみならず、自分自身も僅かに四三票の差を以て辛うじて當選し得たと云ふが如き苦戰の後の事であるから少からず憤慨して居た當座の事でもあらうが、確かに此の八ッ當りは當つて居る見解である。

四

勞働黨の進出の一原因が反勞働黨側の陣營の二分せられた事にあると云ふ事は、上述の通りである。併し乍らそれが勞働階級の不斷の選擧區各々に於ける政治的鬪爭の賜物であつたと云ふ事は論ずるまでもない事である。特に此度の如く比較的平靜裡に行はれた選擧に於ては日常の鬪爭の結果は最も露骨に現はれると見るべきであらう。

イギリスの勞働運動史を繙く人は、それが決して單純に向上の一路をたどつて來たものでないと云ふ事を識るであらう。恐慌が勞働組合を壓迫して、急激に組織勞働者の勢力を減少せしめた事は屢々である。又意識的になされたる法律的壓迫が勞働組合を窮地に陷れた事も一度や二度ではない。併し、不況が經濟的鬪爭の希望を薄弱ならしめ、資本家の攻勢が勞働者の地位を危からしめた時、或は又勞働組合壓迫が法律を通して明確に宣言せられた時、何時も勞働階級の反撥は政治的領域に於ける進出となつて現れ出でた事を我々は見るのである。我々はかのタッフ・ヴェイル判決(一九〇一年)が勞働黨の確立を齎し、一九一九年以來の炭坑爭議を中心とした勞働階級の經濟的方面に於

ける敗北が、やがては勞働黨の一九二二年に於ける一大躍進を生み、續いて一九二四年の勞働黨內閣を造り出すに少からぬ動因であつた事を識る。保守黨の絕對多數を擁せる新議會の現出(一九二四年)は勞働階級をして一時その勢力を經濟的鬪爭に向けしむる結果を歸した。その結果が一九二六年の全國的ストライキに於いて最高潮に達したと云ふ事は人の知る所である。併し、政府を背景にせず議會の多數をも頼む能はざる此の鬪爭が無慘なる敗北に終つた時、再び眼は政治的方面に轉ぜられた。特に橫車を通して造り上げられた勞働組合壓迫の新法案の出でたと云ふ事は、勞働階級の日常鬪爭を一層熱意あるものたらしめたのである。

來るべき總選擧のために長い時間に亙る準備がなされつゝあつた。選擧區選擧區毎に亟殺しに地盤を擴張するがために、勞働階級のランク・エンド・ファイルが何の位努力を拂ひつゝあつたかを識る人は、決して此の度びの一大進出の、單なる僥物でないと云ふ事を認めないわけには行かないであらう。

かの全國的ストライキの結果が實際に於て如何なるものであつたかを、人は今こそ識る。勞働黨の勝利は各選擧にあつて、朝に夕に宣傳と說得に從事しつゝあつた。勞働階級のランク・エンド・ファイルの努力の報酬であり、勞働黨が持つ、地方地方に到の如く行きこゝに於いて保守黨の勝利である。

併し乍ら如何に勞働黨が得票數の努力をしても、之以上保守黨の投票を增加せしめる事は不可能であらう、さうして將來は勞働階級が一致した時、勞働黨は再び、そして當分の間は、第一黨となりうる望みがないのではあるまいかと云ふ疑ひがない事はない。たゞ自分は此の點について何等の臆測をなさうとは思はない。今次の勞働黨總得票が曾つて、即ち一九二〇年末に於ける總組織勞働者數と略々相等しいと云ふ事實を擧げるに止める。即ちシトラインの擧ける所によれば總組合員數八、三三四、〇〇〇——內男六、九九四、〇〇〇、女、一、三四〇——であつた。

次に勞働黨發達の經過を知る上に役立つべく、それの數的變遷を示す。因に一九〇〇年は勞働代表委員會の出來た年であり、一九〇六年はそれが勞働黨となつた年である。

總選擧	候補者數	當選者數	得票數	勞働黨々員數
一九〇〇	一五	二	六二、六九八	三七五、九三一
一九〇六	五〇	二九	三二三、一九五	九二一、二八〇
一九一〇(一月)	七八	四〇	五〇五、六九〇	一、四三〇、五三九
一九一〇(十二月)	五六	四二	三七〇、八〇二	一、四三〇、五三九
一九一八	三六一	五七	二、二四四、九四五	三、〇一三、一二九
一九二二	四一四	一四二	四、二三六、七三三	三、三一一、〇三六

然らば華々しかりしロイド・ジョージ一黨の奮戰と無限に費されたる選擧費とは結局に於て如何なる結果を齎したのであるか。それは要するに反勞働黨側の投票を二分したのに過ぎない。「實際に於て諸君有權者のなすべき選擇は二つしかない。勞働黨に投票し國有案の危險に面し、苛斂誅求に甘んずるか、此大なる困難の打續く年に亙つて確固たる價値ある結果を齎した保守黨政府に再び信任を與へるかの二つである。三黨候補者の鼎立する選擧區に於て自由黨の當選の望みは全くない。それ故、國有案に不贊成なる自由黨員は宜しく保守黨議員に投票し投票の分裂よりする、勞働黨議員の當選を防がなければならない。」之は最初の政府黨のラヂオを通じての政見發表の時なされた率直なる訴へである。結果よりして、保守黨の杞憂の決して無意味のものでなかつた事は明らかである。外相(前)チエンバレンが、勞働黨の進出は一に全く自由黨の責任であると云つたのは何よりも先づ此の事であると考へられる。九つの舊選擧區の內の八つ迄を保守黨で抑へ、而もその中から四人迄の內閣員を出して居た、謂はゞ保守黨代々の地盤であつたバーミンガムで、自黨勞働大臣のスティール・メイトランドが落選したのみならず、自分自身も僅かに四三票の差を以て辛うじて當選し得たと云ふが如き苦戰の後の事であるから少からず憤慨して居た當座の事でもあらうが、確かに此の八ッ當りは當つて居る見解であらう。

四

勞働黨の進出の一原因が反勞働黨側の陣營の二分せられた事にあると云ふ事は、上述の通りである。併し乍らそれが勞働階級の不斷の選擧區各々に於ける政治的鬪爭の賜物であつたと云ふ事は論ずるまでもない事である。特に此度の如く比較的平靜裡に行はれた選擧に於ては日常の鬪爭の結果は最も露骨に現はれると見るべきであらう。

イギリスの勞働運動史を繙く人は、それが決して單純に向上の一路をたどつて來たものでないと云ふ事を識るであらう。恐慌が勞働組合を壓迫して、急激に組織勞働者の勢力を減少せしめた事は屢々である。又意識的になされたる法律的壓迫が勞働組合を窮地に陷れた事も一度や二度ではない。併し、不況が經濟的鬪爭の希望を薄弱ならしめ、資本家の攻勢が勞働者の地位を危からしめた時、或は又勞働組合壓迫が法律を通して明確に宣言せられた時、何時も勞働階級の反撥は政治的領域に於ける進出となつて現れ出でた事を我々は見るのである。我々はかのタッフ・ヴェイル判決(一九〇一年)が勞働黨の確立を齎し、一九一九年以來の炭坑爭議を中心とした勞働階級の經濟的方面に於

ける敗北が、やがては勞働黨の一九二二年に於ける一大躍進を生み、續いて一九二四年の勞働黨内閣を造り出すに少からぬ動因であつた事を識る。保守黨の絶對多數を擁せる新議會の現出(一九二四年)は勞働階級をして一時その勢力を經濟的闘爭に向けしむる結果を齎した。その結果が一九二六年の全國的ストライキに於いて最高潮に達したと云ふ事は人の知る所である。併し、政府を背景にせず議會の多數をも頼む能はざる此の闘爭が無慘なる敗北に終つた時、再び眼は政治的方面に轉ぜられた。特に横車を通して造り上げられた勞働組合壓迫の新法案の出でたと云ふ事は、勞働階級の日常闘爭を一層熱烈あるものたらしめたのである。

來るべき總選擧のために長い時間に亘る準備がなされつゝあつた。選擧區選擧區毎に虱殺しに地盤を擴張するがために、勞働階級のランク・エンド・ファイルが何の位努力を拂ひつゝあつたかを識る人は、決して此の度びの一大進出の、單なる儲物でないと云ふ事を認めないわけには行かないであらう。

かの全國的ストライキの結果が實際に於て如何なるものであつたかを、人は今こそ識る。勞働黨の勝利は各選擧にあつて、朝に夕に宣傳と説得に從事しつゝあつた。勞働階級のランク・エンド・ファイルの努力の報酬であり、勞働黨が持つ、地方地方に網の如く行きとゞいた組織の賜物である。

併し乍ら如何に保守黨が、焦りをしても、之以上勞働黨の投票を増加せしめる事は不可能であらう、さうして將來保自兩黨が一致した時、勞働黨は再び、そして當分の間は、第一黨となりうる望みがないのではあるまいかと云ふ疑ひがない事はない。自分は此の點について何等の臆測をなさうとは思はない。たゞ今次の勞働黨總得票が曾つて、即ち一九二〇年末に於ける總組織勞働者數と略々相等しいと云ふ事實を擧げるに止める。即ちシトラインの擧げる所によれば總組合員數八、三三四、〇〇〇――内男六、九九四、〇〇〇、女、一、三四〇――であつた。

次に勞働黨發達の經過を知る上に役立つべく、それの數的變遷を示す。因に一九〇〇年は勞働代表委員會の出來た年であり、一九〇六年はそれが勞働黨となつた年である。

總選擧	候補者數	當選者數	得票數	勞働黨々員數
一九〇〇	一五	二	六二、六九八	三七五、九三一
一九〇六	五〇	二九	三二三、一九五	九二一、二八〇
一九一〇(一月)	七八	四〇	五〇五、六九〇	一、四三〇、五三九
一九一〇(十二月)	五六	四二	三七〇、八〇二	一、四三〇、五三九
一九一八	三六一	五七	二、二四四、九四五	三、〇一三、一二九
一九二二	四一四	一四二	四、二三六、七三三	三、三一一、〇三六

一九二三	四二七	一九一	四、三四八、三七九	三、一五五、九一一
一九二七	五一四	一五一	五、五五一、五四九	三、一九四、三九九
一九二九	五七〇	二八七	八、五七五、〇〇〇(概算)	三、六〇五、〇〇〇

共産黨は勞働黨に對する反對を強調し、これが保守黨、自由黨と同じく資本家階級に屬する政黨に他ならざる事を明確に宣言して闘ひ、故に勞働黨幹部の選擧區に於て之と對抗して闘つた。併し、結果の表に明らかなる如く凡て不成功に終つたのみならず、唯一の黨所屬議員であつたサクラトバラさへも勞働黨にその議席を奪はれてしまつた。

五

勞働黨が絶對多數を制して居ないと云ふ事は色々の揣摩憶測の原因となつたにも拘らず、政府は辭職し、政權は第一黨たる勞働黨に移され、此處に第二次の勞働黨內閣が生れた。閣員の名を一見して直ちに氣付く事は、工務大臣に任ぜられたランスベリーをのけたすべてが曾つて政府委員たりし經驗を持つと云ふ事柄である。第一次の勞働黨內閣當時勞働黨が一番困難を感じたと云ふ事は政府員となつた人々が政府の複雜な組織に通曉して居らず、よくこれを活用する事が出來なかつた點であると云はれて居る。勿論下院に於て第二黨たるの地位しか持つて居なかつた事が勞働黨內閣の政策の實行を制限したには相異ないのであるが、政府員となつた人々が、政府のからくりをよく辨じてゐなかつたと云ふ事も確かにその一因であつたであらう。保守黨や自由黨の議員中には若い頃から直接間接に政府のからくりに接觸するの機會を多く持つ人々が勞働黨とは比べ物にならない程多いと云ふ事は云ふ迄もない。其故今次の人選はたゞ先輩を選び出したと云ふ事以上に、勞働黨が今度こそは思ふ存分に此の複雜な機構を自由に有效に動かして見やうと云ふ魂膽の現れであると考へられない事もないのである。

然らば新政府は如何なる政策を實行するであらうか。之に就ては五月一日を目ざしてその前日發表せられた勞働黨の選擧宣言が雄辯に物語るのであるが、議會に於て絶對多數を制し居らざる勞働黨政府が立法的方策に於て少からざる制限を餘儀なくせられると云ふ事は言ふをまたないと云ふ事は單純なる行政的活動に屬する方面に於いて活躍するであらうと云ふ事を意味する。外交に於ては國際聯盟に於ける軍縮の問題に更めて力が入れられ、ラインランド占領を中心とせる對佛對獨の關係の上にも或は重大なる變化を及ぼす事になるであらう。英米關係の親善、ロシアとの外交的並に通商的關係の復活、或は又ワシントン八時間勞働協定の批准の如きも必ず行はるべき事柄である。內政的

方面に於ては何と云つても失業救濟問題が最も重要なる地位を占めて居る。特別に之の爲の一機關が設置せられるであらうと云ふ、論議さへも喧傳せられつゝある如くである。勞働黨は「直ちに、又實際的に」此の問題に沒頭すると云ふ宣言の誓約は必ず實行せらるゝであらう。特に此の點に於ては勞働黨と自由黨とは相當に協調しうるのであるから。而して失業救濟策として第一に産業の振興と事業の計畫、第二に失業手當の增額、第三に養老年金被授年齡を下げ、義務教育年限を十五歲迄にする事によつて勞働市場の充溢を緩和する等の方策が選ばれるであらう。義務年限を上述の如く擧げる事は、約四〇〇、〇〇〇人の若年勞働者を勞働市場より引き拔く事であり、年金被授年齡を六十五歲に改正する事は約三五〇、〇〇〇人の老年工を勞働より引退せしめ得る事となるであらうと云はれて居る。その他稅制の改革、炭坑國有、一九二七年の勞働組合法の改正等重要な政策が宣言の文面には揭げられてある。併し、特に後の二つに就いて、勞働黨は之を強行する場合自由黨を敵に廻す恐れがあるのであるから愼重に事が運ばれる事と思はれる。

　要するに、勞働黨政府の再現は決して奇蹟をも齎さないであらうし、又或は目覺ましい躍進を立所に現出しないかも知れない。それでは一體勞働黨の面目が何處にあるのかと云ふ問題も起つて來るであらう。その問題に答へるのはたゞ勞働黨が社會主義であると云ふ事ではないのであらう。イギリスの社會がそれだけ既に或る變革の時機に乘りかゝつてゐる事をも當然考慮に入れなければならない。自由黨と勞働黨とは甚だ接近しつゝある。併し自由黨をして年來の自由放任政策をすて、それ程に迄勞働黨に接近せしめたのは、勞働黨の側に於ける勢力の增加ではないであらうか。又保守黨すらをして社會政策を口にし、婦人の權利の擴張を餘儀なくせしめた事に、勞働黨の勢力の膨張と云ふ事實が何等の關係をもたないであらうか。勞働黨の背景をなすものは將來のイギリス社會を規整すべき――又既に除々に規整しつゝある――基調であり、その意味に於ては、勞働黨も他の二黨と共に此の社會の移動・變位に引づられて居ると云ふ事に問題はない。たゞ勞働黨はその根柢を勞働階級のランク・エンド・ファイルに置いて居り、之等の平黨員の支持なくしては決してその勢力を持ち得ないと云ふ所に相異がある。

　一九二九年が二十世紀のイギリスに於ける一八一五年の役割を演ずるであらうか。之は何れにしても注目せらるべき問題でなければならない。

一九二三	四二七	一九一	四、三四八、三七九	三、一五五、九一一
一九二七	五一四	一五一	五、五五一、五四九	三、一九四、三九九
一九二九	五七〇	二八七	八、五七五、〇〇〇（概算）	三、六〇五、〇〇〇

共産黨は勞働黨に對する反對を強調し、それが保守黨、自由黨と同じく資本家階級に屬する政黨に他ならざる事を明確に宣言して鬪ひ、故に勞働黨幹部の選擧區に於て之と對抗して鬪つた。併し、結果の表に明らかなる如く凡て不成功に終つたのみならず、唯一の黨所屬議員であつたサクラトバラさへも勞働黨にその議席を奪はれてしまつた。

五

勞働黨が絶對多數を制して居ないと云ふ事は色々の揣摩憶測の原因となつたにも拘らず、政府は辭職し、政權は第一黨たる勞働黨に移され、此處に第二次の勞働黨内閣が生れた。閣員の名を一見して直ちに氣付く事は、工務大臣に任ぜられたランスベリーをのけたすべてが曾つて政府委員たりし經驗を持つと云ふ事柄である。第一次の勞働黨内閣當時勞働黨が一番困難を感じたと云ふ事は政府員となつた人々が政府の複雜な組織に通曉して居らず、よく之を活用する事が出來なかつた點であると云はれて居る。勿論下院に於て第二黨たるの地位しか持つて居なかつた事が勞働黨内閣の政策の實行を制限したには相異ないのであるが、政府員となつた人々が、政府のからくりをよく辨じてゐなかつたと云ふ事も確かにその一因であつたであらう。保守黨や自由黨の議員中には若い頃から直接間接に政府のからくりに接觸するの機會を多く持つ人々が勞働黨とは比べ物にならない程多いと云ふ事は云ふ迄もない。其故今次の人選はたゞ先輩を選び出したと云ふ事以上に、勞働黨が今度こそは思ふ存分に此の複雜な機構を自由に有效に動かして見やうと云ふ魂膽の現れであると考へられない事もないのである。

然らば新政府は如何なる政策を實行するであらうか。之に就ては五月一日を目ざしてその前日發表せられた勞働黨の選擧宣言が雄辯に物語るのであるが、議會に於て絶對多數を制し居らざる勞働黨政府が立法的方策に於て少からざる制限を餘儀なくせられると云ふ事は言ふをまたないと云ふ事は單純なる行政的活動に屬する方面に於いて活躍するであらうと云ふ事を意味する。外交に於ては國際聯盟に於ける軍縮の問題に更めて力が入れられ、ライン占領を中心とせる對佛對獨の關係の上にも或は重大なる變化を及ぼす事になるであらう。英米關係の親善、ロシアとの外交的並に通商的關係の復活、或は又ワシントン八時間勞働協定の批准の如きも必ず行はるべき事柄である。内政的

方面に於ては何と云つても失業救濟問題が最も重要なる政策を占めて居る。特別に之の爲の一機關が設置せられるであらうと云ふ、論議さへも喧傳せられつゝある如くである。勞働黨は直ちに、又實際的に此の問題に沒頭すると云ふ宣言の誓約は必ず實行せられるであらう。特に此の點に於ては勞働黨と自由黨とは相當に協調しうるのであるから。而して失業救濟策として第一に産業の振興と事業の計畫、第二に失業手當の增額、第三に養老年金被授年齡を下げ、義務敎育年限を十五歲迄にする事によつて勞働市場の充溢を緩和する等の方策が選ばれるであらう。義務年限を上述の如く擧げる事は、約四〇〇、〇〇〇人の若年勞働者を勞働市場より引き拔く事であり、年金被授年齡を六十五歲に改正する事は約三五〇、〇〇〇人の老年工を勞働より引退せしめ得る事となるであらうと云はれて居る。その他稅制の改革、炭坑國有、一九二七年の勞働組合法の改正等重要な政策が宣言の文面には揭げられてある。併し、特に後の二つに就いて、勞働黨は之を强行する場合自由黨を敵に廻す恐れがあるのであるから愼重に事が運ばれる事と思はれる。

　要するに、勞働黨政府の再現は決して奇蹟をも齎さないであらうし、又或は目覺ましい躍進を立所に現出しないかも知れない。それでは一體勞働黨の面目が何處にあるのかと云ふ問題も起つて來るであらう。この問題で起るのはたゞ保守黨が何時[illegible]ふであるとのみは言ふことはないのであつて、イギリスの社會が[illegible]それだけ既に或る變革の時機に乘りかゝつてゐる事をも當然考慮に入れなければならない。自由黨と勞働黨とは甚だ接近しつゝある。併し自由黨をして年來の自由放任政策をすて、それ程に迄勞働黨に接近せしめたのは、勞働黨の側に於ける勢力の增加ではないであらうか。又保守黨すらをして社會政策を口にし、婦人の權利の擴張を餘儀なくせしめた事に、勞働黨の勢力の膨張と云ふ事實が何等の關係をもたないであらうか。勞働黨の背景をなすものは將來のイギリス社會を規整すべき――又既に除々に規整しつゝある――基調であり、その意味に於ては、勞働黨も他の二黨と共に此の社會の移動・變位に引づられて居ると云ふ事に問題はない。たゞ勞働黨はその根柢を勞働階級のランク・エンド・ファイルに置いて居り、之等の小黨員の支持なくしては決してその勢力を持ち得ないと云ふ所に相異がある。

　一九二九年が二十世紀のイギリスに於ける一八一五年の役割を演ずるであらうか。之は何れにしても注目せらるべき問題でなければならない。

舗道エロティシズム

北村小松

　時は三月――いい氣候である。銀座まで出かけて行つて見たが、一週間ほど前に行つた時と、何のかわりがない。エロティックな何物も落つこちてゐない。失望したあげく私はおなかゞすいた。それで、例によつてオリンピックのドアをあけて中へはいつて行つたものである。入口の左つかわの、新鮮なヘッド・レタスがゴロゴロつまつてゐるガラス箱の上に生のまんまのアスパラガスが一本ニヨキリとつつ立つてゐる。生のまんまのアスパラガスを見るのはこれが生れて初めての私である。私は、卓に頬杖をついて、しげしげとそれを見つめたものである。所が突然私は可笑しくなつてしまつた。と云ふのは、いきなり腹の底で「これがエロティックかいな」と云ふ文句がひよいと出來上つたからである。私は友人の所で見せて貰つたフランスの色々なエロティックな繪を集めた本の中で見た、これは又何でもない、たゞ様々な婦人が食卓の前でアスパラガスをつまんで喰べてゐる繪を思ひ出したのである。あの繪は、これと云つて特別な姿態を描いたものでなく、たゞ指でアスパラガスをつまんで口へもつて行く様々の婦人を描いてあるだけだが、それでゐて、何となく、不思議にエロティックな感銘を與へる繪だつた。アスパラガスと云ふものは、こんなエロティックな感じのするものかな、とその時感心した氣もちが、ひよいと又首を出したにちがひないのである。で、變なものだな、と思つて、つくづくと見たらどうも實に變である。ガラスの箱の上に、一本ニヨキリと、つつたつてゐる青い生のアスパラガスがどうにも變で仕方がない。

　御婦人も二三人ゐて食事をしてゐるのにと氣にして見たが、婦人方の方は一向氣に止めないらしく鳥の脚かなにかをモリモリたべてゐるので、私はやつと安心して食事をすましたが、どうもまだ氣になるので、外へ出しなに支配人のY氏へ「これはアスパラガスですか？……變なもんですね」と云つたら、Y氏はたゞ「えゝ、へえ……」と云つて笑つたにすぎなかつた。私は、それで頭をかいて街の人混みの中へまぎれ込んでしまつた。

　人混みの中を歩いて行つたたつて別に何の事はない。もつとも、いつか、ある書物で見たら、あるお孃さんは、人混みの中を歩くだけで滿足だと云つたと書いてあつた。どう云ふ風に滿足だかと、云ふと、とにかく、色々な男と肩がふれ合つたり體がすれ合つたりするので滿足だと云ふ事だつたが、なんぼ私が太つちよで表面の面積が廣くても、そのお孃さんほど敏感でないからだめである。

　諸君は、かう云ふセリフを知つてゐるか知ら。――「奇蹟と云ふものを信じるこのわたくしはですな、もう幾月と云ふもの、それに飢えて町なかを驅けめぐつてゐましたんです。」

それはもう稲光りの様にすばしつこく、澤山な街角をあつちへ曲り、こつちへ曲りして、それをたづねまはつてゐたんですが、さう云ふわたくしに、當の奇蹟が、とある菩提樹の下に出現したぢやありませんか。日の光が浴びて、萠黄いろの木の幹に、茶がかつたかみのけを凭せかけて、度を失つた多くの眼に取りかこまれてゐる頼りなげな姿。愚かな、もの好きな群衆と、うつとりさせる様な受難の様。眼も眩みさうな神様の戯れです。わたくしはそのとき、まあ、どんなに人生のおそろしさに身ぶるひしたことでせう。あなたが地べたへ手をおやりになるまでの三瞬間にわたしのとも／＼に受けた苦しみが、つひ昨日までの戀人から心を引き離して、あなたのお傍へ近付けました。云々……云々……」

知らない方は一體　このセリフを云ふ男は何事を考へてゐるんだとあきれるであらう。――これはカール・シユテルンハイムの有名な芝居、「ホーゼ」(譯して『腰卷』と云ふ)の中で、菩木大通りへ王様のお通りを見に出かけて、思はず腰卷をおつことした小役人の妻君に、三つも見せてまざ／＼と目撃した詩人カスロンが云ふ戀慕の言葉である。

まだある。腰卷をおつことした兇景に感激して、その家へ間借りに來た一人の床屋のマンデルシユタムはかう云ふのだ。

『あつしはたつた一つ秘密を持つてゐます……それも今朝つからです。で、そいつを心の中からふるひ落す事が出來たら、どんなにか助かるんです。ほかの誰よりもづつと關係の深い事なんで……』

『あたしに？　どうして？　あたしに？』

『ごめんなすつて！』

『聞かせて下さい』

『全くあつしのせいぢやないんで……』

『どうぞ……聞かせて！』

『あつしはまだこんな場合にぶつつかつた事ああありません……でも……でも……もう云つちまひませう……あなたの腰卷きが！』

『何ですつて？』

『今日……あなたの……』

これは何とすばらしいベーヴメントのエロテイシズムだらう。これはシユテルンハイムの創作にはちがひないが、まさかお話しのお見てその女に魅惑されるなどと云ふこともちはありさうな氣がするではないか。さうでなくつたつて男は、思ひがけない事で、思ひがけなくも、思ひがけない女に魅惑される事があるのだから……。

だが、カスロンの言葉ではないがこんな風な『うつとりとさせる様な受難の様、眼も眩みさうな神様の戯れ』など、云ふものは、それこそ『澤山な街角を、あつちへ曲りこつちへ曲りして！』尋ね廻つたところでめつたにぶつつかるものではない。

もつとも私の友達が四谷でこの芝居と同じ様な場合にぶつつかつた事があるさうであるが非常に不愉快でちつとも『うつとりとさせる様な受難の様』ではなかつたと云つてゐる。でなくたつて鄰××と云ふやつは落つことさなくて店にブラ下げてあるだけで不愉快極まる代物であるからたまつたものでないのはきまり切つてゐる

所が、ここに作り話の様に滑稽でもあり悲

舗道エロティシズム

北村小松

時は三月――いい氣候である。銀座まで出かけて行つて見たが、一週間ほど前に行つた時と、何のかわりがない。エロティックな何物も落つこちてゐない。失望したあげく私はおなかゞすいた。それで、例によつてオリンピックのドアをあけて中へはいつて行つたものである。入口の左つかわの、新鮮なヘッド・レタスがゴロゴロつまつてゐるガラス箱の上に生のまんまのアスパラガスが一本ニヨキリとつつ立つてゐる。生のまんまのアスパラガスを見るのはこれが生れて初めての私である。私は、卓に頬杖をついて、しげしげとそれを見つめたものである。所が突然私は可笑しくなつてしまつた。と云ふのは、いきなり腹の底で「これがエロティックかいな」と云ふ文句がひよいと出來上つたからである。私は友人の所で見せて貰つたフランスの色々なエロティックな繪を集めた本の中で見た、これは又何でもない、たゞ様々な婦人が食卓の前でアスパラガスをつまんで喰べてゐる繪を思ひ出したのである。あの繪は、これと云つて特別な姿態を描いたものでなく、たゞ指でアスパラガスをつまんで口へもつて行く様々の婦人を描いてあるだけだが、それでゐて、何となく、不思議にエロティックな感銘を與へる繪だつた。アスパラガスと云ふものは、こんなエロティックな感じのするものかな、とその時感心した氣もちが、ひよいと又首を出したにちがひないのである。で、變なものだな、と思つて、つくづくと見たらどうも實に變である。ガラスの箱の上に、一本ニヨキリと、つつたつてゐる青い生のアスパラガスがどうにも變で仕方がない。

御婦人も二三人ゐて食事をしてゐるのにと氣にして見たが、婦人方の方は一向氣に止めないらしく鳥の脚かなにかをモリモリたべてゐるので、私はやつと安心して食事をすましたが、どうもまだ氣になるので、外へ出しなに支配人のY氏へ、「これはアスパラガスですか?……變なもんですね」と云つたら、Y氏はたゞ「えゝ、へえ……」と云つて笑つたにすぎなかつた。私は、それで頭をかいて街の人混みの中へまぎれ込んでしまつた。

人混みの中を歩いて行つたつて別に何の事はない。ちつとも、いつか、ある書物で見たら、あるお孃さんは、人混みの中を歩くだけで滿足だと云つたと書いてあつた。どう云ふ風に滿足だかと、云ふと、とにかく、色々な男と肩がふれ合つたり體がすれ合つたりするので滿足だと云ふ事だつたが、なんぼ私が太つちよで表面の面積が廣くても、そのお孃さんほど敏感でないからだめである。

諸君は、かう云ふセリフを知つてゐるか知ら。――「奇蹟と云ふものを信じるこのわたくしはですな、もう幾月と云ふもの、それに餓えて町なかを駆けめぐつてゐましたんです。」

それはもう眼光いの極にすばしつこく、沢山な街衢をあつちへ廻り、こつちへ廻りして、それをたづねまはつてゐたんですが、さう云ふわたくしに、森の奇蹟が、とある菩提樹の下に出現したぢやありませんか。日の光を浴びて、萌黄いろの木の幹に、茶がかつたかみのけを見せかけて、度を失つた多くの眼に取りかこまれてゐる頼りなげな姿。愚かな、もの好きな群衆と、うつとりさせる様な受難の様。眼も眩みさうな神様の戯れです。わたくしはそのとき、まあ、どんなに人生のおそろしさに身ぶるひしたことでせう。あなたが地べたへ手をおやりになるまでの瞬間にわたしのとも〴〵に受けた苦しみが、つひ昨日までの戀人から心を引き離して、あなたのお傍へ近付けました。云々……云々……」

知らない方は一體　このセリフを云ふ男は何事を考へてゐるんだとあきれるであらう。――これはカール・シユテルンハイムの有名な芝居、「ホーゼ」（譯して『腰卷』と云ふ）の中で、並木大通りへ王様のお通りを見に出かけて、思はず腰卷をおつことした小役人の妻君に、この悲愴なまでまざまざと目撃した詩人カスロンが云ふ讃歎の言葉である。

まだある。腰卷をおつことした光景に感激して、この家へ間借りに来た一人の床屋のマンデルシユタムはかう云ふのだ。

『あつしはたつた一つ秘密を持つてゐます……それも今朝つからです。で、そいつを心の中からふるひ落す事が出来たら、どんなにか助かるんです。ほかの誰よりもづつと關係の深い事なんで……』

『あたしに？　どうして？　あたしに？』

『ごめんなすつて！』

『聞かせて下さい』

『全くあつしのせいぢやないんで……』

『どうぞ……聞かせて！』

『あつしはまだこんな場合にぶつつかつた事ありません……でも……でも……もう云つちまひませう……あなたの腰卷きが！』

『何ですつて？』

『今日……あなたの……』

これは何とすばらしいペーヴメントのエロテイシズムだらう。これはシユテルンハイムの創作にはちがひないが、ホーゼを落したのを見てその女に魅惑されるなどと云ふ心もちはありさうな気がするではないか。さうでなくつたつて男は、思ひがけない事で、思ひがけなくも、思ひがけない女に魅惑される事があるのだから……。

だが、カスロンの言葉ではないがこんな風な『うつとりとさせる様な受難の様、眼も眩みさうな神様の戯れ』など、云ふものは、それこそ『沢山な街衢を、あつちへ廻りこつちへ廻りして！』尋ね廻つたところでめつたにぶつつかるものではない。

もつとも私の友達が四谷でこの芝居と同じ様な場合にぶつつかつた事があるさうであるが非常に不愉快でちつとも『うつとりとさせる様な受難の様』ではなかつたと云つてゐる。でなくたつて郷××と云ふやつは落つことさなくて店にブラ下げてあるだけで不愉快極まる代物であるからたまつたものでないのはきまり切つてゐる

所が、ここに作り話の様に滑稽でもあり悲

慘でもある話がある。――場所は函館であるが、あの函館の函館公園で、花見時分、人殺しがあつた事があつた。――それも丁度花見時分の事であるが、私の友人が、ふと耳をすますと『人殺しーつ！』と云ふ悲鳴が聞える。ぞつとした友人は「又人殺しだぜ！」と一所にゐた人をつついて武器を手にとつて外へ出て見た。「人殺しーつ！」と云ふ悲鳴は女だ。友人達が急いで聲のする方へ行つて見ると、驚いた事に公園の土手の所へ、下半身一絲もまとはない女がブラ下つて悲鳴を上げてゐる。つまり、土手の上のとげのある柵の針金に着物の裾をひつかけてあらう事か、脚からお尻からおなかまでさらけ出して叫んでゐるのである。友人等は驚きあきれながら、半分失神しさうになつてゐるその「お行儀のよくない」丸髷の婦人を助け下ろしてわけを聞くと、これ又驚いた。話によると、婦人はおつかひから歸りに公園を横切つて來た。するとあとから一人の人相のよくない男がついて來る。婦人が共同便所へはいると又一所にはひる。それで急いで出て早く家へ歸らうと土手を越えたら男が、ムンズとばかり裾を捕へてはなさない……と云ふのである。

事態が分ると婦人は火が出るほど恥かしがつて顔を兩方のたもとでかくしたまゝかけ出して行つた。

「あんな馬鹿馬鹿しいしどけない女の姿を俺は今まで見た事がない。」友人は今でもその話をすると大きな聲で笑ひ出す「實に、どうもはや何とも申し上げられない姿だつたぜ、しようつたつて、あんな滑稽な、そのくせエロティックな姿は、出來るもんぢやないぜワッハッハー……」と、かう云ふのである。

話は横へそれてしまつて街のペーブメントでなく公園の土手まで行つてしまつたが、まづ許して頂かう。まづペーブメントをアウト・ドアと云ふ事位にして……。

全く、銀座のペーブメントにはそんな實にどうもはや何とも申し上げられない様な事にぶつつからない。

ウインナー――あのシユニツツラーのウインナでは、最近、街を歩くと、實にストリートウオーカーが多いさうである。一人歩いてゐたらば、通りすがりの一婦人がいきなり、ハンドバツクを渡してよこしたんで驚いてゐるとしやがんで靴のひもを結びなほす。男の方で、あつけにとられてゐると結びなほした女は「どうも有難う……何とか何とかで、何とか云云……」と商賣をはじめるさうだ。この手は古いし一般的だが『それでカフェへ行つて見ると、喰ふものはなく、コーヒーか水だけだ。ウインナは、ひでえとこだよ。だから女だけでもたんとゐなくつちや』と最近歸つて來た人は笑つたが、銀座の女なんかは、ひよいとおぢぎをして、『遊びに行きませんか？』だからたよりない、それですぐ、人を氣にして見えなくなつたりするから……。

アメリカのになると電車のまつたゞ中で危い藝當をする。つまり、いきなり電車へのつて、來て座るやいなやヒヨイと脚を組む。

「なんだい！　そんな事なら、日本のモダンガールだつてすらあ……」と云ひつこなし。なにしろスカートは短いし、それにズロースをはいてないから危い藝當だと云ふのである。謹嚴そのもの丶やうなＵ氏は、一度、

けい顔でこれをやられて、眼のやりどころがないほど困つたと私に話して呉れた。

どうもいつれも聞いた話で恐縮だが、私が口吟したものと云つたら、何もないから弱つてしまふ。

いつだつたか、澁谷の方の通りを夜おそく歩いてゐたら、いきなり見知らない背廣服の紳士がおぢぎをした事がある。面喰つて私もおぢぎを返すと又、いきなりかう云ふのだ。

「寫眞、いりませんか？」

ははあ……と思つた私が「あれですか？」と云ふと「えゝ、さうです……」と嬉しさうにして内ポケットへ手をつつ込む。

「いえ！ いんですよ。僕は今金がないからだめですよ！」と私が云ふと、その紳士はうぢや、名刺を下さい。お宅へ伺ひますから……」とかう云ふのだ。私はそれで恐れをなして色々と斷つて逃げ歸つた事がある。

銀座でも時々、怪しげなかつこうをした男が、あたりに氣をくばる樣な樣子でキヨロ／＼しながら、小聲でコソコソとさも怪しげな繪はがきや本を賣つてゐる事がある。あれを、本なやなものだと思つて買つたら一杯くわされる　しかし、あの賣り方が仲々挑發的だから、見てゐると面白い。買ひたげにソワソワしてゐる組や、そつと買つて、一つ咳拂ひをして何くわぬ顔で場を外す、若い男やを見てゐると仲々興味深い。あれで、家へ歸る前に、どつかの横町で、胸をどきつかせながら、そつと開いて見て驚くだらうと思ふと、なほ面白い。

だが怪しげな話をすると、此の間ひどくグロテスクな話を聞いた。

所もあらうに有樂町のステーションに近い××ビルディングの横の空地。時間は、京濱の終電車にまに合ふか合はない、と云ふ時間。つまり、もう夜中である。夏トンビを着て、白足袋をはいた三十前後の男と、これは書生風の二十五六歳の男。――男と、男とゐるんだから、何も怪しいわけはないのであるが、この怪しいわけのない男が二人、エクストラオーデナリーであり、アブノーマルである狀態にあつたのであるから目撃者は驚いたのである。

「前に[illegible]」と目撃者の述懐である。

男と男と云ふと、私が十九の時の話を一

やつと田舍の中學を出て東京へやつて來て一ハンテイングと板製ゾーリで受驗生をしてゐた時分である。丁度今頃のある晩、たつた一人で日比谷公園に行つてローンの上に腰を下ろしていい心持ちになつてゐると、一人の西洋人がやつて來て、言葉をかけたものだ。田舍から出て來たばかりの私は、西洋人に言葉をかけられた珍らしさと好奇心とで一杯になつて色々と話し出したわけである。西洋人はひどくあやしげな日本語で、どこの學校だとか、何になるつもりだとか散々聞きちらしたあげく、「ソタクシ、セップン、デキマスカ？」と云ふのだ。

「え？」私が驚いた顔をあげると、西洋人は、いきなり、あのゴリラの樣に太い、大きい腕で私を抱き込んで一つ接吻をやつつけるのだ。　十九とは云へ、私は田舍に戀人をもつてゐた。その戀人としかした事のない接吻を、西洋人の、しかも男にされたと思

ふ若い感情で私は無茶苦茶に腹が立つて、西洋人の腕をモガキぬけるなり、大急ぎで共同便所の手洗ひ場で口をすゝいで、憤然と下宿へ歸つた事を覺えてゐる。

考へて見ると、あの西洋人め、銀座あたりで女を見つけかねて、腹いせに、男であれ女であれ節穴であれ見つけ次第に沈靜劑にするつもりだつたのかも知れない。

接吻と云ふと人の接吻してゐるのを見るのはあまりよい氣持ちのものではない。活動寫眞などで見ると、接吻は非常に美しく見えるが、公園の木かげなどで、ことに中學生位のと女學生の樣なお下げの少女が、眞面目に、熱烈に接吻してゐる所にぶつつかると面喰ふ所か、一種の嫌惡に似た感にうたれるのは不思議である。——が面白かつたのはこれも日比谷公園の木蔭でベンチで眞晝男がノーノーと寢ころんで、女に爪を切らせてゐる光景を見た時である。これはのどかなラヴシーンだな！　とひどく感心した事がある。

だが、私は、今まで見た中に一番すさまじいと思つた光景は、ある夏の夜ヨコハマでぶつつかつた光景である。これは室内だが——

・私の知人のO氏の家は、丁度×××ホテルと云ふ樣な、つまりチヤブ屋街の一番高い所にあるので夏などそのホテルの樂屋が、丸見えになる事がある。私が遊びに行つた時等もそれだ。なにげなくO氏の書齋の窓から、外を眺めて私はあ然としてしまつた。斷髪の女、それから色々な、タイプの女が、ズラリと並んで、すつぱだかで、その上に、アグラをかいて、お化粧をしてゐるのだ。

凄じい光景たらない！　私は思はず嘆聲を發した。「やあ！　ひでえ事になつてやがら！」

するとO氏は驚いた樣に、

「いけません若い人には！」

と一言云つて笑つたなり、窓にブラインドを下してしまつた。

夏の夜は、然し、何と云つてもどつかにエロティツクなものがたゞよつてゐる。ある巡査の話によると、夏の夜の巡回は仲々の樂しみださうである。エロティツクなシーンのピープ・ショーは、いたる所にあるのだと云ふ。その上彼は驚ろいた樣に話して聞かせて吳れたが、ある山の手の土手で捕へた若い男女は、お互に、お互の名前も知らずに野合をとげてゐたと云ふのである。夏の夜の魅力にさそはれたものか、電車の中でお互に初めて出會した切りで、さう云ふ結果になつたのださうである。

さうかも知れない。私の住んでゐる蒲田の町はづれの道はたで何と云ふ木か知らないが、靑い木が、すばらしく精力的な香氣をその邊一杯にまきちらしてゐるのであるから：：…そんな香氣にでもふれたら、木の葉つばの樣に若い連中は、仲々じつとはしてゐられないであらう。

夜、東京の街からの歸り、或は撮影所のつとめの歸り町はづれを通つて、あの木の香氣をかぐと、私等田舍者は、初夏の田舍道の暗闇を追憶する。何にもない、森や、林の影の間に螢だけ飛んでゐる、田舍の初夏の暗闇は、不思議に漠然としたエロティツクな觸覺をもつてゐるものだ。

蛙が鳴いてゐる。

妻よ！　散歩に出かけようか？

續明治流行歌史

藤澤衛彦



一つとせ、人も通らぬ山中を、お小夜と源兵衛の色話など、廢頽的歌調の讀賣が滅びて、流行歌は、自由民權時代に、總て壯士の專賣に變つたのであつた。

壯士の演歌立讀は、もと商賣氣を離れた主義主張の宣傳に端を發したので、その壯士節といはれた自由演歌は、いふごとく思想を歌によつて演ずるといふ手段に選ばれた態にあつたが、彼等の思想宣傳は、軈て演歌が時勢に歡迎されて、歌賣りが商賣になるやうになつてから、歌詞も民衆に媚びて流行を狙ひ、彼等の歌詞を時代に强ゆるといふ傾向になつたことから、彼等の仲間は漸次職業的に墮落して行つた。然し、それは明治二十五年後の事である。

それはさて、明治十七・八年頃流行のかあいそ節や、先代節が、舊傾向の俗謠として其趣味者に喜ばれてゐる間に、新傾向の俗謠として、オーサやつちよろさんだい、どんがらがん、及びダイナマイトドンが擡頭の機運を捕へて來た。

【オーサやつちよろさんだい節】(明治十六・七年頃流行)

〽醉ふて枕す美人の膝に、さめて握るぞヨイヨイ天下の權を、オーサやつちよろさんだい。

【ドンガラガン節】(明治十七・八年頃流行)

〽橋の欄干に袖っちかけて、ドンガラガン、月を眺めてソレソレソレそつと出しやドンガラガン。

これらの俗謠は、自由演歌に至る過渡期の産物として、壯士の間に最も絶叫されだした。この間に、明治十八年の第一次内閣が組織されると、書生節も、「書生書生と輕蔑するな、今の大臣みな書生。」など歌はれて彼等の意を强うした。時、臺閣の諸公は、内閣の施設方針を、一切西歐の制度にのつとり、文部大臣森有禮の如き、國家主義の教育方針樹立の他面に於て、女子教育の奬勵から、内外男女自由交際の風を勸誘したので、男女同權論より、引いて鹿鳴館の舞踏會、西洋風の假裝會となり、歐化主義の矛盾弊風を助長したことであつたが、一般民庶に於ては、エキゾチックな白堊館も、歐化を唆る旋律のオーケストラも、ただ驚異のものであつたばかりで、彼等の思想に交渉する事は猶年月を要することのやうに観られた。



歐化時代のオーケストラ

その歐化的文明の潮も、當初は、一種特異な政治的貴族階級の中に醞釀せられたことで、明治維新後、華族として待遇せられた封建時代の特權階級は、「東京開化繁昌誌」の言へるが如く「大抵、身閑に苦しみ、一家從一女婢を從へ、屢々出行して閑を消す。或は演劇、或は相撲、或は温泉或は料亭、漸く八百善の味に飽いて、時に雁鍋に出入し、家從の微衷に鰻飯の便を知り、不開化の稱を厭ひ强いて西洋割烹を喰ふ。酒間、醉に乘じて謠出す、曰く、〽文明開化を知らないものは蟹字煎じてのむがよい。從ふ者驚いていふ、何れの日か能く之に熟す。」態の俗曲鑑賞程度のものであり、華族小壯の者も、偶會狹斜の久濶の鶯聲と和して謠ふものは、〽從五位從五位と鷺でも五位よ、子供の小便四位といふ、態の解嘲をどくる位のもの、當時時めく官員の遊宴にうたふものでさへ、「もしほ草紙」

[illegible]
卑俗な滑稽物の模倣に過ぎなかつたもので、酒間を取りもつ幇間者は、勿論前代の遺物としての江戸時代の俗謠流行歌を繰返し、たまたま活惚に交へて、へらへらを踊り、どどいつに文明開化の上すべりをさせるものや、落語家の徳永里朝が流行らした縁かいな節ぐらゐに過ぎなかつた。衆愚一般の社會に於けるもの、歌謠は主として其反映であるに過ぎず、自由の思想も、民權の絶唱も、未だ書生の範圍を離れた全社會に徹底されはしなかつたことである。

それは、都々逸の傾向を観てもわかることで、此頃流行した心意氣自作自詠の如き、「團々珍聞」の新作都々逸懲惡から、「珍々集」や「親爺集」の版行となつて、數百數千の都々逸歌詞提供の時代を出現したが、その試唱は敍情的傾向のものに限られてゐた。

ところが、流行歌となると、表面的迎合の趣向を添した、書生好みの漢詩入どど一が特異のものとして謠はれてゐた。

【漢詩入どど一】

〽鐘は七時か八つ山下を、月落烏啼霜滿天、江楓漁火對二愁眠一、汽車で走らす早歸り。

〽好いた事ならするのがとくよ、一年始有二一年春一、ほんに

若い時や二度とない、

これらのほか、名古屋地方の[illegible]といふ浮謠にして原唄は之を記し得ざる程のちよんこ節（之は明治二十四年十月の濃尾大地震の折にも替歌が行はれた）淺間山鳴動（明治十二年九月）に基因する卑俗なる屁を垂れ節の移入、寄席派の俗曲謠が頭を擡げ出した最初の産物であるヒヤヒヤ節、次で、さいこどんどん節、まちかへば節、よかちよろ節、第二次の縁かいな節、第三次の先代節などは、何れも或意味に於ける當代の卑俗なる民庶の思想の反映でもある。

【ちよんこ節】（明治十八・九年頃流行）

〽淺い川ぢやと袖褄からげ、深くなるほど帶を解く、チョンコ。

〽話したうても話はならず、硝子障子の内と外チョンコ。

【屁を垂れ節】（明治十八・九年頃北陸地方より移入）

〽淺間山から鬼や屁出して、御大しやう破れるやうな屁を垂れた。

〽淺間山から鬼や屁出して、鎌でかつ切るやうな屁を垂れた。

【ひやひや節】（明治十八・九年頃流行）

〽通にんせ通にんせ、誠法矢飾に通にんせ、道には[illegible]

人力車あり、百里千里は何のその、てもまあ便利な浮世じやねえ、ヒヤヒヤ。

（意見しやんす、意見しやんす、滅法矢鱈に意見しやんす、親たちや木の股からでも産れしやんしたか、どうしたら氣儘に添はれよか、てもまあ辛氣な浮世だね、ヒヤヒヤ。

【さいこどんどん節】（明治十九・二十年頃流行）

（ヤー豊年ぢや、閣下のお陰ぢやありがたい、サイコドン、サイコドン、サイコドンドン。

（人に水をばさされる毎にさ、思ひ過しをコラサノヤ、われしらず、サイコドンドン。

【まちがへば節】（明治二十・二十一年頃流行）

（まちがへば間違ふものだよ、石は流れて木の葉は沈む、今朝も畑に狐が三人子供にだまされた。

（まちがへば間違ふものだよ、雨も降らぬに足駄さして傘はいて、今ここへ、坊さんかついだ風呂敷包は來なかつたか。

【よかちよろ節】（明治二十年頃流行）

（藝者だませば七代たたる、パッパヨカチヨロ、祟る筈だよ猫ぢやもの、ヨカチヨロ、スイカズワノホホテ、わしが知つちよる、知つちよる、いはでも知つちよる、パッパ。

【先代節】（何だい節第三次、明治十八・九・二十年頃流行）

（女がよいとて權識ぶるな、女がようて若後家で、それで此世を送るなら、常磐御前が淸盛に、二度の枕はコリヤ何だいかわしやせぬ。

（わしは十六、八百屋の娘、小姓の吉三にほうれん草、嫁菜にならずに子が出來た、何と生姜や山葵さん、辛子がきいたら眼に涙、胡椒かきいたらコリヤ何だい泣くであろ。

【縁かいな節】（四季の縁第二次、明治二十・一・二年頃流行）

（春の眺めは芳野山、峯も谷間も爛漫と、一目千本、二千本花が取りもつ縁かいな。

（夏の眺めは兩國で、出船入船屋形船、昇る流星ほし下り、玉屋が取りもつ縁かいな。

（秋の月夜のともかせぎ、夫婦仲ようおひづちの、拍子を取つて打つ砧、響きはトントントンかいな。

（冬の寒さに置き炬燵、痴話が嵩じて脊と脊、蒲團が戀のなかだちで、雪が取り持つ縁かいな。

其流行の時期と範圍とに於て、歌曲の最も永く喜ばれた縁かいな節が、狹斜の衢より流行の勢力を振ひ出した間に、一方、教養ある男女の嗜好に投じて、漸く擡頭したのが、唱歌、軍歌の流行であつた。



歐洲管絃樂合奏之圖(明治唱歌のうち岩間の清水)

唱歌は、明治十二年、文部省内に音樂取調掛が置かれ、翌年、米國人ルーサー・ホワイチング・メーソン博士が雇教師として傭聘せられ、其年十月、はじめて傳習生を募集し、これに唱歌が教授せられたことに始まる。メーソンは、明治十五年まで唱歌の教授を擔任し、其後は、獨逸人フランツ・エッケルト及び海軍軍樂長中村祐庸等が教鞭を取つて、明治十八年、奥好義、上眞行、辻則承等の第一回卒業生を世に送り出した。日本人の唱歌作曲は、先づ、それより起るといつてよく、明治二十年までに二十あまりの作歌作曲が發表された。そのうちには、今日なほ行はれてゐる、例へば「故郷の空」(大和田建樹作歌)の如きもあるが、所謂流行歌の傾向をなして謠はれたものは、軍歌に於ける「拔刀隊の歌」と、唱歌に於ける落合直文の「孝女白菊の歌」にしくものはない。

【拔刀隊の歌】(明治十九年より流行)

その第一章

吾は官軍我敵は　天地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たるものは　古今無雙の英雄で
これに從ふ兵(つはもの)は　共に剽悍決死の士
鬼神に恥ぢぬ勇あるも　天の許さぬ反逆を
起せし者は昔より　榮えしためし非ざるぞ
敵の亡ぶるそれまでは　進めや進めもろともに
玉散る劍拔きつれて　死する覺悟で進むべし。

明治陸軍の建設者である西郷隆盛の西南事變に對して、官軍の心理を謠つた四節の軍歌で、日露戰爭頃まで歌はれたものであるが、明治十九年には、それが錦繪にまで出て諸國に分布されたほど流行の勢力があつたものである。



拔刀隊の歌（明治十九年版）

「孝女白菊の歌」は、これより少し後れて、明治二十一年、落合直文が、井上巽軒の孝女白菊の漢詩を七五調に邦語譯して、「東洋學藝雜誌」に載せた一篇約三百節千百十六行から成れる物語詩で、

阿蘇の山里秋たけて
眺めさびしき夕まぐれ
いづこの寺の鐘ならむ
諸行無常と告げわたる
折しも一人門にいで
父を待つなる少女あり

に始まり、全篇平明にして口誦し易く、且つは、哀愁切に抒情味の自から人の胸に響くものがあつたので、殊に男女學生の間に歌はれ、忽ち又兒童群の間にまで流行の範圍を擴げた。

それはさて、歐化時代の洋風摸倣は、唱歌作曲の上に於ても其弊が認められ、大和田建樹なども、曾て『いはゆるソングの手本で、語氣往々古調死格に傾き、云云』と文部省音樂取締掛の「小學唱歌集」を評したほど、その作曲は西洋臭みたつぷりのものが多かつた。それはただに學問や科學の上ばかりではない、風俗一般が之に倣つたもので、婦人髮の改良、服裝の改良といふことも皆西洋に倣ふべき企てに過ぎない。明治十八年七月、洋髮の創始、十八年九月東京女子師範學校洋服採用より、改良は軈て一種の流行となり、十九年八月には演劇改良會が發起される、二十年一月には、皇后陛下の婦女服制についての御思召書も下しをかれた。此傾向に投じたのが改良節であつた。

【改良節】（明治二十年頃流行）

〽野蠻の眠りの覺めない人は、自由のラッパで起したい、開花の旭は輝くぞ、覺しておくれよ永の夢、やつてけもつて

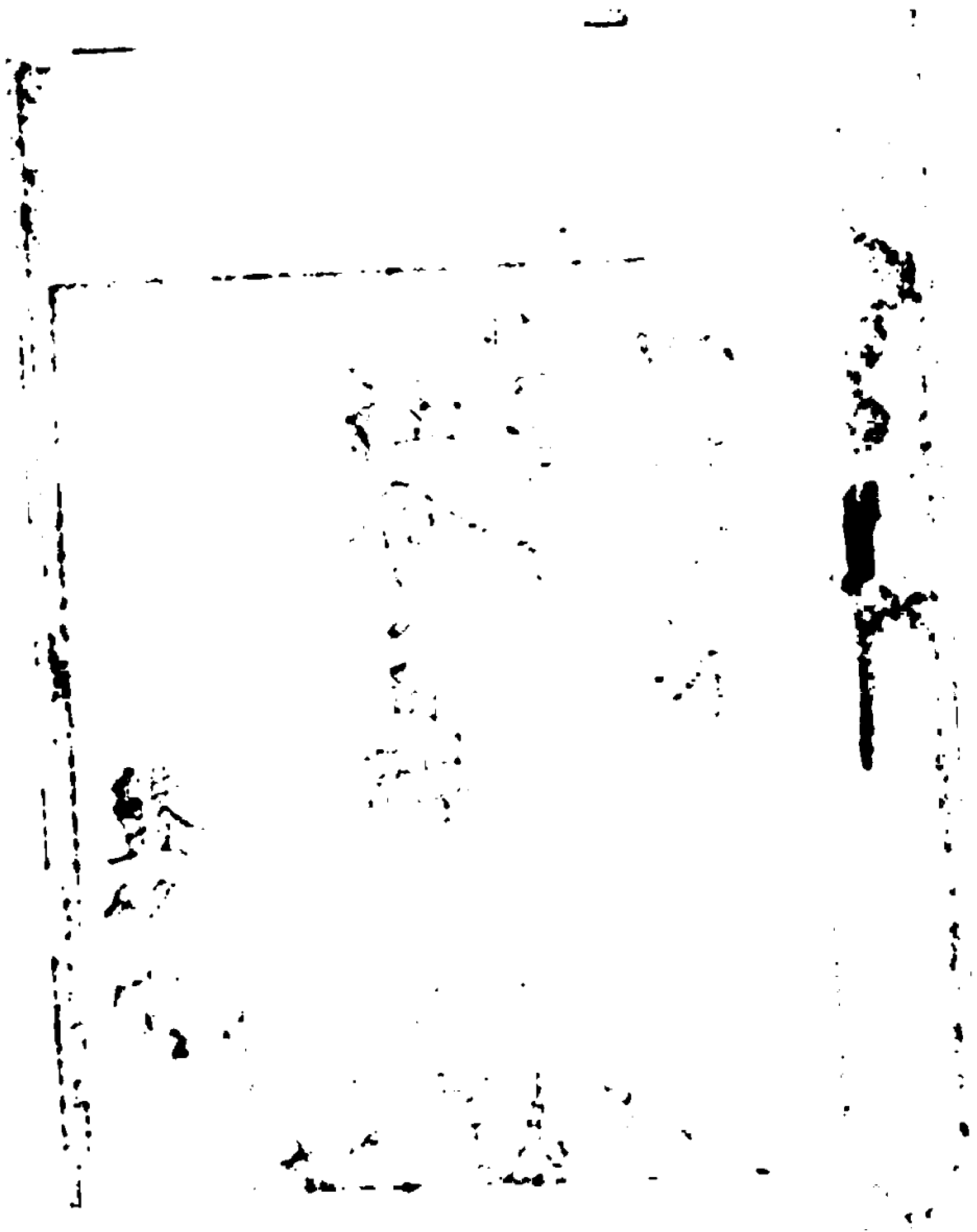
け改良せえ、改良せえ。

（思ふ一念岩をも通す、軒の滴を見やしやんせ、國民一致の力なら、條約改正何のその、鷲でも獅子でも鯨でも、少しも恐るゝ事はない、やつてけもつてけ改良せえ、改良せえ。

一方、纖かいな節は、なほ流行を支配してゐる。然も、其間に、思想界は轉變する、それを反映せるとせざると、幾多の俗謠が出現し、消滅する。

明治十九年、內閣組織改正の結果、總理大臣となつた伊藤博文の內閣は、なほ政治界の中樞を握つてをり、その威勢は、相變らず、歐化主義政策の實行に熱中し、彼の條約改正のために外人を取込む手段であつたと言はれる舞踏夜會は依然として盛んに行はれる、とりわけ、明治二十年春に於ける二個の大遊宴は、一般民庶の間にも大きな刺激を與へ、就中四月二十日に於ける首相官邸に開催の假裝舞踏會（ファンシーボール）は、日本の謹嚴を傷つけるものとして世論を招き、先づ曉の鐘は、國粹保存の「日本」紙上、侃諤の文字を以つて撞かれ、其輕薄の氣風が咎められた。且つ、その舞踏會の表裏については、醜い種になる風說も流布せられて、喧々囂々の世評が更に新しく繰返された。『歡樂極つて哀傷生ず、此風說が歐化主義に對する危惧と反感とを長じて、終に伊井內閣の蟻穴となつた』と識者に評されたは適評で、實に保守舊反動の反歐化政策は此機運に乘じて起り、然ん然たる國論は喚起された。かくて、潮の湧くが如き反政府の沸騰は、眠より覺めたる獅子吼のごと絶叫され、さしも隆盛を極めた、舞踏會をして一朝にして、屏息せしめた。そして、外相井侯は、その九月、終に歐化政策の犧牲として桂冠したが、潮の如くに押寄せた民論は止むべくもあらず、慨然政府に肉迫して、あはや革命的事件突發せんかと思はれた危機一髪の際（十二月）、伊公の有名なる保安條例は發布せられて、慷慨激越なる志士論客數十名の退都令が嚴達せられた。

流行歌「ダイナマイトドン」は、實に、當時に於ける悲憤慷慨の熱血壯士が、歌にかつてその意氣を絶叫したもので、この壯士節こそかれらの鬨體の聲であつた「自由演歌」の眞の創始であつたと言はるべきものである。



「壯士流行歌」の表紙

【ダイナマイトドン節】(明治十九・二十年頃流行)

〈民權論者の涙の雨で、磨き上げたる大和魂、國利民福增進して、民力休養せ、若しも成らなきやダイナマイトドン。

〈四千餘萬の同胞の爲にや、赤い囚衣も苦にやならぬ、國利民福增進して民力休養せ、若しも成らなきやダイナマイトドン。

〈治外法權撤去の夢を、見るも嬉しいホルトガル、國利民福增進して民力休養せ、若しも成らなきやダイナマイトドン。

越えて、明治二十一年、井侯は、野に於て一流の進歩主義的政黨を組織し、それを率ゐて、保守主義と戰はうとし、自治研究會を計劃したが、財政的方面の援助薄く、成功せざるうちに國會を迎へるに至る。

その間を點綴する舊傾向の流行歌に、ほうほうホヽぶし、のうこちの人ぶし、欽來節、推量節など、共に斷子詞の複雜なるものがあつて、緣かいな節と共に行はれた。

【ほうほうホヽぶし】

〈西と東にたてわけられて、逢にやわからぬ櫛の齒、一日さんりが七りもノ〳〵しやつぽんけ、うんてんばつてんたあふくりんりけん、たあふくりんけんたい、そんなことぬかす奴等、庖丁切りこみたい〳〵庖丁ほうほうホヽ。

【のうこちの人ぶし】

〈烏も通はぬ山中の一つ屋でございやすけれども、住めば都でございやすノーこちの人、赤はらでん〳〵むし、かいすけかいもんかいしよさま、またしやうとて、うけだしたる赤ざとう、ぜんざいもち、かいちうじるこ、東京雜煮、金時うきふだチ。

【欽來節】(明治二十一・二年頃流行)

〈摺鉢を伏せて眺めりや三國一の、味噌をするがの富士の山、キビスガンガン、イカイドンス、キンギヨクレンスノスクネツポ、スツチヤンマンマン、カンマイカイノ、オツペラボウノキンライライ、おほらしいぢやおまへんか。

〈浦里が、しのび泣きすりや緣もともに、貰ひ泣きする明がらす、キビスガンガン、イカイドンス、キンギヨクレンスノスクネツポ、スツチヤンマンマン、カンマイカイノ、オツペラボウノキンライライ、おほらしいぢやおまへんか。

〈時烏(ほとゝぎす)一聲きこと雨戸をあけて、見れば今宵の月の影、キビスガンガン、イカイドンス、キンギヨクレンスノスクネツポ、スツチヤンマンマン、カンマイカイノ、オツペラボウノキンライライ。

【推量節】(明治二十一・二年頃流行)

(淺いアリヤ推量推量、川ぢやとチョイト裾からげ、サイヨサノサ、深くコリヤサなるほどジツ帶を解く、ヨウイヤサく、サイトアリヤサコリヤサ、ヤアトセノエ、アリヤ推量推量。

(鯰え、アリヤ推量推量、誑してチョイト權妻と、なればサノヨヤサノサ、又もコラショ、地震でジツ元の猫、ヨウイヤサく、サイトアリヤサコリヤサ、ヤアトセノエ、アリヤ推量推量。

この推量節も憲法發布後には、

【演歌推量節】

(絹布ぐるみのいでたちで、洋語交りでベラベラと、やらかす顏つき大層だ、素敵に學問出來そだが、掛けた眼鏡は何のため、人に見られぬ青色で、下つた眼尻の豫防法、延ばしたお髯は何の役、畑の案山子ぢやないけれど、上邊ばかりのこけ威し、手紙もろくろく書き兼ねて、かくのは何時でも恥ばかり、推量してくれ、やるせない。

などとうたはれた。然し、それは、むろん川上音次郎のオッペケペー節影響の模倣物に過ぎなかつたもので、オッペケペー節流行以後、壯士演歌の多くは、川上の流儀を眞似て、ただその形式に追從して行つたのが、演歌作家の常としてあつた。

川上の東京擡頭は明治二十四年後のことであるが、オッペケペー節流行の祖源は、明治二十二年の上方初演に始まる。

保安條令に追はれた志士論客を中心とする熱血壯士の過激な自由民權の言論は、當時各所に於て壓迫を蒙り、集會も酷烈な干渉を受けたので、彼等の意氣は種々な諷刺的行動に入るを餘儀なくされた。明治二十一年十二月に於ける角藤定憲等の壯士芝居も其一つの方法なら、川上音次郎のオッペケペー節も、その手段の一つと認められる。

志士退去令に反撥されて、忽ち彼等壯士の間に生れた「民權數へ歌」は、即ちオッペケペー節胚胎の前調である。

【民權數へ歌】

(一つとせー、人の上には人はない、權利にかはりのないからはア、コノ同等よ。

(二つとせー、二人三人の心から、我儘勝手な政事ウ、コノ壓制よ。

(三つとせー、道にかなひし自由論、とめ立てするほど猶起るウ、コノ反動で。

(四つとせー、世の開けゆくありがたさ、親が子供に教へらるウ、コノ反對に。

〽五つとせー、五つに別れし五大洲、中にも亞細亞は半開化ア、コノ憫ぶしさ。

〽六つとせー、昔ゆかしき亞米利加の、革命騒ぎは知らないかァ、コノ勇ましさ。

〽七つとせー、七度この世に生れ來て、拂はでやむべき壓制をウ、コノ執念(しうね)くも。

〽八つとせー、役にも立たないぼんやりが、政治家などとは阿呆(あほ)らしいィ、コノ止(や)めよかし。

〽九つとせー、苦情の種まき誰がした、みんなおのれの心からァ、コノ考へよ。

〽十とせー、どうせ一度は力づく、席の旗をば擔ぎ出せイ、コノやつつけろ。

例の初期議會後の讀賣壯士の「やつつけろ節」も、これに其系統を引くものであるが、演歌形式に於ては、其後の「愉快節」「欣舞節」と共に、オツペケペー節の流れを汲めるものと言つてよい。「讀賣改良節」、「讀賣欽來節」も、亦其例に漏れず、序事に思想を披瀝するところ、みな其系統を一にするもので、それほど、オツペケペーは、流行歌としての一新傾向を劃せるものであつたのだ。

【おつぺけぺえ節】(明治二十二・三・四年頃流行)

〽權利幸福嫌ひな人に、自由湯をば飲ましたい。オツペケペ、オツペケペツポペツポツポ、かたい社杯角取れて、マンテルズボンに人力車、いきな束髪ボンネット、貴女に紳士の扮裝(いでたち)で、表面(うはべ)の飾りは立派だが、政治の思想が缺乏だ。天地の眞理が判らない、心に自由の種子を蒔け、オツペケペ、オツペケペツポペツポーポー。

〽不景氣極まる今日に、細民困窮かへりみず、まぶかに被つた高帽子、金の指輪に金時計、權門貴顯に膝を曲げ、藝者幇間(たいこ)に金をまき、うちには米を倉に積み、同胞兄弟見殺しか、いくら慈悲なき慾心も、あまり非道な薄情な、ただし冥土のおみやげか、地獄で閻魔に面會し、わいろ使ふて極樂へ、行けるかえ、行けないよ、オツペケペ、オツペケペツポペツポーポー。

〽お妾權妻孃さんに、芝居を見せるは不開化だ、かん善てう惡わからない、色氣の處に眼をとめて、大事の夫を袖にする、浮氣をするのは必定だ、お爲にならないおよしなさい、國會開けた今日に、役者にのろけちやゐられない、日本だいじと守りなさい、眉毛のないのがお好きなら、かつたいお色に持ちなんせ、眼玉をむくのがお好きなら、狸と添寝をするがよい、オツペケペ、オツペケペツポペツポ

ーオー」

【演歌改良節】（明治二十三年頃流行）

へ鼻唄ったつてべらんめえ、權利もへちまもあるものか、おれつちやえへんと濟ますのは、瀟灑時代ぢやいざ知らず、日に月進む文明の、此世はなかなか渡れない、理屈と理屈の戰ひで、腕力ばかりぢやいけないよ、開化の空氣を吸ひ込んで、野蠻の氣風を拂はんせ、自由の權利がありながら自由の權利を知らないは、眼玉があつても明盲目、何にもならない節穴だ、心あつても無き如く、石の地藏にさも似たり、老人やしかたがないけれど、若いみそらの人達は、せつせと學校へ通はんせ、讀書そろばん覺えても、決して損にはなりやすまい、日本に生れた人ならば、勇氣を出さんせ起きなんせ、國の爲なり己が爲、やつてけやつてけ改良せえ、改良せえ。

【演歌欽來節】（明治二十四・五年頃流行）

へ吉野山、花見る毎に悲憤の涙、ゑけん陵ににそそぐらん、當年天非なるか、追想すれば胸ふさぐ、大喝一聲奮起して大學欽來欽來。

へ輿論をば、引き起すべし對等の、條約を早く結べよ國のため、立憲制度の花咲かそ、國民團結一致して、早く其實を

結ばれた、大學欽來欽來」

かかる間に、帝國憲法發布の大典は擧行されたので、それは實に明治二十二年紀元作節の當日に當る。かくて其翌年國會は開設せられ、教育勅語は發布されるといふ史的順序となる。

憲法發布が、如何に民意に投じて奉祝されたかは、當時の狀況をかへりみて想ひ出の感を深からしめるものが多い。殊に其奉祝の名殘りとして、地方俚謠が、都會的流行のものとなつた傾向にあることを考へると、一層その祝賀の全國的のもので、その響きの大きかつたことがわかる。そして、歌謠史上留意すべきことは、現今に於て謠はるゝところの特異な地方歌の多くが、此期を以て流行の起因をなし、明治二十七・八年の間に於て、其基礎的勢力を都會に植ゑつけたことである。

就中、憲法發布當時に行はれたのは、音頭、甚句、木遣の賑やかなもの、それから、前期に一度流行歌の傾向をなしたことのある、例へば、追分節、仙臺節、及び明治初年流行の土佐節の再度流行などで、其間に、兆士節演歌の行はるゝもの、常磐派の俗謠然しかへしなど、錯綜して行はれた。

演歌者によると、此頃、演歌としては、勘忍節、無茶苦茶節ヤッツケロ節などが歌はれたといふことであるが、それらは、講賓に行はれたもので、ヤッツケロ節のほかは、流行歌の領

にはいらなかつたやうである。

【やつつけろ節】(明治二十三年頃流行)

〔見せてやりたい世界の人に、敷島男子の鐵腸を、コラサノサ、二千五百有餘年、固め鍛へし鐵石心、いつかな動かぬ大丈夫の、心は千々に碎くとも、屍は野邊に晒すとも、君の御爲國の爲、捨つるは此の身の本分と、一步も讓らず進み行き、鐵壁たりとも何のその、日本刀の切れ味で、片つ端から、やつつけろ。

〔此頃流行の白拍子、粹な造りの格子戶に、ぶらりと下げた御神燈、きり火の音をあとにうけ、づつとすましてお座敷へ、おし出す姿は立派だが、ちやんちやんちやんのお座敷で、御祝儀もらへば用は無い、藝のお望みまつぴらだ、でれたお客と見てとれば、得意の手術で丸め込み、ぽつぽのお金を吸ひ取つて、ひいきの役者につぎ込んで、それでも足らずに高利かり、アイスクリームに責められて、首も廻らず靑くなる、これが藝者の本分か、そんな輩は我々が、自由のけんこでやつつけろ。

やつつけろ節は、自由黨壯士の「民權數へ歌」の最終文句から思ひつかれて、數へ歌の結末を、オッペケペー節調に套襲したまでで、その創始も、川上のオッペケペーの上にある。

初期の演歌は、このやうにして形式をオッペケペー節に求めて、詩歌の新傾向の序事的特長を模倣し、社會を諷刺することを內容としたのであつたが、其後漸く時流に迎合して、社會批評的の立場から離れた。

即ち憲法發布の年から翌年にかけて行はれだした愉快節は、最も此時流に投じて、オッペケペー流の思想を開陳することに努力した演歌の代表であつて、次で行はれた賛成節、憂世節、欣舞節のうちでは、欣舞節が最も行はれた。

愉快節は、「欣慕欣慕、愉快愉快」といはれた結びの調が聞手を引きつけたもので、原唄は、『何とかで、此度幸ひ憲法發布の際に犯罪の荒繩解けて、白日を望む機會を得し上は、位は重き正三位、死しての後の名譽なり、實に滿足慶賀の到り、欣慕欣慕、愉快愉快。」といふもので、多くの演歌が提供され、賛成節、憂世節、ゲンコツ節、チヤクライ節出現の後まで行はれ、明治二十六年に、欣舞節と替り再び流行する盛大さを現出した。

【愉快節】(明治二十二・三・四年頃流行)

〔文明の園に實りし自由の權利、堅く蕾みし我國の、野蠻頑固も何時しかに、解けて和らぐ御代となり、明治六年の頃とかや、板垣後藤の舊參議、始めて唱へし民選の、議院政治の花の種子、年月經るに從ひて、開化の風や文明の、恩に浴

して生育し、人の自由や民の福祉、均しく天の惠を受け、此世に生れし人類が、などか他人の壓抑に、壓迫せられてあるべきぞ、抑へば揚る噴水器、國會開設請願の、聲は四方に鳴り渡り、畏き邊に聞えけん、欽定憲法發布され、開かせたまふ代議政、立憲制度の劈頭に、立ちし明治の臣民は、後世孫子に誇るべし、愉快ぢや、愉快ぢや。

【贊成節】(明治二十三・四年頃流行)

〽さつさ大贊成、贊成贊成贊成ぢや、こりやお座附二上り三下り、贊成贊成贊成ぢや、こりや活惚れ端唄に浮かれ節、贊成贊成贊成贊成贊成ぢや、こりや大盡氣取りの廓遊び、贊成贊成贊成贊成贊成ぢや、こりやおもしろいからやつてみな、贊成贊成贊成贊成ぢや、こりやお金があつたらやつてみな、贊成贊成贊成ぢや。

【蛩世節】(明治二十三・四・五年流行)

〽十人は、十種なる程世は樣々よ、蓼喰ふ蟲もありとかや、日本は古來美國とて、世界に稀なる國なるに、何が不足か知らないが、やたらに西洋西洋と、內の餅をば打ち捨てて、西洋隣りの雜炊食べたがる、これぞ世に言ふ馬鹿なるぞ、西洋人とて同じ人、舶來品とて同じ品、西洋人とて恐るゝな、舶來品とて貴ぶな、たとひ附合するとても、互角にするならよいけれど、先方に出る時は、いつも[illegible]ない、開明國とは表むき、その實すてきな狡猾で、さも親切に見せかけて、鼻毛を拔くのが奥の手だ、堅くふんどし引きしめて、取りかかるべし、かかるべし、蛩世ぢやないかいな。

【ゲンコツ節】(明治二十五年頃流行)

〽うはべばかりじや樣子が知れぬ、中の腐れしゲンコツ夏玉子、ドクシンロ、フツエーベー、シツケイキハマルゲンコツパイ。

【チヤクライ節】(明治二十五年頃流行)

〽自由民權チヤンカンポン、兩手に持てれん、ポンポン。

〽上と榮耀がチヤクライシユ、ちよいとしてみたい、ポロポロポン。

此頃、オツペケペー節は、猶行はれてゐた。國會開設の後、壯士川上音次郎は東上して、横濱の寄席に現はれ、馬車道通の丸竹亭などで滑稽新作落語家浮世亭〇〇と稱して、拙い落語渡世に身を窶してゐたが、人氣は其演ずる陣羽織後鉢卷の扮裝でオツペケペー節を歌ふところにあつたので、彼は勢運に乘じて、明治二十四年、横濱の蔦座に壯士芝居旗上げ後も、演劇の後にた座員十數名すらりと並び、例の扮裝でオツペケペー節を歌ひ、三味線太鼓に合せて、賑やかに、おもしろく時局を諷刺してた

にはいらなかつたやうである。

【やつつけろ節】(明治二十三年頃流行)

(見せてやりたい世界の人に、敷島男子の鐵腸を、コラサノサ、二千五百有餘年、固め鍛へし鐵石心、いつかな動かぬ大丈夫(ますらを)の、心は千々に砕くとも、屍は野邊に晒すとも、君の御爲國の爲、捨つるは此の身の本分と、一歩も讓らず進み行き、鐵壁たりとも何のその、日本刀の切れ味で、片つ端から、やつつけろ。

(此頃流行の白拍子、粹な造りの格子戸に、ぶらりと下げた御神燈、きり火の音をあとにうけ、づつとすましてお座敷へ、おし出す姿は立派だが、ちやんちやんちやんのお座敷で、御祝儀もらへば用は無い、藝のお望みまつぴらだ、でれたお客と見てとれば、得意の手術で丸め込み、ぽつぽのお金を吸ひ取つて、ひいきの役者につぎ込んで、それでも足らずに高利かり、アイスクリームに責められて、首も廻らず青くなる、これが藝者の本分か、そんな輩は我々が、自由のけんこでやつつけろ。

やつつけろ節は、自由黨壯士の「民權數へ歌」の最終文句から思ひつかれて、數へ歌の結末を、オッペケペー節調に套襲したまでで、その創始も、川上のオッペケペーの上にある。

初期の演歌は、このやうにして形式をオッペケペー節に求めて、時歌の新傾向の序事的特長を模倣し、社會を諷刺することを内容としたのであつたが、其後漸く時流に迎合して、社會批評的の立場から離れた。

即ち憲法發布の年から翌年にかけて行はれだした愉快節は、最も此時流に投じて、オッペケペー流の思想を開陳することに努力した演歌の代表であつて、次で行はれた贊成節、愛世節、欣舞節のうちでは、欣舞節が最も行はれた。

愉快節は「欣慕欣慕、愉快愉快」といはれた結びの調が聞手を引きつけたもので、原唄は、『何とかで、此度幸ひ憲法發布の際に犯罪の荒繩解けて、白日を望む機會を得し上は、位は重き正三位、死しての後の名譽なり、實に滿足慶賀の到り、欣慕欣慕、愉快愉快。』といふもので、多くの演歌が提供され、贊成節、愛世節、ゲンコツ節、チヤクライ節出現の後まで行はれ、明治二十六年に、欣舞節と替り再び流行する盛大さを現出した。

【愉快節】(明治二十二・三・四年頃流行)

(文明の閣に竇りし自由の權利、堅く啻みし我國の、野蠻頑固も何時しかに、解けて和らぐ御代となり、明治六年の頃とかや、板垣後藤の舊參議、始めて蒔きし民選の、議院政治の花の種子、年月經るに從ひて、開化の風や文明の、恩に浴

して生育し、人の自由や民の幸福、均しく天の性み受け、此世に生れし人類が、などか他人の壓抑に、壓迫せられてあるべきぞ、抑へば揚る噴水器、國會開設請願の、聲は四方に鳴り渡り、畏き邊に聞えけん、欽定憲法發布され、開かせたまふ代議政、立憲制度の劈頭に、立ちし明治の臣民は、後世孫子に誇るべし、愉快ぢや、愉快ぢや。

【賛成節】(明治二十三・四年頃流行)

〈さつさ大賛成、賛成賛成賛成ぢや、こりやお座附二上り三下り、賛成賛成賛成ぢや、こりや活惚れ端唄に浮かれ節、賛成賛成賛成ぢや、こりや大盡氣取りの廓遊び、賛成賛成賛成ぢや、こりやおもしろいからやつてみな、賛成賛成賛成ぢや、こりやお金があつたらやつてみな、賛成賛成賛成ぢや。

【變世節】(明治二十三・四・五年流行)

〈十人は、十種なる程世は樣々よ、蓼喰ふ蟲もありとかや、日本は古來美國とて、世界に稀なる國なるに、何が不足か知らないが、やたらに西洋西洋と、內の餅をば打ち捨てて、隣りの雜炊食べたがる、これぞ世に言ふ馬鹿なるぞ、西洋人とて同じ人、舶來品とて同じ品、西洋人とて恐る、な、舶來品とて尊ぶな、たとひ附合するとても、互角にするならよいけれど、先が上に出る時は、いつ[illegible]よい、開明國とは表むき、その實すてきな狡猾で、さも親切に見せかけて、鼻毛を拔くのが奥の手だ、堅くふんどし引きしめて、取りかかるべし、かかるべし、變世ぢやないかいな。

【ゲンコツ節】(明治二十五年頃流行)

〈うはべばかりじや樣子が知れぬ、中の隱れしゲンコツ夏玉子、ドクシンロ、フツエーベー、シツケイキハマルゲンコツバイ。

【チヤクライ節】(明治二十五年頃流行)

〈自由民權チヤンカンボン、兩手に持てれん、ボンボン。

〈王と榮耀がチヤクライシユ、ちよいとしてみたい、ボロボロボン。

此頃、オツペケペー節は、猶行はれてゐた。國會開設の後、壯士川上音次郎は東上して、横濱の寄席に現はれ、馬車道通の丸竹亭などで滑稽新作落語家浮世亭○○と稱して、拙い落語渡世に身を墮してゐたが、人氣は其演ずる陣羽織後鉢卷の扮裝でオツペケペー節を歌ふところにあつたので、彼は勢ひに乘じて、明治二十四年、横濱の蔦座に壯士芝居旗上げ後も、演劇の後[illegible]た座員十數名すらりと並び、例の扮裝でオツペケペー節を歌ひ、三味線太鼓に合せて、賑やかに、おもしろく時局を諷刺して[illegible]

にはいらなかつたやうである。

【やつつけろ節】(明治二十三年頃流行)

〈見せてやりたい世界の人に、敷島男子の鐵腸を、コラサノサ、二千五百有餘年、固め鍛へし鐵石心、いつかな動かぬ大丈夫の、心は千々に碎くとも、屍は野邊に晒すとも、君の御爲國の爲、捨つるは此の身の本分と、一歩も讓らず進み行き、鐵壁たりとも何のその、日本刀の切れ味で、片つ端から、やつつけろ。

〈此頃流行の白拍子、粹な造りの格子戸に、ぶらりと下げた御神燈、きり火の音をあとにうけ、づつとすましてお座敷へ、おし出す姿は立派だが、ちやんちやんちやんのお座敷で、御祝儀もらへば用は無い、藝のお望みまつぴらだ、でれたお客と見てとれば、得意の手術で丸め込み、ぽつぽのお金を吸ひ取つて、ひいきの役者につぎ込んで、それでも足らずに高利かり、アイスクリームに責められて、首も廻らず青くなる、これが藝者の本分か、そんな輩は我々が、自由のけんこでやつつけろ。

やつつけろ節は、自由黨壯士の「民權數へ歌」の最終文句から思ひつかれて、數へ歌の結末を、オツペケペー節調に套襲したまでで、その創始も、川上のオツペケの上にある。

初期の演歌は、このやうにして形式をオツペケペー節に求めて、時歌の新傾向の序事的特長を模倣し、社會を諷刺することを内容としたのであつたが、其後漸く時流に迎合して、社會批評的の立場から離れた。

即ち憲法發布の年から翌年にかけて行はれだした愉快節は、最も此時流に投じて、オツペケペー流の思想を開陳することに努力した演歌の代表であつて、次で行はれた賛成節、愛世節、欣舞節のうちでは、欣舞節が最も行はれた。

愉快節は、「欣慕欣慕、愉快愉快」といはれた結びの調が聞手を引きつけたもので、原唄は、『何とかで、此度幸ひ憲法發布の際に犯罪の荒繩解けて、白日を望む機會を得し上は、位は重き正三位、死しての後の名譽なり、實に滿足慶賀の到り、欣慕欣慕、愉快愉快。』といふもので、多くの演歌が提供され、賛成節、愛世節、ゲンコツ節、チヤクライ節出現の後まで行はれ、明治二十六年に、欣舞節と替り再び流行する盛大さを現出した。

【愉快節】(明治二十二・三・四年頃流行)

〈文明の闇に實りし自由の權利、堅く蕾みし我國の、野蠻頑固も何時しかに、解けて和らぐ御代となり、明治六年の頃とかや、板垣後藤の兩參議、始めて蒔きし民選の、議院政治の花の種子、年月經るに從ひて、開化の風や文明の、恩に浴

して生育し、人の自由や民の智恵、均しく天の性を受け、此世に生れし人類が、などか他人の壓抑に、壓迫せられてあるべきぞ、抑へば揚る噴水器、國會開設請願の、聲は四方に鳴り渡り、畏き邊に聞えけん、欽定憲法發布され、開かせたまふ代議政、立憲制度の劈頭に、立ちし明治の臣民は、後世孫子に誇るべし、愉快ぢや、愉快ぢや。

【賛成節】（明治二十三・四年頃流行）

〽さつさ大賛成、賛成賛成賛成ぢや、こりやお座附二上り三下り、賛成賛成賛成ぢや、こりや活惚れ端唄に浮かれ節、賛成賛成賛成ぢや、こりや大盡氣取りの廓遊び、賛成賛成賛成ぢや、こりやおもしろいからやつてみな、賛成賛成賛成ぢや、こりやお金があつたらやつてみな、賛成賛成賛成ぢや。

【浮世節】（明治二十三・四・五年流行）

〽十人は、十種なる程世は樣々よ、蓼喰ふ蟲もありとかや、日本は古來美國とて、世界に稀なる國なるに、何が不足か知らないが、やたらに西洋西洋と、內の餅をば打ち捨てて、西洋隣りの雜炊食べたがる、これぞ世に言ふ馬鹿なるぞ、西洋人とて同じ人、舶來品とて同じ品、西洋人とて恐るゝな、舶來品とて貴ぶな、たとひ附合するとても、互角にするならよいけれど、先方に出る時は、いつ[illegible]よい、開明國とは表むき、その實すてきな狡猾で、さも懇切に見せかけて、鼻毛を拔くのが奥の手だ、早くふんどし引きしめて、取りかかるべし、かかるべし、浮世ぢやないかいな。

【ゲンコツ節】（明治二十五年頃流行）

〽うはべばかりじや樣子が知れぬ、中の腐れしゲンコツ豆玉子、ドクシンロ、フッエーベー、シッケイキハマルゲンコッパイ。

【チヤクライ節】（明治二十五年頃流行）

〽自由民權チヤンカンボン、兩手に持てれん、ボンボン。

〽主と榮耀がチヤクライシユ、ちよいとしてみたい、ボロボロボン。

此頃、オツペケペー節は、猶行はれてゐた。國會開設の後、壯士川上音次郎は東上して、橫濱の寄席に現はれ、馬車道通の丸竹亭などで滑稽新作落語家浮世亭〇〇と稱して、拙い落語渡世に身を隱してゐたが、人氣は其演ずる陣羽織後鉢卷の扮裝でオツペケペー節を歌ふところにあつたので、彼は勢望に乘じて、明治二十四年、橫濱の蔦座に壯士芝居旗上げ後も、演劇の後また座員十數名ずらりと並び、例の扮裝でオツペケペー節を歌ひ、三味線太鼓に合せて、賑やかに、おもしろく時局を諷刺して

人氣を繋ぐことを忘れなかつた程である。

それで、ともすれば、壯士演歌も、オッペケペー節に押されがちで、その愉快節なども、時潮諷刺から離れた、經營政策的の歌を提供してみたり、又、オッペケペー節の替歌を提供してみたりした。この頃から、既に、壯士演歌は壯士芝居と共に、營業的に傾向して行つたことである。

【演歌・オッペケペー節】（明治二十五年頃流行）

〽道理やどうでもこの世をうまく渡りごまかす才が一、オッペケペッポーペッポッポー、今の時節はわからない、學問ばかりじやいけないよ、なんでもごまかし一番だ、晦日の拂ひにやりくりのさんだん一つできもせず、經濟學士もある浮世、法律學理は知らずとも、鈍智ではやる代言人、學問少しもないくせに、ごまかす新聞記者の筆、三味線調子はあはずとも、座つきが一つ彈けずとも、轉がるのさへ上手なら、はやるはわけない易いこと、若くて眼鏡をかけたれば、學問智識があるらしく、鼻下に八字の髯あればどつかに分別ありさうに、見える浮世は不思議だね、口に廢娼はよけれども、忍んでこそこそ女郎買ひ、そのくせでれりで二本棒、みつともないからおよしなさい、オッペケペッポーペッポッポー。



流行オッペケペー節（明治二十四年版）

扨、その政治的批評は兎に角、一般思想界に於ては、帝國憲法發布、議會開設、教育勅語の發布は、最も時機に適して、民衆の多くに自覺觀念を與へ、國民的理想の歸趨するところを示して、紛擾、亂雜、混淆、無統一であつた思想界を、稍統一靜肅ならしめたことは事實であつた。ちようど其頃、井上哲次郎は學問淵叢の地より、突如として「教育と宗教の衝突」といふ論文を公にして、その國家本位の立脚地から、博愛主義世界主義を標榜した基督教の教義を攻撃して、基督教と教育勅語の矛盾を論じ、大に基督教界を騷然たらしめた。横井時雄、植村正久、大西祝、本多庸一等は、基督教の爲に應戰よく努めたけれど、折

も折、内村鑑三の御眞影に對する不敬事件、奧村禎次郎の眼中國家無しの非國民議論、田村直臣の同胞誹謗事件の宣傳は、さなきだに毛嫌ひの大衆の憎悪を買ふに至り、アーメンソーメンの歌などを流行らせ、そのため、女學生間に氣まぐれの流行をなしてゐた讃美歌の謠はれずなつて行つたのは御景物であつた。

【アーメンソーメンの歌】

アーメン素麵ひや素麵、主よ、われらの蕎麥に。

この宗教界の一事象に刺激されて、我が地歩を定めようと圖つたのは神道と佛教とであつた。

佛教は、先づ僧侶内の教育普及方針を定めて學術研究を計劃し、神道は、久米邦武の「祭天の古俗」說の論議に憤激されて、競て津田常名等の神道辯護となり、大に宗教改革の叫びを擧げたけれども、然もそれら宗教の威信が、時代人心の思想に自覺的の影響を與ふる迄には至らなかつたかして、折から神佛取りまぜのありがた節が謠はれだした。

【ありがた節】

ありがたいぞえ金神樣は、ノホヨホイ、これもお蔭ぢやノホヨホイ、天地金の大御神樣、教祖金光大神樣。

ありがたいぞえ成田の不動、ノホヨホイ、これも御利益ノホヨホイ、のうまくさんまんだばさらんだせんだあまかのしや、こわたやらんたらたあかんまん。

ありがたいぞえ天理王の尊、ノホヨホイ、これらお蔭ぢやノホヨホイ、助けたまへ一れつすまして甘露臺。

此期に於て、毅然として第三階級の間に信仰的威力を擴張し來つた天理教が、むげに極端に其教義を認めまいとする人人の間に、譏誣の模倣歌をして流行せしめた如きは、必ずしも其意味に於て時代の反映であるといふ事を得ないにしても、民衆の多くが、如何にその信仰生活といふものに對して自覺的の要素に乏しくあつたかが察せられる。

【天秤棒の尊の歌】

畑うれ田ァ賣れ、天つるつんの尊、邸を拂ふて立退きたァまへ天秤棒の尊。

これは、「天理教みかぐら歌」の「あしきを拂ふてたすけたまへてんりわうのみこと。」とあるに模したもので、天理教の教義の理想に從ひ、世のため人の爲に私財を提供して公益をはかるといふ原理は、信仰者のみに解せらるゝ眞理であつて、一般には、田畑を賣り邸を拂ふて天理教義に合致する信者の心理は全く不可解の點で、それは一種の破滅とまで考へられたことであらう。

扨、一方、基督教の表面的喜顔の反動は、人生に對する

的傾向を生ぜしめなどして、二十六年には、主情主義標榜の雜誌「文學界」も現はれ、ショペンハウエルの思想は大學派の論議を經て一時旺盛を極め、其結果、一面に於て厭世思想を形成せしめた如き傾向も觀られぬではなかつたが、然し、一般大衆の思想が厭世に陷つたわけではないので、俗曲流行歌に於ても、その反映であるといふやうな產物の現はれは無かつたので、當代に於ては、二十三・四年頃流行の社會事象を捕へて之を政治的に諷刺した如きおつぺけぺー節が、相變らず歐化主義を嘲笑し上すべりな文明開化を嘲笑せる外には、例の德永里朝の流行らした「緣かいな節」が、なほ種々の替歌を以つて行はれてゐたことである。

【流行緣かいな節】(明治二十四年頃流行)

〽春の遊びもさまざまに、あげる凧からもつれごと、ついに意氣地のからみあひ、かかる電信線かいな。

〽色に出にけりわが戀は、上(かみ)の句よみをよきしほに、つとさしよつて取りあげる、歌留多がとりもつ緣かいな。

〽あんなにかのこを思ふても、そばまんぢうにおこしたらようかんくづがりんきして、ふつくり焦がしたパンかいな。

〽多い一座のその中で、謎でさされた盃を、たしかに胸にうけとつて、眼と眼が飲み込む緣かいな。

〽選み出された議員さん、辯をふるつて議するのも、つまりところは國のため、よいとわるいの論かいな。

明治二十五年以後、愉快節が、欣舞節と變り行はれる頃には、演歌者の社會諷刺も全くオッペケペーの亞流に過ぎなくなつてゐた。それが全く社會批評の立場から離れて行つた大きな原因の一つは、日清戰爭當時より漸く流行の範圍にはいつた法界節の擡頭にあつたとも考へられないことはない。少くも、法界節隆昌の影響は、演歌創始の主義目的をして、ここに遺憾なく破碎し盡したといつても過言ではないであらう。

【欣舞節】(明治二十五年頃流行)

〽金殿玉樓に住居して、綾や錦を身に纏ひ、右と左は梅櫻、前に盃杜にもたれ、晏氏の馭馬のそれならで、意氣揚々と二頭馬車、乘りし主人のシガレット、燻らす姿はよけれども、腹は五月の鯉なるぞ、飜譯書物を力草、たどる朗讀演說や、語る濟世經世の、策を自說とごまかして、英雄然たる面憎さ、その癖お金と見る時は、相貌崩して笑ひ顏、語りうなづく魂膽祕術、强兵富國の策よりも、自分のぽつぽを暖めて、饑に寒さに泣き叫ぶ、社會の底のどん底の、擊を肴の榮耀榮華、かかる無慈悲の振舞は、ずつと昔のその昔、昔語りと聞きしのみ、今は開化のありがたさ、慈悲仁

心もいと深き、紳士の萬歳唱へなん、欣舞欣舞欣舞、愉快愉快。

扨、此頃、東亞の風雲ただならず、日清間の國交漸く危殆に瀕せんとするにあたり、支那の背後に或陰影を想像せしめた事は、國民の不安不滿とするところであつた。明治二十四年四月、露國皇太子の來朝も意味ありげに考へられ、五月湖南事件は突發した。七月には又、清國水師提督丁汝昌が、當時東洋一を誇る艦隊を率ゐて横濱に來泊したそれは、全く一大示威運動のやうにも想像せられて、わが愛國心は、その國民的感情を、何時



流行縁かいな節(明治二十四年版)

ともなく、歌謠の上に反映せしめた。殊に、山田美妙齋作の「敵は幾萬」、作歌者知らずの「小楠公」、「元寇の歌」は最も強く國民の心を撃ち、廣く永く一般學生の間に謠はれた。

【敵は幾萬】

その一

敵は幾萬ありとても　すべて烏合の勢なるぞ
烏合の勢にあらずとも　味方に正しき道理あり
邪はそれ正に勝ち難く　直は曲にぞ勝栗の
堅き心の一徹は　石に矢の立つためしあり
石に矢の立つためしあり　などて恐るゝ事やある
などてたゆたふ事やある。

【楠正行】

その一節

嗚呼正成よ正成よ　公の逝去のこのかたは
黒雲四方に塞りて　月日も爲に光無く
惡魔は天下を横行し　下を虐げ上をさへ
侮り果てて上とせず　吹き來る風はなまぐさく
絶ゆる間もなき人馬の音　春は來れども花咲かず
芳野の山に花見んと　訪ひ來る人は絶えてなく
君が御代こそ千代千代と　囀る鳥の聲聞くは

何れの時にあるなるや　歎かはしきの至りなり

【元寇の歌】

その一節

四百餘州を擧る　十萬餘騎の敵
國難ここに見る　弘安四年夏の頃
何ぞ恐れん我に　鎌倉男子あり
正義武斷の名　一喝して世に示す

この時に當り、報効義會長海軍大尉郡司成忠が、短艇遠征のため、千島移住の一黨を率ゐて隅田川を出發した壯擧（二十六年三月）と、海軍中佐福島安正が、單騎西比利亞を横斷して歸朝した（二十六年六月）ことは、國民に一大センセーションを與へ、その壯擧を歌ふた兩勇士遠征の歌が、瞬く民間に行はれたのも、時代を背景として頗る意味あることに思はれた。

【郡司大尉短艇遠征の歌】

日本男兒の譽なる　郡司大尉の企ては
百と有餘の强兵を　七艘のボートに乘り込ませ
千里の波濤を蹴破つて　日本の北の其北の
千島の果の占守島　極寒凜烈無人の地
千辛萬苦の功積んで　殖民拓地の實を擧げ
北門鎖やゝを堅くなし　狡猾外奴の窺窬や

海外諸國の覺りを　防いで國威を示さんと
忠勇義膽の振舞を　叡慮にかなひて帝より
降し賜はる勅語にて　報効義會と名も高く
海を隔てて四百餘里　向ふの岸には鷲の旗
此方の岸には日の丸の　國旗堂々靡かして
對等權利を擴張し　富國强兵の基を立つ

『實に滿足慶賀の至り。』

【福島中佐單騎遠征の歌】

忠勇武斷の振舞は　福島中佐の遠征よ
嘶く駒に鞭を揚げ　過ぎ行く道は白露の
鳥も辭せぬ峰つづき　アルタイ嵐の大吹雪
寒烈肌をつんざくも　降るこそ繁き雨あられ
炎熱骨をとらかすも　行けど果なき沙漠の地
蒙古の月のさゆる夜に　木の根を枕岩陰を
假の厩屋と賴みつつ　人も恐るゝシベリヤの
猛獸群をなす中も　腰に帶せる日本刀
拔いて狼虎を拂ひつつ　三千五百有餘里を
踏み分け越えし旅衣　矢猛心の一念は
なるとならぬの二道ぞ　その一道は死ぬるのみ
乘り行く駒は斃るとも　よしや命は絕ゆるまで

後ハは早亦ねしたゝ　千代田宮の御前に
めでたく歸朝の晴れの　天皇陛下に拜謁し
老若男女は寄りつどひ　歡迎頌歌の聲高く
美名を天下に轟かし　武門の鏡と後の世に
君が爲れは國の爲　君が爲れは國の爲。

その郡司大尉遠征歌の結句の「實に滿足慶賀の至り」は後の劍舞節に眞似せられた。

福島中佐の壯擧に對しては、當時、浦鹽歸りの娘子軍が傳へた浦鹽節に影響された遠征どんどん節が流行した。

【浦鹽節】

〽日本の親さん起きてか寢てか、思ひ出してか忘れてか。オロシヤ恐ろしマンザは臭し、意氣な日本人に金が無い。

【遠征どんどん節】

〽流石英雄の鐵石心もドンドン、愛馬の別れにや血の淚、悲哀じやねエさうぢやないかドンドン。

〽アルタイ山頭に駒を仕立ててドンドン、一目に見下す支那露西亞、愉快じやねエさうぢやないかドンドン。

然し、それらの流行も瞬時にして廢れた。そして、明治二十六年は、オッペケペー節、緣かいな節跡を絕ち、軍歌の外にしては、獨り欣舞節のみ演歌に行はれたが、それが、日清戰爭を惹起した「日清談判」の文句は、時代に適した歌詞として最も喜ばれ、それは又、劍舞の流行と共に、一般にまで廣く謠はれて、劍舞節と調子を替へて行はれた。

【劍舞節】（明治二十七年後流行）

日清談判破裂して、品川乘り出す吾妻艦、續いて金剛浪花艦、國旗堂々翻す、西鄕死するも彼が爲、大久保殺すも彼が爲、遺恨重なるちやんちやん坊主、日本男兒の村田銃、劍の切尖味へと、我兵各地に進擊す、難なく支那地を打倒し、萬里の長城乘取つて、一里半行きや北京城、城下の盟を結ぶ、實に滿足慶賀の至り、欣慕欣慕、愉快愉快、大勝利。

それが二十六年に、欣舞節として行はれた時には、「實に滿足慶賀の至り」の附句が無く、又、「大勝利」の結びも無かつた。其後行はれた「原田重吉」「松崎大尉」などといふ演歌も、はじめは欣舞節に謠はれたのであるが、其後「實に滿足慶賀の至り」の附句と、『大勝利』の結びを加へて、劍舞節に謠はれた、即ち此節は演歌者に歌はれるのが欣舞節で、劍舞者に謠はれるのが劍舞節といふ差で、民衆の間には、兩方の調子が混じて行はれた傾向にある。それは一つには、日清戰爭後の改良劍舞師の人流行につれ、部曲は忘れ、地方の寄席に行はれ、壯士演劇

後のホーカイ節と組み合はされては、月琴、劍舞と共にかなり諸國に流されて行つたことでもある。

扨、日清の戰雲は漸く急を告げた。明治二十七年六月、わが大鳥公使が、韓王に謁し、内政改革の要を說き、支那に對して飽くまで强硬の態度を示したと聞えると、忽ち作者不明の「ちやちやらかちやん節」が謠はれ出した。

【ちやちやらかちやん節】

〽日本の大鳥公使はよつぽどえらいもの、日本の武勇を見せたいちうて、談判をきびしくす、ちやちやらかちやん。

〽支那の袁世凱はよつぽど卑怯者、大鳥公使にかなはんちうて、國元へ逃げて行く、ちやちやらかちやん。

七月、豐島沖の海戰があつて、翌月、日本は、淸國に宣戰を布告し、九月、大元帥陛下廣島大本營に行幸遊ばされた。

その頃、ちやちやらかちやんは、メッチャメチャ節に行はれ、一つとせい節、トコトンヤレナ節、ホイホイ節等が復活し、やつとんまかせ節、やつこりや節などが續出した一方、軍歌の簇生を見るに至つた。

【めつちやめちや節】(明治二十七年流行)

〽日本の意氣地はよつぽど强いもの、朝鮮國を助けんちうでちやんちやんをメッチヤメチヤ。

〽朝鮮の大院君はよつぽど悧巧者國の政治が直らんちうで、びんそくをメッチヤメチヤ。

〽支那のちやんちやん坊主はよつぽど弱いもの、錦の御旗にかなはんちうで、牙山を逃げて行く、メッチヤメチヤ。

【征淸とことんやれ節】(明治二十七年流行)

〽見なさい見なさいお馬の前をサッサと逃げるは何ぢやいな、あれは袁世凱めが朝鮮引上げ知らないか、トコトンヤレトンヤレナ。

〽見なさい見なさい港をくらましおどおど逃げるは、何ぢやいな、あれは名うての提督勃海行とは知らないか、トコトンヤレトンヤレナ。

【ホイホイ節】(明治二十七年流行)

〽支那の李鴻章は鰯か雜魚かネエホイ、鯛(隊)に追はれて逃げて行くんだよ、ホイホイ。

【やつとんまかせ節】(明治二十七年流行)

〽國の爲ならわしやどこまでも、ヤツトンマカセ、たとひ火の中水の底、ヤツトンマカセ。

【やつこりや節】(明治二十七年頃流行)

〽丸髷崩して束髮結ふて、看護婦するのもヤツコリヤ國の爲。

軍歌の擡頭は、先づ、横井忠直の征清歌「うてやこらせや」、次いで、「今度このたび御國のために」などに始まり、征清の歌は、福羽美靜、細川潤次郎、小中村義象、外山正一、佐々木信綱、中村秋香等に作歌されたが、最も人口に膾炙したのは、何といつても「うてやこらせや」であつた。

【征清軍歌膺てや懲せや】

（參謀部編輯官横井忠直作歌）

その一

膺てや懲せや清國を
清は御國の讐なるぞ
東洋平和の讐なるぞ
伐ちて正しき國とせよ
御國の權利を妨ぐる
傲慢無禮の敵を伐て
東洋平和の義を知らぬ
膺てや懲せや清國を
蒙昧頑固の敵を伐て
膺てや懲せや清國を



ちやちやらかちやん・メツチヤチヤメチヤ節
（明治二十七年版）

軍歌は、其後、大捷の度に多くの作歌が提供された。福羽美靜の「進軍歌」、「平壤の戰ひ」、「原田の武勇」、小中村義象の「進め我駒」、「豐島の戰」、坂正臣の「成歡の戰」、中村秋香の「皇國の旗」、「平壤の戰」、「テツトリング」、「三水雷艇長」、「威海衞」、佐々木信綱の「日章旗」、「雪夜の斥候」、「進軍歌」、「義勇兵」、「豫備兵」、「勇敢なる水兵」、「輜重兵」、「守永偵察隊」、宇田川文海の「祝捷軍歌」、「平壤大勝歌」、落合直文の「兵士のかがみ」、「威海衞陷落」、大和田建樹の「水雷艇」、「澎湖島」、「一人の日本兵士」、飯島花月の「平壤激戰」、外山正一の「我海軍」、「我は喇叭手なり」、毛利元德の「陸戰」、「豐島沖海戰」、「黃海の戰」、本居豐頴の「祝捷軍歌」東宮鐵眞呂の「海城の逆擊」、旗野十一郎の「三角湧の三十士」「丁汝昌」、菊間義清の「東北男兒」、「安城渡頭の激戰」、「婦人從軍歌」、鳥山啓の「戰鬪歌」「黃海の戰」、「野營の月」、「大寺少將」、「赤十字」、帝國大學講師フオン・カール・フローレンツの「問はでもしるや北京城」等が主なるもので、作曲者として、納所辨次郎、鈴木米次郎、奧好義、山田源一郎等が最も努力して、我國洋樂普及の第一期の收獲を



日清戰爭とことんやれ節（明治二十七年版）

示したが、廣く永く謠はれたのは、そのうち、菊間義淸の「安城渡頭の激戰」、「婦人從軍歌」、佐々木信綱の「勇敢なる水兵」ぐらゐに過ぎず、これに征淸第二軍作歌、所屬軍樂隊作曲の「雪の進軍」を加へて、日淸役軍歌の四秀逸といふことが出來やう。

【安城渡頭の激戰・喇叭手の最後】（菊間義淸作歌・作曲）

一

渡るにやすき安城の　名は徒らのものなるか
敵のうちだす彈丸に　波はいかりて水さわぎ

二

湧き立ちかへるくれなゐの　血潮のほかにみちもなく
先鋒たりしわが軍の　苦戰のほどぞ知られける

三

この時ひとり喇叭手は　とり佩く太刀の束の間も
進め進めと吹きしきる　進軍喇叭のすさまじさ

四

その音忽ち打ち絶えて　再びかすかに聞えたり
打ち絶えたりしは何故ぞ　かすかになりしは何故ぞ

五

打ち絶えたりしその時は　彈丸のんどを貫けり
かすかになりしその時は　熱血氣管にあふれたり

六

彈丸のんどを貫けど　熱血氣管にあふるれど
喇叭はなたず握りつめ　左手に杖つく村田銃

七

玉とその身はくだけても　靈魂天地をかけめぐり
なほ敵軍をやぶるらむ　あな勇ましの喇叭手よ

八

雲山萬里かけへだつ　四千餘萬の同胞も
君が喇叭のひゞきには　進むは今と勇むなる。

【婦人從軍歌】（菊間義清作歌詞氏及萩野理喜治作曲）

一

火筒の響遠ざかる　跡には蟲もこえたてず
吹き立つ風はなまぐさく　くれなゐ染めし草の色

二

わきてすごきは敵味方　帽子飛び去り袖ちぎれ
斃れし人の顔色は　野邊の草葉にさもにたり

三

やがて十字の旗をたて　天幕をさして荷ひゆく
此人々は日の本の　仁と愛とに富む夫人

四

眞白に細き手をのべて　流るゝ血しほ洗ひ去り
まくや繃帶白妙の　衣の袖はあけにそみ

五

味方の兵の上のみか　言も通はぬあだ迄も
いとねんごろに看護する　心の色は赤十字

六

あな勇ましや文明の　母といふ名をおひ持ちて
いとねんごろに看護する　心の色は赤十字。

【勇敢なる水兵】（佐々木信綱作歌・奥好義作曲）

煙も見えず雲もなく　風も起らず浪立たず
鏡の如き黄海は　曇りそめたり時の間に
空に知れぬいかづちか　浪にきらめく電光か
煙は空を立ちこめて　天つ日かげも色くらし」
戰今がたけなはに　つとめつくせる勇夫の
尊き血もて甲板は　から紅にかざられつ」
彈丸のくだけの飛散て　數多の傷を身におへど
其たまの緒を勇氣もて　繋ぎとめたる水夫あり」
副艦長のすぎゆくを　痛む眼に見とめけん
苦しき聲をはりあげて　彼はさけびぬ「副長よ」
呼びとめられし副長は　彼の方へにたゝずめり
聲をしぼりて彼は問ふ　まだ沈まずや定遠は」
副長の眼はうるほへり　されども聲は勇ましく
心やすかれ定遠は　戰ひがたくなしはてき」
きゝし彼は嬉しげに　最後の微笑を洩しつゝ
いかで敵を討ちてよと　言ふ程もなく息たえぬ」
皇國につくす皇軍の　向ふ所に敵もなく
日の大御旗うらうらと　東の洋をてらすなり」
まだ沈まずや定遠は　其言の葉は短きも

皇國をおもふ國民の　心に長くしるされん

【雪の進軍】（征清第二軍軍樂隊作）

其一

雪の進軍氷を踏んで　どこが河やら路さへ知れず
馬は倒れる捨てても置けず　こゝは何處ぞ敵の國
まゝよ大膽一吹やれば　賴み少なや煙草が二本

其二

燒かぬ乾魚（ひもの）と半煮飯に　なまじ命のある其内は
こらへきれない寒さに焚火　けむい筈だよ生木がいぶる
澁い顔して功名話し　すいと云ふのは梅干ひとつ

其三

きのみ着のまゝ氣樂は臥房（ねどこ）　背嚢枕に外套かぶりや
背（せな）のぬくみで霜とけかゝる　夜具の黍稈しつぽり濡れて
結びかねたる露營の夢を　月は冷く顔のぞき込む。

「雪の進軍」は、征清第二軍が、二十七年十月、花園河口上陸以來、金州に、旅順に、蓋平に、威海衛に、牛莊に、田庄臺に轉戰當時の作曲で、その俗曲調が、最も喜ばれたもので、日露戰爭頃にも盛んに謡はれ、今でも軍隊に謡はれてゐる。

此外、征清軍中には、陸軍に、當時第一軍司令官であつた山縣有朋作歌の「鴨綠江」（陸軍一等軍樂長古矢弘政作曲）、歩兵第十二旅團長陸軍少將長谷川好道作歌の「旅順口」（樂師辻則承作曲）、第二軍參謀長陸軍少將井上光作歌の「旅順口攻撃」、陸軍歩兵大佐佐藤正の「十八聯隊」（樂手多忠基作曲）陸軍歩兵中尉高木鍊吉作歌の「歩兵第三聯隊」、陸軍歩兵大尉田宮一郎の「征清軍歌」、混成枝隊後備歩兵第一聯隊第五中隊長中村大尉作歌の「日本武勇軍」陸軍編纂官横井忠直作歌の「丈夫」、「平壤の大捷」、第五師團附二等軍醫中原貞衛の「日本魂」、等等、海軍に海軍軍樂隊作曲の「黄海の大捷」、海軍軍樂師吉本光藏作歌の「海戰」、海軍大尉小笠原長生の「わが日の本のもののふ」、松島乗組海軍少主計竹内十次郎の「豐島沖」、「黄海海戰」、「水雷艇」、「威海衛軍港陷落」、「海軍の花」等等、頗る多いことであるが、軍中作の各軍一般兵卒の間に行はれたのは、陸軍で「征清新ヤンレ節」海軍で「ダンゼン節」ぐらゐに過ぎなかつた。

【征清新ヤンレ節】（第二師團金州野營某上等兵作）

（ヘ）鍬を持つ手に鐵砲持つて　花の仙臺出たのは去年
永の逗留廣島街で　欠伸交りの小言も出たが
聽て舟出は宇品の港　之が故郷の見納なるぞ
舟の中から首さし出せば　煙のやうだが山々の影
どうせ死ぬのに何要るものか　さんさしぐれを唄うて死ねや
首と髪とが故郷に行かば　家で嬶めが鼻高々で

サーサやれやれ一齊射撃　面倒臭いや吶喊攻撃
彈は霰と飛んでは來たが　何の因果か中つてくれず
露營舍營に風邪さへひかず　豚と芋とで豚の樣に肥えた
ゆんべ母から手紙が屆いた　家の倅は學校通ひ
村の娘子が嫁に行つた　鐵葉(ブリキ)喇叭を五錢で買つて
次男は毎日喇叭吹く　吹いた喇叭を夢に見て
今朝の喇叭で目が覺めたヤンレー目がさめたヤンレ

【軍艦數へ歌・ダンゼン節】（黃海海戰參加某大尉作）

〽一つ翻めく御旗をあげて、旗艦松島ダンゼン乘り出す、
日本海軍ますます萬歲。
〽二つ不思議にやどりし鷹の、名さへ高千穗ダンゼンたか
ら船、日本海軍ますます萬歲。
〽三つ見事にきりぬけかへる、比叡赤城ダンゼン世に誇る
日本海軍ますます萬歲。（以下略）

黃海大海戰は二十七年の九月、旅順口占領がその十一月、翌年一月、第一旅團乃木希典蓋平を陷れ、茲に第一軍第二軍の連絡が通じた。彼は、其進擊途上、嘗蘭店にて新年を迎へて、「惠の露」一篇を作歌した。その後この作は、林廣繼の作曲によつて行はれたが、此風流作歌の日本本土に傳へられた翌日、乃木軍は、蓋平を占領したのであつた。此作は、陸軍少將内寛次郎作歌の「大和魂」（東儀季治作曲）と共に當時風流の双璧を以つて謳はれたものであるが、流行歌の範圍に入るものでないので割愛する。

扨、二月十八日、威海衞軍港陷落して、清國北洋艦隊全滅し、清國は媾和の議を求め、媾和使李鴻章を馬關に遣した。四月、日本は其降を容れ、媾和條約に調印したのであつたが、ここにはしなくも露獨佛三國の聯合勸告を觀、日本は、餘儀なく遼東還附を承認し、五月この詔勅が發せられた。此間の消息は、淡々節、元氣節などに反映してゐる。

【淡々節】（明治二十八年頃流行）

〽ヒマラヤの峰に朝日の旗輝けば、英露獨佛雲淡々、三國干
涉よけれども、遼東還附を思ひ出しや、慷慨悲憤に雲淡々
日本刀に村田銃、進擊突貫五大洲、一時に滅ぼす夢を見た、
霹靂一聲夢醒めりや、月は朧に雲淡々。

【元氣節】（明治二十八年頃流行）

〽東洋の大勢つらつら見れば、うかとかうしちやゐられない
七寸の鞋踏みしめて、歐亞跋涉して絕大の、偉業を立てた
ら何とまた愉快だろ、これぞまお壯快なちよいと快男子。

この五月、臺灣は、獨立共和國を建てて日本に抵抗したが、日本は日清條約によつて、六月之を併合し、十月賊將劉永福を降服せしめた。此間、本土には、天籟節が謠はれたが流行せな

たるものであつた。又、十一月、近衛兵凱旋の後、本居豐穎の「北白川能久親王殿下」の軍歌が新作された。それは學校軍歌たるに過ぎなかつた。

【天籟節】（明治二十八年流行）

〔東亞の波瀾もうれしや濟みて、パチユテンライヤン、建つる臺灣日の御旗、メンメトエーストリンタン、テケシユットチヨイトユケホイ。

凱旋軍歌は、媾和後、續々として新作された。乃木將軍にも『我が日の本の軍人(いくさびと)、強き敵とて何おそるべき、』に始まる「凱旋軍歌」（山本樂長作曲）があり、野津道貫大將にも『皇御軍(すめらいくさ)は去年の夏、安藝津島根を船出して、』に始まる「凱旋軍歌」があるが、就中行はれたのは、『道は六百八十里、長門の浦を船出して、はや二歳(ふたとせ)を故鄕の、』に始まる「凱旋歌」で、當時盛んに謠はれたものである。

扨、日清戰爭がもたらした、もう一つの産物は、地方唄の傳播流行であつた。

大本營が廣島に遷され、此處で臨時議會が開かれる頃には、其地所産の「宮島節」は勿論、出征戰士の多國的であることから、最も特異な地方唄さへ、大衆の前に紹介せられて、それより諸方に傳播の傾向を取つたことである。そしてそれは、大捷、凱旋と共に、專ら都會に流行し、殊に酒席の興を助くる、音頭、甚句、大津繪、どど一などと共に行はれた。地方俚謠が鄕土の色彩を離れて御座敷唄化し、鄕土特異の調子が俗曲化して行はれるやうになつたのは、此期を以て最も甚だしとする。磯節、博多節などの曲節が、純眞な鄕土調から離れて、三味線化された別のメロデーを提供するやうになつて、在來の俗曲界は、頗る又賑やかな世界を展開した感を深からしめた。

扨、此期に於て、諸種の俗謠が雜然と行はれたのも一特長であるなら、戰勝の齎した花柳界大繁昌より、廢頽的な御座敷唄を流行せしめたことも、一つの特長と見れば見られる。

【へなぐり節】（明治二十七年頃流行）

〔思ひへねぐり出してはヒキタリ寫眞を眺めヨ、なぜにヘネグリ寫眞ガヒキタリ物言はぬ、ヘネグリどつこいヒキタリしや。

【こちやえ節】（第三次・明治二十七年流行）

〔ゆふべ舞子と添寐して、夜を明石、けさの別れの戀しさに、あれ大久保驛に後を見る、コチヤエ、コチヤエ。

【落膽節】（明治二十八年流行）

〔旅順とられて威海衛が落ちる、北洋艦隊全滅す、全滅す、これなら開戰するのぢやなかつたに、落膽落膽つらいつらい。

【すてゝこ】（第二次・明治二十八年流行）
（ゆふべ見たよな大きな夢を、威海衛を呑に食ひ、鎮遠定遠下駄にはき、そのまた帆柱杖につき、ほうかん山に腰をかけ、四百餘州を一またぎ、あんまり咽喉が渇くゆゑ、黄河の水を一二三口に呑み下せば、何やら咽喉にたつたので、えへんえへんと咳ばらひ、唾液を吐き出しよく見れば、萬里の長城が飛んで出た。

日清戰爭が、日本の勝利をもつて媾和となつた月、即ち明治二十八年四月に於ける京都大博覽會の後には、その影響を受けた、四季の唄といふのが逆行流行して來た。

【京の四季】（第二次・明治二十八・九年頃流行）
（春は嬉しや二人揃ふて花見の酒、庭の櫻に朧月、それを邪魔する雨風が、ちよいと咲かして又散らす。
（夏は嬉しや、二人揃うて鳴海の浴衣、團扇片手に橋の上、雲がりんきして月隱す、ちよいと螢が身を焦す。
（秋は嬉しや、二人並んで月見の窓、いろいろ話を菊の花、しかとわからん主の胸、ちよとわたしの氣を紅葉。
（冬は嬉しや、二人轉んで雪見の酒、苦勞知らずの銀世界、話も積れば雪も積む、ちよと解けます炬燵中。
（夏は嬉しや、二人揃うて涼みの舟、風が悋氣で簾卷く、戀の瀨川に棹たたぬ、ちよいと浮名が流れ行く。

北京（四季に續いて流行した日清戰爭の替へ歌に、レールエ節がある。

【レールエ節】（明治二十九年頃流行）
（驛長さん、私は西京の者どすえ、今日は濱松明日はまたレールエ、一番汽車で新橋ステーションと乗り出す、切符拜見、

明治二十九年に至つて流行した明治第二次のかあいや節は、戰後の未亡人をあはれに謠ふにふさはしい歌であつた。

【かあいや節】（第二次・明治二十九年流行）
（何何少尉さんは、軍服着て、シャッポかぶり、日本刀ひつさげ、戰爭にお出かけ、牙山は大勝利、九連城がいイとま、女房何何さんが、ああ、若後家さア若後家さ、かわいそかわいそ。

その頃また、ドンドン節が謠はれ出した。

【どんどん節】（第二次・明治二十九年流行）
（かつたかつたと支那兵いふは、ドンドン、危うかつたと恐かつた、ほんとかね、そかね、ドンドン。

次では、いばりやんす節、有明節などが謠はれた。

【いばりやんす節】（明治二十九・三十年頃流行）
（少尉さん、中尉になつたといばりやんす、一等・二等、上等、伍長、軍曹、特務曹長のくりあげで。

日清戰爭役の占領地總督部東京凱旋が、二十九年の一月、大本營解散が四月のことで、いばりやんすは、凱旋で軍人がもて

たるものであつた。又、十一月、近衛兵凱旋の後、本居豐穎の「北白川能久親王殿下」の軍歌が新作された。それは學校軍歌たるに過ぎなかつた。

【天籟節】(明治二十八年流行)

〽東亞の波瀾もうれしや濟みて、バチユテンライヤン、建つる臺灣日の御旗、メンメトエーストリンタン、テケシユツトチヨイトユケホイ。

凱旋軍歌は、媾和後、續々として新作された。乃木將軍にも『我が日の本の軍人、強き敵とて何おそるべき、』に始まる「凱旋軍歌」(山本樂長作曲)があり、野津道貫大將にも『皇御軍は去年の夏、安藝津島根を船出して、』に始まる「凱旋軍歌」があるが、就中行はれたのは、『道は六百八十里、長門の浦を船出して、はや二歳を故鄕の』に始まる「凱旋歌」で、當時盛んに謠はれたものである。

扨、日清戰爭がもたらした、もう一つの產物は、地方唄の傳播流行であつた。

大本營が廣島に遷され、此處で臨時議會が開かれる頃には、其地所產の「宮島節」は勿論、出征戰士の多國的であることから、最も特異な地方唄さへ、大衆の前に紹介せられて、それより諸方に傳播の傾向を取つたことである。そしてそれは、大捷、凱旋と共に、專ら都會に流行し、殊に酒席の興を助くる、音頭、甚句、大津繪、どど一などと共に行はれた。地方俚謠が鄕土の色彩を離れて御座敷唄化し、鄕土特異の調子が俗曲化して行はれるやうになつたのは、此期を以て最も甚だしとする。磯節、博多節などの曲節が、純眞な鄕土調から離れて、三味線化された別のメロデーを提供するやうになつて、在來の俗曲界は、頗る又賑やかな世界を展開した感を深からしめた。

扨、此期に於て、諸種の俗謠が雜然と行はれたのも一特長であるなら、戰勝の齎した花柳界大繁昌より、廢頽的な御座敷唄を流行せしめたことも、一つの特長と見れば見られる。

【へなぐり節】(明治二十七年頃流行)

〽思ひへねぐり出してはヒキタリ寫眞を眺めヨ、なぜにヘネグリ寫眞ガヒキタリ物言はぬ、ヘネグリどつこいヒキタリしや。

【こちやえ節】(第三次・明治二十七年流行)

〽ゆふべ舞子と添寐して、夜を明石、けさの別れの戀しさに、あれ大久保驛に後を見る、コチヤエ、コチヤエ。

【落膽節】(明治二十八年流行)

〽旅順とられて威海衛が落ちる、北洋艦隊全滅す、全滅す、これなら開戰するのぢやなかつたに、落膽落膽つらいつらい。

【よてここ】(第二次・明治二十八年流行)

〽ゆふべ見たよな大きな夢を、滿洲關を脊に負ひ、蘭遼定遥下駄にはき、そのまた帆柱杖につき、ほうかん山に腰をかけ、四百餘州を一またぎ、あんまり咽喉が渇くゆゑ、黄河の水を一二三口に呑み干せば、何やら咽喉にたつたので、えへんえへんと咳ばらひ、唾液を吐き出しよく見れば、萬里の長城が飛んで出た。

日清戰爭が、日本の勝利をもつて媾和となつた月、即ち明治二十八年四月に於ける京都大博覽會の後には、その影響を受けた、四季の唄といふのが速行流行して來た。

【京の四季】(第二次・明治二十八・九年頃流行)

〽春は嬉しや二人揃ふて花見の酒、庭の櫻に朧月、それを邪魔する雨風が、ちよいと咲かして又散らす。

〽夏は嬉しや、二人揃うて鳴海の浴衣、團扇片手に橋の上、雲がりんきして月隠す、ちよいと螢が身を焦す。

〽秋は嬉しや、二人並んで月見の窓、いろいろ話を菊の花、しかとわからん主の胸、ちよとわたしの氣を紅葉。

〽冬は嬉しや、二人轉んで雪見の酒、苦勞知らずの銀世界、話も積れば雪も積む、ちよと解けます炬燵中。

〽夏は嬉しや、二人揃うて涼みの舟、風が悋氣で簾巻く、戀の瀬川に棹たたぬ、ちよいと浮名が流れ行く。

此京の四季と相前後して出た俗謡の流行歌に、レーレーエ節がある。

【レーレーエ節】(明治二十九年頃流行)

〽驛長さん、私は西京の者どすえ、今日は濱松明日はまたレーレーエ、一番汽車で新橋ステーションに乗り出す、切符拜見

明治二十九年にかけて流行した明治第二次のかあいそ節は、戰後の未亡人をあはれに謡ふにふさはしい歌であつた。

【かあいそ節】(第二次・明治二十九年流行)

〽何何少尉さんは、軍服着て、シャッポかぶり、日本刀ひつさげ、戰爭にお出かけ、牙山は大勝利、九連城がいくとま、女房は何何さんが、ああ、若後家さァ若後家さ、かわいそかわいそ。

その頃また、ドンドン節が謡はれ出した。

【どんどん節】(第二次・明治二十九年流行)

〽かつたかつたと支那兵いふは、ドンドン、危うかつたと恐かつた、ほんとかね、そかね、ドンドン。

次では、いばりやんす節、有明節などが謡はれた。

【いばりやんす節】(明治二十九・三十年頃流行)

〽少尉さん、中尉になつたといばりやんす、二等、一等、上等、伍長、軍曹、特務曹長のくりあげで。

日清戰爭役の占領地總督部東京凱旋が、二十九年の一月、大本營解散が四月のことで、いばりやんすは、凱旋で軍人がもて

た時代の産物であつた。

有明節は、頃も頃、X光線の始められた二十九年七月頃からで、第一日露協商締結後の産物である。

【有明節】(第一次・明治二十九・三十年頃流行)

〈有明の、ともす油は菜種なり、蝶が焦れて逢ひに來る、もとをただせば深い中、死ぬる覺悟で逢ひに來た。

有明節は、明治四十三・四年頃第二次の流行をなして多くの替歌を流行せしめ、大正に至つて三度寄席歌になつて復活され『是非とも、是非とも』の囃子詞を加へて花柳界に流行したが第一次の有明節は、原唄一つが主として流行したばかりであつたようだ。

扨、ここに流行歌界に於ける一つの革命は、俗曲が、支那樂の九連環を日本化(ジャツパンナイズ)して、それをわが俗謠の上に試みたことの上にある。顧みれば、その主要な樂器としての月琴が、明治に流行したのは、音樂取調所が始めて生徒を募集した明治十三年十月頃で、當時の雇教師米人音樂家ルーサー・ホワイチング・メーソンなどが、日本の三味線と共に、此樂器のエキゾチツクな興味に喚られたなどいふことから、歐化時代には、上流階級の家庭に愛好され、明治二十年頃には隨分と廣い趣味家を持つた事であつた。それが日清戰役當時の俗曲隆盛の時代に至つて、然も支那樂器の月琴が、「ホーカイ節」を提げて擡頭し、忽ち彪大なる勢力を振つて日本國中に「ホーカイ節」といふ流行唄を行き渡らせた事は、當時の思想から言へば、一種の皮肉な現象のやうに考へられぬでもない。

ホーカイ節のホーカイは、一般には「法界節」と當書されてゐるが、日清戰爭時代には砲界節ともぢつた者もある。然し、それが、囃子詞のホーカイを以て、節の稱呼とされたことは勿論で、その曲調は露骨に九連環の本體を聯想せしめた。

九連環(清樂譜)

看看也、賜奴的九連環九吓九連環雙手拿來解不開拿把刀兒割、割不斷了也也呦。

ホーカイ節は、即ち清樂九連環の脫化で、ホーカイは、即ち不開(ほかい)に源を發してゐる。江戸時代の化政期の看看踊(かんかんをどり)唄は、此九連環をそのまゝ轉訛した唐人踊節で、もと長崎からの輸入ものであつた。ホーカイ節も、謠ひはじめの頃は長崎節の名でよばれたが、何時ともなく不開の囃子詞から、ホーカイ節と呼ばれるに至つたものである。

そして其長崎節といはれた頃には、次のやうに謠はれた。

【長崎節不開(ホーカイ)】

〈春風に、庭にほころぶ梅の花、鶯とまれやあの枝に、ホーカイそちが囀りや梅がものいふここちする、ホーホケキヨ。

〈一日も早く年あけ主のそば、縞の衣服に繻子の帶ホーカ

イ、似合ひますかえこちの人、素人じみたで
ないかいな、上等船來。

かくて、ホーカイ節の出現は、あらゆる流行歌をして、一時其影を薄からしむるの勢力をなさしめ、その改良門つけ彈奏の月琴は、民庶の多くに頗る歡迎されて、俗謠小唄の流行を專有した態にあつた。それは二十八年から三十三年にかけての流行で、その大流行は二十九年から四箇年間に渡る。その間に段々の流行唄の出現のあつたことは記述の通りであるが、ホーカイ節は、その亞流であるさのさ節と共に、いつも流行軍歌とは別の道の先頭を切つてゐた。

【ホーカイ節】（明治二十八年より流行）

〽一日も、早年あけ主の側、縞の着物に繻子の帶、ホーカイ。



ホーカイ節（明治二十九年十一月版）

「春風に、綻に咲いたる梅の花。鶯とまれよ此枝に、ホーカイ。

〽その時に、別れが辛いと泣いたでないか、半年經たずに此始末
ホーカイ。

『一郎一婦手巾面を掩ひ、三絃鏗鏘夕に向つて出づ、高調綏節、行行彈じ行行歌ふ、素に似て熟するが如く、巧みに似て猶拙なり。この業、最も零落中の零より出で、終に隱伎を賣つて以て其口を糊す。男歌ひ、婦和す、聲々眞に逼るは我身の上、往事を說いて而して每夕恥を罵ぐ。』といふやうに「東京繁昌誌」に見える新内流しの一郎一婦は、日清戰爭後に其儘姿を變へて、新しい樂器、新しい俗謠をたづさへて諸方を眞晝間に彷徨したのであつて、その遊行は、都會地は勿論、田舍にも及び、茲に明治年來稀有な俗謠移入が、眞に津津浦浦に行はれたことである。

た時代の産物であつた。

有明節は、頃も頃、X光線の始められた二十九年七月頃からで、第一日露協商締結後の産物である。

【有明節】(第一次・明治二十九・三十年頃流行)

〈有明の、ともす油は菜種なり、蝶が焦れて逢ひに來る、もとをただせば深い中、死ぬる覺悟で逢ひに來た。

有明節は、明治四十三・四年頃第二次の流行をなして多くの替歌を流行せしめ、大正に至つて三度寄席歌になつて復活され『是非とも、是非とも』の囃子詞を加へて花柳界に流行したが第一次の有明節は、原唄一つが主として流行したばかりであつたやうだ。

扨、ここに流行歌界に於ける一つの革命は、俗曲が、支那樂の九連環を日本化して(ジャッパンナイズ)、それをわが俗謡の上に試みたことの上にある。顧みれば、その主要な樂器としての月琴が、明治に流行したのは、音樂取調所が始めて生徒を募集した明治十三年十月頃で、當時の雇教師米人音樂家ルーサー・ホワイチング・メーソンなどが、日本の三味線と共に、此樂器のエキゾチックな興味に喚られたなどいふことから、歐化時代には、上流階級の家庭に愛好され、明治二十年頃には隨分と廣い趣味家を持つた事であつた。それが日清戰役當時の俗曲隆盛の時代に至つて、然も支那樂器の月琴が、「ホーカイ節」を提げて擡頭し、忽ち大なる勢力を振つて日本國中に「ホーカイ節」といふ流行唄を行き渡らせた事は、當時の思想から言へば、一種の皮肉な現象のやうに考へられぬでもない。

ホーカイ節のホーカイは、一般には「法界節」と當書されてゐるが、日清戰爭時代には砲界節ともぢつた者もある。然し、それが、囃子詞のホーカイを以て、節の稱呼とされたことは勿論で、その曲調は露骨に九連環の本體を聯想せしめた。

九連環(清樂譜)

看看也(カンカンエ)、賜奴的九連環九叶九連環雙手拿來解不開拿把力兒割、割不斷了也也呦。

ホーカイ節は、卽ち清樂九連環の脫化で、ホーカイは、卽ち不開(プカイ)に源を發してゐる。江戸時代の化政期の看看踊(かんかんおどり)唄は、此九連環をそのまゝ轉訛した唐人踊節で、もと長崎からの輸入ものであつた。ホーカイ節も、謠ひはじめの頃は長崎節の名でよばれたが、何時ともなく不開の囃子詞から、ホーカイ節と呼ばれるに至つたものである。

そして其長崎節(ホーカイ)といはれた頃には、次のやうに謠はれた。

【長崎節不開】

〈春風に、庭にほころぶ梅の花、鶯とまれやあの枝に、ホーカイそちが囀りや梅がものいふここちする、ホーホケキヨ。

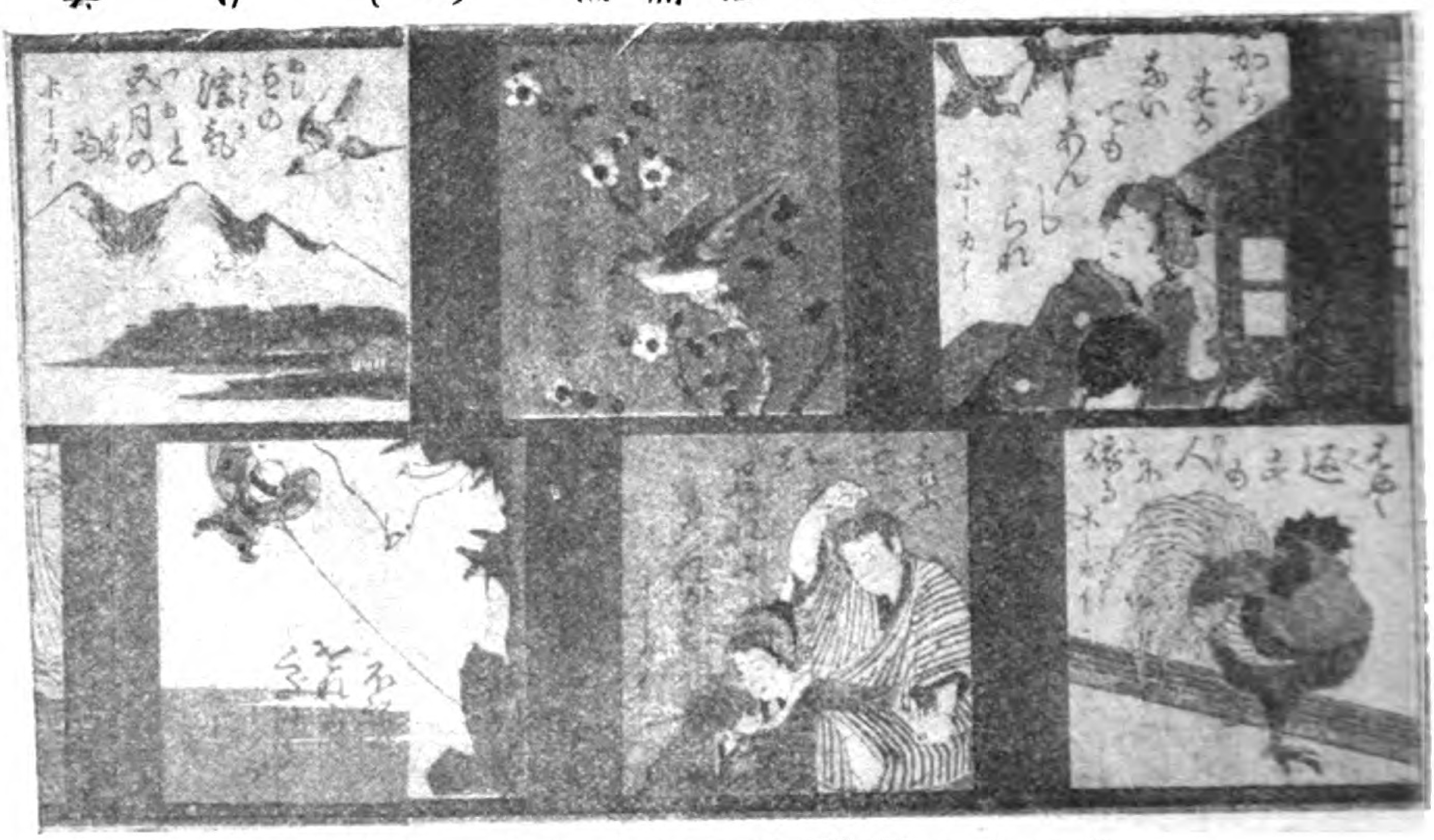
〈一日も早く年あけ主のそば、縞の衣服(きもの)に繻子の帯ホーカ

イ、假合ひますかえこちの人、素人じみたでないかいな、上等船來。

かくて、ホーカイ節の出現は、あらゆる流行歌をして、一時其影を薄からしむるの勢力をなさしめ、その改良門つけ彈奏の月琴は、民庶の多くに頗る歡迎されて、俗謠小唄の流行を專有した態にあつた。それは二十八年から三十三年にかけての流行で、その大流行は二十九年から四箇年間に渡る。その間に段々の流行唄の出現のあつたことは記述の通りであるが、ホーカイ節は、その亞流であるさのさ節と共に、いつも流行軍歌とは別の道の先頭を切つてゐた。

【ホーカイ節】（明治二十八年より流行）

〈一日も、早年あけ主の側、縞の着物に繻子の帶、ホーカイ。



ホーカイ節（明治二十九年十一月版）

〈春風に、庭に咲いたる梅の花、鶯とまれよ此枝に、ホーカイ。

〈その時に、別れが辛いと泣いたでないか、半年經たずに此始末ホーカイ。

『一郎一婦手巾面を掩ひ、三絃鏗鏘夕に向つて出づ、高調綏節、行行彈じ行行歌ふ、素に似て熟するが如く、巧みに似て猶拙なり。この業、最も零落中の零より出で、終に隱伎を賣つて以て其口を糊す。男歌ひ、婦和す、聲々眞に逼るは我身の上、往事を說いて而して每夕恥を罵ぐ。』といふやうに「東京繁昌誌」に見える新内流しの一郎一婦は、日清戰爭後に其儘姿を變へて、新しい樂器、新しい俗謠をたづさへて諸方を眞晝間に彷徨したのであつて、その遊行は、都會地は勿論、田舍にも及び、茲に明治年來稀有な俗謠移入が、眞に津津浦浦に行はれたことである。

山岳受難史

伊藤純一

はしがき

かへりみると、私なども山へ登り出してから、ざつと茲に二十年の歳月がたつ。去年亡くなつた叔父に連れられて、十四の夏私は始めて、箱根から富士へ登つた。それが山に對する私の病みつきである。いつたい無けなしの金と、時と、夥しい心身の疲勞とを犠牲にして、山へ登つてなにが嬉しいか、私には少しも判らない。人に問はれても、笑はれても答へるに言葉がないのである。しかも山が持つ魅力、興味は年と共に層一層、ぐいぐいと私を引きずつてゆく。

私は山で、幾人かの友達を失つた。自分もかつて奥秩父の雲取・三峰で、もう少しで命を落すところであつた。だから山で遭難した人の話を聞き、その記録を調べて見ると、全く人事とは思へない。いつか私は機會をみて未知、既知の如何を問はず、日本の山岳受難者の事蹟を調べて、一つは將來の登山家たちの活きた指道標に、も一つはまた山で悲しく亡はれた、先人の墓標をたて度い、と思つてゐた。

いま、端なくもその願ひが、叶へられようとしてゐる。私のよろこび、何ものがこれに過ぎよう。自分の持つてゐる過去帳だけでは無論不安心であつたから、私は色々な方々の御助力を仰いだ。遺族の人で、當時の古い手紙、紀念品を貸して下すつた方もある。槇有恒氏、早川種三氏、石川欣一氏、北尾鐐之助氏などにはすゐぶんと御援助を頂いた。この困難な仕事を了へて、いま私は悵然と、故人の靈に合掌してゐる。しかも不文、或ひは故人の名を、私は汚し、痛め、傷つけてゐるのではないであらうか。

一、乘鞍岳の美少年の死

明治三十八年の、八月八日の事であつた。單身東京を發して、信濃の白骨温泉から安房峠を越え、一旦飛驒の高山に落ちつき、再び引返して信、飛國境に近い平湯温泉村山方に旅裝を解いた、極めて眉目清秀な一青年があつた。貴族院議員、文學博士小牧昌業氏の三男で、厚彦君と呼び、日比谷の府立一中五年生。たしかその同級に往年の谷崎潤一郎氏、萬龍夫人の前夫で有名な恒川陽一郎氏、少し下のクラスに丸木砂土こと秦豐吉氏などがゐた筈である。

厚彦君は同じ旅宿で、附近南長森村の人柳原龜吉君と知合になり、翌九日早朝、相携へて小雨を冒し乘鞍岳の頂きを極めようと出發した。朝のうちは少々ばかり降雨もあつたが

午前十時に[illegible]に。[illegible]然午後二時ごろ、頂上へあと一里と云ふ地點まで達した時、突如猛烈な暴風雨が襲ひかゝつて、殆んど前進する事も不可能となつた。折りよく、道の傍らに小高い岩の瘤起があり、その下に約十人ほど身を潜めるに足る岩窟があるのを發見して、暫らく風雨を避ける事にした。

所が、一方それと同じ日に、方面は違ふ丹生川村平金山鑛山を發して、同じく乘鞍岳の頂上をこゝろざした別派の登山隊がある。飛驒高山町の資產家上野源左衛門氏四十六歲、同じく奥原吉左衛門氏六十一歲、船津町の人山田惣四郎氏三十二歲、以下高山中學生山崎忠三、長谷川民造兩少年などを加へた十一名の一行であつた。この人達も、同樣に突然な暴風雨に出遭つて、命からがら苦しい登山を續け、全身ぬれ鼠となつて午後三時すぎ、辛うじて前記の岩窟内へ飛び込んだ。

かうして計らずも、所を異にし、年齡の等しからぬ行きづりの登山者が、合せてこゝに十三名、身を縮めて岩窟の外に荒りたつ風雨い音を耳にする身となつた。午後四時、五時と時は經つが、風雨は刻一刻激しくなつて、その中の一人がふと外の面を眺めると、一錢銅貨大の雹が音を立てゝ降つてゐる。寒さは次第に身に迫り、一同は間もなく全身に顫ふるひを感じ、齒の根が合はなくなつて來た。

唇ばかりでなく、中には兩手、股のあたりにさへ小皺を生ずる者が出來、齒ぐきは一齊に變色して、このまゝでは甘んじて凍死を待つほかはない。そこで一行のうち、乘鞍岳には既に十數回登つてゐる船津町の先達で、上田與兵衛と云ふ人がまづ主張した。これから上一里半程登つて行けば、頂上を少し越した所に舊お籠り堂がある。踏とゞまつて凍死を待つよりも、一か八かの運だめしに、頂上まで登り切らうではないか……。

異常な寒氣に攻められて、本能的に變化を欲してゐたものか、衆議は二つに分れたが、今は躊躇してゐる場合でない。主張者の上田氏以下八名、元氣な高山中學生山崎、長谷川兩少年は勿論これに和して、悲壯な別れの言葉を殘したまゝ、頂きさして登つて行つて、殘つたのは上野、奥原の二老人、山田の一壯年、そしてわが青少年小牧厚彦君の五名となつた。進むべきか、退くべきか、是は全く至難な問題であつた。猛雨にして若しもう半日早く止めば、當然に、踏み留まつた者の勝利であつたが、嗚呼！

頂上に、風雨を避けるお籠り堂があるばかりか、しかも暖かい焚火が待構へてゐる、と『希望』を持つて突進する者は强かつた。幾度か岩の上に吹飛ばされて、身に數ヶ所の傷を負はぬ者は一人も無かつたが、八名は午後六時辛うじてお籠り堂に到着した。焚火もある濡れた衣類も乾かせる。そうなると、岩窟内へ殘して來た五人の安否が氣遣はれてならない。中學生長谷川君と、船津町の青年吉田東造君とが、意を決して岩窟まで下らうとすると、無慘にも、堂から僅か四丁ほどしか隔たつてゐない岩道に、上野、奥原二老人が力盡きたか、篠つく風雨の中に相擁して、すでに冷たいむくろとなつてゐた。

雨と風は益々激しく、二人の手では到底、二老人の遺骸を處理する事も出來ない。尙も

山岳受難史

伊藤純一

はしがき

かへりみると、私なども山へ登り出してから、ざつと茲に二十年の歳月がたつ。去年亡くなつた叔父に連れられて、十四の夏私は始めて、箱根から富士へ登つた。それが山に對する私の病みつきである。いつたい無けなしの金と、時と、夥しい心身の疲勞とを犧牲にして、山へ登つてなにが嬉しいか、私には少しも判らない。人に問はれても、笑はれても答へるに言葉がないのである。しかも山が持つ魅力、興味は年と共に層一層、ぐいぐいと私を引きすつてゆく。

私は山で、幾人かの友達を失つた。自分もかつて奥秩父の雲取、三峰で、もう少しで命を落すところであつた。だから山で遭難した人の話を聞き、その記録を調べて見ると、全く人事とは思へない。いつか私は機會をみて未知、既知の如何を問はず、日本の山岳受難者の事蹟を調べて、一つは將來の登山家たちの活きた指道標に、も一つはまた山で悲しく亡はれた、先人の墓標をたて度い、と思つてゐた。

いま、端なくもその願ひが、叶へられようとしてゐる。私のよろこび、何ものがこれに過ぎよう。自分の持つてゐる過去帳だけでは無論不安心であつたから、私は色々な方々の御助力を仰いだ。遺族の人で、當時の古い手紙、紀念品を貸して下すつた方もある。槇有恒氏、早川種三氏、石川欣一氏、北尾鐐之助氏などにはずゐぶんと御援助を頂いた。この困難な仕事を了へて、いま私は悵然と、故人の靈に合掌してゐる。しかも不文、或ひは故人の名を、私は汚し、痛め、傷つけてゐるのではないであらうか。

一、乘鞍岳の美少年の死

明治三十八年の、八月八日の事であつた。單身東京を發して、信濃の白骨温泉から安房峠を越え、一旦飛驒の高山に落ちつき、再び引返して信、飛國境に近い平湯温泉村山方に旅裝を解いた、極めて眉目淸秀な一靑年があつた。貴族院議員、文學博士小牧昌業氏の三男で、厚彦君と呼び、日比谷の府立一中五年生。たしかその同級に往年の谷崎潤一郎氏、萬龍夫人の前夫で有名な恒川陽一郎氏、少し下のクラスに丸木砂土こと秦豐吉氏たちがゐた筈である。

厚彦君は同じ旅宿で、附近南長森村の人柳原龜吉君と知合になり、翌九日早朝、相携へて小雨を冒し乘鞍岳の頂きを極めようと出發した。朝のうちは少々ばかり降雨もあつたが

午前十時に[illegible]向つて出發したのに、依然午後二時ごろ、頂上へあと二里弱と云ふ地點まで達した時、突如猛烈な暴風雨が襲ひかゝつて、殆んど前進する事も不可能となつた。折りよく、道の傍らに小高い岩の隆起があり、その下に約十人ほど身を潜めるに足る岩窟があるのを發見して、暫らく風雨を避ける事にした。

所が、一方それと同じ日に、方面は違ふ丹生川村平金山鑛山を發して、同じく乘鞍岳の頂上をこゝろざした別派の登山隊がある。飛驒高山町の資産家上野源左衛門氏四十六歳、同じく奥原吉左衛門氏六十一歳、船津町の人山田惣四郎氏三十二歳、以下高山中學生山崎悠三、長谷川民造兩少年などを加へた十一名の一行であつた。この人達も、同樣に突然な暴風雨に出遭つて、命からがら苦しい登山を續け、全身ぬれ鼠となつて午後三時すぎ、辛うじて前記の岩窟内へ飛び込んだ。

かうして計らずも、所を異にし、年齢の等しからぬ行きづりの登山者が、合せてこゝに十三名、身を縮めて岩窟の外に猛りたつ風雨の音を耳にする身となつた。午後四時、五時と時は經つが、風雨は刻一刻激しくなつて、その中の一人がふと外の面を眺めると、一銭銅貨大の雹が音を立てゝ降つてゐる。寒さは次第に身に迫り、一同は間もなく全身に胴ぶるひを感じ、齒の根が合はなくなつて來た。唇ばかりでなく、中には兩手、股のあたりにさへ小皺を生ずる者が出來、齒ぐきは一齊に變色して、このまゝでは甘んじて凍死を待つほかはない。そこで一行のうち、乘鞍岳には既に十數回登つてゐる船津町の先達で、上田與兵衛と云ふ人がまづ主張した。これから上一里半程登つて行けば、頂上を少し越した所に猶お籠り堂がある。踏とゞまつて凍死を待つよりも、一か八かの運だめしに、頂上まで登り切らうではないか……。

異常な寒氣に攻められて、本能的に變化を欲してゐたものか、衆議は二つに分れたが、今は躊躇してゐる場合でない。主張者の上田氏以下八名、元氣な高山中學生山崎、長谷川兩少年は勿論これに和して、悲壯な別れの言葉を殘したまゝ、頂きさして登つて行つて、殘つたのは上野、奥原の二老人、御嶽、山田の一壯年、そしてわが美少年小牧厚彦君の五名となつた。進むべきか、退くべきか、是は全く至難な問題であつた。猛雨にして若しもう半日早く止めば、當然に、踏み留まつた者の勝利であつたが、嗚呼！

頂上に、風雨を避けるお籠り堂があるばかりか、しかも暖かい焚火が待構へてゐる、と『希望』を持つて突進する者は強かつた。幾度か岩の上に吹飛ばされて、身に數ヶ所の傷を負はぬ者は一人も無かつたが、八名は午後六時辛うじてお籠り堂に到着した。焚火もある濡れた衣類も乾かせる。そうなると、岩窟内へ殘して來た五人の安否が氣遣はれてならない。中學生長谷川君と、船津町の青年吉田東造君とが、意を決して岩窟まで下らうとすると、無慘にも、堂から僅か四丁ほどしか隔たつてゐない岩道に、上野、奥原二老人が力盡きたか、篠つく風雨の中に相擁して、すでに冷たいむくろとなつてゐた。

雨と風は益々激しく、二人の手では到底、二老人の遺骸を處理する事も出來ない。偶も

一二町下つて見たが、厚彦君の一行は見えずそれ以上はお互ひの身が危險であつたので、お籠り堂へ引返してその夜は、空しく戸外の暴風雨を聞きつつ明け方を待つた。朝が來た。八月十日である。風雨は、まだ少しも止まうとはしない。午前四時三十分、一同も死の恐怖に追ひ立てられて、遮二無二下山を決行する事にした。

途中、上野、奧原の二老人の遺骸には、たゞ一片のお念佛を唱へたゞけで、その地點から五町程も下つて來ると、岩の凹所が、自然と淺い水たまりを作つてゐる路傍の小さい平地に柳原氏の膝を枕として、足を縮め、眼を見開いたまゝ蒼白い顏をして厚彦君が死んでゐた。總吉君も全くの虫の息であつた。また二町ほど下の岩と岩の影に、是は橫向きになつて右手をぐつと突出し、山田惣四郎君が事切れてゐた。踏み留まつて天候の恢復を待たうとしたが、遂ひに待ち切れず、上野、奧原の二老人まづ、留めるのも聞かず立ち去り、厚彦君以下の三名も、寒さの爲に全く意識不明となつて、たゞ夢遊病者のやうに風雨の中へ飛出し、九日夜のうちに遂ひに悲しい最後を遂げて終つたのであつた。

二、木曾駒ケ嶽の慘劇

尤もこれより先き、明治三十五年の一月廿五日、『雪の進軍氷を踏んで』で有名な八甲田山で演ぜられた、靑森第五聯隊の一行二百十名中生き殘つた者僅かに數名といふ悲慘事があつたが、それは山岳受難といふよりはミリタリズム受難に近いし、明治四十三年七月十六日長野縣諏訪郡四賀村字神戸の靑年團員の八ケ岳における遭難もあるが、それらは略して前途を急がう。

大正二年の八月二十八日、木曾駒ケ嶽の頂上伊那小屋から、駒飼池あたりへかけて起つた長野縣伊那郡中箕輪小學校の校長、赤羽長重氏以下同窓會員一名、高等科生徒八名の遭難を見るに及んで、わが國の『山岳受難史』はこゝに、最も悲壯な一場面に逢着するのである。一行は校長以下敎員二名、同窓會員九名生徒二十五名(この生徒の平均年齡十六歲)合せて三十六名といふ大人數。二十六日の午前五時半、學校を出發して內の萱まで三里、將基頭まで三里半、伊那小屋まで二里、計八里半の山道に向つて、軍歌などを高吟し乍ら元氣よく登つて行つた。

校長赤羽長重氏は、すでに駒ケ嶽へは數回の登山經驗もあつたし、一同にも防寒用として冬シャツ、眞綿等又食料として一人當り六食分、水筒、氷砂糖その他味噌漬など、かなり周到な準備を言ひ渡してあつた。一行は內の萱まで二回休憩し、途中一二回の微雨に出逢つたが、先頭、敎員征矢重得氏、生徒、赤羽校長、再び生徒、最後に敎員淸水將治氏のオーダーで、一路頂上さして進發した。午後四時屋ゲ池から駒飼池あたりへ差掛つた頃、天候一變して谷風冷たく、一行は午後六時十五分辛うじて伊那小屋まで到着した。

つまり學校を出發して以來、八里半の山道を途中四回程しか休まずに、約十二時間を費やして登つた勘定である。所が、强風を突いて漸く伊那小屋へ着いて見ると、何事ぞ、小屋は破壞され盡してゐて用を成さない。そこで校長はまづ全員を三班に分け、一部は食事

と休憩、一[illegible]の[illegible]、一[illegible]
取く、と[illegible]い[illegible]た[illegible]、風は[illegible]に激しく、夜に入つて寒氣は益々加はつて來る。焚火も思ふ様には燃えつかぬ。校長は再び命して三人づつ相擁し、暖を取りつつ眠らずに夜を明かす方策をとつた。

明くれば二十七日、依然として風は止むどころか、破れた小屋を根こそぎサラつて行きさうである。そこで校長と征矢教員が、安全な場所を求めて駒飼池まで下つて見ると、頂上に比して平坦ではあるし、風もまた割合にひどく當らない。急いで取つて返すと、生徒の一人古屋時松君が、既に十分ばかり前に氣絶した所だつた。毛布で身體を包み、手足を摩擦したり、人工呼吸を繰返したが、古屋少年は、眼を見開いたまゝ遂に絶命した。

これに驚いて征矢氏をトップに校長を中央清水氏殿りとなつて、呼吸も出來ぬ暴風の中を、意を決して下山する事になつた。先頭の征矢氏が、駒飼池をすぎ小出道の分岐點まで到着した時、そこまで無事に附從つた者は半數の十八人しかゐない。間もなく傳令使として、校長の[illegible]つけた。[illegible]に[illegible]者[illegible]い[illegible]である。早く麓の村里へ急報して、救援隊の救助を待つと云ふ由々しい報告であつた。

殿りを承はつて、九死に一生を得た清水將治氏の口から、一切の遭難顛末が語られたのである。まづ氏が伊那小屋を最後に出發して十町ほど下つて行くと、そこに萩原三平少年が倒れてゐた。それを背負つて、濃ケ池のほとりまで來ると、今度は唐澤武男少年が死んでゐる。無論校長が、色々と介抱に手を盡したらしい形跡は歴々と附近の草の上に殘つてゐる……。

事切れてゐる者は仕方がない。清水氏は尚も三平少年を背負つたまゝ、風を突いて山路を下つた。すると、三丁ほど下の青草の上に北川秀吉、唐澤賢甫、有賀直治の三少年が、何れも上向きになつて倒れてゐた。三少年の傍らには赤羽校長が顔色蒼白となつて、しきりに介抱してゐるのである。清水氏も、そこまで來ると自分自身が、餘程もう危険を感じて來た。ふと路傍を見るとそこに小さいけれど[illegible]一[illegible]人[illegible]「[illegible]、こゝへいふ一[illegible]い[illegible]と、翌[illegible]けるとすぐ、清水教員、萩原少年の二人はその場へ昏倒してしまつた。しかし、あくる日救援隊が馳けつけて、幸運にも救はれた後の實話によれば、昏倒しながらも清水氏は、勇猛果敢な校長の働らきと、その場に發した言葉だけをゆめ、うつつのうちに覺えてゐたと云ふ。即ち校長は、清水氏を見ると、いきなり『この三人はもう駄目だ。先きが心配だからこゝはよろしく君に頼む』と云ふや否や足元もしどろに、行く手へ向つて馳け出したさうである。

悲壯を極めたのは、それからの赤羽校長の死に到るまでの雄々しい奮闘であつた。おそらく激しい風の中を、潔々と下つて行つたであらう校長は、間もなく路上に平井賓少年が倒れて苦しんでゐたのを發見して、暫らく介抱したがまだ呼吸のあるのを知ると、すぐこれを自分の背に負つて、更に山を下つて行つた。すると恰度將棊頭の少し下方に、同級會員有賀[illegible]十[illegible]歳が、[illegible]少年を

細引で背負つたまゝ、二人とも無慘に土の上に横になつて、すでに事切れてゐた。

その哀れな兄弟の遺骸から、約四町ほど下つた大きな岩の影に、仰向けに右手を上げ、左手を股につけて、兩足を投げ出し、眼も口も開いたまゝ、つひに赤羽長重氏が倒れてゐた。校長に背負はれた平井少年も、一旦はその背中から這ひ出したらしく、約十五六間下方の草叢の中に、これも空しいむくろとなつてゐた。校長も平井少年も、今ま四丁にして安全な喬木地帶には入れたのに、あまりの心身の疲勞の爲か、その事を果さずに惜しむべき犧牲の死を遂げて終つた。

その日の午後六時半、征矢將治氏の急報によつて、臨時の救援隊が平井少年、赤羽校長の遭難地點まで到着した時には、校長にはまだ呼吸があつた。征矢氏が抱き起すと、「嬉しい」と一言、それから二分程して、『俺一人だア！』と云つたきりがつくりと頭を垂れて終つた。赤羽長重氏は、伊那郡春近村の人、四十三年三月中箕輪の校長に榮轉、一人の老母堂のほか、夫人みや子さんとの間に、五人の子女があつた。山岳受難者の一人として、永遠に忘れる事の出來ない人と云つていゝ。

『俺一人だア』と云ふ最後の言葉、無論事ここに到つた一切の責任が、自分一人の上にある、の意より外に解釋のしようはない。この遭難は、校長の態度が餘りに壯烈を極めた點及び、雪と雨とを伴はず、たゞ一晝夜の烈風で、かくも多數の犧牲者を出した點、何れも爾後の登山家達に、非常に大きな生きた問題を提供した。強いて結果よりの批判を加へるとすれば一、餘りにその人數が多すぎた事。二、食料六食分は、少年として重荷にすぎ、反つて疲勞を增した事。三、少年たちは伊那小屋へ着く前、無理な行程ですつかりへばつてゐた。四、小屋の破損は、事前に調査すべきであつた。五、古屋少年の死で度を失つたのは止むを得ないが、たとへ少數の犧牲者を出しても、最後まで小屋を死守した方がよくは無かつたか、等、等、等、それが當時の識者間に、ほゞ一致を見たところの見解であつた。

三、破不山下帝大生の遭難

あくる年、大正三年の一月三日には、富士山の七合五勺目ごろで、日本スキイ俱樂部員酒井齋氏が、數名の俱樂部員たちに交つて鮮やかなシユプールを殘してゐるうち、いきなり突風に逢ひ、數十間の下方に吹飛ばされて慘死した。酒井氏は、當時のスキイの本場越後高田市の第三小學校訓導で、スキイヤーとしては定評もあり、斯界の發展のために前途を惜しまれた人だつた。當時としては、富士の七合目以上まで、スキイの登攀を企てると云ふことは、それ自身すでに、異常な壯擧と云つてもよかつた。スキイ登山最初の犧牲として、われわれはこの人の名を記憶せねばならぬ。

大正五年の十月五日、群馬縣勢多郡富士見村の赤城山密林中に、慘たらしい一死體を發見した。これはその前月の二十三日、植物採集の目的で登山した東京農科大學、博物實驗室の助手、久米政武氏と判明した。山中に於て風雨に逢ひ、救ひを求むるすべもなく、稍

精盡きてその場に殉命したらしい。

　そうして大正五年の七月末から八月の上旬へかけ、天下を震撼させた大きな山岳受難が奥秩父の東澤、即ち甲斐破不山下の密林中に演ぜられる事となるのである『同じ裝輕く若人の、胸に榮ある金ぼたん、登山の用意とゝのひて、いざや極めむ國師岳。』と、いさゝか平凡な歌詞ながら、機敏にも當時の街頭の艶歌師が、聲高くこの遭難の有様を歌つたものである。

　帝大英法科一年小山秀三君、同じく藤井彦七郎君、同じく安川半右衛門君、工科一年中村孝三君に加へて、深川小學校訓導山室林次郎の五君は、大正五年七月二十四日夜東京を出發して、翌日午前五時中央線鹽山驛に到着した。最初のプランに依れば、二十五日は笛吹川を逆登つて甲武の國境雁坂峠下で露營。二十六日は甲武信岳の中腹で、二十七日は國師岳の山腹で、二十八日を金峰山の頂きで何れも露營、二十九日増富村、ラヂユム温泉に從つて困難な旅程を休らふ豫定であつた。

　四人の大學生は、いづれも一高以來の山岳部メンバーで、山にも相當の經驗を持つてゐた。先づ學校の山岳部から天幕を借受け、一日平均五里の道程を歩く事として、流行歌の冒頭の文句の樣に、すべての登山用意を整へて出發した。食料のうち白米は、五人で平均一日二升の見積りで、五日分合計一斗を、これは鹽山で買求めた。鑵詰類十二個、氷砂糖千鯣、鰹節、藥品、西洋ローソク等、準備に手ぬかりはない筈だつた。そうして豫定通り、第一夜の天幕を三富村、通稱二俣附近の河畔に張つて談笑、露營の夢を結んだのである。

　出發前の話では、藤井、小山の二君とも、八月匆々歸京する用事を東京に控へてゐた筈だのに、其後何んの消息もない。親族の人達が驚ろいて、五日、續々と現場へ捜索隊を差向けようとしてゐたとき、すでに四名の青年は、多分三十一日の午後とおぼしい頃疲勞、困憊の極枕を並べて倒れ、のち一名は生死の間をさまよふ事八日間、恰も夢遊病者のよう に險惡無双の密林と熊笹の中を彷徨してゐたのであつた。

　煩雜な形容詞を捨てゝ記述のペンを急がう。一行五名の若人は、二十六日プランの通り甲武信の中腹に露營したが、その翌夜から猛烈な豪雨に逢ひ、磁石は狂ひ、寒さは厳しく密林の中に道を失して、明かに危險の迫るのを感じた。そこで斷然コースを更へ、雁坂を越えて埼玉縣下の荒野澤へ出やうと合議一決したが、二十七日は終日、そうして空しく一つの場所を往つたり來たりするうち、飲むに水無く、火を焚くにマッチなく、斷念して食料、鑵詰、天幕の類をすべて谷間へ投げ捨てた。

　二十八日、午後に到つて、小山君がまづ激しい腹痛を起し、水を要求した。中村、安川の二君、友に水を與へやうとして十數町の谷川へ赴く途中、安川君元氣を失つて二君の許へ歸ると云ひ出す。中村君だけ一人水のある地點まで到着したが、大切な[illegible]、今は唯一の食糧を誤つて其處へ落して終つた。勇を鼓して一同の許へ歸つたが、既に友の姿は一人も見えぬ。事實は谷川へ下つて水を求め、それを持ち歸らうとした時中村君は、その場に卒倒して少くとも十時以上の時を、空しく費やした後再び意識を恢復したのであつた。

細引で背負つたまゝ、二人とも無慘に土の上に横になつて、すでに事切れてゐた。

その哀れな兄弟の遺骸から、約四町ほど下つた大きな岩の影に、仰向けに右手を上げ、左手を股につけて、兩足を投げ出し、眼も口も開いたまゝ、つひに赤羽長重氏が倒れてゐた。校長に背負はれた平井少年も、一旦はその背中から這ひ出したらしく、約十五六間下方の草叢の中に、これも空しいむくろとなつてゐた。校長も平井少年も、今三四丁にして安全な森木地帶には入れたのに、あまりの心身の疲勞の爲か、その事を果さずに惜しむべき犧牲の死を遂げて終つた。

その日の午後六時半、征矢將治氏の急報によつて、臨時の救援隊が平井少年、赤羽校長の遭難地點まで到着した時には、校長にはまだ呼吸があつた。征矢氏が抱き起すと、『嬉しい』と一言、それから二分程して『俺一人だア!』と云つたきりがつくりと頭を垂れて終つた。

赤羽長重氏は、伊那郡春近村の人、四十三年三月中箕輪の校長に榮轉、一人の老母堂のほか、夫人みや子さんとの間に、五人の子女があつた。山岳受難者の一人として、永遠に忘れる事の出來ない人と云つていゝ。

『俺一人だア』と云ふ最後の言葉、無論事ここに到つた一切の責任が、自分一人の上にある、の意より外に解釋のしようはない。この遭難は、校長の態度が餘りに壯烈を極めた點及び、雪と雨とを伴はず、たゞ一晝夜の暴風で、かくも多數の犧牲者を出した點、何れも爾後の登山家達に、非常に大きな生きた問題を提供した。強いて結果よりの批判を加へるとすれば一、餘りにその人數が多すぎた事。二、食料六食分は、少年として重荷にすぎ、反つて疲勞を增した事、三、少年たちは伊那小屋へ着く前、無理な行程ですつかりへばつてゐた。四、小屋の破損は、事前に調査すべきであつた、五、古屋少年の死で度を失つたのは止むを得ないが、たとへ少數の犧牲者を出しても、最後まで小屋を死守した方がよくは無かつたか、等、等、等、それが當時の識者間に、ほゞ一致を見たところの見解であつた。

三、破不山下帝大生の遭難

あくる年、大正三年の一月三日には、富士山の七合五勺目ごろで、日本スキイ倶樂部員酒井薫氏が、數名の倶樂部員たちに交ぢつて鮮やかなシユプールを殘してゐるうち、いきなり暴風に逢ひ、數十間の下方に吹飛ばされて慘死した。酒井氏は、當時のスキイの本場越後高田市の第三小學校訓導で、スキイヤーとしては定評もあり、斯界の發展のために前途を惜しまれた人だつた。當時としては、富士の七合目以上まで、スキイの登攀を企てると云ふことは、それ自身すでに、異常な壯擧と云つてもよかつた。スキイ登山最初の犧牲として、われわれはこの人の名を記憶せねばならぬ。

大正五年の十月五日、群馬縣勢多郡富士見村の赤城山密林中に、慘たらしい一死體を發見した。これはその前月の二十三日、植物採集の目的で登山した東京農科大學、博物實驗室の助手、久米政武氏と判明した。山中に於て風雨に逢ひ、救ひを求むるすべもなく、精

根據きてその場に絶命したらしい。

そうして大正五年の七月末から八月の上旬へかけ、天下を震撼させた大きな山岳受難が奥秩父の東澤、即ち甲斐破不山下の密林中に演ぜられる事となるのである。『に裝締く若人の、胸に榮ある金ぼたん、登山の用意とゝのひて、いざや極めむ國師岳。』と、いさゝか平凡な歌詞ながら、機敏にも當時の街頭の艷歌師が、聲高くこの遭難の有様を歌つたものである。

帝大英法科一年小山秀三君、同じく藤井彦七郎君、同じく安川半右衛門君、工科一年中村孝三君に加へて、深川小學校訓導山家林次郎の五君は、大正五年七月二十四日夜東京を出發して、翌日午前五時中央線鹽山驛に到着した。最初のプランに依れば、二十五日は笛吹川を逆登つて甲武の國境雁坂峠下で露營。二十六日は甲武信岳の中腹で、二十七日は國師岳の山腹で、二十八日を金峰山の頂きで何れも露營、二十九日増富村、ラヂユム温泉に泊つて困難な旅程を休らふ豫定であつた。

四人の大學生は、いづれも一高以來の山岳部メンバーで、山には相當の經驗を持つてゐた。先づ學校の山岳部から天幕を借受け、一日平均五里の道程を歩く事として、流行歌の冒頭の文句の樣に、すべての登山用意を整へて出發した。食料のうち白米は、五人で平均一日二升の見積りで、五日分合計一斗を、これは鹽山で買求めた。鑵詰類十二個、氷砂糖、干鰯、鰹節、藥品、西洋ローソク等、準備に手ぬかりはない筈だつた。そうして豫定通り、第一夜の天幕を三富村、通稱二瀬附近の河畔に張つて談笑、露營の夢を結んだのである。

出發前の話では、藤井、小山の二君とも、八月匆々歸京する用事を東京に控へてゐた筈だのに、其後何んの消息もない。親族の人達が驚ろいて、五日、續々と現場へ搜索隊を差向けようとしてゐたとき、すでに四名の青年は、多分三十一日の午後とおぼしい頃疲勞、困憊の極枕を並べて倒れ、のち一名は生死の間をさまよふ事八日間、恰も夢遊病者のように險悪無双の密林と熊笹の中を彷徨してゐたのであつた。

悽絶な形容詞を捨てゝ記述のべることを急がう。一行五名の若人たち、二十六日プランの通り甲武信の中腹に露營したが、その前後から猛烈な豪雨に逢ひ、磁石は狂ひ、寒さは嚴しく、密林の中に道を失して、明かに危險の迫るのを感じた。そこで斷然コースを更へ、雁坂を越えて埼玉縣下の瀧野澤へ出やうと合議一決したが二十七日は終日、そうして空しく一つの場所を往つたり來たりするうち、飲むに水無く、火を焚くにマッチなく、斷念して食糧、鑵詰、天幕の類をすべて谷間へ投げ捨てた。

二十八日、午後に到つて、小山君がまづ激しい腹痛を起し、水を要求した。中村、安川の二君、友に水を與へやうとして下數町の谷川へ赴く途中、安川君元氣を失つて三君の許へ歸ろうと云ひ出す。中村君だけ一人水のある地點まで到着したが、大切な鐵鍋、今は唯一の食糧を誤つて其處へ落して終つた。勇を鼓して一同の許へ歸つたが、既に友の姿は一人も見えぬ。事實は谷川へ下つて水を求め、それを持ち歸らうとした時中村君は、その場に昏倒して少くとも半晝夜以上の時を、空しく費やした後意識を恢復したのであつた。

安川君も、おそらく幾度か道に躓き、倒れ、漸くにして以前の場所へ引返したのだらう。然しその時は、既に去つて行つた、友二人の歸りが遲いので待ち切れず、腹痛に惱む小山君を勵まし乍ら、藤井、山室の二君は又もあてどない彷徨を續けてゐた。かうなると人間はただ無闇に、動いてゐるほかに能はないらしい。一切の狀態を仔細に調べて見ると四人はいつの間にか一緒になつて、ほゞ半里あまりの間を圓を描いて、同じ場所を叫びつつ呻きつつ晝となく、夜となく、ぐるぐる廻つてゐたらしい。

筆者も大正十年の夏、恰度その遭難の地點を訪づれて、慄然と、往年の悲劇を回顧したものであつた。なにしろ怖ろしい密林である。そして物凄い熊笹である。人體の胸から下は熊笹の爲に全く埋沒して終ふ。小山、藤井安川、山室の四名は、多分中村君を既に死んだ者と思つたらう。その頃はもう、密林と熊笹泳ぎで、上衣は破れ、脚絆はとれ、おそらく兩足には一物をも纒はなかつたらしい。遺骸がようやく發見されたとき、兩足の部分だけは大方腐爛して、肉片を僅かに留めてゐるに過ぎなかつた。

悲しい彷徨にも、終りを告げる時が來た。結果より見ての想像を出ないけれど、かうして四人は二十九、三十日の二日をさまよひ續け、遂に三十一日と推定される日、普通マレト澤と云はれる椴の密林中に、藤井君は前面の立木に手拭を結びつけ、仰向けに、兩手を腹の上へ置いたまゝ、山室君はその場から十間ほど離れた地點に右手を枕とし、安川君は更に二町ほど東南の平地に、頭を下に左足を伸ばし、右足をまげたまゝ痛ましいむくろとなつて終つた。

小山君は平地より五町西北の谷底で、全身に數ケ所の裂傷を負ひ、眞裸體のまゝ斜に横たはつた枯木に引つ掛つて死んでゐた。多分絶命した地點から此處まで、豪雨の後の谷水に押流されたものに違ひない。奇蹟に近いのは、全く一番最初四人の友に別れた中村孝三君であつた。彼は二十八日一旦意識を失ひ、再びそれを取戾して以來、前後九日間、たゞ水を飲み、寢ては覺め、覺めては彷徨を續けてゐて、八月六日正午、三富村字廣瀨、丸善製板所へ、生ける屍のような悲慘な姿を現はして、一行の遭難地を告げると共に悶絶してしまつた。

木曾駒ケ嶽の事件よりも、何れも山をよく知り登山に經驗を有する大學生の、しかも悲慘言語に絶した死に方であつたゝめ、この遭難が天下にショックを與へた事は、實に非常なものであつた。とにかく一行は山に自信はあつても奧秩父の東澤の險悪さを知らなかつた。また途中食糧を空しく捨て去つたのもいさゝか不用意と云へば云へる。第一に五人の間に連絡を全然缺いて終つた事が、根本的に遭難の主因であつた。しかし、それでこそ山のアクシデントである。死者に對して無用の結果論は、後進の登山者の活きた指針にこそなれ、茲ではその禮でないかも知れない。

四、打ち續く若人の悲劇

この慘劇と時を同うして、また一人の冒險家が山で行方不明を傳へられた。海軍省嘱託合道徳君と云つて、七月二十二日、甲斐駒ケ

嶽を振出しに、甲信國境の連峰を一周して、木曾の阪下町へ出る計畫をたてた。細密な地圖二百枚、カーキー色の洋服に、祕藏の名劍『玉雨』の一振りまでを携へた、それは一風變つた登山家であつた。杳として消息なしにその夏もすぎ、翌年八月七日、甲斐仙丈ヶ岳の頂きで、白骨となつて發見された死體には、ちやんと愛刀たまだれの一振りが、其空しき持主を護つてゐた。

大正六年の四月八日、奈良縣吉野郡、一口に云ふ大和大峰山の山上ヶ岳の鞍部、洞辻の下ケ三十米の地點で、二人の中學生が雪に歩行をはばまれ、相抱いたまゝ凍死した事實も、また惜みなく人の世の親たちの涙を誘ふ事件であつた。大阪市東區安土町、龍村平君十六歳、同區廣小路町植村嘉一君同じく十六歳、共に天王寺中學二年生。二人は三月の末大阪を發しまづ高野山へ登り、二十九日吉野郡洞川町に現はれて往來の一商人に、山上ヶ岳へ達する道順を聞きたゞした。

要するに、大峰の山上ヶ岳を、高野山の延長位ゐにしか、考へてゐなかつたらしい。二人は下駄ばきのまゝ、じんじん、頂上をさして登つて行つた。筆者も大正十四年の夏、京大山岳部員に交つて吉野山脈を、紀伊の新宮までぬけた時、親しく遭難の地點を目擊したが、山上ヶ岳は山も高く、夏の季節にならなければ頂上の宿所には誰れも人が居ず、加ふるに天候の著るしく激變しやすい場所である。はしなくも龍村、植村の二少年は、頂上附近で猛烈な風と、寒氣と降雨とに惱まれて、植村まづ積雪の上に倒れ、龍村これを介抱しつつ、しつかりと二つの身體を結びつけたまゝ十六歳の慌たゞしい命を失つた。

それと殆んど同じような運命があくる年の大正七年六月、秩父、武甲山の中腹に於て演ぜられた。埼玉縣川越中學の生徒新井三郎君十九歳、金井昇君十七歳、高山重義君十七歳の三人が即ち悲劇の登場者であつた。彼等は武甲の表山道から頂きを極め、日昏るゝに及んで、細い、急峻な裏道を、一氣に影森から大宮町に降らうとした。筆者もまた大正九年の春、亡き山の友大塚弘一君(この男も遂に山で命を失つた)に誘はれて、夜中同じ道を降りるに苦しんだ經驗を持つが、非常に迷ひ易い岩道で、しかも秩父大宮町の町の燈が眼の下に、呼べば答へん風情で見下ろされるのである。途中まで降りて身の危險を覺つた時彼等はもう遲かつた。金井少年まづ岩から墜ちて頭部を打ち、新井、高山の二少年も友の名を呼びつつ闇の中にさまよひ、遂に道を失つて斷崖を墜落、麓の人達が悲しい少年の聲を聞きつけて、暗い山容を仰いで嘆息しはじめた頃、三人ともすでに同じ死の途を選んでゐたのである。

大峰の遭難も武甲の墜死も、共に山の危險を知らず、中學生同志の客氣にかられて、ただひたすらに死を求めた者とも云へるのであるが、死に到るまでの熱い友情には、涙なくして記述するに忍びぬ事柄が多い。山では多くの場合、一人の友のアクシデントの爲に、一行全部の命を失ふ事が少くないのである。

そして間もなく大正七年十月、羽後、陸前の國境藏王山に、計らずも大きな悲劇が突發した。仙臺第二中學の生徒四十餘名、二十三日仙臺を發し、勢ひよく藏王山を越え、高湯温泉を

經て一氣に山形市に拔けようとした。高湯を出る頃は何事もなかつたのに、地藏岳近傍まで進んだ頃、突如として激しい吹雪に逢ひ、行歩、甚だ難澁を極めるに到つた。

全然豫期しない出來事であつたゞけに、一行は高湯温泉を出發する時、握り飯一食分、餅二切れだけを持參した輕裝であつた。地藏岳の山頂を右に見て、辛くも熊の岳あたりに差掛つたころは、雪を交へた烈風に天地全く晦冥となり、直立したまゝでは一歩も進めない。四十餘名のメンバアたちも、自然と連絡を失ひ勝ちで、要するに體力秀で、馬力の強い學生達がたゞ先陣となつて、吹雪の中を猛進するほかはなく、全く木曾駒ヶ岳の少年悲劇と同じ段どりとなつた。

一行の引卒者、責任者であつた教諭山中卯之助氏、筒井仙吉氏、小島德三郎の三氏は、勢ひ殿軍を承はつて、落伍しかける弱い生徒達の介抱に從事せねばならなかつた。二十五日午後零時半、遂に熊の岳の頂きに近い大石室内に於て、もはや歩行の自由を失つた三名の生徒、高平勇次、竹原義雄、小岩井濟の三君を介抱し乍ら、山中、小島の二教諭が刻々と迫る凍死の運命を待つてゐた。三町ほど西南、小岩室内では、更に池田雄五郎、淺香義夫、高原定一の三君を守つて、同じく教諭筒井仙吉氏が、それと同一の運命の途上に在つた。

二十六日の午後、高湯及び上の山から、警察署長以下六十名の人夫が、危險を冒して遭難現場へ到着すると、三名の教師、六名の生徒が相抱いて絶命した遺骸の場には、優に五尺に餘る積雪が覆ひ冠さつてゐたと云ふ。その夕べ、堀り出された九つのむくろが、青根温泉へ着いたとき、急を知つて馳けつけた遺族たちは、一齊に聲を舉げて慟哭したと云ふ。第一に、この一行は人數も多すぎ、時期も惡く、そしてまた誰れ一人、このコースを踏破した經驗者を有つてゐない無謀な計畫でもあつた。

大正十年の八月二日には、長野縣上高井郡高市村小學校の生徒十六名が、教員守川重一氏に引卒されて、附近の山四阿山に登つたをり、松澤オト子十三歳、岸江佐美子同じく十三歳の少女二人が、一行より少し遲れ雜草の間に道を踏み迷ひ、つひに不動瀧に近い地點で、百三十丈の斷崖から墜落して、慘死した。まことに豫測する事の出來なかつたアクシデントである。

越えて大正十一年の八月十八日には、仙臺第二高等學校の理科一年生で、相當ロッククライミングに經驗さへ有つたと云ふ若名西三君が、所も有らうに槍ヶ嶽のピークから降るとき、足を踏み辷らして十米ほど落ち、頭部を強打して即死した。恰度その同じ日、筆者は或る先輩の夫人を案内して、大天井から喜作新道を越え、大槍の小屋で今墜ちたばかりと云ふ青年の遺骸を見た。不斷は極端に氣の弱い婦人が、山で受難した若者の死骸に面接しても、顏色一つ更へなかつたのを、今でも珍らしい想ひ出の一つと考へてゐる。

五、板倉勝宣君の凍死

それ等の悲しい出來事は、いづれも不慮の椿事、意外のアクシデントと云へば云へるのであるが、續いて大正十二年の一月十七日、立山の松尾峠で、農學士板倉勝宣君が凍死し

な事實は、これは同じ突發事變とは云ひ乍ら、しかく簡單には看過する事の出來ぬ一事件であつた。一行の三人が、槇有恒君、三田幸夫君と云ふ、錚々たるお歷々であつた點からも、これは山岳受難史に、極めて重要なる一ページを成す記錄でなくてはならない。

槇、板倉、三田の三君は、一月八日鬼ゲ城を出發、九日立山溫泉に着、それから十二日まで天候險惡であつた爲その地に滯留、十三日やゝ晴れ間を見て久し振りに雪を踏んだ。そして十四日、眼ざす松尾峠に向つて進み、その夜は峠の頂きに一丈五尺も雪を掘つて穴を穿ち、槇君以下三名に人夫、寫眞師合せて十五名、猛烈な寒氣と戰ひつつ一睡もせずに夜を明した。

十五日は晴れ、後激しい吹雪となつた。朝一行は人夫二名を穴に殘して進發、午後一時室堂に着して、一時間ばかりスキイを樂しんだ。人夫平藏と八郎二名を穴に殘したのは、再び松尾峠へ戻つて露營するプランだからである。その頃は、まだ天候に何んの變調も見えなかつた。槇、板倉、三田の三君は、スキイで立山の頂上を極めようと思ひ立ち、人夫、及び寫眞師を殘らず先に歸らせて、愈よ水入らずの仲間同志となつた。

三名が一の越附近に達したとき、俄然天候は激變して、明らかに遭難狀態に陷入つた。先に歸つた人夫、寫眞師達は、室堂から引返した途中鏡ゲ岩邊りでこの暴風雨に逢ひ、辛うじて昨夜露營した松尾峠の穴に着いたが、風の爲に刻々と危險もつのり、意を決して立山溫泉に引返して終つた。怖ろしい吹雪の中を積雪の上に投げ出された形となつた三名はかたみにロープで身を結び合ひ、まづ、引返して同じく、前夜の穴に頼らうとしたが、さすがの猛者たちも天日暗く、ために道を失してたゞ雪中に、一二三とおたがひの掛け聲を繰返すばかりである。何んとなくこの夜から板倉君に衰弱の狀がつのつて行つた。

十六日、また吹雪。一夜を飢えと寒風に攻めさいなまれ乍ら、つひに雪の上に過した三名は、最後の手段として松尾峠の頂き、と覺しき地點へ向つて步を移さうとした。しかしこの時すでに、板倉君には憔々と、痛ましい疲勞の徵候が現はれてゐたのであらう。槇君、三田君、ともに板倉君を介抱し乍ら、[illegible]ぐ爲に親しい友の顏や肩を叩き合ひつつ、更に空しい不安の一夜を送らねばならなかつた。

一旦立山溫泉に引返した人夫達は、吹雪を突いて搜索に出たけれど、今は正しく、道を誤まつて別な峠の上を彷徨する三人だ。その行方が、判然しよう筈はない。

黄昏も、たしか七時ごろであつたらうか、板倉君の狀態が、刻々と險惡になつてゆくのを知つて、若い三田君は決然と云ひ放つた。このまゝ甘んじて死を待つよりも、のるかそるか、自分一人溫泉まで下つて救援の人夫を連れて來よう、と……。槇君も一應は首を振つたが、それもいまは強ひて反對も出來にくい。吹雪を突いて友は去る。も一人の友は次第次第に危險の度を增してゆく。夜も痛ましく更けて、十七日午前零時五十七分、板倉君はつひに、槇君の手に固く抱かれたまゝこの世を去つた。

亡友の遺骸を護つて、更にいくばくかの時を過して行つたが、豫定からすればとつくに

經て一氣に山形市に拔けようとした。高湯を出る頃は何事もなかつたのに、地藏岳近傍まで進んだ頃、突如として激しい吹雪に逢ひ、行歩、甚だ難澁を極めるに到つた。

全然豫期しない出來事であつただけに、一行は高湯溫泉を出發する時、握り飯一食分、餅二切れだけを持參した輕裝であつた。地藏岳の山頂を右に見て、辛くも熊の岳あたりに差掛つたところは、雪を交へた烈風に天地全く晦冥となり、直立したまゝでは一歩も進めない。四十餘名のメンバアたちも、自然と連絡を失ひ勝ちで、要するに體力秀で、馬力の強い學生達がたゞ先陣となつて、吹雪の中を猛進するほかはなく、全く木曾駒ヶ岳の少年悲劇と同じ段どりとなつた。

一行の引率者、責任者であつた教諭山中卯之助氏、筒井仙吉氏、小島德三郎の三氏は、勢ひ殿軍を承はつて、落伍しかける弱い生徒達の介抱に從事せねばならなかつた。二十五日午後零時半、遂に熊の岳の頂きに近い大石室内に於て、もはや步行の自由を失つた三名の生徒、高平勇次、竹原義雄、小岩井淸の三君を介抱し乍ら、山中、小島の二教諭が刻々と迫る凍死の運命を待つてゐた。三町ほど西南、小岩室内では、更に池田雄五郎、淺香義夫、高原定一の三君を守つて、同じく教諭筒井仙吉氏が、それと同一の運命の途上に在つた。

二十六日の午後、高湯及び上の山から、警察署長以下六十名の人夫が、危險を冒して遭難現場へ到着すると、三名の教師、六名の生徒が相抱いて絶命した遺骸の場には、僅に五尺に餘る積雪が覆ひ被さつてゐたと云ふ。その夕べ、堀り出された九つのむくろが、青根溫泉へ着いたとき、急を知つて馳けつけた遺族たちは、一齊に聲を擧げて慟哭したと云ふ。第一に、この一行は人數も多すぎ、時期も惡く、そしてまた誰れ一人、このコースを踏破した經驗者を有つてゐない無謀な計畫でもあつた。

大正十年の八月二日には、長野縣上高井郡高市村小學校の生徒十六名が、教員守川重一氏に引率されて、附近の山四阿山に登つたをり、松澤オト子十二歲、岸江佐美子同じく十三歲の少女二人が、一行より少し遲れ雜草の間に道を踏み迷ひ、つひに不動瀧壺に近い地點で、百三十丈の斷崖から墜落して、慘死した。まことに豫測する事の出來なかつたアクシデントである。

越えて大正十一年の八月十八日には、仙臺第二高等學校の理科一年生で、相當ロッククライミングに經驗さへ有つたと云ふ若名西二君が、所も有らうに槍ヶ嶽のピークから降るとき、足を踏み辷らして十米ほど落ち、頭部を強打して卽死した。恰度その同じ日、筆者は或る先輩の夫人を案内して、大天井から喜作新道を越え、大槍の小屋で今墜ちたばかりと云ふ青年の遺骸を見た。不斷は極端に氣の弱い婦人が、山で受難した若者の死骸に面接しても、顏色一つ更へなかつたのを、今でも珍らしい想ひ出の一つと考へてゐる。

五、板倉勝宣君の凍死

それ等の悲しい出來事は、いづれも不慮の椿事、意外のアクシデントと云へば云へるのであるが、續いて大正十二年の一月十七日、立山の松尾峠で、農學士板倉勝宣君が凍死し

た事實は、これに同じ受難事變とは云ひ乍ら、しかく簡單には看過する事の出來ぬ一事件であつた。一行の三人が、槇有恒君、三田幸夫君と云ふ、錚々たるお歴々であつた點からも、これは山岳受難史に、極めて重要なる一ページを成す記錄でなくてはならない。

槇、板倉、三田の三君は、一月八日鬼ゲ城を出發、九日立山溫泉に着、それから十二日まで天候險惡であつた爲その地に滯留、十三日やゝ晴れ間を見て久し振りに雪を踏んだ。そして十四日、眼ざす松尾峠に向つて進み、その夜は峠の頂きに一丈五尺も雪を掘つて穴を穿ち、槇君以下三名に人夫、寫眞師合せて十五名、猛烈な寒氣と戰ひつつ一睡もせずに夜を明した。

十五日は晴れ、後激しい吹雪となつた。朝一行は人夫二名を穴に殘して進發、午後一時室堂に着して、一時間ばかりスキイを樂しんだ。人夫平藏と八郎二名を穴に殘したのは、再び松尾峠へ戻つて露營するプランだからである。その頃は、まだ天候に何んの變調も見えなかつた。槇、板倉、三田の三君は、スキイで立山の頂上を極めようと思ひ立ち、人夫、及び寫眞師を殘らず先に歸らせて、愈よ水入らずの仲間同志となつた。

三名が一の越附近に達したとき、俄然天候は激變して、明らかに遭難狀態に陷入つた。先に歸つた人夫、寫眞師達は、室堂から引返した途中鏡ゲ岩邊りでこの暴風雨に逢ひ、辛うじて昨夜露營した松尾峠の穴に着いたが、風の爲に刻々と危險もつのり、意を決して立山溫泉に引返して終つた。怖ろしい吹雪の中を積雪の上に投げ出された形となつた三名はかたみにロープで身を結び合ひ、まづ、引返して同じく、前夜の穴に賴らうとしたが、さすがの猛者たちも天日暗く、ために道を失してた。雪中に、一二三とおたがひの掛け聲を繰返すばかりである。何んとなくこの夜から板倉君に衰弱の狀がつのつて行つた。

十六日、また吹雪。一夜を飢えと寒風に攻めさいなまれ乍ら、つひに雪の上に過した三名は、最後の手段として松尾峠の頂き、と覺しき地點へ向つて步を移さうとした。しかしこの時すでに、板倉君には歷々と、痛ましい衰弱の徵候が現つてゐたのである。槇君、三田君、ともに板倉氏を介抱し乍ら、暗黑を凌ぐ爲に親しい友の顏や肘を叩き合ひつつ、更に空しい不安の一夜を送らねばならなかつた。一旦、立山溫泉に引返した人夫達は、吹雪を突いて搜索に出たけれど、今は正しく、道を誤まつて別な雪の上を彷徨する三人だ。その行方が、判然しよう筈はない。

黃昏も、たしか七時ごろであつたらうか、板倉君の狀態が、刻々と險惡になつてゆくのを知つて、若い三田君は決然と云ひ放つた。このまゝ甘んじて死を待つよりも、のるかそるか、自分一人溫泉まで下つて救援の人夫を連れて來よう、と……。槇君も一應は首を振つたが、それもいまは强ひて反對も出來にくい。吹雪を突いて友は去る。も一人の友は次第次第に危險の度を增してゆく。夜も痛ましく更けて、十七日午前零時五十七分、板倉君はつひに、槇君の手に固く抱かれたまゝこの世を去つた。

亡友の遺骸を護つて、更にいくばくかの時を過して行つたが、豫定からすればとつくに

温泉へ到着して、引返す筈の三田君の姿がまだ見えぬ。死んだ者よりもまづ、生きてこの場を去つたものの身が案じ出した槇君は、凍傷に悩む足を引づつて下山の途を取つた。果して三田君は、温泉に近い雑木林の邊で、終夜幻覺に悩み乍ら彷徨を續けてゐた。二人は無言で抱合つた。そうしてたましひ去つた板倉君の顔は全く蠟のやうに蒼白く、美しく澄んでゐたと云ふ。

このアクシデントについては、おそらく批判の餘地はないであらう。當時古いスキイヤーとして有名な、或る陸軍の將官が、人夫を先に歸して頂上へ登つた無謀さを、第一に酷評した事がある。槇君たちは笑つて、それには答へなかつた。どの遭難も五十歩、百歩であらうが、十五日あの朝の天候からして斯くも急速に、あの激變が來たのでは、全く人力に於て、施すすべはなかつたであらう。かゝる際の結果論は、大體に於て餘り苛察に値ひしまい。

六、頻々たる山の受難者

同じ年の同じ一月下旬に、黒部の棒小屋澤で、これはまた雪崩の爲に珍らしい人が死んだ。槍ガ嶽東鎌尾根の、あの『喜作新道』を切開いたところの山田喜作親子（父は豪勇な獵夫であつた）が、小屋をかけて羚鹿狩りをしてゐて、雪崩の爲に小屋が押つぶされ、親子は梁の下敷となつて即死した。この時は他に數人の獵師たちが同じ所に居合せたし、おまけに喜作の持つてゐた財布が紛失したとかで、山の中のアクシデントにふさはしくない不愉快な噂さへ生んだ。

その年、大正十二年の十二月二十七日には筆者の山の友、大塚弘一君が甲斐鳳凰山下の雪中で見事な死に方をして果れた。海軍省に務めてゐた彼は、同業の田中信夫君と二十二日夜飯田町を發して、穴山驛から釜無川に沿ひ、藥師山から一氣に地藏ゲ岳に向つた。雪の中を北御室に露營、あくる日藥師ゲ岳から辻山の尾根を、青木湯へ降る計畫を立てたが、途中田中君が吹雪と疲勞の爲に倒れ、彼は倒れた友の腹部におのがリックサックを當て、里人の助けを求めようと木柵澤へ急ぐ中途、霧と、近眼の爲に足を辷らし、二百間の斷崖に墜落して死んだのである。

大正十四年の八月十二日には、慶應大學生山口藤吉君が單身甲斐の金峰山から、御嶽の黒平に出ようとして、當時としては珍しい降雪に逢ひ、飢と疲勞に氣力を失つて、御嶽神社の奥の院、俗に云ふ『片手廻し』のあたりまで辛うじて辿りつき乍ら、これも百餘尺の斷崖から辷り落ちて、春秋、なほ多幸なるべき十九の若い命を失つた。

十五年の七月廿九日には、長野市の菓子屋の若主人伊藤武夫君と、外務省電信課員の松田多計士君と、同じく長野市の人山崎照治君と三名が、日がへりの旅を戸隠山に試み、豪雨と濃霧に逢つて悩み續け、八方にらみの地點で松田君一人、寒氣の爲に卒倒、遂ひに恢復に到らなかつた。不用意な登山の突發事變で、皆なで僅か六つの握飯しか持たず、八方にらみでは殘つた唯一個のお握りを、二人して分け合つた。そこから山崎君が選ばれて、急な山腹の中社部落に告げたのだが、助けの手が屆く前、松田君は死の前の卒倒を遂げて

ゐた。

同じ月の十二日、東海銀行の出納係、牛奥富昌君と云ふ二十四歳の青年銀行員が、單身南アルプスの白根三山縦走を試み、まづ中巨摩郡芦安村の住人、青木原藏君を案内者として、三山の一つ、合の岳の頂きに取りついた。頂上から少し西方の南側尾根あたりで、折柄の突風に帽子を吹き飛ばされ、その帽子さへ遠い谷間へでも落ちて終つたら、おそらく何事もなかつたらうに、つひ十米ばかりの先に引つ掛つてゐるのを見て、それを取りに行つたまゝ、遂に再び生きて歸らぬ人となつた。断崖から辷り落ちて、その遺骸を發見するのにさへ、一ケ月の餘を費やさねばならなかつた。

大正十五年は、山岳受難者のわけても多かつた年である。七月の三十一日、上高地明神岳の下方にキャムプを張つてゐた、京大生神林明君、今西健司君、奥貞雄君、三高生井上金藏君の四名は、前穂高の北尾根、第四、第五ピーク間の雪溪を歩いてゐた。午後四時ごろとおぼしい。久し振りの快晴で、上層の雪が深けてゐたものか、[illegible]、今西、神林君の順にアッと云ふ間に斜面を踏み辷らして終つた。生憎、辷つて行つた下方には幅四五尺、深さ七八尺ばかりのクレバスが待構へてゐたからたまらない。三人とも激しく顔面、胸のあたりを雪の下方の突起した個所にぶつけ、殊に先頭の井上君は眞逆樣にクレバスの底へ落ち込んだ。

三人とも、顔と同時に顔も打つたらしく、井上君は最も重症であつたが暫らくは意識が無かつた。そのうちに神林今西の二君はどうにかしてクレバスからはひ出したらしい。今西君は恰度一時氣も狂ほしげに、何にやら叫んでゐたさうだが、幸ひにして墜落をまぬかれた奥君は、事の急を知つてたゞちに上高地の五千尺旅館へ急報した。上高地には各大學の山岳部員が滞在してゐたし、殊に慶應には醫學士で、山に強い酒井君などさへ居合せ、翌一日早朝現場に急行した。

酒井君が馳せつけた時には、まだクレバスの中に井上君は、以前のまゝ眞逆樣に立つて居り、頭部の熱で下方の雪が、恰度頭の恰好[illegible]は切れてゐた。今西君の如きは、[illegible]お助りにもがき歩いたらしく『地獄へ行くんだ』と、譫言まで發してゐたさうである。一日の午後十時、空しくなつた井上君のなきがらと、負傷に悩む今西、神林の二君とは、應援者の手によつて上高地へ下ろされた。全く雪のアクシデントで、たとへロープの用意があつても、足場の雪がそのやうに緩んでゐては、クレバスへの墜落をまぬかれる事も出來なかつたらう。

十月の十八日には、早稲田高等學院の生徒西田健吉君、吉田泰君、吉野多嘛男君の三名が少し方面の變つた日光山脈の一つ、下野と磐城の國境駒ケ岳、くわしく書けば福島縣南會津郡檜枝岐村で遭難してゐる。この三名は何れも別々に東京をたち、十七日群馬縣沼田町に落ちあつて、奥上州の尾瀬ケ原方面を跋渉しようと、その日は利根郡片品村土出といふ所で一泊した。十八日正午、尾瀬沼に到るとそこには學友十數名が、早くからキャムプを張つて遊んでゐた。

温泉へ到着して、引返す筈の三田君の姿がまだ見えぬ。死んだ者よりもまづ、生きてこの場を去つたものの身を案じ出した槇君は、凍傷に悩む足を引づつて下山の途を取つた。果して三田君は、温泉に近い雑木林の邊で、終夜幻覺に悩み乍ら彷徨を續けてゐた。二人は無言で抱合つた。そうしてたましひ去つた板倉君の顏は全く蠟のやうに蒼白く、美しく澄んでゐたと云ふ。

　このアクシデントについては、おそらく批判の餘地はないであらう。當時古いスキイヤーとして有名な、或る陸軍の將官が、人夫を先に歸して頂上へ登つた無謀さを、第一に酷評した事がある。槇君たちは笑つて、それには答へなかつた。どの遭難も五十歩、百歩であらうが、十五日あの朝の天候からして斯くも急速に、あの激變が來たのでは、全く人力に於て、施すべはなかつたであらう。かゝる際の結果論は、大體に於て餘り背綮に値ひしまい。

六、頻々たる山の受難者

　同じ年の同じ一月下旬に、黑部の棒小屋澤で、これはまた雪崩の爲に珍らしい人が死んだ。槍ガ嶽東鎌尾根の、あの『喜作新道』を切開いたところの山田喜作親子（父は豪勇な獵夫であつた）が、小屋をかけて羚鹿狩りをしてゐて、雪崩の爲に小屋が押つぶされ、親子は梁の下敷となつて即死した。この時は他に數人の獵師たちが同じ所に居合せたし、おまけに喜作の持つてゐた財布が紛失したとかで、山の中のアクシデントにふさはしくない不愉快な噂さへ生んだ。

　その年、大正十二年の十二月二十七日には筆者の山の友、大塚弘一君が甲斐鳳凰山下の雪中で見事な死に方をして見れた。海軍省に務めてゐた彼は、同業の田中信夫君と二十二日夜飯田町を發して、穴山驛から釜無川に沿ひ、藥頭山から一氣に地藏ゲ岳に向つた。雪の中を北御室に露營、あくる日藥師ゲ岳から辻山の尾根を、青木湯へ降る計畫を立てたが、途中田中君が吹雪と疲勞の爲に倒れ、彼は倒れた友の腹部におのがリックサックを當て、里人の助けを求めようと木柵澤へ急ぐ中途、霧と、近眼の爲に足を辷らし、二百間の斷崖に墜落して死んだのである。

　大正十四年の八月十二日には、慶應大學生山口藤吉君が單身甲斐の金峰山から、御嶽の黑平に出ようとして、當時としては珍しい降雪に逢ひ、飢と疲勞に氣力を失つて、御嶽神社の奧の院、俗に云ふ「片手廻し」のあたりまで辛うじて辿りつき乍ら、これも百餘尺の斷崖から辷り落ちて、春秋、なほ多幸なるべき十九の若い命を失つた。

　十五年の七月廿九日には、長野市の菓子屋の若主人伊藤武夫君と、外務省電信課員の松田多計士君と、同じく長野市の人山崎照治君と三名が、目がへりの旅を戸隠山に試み、豪雨と濃霧に逢つて悩み續け、八方にらみの地點で松田君一人、寒氣の爲に卒倒、遂ひに恢復に到らなかつた。不用意な登山の突發事變で、皆なで僅か六つの握飯しか持たず、八方にらみでは殘つた唯一個のお握りを、三人して分け合つた。そこから山崎君が選ばれて、急な山腹の中社部落に告げたのだが、助けの手が屆く前、松田君は死の前の卒倒を遂げて

ゐた。

同じ月の十一日、東海銀行の出納係、牛奧高昌君と云ふ二十四歳の青年銀行員が、單身南アルプスの白根三山縱走を試み、まづ中巨摩郡芦安村の住人、青木原藏君を案内者として、三山の一つ、合の岳の頂きに取りついた。折柄頂上から少し西方の南側尾根あたりで、その突風に帽子を吹き飛ばされ、その帽子さへ遠い谷間へでも落ちて終つたら、おそらく何事もなかつたらうに、つひ十米ばかりの先に引つ掛つてゐるのを見て、それを取りに行つたまゝ、遂に再び生きて歸らぬ人となつた。斷崖から辷り落ちて、その遺骸を發見するのにさへ、一ケ月の餘を費やさねばならなかつた。

大正十五年は、山岳受難者のわけても多かつた年である。七月の三十一日、上高地明神岳の下方にキャムプを張つてゐた、京大生神林明君、今西健司君、奥貞雄君、三高生井上金藏君の四名は、前穂高の北尾根、第四、第五ピーク間の雪溪を歩いてゐた。午後四時ごろとおぼしい。久し振りの快晴で、上層の雪が溶けてゐたものか、井上君は落ちると共に、そ れから今西、神林君の順でアッと云ふ間に斜面を踏み辷らして終つた。生憎、辷つて行つた下方には幅四五尺、深さ七八尺ばかりのクレバスが待構へてゐたからたまらない。三人とも激しく顏面、胸のあたりを雪の下方の突起した個所にぶつけ、殊に先頭の井上君は眞逆樣にクレバスの底へ落ち込んだ。

三人とも、顏と同時に頭も打つたらしく、井上君は最も重症であつたが暫らくは意識が無かつた。そのうちに神林今西の二君はどうにかしてクレバスからはひ出したらしい。今西君は恰度一時氣も狂ほしげに、何にやら叫んでゐたさうだが、幸ひにして墜落をまぬかれた奥君は、事の急を知つてたゞちに上高地の五千尺旅館へ急報した。上高地には各大學の山岳部員が滯在してゐたし、殊に慶應には醫學士で、山に強い酒井君なども居合せ、翌一日早朝現場に急行した。

酒井君が馳せつけた時には、まだクレバスの中に井上君は、以前のまゝ眞逆樣に立つて居り、頭部の熱で下方の雪が、恰度頭の恰好だけ溶けてゐたと云ふ。[illegible]は切れてゐた。今西君の如きは、附近の雪溪を狂りにもがき廻いたらしく、「地獄へ行くんだ」と、譫言まで發してゐたさうである。一日の午後十時、空しくなつた井上君のなきがらと、負傷に惱む今西、神林の二君とは、應援者の手によつて上高地へ下ろされた。全く雪のアクシデントで、たとへロープの用意があつても、足場の雪がそのやうに緩んでゐては、クレバスへの墜落をまぬかれる事も出來なかつたらう。

十月の十八日には、早稻田高等學院の生徒西田健吉君、吉田森君、吉野多麻男君の三名が少し方面の變つた日光山脈の一つ、下野と磐城の國境駒ケ岳、くわしく書けば福島縣南會津郡檜枝岐村で遭難してゐる。この三名は何れも別々に東京をたち、十七日群馬縣沼田町に落ちあつて、奥上州の尾瀬ケ原方面を跋渉しようと、その日は利根郡片品村土出といふ所で一泊した。十八日正午、尾瀬沼に到るとそこには學生十數名が、早くからキャムプを張つて遊んでゐた。

温泉へ到着して、引返す筈の三田君の姿がまだ見えぬ。死んだ者よりもまづ、生きてこの場を去つたものの身を案じ出した槇君は、凍傷に悩む足を引づつて下山の途を取つた。果して三田君は、温泉に近い雑木林の邊で、終夜幻覺に悩み乍ら彷徨を續けてゐた。二人は無言で抱合つた。そうしてたましひ去つた板倉君の顔は全く蠟のやうに蒼白く、美しく澄んでゐたと云ふ。

このアクシデントについては、おそらく批判の餘地はないであらう。當時古いスキイヤーとして有名な、或る陸軍の將官が、人夫を先に歸して頂上へ登つた無謀さを、第一に酷評した事がある。槇君たちは笑つて、それには答へなかつた。どの遭難も五十歩、百歩であらうが、十五日あの朝の天候からして斯くも急速に、あの激變が來たのでは、全く人力に於て、施すすべはなかつたであらう。かゝる際の結果論は、大體に於て餘り肯綮に値ひしまい。

六、頻々たる山の受難者

同じ年の同じ一月下旬に、黒部の棒小屋澤で、これはまた雪崩の爲に珍らしい人が死んだ。槍ガ嶽東鎌尾根の、あの『喜作新道』を切開いたところの山田喜作親子（父は豪勇な獵夫であつた）が、小屋をかけて羚鹿狩りをしてゐて、雪崩の爲に小屋が押つぶされ、親子は梁の下敷となつて即死した。この時は他に數人の獵師たちが同じ所に居合せたし、おまけに喜作の持つてゐた財布が紛失したとかで、山の中のアクシデントにふさはしくない不愉快な噂さへ生んだ。

その年、大正十二年の十二月二十七日には筆者の山の友、大塚弘一君が甲斐鳳凰山下の雪中で見事な死に方をして斃れた。海軍省に務めてゐた彼は、同業の田中信夫君と二十二日夜飯田町を發して、穴山驛から釜無川に沿ひ、藥頭山から一氣に地藏ガ岳に向つた。雪の中を北御室に露營、あくる日藥師ガ岳から辻山の尾根を、青木湯へ降る計畫を立てたが、途中田中君が吹雪と疲勞の爲に倒れ、彼は倒れた友の腹部におのがリックサックを當て、里人の助けを求めようと木楡澤へ急ぐ中途、霧と、近眼の爲に足を辷らし、二百間の斷崖に墜落して死んだのである。

大正十四年の八月十二日には、慶應大學生山口藤吉君が單身甲斐の金峰山から、御嶽の黒平（くろびら）に出ようとして、當時としては珍しい降雪に逢ひ、飢と疲勞に氣力を失つて、御嶽神社の奥の院、俗に云ふ『片手廻し』のあたりまで辛うじて辿りつき乍ら、これも百餘尺の斷崖から辷り落ちて、春秋、なほ多幸なるべき十九の若い命を失つた。

十五年の七月廿九日には、長野市の菓子屋の若主人伊藤武夫君と、外務省電信課員の松田多計士君と、同じく長野市の人山崎照治君と三名が、日がへりの旅を戸隱山に試み、霖雨と濃霧に逢つて悩み續け、八方にらみの地點で松田君一人、寒氣の爲に卒倒、遂ひに恢復に到らなかつた。不用意な登山の突發事變で、皆なで僅か六つの握飯しか持たず、八方にらみでは殘つた唯一個のお握りを、三人して分け合つた。そこから山崎君が選ばれて、急な山腹の中社部落に告げたのだが、助けの手が届く前、松田君は死の前の卒倒を遂げて

ゐた。

同じ月の十二日、東海銀行の出納係、牛奥富貴君と云ふ二十四歳の青年銀行員が、單身南アルプスの白根三山縦走を試み、まづ中巨摩郡芦安村の住人、青木原藏君を案内者として、三山の一つ、合の岳の頂きに取りついた。頂上から少し西方の南側尾根あたりで、折柄の突風に帽子を吹き飛ばされ、その帽子さへ遠い谷間へでも落ちて終つたら、おそらく何事もなかつたらうに、つひ十米ばかりの先に引つ掛つてゐるのを見て、それを取りに行つたまゝ、遂に再び生きて歸らぬ人となつた。斷崖から辷り落ちて、その遺骸を發見するのにさへ、一ケ月の餘を費やさねばならなかつた。

大正十五年は、山岳受難者のわけても多かつた年である。七月の三十一日、上高地明神岳の下方にキャムプを張つてゐた、京大生神林明君、今西健司君、奥貞雄君、三高生井上金藏君の四名は、前穂高の北尾根、第四、第五ピーク間の雪溪を歩いてゐた。午後四時ごろとおぼしい。久し振りの快晴で、上層の雪が溶けてゐたせいか、井上君が[illegible]、それから今西、神林君の順でアッと云ふ間に斜面を踏み辷らして終つた。生憎、辷つて行つた下方には幅四五尺、深さ七八尺ばかりのクレバスが待構へてゐたからたまらない。三人とも激しく顔面、胸のあたりを雪の下方の突起した個所にぶつけ、殊に先頭の井上君は眞逆様にクレバスの底へ落ち込んだ。

三人とも、顔と同時に頭も打つたらしく、井上君は最も重症であつたが暫らくは意識が無かつた。そのうちに神林今西の二君はどうにかしてクレバスからはひ出したらしい。今西君は恰度一時氣も狂ほしげに、何にやら叫んでゐたさうだが、幸ひにして墜落をまぬかれた奥君は、事の急を知つてたゞちに上高地の五千尺旅館へ急報した。上高地には各大學の山岳部員が滞在してゐたし、殊に慶應には醫學士で、山に強い酒井君なども居合せ、翌一日早朝現場に急行した。

酒井君が馳せつけた時には、まだクレバスの中に井上君は、以前のまゝ眞逆様に立つて居り、頭部の熱で下方の雪が、恰度頭の恰好[illegible]は切れてゐた。今西君の如きは、附近に[illegible]を頼りにもがき廻いたらしく、[illegible]地獄へ行くんだ」と、譫言まで發してゐたさうである。一日の午後十時、苦しくなつた井上君のなきがらと、負傷に悩む今西、神林の二君とは、應援者の手によつて上高地へ下ろされた。全く雪のアクシデントで、たとへロープの用意があつても、足場の雪がそのやうに緩んでゐては、クレバスへの墜落をまぬかれる事も出來なかつたらう。

十月の十八日には、早稲田高等學院の生徒西田健吉君、吉田森君、吉野多喜男君の三名が少し方面の變つた日光山脈の一つ、下野と磐城の國境駒ゲ岳、くわしく書けば福島縣南會津郡檜枝岐村で遭難してゐる。この三名は何れも別々に東京をたち、十七日群馬縣沼田町に落ちあつて、奥上州の尾瀬ケ原方面を跋渉しようと、その日は利根郡片品村土出といふ所で一泊した。十八日正午、尾瀬沼に到るとそこには既に十數名が、早くからキャムプを張つて遊んでゐた。

始めの豫定では、そこから翌十九日に裏日光へ出て歸京する所だつたが、吉田君が福島縣平町の產で、兩三度駒ケ岳の峻峰に登つた經驗もあつたし、急にプランを變更して、尾瀨沼から一氣に磐城方面へ出やうと決心した。そこに、不吉な前途が待構へてゐたのである。果して、道もない密林の中へ迷ひ込み食糧は少く疲勞は增り、不運にも突然な降雪に出逢つて、知らず知らず離れ離れになつて終つた。結果は、幾らか地理にくわしい吉田君が、命からがら南會津郡伊南村に辿りついて救ひを求め、西田、吉野の二君は山中の密林地帶に於て凍死した。これも結果論からすれば、周到の用意を缺いた輕擧と云へない事もない。

翌年の昭和元年、、大正で云ふと十六の年には、珍しく一回のアクシデントも記錄されてゐない。そして次の年の昭和二年には、また幾つかの事變が突發する。その皮切りが五月の二十三日、三越呉服店員村越幸男君の秩父東澤に於ける遭難であつた。この人は單身、あの時と同じコースを廣瀨から笛吹川と辿つて、往年の帝大生等五人が一大悲劇を演じたマレー澤の近くで、疲勞と飢餓の爲に先人の後を追つた。

七、早大生針の木の慘事

この年の八月一日、山へ登つて一人の生徒と敎師が溺死した事實がある。是は事件そのものより、訓練のない登山隊の好い敎訓でもあつた。東京市立第一商業生徒福室準之輔君十七歲は、上高地から槍へ登る途中、一の俣の約五丁下流の丸木橋から墜落、それを救はふとしてすぐ飛込んだ敎諭石井元氏と共に遂に溺死して終つた。しかも數十名の一行は後陣に起つたこの慘事を知らず、或る一隊は槍の大雪溪を登つて、大槍の小屋に一泊するし、或る一隊は途中槍澤の小屋でへたばり、或る一隊は一の俣の小屋で悲しい師弟のお通夜をする、と云ふ狀態であつた。

八月の四日には、兵庫縣今津の人、京大生石黑光神君が、學友と上高地を梓川谷から前穗高へかゝり、霧に卷かれて北尾根方面へまよひ込んだ。氣がついて本當の縱走路へ戾つた時には、大部落つきを失つたらしく、同じコースを二度も經驗した人だのに、奧穗高を小屋の方へ降りる地點で、脆い岩角が碎けそのまゝ墜ちて卽死した。死骸は下の雪溪の岩に止つてゐたが、物音を聞いて馳けつけた人夫は、死んだ石黑君を引上げる前に、彼が墜ちた場所で瀕死の狀態になつてゐた學友を、まづ小屋まで連れ戾らねばならなかつた。

そうしてその年も暮れようとする十二月の三十日、針の木峠の大雪溪では、更にもう一度天下の耳目を震撼させた早大學生十一名のスキー遭難事件が突發した。これは、當時の新聞や雜誌の大太鼓で、まだ人々の記憶に新らしい所だらう。二十六日、大町の對山館を出發した者、リーダー近藤正君、江口新造君、山田次郎君、上原武夫君、家村貞治君、有田祥太郎君、關七郎君、河津靜重君、渡邊公平君、富田英男君、山本勘二君の都合十一名其日は途中畠山に一泊、二十七日大澤小屋に到着まづ小屋の整理に一日を費やした。二十八日はスキーで、畠山まで殘した荷物を取りにゆき、二十九日には全員で、大澤と鳴澤

の二ケ所でスキーを練習した。

三十日、その日、風は吹雪いてゐた。が、午前十時頃から少し陽の影さへ見え出した。十一時小屋を出發、渡邊君まづラッセルを承はり近藤、家村、江口、上原、關、山本、富田山田、有田、河津君のオーダー。扇形に本谷を登つてゆき、赤石澤との出合ひの地點にさしかゝつた。不意に、物凄い響が起つて、幅三町もある谷一ぱいの大雪崩が、瞬時にして全員を呑んで終つた。ラストの河津、有田の二君だけは辛うじて埋沒をまぬかれたので必死となつて友の救助に手を盡した。近藤、山田、富田、渡邊の四君は、間もなく掘り出すことが出來たけれど、まだあと五人が見つからない。

順序から云へば、三番目の家村君以下、江口、上原、關、山本君と七番までが、行方不明なのである。渡邊公平君は、雪にやられたびつこの足を引づつて、雪崩の落ちた先端まで下つて見た。すると偶然にも雪の中から、一寸ばかりのスキーの杖の紐を發見した。はてなと思つて彼は、急いでその邊りを掘つて見ると、やがて折れた杖の破片が出て來る。間もなく、地下三尺位ゐの雪の中から、血の氣を失つた土色の手が一本、ニューッと現はれた。

それが江口新造君である。五人の友の手で間もなく、彼も掘り出された。顏色全く蒼白となり、眉間にはベットリと血を滲ませ、凄愴を極めた假死のすがたであつた。かうして江口君は救ひ出されたのに、友の名を呼びつつ、五人の學友たちが血眼になつて、雪の上を彷徨ひ歩いてゐるのだけれど、家村、上原、關、山本四君の姿は、つひにその冬のうちに發見されなかつた。雪崩につぐ雪崩でおそらく遺骸は數百間の下方まで、押流されて終つたかも知れない……。

周到を極めた一切の搜査作業も、つひに絶望となつた。馳けつけた遺族たちの多くは、現場から三里手前の村、富山まで進み、針の木のあたりを遠く眺めつつ、白裝束のまゝ燒香を濟まして、むなしく山の町を去つた。詩人西條八十氏が、特にこの悲劇を歌つたように、『北アルプスの峯の雪の、解けてながる、春』となつても、まだ、彼等は長い眠りを雪の底に續けてゐた。一行の遺族には、引續いて思ひ出も深いであらう江口新造君は、ことし五月廿五日、現場の岩壁に、紀念のタブレットを飛す下検分に、針の木へ出かけて行つたと聞く。

八、大島亮吉君謎の墜死

立山で亡くなつた板倉勝宣君も、この國に珍らしい卓拔なアルピニストであつたけれどその人にも劣らぬ豐富な經驗、卓越したテクニックを持つ慶應山岳部のリーダー大島亮吉君が、昨昭和三年の三月二十五日、穗高北尾根第四のピークから墜落して死に到つた事は實に於て、日本山岳受難史の、最も重大なアクシデントと云へはしまいか。同行した慶應のメンバー三名も（その中には槇有恒氏の令弟弘君も加はつてゐた）專ら遺骸搜査に終始した早川種三君も、今だに、その原因を謎として各自の推測に止めてゐる。

一行四名が無論大島君をリーダーとして、島々口から、上高地へ向つたのは三月十七日の朝だつた。二十五日は穗高涸澤のベースキ

ヤムプを出發して、午前九時前北尾根にとりつき、問題の第四ピークを元氣よく進んで行つた。オーダーはトップが齋藤長重郎君、次が大島亮吉君、三番が本郷常幸君、ラストが槇弘君の順、殘念なのはこの時一行がロープを使はなかつた事であるが、すでにその第四ピーク中で、最も危險な急斜面は樂に通過した後ではあつたし、すべて起り得る筈のないアクシデントに過ぎなかつた。

第四ピークの頂きに近く、一尺ばかりの平地があつて、そこは、充分の足場である。トップの齋藤君が、その地點から眞直ぐに登つて行つたあと、大島君が後ろから微笑と共に『下を廻つた方がいゝぞ！』と言葉をかけた刹那だつた。多分、突き出てゐる岩角に、靴の爪先でも引つ掛つたものか、或ひは靴の齒がゲートルに刺つて、兩足のバランスを失つた爲か、兩手を曲げて上方へ捧げ、足もかゞめて前へあげたまゝ、腰を下にして矢のやうに岩の上を辷り落ちて行つた

すぐあとにゐた本郷常幸君、（除談だがこの人の令弟が慶應野球部の二壘手、本郷基幸君である。）も、どうして、大島君が墜落したのか判らない。自分の足元に氣を取られてゐてふと前方を見ると、聲を立てるひまもなく、大島君が雪溪の下方へ辷つて行つた。本郷君もまた、山に充分熟達の人。沈着に、まづ小屋の人夫をして東京の各方面に打電の用意をさせ、みつからは長いロープを使用して、遺骸の發見に努めようとした。遭難した岩角から、恰度やゝ直線の下方に、一つの黒點が眼には入る。理論上からも、それが大島君の姿に相違ない。しかし、そこまでロープを下ろすには少くとも三十米のもの、四本位ゐはつなぎ合さねばならぬ。

第一日は、無論その事を果さずに暮れてしまつた。二十六日の夜行で、一切を托された早川種三君は東京を發つたけれど、早川君が現場へ到着したのは二十八日の午前九時だつた。その間に吹雪は度々襲つて來るし、漸くの事で大島君と覺しい姿の止まつてゐる地點まで本郷君がロープで下つて見たが、それは遺骸ではなくして大島君の上衣と、ぼろぼろに切れ裂けたリックサックだつた。早川君を參謀として、樣々の搜査方針を立てゝ見るが、たしかにリックサック、及び上衣の引つかゝつてゐた附近には遺骸がない。

そのうちに墜落した直下の雪溪よりは、ずつと右手の雪の上に、たしかに大島君が辷つたらしい雪の跡を發見した。が、折惡しく吹雪についで雪崩が起り、死體の搜査は全く絶望となつた。上高地、蒲田から、常次郎、庄吉、作之助、瀧澤以下、優秀な人夫を三十名も集めて、雪崩の落下點を七尺の深さまで掘つて見たが、すべての努力も今は空しく、六月二日、上層の積雪が解けて、雪溪の中央に大島君の顏と手が現はれる迄、すべてを冷酷な自然に任せるほかはなかつた。

三人の息子を次々に夭折させ、一人殘つた亮吉君を失つた大島家にはいま、親類の幼い娘さんが、貰はれてきてあとをついでゐる。大島君の一周忌もすでに濟んで、彼の死骸が天の惠みで穂高の涸澤谷に、自然と發見された日、あの時から恰度一年たつた六月二日、偶然にも私はこの困難な『山岳受難史』の稿を終つたのである。

太陽の黑點問答

關口鯉吉

甲「やあ暫らく。どうだい、皆變りはないかね」

乙「ありがたう、變り度くも變り樣がないからね。處で君も益々元氣で結構だね」

甲「今夜は何だかいやに不景氣な面をして居るぢやないか、此頃のお天氣の樣に」

乙「相變らず口が惡いな。全くだよ、かう降り續かれちやあお互に景氣のいゝ面も出來やあしまいさ」

甲「お蔭で僕あ、此一月てえもなあ、つくづく郊外生活の慘めさを痛感させられたよ。どうだい、君の腕で此のお天氣が何とかならんものかね」

乙「さあ、それがだね、此奴ばかりは梃にも棒にもかゝらない代物でね、何しろとてもいろんなものが利いて居るのだそう

甲「さうかなあ……處で君、太陽黑點が氣象に利くんだつてありやあ本統かね」

乙「そりや君、するとも言へるし、しないとも言へようよ」

甲「とぼけちや困るね。暑くても黑點、寒くつても黑點、風が吹いても、雨が降つても黑點のせいだと、萬能藥の廣告見たやうな能書がよく新聞に出るぢやないか。僕あ、其れを見て、黑點さへ眺めて居りやあお天氣は外れ無しに適中するものと見える、有難い世の中になつたもんだ。と感服して居たわけなんだがね」

乙「さう早合點しちや駄目だよ。科學の表現はさう單純にとるべきものぢやないよ」

甲「ぢやあ、どう解したらいゝんだい」

乙「まあこつちの頭の中に跳び込んで解釋してもらふ外あるま

いな」

甲「すると結局言葉といふものは無役だといふことになるね」

乙「さうさ、全く。僕等あ單純に表現出來ないことを強いて表現せしめられるので、其處に無理が出來るといふものさ。表現の嚴密さに一點の隙があつても、其意味に萬里の隔りを生じると言はれて居る科學的推理の結論をば、極端に單純化し而も通俗化せしめられる結果は、表現の無役に歸着する外あるまいぢやないか。おまけに讀者の好奇心に投ずるやうに粉飾されて出るのだからたまらないね」

甲「太陽面の現象と氣象の相關つてそんなにこみ入つたものなのかね。どうも僕には天文學者や氣象學者が勝手放題な當て推量を逞しくして、霧中に彷徨してる有様なので、でれかくいばかり言つてるのぢやないかと思はれてならないがね」

乙「そりや君等の邪推といふものだよ。自惚かも知らないが、科學つてそんないゝ加減なものぢやないよ。近代の天文觀測で黒點の性體はちやんと摑んで居るし、其の當然の影響としてあるべき結果を地球の大氣中に探り求めて、着々手答へを認めて居るといふことは、敢て大聲に宣傳するを憚らないよ」

甲「僕にやあ第一君の言ふやうなその勿體らしい言ひ草が氣に入らないんだ。黒點つて小さな黒い點ぢやないか。性體もへちまもあつたもんぢあなからうぜ。いつか僕あ天文臺の望遠鏡で黒點を見せてもらつたことがあるんだ、其際、ありやあとても激甚な大旋風なんだと尤もらしく説明してくれたがね。僕にやあ其れらしいものは皆目見えやしないんだ。僕あ旋風だの渦卷だのつて跡形もない幻影だと思ふよ。天文學者つて餘つ程不思議な眼力を具へた動物だね」

乙「だから君は單純だと言ふんだよ。太陽に渦卷があると言やあ、ぐるぐる廻つて居る様が手に取るやうに見えるんだと早合點し、火星に人間が居ると唱へる學者の説を聞いては、鋤鍬取つて田畑でも耕やす天界の百姓達の活動振りを望遠鏡裡に眺め得る天文家の風流をうらやんだり、偉大な機械的能力を讃嘆する手合だからやり切れないね。單なる望遠鏡にそんな能力を期待するなあ、僕に言はせりやあ寧ろ科學の冒瀆といふものだよ」

甲「馬鹿に今夜は鼻息が荒らいな。よし其れぢあ僕も言はう。そんな無能な望遠鏡に何百萬圓の大金を投じて……」

乙「嗚呼、科學の通俗化も亦難い哉だな。君、「科學」は「機械」ではないよ、やつぱり「人間」だよ。望遠鏡裡の一點光に無限の眞理を探り求める人間叡智の閃きさ。其處を見てくれなきやあ「科學」は泣くよ。無限の多様性を有つたエーテル波動の

いゝ、[illegible]
[illegible]
吾々の仕事だわね」

甲「すると、そいつあコツで探り當てるわけなんだね」

乙「コツや呼吸は科學ぢやないよ。科學の有難いことは、方法をあみ出すと共に「方式」を立てるにあるんだ」

甲「いやに有難くなつて來たね。科學も有難くなつちやおしまひだと先日君は言つたぢやないか。そんなに有難いものなら僕も其方式とかの傳授に預り度いものだね」

乙「そりや話しもしやうがね、其前に君の忍耐力の試驗をせにやならないよ。就ては、先づ「光りとは何ぞや」といふ定義から始めるぜ」

甲「おつと待つてくれ。一寸乃公の忍耐力に尋ねて見るから」

乙「其れ程心配なら、あつさりと行かう。いゝかね、太陽の光りをいろんなからくりで分析するんだ。すると、其れが俗に七彩＝實は無限彩だが＝の帶に延びる。帶には細大濃淡數萬本の縦縞が通つて居る。其一本一本の縞目が一つゞつの闇號なんだ。闇號の解釋は實驗室内の人爲的光源の分析すら、又理論すら過去一世期に亘る物理學者の努力の結晶として……」

甲「能書はもう其邊で分つたやうだ。手つ取り早く本論をうかがはうぜ」

[illegible]
[illegible]
り、擬れたり、離れたり、投げたりする具合[illegible]
瓦斯の運動狀態、壓力、密度、其他の張力、磁力等が行はれんだ。瓦斯の運動は氣流を數へ、磁力は高熱瓦斯に特有な帶電粒子の旋廻に依つて生ずるものとして渦巻の假說となる、とまあかう言つたやうな次第さ」

甲「なるほどね。それぢやあ、太陽渦の存在が其れで確認されたといふ科學者のロジックは大負けに負けて一時承認しておかう。だが然しだ、其れが地球上に颱風を起すなんと來ちや少々眉唾だね。天上の風の神が下界の人畜までも捲き込んでしまふやうな大荒れをやるたあ、あんまり想像が强過ぎるぜ」

乙「だから君は困るつて言ふんだ。自然界の彼方此方の現象が何も彼も皆そんなに直接の連鎖でつながれて居るものたあ科學者は思つて居やあしないんだ。吾々が現象の生滅過程を考察するには、エナージーと力が如何樣に物質と物質間を移行して、其の個々の部分の性狀や行動を左右し、若しくは物と物との間に力が働きかけて相互の行動を惹き起すかといふことを數量的に一歩一歩追及して行くんだ」

甲「そりや分つて居るよ。僕の提示するクリチクは、そんな問

ぢやないんだ。太陽表面の物質と地球上の例へば空氣と言つたやうな物質とが數千萬哩の空虚な場面を隔て丶エナージーの交換をしたり、押しつ引かれつする其のからくりに在るのだ。虚無の空間を一足に跳び越して勝手氣儘な役割を演ずるエナージーの神變不思議な能力が科學を超越したものぢやないかと言ふんだ」

乙「そうさ、エナージーは全く變通自在なものだよ。能力其自體なんだからね。然し勝手放題と見えてやつぱり一つの定規に乘つて居るんだぜ。輻射の法則といふ奴がある、あれさ。太陽面の物質から射出する輻射エナージー、碎いて言やあ「光り」と「熱」だ。其光りや熱が虚空を波動といふ形式で傳播し、より低温の物質に會して吸ひ取られると、其の温度を昇せる。そうして發源地の温度が高いほど射出量は増えるものだ。黑點の出現に際しては正に此の捉則に從つて地球大氣に餘分のエナージーが供給されるんで、つまり大氣の活力が大いに潤澤になるのだね」

甲「どうも科學つて奴は矛盾其物だと云ひ度いね。黑點つて闇いものぢやないか。闇い奴が餘分に光りや熱を出すたあ受取れんね」

乙「君、黑點に捕はれちやいけないよ。もつと大局に眼を着けるんだ。黑點なんざあ煙突から出る煙りのやうなものさ。下底の活動を睨まにやいけない。黑點渦卷は太陽といふ大火爐の内部と表層の間に行はれる熱の代謝作用の一つの現はれなんだ。渦卷の勢ひで温度が降つて黑く見えるんだ。だから黑點が澤山出來るといふことは畢竟大局に於ては熱が澤山に出て來ることを意味するのさ。黑點の周圍が廣汎な白光の地に輝いて居るのも其の一證だし、輻射を測つて見ても此推理は過たないことが分るのだよ」

甲「ぢやあ、寒いのも黑點だとはどういふものだね」

乙「まあ、熱が出ると、風を引いたせいだと診斷するやうなものさ」

甲「比喩と警句でごまかしちや困るよ。も少し親切に説明を願ふぜ」

乙「親切に言ふと君はいつも當てられちやつたとこぼすぢやないか。今夜は望みだといふなら一番親切に行かう。い丶かね、抑も地球の大氣つていふ奴は案外こみ入つた機巧（からくり）でね、恰度人間の身體のやうなものだよ。譬へて言ふと、人體が口から滋養分を攝取して其れが血液となり、體内を循環して活力を保つて居ると同樣に、地球の大氣は太陽からの輻射といふ滋養分、卽ちエナージーを得て循環活動して居るのさ。人間が

野菜を食つたとか、肉を食つたとか、或は握飯を一個餘計に食つたとかいふ位のことで、直ぐ外貌や動作に現はれる程元氣が異ることはあるまいが、生理的の眼で吟味したら、前後に大きな差異を認めることが出來るだらう。或は是れが原因で身體に變調を來したり、若しくは健康狀態が大いに改善されるといふやうなこともないではあるまい。地球大氣の榮養素太陽光線に變化があつたら其の循環系統に何かの利き目が現はれる理屈だ。だと言つて世間で考へるやうに榮養の效果は必ずしもさう覿面に響いて來るものではあるまい。其の影響は恐らく可なり廻り遠い而して隱伏的のものと解さねばなるまい。

昔は氣象學者や天文學者でも此の關係を大層單純に考へたもので、日光が強ければ時候が熱くなるとか、颶風が頻發するとかいふ豫想で種々と調査したものだ。其の結果は黑點が增すと、一方では反つて寒くなつたり、他の地方では逆に暖くなるといふやうに、區々として統一のない結論を得たので、まあ氣候と黑點とは大した關係はないものだらうといふことにして、一時此問題は葬り去られてしまつたものさ。おまけに元來黑點といふものが何者であるか、黑點が澤山出たら太陽の光りや熱はどうなるのかといふ根本のことがまるで分らなかつたので、常に言ふ樣に氣象との關係を探り出すことにかゝつた觀があつたので、其の調べが多く失敗に歸したのだらうと思ふのだ。當今は黑點の多い少いと日光の質及量との關係が稍明らかになつたので、氣象との關係を考へるにも少しく好都合になつて來た。けれども日光の變る割合は極端な場合でも三パーセントを出ない僅少なものだから、黑點が多いと言つても、鍋の下の瓦斯の火を強くしたやうに大氣が忽ちに溫まるものではないんだ。まして空氣つて奴は仲々の曲物でね、熱を加へて溫まるとは限らず、時によると反つて冷くなるといふ旋毛曲りの行動をとるものだから始末におへないよ。

日光が強いと地球大氣は一體どうなるだらう。平素でも平均に於て赤道地方は一番烈しく熱されるので、空氣が上へ上へと昇る傾きがある。上へ行つた奴は四方へはけ出して行くので、赤道部は空氣が不足して壓力が減じ所謂「低壓帶」となるんだ。溫帶や寒帶では此の赤道部ではけ出した空氣が上に留つて全體の大氣の重みが增すから、下の空氣の壓力が高くなり、高壓帶を形成して赤道方面に空氣を押し流すといふ結果になるのだ。かうして兩帶域の間に空氣が一大循環をして居るんだが、日光が格段に強ければ、此の循環が一段と旺盛

になり、又高氣壓は一段と高く、低氣壓は一段と低くなる理屈だらう。昇る空氣は膨脹するために冷えて雲や雨を催し、日光を遮るし、又上で冷えた雨滴が降下して來るので氣温が低下するからして、日光の特に強い年には赤道部は幾らか涼しくなり氣味だし、又温帶や寒帶の空氣は上から沈降する結果清澄になつて好天氣を齎らす傾きとなつて、夜間に地面の熱を虚空に逸散するのを助け、其の結果、夏の外は大體に於て寒くなる傾きを有つ道理なのさ。

　理屈はざつとこんなものだが、實際はどうかと見ると、大體に於て此の推理通りに行つて居るよ。併し同じ熱帶でも、又温帶でも、所に依つては主として海から風が當る所もあれば内陸から吹き送る風に氣候が支配される所もあり、又暖い方面から空氣の吹き寄せる所もあれば冷い海面を走つて來た寒風にさらされた所もあるといふやうなわけで、氣候を支配する因子が一樣でないからして、今言つたやうに大氣の一般的大循環＝氣流＝が旺盛になつても、其の結果は夫々の地方に區々の影響を與へるものと見ねばならんのだよ。だから、斯樣に赤道地方の温度の低いとか、氣壓が低いとかいつても、それは其區域全體をならしての話であつて、地方に依つては全々之れと反對になる所もあるわけなんだね。

　其外に大陸と大洋との對立關係をも考へにやならない。冬は陸は冷え海は冷えにくいので、陸が半永久的の高氣壓、海殊に北方の海上で暖水の溜つて居る場面には、半永久的低氣壓が出來て、陸から海に冷い風が吹いて行く。此の循環系は赤道部と温帶間に行はれる大循環と助け合つて行くから、太陽の輻射が強い時には双方共旺盛になる理屈なんだね。又夏だといふと陸が大いに熱し海は熱しにくいので、陸は半永久的低壓部、海は半永久の高氣壓部になり、大洋から大陸に氣流が押し寄せて行く。之れもやつぱり一般大循環を助けて、太陽輻射に伴つて優勢となる道理で、斯樣な推定は何れも事實に基いた統計の上から大體是認されて居るのだよ。

　世界の氣象學者や天文學者が今迄にやつて來た仕事は主に此の種の大局に關する事柄なので、其の曲折、即ち各地方に如何樣な影響があるかといふこと、又之れが太陽以外の原因で起る氣象の變調と複合した結果はどうなるかといふ點は今後の研究として殘されて居る次第なのさ。殊に前にも話した通り、統計的の調査は皆ならし流儀だから、例外が甚だ多いものだといふことを深く注意して聞いてもらはにやならんのだ。吾々は今後之れ等の例外を一個々々虱つぶしに處理して行くといふ困難に直面して居る譯だ。

甲「[illegible]だよ。それで[illegible]分ったと[illegible]書き換へをして明日から天氣豫報でも始めることやうか」

乙「其れで君は分つたのかい。僕にやあちつとも分つて居ないんだ。科學の話しつて皆んな斯うしたものかも知れないさ。話す人にや少しも分つてないで、聞く人は忽ち分つてしまふたあ不思議だね」

甲「すると君が言つたのは皆出鱈目かい」

乙「うそでもなし眞でもなしさ。科學者は建てながら壞して行くんだよ。つまり自分のしてる事が皆んな氣に入らないからなんだね。見やうに依つちやあ少しも安住する所がない憐れな者さ」

甲「今日の眞理は明日の嘘と言つた格だね」

乙「科學にや眞理なんてものはありやあしないよ。一所にこだはつたら外道だ。所謂、瞬時も停屯すれば白雲萬里つてえ所だ」

甲「すると、科學つて、あつても無くてもいゝものだね」

乙「どうだつていゝぢやないか、役に立ちさえすりや。原子論や電子論でラヂオの眞空管が働らかせられ、ニュートン力學や天文學で航洋の巨船が造られたり動かされたりする限りに於て、科學は其の價値を失ふまいよ。現象の觀察統合に依つて築かれた法則を適用して、[illegible]の下に[illegible]近似的[illegible]は望まれないさ。[illegible]にそれでいゝんだ。其目的にかなふやうにする爲には何時でも科學は自己を築きなほすに躊躇しまいよ。そうして漸近的に嚴密の再現へと進んで行くんだ。然し未來永劫其處には行き着くまいよ。要求される嚴密さの標準が限り無く變つて行くからだね」

甲「君等の畑に其の價値論を適用したらどうなるね」

乙「人達の目につくことは價値判斷の價値のない方面ばかりだからやりきれないよ。價値のある方面は人の目に觸れないんだ。手取り早い所で金で言はう。先づ僕の見積りぢやあ、日本の氣象臺や測候所が一年休んだら日本は少くとも二、三千萬圓の損失をすると思ふね。つまり、日本の國は數十萬圓の資本で數千萬圓の利得を齎らして居る勘定さ」

甲「そのロジックは僕にや受取れんね。ともかく困つた世の中だな。科學者迄が總てを貨幣價値に換算するたあ」

乙「そりや君のやうな商賣人に分りいゝやうに言つたまでさ」

甲「そう功利的になつちやあ科學の墮落だね、大ニュートンが地下で泣いてらあ」

乙「ニュートンが泣かうが、アインシュタインが怒らうが僕等はかまやあしないんだ。科學は信仰ぢやないからな」

になり、又高氣壓は一段と高く、低氣壓は一段と低くなる理屈だらう。昇る空氣は膨脹するために冷えて雲や雨を催し、日光を遮るし、又上で冷えた雨滴が降下して來るので氣溫が低下するからして、日光の特に強い年には赤道部は幾らか涼しくなり氣味だし、又溫帶や寒帶の空氣は上から沈降する結果清澄になつて好天氣を齎らす傾きとなつて、夜間に地面の熱を碌空に逸散するのを助け、其の結果、夏の外は大體に於て寒くなる傾きを有つ道理なのさ。

理屈はざつとこんなものだが、實際はどうかと見ると、大體に於て此の推理通りに行つて居るよ。併し同じ熱帶でも、又溫帶でも、所に依つては主として海から風が當る所もあれば內陸から吹き送る風に氣候が支配される所もあり、又暖い方面から空氣の吹き寄せる所もあれば冷い海面を走つて來た寒風にさらされた所もあるといふやうなわけで、氣候を支配する因子が一樣でないからして、今言つたやうに大氣の一般的大循環＝氣流＝が旺盛になつても、其の結果は夫々の地方に區々の影響を與へるものと見ねばならんのだよ。だから、斯樣に赤道地方の溫度の低いとか、氣壓が低いとかいつても、それは其區域全體をならしての話であつて、地方に依つては全々之れと反對になる所もあるわけなんだね。

其外に大陸と大洋との對立關係をも考へにやならない。冬は陸は冷え海は冷えにくいので、陸が半永久的の高氣壓、海殊に北方の海上で暖水の溜つて居る場面には、半永久的低氣壓が出來て、陸から海に冷い風が吹いて行く。此の循環系は赤道部と溫帶間に行はれる大循環と助け合つて行くから、太陽の輻射が強い時には双方共旺盛になる理屈なんだね。又夏だといふと陸が大いに熱し海は熱しにくいので、陸は半永久的低壓部、海は半永久の高氣壓部になり、大洋から大陸に氣流が押し寄せて行く。之れもやつぱり一般大循環を助けて、太陽輻射に伴つて優勢となる道理で、斯樣な推定は何れも事實に基いた統計の上から大體是認されて居るのだよ。

世界の氣象學者や天文學者が今迄にやつて來た仕事は主に此の種の大局に關する事柄なので、其の曲折、卽ち各地方に如何樣な影響があるかといふこと、又之れが太陽以外の原因で起る氣象の變調と複合した結果はどうなるかといふ點は今後の研究として殘されて居る次第なのさ。殊に前にも話した通り、統計的の調査は皆ならし流儀だから、例外が甚だ多いものだといふことを深く注意して聞いてもらはにやならんのだ。吾々は今後之れ等の例外を一個々々虱つぶしに處理して行くといふ困難に直面して居る譯だ。

甲「[illegible]だ。それですつかり分つたと云ふなら書き換へをして明日から天氣豫報でも始めることにしやうか」

乙「其れで君は分つたのかい。僕にやおちつとも分つて居ないんだ。科學の話しつて皆んな斯うしたものかも知れないさ。話す人にや少しも分つてないで、聞く人は忽ち分つてしまふたあ不思議だね」

甲「すると君が言つたのは皆出鱈目かい」

乙「うそでもなし眞でもなしさ。科學者は建てながら壞して行くんだよ。つまり自分のしてる事が皆んな氣に入らないからなんだね。見やうに依つちやあ少しも安住する所がない憐れな者さ」

甲「今日の眞理は明日の嘘と言つた格だね」

乙「科學にや眞理なんてものはありやあしないよ。一所にこだはつたら外道だ。所謂、瞬時も停屯すれば白雲萬里つてえ所だ」

甲「すると、科學つて、あつても無くてもいゝものだね」

乙「どうだつていゝぢやないか、役に立ちさえすりや。原子論や電子論でラヂオの眞空管が働らかせられ、ニュートン力學や天文學で航洋の巨船が造られたり動かされたりする限りに於て、科學は其の價値を失ふまいよ。現象の觀察綜合に依つて築かれた法則を適用して[illegible]近代的[illegible]嚴密さは望まないさ。[illegible]だ。其目的にかなふやうにする爲には何時でも科學は自己を築きなほすに躊躇しまいよ。そうして漸近的に『嚴密の再現』へと進んで行くんだ。然し未來永劫其處には行き着くまいよ。要求される嚴密さの標準が限り無く變つて行くからだね」

甲「君等の畑に其の價値論を適用したらどうなるね」

乙「人達の目につくことは價値判斷の價値のない方面ばかりだからやりきれないよ。價値のある方面は人の目に觸れないんだ。手取り早い所で金で言はう。先づ僕の見積りぢやあ、日本の氣象臺や測候所が一年休んだら日本は少くとも二、三千萬圓の損失をすると思ふね。つまり、日本の國は數十萬圓の資本で數千萬圓の利得を猟らして居る勘定さ」

甲「そのロジックは僕にや受取れんね。ともかく困つた世の中だな。科學者迄が總てを貨幣價値に換算するたあ」

乙「そりや君のやうな商賣人に分りいゝやうに言つたまでさ」

甲「そう功利的になつちやあ科學の墮落だね、大ニュートンが地下で泣いてらあ」

乙「ニュートンが泣かうが、アインシュタインが怒らうが僕等はかまやあしないんだ。科學は信仰ぢやないからな」

になり、又高氣壓は一段と高く、低氣壓は一段と低くなる理屈だらう。昇る空氣は膨脹するために冷えて雲や雨を催し、日光を遮るし、又上で冷えた雨滴が降下して來るので氣溫が低下するからして、日光の特に强い年には赤道部は幾らか涼しくなり氣味だし、又溫帶や寒帶の空氣は上から沈降する結果清澄になつて好天氣を齎らす傾きとなつて、夜間に地面の熱を宇宙に逸散するのを助け、其の結果、夏の外は大體に於て寒くなる傾きを有つ道理なのさ。

理屈はざつとこんなものだが、實際はどうかと見ると、大體に於て此の推理通りに行つて居るよ。併し同じ熱帶でも、又溫帶でも、所に依つては主として海から風が當る所もあれば内陸から吹き送る風に氣候が支配される所もあり、又暖い方面から空氣の吹き寄せる所もあれば冷い海面を走つて來た寒風にさらされた所もあるといふやうなわけで、氣候を支配する因子が一樣でないからして、今言つたやうに大氣の一般的大循環＝氣流＝が旺盛になつても、其の結果は夫々の地方に區々の影響を與へるものと見ねばならんのだよ。だから、斯樣に赤道地方の溫度の低いとか、氣壓が低いとかいつても、それは其區域全體をならしての話であつて、地方に依つては全々之れと反對になる所もあるわけなんだね。

其外に大陸と大洋との對立關係をも考へにやならない。冬は陸は冷え海は冷えにくいので、陸が半永久的の高氣壓、海殊に北方の海上で暖水の溜つて居る場面には、半永久的低氣壓が出來て、陸から海に冷い風が吹いて行く。此の循環系は赤道部と溫帶間に行はれる大循環と助け合つて行くから、太陽の輻射が强い時には双方共旺盛になる理屈なんだね。又夏だといふと陸が大いに熱し海は熱しにくいので、陸は半永久的低壓部、海は半永久の高氣壓部になり、大洋から大陸に氣流が押し寄せて行く。之れもやつぱり一般大循環を助けて、太陽輻射に伴つて優勢となる道理で、斯樣な推定は何れも事實に基いた統計の上から大體是認されて居るのだよ。

世界の氣象學者や天文學者が今迄にやつて來た仕事は主に此の種の大局に關する事柄なので、其の曲折、即ち各地方に如何樣な影響があるかといふこと、又之れが太陽以外の原因で起る氣象の變調と複合した結果はどうなるかといふ點は今後の研究として殘されて居る次第なのさ。殊に前にも話した通り、統計的の調査は皆ならし流儀だから、例外が甚だ多いものだといふことを深く注意して聞いてもらはにやならんのだ。吾々は今後之れ等の例外を一個々々虱つぶしに處理して行くといふ困難に直面して居る譯だ。

甲「調和的になつただ、それですつかり分つたら僕なんか役[illegible]寄き候へをして明日から天氣豫報でも始めることにしやうか」

乙「其れで君は分つたのかい。僕にやあちつとも分つて居ないんだ。科學の話しつて皆んな斯うしたものかも知れないさ。話す人にや少しも分つてないで、聞く人は忽ち分つてしまふたあ不思議だね」

甲「すると君が言つたのは皆出鱈目かい」

乙「うそでもなし眞でもなしさ。科學者は建てながら壞して行くんだよ。つまり自分のしてる事が皆んな氣に入らないからなんだね。見やうに依つちやあ少しも安住する所がない憐れな者さ」

甲「今日の眞理は明日の嘘と言つた格だね」

乙「科學にや眞理なんてものはありやあしないよ。一所にこだはつたら外道だ。所謂、瞬時も停屯すれば白雲萬里つてえ所だ」

甲「すると、科學つて、あつても無くてもいゝものだね」

乙「どうだつていゝぢやないか、役に立ちさえすりや。原子論や電子論でラヂオの眞空管が働らかせられ、ニュートン力學や天文學で航洋の巨船が造られたり動かされたりする限りに於て、科學は其の價値を失ふまいよ。現象の觀察綜合に依つて築かれた法則が適用[illegible]近似的、嚴密は望まれないが[illegible]だ。其目的にかなふやうにする爲には何時でも科學は自己を築きなほすに躊躇しまいよ。そうして漸近的に嚴密の再現へと進んで行くんだ。然し未來永劫其處には行き着くまいよ。要求される嚴密さの標準が限り無く變つて行くからだね」

甲「君等の畑に其の價値論を適用したらどうなるね」

乙「人達の目につくことは價値判斷の價値のない方面ばかりだからやりきれないよ。價値のある方面は人の目に觸れないんだ。手取り早い所で金で言はう。先づ僕の見積りぢやあ、日本の氣象臺や測候所が一年休んだら日本は少くとも二、三千萬圓の損失をすると思ふね。つまり、日本の國は數千萬圓の資本で數千萬圓の利得を齎らして居る勘定さ」

甲「そのロジックは僕にや受取れんね。ともかく困つた世の中だな。科學者迄が總てを貨幣價値に換算するたあ」

乙「そりや君のやうな商賣人に分りいゝやうに言つたまでさ」

甲「そう功利的になつちやあ科學の墮落だね、大ニュートンが地下で泣いてらあ」

乙「ニュートンが泣かうが、アインシュタインが怒らうが僕等はかまやあしないんだ。科學は信仰ぢやないからな」

甲「驚いたね。無主義無信仰〇〇〇〇〇〇〇〇以上だね。彼等だつて夫々有難さうな信條をかざして居らあね」

乙「そりや表看板さ」

甲「處で君等の表看板が聞きたいね」

乙「僕等のは勢力と物質てえんだ」

甲「何だかマーキシズムの書物にでも出て來そうな文句だな」

乙「馬鹿言へ。マークスを丸藥にしてぐつと呑んだあげく、少しは利いたやうだ、なんかと忽ちに安心立命する手合たあ異ふんだ」

甲「大分脱線しかけて來たやうだぜ。其邊で切り上げてもらはうか。後は此次に伺ふとしやう。どれ失敬するかな。いやに空の闇い晩だな。明日はどうだね」

乙「何がさ」

甲「天氣のことよ」

乙「そいつあ勘辨してくれ。僕は元來お天氣屋ぢやないんだからな」

甲「ぢやあ何だい」

乙「門前の小僧さ」

日本大衆黨分裂物語

—無產黨疑獄の一幕—

K　K　K

戰線統一の旗を高く掲げて、昨年末に賑々しく結黨した日本大衆黨が、僅か半年立たないうちに脆くも分裂の醜態を現はし、おきまりの泥合戰數番宜しくあつた揚句、また元の對立狀態に復へらうとしてゐる。その呆氣なさ、そのだらしなさ加減に至つては、今日この頃社會運動界の物笑ひとなつてゐる。

舊日勞黨、舊無產大衆黨、舊日農黨、舊民憲黨といつた具合に各々毛色のかわつた分子の寄合世帶であるから、結黨式は擧げたもの丶、どうも調子がしつくりといかない所があつた。だから黨の方針は、統一的な中央執行機關で決定するといふよりは、各舊黨派の間で別々に決定されたものを中央執行機關に持ち出して繼ぎ合せるといふ有樣であつた。こんな統制の不完全極まる雜色政黨であつたのだから、何か黨內に重大事件でも突發すれば、すぐグラ〳〵と大動搖を生ずるのは當り前である。今度の大衆黨の分裂は、福田狂二の投じた爆彈に端を發する。福田狂二は從來社會運動の惡漢として戰つて來た男であるが、元來日勞黨に屬し、次いで大衆黨に屬し、昨年春の總選擧には日勞黨公認で郷里の島根縣から打つて出て敗戰した人物である。所で日勞黨時代でも大衆黨時代でも、彼はあまり重用されなかつた。そこに彼の不平があつた。彼も人一倍強氣の方であるから、機會さへあれば、思ふ存分鬱憤を晴らさうと待ち構へて居たのだ。

時は來た。彼は格好な問題を嗅ぎつけた。彼は同志と共に大鳴りで[illegible]ト、斯くて大きな爆彈を黨幹部に投げつけた。その爆彈は見事に爆發して、黨內に一大旋風を捲き起した。所謂清黨運動がこれである。

福田一派はいふ「吾々は十一月二十一日から今日まで合同問題の裏に潜む暗影を掴むべく晝夜兼行して、今やはつきり吾黨の腐落幹部の罪惡を一切掴つた」と。

福田一派の掴んだ黨幹部の罪惡とは何かといふに、福田の發表した事實は左の通りである。

（一）、昭和三年十月三日、舊日本農民黨書記長平野力三及び舊日本勞農黨書記長麻生久相携へて田中首相邸に總理大臣陸軍大將田中義一を訪問し、無產政黨の合同によつて民憲黨代議士淺原健三、新黨準備會代議士水谷長三郎、日勞黨代議士河上丈太郎、社會民衆黨代議士龜井貫一郎等をして、第五十六議會において、對支問題、張作霖問題、地租委讓問題に就いて政府に合流さすべき約束の下に、金一千圓を受取り、翌十月四日平野力三は田中義一より金一萬圓を受取り、尚ほ彼等は議

會後約束を履行したる場合には相當の金額の授受を約束したり。

平野及び麻生の受取りし金錢は、麹町區三番町十番坂待合湊屋事鈴木えつ方に於いて、その他赤坂の待合に於いて、數十回麻生久、柴尾與一郎、平野力三等その一味の藝妓をあげて豪遊に費消せる事實明かなり。この事實は十二月二十八日午後九時三十分、一味の一人柴尾與一郎が進め社本部に吾人を訪問し、分け前に就きて不滿を感じて居ると稱し、左の一證を認めたり。

一金一千圓也
昭和三年十月三日夕田中邸ニテ麻生平野田中ヨリ受取ル
一金一萬圓也
11月四日受取ル
柴尾與一郎

(二)、昭和三年九月下旬、幸の湖(栃木縣中禪寺湖)に古河鑛業會社が發電所を設置せんとするや、麻生久等は反對運動を組織せり。幸の湖とは、明治天皇の命名せられし中禪寺湖の別名なり。反對理由の中には發電所を作るは不敬なりとの理由も見られたり。然るに九月二十日銀座尾張町丸見屋食堂二階に於いて、麻生久、河野密、田所輝明の三名が余を招じて、幸の湖事件を古河鑛業會社に五萬圓にて賣り込み呉れと懇願せり。吾人は事重大事件なれば考慮の上回答すべきことを約したり。然るに十月二日麻生久は古河鑛業會社常務取締役兼足尾鑛業所長佐々木敏綱に面會し、その後約二回に亘り佐々木を訪問するに至つて、同社員の間に「麻生は古河より買收さるゝに至つた」と噂されるに至れり。よつて吾人は知人をして古河の受附を調査せしめたるところ、麻生の訪問せしは十月二日午前十時頃なりしこと判明せり。果して麻生久は幸の湖問題を中止したり。古河は麻生の最惡の敵にあらざりしか。

(三)、昭和三年九月下旬、反動主義者高畠素之の宅に麻生久が訪れ、日本勞農黨と建國會を近き將來に合同せしむる旨提言し、建國會の綱領を認むるとの條件にて金三千圓都合し呉れと懇願せる折柄、たまたま隣室に吉川守邦訪るゝありて、一切は暴露せり。これ無產政黨史を汚辱する反動化事件なり。

右の發表によると、麻生久と平野力三とが田中大將から金錢を授受したといふ有名なる醜聞事件は昭和三年十月三日となつて居る。さうすると日本大衆黨の結黨式が擧行されたのが昭和三年十二月二十日であるから、醜聞事件は結黨式よりも可成り前のことであつて、それは大衆黨を結成する下相談の行はれた頃に起つた事件である。抑々大衆黨の結成は麻生と平野が書き下ろした筋書であつて、無產大衆黨も九州民憲黨も戰線統一の掛聲に釣り込まれたのだ。麻生と平野とは自分の統率する日勞黨と日農黨とがどちらも行き詰まつたので、局面を打開するために、戰線統一の旗を掲げて無產各黨の合同を圖ることに意見が一致したのだ。所が大衆黨樹立には金が要る。そこで平野は得意の妙案を練り、親友である政友系浪人柴尾與一郎と相談した結果遂に平野と麻生の田中首相訪問となつた次第である。

平野といふ人物は、全く既成政黨流の策士であつて、權謀術數に長じた男である。日農

算が行き詰まるや、麻生の懷に飛び込んで行つて無產各派の合同を目論み、そして一方には大金を摑み、他方には大衆黨の書記長の椅子を獲得した。その邊の手際は誠に鮮やかである。豪傑さうに見えて案外に氣の弱い麻生は、今度こそはすつかり平野にしてやられた形だ。今回の事件はどこまでも平野が原動力であつて、麻生は捲き込まれたのである。勿論こんな事件に捲き込まれるについては麻生に社會運動者としての人格的缺陷はあるのだが。

大衆黨が生れる際、平野が書記長の重職に据ることには隨分反對が多かつた。平野といふ人物の相場が決まつてゐるからだ。特に無產大衆黨系は強硬に反對した。しかし平野は日勞及び日農系の後援によつて書記長になつた。平野が書記長になつたので事情を知らない世間は異樣の眼を見張つた。何んだかおかしい感じに打たれざるを得なかつた。果して瀆職事件が起きてからその間の消息が讀めた。すでに大衆黨結成の下準備の際に、麻生は論功行賞の意味で平野に書記長の椅子を約束しなければならなかつたのである。この邊のやりくちも全く既成政黨式である。

瀆職事件は黨內に爆彈的センセーションを捲き起した。この事件を徹底的に糺明して、あくまで關係幹部の責任を問はうとしたのが舊無產大衆黨系と舊民衆黨系であつた。しかるに舊日勞黨系と舊日農黨系とはこれを揉み消さうと努めた。さなきだに基礎薄弱な寄合世帶のことだから、糺彈派と揉み消し派とは入り亂れて黨內は戰國時代を現出した。ところで揉み消し派は事實無根だと主張するが、糺彈派はあくまで事實だと認識するので、喧嘩は折合ひがつかず、到頭中央執行委員會の問題となるに至つた。

本年一月二十七日の中央執行委員會は、福田狂二一派の清黨運動につき對策を協議したが、結局埒があかず、その眞相の究明を統制委員會に委託することにした。そのとき淺原健三と平野力三との間に交はされた質問應答は左の如くであつた。

淺原「平野君は柴尾與一郞及び田中義一と如何なる關係であるか、また待合政治を知れるや」

平野「柴尾とは同じ[illegible]ではない。田中義一とは二年前に會つたことがある、待合政治は合同の際無產大衆黨を入れる入れないの問題で紛糾したので、麻生、山名、棚橋、三宅什等と一緒に行つたことがある」

淺原「柴尾に待合で會つたか」

平野「合同問題に關係なく會つたことがある」

淺原「無產黨の會合に待合はよくあるまい」

平野「それはそうだ。待合政治をやつたのは唯だ一回である」

淺原「待合で麻生、柴尾と一所に會つたことがあるか」

平野「たまたま落ち合つたことはある」

淺原「清黨運動ビラの如く一萬一千圓を受取りしことありや」

平野「絕對事實無根である」

淺原「この流言は單に福田のビラによるのみでなく、新聞記者間にすら喧傳され[illegible]

野君については色々な風評を聞いてゐる」

二月一日に開かれた中央執行委員會は平野が議長となり、公開禁止で行はれた。席上平野派は福田狂二を以て黨の統制を紊すものと認め除名處分に附することを提議した。これに對し舊民憲黨の古市春彦は激怒し、席を蹴つて退場した。採決の結果は平野派の勝利に歸した。當日の委員の色別けは平野麻生派が五、反對派が三であつた。反對派は當日の委員會につき、被告平野が議長となつたこと、委員會を祕密會にしたこと、平野が暴力團を連れてきて反對派を威嚇したことなどを攻撃して居る。

越えて二月十三日の中央執行委員會では兩派の抗爭がいよ／＼最高潮に達した。論戰の結果は糺彈派の鈴木茂三郎、黑田壽男（共に舊無産大衆黨）は遂に辭表をたゝきつけるに至つた。その理由は「日本大衆黨の合同過程に於ける田中反動政府との醜聞問題に關して黨本部常任執行部より疑惑の中心人物を出したるは、常任執行委員としての責任輕からずと信ず。しかも常任中央執行委員會は、黨員並に一般無産大衆の疑惑に對して、今日に至るまでこれを公正に處斷し得ざりしは遺憾に堪えず。よつてここに責を負ふて中央執行委員を辭任する」といふのである。つまり鈴木黑田等の糺彈派執行委員が、麻生平野等の領袖幹部を處罰し得なかつた責を負ふて辭職した譯である。多數決で負けたのだから仕方がないとはいふものゝ、舊無産大衆黨は口先きばかりで戰鬪力に缺けてゐるから、理に勝つて力で負けたのである。逆に舊日勞系と舊日農系とは政友會式な無理押しで押し切つたのである。

それと同時に淺原健三は本部不信任の聲明を發表した。曰く「清黨問題及びこれに關聯する我黨本部に鑑み、我黨現在の議員統制機關の統制を甘受するは、我國無産大衆の政治的要求に背反するが如き嫌ひあるを以て、爾後當該機關の統制に服するを潔しとせず」。一體淺原は大見得を切ることの上手な男であるが、こうした機會に、自分は代議士としていかゞはしい本部の統制を受けることは出來ないと力んだところは矢張り淺原式面目を遺憾なく發揮して居る。

かくして大衆黨執行部は日勞日農系によつて獨占され、事態は分裂の過程に入つた。しかし無理押しで勝つた大衆黨執行部に勝利の悲哀があつた。いかに問題を揉み消さうと努めても、ひとたび社會大衆の眼に映じた暗影は拭ひ去ることは出來ない。不安は募つた。動搖を始めた屋臺骨は行くところまで行かねばならなかつた。

今度の醜聞事件の中心點は、麻生平野の金錢收受事件である。これが事實無根であるか又は事實に相異ないか、法廷で爭ふた譯ではないから法律上の眞僞はわからない。だが大衆黨の重要構成要素である舊無産大衆系と舊民憲系とは明かにこれを事實なりと認定し、そして社會大衆もこれが事實無根であるといふ有力なる辨證を示されてゐない。しかもこの問題が因を成して大衆黨が分裂したのだ。從つて麻生平野一派が濃厚なる疑雲に包まれることは當然でなければならぬ。況んや平野の過去の行動に同じやうな多くの暗影が潜んで居るに於いておやである。

金錢收受事件に次いで問題となつたのは麻生の反動化事件である。大衆黨の統制委員長大道憲二が吉川守邦を證人として調査した結

果、一月五日に死亡した吉田の陳述として發表したものは次の通りである

「昨年十一月の初め、自分は高畠素之君の病氣見舞に行つて、二階で話してゐると、細君が「やまと新聞」の記者松下某の名刺を持つてきた。色々話の末「麻生が金を借りに來たぜ」と高畠が云つた。「いくらか」とたづねると「五千圓だが三千圓だけ貸すつもりだ」と答へた。私は重ねて「なぜ貸すのか」とたづねると、彼は「麻生はこう云つてゐる、主義主張なんて今では古いよ、その日その日を維持して行くことが問題だと　全く反動團體以上になつたね。麻生は僕の所へ來る前に有馬賴寧の所へも行つたらしい。君(吉川を指す)は日勞黨員だね、あんなものは下らないからよし給へ」と云つた。その日はそれで別れたが、その三千圓が宇垣大將から出たことを最近知つた。それは高畠が死んで、細君が財産問題で來訪したとき、私が「麻生に貸しはないか」と聞くと、細君は云つた「麻生さんは相談してくるといつて歸つたまゝ受取りに來ませんでした。その金はそのまゝになつてゐたので、宇垣さんから三千圓返して呉れといつて來てゐます」と。即ち麻生が依頼されて高畠が宇垣大將から三千圓を借りてきたが、麻生が受取りに行かなかつたので、そのまゝどこかへ貸つてしまつて高畠が死んだので宇垣大將から返金を迫られた譯である」

また[illegible]南雄は大道憲二に次のやうな陳述をして居る

「十月二十日か二十一日頃、自分は麻生君と二人で田所輝明君を訪ねた。このとき田所は「麻生が日勞黨を國粹主義の綱領で固めやうとしてゐる　そしてこの綱領が日勞黨の昭和三年度大會を通過すれば、數十萬圓の金が提供されると稱して日勞黨の同志を說き廻つてる」と云つて綱領草案を我々に示した。このことは淺沼稻次郎君、荘原達君からも聞いた。更に田所君は私が面會した前日、山川均君を訪ねて同様なことを話して居る」

大道憲二は一月八日麻生の宅を訪ね、質問を試みたが、兩者の問答は次の如くである。

大道「××をかつぐ國粹的運動を計畫したといふのは事實であるか」

麻生「××をかつぐことは今でも眞面目に考へてゐる」

大道「[illegible]

[illegible]

同するなどとは[illegible]てゐる」

大道「高畠に金を依頼したことはないか」

麻生「印税を前附して呉れと頼んだことはある」

大道「或る人の話によれば、あなたが五千圓頼んで、高畠が三千圓だけ都合してゐたが、あなたは取りに行かなかつたさうですが　そしてその金は宇垣大將から出てゐるとのことですが」

麻生「全然知らぬ。宇垣も知らぬ。高畠から金を貰つたこともない」

こゝでは田中大將に代つて宇垣大將が顔を出して居る。宇垣に政治的野心があり、政友民政の引つ張り凧になつて居るのは天下周知の事實だが、無產政黨方面で最も早く彼に着眼したのは平野一派である。平野一派は何回か宇垣の門をたゝいた。平野一派が宇垣をついで國粹無產黨を作るといふ記事が新聞に出たのは大分前の話である。宇垣、平野、高畠、建國會といつた顔觸れの間には、或る種の脈絡があつたやうに思はれる。そこに麻生

が平野の手引きで姿を現はした。そして麻生がこの反動主義的網膜に關係を持つことになり、麻生の反動化が外間に傳へられるやうになつたものだ。こゝでも麻生は平野に引きつられてゐる。

元來麻生は社會民衆黨が穩健すぎるから嫌やだといつて、日勞黨を樹てた男であるか、彼は本來からいつて主義主張の男ではない。自分が親分になりさへすれば、どこへでも据るといつたやうな子供らしい英雄主義の持主だ。だから反動團體だらうが、共產黨だらうが、自分を金看板にしてさへ呉れるならば、喜んで應ずる質の男だ。今度でも日勞黨が行き詰まり、金に困つてゐるとき、そこに平野が乗り込んで行つて、巧みに煽動誘惑したものだから、ひとたまりもなく口說き落されて、平野の麾下にいゝやうに引き廻されたのだ。そんな次第で麻生が反動陣營へ近づいて行くことが大衆黨の黨員間に知れてくるや、不平組の稲田狂二一派に嗅ぎつけられ、田中大將事件と共に明るみへさらけ出されたのである。麻生も長い間社會運動で苦勞した男だが、どうも運の惡い人間である。

次に辛の測事件を麻生が古河に賣りつけたといふ問題であるが、これも的確なことはわからないが、一月二十一日稲田一派が河野密、三輪壽壯の麻生派幹部に會見したとき、麻生の賣り込みについて、三輪はこんな答辯をしてゐる「古河の佐々木重役は面白い人だから、敵である麻生君にも惚れてゐて多少の援助をしたことであらう。それは別に辛の測紀彈事件を買つたのではないと思ひます」。三輪の答辯は三百代言式であつて、苦しい所がある。辛の測紀彈運動を起して居る最中に、古河の重役から金を貰つて紀彈運動を中止した事實があるとするならば、古河の重役が個人的に麻生に惚れるも惚れないも問題ではあるまいではないか。三輪の辯護は辯護士として落第である。從つて麻生對古河の問題は依然として疑惑の雲に蔽はれてゐるのだ。

日本大衆黨は何處へ行く。分裂過程は急速に進んだ。五月十五日平野一派の舊日農系は中央委員會を開いて脫退を聲明した。彼等は飛びつくのも早いが逃げ足も早い。所が翌十六日には大衆黨の中央執行委員會(舊日勞系で獨占)は、黨規攪亂者として平野力三、中澤辨次郎、鈴木茂三郎、黑田壽男、猪俣津南雄の六名を除名處分に附した。平野と中澤は既に脫退して居るから問題はないが、外の連中は承知せず、舊無產大衆黨系は除名反對を聲明した。しかし斯くまでに感情の對立した間柄であるから、結局は日本大衆黨の看板は舊日勞系が取り、舊無產大衆系は別れて新黨を樹てることになるだらう。淺原の九州民憲黨、水谷の勞農大衆黨等は新黨に加はるであらう。そして半年前に鳴物入りで結黨した日本大衆黨は、再びもとの木阿彌にかへらうとするのだ。どうも人騒がせをしてすみませんと世間に一言位御挨拶がありさうなものだ。

大衆黨分裂事件によつて、無產各派は痛く傷ついた。ところで柄になく功名を樹てたのは田中大將だ。代議士一人を買收する位ひの端した金で以つて、物の見事に日本大衆黨を分裂させてしまつたのだ。このところ反動内閣の首相として大當りといふべしだ。「無產黨もおらにかかつては鎧袖一觸ぢや」と、腰越の別莊あたりで愉快な怪氣焰をあげて居ることであらう。

政界と株界の因緣話

小汀利得

どこの國でも、内閣が變ると、株式界が動く。最近イギリスで勞働黨が選擧に勝つて勞働黨政權が目の前にチラつくと、ロンドンの株價が暴落した。去年の十一月にはアメリカで共和黨が大統領選擧に勝つて株が暴騰した。これは財界の中樞神經とも云ふべき株界としては當然のことであるが、日本では政友會も民政黨もその標榜する政策に大なる逕庭ないにも拘はらず、矢張り政友會が政權を握ると株價は概して高くなり、反對に民政黨が天下を取つた場合には株式界はあまり好感しない。

それは日本の株式界と政治界には深い因緣が結ばれて居るからで、その關係の程度は普通に所謂政商の政治界に於けるよりも、より範圍も廣く、また極めて密接なものである。

取引所はその性質上まづ設立そのものが時の政府當路者の方針によつて定められ、營業滿期後の繼續認可も、資本の增減も、他取引所との合併もすべて之れ時の政府の監督權の下に抑へられて居るのみならず、相場も世界大戰時好況時代の如き例外は別として、普通の場合に大きな動きの起るのは、すべて政界の風波や、政府當路者から洩れて來る材料によるもので、政黨の選擧資金もこゝで生み出され、政治家の富も多くはこの村を利用することによつてつくり出されると云ふまるで大黑様の打出の小槌のやうにまことに調法な場所である丈に、因緣話もなか〳〵少からぬわけである。

最近の[illegible]問題に於ける一[illegible]の喧嘩で、これは本人達はもとより双方の後援者乃至取巻きに至るまで同じ政友會に屬して居つた點に於いて、政黨の内輪喧嘩であつたが、この仲間の喧嘩もそれが日露兩國間の國際問題にまで發展する過程に於いては、株式取引所が大いに利用せられた。若しこの喧嘩が取引所をその舞台とするものでなかつたら事は決してあゝまで重大化しはしなかつたであらう。それは同じ會社の實權爭奪でも、今度の日魯に比し數倍規模の大きい富士製紙會社株二十萬株の買占めが、王子製紙社長の藤原銀次郎と、富士の重役であり、大株主であつた若尾璋八一派との間に行はれた個人取引であつた爲めに、日魯程には世間の問題にされないで濟んだことによつても判る。

兎に角取引所と政治界とは密接な關係がある。その關係をば先づ膝下の東京株式取引所から見て行く。東株が增資を望んで居ることはもう久しいもので、東株關係者はきつと去年の總選擧直前には認可になるものと思ひ込

んで居たものだ。ところが一向沙汰がないので、ハハア之れは選擧後だなと獨り極めに極めて居たが、それも當てが外れ、今度は政府投出しの時に望みを繫いで居るが、政府と因緣をつけて增資認可を得る爲めには東株は去年時に理事に政友會から松本孫右衞門、監査役に窪田四郎と餘り芳しくもないところ二枚を態々差し加へ、別に之れも政友系の鄕誠之助を相談役に迎へた。

しかも東株にはこの外に若尾璋八が昔から理事をして居る。かう云ふ見え透いた陣容をつくつても一日も早く增資を認可して貰はうとするところ、如何に金が物云ふこの社會でも、あまりに淺猿しい態度ぢやないかと云ひたくなるが、しかし一度增資をしたらその儲けは大したものだし、その大きな儲け口たる增資の鍵を握る者が結局政府與黨の幹部である以上、之れも止むを得ないところであらう。

◇

東株はいまゝでに何度か增資をして居るが、その中で目立つたものが大正六年三月の千二百萬圓から二千萬圓にしたのと、大正九年六月に二千萬圓から一躍四千五百萬圓にした二度だが、この中大正六年の增資は死んだ仲小路廉が寺內正毅の下に農商務大臣をして居つた頃で、例の暴利取締令なる『傳家の寶刀』を引き拔いて、戰時成金を縮み上がらした豪の者だつた。この年中笑つて損したやうな顏をして居る仲小路農商務大臣は同じ年の取引所新年宴會には間違つても增資なんか許しさうにないことを云つてゐたが、二月廿五日に議會が解散になると、直ぐ取引所資本八百萬圓增加の件許可すと來た。そこで大阪の株式取引所も堂島米穀取引所も京都も名古屋も直ちに猛運動を起して增資認可を得た。

次ぎの大正九年の增資の時には、いま民政黨へ走つてその顧問になつて居る山本達雄が原敬の下に農商務大臣であつた。之れまた仲小路に勝るとも劣らぬ堅造で、彼れの取引所監督行政は思ひ切つて喧ましく、當業者から毛虫のやうに嫌はれて居たが、議會が大正九年の二月廿六日に解散になると、間もなく東京米穀商品取引所の增資を許し、あと東株の二千五百萬圓、大株の二千六百萬圓を初め、橫濱、京都、博多の取引所まで一齊に增資認可をして、世間をアッと云はした。之れは云ふまでもなく原敬に要請されてやつたことで取引所の增資認可卽政友會の選擧資金調達であつた。

取引所の增資がどうして其麼に有難いか？それはこゝに改めて說明すべく餘りに知れ切つたことだ。いまでこそ、東株の親が一株たつた百三十圓某であるが、大正九年の最高値は一株五十圓拂込みのものが五百四十九圓、この時に增資をすれば、一株で五百圓近いプレミヤムがついて、取引所や取引員に時ならぬ大きな儲けをさせるから、之れを許した政府や與黨に對して、少からぬ冥加金があがる。東株でも大正九年の增資には、三萬株の功勞株と云ふものをバラ撒いて居るが、四百數十圓のプレミヤムのついた株の三萬は大したもので、之れ丈でも選擧費用の少からぬ部分が稼ぎ出せる。況んや大株のごときは、例の

疑獄事件で特に勇名を轟かした[illegible]某は理事長をして居たことゝて、功勞株だけでも二十一萬株を計上し、十萬株丈は一手に或る政黨のいまは故人となつた某大官の手に渡したと云はれて居る程である。

◇

かう云ふ風に取引所の増資が政黨政治家の軍資金調達の爲めに、欠くべからざる最上の手段である以上、今日と雖も何等か政情に變化のあつた場合に、取引所の増資が今然問題にならぬと云ふ筈がない。現に最近でも東米取引所は政友會の雑田四郎が理事長を勤めて居た間に、深川と神田川の正米市場合併を理由に僅かながら増資を許され、神戸取引所は去年の總選擧直前に、中橋商相の手によつて生絲上場の許可を得た。

しかも面白いことには、神戸に生絲上場が許可される前には、ちやんと政商――それとも政治家その者か、市場雀は某秘書官と取引所理事長瀧川某の黨下だと云ふ――の手で同取引所の株が買占められ、何事も知らないでこれに買ひ向つた神戸の株屋連は大敗したなんどのエピソードがある。

だから東株が政友會の大陣笠を二三枚買つて、重役に並べて置くのも、へ々で見ればこそ可笑しくもあるが、東株自體に取つて見れば飽くまでも眞劍で、かう云ふうまい金儲けの術さへも知らないで、東株の當事者を笑つて居る世間の奴等の顏の方が、よつぽど馬鹿つ面に見えると誤話を並べて居る。

しかも東株の理事長岡崎國臣は疾くの昔農商務省の官吏であつた時代はもちろん、後に衆議院書記官長になつた經緯を見ても、ちやきちやきの民政系で、おまけに前總理若槻禮次郎と同郷の出雲出身とあつては、若尾、松本、雑田黨を引つ張り込んで、東株に幾分の政友色をつける位のカムフラージュは、蓋し大目に見てやらなければならないところであらう。

◇

増資や合併に現はれる、政治社會と取引所との因緣は、少くともその輪廓丈でも社會の表面に現はれるが、隱れた兩者の關係因緣に至つてはそれ以上になかなか面白いものがあるやうだ。

近いところではさきに擧げた神戸取引所生絲上場認可に先だつて、關係早耳筋の株買占めを初めとして、去年の米買上げの際にも、農林省の某政務官の出身地である兵庫市場に、まづ米の買物が現はれ、それから東京でも大阪でも所謂政商取引員が盛んに米の買占めを行つて世間を驚かした。

大正十四年四月の日本銀行利下げの際には利下げ豫定日であつた十一日の前日後場に、取引は、東株取引所を初め大阪その他各所で何の株でも片つ端から『買つた〳〵』と買手を振つた者に大屋印沼間敏朗がある。沼間が當時の政友會の有力者で、去年久原入閣反對で田中義一と喧嘩して、いま無所屬に居る小泉三申の機關店であることは誰知らぬ者はない。

小泉三申と云へば、その昔東株仲買として名を知られた山栗こと栗生武右衛門の店で、よく云へば顧問、惡く云へば外交屋をして居

た男で、株式界から政界に乘り出して名を成した第一人者だが、この外にも政黨には株式關係者の數は少くない。政友會の領袖株で會計監督か何かして居る鈴木隆も純然たる株屋で、彼れが千葉縣の小學教員をして居る中に小金を貯め、東株にちよつかいを出して五千圓儲けた時には、嬉しくて〳〵堪らず時々我身をつねつて見ながら、五千圓の小切手を懐の奥深く仕舞ひ込んで千葉へ歸り、妻君に小切手を見せ、相擁して嬉し泣きに泣いた話なんかは、反つて人間味があつて面白い位だが、去年の暮から株式の限月復活に全力をつくし、復活見込みありと見るや、強氣となつて東株親子を買ひ捲り、最近の暴落ですつかり弱つて居るところは往年のタカシ將軍も少し箍がゆるんだ感がある。

株界で成功して政界に乘り出した變り者に大阪の野村德七もあるが、野村も此の春以來強氣で東株その他に亘つて戰線を擴げ、いまでは少くとも五六百萬圓は損をして居る勘定になつて居るさうだ。

だから、世間の一部では、彼れが最近野村合名會社から秘密出版した『轉換期に立てる日本經濟』の序文の冒頭に於いて『昨今巷間の日本財界觀、前途觀なるものを聽くに滔々として、之皆悲觀論なるを知る。その甚しきに至つては、日本財界の破産を唱へて、豫言者の顰に倣ふものがある。云々』と自分が主宰して居る野村證券の調査部長勝田貞次の財界豫言を攻撃して居るのを見て、これ野村が自己の使用人勝田の悲觀論に禍ひされて、勝田を呪つて居る悲喜劇であると云ふ者もあるが、野村はさう云ふ變な動機から自己の一使用人を罵るやうなケチな根性の男ではない。株は獨自の調べと考へで賣つたり買つたりして儲け、その金を撒いて貴族院へも乘り出したので、その邊は珍らしくハッキリしてる男だ。

◇

飛んだ岐路に入つたが、いま政界に相當幅を利かして居る人物で、株界に全然因緣を持たないなど〻云ふ者は極めて少數で、直接株界に出動しなくても、東西各地の各種取引所にそれ〴〵の因緣で關係が結ばれ、かの東京市會の選擧に際して、當時の市會議員の大多數が、所謂陣中見舞金を貰つたやうに、衆議院の選擧の時には、矢つ張り陣中見舞金位は貰ふ手合が多い、しかもそれは衆議院だけでなく貴族院も同樣である。かうして平常から運動が廻つて居ればこそ、どこからどう見ても通過しさうに思はれなかつた、あの限月復活案が、その提案者たる政友會の同じ政權の下に於いて、何の苦もなくすらすらと通過するのである。

だが誰が何と云つても、株界に在つては政界と深い因緣を結んで居る點に於いて、當代島德藏の右に出づる者はあるまい。

島德藏は日魯事件でその凄いところの一端を示したが、若し彼れが政黨に關係がなかつたら、今時分、人の世に、大きな面をして横行して居れる身分ではない。例の門司築港事件では、すんでのことに臭い飯を食ふところであつたが、死んだ横田千之助に助けられて

この罪を免れて居るので、永年の根據地たる大阪株式取引所理事長の地位こそ辷つたれ、後釜には上島以下みんな自分の子分を据ゑて、いま尚ほ大株を我物顔に振廻つて居る。

彼れ島徳の全盛時代＝それは日本財界の出鱈目景氣時代であつたが＝には内地に取引所をつくつたり、増資したりする丈では足りないで、盛んに支那各地に博奕場を設けた。天津の天取、上海のシヤン取はまだしも漢口にまで取引所をつくる騒ぎ、上海取引所株のごとき、大正九年には五十圓拂込みのものが、一時二百五十三圓もする騒ぎだつたので、内々島徳に款を通じて來る政治屋どもは非常なもの、彼れ自身も自分程偉い者は無いと自惚れて居たとは、彼れの告白するところである。

◇

政治界と株式界の因縁を説くに當つて、どうしても落してならないものは、大連株式商品取引所問題である。この大連取引所はそもそも創立の初めから、政治臭黄金臭紛々たるものであつたが、之れあるが爲めに政界には時ならぬ疑獄が起され、また官吏の中でも關東長官は此の取引所問題の爲めに、動かされる程恐ろしい因縁を持つて居るのである。大連取引所は大戰景氣の終末に近い大正九年二月に例の小泉策太郎によつて創立されたもので、故野田卯太郎の女婿松野鶴平や同じ政友會で代議士だつた門田新松が加はり、それに憲政會の首足代議士降旗元太郎までが仲間になつて、でつち上げたもの、一時は權利丈で百八十圓、翌十年になつても、十二圓五十錢拂込の株が百五圓までしたことのある曲物である。

この取引所も亦御多分に洩れず政友會の原敬内閣の下に認可になつたもので、大連官營取引所の向ふを張るといふ無茶なものであるから、敵は本能寺、どうしてもこの取引所が、物になる爲めには、官營取引所を合併して仕舞はねばならない。ところが前の關東長官兒玉秀雄は、正直に取引所民營反對を明言してしまつたので、止むなく田中から兒玉に因果を含めてお前は東京市長にしてやるから關東長官を辭めて貰ひたいと、内地へ土産が一つここ六、東京市長は官吏を出すまいといふので、うまくは問屋が卸さず、遂ひに兒玉は成城學校の校長さんだか園長さんだかと云ふ、他愛もないものになつて居る。兒玉のあと時の關東長官閣下に成りすましたのが例の鍋料理で有名な木下謙次郎、話は少し横道へ外れるが、この男が關東長官に親任される日には、樞密顧問官の親任式もあつて、新顧問官鎌田榮吉が宮中へ出掛けると木下が同じ部屋に居る。鎌田が今日は何だねと聞くと、木下は親任式でねと答へて平然として居るので、鎌田は木下が何か見當違ひをして居る者とのみ思ひ、君の行くところはどつか違ふだらうと注意してやりたいと思つたが、あんまり木下が平然と構へて居るので、注意も出來ず、そのまゝに自分のなすまして宮中を下つたところ、號外で木下の關東長官任命を見て、流石の鎌田もびつくりしたと云ふ位、世間を愕かしたものだ。

この木下は旅順へついて就任の挨拶が下り

と直ぐ取引所は民黨が結構だと聲明した位だから、いづれ彼れの在任中に永い間の懸案たる大連取引所問題も何とか形がつくことであらう。尤もそれには小泉の復黨が先決問題であるかも知れないが。

政界と株界の因縁話はまだ／＼之れ位では盡きない。大正九年三月十五日の株式商品市場の大瓦落は、政友會の軍資金をつくる爲めに、野田卯太郎が博多の取引所を手初めに株を賣り出したのが直接の動因であると云はれて居るのを初め、古いところでは北濱銀行を潰した岩下清周と桂太郎の關係等色々あり、最も新しいところには久原房之助のやうなのがあるが不思議なことに民政黨には個人としては相當株界に因縁のある者も少くないに拘はらず、黨としては殆んど株界に因縁の無い事である。つまり民政黨の財政々策はいつでも所謂消極緊縮であり、民政黨の幹部は政友會とは較べ物にならない程官僚的で融通が利かない、誰も彼れも理窟がさきに立つて、理窟抜きに一つ景氣を出さうぢやないかと云ふやうな、野人振りを發揮することなどは思ひもよらないところである、だから株式界は政策の是非善惡、人柄のいゝ惡いなどは全く措いて問はず、たゞこの古くから因縁のある政友會の政權を歡迎するやうになつたのであらう。

◇

イギリスの株式相場の變動は勞働黨が發表して居る政策から見て、或程度まで肯定出來る。

すなはちバーミンガムに於ける勞働黨大會の決議を見ると、產業立法でも現行勞働組合法撤廢、勞働組合の權利恢復、一週四十八時間制確立を初めとして幾多產業立法の改正と擴張を主張して居り、失業についても失業對策の確立することや、失業保險を擴張していまゝ適用されて居ない勞働者にも適用するとか、農業については土地の公有も主張して居るし、その上財政々策としては生活必要品課税と保護關税を撤廢すると云ふのだから、之れだけでも今マッケナ關税で息をついて居る或種の工業株を充分低落せしむる理由がある上に、相續税增額や、大所得者の税を高くすることが述べられてあり、しかも株でも持つて見ようと云ふ連中に一番いやなことには年額五百ポンド以上の財產所得に對する特別税の賦課と云ふやつがある。

勞働黨が勝てば株が下ると云ふとには、いま擧げたやうなハッキリした理由もあるが、かうした表面に現はれて居る理由の外に、一面に於いて勞働黨の連中は株式市場には、全く何の因縁もないから、その上からも株式市場は何となく、一種の不安を感ずること、恰かもいまの民政黨が日本の株式市場に歡迎されないこと、同樣、否なもつと／＼強い程度のものであらう。

新聞懺悔

太田正孝

一

もう四年ぐらゐにもなりませうか。政友本黨と政友會とを合同させようとして、双方の黨員が、それ／＼アヤメ會とサツキ・會とをつくつたことがあります。どちらの黨の方がアヤメ會であり、どちらの黨の方がサツキ會であるかを私たちには區別しがたいほど、局外者には兩者の眞意をつかむのに苦しんだものです。これを探ぐる任に當つたのは、地方から轉じて來て間もない——まだ黨員の間に顔もおぼえられてゐない——政治部勤務のK君でした。彼は、どうかしてこの難業をうまくやつてのけたいと心を碎いたのです。とう／＼某日某夜鐵道協會に催された双方の重大な會合に——驚いてはいけません——給仕に變裝してその席を覗くことが出來たのです。見れば、白い上衣の着つけなどは、どうやら身についてゐます。けれども皿を運ぶ格恰や、ナイフやフォークを動かすことは、新參者に手ぎはよくやれるはずがありません。所作のギゴチないうへに、チト見當もはずれてゐるやうです。それといふのは、本職の給仕さんから『あなた！ウエーターが眼鏡をかけてはいけません、おとんなさい』といはれたからです。何さま、眼鏡をかけたウエーターはありません。強い近眼鏡の持ち主であるK君は、こまりましたが、それが作法とあつては仕方がありません。眼鏡をとりはづしてしまつたのです。——サアさうなると、よほど近づくのでなければ、肝腎なお客の顔がはつきりして來ません。やつとのことで聲で判斷して、見事あるものをツカミ得たのです。——むかしは田中宮相を糺彈しようとして、彼の豪奢を極めた邸宅の天井の板をさぐるために少なからず工夫したとか、關津

で松方正義公の危篤なりや否やをたしかめるために、床下に忍びこんだなどといふ話や、ルパンものを地でやつたやうなことは、外國の記者についても傳へられてゐるやうに、わが國の記者について聞いたものも少なくありません。が、近ごろはあまりさういふことを耳にしません。とにかく、かうしてまで新聞記者は、事件をさぐりあてようとするのです。それは、興味のあることもありませうが、つらい仕事ではありませんか。

要するに、新聞人の職とするところは、社會に起つた出來ごとを明るみに運び出すことにあります。だから『これは秘密にしてくれ』など、小聲に申すことを、うかと『よろしい』と氣輕るに呑み込んだりすることは、新聞人としてのたしなみがありません。さらにその約束を反古にして掲載することもよくありません。なかには、聞いたり見たりしたことで、書いてはいけないこともあります。そこにニウスヴァリューのあるかないかを見きはめる力がなくてはならぬわけです。けれども、原則は明るみに出すべきものと思ひます。ことに、事件の内容を曖昧にするために世をまどはすやうな場合において、これを切實に感じます。術式な政治家や實業家のうちには、ひた隠しに隠くすことを誇りとしてゐるものもありますから厄介千萬です。いけません。ことに立憲政治の様式は、さういふことをなくすることにあるからです。――私は、この意味において、そゞろに震災手形問題の經過について思ひ出すのです。

こと改めていふまでもなく、震災手形は、震災の残した經濟證文です。何とか片付けねばなりません。ことに金解禁によつて國際金融を常道にかへし、國民經濟を更正せしめようとするにあたつて、當時の片岡藏相が、この問題に手をつけたのは當然のことです。けれどもその震災手形の内容を示さずして、やがては國民の負擔にもなるかも知れないと思はれるものを、眼をつぶつて承認せよとすることは、いけません。しかも、この震災手形問題にからんで、二三の銀行の弱點が明るみに出されて、店を閉ぢてしまひました。臺灣銀行といふ政府の息のかゝつた特殊銀行も、やりくりのために三井銀行とか安田銀行とか第一銀行などから巨額のコールを借りてゐました。そのコール引を上げられようとしたから大變です。いはゞ臺灣銀行を動かしてゐる油がなくなるやうなものであるからです。この臺灣銀行に若しもの事があれば財界の重大事であるとして、それを緊急勅令によつて、その貸出融通に應じさせようとする日本銀行に對して二億圓の補償をしてやらうとしたのです。そのやりくちの是非巧拙は別として、私が根本的に不滿を感じたのは、その内容を示さない點にあるのです。いけません。とう／＼憲政會内

新聞懺悔

太田正孝

一

もう四年ぐらゐにもなりませうか。政友本黨と政友會とを合同させようとして、双方の黨員が、それ／＼アヤメ會とサツキ・會とをつくつたことがあります。どちらの黨の方がアヤメ會であり、どちらの黨の方がサツキ會であるかを私たちには區別しがたいほど、局外者には兩者の眞意をつかむのに苦しんだものです。これを探ぐる任に當つたのは、地方から轉じて來て間もない――まだ黨員の間に顏もおぼえられてゐない――政治部勤務のK君でした。彼は、どうかしてこの難業をうまくやつてのけたいと心を碎いたのです。とう／＼某日某夜鐵道協會に催された双方の重大な會合に――驚いてはいけません――給仕に變裝してその席を覗くことが出來たのです。見れば、白い上衣の着つけなどは、どうやら身についてゐます。けれども皿を運ぶ格恰や、ナイフやフォークを動かすことは、新參者に手ぎはよくやれるはずがありません。所作のギゴチないうへに、チト見當もはずれてゐるやうです。それといふのは、本職の給仕さんから「あなた――ウエーターが眼鏡をかけてはいけません、おとんなさい」といはれたからです。何さま、眼鏡をかけたウエーターはありません。强い近眼鏡の持ち主であるK君は、こまりましたが、それが作法とあつては仕方がありません。眼鏡をとりはづしてしまつたのです。――サアさうなると、よほど近づくのでなければ、肝腎なお客の顏かはつきりして來ません。やつとのことで聲で判斷して、見事あるものをツカミ得たのです。――むかしは田中宮相を糺彈しようとして、彼の豪奢を極めた邸宅の天井の板をさぐるために少なからず工夫したとか、關津

る人があります。まことに、憐れむべきは役人の立ち場です。——とはいふもの丶、民間におきましても、少しく大きい規模の事業になると、いつしみこんだのか知りませんが、役人のやりくちをまねてゐる實業家も少なくありません。だから、この方面からも新聞記事がよくとれないのです。可成り努めましても誤りが生ずるのです。一度確かめてくれたならといふ人などもありますが、さういふ人たちは、なか／＼口を開かないものです。そして讀者の方からは、新聞はウソを書くといつて攻めるのです。新聞が故意にウソを書く必要がありませうか。それは良心ある記者への侮辱です。否私たちは、新聞がウソをつくといふ人たちに對して、役人などが白々しくウソをついたいろ／＼の證據をもつてゐます。最も手輕るなのは、こんなのがあります。——大正九年の七八月頃の新聞を見ていたゞきたい。時の首相加藤友三郎氏は、永く病床に苦しんでゐましたが、内閣書記官長などは病は決して篤くない旨を繰り返し力を入れて申したのです。——その病の篤くない首相が、突如として八月二十六日に死んでしまつたのですから、どうでせう。醫者が文字どほりにヤブであつたでせうか。役人が虚報したのでせうか。もちろん、後者です。如何に政治上の關係があつたにせよ、事實をかうまでして取扱ひたがるのは、罪のふかい業です。私たちは、かういふ人たちから出る新聞の批難を聞くと、天に向てツバキする醜い姿を描くのです。

二

私は、新聞の文章について一言しなければなりません。——大正十四年ごろであつたと記憶します。私は當時の陸軍大臣宇垣一成氏に頼まれて、陸軍大學校で、二回にわたつて新聞についての講演をしたことがあります。そのときは、賀陽宮殿下も李王世子殿下も、はしたなき私のお話を御聽講遊ばされたのです。私は、お話が新聞の文章の如何なるものであるべきかを説くところへ來て、窮してしまつたのです。よく「文章が書けるから」といつて記者志願をする人がありますが、さういふ人たちの書かれたものも、新聞記事として板に乘るやうになるまでには、器用不器用もありますが、なか／＼修業を積まねばなりません。新聞記事は一般の文章とちがふからです。——私は思案の結果、かう説いて見たのです。ブツキラ棒に——太功記十段目を思ひ出していたゞきたいと申したものです。——軍人たちは驚きの眼を見張りました。——光秀が戰に破れて、母と妻との尼ケ崎の隠れ家へ歸つたとき、必定久吉このうちにと、とツソギ竹で突いては見ましたが、苦しみ轉び出たのは母のさつ

きであつたのです。しくじつたのです。――そのうへに手負ひの母は、わが子の不忠呼ばはりをして說敎をします。光秀はやりきれません。そこへ馳けつけたのは、いたく傷を受けた息子の十次郎です。問題となるのは、この十次郎が父光秀へ報告する文句です。この時の光秀は、まづ何を聞きたかつたでせうか。――新聞讀者になつて下さい。――いふまでもなくカタキ羽柴久吉君との戰の模樣です。――しかも答へんとする十次郎は、いまのいま許嫁の初菊と水盃して出たばかりの彼ではありませんか。『實は、父上よ! 父上の留守に初菊孃……』といふのは、彼の私情であり、戰況報告後で然るべきエピソードとする價値しかありません。しかるに初心の記者は、どうも初菊との婚儀のくだりから書きたがるものです。――この說明は、ちやうど敵陣の模樣を知らうとして出かけた斥候が、途中でかず／＼の艱難に出つ會して、命からがら歸つて來た場合の報告と同じですと申しましたから、軍人たちは大に我が意を得たといふ顏をしました。途中の出來事などは第二次的に報告すればよいのです。――とにかく、かやうに新聞の文章のコツはむづかしいものです。そして編輯整理の都合によつては、文章のどこで切つてもよいやうに、從つて重要なことが切られることのないやうにしなければいけません。新聞のシリーシーズンといつて、記事材料の少ないときは、さういふ閑文字も色々と書いて載せることもありますが、普通の場合には叙事の順序を氣をつけねばなりません。だから新聞記事は、起―承―轉―「結」といつたやうな普通の文章とは、書き方がちがつてゐるのです。むかしは政治を本位とする新聞は、市井の出來事を輕く扱ひまして、ことに色町のことなどを書くのは、筆の汚れであるとさへ思はれてゐたときは、吉原に大火のありましたのを、『北方に大火あり』と、タッタ一行でやつたものです。要領のうますぎる犬養毅の文章など、いまから見ると、なか／＼面白いものがあります。彼が郵便報知新聞の記者として、十年戰爭に特派されたときの報告の一節をかゝげてみませう。それは明治十年三月二十七日付で、『戰地直報』として一括してかゝげられ、その前書きに、『本社より派遣せる戰地探偵人犬養毅の實地目擊或は聽取に係る細報を左に掲ぐ』としてあります。戰地探偵人が面白いではありませんか。

木ノ葉山の部

三月十二日我軍進で田原坂を拔く○十三日賊の爲に復取返さる○十四日朝より開戰官軍進て賊壘三ヶ所を拔く遁者最も夥し○十五日朝賊吉次峠より衝進し我兵接戰し二所の堡を取り返したり官軍死傷多し午後より晩まで事なし是を二ヶ股の役といふ

結句がおもしろいです。まるで、歴史を讀んでゐるやうな氣がしませんか。――それはさておいて、とにかく新聞の文章は一般のそれとはちがつてゐます。私は、大正天皇御大葬々列拜觀の光景を映していただきたいと思つて、當時特別な關係にあつた菊池寛君と里見弴君とを累はしたことがあります。兩君がともに文人として名あることは、いまさら申すまでもありません。二月七日の夕。ほとんど洋服を着たことのない菊池君は、社員のキユウクツな服を借用して社を出で、二重橋前へゆきました。里見君は、モーニングのスッキリした洋服にシルクハットといふ出で立ちで、腕のところに社員章を着けて、虎ノ門に立たれたのです。その夜の姿は、いまもアリ〱と眼に殘つてゐます。兩君とも、たしか十時ごろ社へ歸られて、私の部屋で拜觀記を書かれたのです。そばで見てゐる私たちは、どうやら作文の試驗でもしてゐるやうに感じたものです。筆に載すべきことがらが嚴肅を要するものであつたからでもありませうが、兩君ともさうスラ〱とは筆が運ばれなかつたやうです。――私は兩君の勞を多として、自宅へ歸つて來ますと、編輯からの電話です。記者の書いた分も集つてみますと、兩君の分は別にして切り離さねばならず、かつ一部分は削つてもよいかとのことです。――私は、このときシマッタと思ひました。――一般記者の書いた記事のなかへ、たとひ拜觀地點の役割があるとは申せ、兩君の文章を入れようとして仕組んだのが誤りであつたと知つたからです。『かまひません、記者の書いた記事を本位にして下さい、また記事の多いために削るのも仕方がありません』と答へました。なるほど、翌朝の新聞を見ますと、兩君の分は特別扱ひにして、一般記事――『本記』と申しますが――で葬列の敍述はつくされてゐます。しかも、兩君の文章とも、私が批評するのは如何かと思ひますが、無駄のないものです。味のあるものです。菊池君は、一高時代に、明治大帝の御大葬を拜されたことから筆を起し、いまこゝに報知新聞記者として、大正天皇の御葬列のことを記すとて、周圍の光景から、御轜車御發引のうはさなど細々と書いてゐます。……『軍樂隊からは、哀みの奏樂が起り、「捧げ銃」の聲が、暗の中にふるへる、御轜車から二十間ばかり後、二つの松明がこの行列の中に燃えてゐるあたり、軍服の金モールが燦然と光る長身の御姿は、御名代秩父宮であらう、御眼鏡が松明の光に光るのでそれと知られる、それにつゞきたまふ各宮方は、たゞ薄暗の中に、それかと拜し奉るだけだつた、それにつゞく文武百官の姿、大正の御世の御榮のかなしき名ごりとしてはなやかであつた』――そして、大正四年十一月の御大典には京都大學の學生として行列を拜し奉つたのに、『御治世

永からず早くもこゝにとこしなへの御眠につかせたまふことは、我々大正においてその壯時を過したもの、、一樣に感ずる深い悲しみでなければならぬ』と結んでゐます。全文が菊池君個人の美しい主觀です。そして、立派な文章です。しかし新聞本來の記事ではありません。記者は、新聞といふ大船に乘つてゐるのですから、前文句も結句もありません。そこに非常な違ひがあります。それから里見君のは、叙情體で、如何にも里見君の個性が出てゐます。受け持ちとされた赤坂のタメイケに急いでゆく自分の姿から筆を起し『晴れたる空、暮るゝに從つてすみわたり、星一つ二つかがやきそむ。六日月なり』とつゞけてゐます。名文ではありませんか。それから行列の模樣をうつし出すに當つても、『轜車は黑塗金紋のちらしおごそかに、悲しき軋音をたてゝ進む。頭、おのづからたれる。側近の人々のうちに、友人岩佐公直を見る』と書かれてゐます。また、『高松宮、閑院宮、御同列にて進ませたまふ。載仁親王の御ひげいたく白きを加へたまへる、畏くおそれ多し』などとあります。とにかく新聞記事とはちがつてゐます。これは立派な文章です。その位のことは心得へてゐるべき私が、はじめにおいて一般記者と同樣の文章を期してゐたといふのは、何たる間拔けでしたらうか。私は悔ひざるを得ないのです。――それにしても、記者の書く文章には、上手拙下があります。歐洲人などは、うまいものではありませんか。むしろ私は、彼の文の語尾に出る『あつた』と書くのを『ありたし』としたり、『……だ』調の多いのは、いやです。よいと思ひません。また、學者上りの人に論說でも書かすと、何日の新聞參照などと書きますが、これもいけません。――なほ編輯整理術によつて、文章も活きて來るもので、それは熟練な人たちのみよくなし得ることです。通信設備にあまり金をかけない新聞でも、なかなかよく紙面を見せてゐるものもあります。反對に相當金をかけたものでも、紙面を拙く見せてゐるものもあります。なほ編輯については、讀者の眼の動きは對角線に走る傾きがあるとか、見出しの活字の大きさを顧慮するとか、寫眞のハサミ具合など、面白い研究題目も少なくないやうです。けれどもそれは懺悔錄の範圍で申すには、あまりに小さい問題です。しかし重要な問題です。たゞ私は、とかく記者なり編輯整理者なりが、みづからの主觀を交へたものが、いやです。それを見出しにすることにも不同意です。まして社員みづからのことを書いたり、社長や社內幹部の動靜などをことごとしく書きたてるなどは、新聞販賣店や地方社員にエラがらせようとしてゐる新聞などときどきありますが、にがにがしいことです。もつての外のことです。新聞は公器であるからです。歐

結句がおもしろいです。まるで、歴史を讀んでゐるやうな氣がしませんか。――それはさておいて、とにかく新聞の文章は一般のそれとはちがつてゐます。私は、大正天皇御大葬々列拜觀の光景を映していただきたいと思つて、當時特別な關係にあつた菊池寛君と里見弴君とを累はしたことがあります。兩君がともに文人として名あることは、いまさら申すまでもありません。二月七日の夕。ほとんど洋服を着たことのない菊池君は、社員のキユウクツな服を借用して社を出で、二重橋前へゆきました。里見君は、モーニングのスツキリした洋服にシルクハツトといふ出で立ちで、腕のところに社員章を着けて、虎ノ門に立たれたのです。その夜の姿は、いまもアリ〳〵と眼に殘つてゐます。兩君とも、たしか十時ごろ社へ歸られて、私の部屋で拜觀記を書かれたのです。そばで見てゐる私たちは、どうやら作文の試驗でもしてゐるやうに感じたものです。筆に載すべきことがらが嚴肅を要するものであつたからでもありませうが、兩君ともさうスラ〳〵とは筆が運ばれなかつたやうです。――私は兩君の勞を多として、自宅へ歸つて來ますと、編輯からの電話です。記者の書いた分も集つてみますと、兩君の分は別にして切り離さねばならず、かつ一部分は削つてもよいかとのことです。――私は、このときシマツタと思ひました。――一般記者の書いた記事のなかへ、たとひ拜觀地點の役割があるとは申せ、兩君の文章を入れようとして仕組んだのが誤りであつたと知つたからです「かまひません、記者の書いた記事を本位にして下さい、また記事の多いために削るのも仕方がありません」と答へました。なるほど、翌朝の新聞を見ますと、兩君の分は特別扱ひにして、一般記事――『本記』と申しますが――で葬列の叙述はつくされてゐます。しかも、兩君の文章とも、私が批評するのは如何かと思ひますが、無駄のないものです。味のあるものです。菊池君は、一高時代に、明治大帝の御大葬を拜されたことから筆を起し、いまこゝに報知新聞記者として、大正天皇の御葬列のことを記すとて、周圍の光景から、御轜車御發引のうはさなど細々と書いてゐます。…『軍樂隊からは、哀みの奏樂が起り、「捧げ銃」の聲が、暗の中にふるへる、御轜車から二十間ばかり後、二つの松明がこの行列の中に燃えてゐるあたり、軍服の金モールが燦然と光る長身の御姿は、御名代秩父宮であらう、御眼鏡が松明の光に光るのでそれと知られる、それにつゞきたまふ各宮方は、たゞ薄暗の中に、それかと拜し奉るだけだつた、それにつゞく文武百官の姿、大正の御世の御榮のかなしき名ごりとしてはなやかであつた』――そして、大正四年十一月の御大典には京都大學の學生として行列を拜し奉つたのに、『御治世

永からず早くもこゝにとこしなへの御眠につかせたまふことは、我々大正においてその壯時を過したもの、、一様に感ずる深い悲しみでなければならぬ』と結んでゐます。全文が菊池君個人の美しい主觀です。そして、立派な文章です。しかし新聞本來の記事ではありません。記者は、新聞といふ大船に乘つてゐるのですから、前文句も結句もありません。そこに非常な違ひがあります。それから里見君のは、叙情體で、如何にも里見君の個性が出てゐます。受け持ちとされた赤坂のタメイケに急いでゆく自分の姿から筆を起し『晴れたる空、暮るゝに從つてすみわたり、星一つ二つかがやきそむ。六日月なり』とつゞけてゐます。名文ではありませんか。それから行列の模樣をうつし出すに當つても、『轜車は黒塗金紋のちらしおごそかに、悲しき軋音をたてゝ進む。頭、おのづからたれる。側近の人々のうちに、友人岩佐公直を見る』と書かれてゐます。また、『高松宮、閑院宮、御同列にて進ませたまふ。載仁親王の御ひげいたく白きを加へたまへる、畏くおそれ多し』などとあります。とにかく新聞記事とはちがつてゐます。これは立派な文章です。その位のことは心得へてゐるべき私が、はじめにおいて一般記者と同様の文章を期してゐたといふのは、何たる間抜けでしたらうか。私は悔ひざるを得ないのです：――それにしても、記者の書く文章には、上手拙手があります。殊に政治家などは、うまいものではありませんか。尤も私は、彼の文の語尾に出る『あつた』と書くのを『ありた』としたり、『……だ』調の多いのは、いやです。よいと思ひません。また、學者上りの人に論說でも書かすと、何日の新聞參照などと書きますが、これもいけません。――なほ編輯整理術によつて、文章も活きて來るもので、それは熟練な人たちのみよくなし得ることです。通信設備にあまり金をかけない新聞でも、なか〳〵よく紙面を見せてゐるものもあります。反對に相當金をかけたものでも、紙面を拙く見せてゐるものもあります。なほ編輯については、讀者の眼の動きは對角線に走る傾きがあるとか、見出しの活字の大きさを調節するとか、寫眞のハサミ具合など、面白い研究題目も少なくないやうです。けれどもそれは懺悔錄の範圍で申すには、あまりに小さい問題です。しかし重要な問題です。たゞ私は、とかく記者なり編輯整理者なりが、みづからの主觀を交へたものが、いやです。それを見出しにすることにも不同意です。まして社員みづからのことを書いたり、社長や社内幹部の動靜などをことごとしく書きたてるなどは、新聞販賣店や地方社員にエラがらせようとしてゐる新聞などもありますが、にが〳〵しいことです。もつての外のことです。新聞は公器であるからです。然

先生のいはゆる人のことを書くべき役目のものが、みづからとみづからの樂屋とを書くのは、法でもありません。それが讀者との約束でもあるからです。

三

つぎに私は、文章を構成する文字について、いはねばならぬ多くをもつてゐます。それは文章を綴る立場の記者にとつても心すべき問題です。いふまでもなく、讀者は讀みやすい、わかりやすいものがほしいといふ希望をもつてゐます。しかも問題は、記者の書かれた文章を、一字一字づゝ拾つて組みあげてゆく印刷工場としての大問題であるからです。新聞が民衆的のものであり、社會化すべきものであるからには、わかりやすく書き、むつかしい文字を使はないようにしなければいけません。總理大臣の眼を通す新聞が判任官の一番の人によつて讀まれ、大學教授の讀むものを小學校の先生が讀み、大將の讀むものを兵卒が讀み、資本家と勞働者と所を異にして同じものを讀むからです。知識階級の人たちとしては、むづかしい文字を知つてゐるませうが、昨今のやうに、イヤに細かい活字をつかふやうになりましては、なるべく格の少ない文字によつて書いてもらう方が助かるわけです。――しかし、かういふ意味で、新聞人は本當に努力してゐるでせうか。實行してゐるでせうか。兎角ことを新聞人は、社會の先驅者であるとして振舞つてゐますがこの點ではどうでせうか。なるほど學者の書棚に詰め込まれてゐた知識を社會化しつゝあるのも新聞です。普通選擧制を促進せしめたのも新聞です。けれども、事業として新聞を見るときに、それが合理化されてゐるでせうか。活字問題にしても、改進的の部分があるでせうか。私は、この問題が進めば進むほど知識の社會化につとむる新聞の力が、より強くなるものと信じてゐます。――このことを説くには、多少廻りくどいかも知れませんが、根本に立ち歸つて私の主張から申さねばなりますまい。

新聞は、多くの人に話しかけるものです。出來事を聞いてもらひ、意見を知つてくれゝば良いのです。讀者としては、なるべく早く多くの出來事を聞き、輿論の向ふところを知りたいといふことにあると思ひます。かうした記事や意見は、文字で表現されてゐますが、知りたいのは、內容となる事柄であり、意見です。文字そのものは道具にすぎません。しかるに我が國では、むかしから讀み書きすることが學問であると考へられてゐます。讀み書きすることは知識を得る手段にすぎません。その手段を知るために小學校から中學校高等學校と少なからざる月

日本を積み命まで縮めてゐます。勝田文相も殊勝に「教育の經濟化」といふことを唱へられてゐますが、ネライをかういふ點にも置いてもらひたいものです。それはさておいて、いまの世のなかにも、人間を採用するに履歴書まで綺麗に書かないと承知出來ないといふやうに、文字閥をつくつてゐるものが多いのです。その文字を見ると、事物を形どつたものが多いです。「人」は人間の姿であり、『山』は山の形です。いはゞ字を書くことは畫を書くことであり、この意味においては、日本人はみな畫かきです。畫であるから軸とか額にもなるわけです。結構です。けれどもひまのある人たちには、もつて來いのなぐさみです。けれども新聞は、社會の出來事が後から後からと押しかけてゐますし、時と競爭して早くつくらねばなりません。用ゐる文字の種類が少なければ、これを拾ふのにも樂であり、組み合せて言葉をつくる英語のやうになれば、別に工夫もつくわけです。けれども現在においては、用ふべき文字の種類が餘りに多いのです。假名は五十字ですから何でもありませんが――これだけならばヨーロッパやアメリカの新聞のやうにライノタイプでやつてゆける工夫も出來ませうが、これに交へられてゐる漢字が多いからやりきれないです。かつて第一議會から第二十五議會までの議事録について衆議院の事務局で調べたところによると、漢字は四千五十二字あつたとのことです。一般に新聞に出ますのは、特殊な固有名詞などは別として普通な千字見當もあらうかと思ひます。それに振り假名のついた活字でありますから、振り假名のつけ方の多いだけ、一字も多樣になり、ちがつた活字となるわけです。一時は「人」といふ字にも、「人」「人」「人」「人」「人」『人』などと十三通りもあつたものです。それに一つの活字も、その一つが拾はれて、あとにないやうでは困ります。議會中に衆議院の「衆」といふ活字を用ふることが多いといふやうに、同じ文字の重なつて出る場合があるからです。從つて補充字として、多いものは二十も用意しておかねばなりません。それに活字の大きさが何號何號といつて大中小いくつもありますから――一新聞社の印刷工場で持つてゐる活字の個數は大新聞になるほど多く、五百萬個から七百萬個見當もあるといはれてゐます。本當です。それに一つの活字を何度も使ひますと、印刷がハッキリして來ませんから、一度用ひただけでやめれば最上ですが二三回の使用といふ命數にしましても、絶えず新しい活字を作つてゐなければならぬことになるのです。とにかく、さういふ活字を拾ひあげ組み合せて毎日の新聞を作るのですから、大變です。とても一字一字づゝ拾つてゆく手數を考へたならば、讀者の驚かれることが少なくないと思ひます。また、その拾はれ

た活字が組み込むときに抜けて落ちたり、組みちがへたりして不敬事件まで起した新聞のあることを考へれば、思ひなかばにすぎるものがあるでせう。一般人が新聞に對する理解のあるヨーロッパやアメリカでは、記者も材料を得るに樂ですが——尤も五月二十八日の新聞を見ますと、親愛なる世界的客の勇者リンドバーク君の結婚について、記者や寫眞班がシツコク附き纏ふため、警察に保護を申し出で、嫁さんのメキシコ大使モーロー氏邸の半マイル以内に立ち入ることをその筋から禁ぜられたほどであるとのことです——印刷に付して新聞に製作するにも樂です。文字を組み合すればよいからです。その文字の種類が少ないからです。ロンドンタイムスの印刷工場など見ますと、英文を一定の紙(幅三寸位)に文字によつて異つたところへ孔をあけたものを機械にかけますと、その孔を通して電氣仕掛けで自働的に活字が出來て組まれるやうになつてゐます。また、私たちがアメリカあたりの新聞や大通信社を覗いてみますと、電信によつて受けてゐる記事が多いことを知ります。出先きの記者は、さうして記事を送るのです。しかるに日本の新聞は電話を用ふることの多い新聞で、それだけおくれてゐるかと思ひます。『モシ〳〵新聞』と『カチ〳〵新聞』の差があります。だから、ヨーロッパやアメリカの新聞工場を見ても、わが國の漢字使用問題を解決しない限りは、應用利用模倣の範圍もないわけでも。先年來漢字のモノタイプといふものが發明されましたが、五千字見當の活字を利用し組み合してゆく力はありません。それに機械を動かすになかなか力もいります。むつかしい固有名詞にでも出つ會はすときは、外からその活字をもつて來て埋めなければならないから、手數もかゝるわけです。だから問題は、漢字を少なくするか、假名ばかりでやるかといふことになります。いはゆる漢字制限問題も、かういふところから出發してゐるので、漢字を用ふる習性の人たちから見ると氣持ちを惡るくせられるでせうが、新聞社としては眞劍な問題です。ましてや一人の讀者といへども大切だといふ考へをもつてゐますから、その讀者を侮辱するといふやうな——自殺的でもあり、浮いた道樂氣で行つてゐるのではありません。この點において私は、早くも明治六年の二月に、『ひらがなまいにちしんぶん』を作つた前島密(驛遞頭)をえらいと思ひます。彼は、この問題を早くから注意し、さきには慶應二年十二月十五代將軍徳川慶喜に對して『漢字廢止の儀』を建議し、明治政府になりましても、明治二年『國文教育の儀につき建議』したのです。ともに、その趣旨は同じですが、前者の方が、熱誠をこめてゐるやうに思はれます。彼は、學問は事理を解するこ

とであり、漢字を記し漢文を誦することではないといはれてゐます。そして御國には貴い假名といふものがあります。わづか五十字で事足りてゐます。この誇るべき文字を捨て、漢字に浮き身をやつし、はては、『英雄を論じて楠正成は諸葛孔明に似たりといふ如きは、主客順序を轉倒するもの』であると斷じてゐます。假名を國字であるとする國粹論です。いまの世は漢字――支那字を知つて、博く知識を磨かうとしない――『宇宙事物の道理の如きは分毫も之を教示するもの無之、國外國ある事すら知る者少き狀態に候得ば、愛國心の如きは是等の種族中には絕て影だに映出致せし事は有之まじ』となげいたのです。千古の貴い文字です。『晩近に至りて漸く西洋學を爲す者增加せるゆゑ、……他日は自ら一種の西洋魂を輸入して支那魂と衝突し、不可謂葛藤を起し、其極大和魂を皆無にすべしと、這は外人の妄評には御座候得共、亦全く御遠慮の外に可被爲措の一話とも不奉存候』と慶喜に獻白してゐるのです。漢學國粹論者とマルキストとの出現について、私はこゝに批判しようとはしませんが彼の鋭い觀察はおもしろいではありませんか。この文は是非讀んでいたゞきたいものです。もちろん、假名にも缺點があります。『霞ぞ野邊の香ひかな』も、『カス、ミソ、ノ、ヘノ、ニホヒカナ』と誤讀しないともかぎりません。けれども、同じことは

英語などにもあります。これは『文典を編し、辭書を編し、討法語格接文の則を制』すればよいといつてゐます。そして彼の『ひらがなまいにちしんぶん』は、『紀元二千五百三十三年二月』といふ出版の月と、『東京相生橋通神田淡路町二丁目啓蒙社發兌』といふ發兌元の名とだけを漢字で書いてゐるにすぎなく、全文は、句切りが注意しすぎて却つて讀み下しにくい點もありますが、ともかく全部假名です。その序文の一部をかゝげてみませう。

『この しんぶん を すり いだす に は そもそも ふたつ の おもむき あり ひとつ には まいにち の おふれ を はじめ くにうち は まうす まで も なく せかいぢう の にちにち うつり かわる ありさま まで かき つづり あまねく をんな こども に も みせて くに の ひらけ すすむ を たすくる ため ふたつ に は わが くに は ことばまなび の くに なれ ば かず おほく して まなび がたき からのもじ は なく て も ひらがな 五十じ さへ あれ ば よろづ の こと に すこし も さしつかへ なき こと を あまねく ひとびと に しらせ この のち おほひ に わが くにことば の がくもん を おこす ため に すり

いだす　しんぶん　なれ　ば……」

うれしいではありませんか。彼はこれを無代でくばつたほど熱心でありましたが、内容が高尚すぎてゐたなどのため、ながく續きませんでした。この前島密の指導のもとに生れたのが、報知新聞の前身たる郵便報知新聞です。その注意もあつたからでせう。當時は大變やさしい書き方をしました。けれども何分そのころの記者や投書家は、漢文くずしのむづかしい文章を書いたため、文字の制限は出來ませんでした。發刊の翌年の明治六年に日刊にあらためましたとき三千百二十字でありましたものは次第に增して明治十年一月には一萬九千六百七十六字となるほどでした。これには文字の豐富なのが大新聞であるとおもはれてゐたといふ時代の現れもあつたのでせう。福澤諭吉先生なども漢字を用ふることをなるたけ避け、有名な『文字の教』も、用ひてゐる漢字は千に足らないといふほど注意されたものです。矢野文雄氏も明治十九年に洋行から歸られて、新聞を普遍化する眼目のもとに、『三千字引』をつくられたほどです。考へれば、前島氏といひ矢野氏といひ報知關係の人たちが漢字制限を主張されたのは奇しき緣とでも申すべきでせう。前の編輯局長の高田知一郎君もこの點には非常に熱心でありました。不斷の研究と努力とをもつて、大正十二年四月に工場でつかふものを二千五百字に減じ、大正十三年一月には文部省の臨時國語調査會の常用漢字千九百六十一字より多きこと三十三字、千九百九十四字にしました。この空氣は各新聞社の間にも擴がりました。大阪朝日新聞や大阪毎日新聞も力を入れ、東京各紙も一つしよになつて調査し、大正十四年六月一日共同宣言をして、單字として二千百八字振り假名付として三千百十一字とすることにしたのです。けれども、問題は廣告に用ふることを、廣告を出す得意先きで承知しないものがありますため、うまくゆかなくなつたやうです。また、記者が無頓着であるため、漢字の制限されてゐることに構はず書きますため、假名にしては讀み下しにくいことがあります。また、連結してゐる何の一字なり二字なりを假名とする――たとへば魑魅の魑の字がないためち魅とするなども、讀者から來る苦情です。書く方で注意してくれれば防げることですが、うまくゆきません。『躊躇逡巡』とするより『ためらう』と假名で書く方がよく分るぢやありませんか。『疲弊困憊』とするよりも『つかれる』とする方がよいぢやありませんか。けれども私たちの力が足りないのでせう――私は二度目の外遊後もこの事を心掛けてみたのですが、どうにもなりません。高田君や簑浦君とともに震災後優勝な立場にあつたときは、可なりこの方面の運動に努めましたが、たゞ大勢をつゞくつ

たといふ以外に誇るべきものはありません。――ついでに申しますが、漢文くづしを口語體に改めたのは、やはり高田君などの努力であつたといひ得るでせう。今日のやうに新聞の全面が口語體となりましたのは、まだ數年にしかなりません。私の新聞事業にはいりましたころは、一面のうちに文章體でするものと口語體でするものと交ぢつてゐたのです。雜居制です。はじめ高田君は、この仕事を外國電報から手をつけたのです。『何々せり』を『何々した』といふやうに、たゞ文尾だけをなほす程度のものでした。そしてこのことがうまくゆくやうになつたのは――高田君の話によると――國際通信社の佐藤顯理君の力によるとのことです。佐藤君が、高田君のやり方をよいとして、各社へ渡すものを口語體に改めて出してくれたのです。けれども各社では、まだ海外電報の文章體に慣れてゐますから、一々國際通信社から來るものを書き改めて出したのです。從つて苦情をうけましたが、佐藤君は頑として應じなく通してしまつたのです。かやうにして、とう／＼全部が口語體になつたのです。――震災のとき陸軍の公報を貼り出しましても、避難民はそれを見ずして新聞の報道の方に集まつたといふのは、一つに陸軍公報が漢文體で書いてあつたからだといはれてゐるではありませんか。――假名問題は、新聞論のみでなく、一般文化の問題です。私は漢字を知る間に、『いろは』で學問の内容を知りたといふのです。漢字は覺えるに骨が折れます。忘れます。蕪村が、學問は尻からぬける螢かな』といはれましたが、その學問は漢學であり文字を知ることである意味において、切實に感じます。漢字を覺えた國の對支外交が歐米諸國の對支外交よりまづいなどは、世界の笑ひものです。私は、この根本論から教育の醇化を說き、新聞の革新を主張してゐるのです。そして漢字を學ぶことは、ヨーロッパやアメリカの學者がグリークやラテン語を學ぶ程度にせよといふのです。捨てるのではありません。また第二義の生活のために書を習つたりすることも、決して惡るくありません。心を養ふためにもなりませう。問題は第一義の生活――知を得、用を便ずるうへのことにあるのです。ローマ字もよいのですが、差し當りは何人も知つてゐる假名本位がよいと思ひます。孔子のいはれた『朝に道を聞けば夕べに死すとも可なり』は、貴い言葉です。貴い内容をもつてゐます。しかも『あしたにみちをきけば、ゆうべにしすともかなり』と假名で書いても說き得られるではありませんか。　要するにこの問題を解決しなくては、新聞の改進は出來ないでせう。これはとくにかある大新聞に要求します。[illegible]といふ文字を作るひまに考へていたゞきたいことです。とくに大新聞にの

ぞむわけは、餘裕をもつてゐる新聞でなくては出來ないからです。新工夫をしたゝめ諸者の苦情も出るでせうし――それを通すためには多少の發行部數にもひゞくことを犧牲にしてやらねばならぬからです。しかも、小欲的な十三段制をすることよりも、不合理な漢字を制限することのどんなに將來經濟的のものとなるかを考へられたならば、私の主張の亂暴でないことを知られるでせう。――たゞ私自身は力が足らずして、今日におよびましたことを悔ゆるのみです。

四

新聞について『經濟的』などといふ言葉は、讀者としては、何と六くそぐはないやうに感ぜられるかも知れません。新しい讀者を得るために、むやみに新聞を投げ込むではありませんか。どえらい金をかけて宣傳をするではありませんか。宏壯な建築もするではありませんか。澤山の人を使ひ、文字の煩ひなどに頓着なく大規模の工場を動かしてゐるぢやありませんか。かゝる澤山の人と澤山の活字と發行部數に不釣合な大工場とは、どうしてやつてゆけるのでせうか。解し難いのは、新聞のフトコロでせう。しかも新聞の經營をうまくやつてゆくのでなければ物質的に惠まれるやうにならなければ、新聞人の向上も出來ないといふことを先きに申しましたが、一體新聞のソロバンは、どうなつてゐるでせう。

新聞社へはいるお金は、新聞を讀者に賣つて戴く『販賣收入』と、新聞紙面を廣告利用者に賣つてもらふ『廣告收入』とより外にはありません。副業收入は別です。半期半期が過せないといつて實業家などにネダつてやつてゆくといふ本格外のものは論外です。そして販賣收入でも廣告收入でも、いづれでもかまひませんが、ヨーロッパやアメリカの新聞は、多くの發行部數を出して、廣告料をウント取つてゆくといふやりくちで進んでゐます。すなはち、よく賣れるだけ――讀者の多いだけ――廣告力があるからです。アメリカなどでは一日分何十ページにもなる一と束の新聞を五セントぐらゐで賣つてゐるものもありますが、つまりは巨額に上る廣告收入によつて辻つまを合せるどころか、多額の利益を生んでゐるわけです。わが國でも大きい新聞になるほど、廣告收入の方が增してゆき、次第にその開きを生ずる傾向があります。尤もその割合がいくらになるかは、各社の決算報告では明かにしてゐるものは少ないです。國民新聞の昭和四年度上半期は三十一萬圓の缺損を示してゐますが、その販賣收入は六十三萬六千圓で、廣告收入は四十四萬九千圓です。大新聞の型としては、變態ではないかと思ひます。大阪朝

日新聞の決算報告は、營業收入として千四百五十二萬四千餘圓（前年同期千三百二十四萬五千餘圓 前年下半期千三百五十八萬二千餘圓）となつてゐますが、販賣廣告兩收入の區分はありません。大阪每日新聞も報知新聞も區分して發表しません。けれども、大阪新聞も、この營業收入を東京と大阪の双方に分ち、販賣收入と廣告收入とに分ち、六で割つて一ヶ月分の販賣收入がわかれば、一部の實際の賣代で割つてみますれば、いはゆるその社の發行部數も推定し得られるわけです。とにかく小さい新聞は、新聞紙を賣つて收入の重なるものとしてゐますが、これがまた大新聞の讀者勸誘のために押されて、安く賣らねばならぬやうな破目に陷らないともかぎりません。それにしても、新聞代は、いくらにしたらよいでせうか、私は、かういふ懺悔話をもつてゐます。

震災で燒け殘つた報知新聞は、漸く九月の五日になつて、不完全ながらも定期刊行の運びとなり、はじめは夕刊だけを出しましたが、ゆく〳〵は朝刊（十八日より出してゐます）も出すやうに努むるとともに、十日には定價を發表しなければならなかつたのです。私はページは少ないが、コストもかゝつてゐますから、九月分から月八十錢にしようと胸算用をして大森の家を出たのです。行きがけに三木善八の意見も聞かうと思つてたづねますと、やつぱり私と同意見です。しかし社へ出て箕浦營業局長の案を叩いてみると——六十錢にしなければいけないといふのです。この際の伸長力を主として考へれば、いくらコストがかゝつたとて、常時の八十錢にするのは常道でないといふのです。東京日々新聞からも、この問題について話があつたが協調してゆかないことにしたと報告されました（この事が何かの行き違ひであつたのでせう——東京日々新聞の方が報知新聞より定價を高くしたために困つたのです）。とにかく私は迷ひました。時計を見ると發表すべく豫定された夕刊の〆切時間に少しの餘裕がありましたので、急いで常時病床にあつた大歳彌太郎氏の意見をも徴してみやうと、青山一丁目裏通りの宅に自動車を走らしたのです。彼の名はジミな新聞販賣界にしか知られてゐませんが、日本の新聞界の老先輩です。三木善八の片腕となつて、日露戰爭後の報知新聞を發展せしむべく、各地に（一時は鹿兒島にまで）支分局と申す本社の支店組織をつくつた人です。新聞販賣の型は、彼の創案によるものが少なくなく、帳簿の樣式なども、いまに彼の案が各社につかはれてゐるとのことです。——私は私たちの意見を交へずに、「いくらにするか」とたづねたところ、しばらく考へてゐたが、「六十錢にきめてはい」申します。箕浦君と符節を合せてゐるではありませんか。それで

私の腹もきまりました。私は『よし』と答へて自動車に乘るべく彼の家を辭しました。彼は私の制するのも聞かず、ヨタ〳〵と往來まで送つて來てくれます。私は急ぎ足のうちにも『六十錢だネ』と聞ます。彼は『さうです』といふ。『いまの四ページが八ページとなり十ページとなつてもだネ』と聞きますと、『さうです』と答へる。そして乃木さんのお墓のあたりで別れました。――私は觀察を誤つたのです。この箕浦君の案がよかつたからこそ、ノンキナトウサンとか活き〳〵した紙面と相まつて、名實ともに『報知第一』を天下に誇ることが出來たのです。――その後各紙の間に定價賣りを勵行することとカラんで、一時は非賣にまでされようとしました。同じやうな關係は時事新報に對しても起り、世間を騷した新聞事件となつたのです。

かうした新聞の値段についておもしろいことは、昨年の夏パリで新聞界を騷がした事件です。――それは香水の名で世界的に知られてゐるコッティ氏の經營下にある新聞に事を發します。彼は巨萬の富をもち、フヒガロー紙を經營してゐます。フヒガロー紙は、數年前その主筆により當時の大藏大臣カイヨー氏がひどく叩かれたのを、その細君が恨んでピストルで殺しました――しかし昨年陪審裁判で無罪となつてこれも評判――といふ血なまぐさい事件をもつてゐる新聞です。コッティ氏は、この硬派の新聞に對して、一般むきのもう一つの新聞を出すことにしたのです。名をラミ・ド・ポュープル(國民の友)と申します。その値を一般のものよりズンと安く、五サンチームにして賣り出したのですから、他の新聞紙は競爭上やりきれません。そこで諸新聞は聯盟をつくつて「國民の友」紙の非賣を企て、新聞賣臺(キヨスクと申します)では賣らないことにしたのです。」そして次のやうな宣言を發表したのです。たど〳〵しい譯(大意)をゆるして下さい。

○新聞の自由のために

數日來パリその他フランスの主要都市で貼り出されてゐるビラは、パリの一新聞とフランス新聞社團との間に起りました爭議について、公衆に新聞紙の賣價のいづれが正しいかを判斷していただきたいことにあるのです。しかもその判斷には新聞の計算をよく點檢してからでないと分りません。――戰爭前における新聞紙の代は五サンチームで、當時の用紙代は百キロ二十八フランから三十フランでありインキ代は一キロ〇・四五フランであつたのです。戰後の今日は新聞紙代は二十五サンチームになり、用紙代は百八十フランでインキ代は三・二五フランになつてゐるのです。すなはち新聞紙の賣價は五倍にしか增してゐませんが、用紙代は六倍インキ代は七倍にものぼり、印刷職工

は協定によつて生活費指数を標準として支拂はれ、一般經費は五倍に增し、税金は二十五倍以上になつてゐるのです。しかも一面に廣告は料金を增さず、最も人氣のある新聞でさへ三倍から四倍の增加にすぎません。だから新聞の賣價を二十五サンチームにしておくことさへも苦しいのです。世界にない安い値段です。これをさらに安くすることは、新聞の商業的經營を通常かつ獨立の狀態の下においてすることを不可能ならしめるものです。——一體公衆に二十五サンチームで賣つてゐますが本社が販賣委託店に卸すにはパリでは二十サンチーム地方では十七・五サンチームになつてゐます。しかるに六ページの新聞の元價は最も發行部數の大きい新聞でも一部二十サンチームを超過してゐます。そのうへに配達運送費もかゝるのです。だからパリで五サンチーム地方で七サンチーム半で卸すことが出來ませうか。このために一日二十萬部の發行部數をもつものは年額千五百萬フラン以上を、最大日刊紙は年額七千萬フラン乃至一億フランを損することになります。公衆はよく考へていたゞきたいのです。これは國民の獨立の根本的條件であるフランス思想界の自由に關聯することであるからです。かういふことが出來れば、財界の有力者や外國政府でも、フランスの思想を獨占左右することゝなり、新聞の自由は沒却され、十五萬人にもおよぶ記者と社員と新聞勞働者とは失業することになるかもしれません。公衆はよくこゝを察してもらひたいのです。

この文を讀みますと、新聞の元價とか、用紙代とインキ代との關係などもわかります。ことにフランスの新聞は、經營關係が比較的日本の新聞の事情に似てゐますから、よく調べられると、何かの參考にならうかと思ひます。それにしても『新聞の自由のために』といふのは、おもしろいではありませんか。けれどもこの運動は、昨年私がパリーを去つた八月ごろは失敗しかゝつてゐたやうです。その後のことは注意してゐません。それに儉約とソロバンの細いのとはフランス人の表象ですもの——『ラミ・ド・ポープル』を一年とれば、他の新聞をとるときよりも靴が二足も買へるといふ女房たちのいふところでもわかるからです。また實際に新聞を多く賣つて、高い廣告料をとつて埋めてゆくといふアメリカ式經營法からいへば、お笑ひ草です。けれども私がフランス滯在中は同紙は廣告料もおけませんでした。むしろ安くして收容量を多くするやうにしてゐたやうです。

それはさておいて、現在わが國における新聞の販賣方法はどうなつてゐるかといふと、三つの方式によつて行はれてゐます。その一つは、本社の計算のもとに、新聞を配達し新聞代を集金さしてゐる「何々新聞支局」とか分局といふもの——いはゞ支店

私の服もきまりました。私は『よし』と答へて自動車に乗るべく彼の家を辭しました。彼は私の制するのも聞かず、ヨタ／＼と往來まで送つて來てくれます。私は急ぎ足のうちにも、『六十錢だネ』と聞ます。彼は『さうです』といふ。『いまの四ページが八ページとなり十ページとなつてもだネ』と聞きますと、『さうです』と答へる。そして乃木さんのお墓のあたりで別れました。

――私は觀察を誤つたのです。この箕浦君の案がよかつたからこそ、ノンキナトウサンとか活き／＼した紙面と相まつて、名實ともに『報知第一』を天下に誇ることが出來たのです。――その後各紙の間に定價賣りを勵行することとカランんで、一時は非賣にまでされようとしました。同じやうな關係は時事新報に對しても起り、世間を騷した新聞事件となつたのです。

かうした新聞の値段についておもしろいことは、昨年の夏パリで新聞界を騷がした事件です。――それは香水の名で世界的に知られてゐるコッティ氏の經營下にある新聞に事を發します。彼は巨萬の富をもち、フヒガロー紙を經營してゐます。フヒガロー紙は、數年前その主筆により當時の大藏大臣カイヨー氏がひどく叩かれたのを、その細君が恨んでピストルで殺しました――しかし昨年陪審裁判で無罪となつてこれも評判――といふ血なまぐさい事件をもつてゐる新聞です。コッティ氏は、この硬派の新聞に對して、一般むきのもう一つの新聞を出すことにしたのです。名をラミ・ド・ポョーブル（國民の友）と申します。その値を一般のものよりズンと安く、五サンチームにして賣り出したのですから、他の新聞紙は競爭上やりきれません。そこで諸新聞は聯盟をつくつて「國民の友」紙の非賣を企て、新聞賣臺（キョスクと申します）では賣らないことにしたのです。そして次のやうな宣言を發表したのです。たど／＼しい譯（大意）をゆるして下さい。

○新聞の自由のために

數日來パリその他フランスの主要都市で貼り出されてゐるビラは、パリの一新聞とフランス新聞社團との間に起りました爭議について、公衆に新聞紙の賣價のいづれが正しいかを判斷していただきたいことにあるのです。しかもその判斷には新聞の計算をよく點檢してからでないと分りません。――戰爭前における新聞紙の代は五サンチームで、當時の用紙代は百キロ二十八フランから三十フランであり、インキ代は一キロ〇・四五フランであつたのです。戰後の今日は新聞紙代は二十五サンチームになり、用紙代は百八十フランでインキ代は三・二五フランになつてゐるのです。すなはち新聞紙の賣價は五倍にしか增してゐませんが、用紙代は六倍インキ代は七倍にものぼり、印刷職工

は協定によつて生活費指數を標準として支拂はれ、一般經費は五倍に增し、稅金は二十五倍以上になつてゐるのです。しかも一面に廣告は料金を增さず、最も人氣のある新聞でさへ三倍から四倍の增加にすぎません。だから新聞の賣價を二十五サンチームにしておくことさへも苦しいのです。世界にない安い値段です。これをさらに安くすることは、新聞の商業的經營を通常かつ獨立の狀態の下においてすることを不可能ならしめるものです。――一體公衆に二十五サンチームで賣つてゐますが本社が販賣委託店に卸すにはパリでは二十サンチーム地方では十七・五サンチームになつてゐます。しかるに六ページの新聞の元價は最も發行部數の大きい新聞でも一部二十サンチームを超過してゐます。そのうへに配達運送費もかゝるのです。だからパリで五サンチーム地方で七サンチーム半で卸すことが出求ませうか。このために一日二十萬部の發行部數をもつものは年額千五百萬フラン以上を、最大日刊紙は年額七千萬フラン乃至一億フランを損することになります。公衆はよく考へていたゞきたいのです。これは國民の獨立の根本的條件であるフランス思想界の自由に關聯することであるからです。かういふことが出來れば、財界の有力者や外國政府でも、フランスの思想を獨占左右することゝなり、新聞の自由は沒却され、十五萬人にもおよぶ記者と社員と新聞勞働者とは失業することになるかもしれません。公衆はよくこゝを察してもらひたいのです。

この文を讀みますと、新聞の元價とか、用紙代とインキ代との關係などもわかります。ことにフランスの新聞は、經營關係が比較的日本の新聞の事情に似てゐますから、よく調べられると、何かの參考にならうかと思ひます。それにしても、「新聞の自由のために」といふのは、おもしろいではありませんか。けれどもこの運動は、昨年私がパリーを去つた八月ごろは失敗しかゝつてゐたやうです。その後のことは注意してゐません。それに儉約とソロバンの細いのとはフランス人の表象ですもの――『ラミ・ド・ポープル』を一年とれば、他の新聞をとるときよりも靴が二足も買へるといふ女房たちのいふところでもわかるからです。また實際に新聞を多く賣つて、高い廣告料をとつて埋めてゆくといふアメリカ式經營法からいへば、お笑ひ草です。けれども私がフランス滯在中は同紙は廣告料もおけませんでした。むしろ安くして收容量を多くするやうにしてゐたやうです。

それはさておいて、現在わが國における新聞の販賣方法はどうなつてゐるかといふと、三つの方式によつて行はれてゐます。その一つは、本社の計算のもとに、新聞を配達し新聞代を集金さしてゐる「何々新聞支局」とか分局といふもの――いはゞ支店

私の腹もきまりました。私は『よし』と答へて自動車に乗るべく彼の家を辭しました。彼は私の制するのも聞かず、ヨタ／＼と往來まで送つて來てくれます。私は急ぎ足のうちにも、『六十錢だネ』と聞ます。彼は『さうです』といふ。『いまの四ページが八ページとなり十ページとなつてもだネ』と聞きますと、『さうです』と答へる。そして乃木さんのお墓のあたりで別れました。――私は觀察を誤つたのです。この箕浦君の案がよかつたからこそ、ノンキナトウサンとか活き／＼した紙面と相まつて、名實ともに『報知第一』を天下に誇ることが出來たのです。――その後各紙の間に定價賣りを勵行することとカラんで、一時は非賣にまでされようとしました。同じやうな關係は時事新報に對しても起り、世間を騷した新聞事件となつたのです。

かうした新聞の値段についておもしろいことは、昨年の夏パリで新聞界を騷がした事件です。――それは香水の名で世界的に知られてゐるコツティ氏の經營下にある新聞に事を發します。彼は巨萬の富をもち、フヒガロー紙を經營してゐます。フヒガロー紙は、數年前その主筆により當時の大藏大臣カイヨー氏がひどく叩かれたのを、その細君が恨んでピストルで殺しました――しかし昨年陪審裁判で無罪となつてこれも評判――といふ血なまぐさい事件をもつてゐる新聞です。コツティ氏は、この硬派の新聞に對して、一般むきのもう一つの新聞を出すことにしたのです。名をラミ・ド・ポープル（國民の友）と申します。その値を一般のものよりズンと安く、五サンチームにして賣り出したのですから、他の新聞紙は競爭上やりきれません。そこで諸新聞は聯盟をつくつて「國民の友」紙の非賣を企て、新聞賣臺（キヨスクと申します）では賣らないことにしたのです。そして次のやうな宣言を發表したのです。たど／＼しい譯（大意）をゆるして下さい。

○新聞の自由のために

數日來パリその他フランスの主要都市で貼り出されてゐるビラは、パリの一新聞とフランス新聞社團との間に起りました爭議について、公衆に新聞紙の賣價のいづれが正しいかを判斷していただきたいことにあるのです。しかもその判斷には新聞の計算をよく點檢してからでないと分りません。――戰爭前における新聞紙の代は五サンチームで、當時の用紙代は百キロ二十八フランから三十フランでありインキ代は一キロ〇・四五フランであつたのです。戰後の今日は新聞紙代は二十五サンチームになり、用紙代は百八十フランでインキ代は三・二五フランになつてゐるのです。すなはち新聞紙の賣價は五倍にしか增してゐませんが、用紙代は六倍インキ代は七倍にものぼり、印刷職工

は協定によつて生活費指數を標準として支拂はれ、一般經費は五倍に增し、稅金は二十五倍以上になつてゐるのです。しかも一面に廣告は料金を增さず、最も人氣のある新聞でさへ三倍から四倍の增加にすぎません。だから新聞の賣價を二十五サンチームにしておくことさへも苦しいのです。世界にない安い値段です。これをさらに安くすることは、新聞の商業的經營を通常かつ獨立の狀態の下においてすることを不可能ならしめるものです。——一體公衆に二十五サンチームで賣つてゐますが本社が販賣委託店に卸すにはパリでは二十サンチーム地方では十七・五サンチームになつてゐます。しかるに六ページの新聞の元價は最も發行部數の大きい新聞でも一部二十サンチームを超過してゐます。そのうへに配達運送費もかゝるのです。だからパリで五サンチーム地方で七サンチーム半で卸すことが出來ませうか。このために一日二十萬部の發行部數をもつものは年額千五百萬フラン以上を、最大日刊紙は年額七千萬フラン乃至一億フランを損することになります。公衆はよく考へていたゞきたいのです。これは國民の獨立の根本的條件であるフランス思想界の自由に關聯することであるからです。かういふことが出來れば、財界の有力者や外國政府でも、フランスの思想を獨占左右することゝなり、新聞の自由は沒却され、十五萬人にもおよぶ記者と社員と新聞勞働者とは失業することになるかもしれません。公衆はよくこゝを察してもらひたいのです。

この文を讀みますと、新聞の元價とか、用紙代とインキ代との關係などもわかります。ことにフランスの新聞は、經營關係が比較的日本の新聞の事情に似てゐますから、よく調べられると、何かの參考にならうかと思ひます。それにしても、新聞の自由のために』といふのは、おもしろいではありませんか。けれどもこの運動は、昨年私がパリーを去つた八月ごろは失敗しかゝつてゐたやうです。その後のことは注意してゐません。それに儉約とソロバンの細いのとはフランス人の表象ですもの——『ラミ・ド・ポープル』を一年とれば、他の新聞をとるときよりも靴が二足も買へるといふ女房たちのいふところでもわかるからです。また實際に新聞を多く賣つて、高い廣告料をとつて埋めてゆくといふアメリカ式經營法からいへば、お笑ひ草です。けれども私がフランス滯在中は同紙は廣告料もおけませんでした。むしろ安くして收容量を多くするやうにしてゐたやうです。

それはさておいて、現在わが國における新聞の販賣方法はどうなつてゐるかといふと、三つの方式によつて行はれてゐます。その一つは、本社の計算のもとに、新聞を配達し新聞代を集金さしてゐる『何々新聞支局』とか分局とかいふもの——いはゞ支店

組織によるものです。つぎは新聞を賣ることを業としてゐるもの――いはゆる『新聞屋』によつて賣られるものです。これを新聞賣捌店と申します。その三は、ステーションとか四つ辻などで直接讀者に賣つてゐるものです。分業の原則からいへば賣捌店本位でよいわけですが、それは各種の新聞を取り扱ふのが普通ですから、うまくゆかないことがあります。甲の新聞社からその新聞の讀者を增してくれといへば、手許にある乙の新聞をへらしてゆくといふことも出來るのですから、この場合の乙紙はやりきれません。そこへゆくと支分局は、本社單獨の新聞紙を賣り、手足も整つてゐますれば自由になるわけです。これがこの制度を創設した報知新聞の强くなつた一つの原因です。また、先年競爭社のために賣捌店の非賣のあつた時も、それほどに感じなく、時事新報非賣の時も、お助けすることが出來たのも、支分局制度の力であつたのです。――この支分局員は一般の社員とちがつて、忠實な者は女房子供を手傳はさして一家として仕事をやつてゆくことになります。若い元氣の者であり、人手の足らない時は、自分が先きに立つて配達に出るといふようなものはよいのですが、古くなるといけません。惡くすると集まつた金を、自分の家族の病氣の時に費はれたり、子供の學校費に廻されて、本社へはロクに金も入らず困りぬく事があります。だから、その點をよく考へねばいけません。つまり、支局も仕切り替の煩はしさがあるわけです。私は、かういふ意味で、將來新聞販賣について注意すべき事は、いはゆる呼び賣制度ではないかと思ひます。現在も東京市内など、本社から毎日卸し受けて、それ〴〵の繩張りに賣つてゐる者もありますが、總數にしては少く、新聞の大部分は、家庭なり事務所なりに屆けられてゐるのです。けれども、ヨーロッパなりアメリカに於ては、ニュスタンドとかキヨスクにて賣捌かれるのが本則となつてゐます。もちろん全部が出先きで買はれるといふのではありませんが、大部分の讀者は、路傍の小店で買はれるのです。さうすれば、新聞社としては、配達なり集金なりに要する費用を節し得るわけです。しかも、その額は決して少ないものではありません。このことは、買手たる讀者としても考ふべきことです。否、讀者からも、その習性をつくつていたゞきたいとおもふのです。丁度買ひものを「御用き」によつて自宅に屆けてもらふことが不經濟なのと同じです。なほ現在の配達は、東京などにおいては苦學生によつてやられてゐるものが多いのですが、新聞が迅速に正確に讀者の手もとに屆けねばならぬといふ立て前へからしますれば專門の職業としなければよい效果を得られるものでないことを思ふと、しかもそれには更に經費もかさんで來ることを

考へると、やがては行き詰りを生ずるのではありますまいか。また廣告利用者は發行部數のことを注意してゐますが、現在のやうでは確かな見當もつけられません。それがニユスタンド本位となれば、これを知る便宜もあるわけです。外國では新聞紙の發賣部數は、さうして公表されてゐるのです。また、さうなれば、先月文藝春秋で菊池寛君が新聞の押し賣りの横暴なことを訴へてゐましたやうなことも防ぎ得るわけです。私は、いつになつたらさういふときが來るであらうかと――區劃整理で廣く明るくなつてゆく東京の町々の四つかどをながめたり、丸ビルなどの入口で夕刊の積み累りが吸ひ取られてゆくさまなどをながめて――時來れと待つてゐるのです。

私は、ヂミな話であるが、かうした販賣關係について、申すべき澤山のことをもつてゐます。けれどもこゝには、さきの震災當時の新聞賣價決定の不明と、あの際に思ひ切つた積極主義に出るやうに努力しなかつたことを悔ゆるにとゞめておきます。

五

よい新聞をつくります。賣れます。賣れる新聞に事業なり商品を廣告しようとする――そこに新聞社への廣告料が流れ込んで來るのです。廣告には、日本のやうに死亡のためなどの儀禮に關するのや、新聞社が創立何年になるから祝つてくれといふやうな寄附變態の廣告もありますが、それは不時のものであり、また褒めたことではありますまい。新聞社も大きい口は開けないわけです。廣告の本格として問題となりますのは、利用價値を生むものです。それは概して經濟界が繁榮するときに多いわけです。尤も不景氣のときも、廣告しなければ更に商賣などがうまくゆかなくなりますが、景氣のときとは利用する程度がちがひます。かつては化粧品の廣告が多く出ると、世のなかが不景氣だと申されたものです。この種類の廣告は大量を掲載しますから、また新聞社としてはこれがなくては安心して廣告紙面を埋めてゆくことが出來ませんから、安い値で契約してゐるからです。事業廣告など申込みが少ないときは自然さういふ廣告も增して來るからです。それはさておいて、廣告は利用價値をネライとしてゐますが、果してその效果を生み得るかは、むづかしいものです。アメリカのチエーズ氏の「無駄の悲劇」といふ興味ふかい本のなかに、アメリカにおける最近の廣告費について、エドワード・ボック氏の調査としてアトランチック・モンスリーに發表したものをかゝげてゐます。その年額は十二億八千四百萬ドルで、その內譯は、かうなつてゐます。單位はドルです。

新聞紙……………………………………六〇〇、〇〇〇、〇〇〇
直接廣告(郵便、撒紙など)……………二〇〇、〇〇〇、〇〇〇
雜誌……………………………………一五〇、〇〇〇、〇〇〇
商業紙……………………………………七〇、〇〇〇、〇〇〇
農業紙……………………………………二七、〇〇〇、〇〇〇
掲示場……………………………………三〇、〇〇〇、〇〇〇
小說類……………………………………三〇、〇〇〇、〇〇〇
デモンストレーション…………………二四、〇〇〇、〇〇〇
窓飾………………………………………二〇、〇〇〇、〇〇〇
ポスター…………………………………一二、〇〇〇、〇〇〇
市街車臺…………………………………一一、〇〇〇、〇〇〇
活動寫眞……………………………………五、〇〇〇、〇〇〇
プログラム…………………………………五、〇〇〇、〇〇〇

なほ、著者はかういふことをいつてゐます「一體に廣告する人たちは、人間の羞恥、臆病、恐怖、虚榮、好奇（とくに性慾的な）、疑惑、母性愛といつたやうな弱點につけこんで廣告の效果をおさめようとするものです。千九百二十三年十月中のニューヨークの高架鐵道内の四十五種の廣告と、千九百二十三年十一月中のハーツのインターナショナル・マガジンに掲げられた百十六種の廣告と、同月中のスマート・セット・マガジン中の八十一種の廣告をネライどころによつて分類してみますと（中もありますが略します）——虚榮が三十九、羞恥が二十三、性的好奇が十七、疑惑が十七、恐怖が八、見えすいたゴマか(Palpably false)が四十四、有害品(タバコを含まず)が二十八となります」……と。何とおもしろい見方ではありませんか。新聞記事を呪ふ人たちよ。同じ紙面のなかに、かうした廣告のあるのを知らないですか。私は婦人雜誌や出版廣告にまでかうしたことの比較すべきものを多くもつてゐる日本の新聞の將來を心配せざるを得ないのです。——さういふ新聞廣告改善のことは別として、一體廣告なるものは紙上の面積の賣買ですから廣告を出す方でも、これを載す方でも、同格でよいわけです。が、事實は廣告を出す方が強いのです。シンクレーア氏のいふやうに、アメリカなどでは新聞社の方が引づられてゐます。つまり新聞は、實業家なり資本家なりの自由になるといふのです。現在の日本の新聞は、それほどではないと思ひます。けれども先きに申しましたやうな記念廣告などで、泣きついてもらふ廣告も少なくなく、經濟の發達するにつれて、やつぱり引づられることになるではないかと思ひます。強大な新聞でありましても、その例にもれず、たゞ弱いものに對して横暴をきはめるといふ現狀も、やがて本則でなくなるであらうと思ひます。いづ

れにするも困つたものではありませんか。

私は廣告についての思ひ出も、少なくありません。發行部數の如何は廣告力に反映するものであると申しましたが、いはゆる廣告信用力の生ずるには相當の年月を要するものです。(何かのことで、その新聞の人氣が落ちて廣告料率が下つたときも、二度これを引上げるには二十年もかゝるといはれてゐます。私は、さうまでしなければ廣告料率をあげ得ないものを、震災のために發行部數の激增したお影で一躍帝都第一のものとすることが出來たことを思ひ出し、今日の實狀を見て、感慨に堪えないものがあります)。いまこゝに創刊した新聞があるとしまして、それが百萬部を發行なり發賣してゐましても、永年の間百萬部を出してゐる新聞とは、その信用力がちがつてゐるからです。從つてその年數關係——シニセ關係——を基本において考へねばなりません。そして發行部數がわかつて來ますと、それに一定の係數を乘じますとその社の廣告收入がわかります。その係數は大中小の新聞に分けて見ます。私は地方の新聞を見まして、發行部數の確からしさを見極めてから、廣告收入は一ケ月このくらゐでせうといふて圖星を指したことは二三回あります。ですから、反對に廣告收入がわかつてゐますれば、その社の發行部數も割り出され得るわけです。——しかし、發行部數そのものの確らしさは、なか〳〵わかりませんが、推定によつて地方へ送らるるものは、各縣における所帶を知ることが出來ます。また、支店組織による支分局の數と配達の人員の數も參考になります。一配達人の持ち得る最大量は、むかしは二百部見當と見たものですが、朝刊などはページも增して來ましたし迅速にやらねばなりませんから、市街地では百五十部以上はなか〳〵むづかしいであらうかと思ひます。また新聞社に持ち込む用紙の量も——毎日平均してゐませんから一ケ月分を調べると參考になります。もちろん、かうして見たものは印刷部數なり發送部數であつて、本當の讀者を知る發賣部數は、それより少ないものになります。——それにしても、大阪系新聞の如き力を得たものは、自信をもたれるならば、讀者なり廣告主なりに納得されるやうな方法で、發行部數を發表されたら、どうですか。それは新聞經營道德です。なほわが國の新聞は、總じてみづからの新聞の宣傳に足りないではないかと思ひます。ヨーロッパやアメリカには、みづからの新聞の立派な宣傳部があり、新聞みづからの廣告もしてゐます。とくに、選擧の記事についてかういふ努力をしてゐるとか、運動記事について特殊な注意を拂つてゐるとかいふやうに、そのとき〴〵の記事の特殊性もしくは迅速性を旨としてゐます。ポスターも出せば、自動車の

車掌にも貼れば、他の新聞にも廣告します。また、"How to Read the New York Times" といふやうなパンフレットも分ちます。私なども、報知新聞の宣傳のために「今日の新聞」といふものを作つて見ましたが、まだ充分でありません。大阪毎日新聞も大阪朝日新聞も、かういふ方面では徹底した宣傳をしてゐないやうにおもはれます。時事新報の「日本一」も、折角擴がつた言葉ですから、もう一と奮發されたら、どうですか。私のから申すのは、新聞が本來の面目に向つて働かれる意味においてのことです。「宣傳」といふ言葉を「ホラ」の代名詞とするやうな意味で申すのではありません。とにかく良い新聞を作る根性と底力ある宣傳がなくては、讀者だつて廣告主だつて承知するものですか。――尤も先きにも申したとほり、わが國の經濟力は弱いのですから――その發達がにぶいのですから、新聞事業としては苦勞の多いことであらうと思はれます。とくに地方新聞紙が伸びてゆくうへにも、東京大阪紙などの地方版が財源を得て獨立してゆくうへにも、地方そのもの、經濟力が弱くて廣告を出す力の乏しいことは殘念です。わが國の新聞に特に多い出版廣告は、變態ではないでせうか。言葉の廣告になるラヂオは無代でやり、知識(?)の文字による廣告は高い代金を取り、廣告收入の少なからざる部分を占めてゐるからです。私は、大きい廣告がキライで小さい廣告がすきだと申しましたが、それは小さい廣告を出さねばならぬ人たちは、經濟力が乏しく、しかもなか〱有用なものが多いからです。大きい地主に對して小さい地主、大きい家屋に對して小さい家屋――それは保護すべきのが近代の道理と見るべきではないのでせうか。この意味において案内廣告は、私の意を得たものです。あれも、はじめて利用したのは報知新聞であつたのですが、あまり力を入れなかつたのは、落ち度です。ことに震災當時から、その收容關係について、むしろ虐待したやうな結果になつたのは、私の馬鹿のいたしたことです。これを悔ひねばなりません。今日になつてみれば、時事新報の不斷の助成と、東京日日新聞の震災後の努力は感心の至りです。とにかく、この方式の少し程度を高めた事業廣告や書籍の廣告が、よいと思ひます。さうなれば、私の先きに申した新聞タブロイド型の主張も容れられるわけです。讀者も喜び、廣告主も喜び、新聞も經濟的に紙面を用ふることになるのです。たゞ、大きい廣告を、ドギツイ惡感を催す形で出す商人と、無雜作に廣告を埋めてゆく新聞人とは、私の氣に喰ひません。しかもこの方面に對する私の努力がむくひられなかつたことを悔ひざるを得ないのです。――なほ新聞の廣告問題として殘されてゐるものは、新聞のなかへ折り込まれる

廣告です。ヨーロッパやアメリカでは例がありません。いはゞ人の船へ船頭さん(販賣店もしくは支分局)だけに諒解を得て乘せてもらふやうなものです。廣告料金の高いために出來たことでせう。そして、そのきゝめはなか〳〵あなどれません。私たちは、新聞紙をふるつて折込み廣告を落してから讀みますから何にもなりませんが、色紙など子供たちが他愛もなく弄ぶのを見ても、相當效果があると思ひます。これは、新聞紙の立場からいへば、何とか整理すべきものではないでせうか。尤も、これを折込んで配達するものは手數料を得て、それが販賣店なり支分局の收入となつてゐるのですから、問題です。たゞし、私の主張するキヨスク本位の販賣方法をとる時代が來ますれば、この問題も同時に片付くわけです。——もう一つは、高い廣告料を出した人たちがその廣告を生かすことも、デパートメントストアや大きい商店で考へたらと思ふのです。ヨーロッパやアメリカの店には、一度新聞や雜誌に出た廣告そのまゝのものを貼りつけてゐるものがあります。二重利用です。とくに商品の繪や値段が書いてあると買ひ手も助かるのです。さういふ點で日本のデパートメントストアなどは、新聞廣告の工夫が足りません。現在では、いはゆる店付きの御得意が少なからずあることなども怠けさす原因でせうが、いつまでも時代は止まつてゐません。良い品を安く買へるやうにして下さい。

六

私は、こゝに新聞の催しものについて少し書いておきたいのです。その仕事をする部門は大きい新聞には特別に設けられてゐて、報知新聞では企畫部と申し、他の新聞では事業部などといふ名がつけられてゐます。その催しには、講演とか運動競技とか展覽會とか、いろ〳〵あります。これは新聞自體の宣傳にもなるし、一般人の出來ないことをしたり、社會敎育の足しにもなるといふ意味で良いことです。私たちは、アムンゼンを迎へて講演をしたり、日米もしくは國際水泳大會をしたことなどは、聊か世のためにも盡したやうに思つてゐます。たゞベーブルーズ野球團を招かうとして思ふやうにならなかつたのは殘念です。尤もかうした新聞の企畫事業は、運動の協會などにおいて基金を得るやうになれば、將來は新聞の手を借りずにやることになり、それがまた常道であるかとも存じます。かういふ企畫事業は各社にそれ〴〵特色をもち、朝日新聞の野球とか日々新聞の巡回病院などのやうになつてゐます。そして他社のものを犯さないといふやうな不文律が各社の間にあるのは美しいこ

です。尤も先年私たちが國際水泳競技を企てたとき、他社かこれを邪魔したことがありますが、ケシからぬことです。もちろん、それは道德問題にすぎません。——いづれにするも企畫事業は、一般人にアッピールするものでないといけません。朝日新聞の歐訪飛行は、それでした。報知新聞のアムンゼンもそれでした。この點について私は、かういふ思ひ出があります。——まだ震災のホトボリの强いころ、ある日のこと私が社で働いてゐますと、雷（梅ケ谷）君がやつて來ました。巨軀を白い汚れたカスリの浴衣で包み、可愛く見ゆる手に麥ワラ帽子をもつてゐます。私は知己でも、ひいき筋でもありません。彼は地方を巡業中に震災に遇つたのですが、どうしたらよいでせうといふ相談に來たのです。私は相撲道のことは知りませんが、「やつぱり江戸でやつたらよいでせう」と申したのです。しかし彼等は名古屋で打ちました。相撲が昔日のやうに人氣がなくなりましたのは、野球などの民衆的運動の盛になつたのにもよりませうが、あゝしたときに江戸を離れたことがわるく新聞の取扱ひも冷やかになり紙面上の取扱を虐待することになつたからであらうと思ひます。そこへゆくと菊五郎君は、エライです。震災後間もないころ、踊らして下さいといつて來ました。市民の心をなぐさめたいといふのです。社内では生命と生活とにあえぐ人の多いときに、演藝などしてはどうかといふ說もありましたが、私たちは菊五郎君の說の正しいことを知つて斷行しました。日谷谷で『素襖落』をしました。なかに那須の與市が馬乘り入れて弓を放つ格好などは、いつも眼の前にちらついてゐます。民衆も燒け出された氣も忘れて喜びましたよ。心を恢復しましたよ。その後報知講堂で、『保名』をやりましたよ。菜花さく野に蝶に狂ふ彼の姿は、震災人にどれだけの心のなぐさみを與へたでせう。私は菊五郎君を愛します。

七

むかしは、お寺の經濟と新聞のやりくちとは分らないといはれたものです。けれども最近になりましては、株式會社組織による經營が多くなり、商法の命するところによる貸借對照表とか損益表とかの營業上の態樣をとらへ得る形式が發表されてゐます。それによると每期に利益をあげて積立なり配當を行つてゐますのは、ズバ拔けてゐるのは大阪系の二紙だけです。報知新聞や地方紙の數ふるばかりのものも、利益配當をしてゐますが、比較にもならず、また將來のことは何とも申しかねるといつた形です。本年四月末日を決算期とする大阪朝日新聞の狀況は、不景氣の事業界に例を見ないほどの成績です。利益金は四

十七萬九千圓で、前年同期の七十三萬六千圓にくらべては劣つてゐますが、十萬九千圓の前期繰越金があり、一割五分の配當をしたうへに、五十周記念配當を五割も行ひ、加ふるに同紀念品祭祀料從業員および縁故者に臨時交付金百萬圓を支出してゐるのです。新聞萬歳です。いままでは大阪毎日新聞（五月が決算期ですから本年の分はまだ分りません）も大體似かようた數字を示してゐました。同社は前期においては積立金は別途積立金や配當準備積立金や非常準備積立金を加へますと百五十一萬三千餘圓の多きに上つてゐるのです。これに對し大阪朝日新聞は前期の積立金（法定・退職準備・特別を合せて）は三百十萬圓、今期は三百五十三萬圓を擁するといふ強勢を示してゐます。私は新聞の永遠性を主張してゐますから、堅實第一のために積立金を多くするのはよいと思ひます。また退職基金なり積立金を豊富にしておくべきことは、失業問題の深刻なるだけに切實に感ぜられます。同時に配當をあまり多くする事は考へものと思つてゐます。否、私は配當制限論者であり、少くとも配當と退職基金とはスライデングスケールでゆくべきことを主張してゐます。株式會社といふ看板をかけてゐるからとて、配當を多くするのに何の遠慮もいるものかといふのは、私の贊成し兼ねることです。新聞事業には、その公的性質から營業收益税もかけられてゐないではありませんか。郵便電信電話鐵道など公共の設備を利用するうへの便宜と特權と負擔の輕減とが與へられてゐるではありませんか。私は經營のうまくゆくことは大切であると思ひますが、あまりに商業化することは如何であらうと思ふのです。否、かほどにまうかる場合においては、社會的に奉公すべきものであると信ずるのです。その方策は、いくらもあるでせう。

まうかる新聞はさておいて、多くの新聞のまうからない原因は、どこにあるでせうか。經費に縮むべきものがあるのか、收入に增すべきものがあるのかを檢討してみればよいわけです。——私は新聞事業が合理化されてゐないと申しました。活字問題なども、將來にわたる一つの大きい問題です。また、新聞の經費として多くを食つてゐる地方版についても考へねばなりません。東京大阪の大きい新聞は二十内外も地方版をもつてゐます。これは將來、一方に於いて地方の經濟が發達して、新聞の購買力なり廣告力を生み、他方において通信費などのコストが安くなつて來ますれば——地方新聞の經營が樂になれば、これに讓らねばならぬことになります。それは非常に近い將來には望み得ぬところでありますが、北海道なり仙臺なり名古屋なり福岡なりなどには、さういふ傾向が見えないでもありません。

それにしても地方版の整理が最も經費を縮め得るものであると信じます。尤もこれは發行部數の少なからざる部分を占めてゐますがゆえに、廣告力にも關係あるわけです。もちろん市内の發賣部數の多い方が廣告としての效果はありますが、地方版も大切であり、廣告利用者は各地のステーションにおける新聞の斤量などを調べるものもあるほどですから、輕く見ることは出來ません。しかし地方版をつくるためには通信のコストもかさみ、版の變るごとに器械を止めることになり、高速度の印刷機關もその能率を低めることになるわけです。かういふ種々の點を考慮に入れて、地方版を出來るだけ整理すべきであると信じます。そして目標を、地方紙の進出なり、姉妹關係による同一本社の經營を――中外商業新報なども大阪や福島でやつてゐますが――合理的にやる方に進むべきではないでせうか。私たちはこの意味において東北一帶の地方紙をつくるため一つの計畫をしてみたのですが、うまくゆかなかつたことを悔ひます。

つぎに收入の增す方法は、やつぱり廣告に主力をおくべきですが、それが容易でないとすれば、立て前をかへて新聞紙を高く賣る方針に進むのがよいかも知れません。的もなく、大新聞社の卷きぞへになつて新聞を擴張してゆくのは、やがて身を亡すことになります。もとより、これは徒らに消極主義に出でよといふ意味ではありません。無理に擴張したり、無理に廣告掲げたりすると、滯貨が多くなります。殘懸金(大阪朝日)とか販賣店もしくは廣告勘定(大阪毎日)の增すのは健全な形ではありません。尤も、かういふ賣掛け代金などは、新聞を賣買するときなどには考慮されるものです。何となれば新聞一部を擴張して安定した讀者を得るには五ヶ月内外もかゝるものとすれば、その費用から新聞のノレン代も出てくるもので、小さい賣捌店の讓受などは、さうして行はれてゐます。從つて、これあるといふことは、さういふ意味からは認めてもよいこともあるかも知れませんが、經營の堅實性からは面白くありません。私はその點で大阪兩紙の決算報告の批評もしてみたいのですが、あまり長くなりますから、差し控へます。實はアメリカやイギリスやドイツやフランスの重な新聞の決算報告を集めましたので、これを批判して日本の新聞のそれと比較する機會にゆづることにします。

要するに新聞の經營は、むづかしいものです。よく三木善八から、新聞の經營は破目をはづすにむづかしく、破目をしめるにもむづかしいものであると聞かされました。わづかの經費にも無駄のないやうにしなければ、いけません。同時に通信網なり企劃部事業なりには思ひ切つたこともやらねばなりません。

新聞仲間では、新聞の經營が上手にやれるものは、大臣よりエライといはれるものです。しかし、いまごろの大臣などにくらべられるのは新聞人の誇りではありません。古すぎることばであるが、新聞人は無冠の帝王たる心意氣でやらねばなりません。いたづらに新聞事業を商業化するのは、よくありません。よし經營者は商人であるとしても、それはラスキンのいつたやうな意味の商人でありたいものです。ラスキンは"The merhant's function is to provide for the nation" といつてゐます。商人の職責は供給者として奉仕すべき相手方は國民であるといふのです。新聞は商品であるとすれば、それは嚴肅な意味で國民のためになるやうなものを供給するといふサーヴィスを作つてゐるのです。たゞ金まうけすることを考へたり、勳爵のみ目當てにしてゐることは、新聞人の態度としてよくありません。

× × × × ×

私は、懺悔錄の筆を擱くに當つて、かういふことが頭のなかにコビリついて殘つてゐます。

× × × × ×

おそれおほくも　明治大帝が、大隈老侯(當時伯)に向つて、『おまいは新聞をやつてゐるか』と御下問されたことがありました。それに對して侯は、私の友人がやつてゐます、私は關係ありません」と答へられたのです。友人とは三木善八を指したのです。

× × × × ×

新聞そのものは永久性のものですが、その經營は一代のものではないでせうか。新聞經營の力のないものが關係した親の名をもち出して來て遺業などいふのは、ちがつてゐないでせうか。村山本山德富なんどの諸先輩に、これを質してみたいのです。

× × × × ×

私は、本文を草してゐるうちに、事情あつて報知新聞と別れることになりました。懺悔錄の筆者は、嚴格な意味における自由の批評をする立場におかれることの少しおそかつたことを悔ゆるとともに、將來思ひ切つて、世のなかの新聞事業について批判してゆきたいと思ひます。——それは私のサーヴィスです。

(完)

昭和四年六月五日稿

ブルジョア政府の經濟的カラクリの曝露

――大藏省預金部の實態――

鈴木茂三郎

一

ブルジョア政府の經濟的カラクリと言つても、人民の名に於て、社會の名に於て、財閥、資本家、地主の利益を、貪婪、飽くところなく追求しつゝある資本主義そのものが、すでに全世界的な――その一角はソヴイエツト・ロシアに於て破壞されてはゐるが――だが、大きなカラクリである。

カラクリのなかにあつて、財閥、資本家、地主の傀儡として、政治舞臺に民政黨、政友會の內閣が、積極だ消極だなどと、手を振り足を踏み鳴らす政治機構も、之れ又、カラクリである。

カラクリで無いものが何處にある？ と言ひ度い。

衆議院議員の總選擧の結果が、ラヂオによつて全日本に放送されたその夜、甲州財閥の巨頭若尾謹之助は、無產黨の當選者八名と聞いて、「あゝもう日本は駄目だ」とソフアに、全身を投げ出して倒れたさうである。

若尾の受けた衝動は、思ふに若尾だけではなかつたであらう。すると、階級戰線の前衞鬪士を、××臺にのぼらす治安維持法が改惡されたのである。

と言ふことになると、××××は財閥の巨頭を安らかに眠らすカルモチン劑たる譯で、これなどは政治的カラクリではないか。

經濟的カラクリになると、一般會計だけでも十七億五千萬圓を濫費する國庫豫算のうちに仕組まれたカラクリが莫大である。

早い話が、國庫に××する消費都市としての××横須賀を見よ。

横須賀の市民層は、二萬八千五百人の軍人と千三百人の軍屬と一萬五百人の工廠職工と、その家族によつて埋められてゐる。その俸給、賃銀の年總額は一千二百九十萬圓である。横須賀市の全經濟は、この一千二百九十萬圓の流通速度と市外流出の問題で盡きるのである。

然るに國庫は、なほ約二千萬圓を工廠の用材、軍需品代として、軍港横須賀に放出してゐる。いや横須賀に放出してゐるのではない、政府御用商の三井財閥、大倉財閥、米井商店、大塚製靴の支店に放出してゐるのであつて、全市民は臭ひさへ嗅ぐを得ないのである。

十七億五千萬圓の國庫豫算も、軍港横須賀の縮圖を、全日本の規模

に擴大されたものと見れば、何等間違ひない。

更らに東京市民の怨嗟の集中的標的たる東京瓦斯會社を見よ。

東京瓦斯王國の内閣の構成は次ぎのやうである。

三井財閥――藤村業助、岡本櫻、武和三郎

若尾財閥――若尾鴻太郎、若尾鐵之助、中野武二、

久米系――久米良作、鈴木錄郎、太田半六、

川崎財閥――岩崎清七、(社長)

舊渡邊系――鈴木寅彦(常務)關谷兵助、谷口守雄

瓦斯王國の内閣、言ひ換えると重役會は、財閥が獨占してゐて一般株主の代表は居ない。政友會内閣が三井財閥、商船財閥、久原、藤田財閥等、あらゆる資本閥の傀儡によつて獨占されてゐるのと何等異るところがない。

瓦斯王國の指導權は、川崎、舊渡邊系から、今や三井財閥の手にスべり落ちんとしてゐる。

その三井財閥は、瓦斯會社に釜石鑛業から鐵管、北海炭鑛から新夕張と夕張炭、三井鑛山から砂川炭、三井物產から鴻基炭を賣りつけて、瓦斯會社の最大の出費の、大部分のものを喰ひ荒らしてゐる。

瓦斯王國の歳出を、三井財閥が喰ひ荒らすやうに、國庫豫算は、一切の財閥、資本家、地主によつて喰ひ荒られてゐるのである。

だから豫算編制難などと、むつかしく言ひ拔けて了へば、一應は尤もにも聞こえやうがカラクリを曝露すれば、國庫豫算に巣喰ふ財閥・資本家に對する國費分配の均整難だと理解すれば、早解りする筈である。

國庫豫算から次ぎに利權に轉じやう。

利權には發電水利權、電力供給權、アヘンなどがある。

黑部溪谷を調れば、三四十萬キロの發電水利がころがつてゐる。この自然物を權利化する、言ひ換へると資本化するには、政府當局の認可證一枚あれば足りる。

八百六十萬圓の漁業權がサイコロの目一つで、根柢から搖らぐやうな北洋漁業利權とは違つて、此の認可證は、數十萬圓から數百萬圓にも評價される永代安全な利權である。

されぱこそ、日本電力と東電は、黑部溪谷に於て、あらん限りの政治勢力を動員して、利權爭奪のために鬪つた。

政友系の東電の獨占區域へ、民政黨内閣の下に、新興資本家松永安左衞門が、東邦電力の資本をひつさげて侵出するや、東電株は拂込みを割り込み、東電の王座から若尾財閥が蹴落とされて、三井財閥がとつて代つた。

政友會内閣となるや、東電は東邦の牙城たる名古屋に、供給利權をかち得て、東京に東邦との妥協が成つた。

供給の認可證一枚が、財閥の支配權を倒し、財閥妥協の楔ともなる。だが、いつも民衆は踏みつけられてゐる。

アヘンに就ては滑稽な挿話がある。××財閥が、大連に鈴木商店、臺灣に星製藥のアヘン利權を掠取した。

ところが大連は隣張り儲からぬ。儲からぬから、更らに優秀品を輸

入してみたが、益々儲からぬ。之れは儲からぬ筈で、七、八割の不合格品を輸入して、これを掠めて支那奥地へ捌くからこそ儲かるのである。

素人の久原は、まだかゝるカラクリをのぞいてゐなかつたのである。

歴代の××××もまた、アヘン通ならざるものはない。乾からびたやうな内務畑唯一の利權はアヘンである。

ところが、前内相××××は、このカラクリを利用して、支那に×××輸入の直營をひそかに試みんとして、幕僚を特派した。

これも素人の幕僚、支那の役人の、左手に賄賂の現ナマをつかませ、現ナマの重量に相當する量のアヘン輸入許可證に右手で捺印させる。これを無言劇で、やつてのけることを知らないために、最初仕損じたといふ挿話がある。

我々は、アヘンにまつはる。かゝる挿話にも、祕められたカラクリの奥底をのぞくことが出來る。

二

伏魔殿といふ異名が、カラクリの代表たることを保證するやうに大藏省預金部は、ブルジョア政府の經濟的カラクリの寶庫であり手品箱である。

議會で報告された數字によると、預金部資金は廿六億三千萬圓、その運用資金は廿三億四千五百萬圓である。三井、三菱、第一、安田の東京の四大銀行の預金を束にしても廿四億八千萬圓で、まだ預金部資金には及ばない。國營の國家資本産業の總資本は廿九億七千萬圓だから、預金部は、之れに次ぐ巨大資本を、その寶庫に唸らせてゐる勘定である。

ところで、この預金部は大正十四年濱口藏相が、伏魔殿の扉をかすかに開けて、内部のカラクリをのぞかせるまで四十年間、暗黒のうちに基準となる法規さへなかつたのだが、やつとカラクリを合理化する大藏省預金部特別會計法、預金部資金運用規則等、これにからまる一と束ほどの法規もつくり、制度上に於ける預金部も建て直され、最近には理財局長の手を離れて、名實ともに獨立部門となるのである。

あらためて斷るまでもなく、預金部資金の主體的資力を形成するものは、十八億六千萬圓の郵便貯金であつて、預金者の三割五分が農民、一割八分が學生、一割が小商人、八分が勞働者、使役者など、所謂零細な勞働による玉の汗の結晶である。

かうした零細な金の集中、累積されたものが、最近はどう使はれるか。

カラクリが濱口藏相によつて合理化されて以後は、嚴めしい運用委員會によつて、毎年の運用方針が決するのである。昨年迄の二ケ年を比較すると、

	昭和二年	三年度
新規公債引受	六七五〇万円	七八五六万円
地方低利融通		

公共團體	一二〇〇	五〇〇〇
各種組合	一四〇	五〇〇
社會事業	一〇〇	一五〇〇
朝鮮産米	一五〇	八五〇
朝鮮低利	一〇〇	—
樺太低利	二〇	四〇
中央卸賣	三〇〇	—
奥丹震災	一〇四三	—
店舗住宅	—	一〇〇〇
東京復興	—	一二九八
産業資金	—	六〇〇
罹害救濟	—	五〇〇

資金の本質が、我々に全資金を社會事業と小農や小商人の融通資金に、ぶち込んで好い、まさにさうあらねばならぬことを厳然として命ずるのである。

然るに、そこにからくりがひそむのである。右の表をみてもわかるやうに、金融資本家の市場利益との衝突を避けるために、社會事業資金に幾倍するところの新規公債の引受けがある。

小商人や貧農には、不可能を強ひるやうな過酷な條件で、預金部資金の恩惠から隔離せしめられるところの、地方低利や産業資金や店舗住宅資金や、之れらがある。

そして鼻糞ほどを支出する社會事業とは、住宅、質屋、市場、簡易宿泊所、職業紹介所、その他に限られてゐる。

我々は未だ、それらのものさへ不滿足の程度にも出度されてゐることを聞かないのである。

それは一體何に原因するか。

試みに、運用方針を決定する運用委員會の構成を見よ、會長、大藏大臣、委員、大藏政務次官、同次官、内務次官、農林次官、遞信次官、遞信政務次官、(臨時)商工次官(同)會計檢査院部長、日銀總裁、馬場鍈一、阪谷芳郎、山崎覺次郎、木村清四郎、井上準之助、加藤政之助、志村源太郎、志立鐵次郎、何んのことはない次官會議のやうなものだ。地方資金が、黨勢の擴張や地方的資本家、地主の利己的便益のために、融通されてゐる實狀が、これによつてもうなづける。またいづれを見ても山家育ち社會事業とは何んぞやの質問に答え得るものが一人だつてあるだらうか?断じてない。

かうした運用委員會をつくつて、民衆を××せんとする、それこそカラクリの合理化にあらずして何んぞやである。

三

ところが、不良貸付は今日もなほ合理化されてならないのである。合理化すとは、伏魔殿にひそむ惡魔のやうに、ズラリと赤字をならべてゐる不良貸を、洗つて、帳面を淸めることである。

尤も預金部融通のうちでも、交通第一次借款、參戰借款、救濟投借款は、いはゆる九六公債に、書き換へ、今日は一百廿円萬圓を殘すだ

けである。國際汽船の二千九百廿萬圓も、國庫負擔に、置き換へる豫定で、議會に持ち出したけれども、否決されたまゝ、宙に迷つてゐる。

一億四千三百萬圓の西原借款を、政府保證の興銀債券に振り替えた猿智慧を眞似んとしたのではあらうが、伏魔殿の惡魔を民衆の肩に脊負はすやうな、不良貸の合理化は願ひ下げにしなければならない。

言ふまでもなく、不良貸の原因は、我國資本主義が、帝國主義段階に飛躍する、發展期に於ける輸出資本の焦げつきと、資本主義沒落期の轉機に於ける恐慌救濟のために放出されたもので內譯をみれば一目瞭然たるものがある。

飛躍期に於ける「輸出資本」(一)

年次	首相	藏相	貸付名義	金額(萬圓)	(現在額)	扱ひ
明治四〇	西園寺	阪谷	江西南潯鐵道	七五〇	(七五〇)	興銀
大正六	寺內	勝田	第二次交通借款	二〇〇〇(政府引受)		—
六	同	同	東拓事業資金	三〇〇	(二〇六)	鮮銀
六	同	同	吉長鐵道	四五〇	(三四七)	滿鐵
六	同	同	海外興業	五〇〇	(四七七)	東拓
七	同	同	鮮銀の滿露資金	一〇〇〇	(一〇〇〇)	鮮銀
七	同	同	東亞興業	—	(九六〇)	興銀
八	原、	高橋	日露實業	六〇〇	(六〇〇)	鮮銀
八	同	同	大連住宅資金	二〇〇	(一九〇)	東拓
一一	同	同	同	一〇〇	(一〇〇)	〃
一〇	同	同	天圖鐵道(飯田)	三五〇	(三五〇)	
一三	清浦、	勝田	同	一七三	(一七三)	同
三	同	同	東亞勸業	三五		

飛躍期に於ける「輸出資本」(二)

四一	桂	兼任	漢冶萍公司	三六〇〇	(三八一五)	正金、興銀
四	大隈、	若槻	大倉組銑鐵	二〇〇	(ナシ)	興銀
九	原、	高橋	裕繁公司	一五〇		
三	同	同	同	三五	(四一四)	正金
九	同	同	三共製藥	二〇〇	(ナシ)	興銀
九	同	同	日本紙器(鳩山)	六〇〇	(六〇〇)	安田
三	加藤、	濱口	南洋興業	二五〇	(一七三)	正金

右のうちで、九六公債にふりかへられは第二次交通と吉長鐵道借款と、完濟された大倉、三共を除けば、いづれも預金部の赤字である。表の(二)は帝國主義への飛躍期を特徵づける軍國主義的資本の色彩甚だ尖銳である。

漢冶萍、大倉組、裕繁、南洋興業は兵器原料たる鐵礦石の確保、紙器は銃丸のケース、三共は彈藥の原料製作を保護するにあつたが、高田商會の沒落に先立つて、勝田藏相は高田商會の業餘製造所保護のために、四百萬圓の預金部資金を融通する一札を與へたことがある。

そこで高田は、右の一札――を引き當てに、鮮銀から百萬圓を借り

て政友本黨のために總選擧費用が献金したが、預金部資金は、かくの如き僞法を以て、ブルジョア黨に喰はれた額も斷じて少くはない。東拓にしても、營業目的にない北海道の土地や、鄕大臣や、內地にこげつきの少からざるは、預金部資金の割り前を、ブルジョア黨に掠取された痕跡なのである。

帝國資本主義沒落期の救濟資金

八	原	高橋	國際汽船	一二五〇〇	(一九二〇)	興銀
一〇	同	同	同	一三〇〇		
九	同	同	茂木七四銀行	一六〇〇	(一六〇〇)	日銀
一二	加藤	市來	教育銀行	一〇〇	(一〇〇)	鮮銀
一二	同	同	臺銀救濟	五,〇〇〇	(五〇〇〇)	臺銀
一二	同	同	合同油脂(鈴木)	一二〇〇	(一三〇)	興銀
一二	同	同	滿洲救濟	六〇〇	(六〇〇)鮮、東拓	
一二	山本	井上	大工業復興	一二〇〇	(——)	興銀
一二	同	同	報德銀行	三〇〇	(ナシ)	
一三	清浦	勝田	鮮銀救濟	五,〇〇〇	(五〇〇〇)	鮮銀
一三	同	同	東拓整理	一,一〇〇	(一一〇〇)	東拓

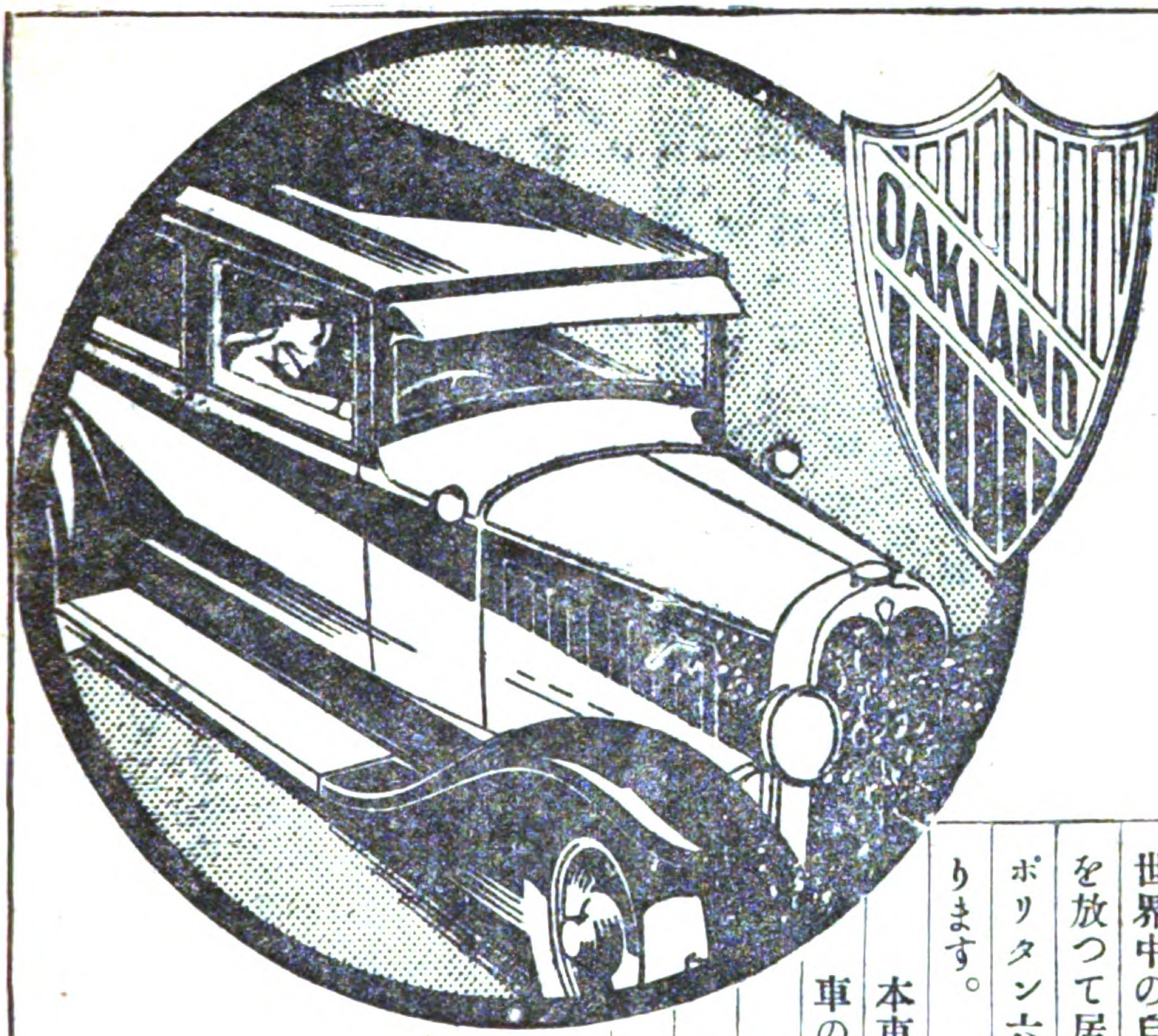
帝國主義への發展期を、原、寺內內閣が政治的にリードしたとすれば、沒落への轉換期は、加藤友三郎內閣、山本地震內閣、清浦內閣が、舵手の役割を演じたのである。國內に放出したものは、歐洲大戰直後船成金救濟のための國際汽船と井上準之助を顧問とした茂木惣兵衞の七十四銀行の救出、地震後の工業復活資金といつたもので、その他は滿洲救濟のための資金運用である。

地震後には、古河電氣、日本鋼管、日立製作所、日東製氷、東京製鋼、東京モス、淺野セメント、日本製粉などが復興資金を借り受けて、土灰のなかに工場を再建したのだつたがもつと苛酷な條件の下に燒け出された勞働者、小商人、月給取りの諸君は、果して預金部資金に救はれたであらうか。

否、救はれなかつた。

我々は、ブルジョア政府の經濟的カラクリを見極めて、そして見極めることによつてカラクリの裏をくぐり拔けねばならぬ。

ブルジョア政府が、預金部の不良貸付を民衆に轉嫁することによつて、預金部を洗ひ淸めてゆかうとするならば、我々は、預金部資金の利鞘をかすめて、高率配當金を座食し來つた引受銀行、會社の株主に不良貸付の徹底的淸算を要求しなければならぬではないか。


OAKLAND

東京自動車茶ばなし

——漫談一席——

高田保

拜啓。

一將功成つて萬骨枯る——といふが、軍國主義の世の中でも資本主義の世界でも、枯れるに變りはないらしい。その證據には——

アメリカで、小學校の先生が生徒に向つて質問する。——世界で一番えらい「ゼネラル」は誰でありますか？

すると生徒が、頑是なく手をあげて答へる。——はい、「ゼネラル・モータース！」

勿論これは眞面目な話ではない。謂はゞ地口の洒落みたいな一笑話、のやうではあるがしかし、讀者諸君よ、もう一應考へ直して見てくれ給へ！　さすればこれは、斷じて一笑話ではなくなる！

世界平和の資本戰の舞臺にあつては、三軍を叱咤する金モールの嚴めしさが必ずしも大將でないことは、言はずと明かな事であらう。彼の背後に彼を操る大將の大將がある、とすれば眞實この、「ゼネラル・モータース」こそその「ゼネラル」の一つである事に間違ひはない。——あゝ、負ふた子に敎へられる！——

子供はつねに正直なものだ。

がこのゼネラルをしてあの「ゼネラル」たらしめんがために、なんと多くの萬骨が枯らされて行くことかよ！

さて、證據といふは外でもないが、この三月八日だつたかにデトロイトの町で、小さな實業學校の一貧乏敎師が死んだのだ——讀者諸君よ！　記憶し給へ、彼の名をビュイック氏といふ！「はじめ彼は玩具製作の一職工なりき、されど大成發明の才豐かなりしかば、一九〇三年、遂に志を遂げて新しき自動車の發動機を完成せり」「ビュイック號」といへば今日のゼネラル・

モータース中での花形自動車であるが、なんとその發明創成者が彼であつたのだ。――その彼が一九二九年の今日、なぜつまらん學校の貧乏教師として慘目な生活のどん底のなかで死なねばならなかつたか？

早くも諸君はこの「疑問」を得られたことと思ふ。――そこで僕は答へる。「彼には資本が無かつたのだ。」

「デュラント、この名も亦自動車の固有名詞になつてゐるので諸君にも馴味があるであらうが、この「資本」の無いビュイック氏に近寄つてこの資本家が肩を叩いた。よろしい。わしが一肌脱いでやらう。

ビュイック自動車製作會社。發明の年に間もなくこれが出來上つたが、この時から一九一〇年まで足かけ八年間、なんとわがビュイック氏は働いた事か！　一日十何時間それも遂に一日も休暇を取つた事が無いと書かれてゐる、孜々として働いた、働きに働きつゞけた。――そしてこの間、「資本家」デュラント氏は如何したか？　これは別に誌されてはゐないが、いづれ葉卷きでも咬へて腹こなしの散歩でもしてゐたか、それとも廻轉椅子の上にふん反りかへつて女優の評判記でも讀んでゐたか？

ところでその結果は――萬事筋書通りである。――發明者にしても勞働者なりしわがビュイック氏は健康を害した。

この時にはすでに、ビュイック自動車製作會社には、「發明者の直傳の優秀なる技師團と職工群とが養成されてゐたことだらう。では何も病弱となつたビュイック氏の存在など必要とはしない！　そこで――

「どうだね？　君の健康のために、しばらく引退しとる方がいいとわしは思つとるがね？」

僅かばかりの金がビュイック氏の手に渡された。と同時に尨大なる權利がデュラント氏の手に占められた。――あの花形自動車の製作權利である。もしこれを所謂「株」だとして考へて見給へ！　恐らくは何千萬弗、いやアメリカの數字のことだ。億といふ勘定が出るかも知れない。況してやその時以來、時代は加速度的に、自動車へ！

しかし引退したビュイック氏は如何であつたか？　彼が小さな實業學校の一貧乏教師となつたのはそれからである。しかも彼はならざるを得なかつたのだ。何のために？――生活のために！

一九二九年、ゼネラル・モータースは、全世界の自動車市場に於て王樣フォードを向ふに廻し、遂に斷然彼を凌駕し得た。とさへ言はれてゐる。その一九二九年、わがビュイック氏は、貧民窟の中で貧しく侘しい生涯の幕を永遠に閉ぢたのである。な

んと諸君よ、——遂に生前、彼が自身發明したところの自動車の、たつた一臺をすら持つこと無くして！

自動車時代——なんと眩しくも華かなギャソリン時代——アメリカでは四人半に一臺の割だといふが、しかしなんと實にこのアメリカに於て！

といふ以上の話に對し、ある人が憮然として言つた。

——成程、アメリカでさへそれなら、日本で私達が圓タクにさへ乘れないなんぞ、寧ろ當然な事なのですかな？

讀者諸君よ、こゝではこのある人といふのが、實は街頭の一交通巡査君であることを知つてくれ給へ！

大都會にあつて、交通の整理は不可缺の重要事である。メーデーの巡査は癌腫的存在であるが、あの自動車又自動車を手際よく裁くところのこの巡査君は、正に胃袋的存在でなければならない。

止れ！　進め！　手を振り笛を吹き、たまには、馬鹿つ！　と怒鳴りもせねばならぬところのこの仕事は、決して樂なものではないらしい、にも關はらず彼等の生活はどうであるか？——一日の貴重な勤務が終つて、樂しく——といふやうな感情さへ失はせられるほどそれほどに疲れさせられて、頽然として、家路につくとき、彼はしみじみ疾驅する自動車の姿を、今更のごとく見送りながらかう呟くことであらう。

——あゝ俺は、あの自動車を整理するだけの人間なのだ。自動車に乘るものは遂に俺とは「別な人間」なのだ！

だが何故に「別な人間」なのか？　では巡査諸君よ！　君達は何處に屬する人間なのか？　もしも彼等が君等とは遂に別な人間であるとするならば、君等はその「別な人間」のために日毎——いやしかし、こゝではたゞ自動車のことについてのみ、呑氣に語るとしやう。

自動車も全く殖えたものである。大正七年全國を通じて僅かに四千五百臺であつたものが、現在では十何倍かの六萬五千臺となつてゐる。——この内で約三分の一が東京府警視廳管内にあるのであるが、その増加の順序を追つて見ると、その七年度を規準として九年度には倍を超え、十一年度には三倍となり、震災直後の十三年度には一躍六倍になり、昭和元年となつては七倍に近く、それが明けて二年には八倍半となり、昨年度に到つては正に十二倍となつた恐ろしさである。

この警視廳管内、今日ではその番號に見れば二萬二千、しも その中には大分幽靈番號もあるらしいが、しかしその中で九千臺の營業用乘用車があるといふのだ。この九千臺のうちで所謂

高級メーター車といふものは一割にも充たぬであらう。とすれば九割以上があの圓タクであるに違ひない。そこで――

この八千臺以上の圓タクが一日十五回の營業をするとする。その内約三分の一だけが車庫にゐて受ける註文だとすれば、殘る十回があの「流し」と稱する朦朧營業となる。八千臺の中半分だけとしてもこの十回は延べて四萬臺であらう。更にもしこれが一回の客を拾ふための流しの一度二度を加へるときは、東京市中、八萬臺或ひは十二萬臺の自動車といふことになる。

とこれはいかにもづさんな數字のやうであるが、しかし確實な統計によれば、東京市中の圓タク乘客數は、一日平均四十萬人以上だといふのであるから、必ずしも當つてゐぬとはいへぬであらう。ところでこの八萬臺或ひは十二萬臺が、概ね中心として流して歩く場所である。何處であるか？

又してもこれがあの「銀座」なのだ。すべての路は銀座へと通じる！　郊外のギャレーヂに雨露だけを凌いでゐるがたフォードまでが、ともかくも銀座へと一旦は出懸けて來るらしい。殊に新臺の下したての時なぞ、何はさて置き、目指すはこゝであるらしい。そこであの尾張町四辻の素晴らしい雜路、自動車の氾濫！　到底氣の弱いものには、よしんば「進め！」と指標に出てゐても、仲々向ふ側へは突切れぬ物凄さであるが――さてこゝに去年あたりの交通調査の報告がある。それを見ると、第一はこゝではないらしく、

永樂町	一五、一一九臺
上野廣小路	八、六四二臺
銀座三丁目	八、一七四臺
室町	八、〇〇二臺
兩國橋東詰	七、一七八臺
四谷見附	六、六三六臺
有樂町	六、六三三臺
本郷三丁目	五、九四四臺
船河原橋	五、六八六臺
水天宮前	五、四二五臺
淺草廣小路	四、九二九臺
龜澤町	一、八五五臺

だが、實は右の數字は午前六時から午後の六時までなのである。銀座の一日は寧ろその夕方の六時からにある！　では折角のこの調査も大して興が無いやうであるが、しかし諸君よ！　右の一番尻の「龜澤町」といふのを見給へ！　本所、工場地、勞働者地帶、こゝの數字のなんと、「永樂町」――丸の内、商業地、ビルディング地帶のそれに較べて尠少であることかよ！　しかも更に「自動車交通量時間別」といふのを見れば、「龜澤町」にあつては最もその往來の激しい時が「午後の二時から三時まで」

である。なんとこの時間は勤務者にとつて——どんな時間か？「永樂町」にあつては「午後の三時から四時まで」、あゝこれはなんと、重役連中の退出時刻である！

自動車は普及し、實用化され、今は全く大衆的乗物になつた——がこゝに、依然として限られたるものが存在する。「自動車に乗るものは遂に別な人間。」この感慨は決して交通巡査のみではないであらう。

どうも話が理詰めになり勝ちである。がこれは僕のせいではない。「世の中」のせいだ。讀者諸君、諒之。

小説家菊池寛氏は、一萬金に近い高級車ダイアナ號を持つてゐるが、極めて自動車に趣味を持つらしく、好んでその作品の中に自動車をとり入れてゐる。しかも他の作家とは違つて鮮かに自動車の固有名詞を使つてゐるらしい。例へば「新珠」の中では伊太利製のフィアットを。「第二の接吻」では下したてのシトロエンを、それから「新女性鑑」にはクライスラアのクウペをと言つた具合に。夫々の販賣店では、大いに恐悅してゐることであらう。

ところがこゝに愉快な出來事があるのだ。

「新女性鑑」を松竹蒲田で撮影といふ時である、問題なのがそのクライスラアのクウペであつた。そんな洒落た品物はさうざらに動いてゐるものではない。ロードスターなら心當りが無いでもないが、クウペとなると見當がつかん！が撮影監督の五所平之助君は人一倍の凝り屋なのだ。どんなにしても原作通りに行きたい！そこで助手に命じて、どんなにしてでも探して來い！

そこで助手君は、それから東京中を驅けめぐつたのださうであるが、しかし何と夥しく圓タクは去來しても到底それらの中に見つかる車ではない。神かけて三日、四日、すると探しあぐねて滿願の七日目、茫然として銀座尾張町に立つと、ふと、嬉しや向ふ側を行くそれを見つけた！しめたぞ！

馳け出した途端に、自動車また自動車だつたのださうである。交通巡査がいきなりに、こらッと來た。襟髪を引立てられて「止れ」の赤標へ顔を向けさせられながら「命が惜しくないといふのか！」

命よりもあの車が欲しかつた——と呟いた時には、もう肝腎のクウペの姿は何處にもない！

ところがこれが、幸運なことにはこの助手君、徹夜の撮影で疲れ切つた軀を市内電車の窓際にもたれかけて、水道橋へとかかつた時ださうである。うつすらと開いた半眼に、おゝこれ

なんとあのクライスラァのクウペではなかつたか！

早速に飛び下りた。もどかしく通りかゝりの圓タクをつかまへた。何でもいゝ、あの車を追つかけろ！

しかし、これが市ヶ谷の邊まで行くと、とある小路で見失つてしまつたのださうである。ではきつと植込みの奥深く自家用ギャレーヂにでも仕舞ひこまれてしまつたに違ひない。でその助手君は、しきりにその近所の屋敷の玄關に立つて訊ねたのであつたが、そのどれもが怪訝らしくぢろ〱と見詰めたうへに

「いゝえ、宅ではございません！」

だがよろしい。はつきりと番號を見てとつて置いた。――そこで當然、彼は警視廳へ行つた。すると――

「一體、お前は何か！」

「活動屋です」

「ぢや、教へてやれん！」

なぜ「活動屋」ではいけないか、だがいけなければいけないでもよろしい、調べる手段は外にあると、すぐさま撮影所に歸つて、さる所に問合せると、詳しく番地までが判つた。

ところがである。翌日この判つた先方まで馳けつけると、その先方が、こちらの話を皆までは聞かずに、顎をしやくつて

「あゝ、あのクウペの事か、あれなら昨日賣つちまつたよ！」

ダァ！

「どちらへで？」

「判らん！　ブローカーに訊いて見給へ！」

で改めてそのブローカーの住所姓名を聞かして貰つて、とゞのつまりが國技館の何とかいふ角力茶屋にあるといふ事をつき止めた上で、やつと借受けて來たといふのであるが、それ迄はこの助手君、定めし原作者菊池寛氏を恨んだことに違ひない。

その菊池寛氏についてゞあるが、僕の知合ひに文學愛好の運轉手君がある。彼の曰く、

「しかし、あの人の小説を讀むと、時折り妙な事がありますぜ。箱根の山をセコンドで音も無く滑つて行くやうに上つたり、東京市内の坂で、下したてのシトロエンが、ブレーキを踏んで、一二間惰力で滑つたり――だがセコンドならどんな車だつて音がしますぜ、それからシトロエンていふ車は、ありやセンター・ブレーキで、止り過ぎる位止りのいゝ車ですよ！」

妙なところに妙な批評家がゐたものであるが、まあ許したまへ。小説家は筆の上でどんなに自在に車を走らせやうとも、結局彼は、決して運轉手免狀を持つてゐる譯ではないのだから！

小説の中で自動車の固有名詞は使つても、流石まだそれを作

品の標題にしたものは日本文壇に無いらしいが、アメリカには「フォード」と題したのがある。近着の通信によるとフランス巴里のある劇場では「ロールス・ロイス」といふ芝居が上演されたらしい。

餘談であるが——この「ロールス・ロイス劇」を觀た一人の建築技師が、その劇中のある所で行はれる男女の接吻が、あまりに長すぎて風俗上面白くないといふ理由で、つい最近に訴訟を起した。そこでその役の男女優が法廷に呼出されたのださうだが、言ひ分に曰く、

「私共は永年の經驗で、どんなに熱烈な戀人同志の役に扮してそれになり切つてゐても、接吻の場合、どれだけの長さが適當であるかといふ分別はいつもちやんと心得て居りますので！」

どんな判決が下されたかはまだ傳はつて來ないが、これなど實に素晴らしい廣告宣傳ではないか。

ロールス・ロイス號といへば、日本では宮廷用がそれであり、最高級の自動車で三萬圓からのものであるが、つい近くはこれに上越すランチヤスター號が輸入されたらしい。先日グロスター公のために用ゐられてゐたのが、どうやらそれではなかつたかと思ふのであるが——この名前は本誌の讀者諸君にはすでにお馴味であらう。なぜなら「新世界巡禮」の中で、谷讓次氏がその愛夫人と肩を並べて巴里からモンテ・カルロだつたかへ豪華なドライブをしたことになつてゐるのがこの車だからだ。本當に走らせたのか、それとも走らせたつもりであの文章を書いたのか、いづれにしても日本人平民の徒でこんな贅澤車をこなしたものは、彼以外さうは無いことであらう。

さて、そこで普通には東京市内にどんな車が動いてゐるか？となるとこゝに去年、東京自動車組合が八千二百五十餘臺の營業者の車體を檢査したときの數字がある。それによれば百四十種類だといふのであるが、その中で、主なるものを擧げると、

號種	貨物車數	乘用車數	合計
シボレー	五九一	二〇六四	二、六五五
フォード	一、一〇八	九九〇	二、〇九八
スター	一五	九六四	九七九
オーバランド	五二	五六九	六二一
エセツクス	一	三三七	三三八
ピユイツク	二	二四六	二四八
シトロエン	—	一〇四	一〇四
オールヅモビル	二	九三	九五
クライスラア	四	六九	七三
フエデラル	七〇	一	七一
ジー・エム・シー	六二	一	六三

グラハム	六二	一	六三
ナッシュ	三三	五五	五八
ドッヂ	一五	三四	四九
ムーン	三三	四五	四八
ハドスン	三三	三五	三八
フイアット	二	三六	三八
ポンチヤック	｜	三七	三七
ガフオード	一三	二五	三六
モリス	｜	三五	三五
ウズレー	｜	三二	三二
ハツプモビル	二	二八	三〇

しかし、一年經つて現在となると、この數字にも大分の變化があるだらう。第一が近頃さらに見えるホイペツトやプリモスなどいふ名さへ右の中に見えぬだけでもそれが判ることであるが、凡そ「猫の眼のやうに變る」とは流行自動車の推移のごときを言ふのであらうか、昨日のフオードは今日のシボレー、さて今日のシボレーは明日の何であるか、人氣の焦點はつねに動いて仲々一ヶ所には止まつてゐぬらしい。

　そこで販賣業者の努力は、宣傳また宣傳といふことになるのであるがそれについてあるセールス・マンの曰く、

「その宣傳の方法も、昔と今とでは非常に違ひます。昔はたゞ自動車の購買者にだけ、宣傳すれば充分でしたが、今では一般乘用者に向つて吹聽しなければならないんです。つまり、一般が圓タクを止める場合にしても車を選んでといふ事になりましたからね。そこで宣傳の目的は、その一般の人をしてこの車を選ばせるといふ趣意で行かなければならなくなりましたよ。」

　いかにも今は、小學生でさへが、あゝあの車はパカアドだよなどゝうなづく世の中となつたのであるが、しかしそれにしても日本の自動車廣告など、まだ〳〵であらう。新聞紙上によるものなど最近著しく殖えて來たとは言ふものゝ、まだ〳〵藥品化粧品の類には及びさうもない。

　がやがて、新聞紙のみならず雜誌その他、あらゆる廣告機關の上にこの自動車が氾濫する時は、近き將來必らず來る。――そして「エセクス」などゝいふ芝居が、何處かで上演されたりもするであらうか。

　車の種類を知り、それを鑑別する事が出來るやうになれば、同じ一圓だ、人情でどうしても、高級なものを選ぶやうになる。がどんな高級車でも、榮枯盛衰、老朽となれば仕方がない。

――あるアメリカ雜誌に、「古自動車」と題する詩があつて

　おゝ汝、古ぼけた自動車よ、

　かつてはしかし華かな戀をのせ

地を蹴り、雲を衝き、時速五十哩
一躍「結婚」にまで吹飛んだ快活な汝よ、
いまは落日の曠野に草深く
主なく捨てられて埋もれるあゝ汝
汝は……

どうせ下らん文句だから全部を寫しとつたところで仕方ないが、昔は定めし鳴らしたらうと思はれる高級車が、奥深い田舎のがた石道などでよぼ〳〵やつてゐるのを見ると、やはり一種妙な感慨を催させられたりするものである。

平和博覽會の時であつたか、あの會場から出て東京市中を遊覽のために走つてゐた眞赤なスチーム・カーのあつた事を諸君は記憶してゐるであらうか? 眞赤な旗を風になびかし、當時にあつては實に新鮮な印象を持つたものであつたが、あの車がいまは北海道の僻地にあつて依然かたことゝ動いてゐるさうだ——といふやうなことも面白いであらう。

と同時に、僕はまたあの舊型フォードの、とてもぼろ〳〵なのなどが、本所深川、あのあたりの界隈を、喘ぎ〳〵走つて行くのを見たりすれば、これは又別趣な感慨を覺えさせられる。——「最大の酷使に堪え得るものは最良なり。」この産業合理化のフォード主義の下にあつて、なんと多くの人々がこの老フォード車の如く喘がせられてゐることか? しかしともかくも動くも

老フォード車のひどいのになると、

ので、最低が三十圓ださうである。一方では近頃圓タクで新型のパカアドが現はれたなどいふ噂があるから、即ち東京市中には、三十圓から一萬圓近くまでの車が均一の料金で動いてゐることになるが、それにしてもこの三十圓の車でなほかつ商賣が出來るものか?

圓タク營業の標準としては、二千圓乃至二千五百圓級の車で一回の走行哩が百哩、その收入が二十圓といふ所らしい。それ以下では仲々採算がとれぬさうである。車を高級にすれば自然その銷却費が嵩み、ナッシユやビユイックなどだと、三十圓の日收が無ければ結局は車を喰ふことになる、そこでその三十圓であるが、現在の均一制度では、それを得るために走行哩數をぐつと上げねばならない。日に百三十哩乃至百五十哩、——これに反して三十圓の老フォードでは、元來が車體の銷却などすでに問題ではない。一日の消耗品だけを浮かせば殘りは全部收入となる。車庫料といふものがあるが、この種の車には又この種のものがあつて、普通五六十圓以上のものが月額やうやく十一二圓らしい。で日に五六圓の稼ぎ高があれば充分生活費が浮いて來る。だがこの三十圓車では、最近聞く所によると、仲々思ひつき

の手があるらしい。それはこれを成るべく車の混雜する通りへ持つて行くのだといふのだ。そしてあれは確かに自家用だなと思はれる車を見付けてその前をのろ〳〵と運轉する。すれば當然後の車は追拔かうと速力を出すだらう。その時こつちではその方のやゝハンドルを切りながら、頃合を見計つて急停車をする。勿論この場合には追突だらう。思ふ壺！

この場合、その自用車に乘つてゐるのが主人公であつたら、十中の八九までが、その場で五十圓位の損害金は投出すさうである。面倒臭くもあるし先きを急ぎもするといふのであらう。とすれば自動車をまる〳〵そこへ捨てゝしまつてもなほ二十圓が殘るといふものではないか。

この手を心懸けるものは別とするが、この種のひどい車體はやはり千住とか龜戸の方面に多い。ところがこゝに銀座のすぐ近くに、必ずそれを見得られる場所があるから面白い。――それがあの豪壯華麗な歌舞伎の大殿堂、歌舞伎座の前だとあつては、正に一つの皮肉圖のやうであるが。

芝居がはねる。綺羅びやかな連中があの大理石の柱の間から下りて來る。するとそこに網を張つてゐるのが助手運轉手の連中だ。車は向ふ側の蔭に隱してある。如何でせうか？　召しますか？　よろしい！　一臺！　そこで始めて引出して來るのであるが、あの高尚ぶつた連中が、引出されたそれを見て、苦蟲を嚙まされたやうな顏をしながら、それでもむざと斷はりもならず、やけに觀念したやうな風で乘込む風景は、仲々愉快な眺めのものではある。

古車といへば、まだ四五年前であるが、赤坂の演伎座に勤めてゐた僕は、毎夜劇場前へ稼ぎに來る自動車の中に、カーバイト瓦斯を點じてゐたのを見出したことがある。もう十分で閉ねるぜ、と下足の男が呼べば、オーライ！　とその運轉手は瓦斯發生器の蓋をあけてカーバイトの塊を投け込んだものであつた。が流石にこれほど古風なものは、今日何處を歩いても見當らぬらしい。

見當ればこれも、今となつては却つて一種雅致ある感がさせられるかも知れないが。

世界での自動車速力最高の記錄は、つい最近に英國のセグレーヴといふ一少佐が、わざ〳〵米國のフロリダの海岸まで出かけて行つて作つた二百三十一哩といふのであるが、これに成功した彼は今故國に歸つて、恰かもかのリンバアクが米國に戻つたときのやうな人氣で歡迎されてゐるらしい。プリンス・オヴ・ウエルスまでがその祝賀會席上に現れて、賞讚の演説をしたばかりか、功によつて光榮ある騎士の列にさへ加へられたと云ふ

のだから凄まじい。今の世では常人も、何かかういふ事でも企て、生死を賭けなければ出世が出來ないのであらうか。

この彼が、新聞記者に話した言葉に面白いものがある。――それによると、彼はあくまでも科學の力に信頼してこの冒險を企てた。で何處までも正確に、科學的な方法で計畫を立てた。發動機の製作、車體の考案、それから周密なコースの調査、萬事が遺漏なく計算されてさていよ／＼車上の人になつたのであつたが、しかしそれが、いざとなると、科學以上の何ものかの力に信頼をかけねばならなかつたといふのである。つまりは、徹頭徹尾唯物論者であつた彼は、そのいよ／＼といふハンドルを手にした瞬間、忽ちに豹變して運命論者と化してしまつた！「科學は畢竟、人間に隷屬する。しかし人間は遂に運命に支配されねばならない。」――とこれが彼の感想の結論だといふのであるが、なんとこれは人間の氣の弱さではないか、苦しい時の神だのみ！

ところがこの彼が、首尾よく成功した後に、口惜しがつて飛出してこの記錄を破らうと企てたリー・バイブルといふアメリカ人があつたが、しかしこれは二百哩の速力を出したところで顚覆してしまつた。勿論卽死である。――するとこれに對して、運命論者のセグレーブが今度はまたいつか運命を忘れて、彼はきつと車體の機能に對する科學的な注意に於て缺くる處あつたに相違ない。」と判斷してゐるから、いよ／＼面白くなる。

高速度へ！　より高速度へ！　とかう求めるのも、自動車本來の目的からして、或ひは蓋し當然な事か？　しかしこの種の競技も結局は有閑者の遊戲であらう。――セグレーヴ少佐操縱の歷史的なその自動車は、製作に二十萬圓以上の金が費されたといふ。とすれば一哩がいくらに當るか、一刻千金一字千金といふが、これは一瞬一哩が千金の價である。

が世の中には、かういふ遊戲的高速度以外に、これはまた生活的な高速度があるのだといふことを、讀者諸君、僕は最後に誌して置かう。

日本橋の街路で、靑バスが凄まじい衝突事故を起した事がある。――當時ある新感覺派詩人がかう說明した。「速力は誰にとつても快感だよ！　そしてそれはしば／＼人を酩酊の境に誘ふものだ。運轉手はきつと、つい知らず／＼その甘さに耽つてゐたのだつたに違ひない！」

果してさうか？

乘合自動車從業員には、定められた服務規定といふのがありその中に「走行哩數歩合」といふのが設けられてゐるのだ。彼等はそれで出來るだけ多くの哩數を走らなければならない！

誰が速力の美感なぞに耽つてなぞゐられるものか！　たゞ彼は生活の苦惱に驅り立てられるばかりなのだ、そこで走る！　走る！

米國フロリダの海岸では二百五十哩乃至三百哩までの速力が出せるかも知れないが、わが東京に於ては二十五哩乃至三十哩を出すことはすでに恐ろしい冒險である。がそれをも彼等は敢てしなければならない！　規定？　いやそれよりも生活だ！

日毎夜毎、頻發の圓タク事故にしても同じくさうであらう。稼ぐためには必死に走らねばならぬ生活！　よしや居眠りしながらも走らねばならぬ生活！　何が彼等をして事故を起さしめるのか？

が、尤も時には、愛嬌のある事故が無いでもない。――もはやこのとりとめなき自動車漫談も、註文された紙數に達してしまつたが、最後にこれのみは誌して置かう。――時は震災の翌る年、大正十三年の二月十五日。

ドイツ大使館の前を、農相官邸の方へとまつしぐらに走つて來る一臺のトラックだつた。その車上には凜々として顎に帽子のバンドをかけた警官が三十名。

と横合から出て來たのが一臺のタクシーだ。衝突！　と見た瞬間にその警官トラックが顚覆！

三十名の中で十名ばかりが重傷したのであつたが、それにしても何故にこのトラックでの警官運搬であつたか？

火災保險金を支拂へ！　必死の群集が農相官邸へ押寄せたからである。警視廳から愛宕署へ出動即刻の電話と同時に、この廳用貨物車の派遣であつた。でそれに乘込んで、快速力に意氣込んで！　――であつたその途中であつたといふのである。

ところで、その運轉をした巡査といふのが、これはまたどうした事か！　「無免許」であつた！

では各位の御自愛をいのる。頓首、再拜。

新著月評

最も權威ある批判であり推薦である

經濟學研究 金融篇

服部文四郎

一

山崎教授還暦祝賀記念として經濟學研究二卷が出版された。第一卷は經濟篇で、第二卷が茲に紹介さるる金融篇である。而して其の筆者はアルフアベット順に配列せられたものであらう。明石、荒木、橋爪、土方、本位田、河津、大内、佐々木、和田及び山室の諸氏で孰れも帝大出身の直接金融若くは金融に關聯する學理及び實際の專攻者で、有益なる論文を以て充されて居る。山崎博士に經濟原論の著述あり、既に十七版を重ねられて居ると云ふもの丶、博士は常に金融の研究を以て始終され、又專ら其の理論的檢討に一身を委ね、其の篤學は學界夙に定評あり、今や還暦に當たられ、帝大をも退任せらるることとなりたる際なれば、博士の祝賀記念としては此の金融篇が何物よりも最もふさはしく念はるるのである。

二

其の內容を一瞥すれば先づ卷頭に明石照男氏の「コール市場に就て」なる論文がある。昭和二年恐慌後に於ける資金偏在の對策として、コール市場を問題とし、其改善及振興に關しては應急の策としてコール市場の創設に賛し永久的方策としては手形割引の市場を創設し之とコール市場とを聯絡せしむる英國式を主張し、荒木光太郎教授は「貨幣の單位に關する一考察」と題し、貨幣の一職能としての價値其のものの測定、即ち一定量の財貨を取得するか否かに依りて受くる個人の感情、快不快の測定の可能、不可能兩說を緩め、可能論者の計量の單位が單なる財の數量の計算單位で享樂の單位となり得ざること、從てそが貨幣價値に置き換られ價格となる場合に於ける貨幣の單位も要するに貨幣數量の單位なるに止まり、價値測定の單位たるを得ざるものなりと論じ、橋爪明男教授は「銀行券の統制を論じ、銀行券は伸縮性に富むが故に其の數量統制の必要多く、從て其處に意義ありとし、銀行券統制に關し、對立する諸主義及諸方法を討究し、今後此の統制の問題は一八四〇年代に通貨主義、銀行主義と相對したるに、最後は金本位制が管理通貨となり、此の機械主義と自由裁量主義の對立が將來如何なる形態を執るやにありとし、土方成美博士は「日本公債論」と題し、國債を通じて我が經濟の變遷を見んとし、公債が景氣に作用した程度を公債と物價及之に關聯して輸出入貿易の上に、更に內外債が金利並に爲替相場の上に如何に影響したるかを數の上に檢討し、金融市場統制の必要より特に恐慌に際し採用せられたる公債政策の幾多の例を示し、公債の資金集中を媒介する傾向、近時大銀行の公債放資を述べて、不生產的國債の元利償還が納稅者の負擔となり、我が租稅收入の約六割は貧者に重き消費稅なるが故に、公債所有者の利害と相對立するものなりとした。

本位田祥男教授は「十七世紀末以前の金融と英蘭銀行の設立」を論じ、英蘭銀行以前、英國には如何なる金融機關ありしか、何故に新銀行起りしか、其の設立の動機並にそが株式組織となりし理由を明にし、當時英國の經濟一般の狀況を示した。河津暹博士は「投資

會社について」其の意義、經營、そが經濟社會との關係、並に各國に於ける其の發達の傾向、大内兵衞教授は「Finanz と云ふことば」に就て財政とは政治團體の貨幣に關することなること、其の用法の確定、附隨的な好ましからざる意義、起源に關し、趣味多き一文を草せられ、佐々木道雄氏は「債券價格表に就て」債券の評價　價格表、其の計算、並に利廻の計算に關し、種々なる公式を示され、和田佐一郎氏は「ハーパートのバロメーター」に就いて其の作成性能より、バロメーター構成の將來行くべき途を示され。最後に巻頭の明石照男氏と共に我が大銀行の重役であり、實際金融業に從事せられつゝ常に學的研究を怠らざる山室宗文氏は「昭和二年恐慌後の金融市場」と題し、金融恐慌とコールローン、國際中心のコール市場、署名手形の流通、資金偏在と金融緩慢、特別融通後の金融市場、等に關し、實際に考證しつゝ我が金融の狀勢を審にせられ、金解禁に關しては卽行論で昨秋本論起草當時を以て其の斷行の好時機なりとせられて居る。

三

本篇は孰れも金融を主題としたもののみで經濟論叢の多くは前後何等關係なき極めて高尙なる學理の論文を編輯するに過ぎざるにも拘らず、金融の重要なる多くの點に觸れ、苟も金融を解せんとするものゝ逸すべからざる好參考資料である。山崎博士還暦の記念として學界に貢献せらるゝ所極めて大である。紙數と日數を嚴重に制限せられ、各家の所說を審にし、之を批判すること能はざるを遺憾とする。（菊版、定價四・〇〇、日本評論社）

稅の話

勝正憲著

太田正孝

『租稅は吾等の會費である』といふのは、衆議院切つての租稅通といはれる勝正憲君の新著『稅の話』において、まア大衆に呼びかけてゐる言葉です。なるほど讀んでゆくにつれて複雜してゐる租稅理論も、この一語でピッタリと表現されてゐるやうに思はれます。

租稅論は、財政學中で始末のつけにくいものゝ一つです。しかも始末のつけにくいものがお互の生活に最も關係が多く、不景氣の世に苦しんでゐるのも、稅が高いからです。――これまでの租稅論の取扱ひは、あまりに冷めたすぎました。味がありません。――酒屋が

新刊紹介

自由日本を漁る（清澤洌著）　實際者の日本社會に於て自由日本を求むる人の時事的隨筆（四六版五五六頁、定價一・八〇、東京神田三崎町二の一博文堂出版部）

議政壇上を直視して（渡邊貫知郎編）　第五十六議會三ヶ月間の縮寫で議會中の雄辯家を語り、重要演說の內容を記し、優秀な漫畫を挿入して甚だ面白い（四六版四七六頁、定價一・五〇、東京府下蒲田町御園二二四、普選徹底會出版部）

ロマノフ朝の終末（大竹博吉監輯）　映畫的のテンポ、小說的な錯雜さを持つた內容である。當時の世相を彷彿せしめて餘蘊ない（四六版四三二頁、定價三・〇〇、東京麴町區內幸町一の五ロシア問題研究所）

勞働組合法の生成と變轉（山中篤太郎著）　勞働組合法を法律としてよりは社會經濟史の對象としての研究であつて、茲では英國のそれを取扱ふ。（菊判六七一頁、定價四八〇、東京神田表神保町二、同文館）

篁（北原白秋著）　著者のものせる長歌凡てを收む（新菊版一六九頁、定價二・八〇、東京神田北甲賀町四梓書房）

萬華鏡（寺田寅彥著）　著者年來の述作のう

滯納します。と役人は、けしからん引く〳〵れと申します。酒屋は『えゝまたか』と喧嘩を買ひます。双方の意思が疏通しないからです。税に對する考へが封建臭味からぬけ切つてゐないからです。勝君の近業は、この意味において、極めて有意義なサーヴイスであると思ひます。

ちか頃、學問の通俗化といふことを履きちがへて、賣り物にするものがあるのは、にが〳〵しいことです。夜店式の讀み物の多いのは、迷惑至極です。私たちは學問を通俗化することには贊成ですが、中味がカラッポであつてはいけません。通俗化が混亂化となつてはいけません。私たちの要求してゐるものは理論と實際の奥に徹して、磨きあげた——いはゞ、いぶしの銀の資格をそなへてゐるといつた讀物です。勝君の近業は、この要求をも十二分に滿してゐます。

著者は、まづ『租税が會費である』といふ理筋から面白く說いてゐます。たとへば——かつて新潟縣の某小學校で『我等は何故納税せねばならぬか』といふ問に對して、一生徒の答案に『我等の費用は我等が納めればならぬ』といふのがあつた。私はこれを讀んだとき恰も天が無心の兒童をして我々に國民的自覺を促したもの〳〵やうにさへ感じたのである——といつた調子です。おもしろいです。

つぎに『租税とはどんなものか』のくだりにおいて、租税の本質を如何にもあざやかに闡明してゐます。つゞいて、租税の歴史、租税の組み方定め方といふやうに、難解の租税體系論を見事に料理して少しの痕れを見せません。その手際は尋常ではありません。

『租税とは何ぞや』の問ひに一と通りの說述を與へた著者は、つゞいて『租税の行衞』を突き止めようと警告してゐます。日本人は税金のことをやかましくいふくせに、税金が濟んでしまふとケロリとしてゐます。會費である ならば、酒何本料理いくらといふやうに勘定するのに、國の費用となると、たとへばシベリアへの出兵で村の小學校が何萬も立つほどの國費が費されても、せい〳〵これを政爭の具に供するぐらゐのもので、國民はポカーンとしてゐるのですといふ風に、息もつかせずに讀ませます。

かうして最後に、所得税・地租・營業收益税相續税・登錄税・消費税・關税・地方税の諸税にわたつて細大もらさず、長く税務局にありし著者自身の經過による確からしきを以て實際に照し、分りやすく、かゆいところに手が屆く

ろより科學的興味を持つてそれを讀み、其た有益なる内容を含む。(四六版二二四頁、定價一・八〇、東京神田一ツ橋通九、鐵塔書院)

リンカーン(内ケ崎作三郎著)

グラッドストン(永井柳太郎著) 共に最もよき傳記物語(四六版三五〇頁、定價一・五〇、實業之日本社)

性教育(山本宣治著) 惜しくも兇漢のために仆れた氏の全集第三卷である。本書には將來氏が性學の一權威として、又解放運動の闘士としての萠芽が埋藏されて居る。(四六版四四五頁、定價一・八〇、ロゴス書院)

史的觀念論の諸問題(三木清著) 近來マルクス主義思想の普及と共に歴史の理論が一重要問題となつたが、本書は此の問題に對する觀念論の態度を理解せんとする甚だ有益な試みの一つである。(菊版二八五頁、定價一・〇〇、岩波書店)

性と社會(山本宣治著) 頗る豐富な材料に基いた「若い男の性生活」研究と「性教育講座」及びエリスの「性の科學」プロッホの「性學の使命と其目的」の譯とを收む。貴重な研究である。(四六版四六四頁、定價一・八〇、ロゴス書院)

わが批判者の批判(外村史郎著) プレハーノフ全集第十一卷「批判者の批判」中の本質

やうに說いてゐます。

本書の特色は、各ページの餘白を利用して一々興味本位の解說してゐることです。非常に參考になります。佐倉宗五郎を引ぱり出して、租稅の專斷的賦課時代を說いてゐるのです。尤も著者は彼の劃的事蹟には異論があるといつてゐます。

要するに、本文三百六十四ページは、一般人に對する要領のよい引き締つた租稅の解說書です。しかも學者にとつて實際家にとつても、暗示を與へられることが少なくありません。慾をいへば、租稅現象の經濟的意義の說明と最近の租稅問題についての解說とをしてくれたらばとおもふくらゐのものです。(四六版、定價一八〇、千倉書房)

木村秀吉著 哲學序說

三木清

哲學といふ言葉の語られるのを聞くとき、誰もすぐそれについて或る觀念を思ひ浮べることが出來る。我々は極めて自然的に、謂はゞ常識的に、この言葉に或る內容を投入してゐる。哲學そのものがそれほど自然的に、換言すれば我々の生活の中から、生れて來る學問であるからである。然るに若しひとが、このやうにして哲學といふ言葉に投入されてゐる內容が本來如何なるものであるかを、自分で反省するとき、または他の者から尋ねられるとき、彼はその內容をいまだ明瞭に把握してゐないことを見出すに相違ない。かくて彼は多少とも學問的に哲學を研究し、それに關する知識を得ようとするに到る。かゝる人々にとつて木村氏の書物はまことに適當な、出來のよい入門書である。問題が手際よく纒められて、甚だ平易に解說されてゐる。この書はこの目的に於て成功してゐるものと私は考へる。

その理由は恐らくかうであらう。從來のこの種の書物が多くの場合、專門的學問的見地からは重要であつても我々の生活常識に對しては緣の遠い諸問題、諸論點にまで立入らうとしてゐるのに反して、こゝではそのことがないのである。その立場を心理的發生史的な見方にとるところのエルザレムの哲學槪論によつてこの書が書かれてゐるといふこともその理由のひとつである。この立場が、その學問的意義はどのやうなものであれ、我々の生活常識にとつて一層親しみ易く、一層理解さ

的部分なる反ベルンシタイン論、反シュミット論、牛スツルーヴエ論の三編を收む(四六版四六九頁、定價一・五〇、叢文閣)

新支那訪問記(村松梢風著)　嘗て本誌に掲載された「南京」の卷其他を收む。(四六版二七〇頁、定價一・五〇、騷人社)

出版年鑑　一九一八年に於ける出版圖書の鳥瞰圖で便宜のもの(四六版一四六頁、定價一・二〇、國際思潮社)

文藝年鑑(文藝家協會編)　(四六版四一四頁、定價一・五〇、新潮社)

サヴエートロシア漫畫ポスター集(昇曙夢編)　革命ロシアに於て異常な發達と意義とを示せるポスター及び漫畫の粹百六十餘種を收錄す、革命側面史的にも藝術的にも面白い。(菊判、定價三・五〇、南蠻書房)

淨土の教義と其教團(石井教道著)　淨土宗學を論理的に組織し、且つ其教義の成立及教團制度の變遷を歷史的に演述せる好著、淨土宗の概念を得るに甚だ便宜である。(菊版、三八七頁、定價三・〇〇、寶文館)

近代英文學史(矢野峰人著)　同名舊著の改訂版である。近代英文學研究の序論とし手引として頻書中の一最高峰に位置すべきもの單に知識を提供するのみならず、暗示的でもありインスパイヤリングでもあらんとせる著

れ得いものであるといふことは疑はれないであらう。

一層學問的な見地に立てばこの書に對する我々の評價は異つて來る。それはあまりに常識と傳統とに追從してゐる。その目次に一瞥を與へることだけによつてもこのやうに云ふことが出來るであらう。例へば哲學の豫備學科の位置に心理學と論理學とが置かれてゐるしかしこのことは何等自明のことではないのである。それは單なる傳統である、そして我々はむしろかゝる傳統を毀すことによつて哲學を現在の不生産的な狀態から救ひ出すことが出來はしないかと反省してみなければならぬ。著者のよつてゐる心理的發生史的な立場もこの書の全體に限なくゆきわたつてゐないやうに見える。認識論の部分に於てはこの見方が主となつてゐるに拘らず、本體論の部分になると既にこのやうな說明の仕方が棄てられて、著者は主として哲學史的な說明を試みてゐる。この傾向は美學その他の後の部分に於ても現はれてゐる。一般に方法論的反省が著しく缺けてゐる。しかるに方法的でない限り學問的であり得ないのは云ふまでもない。心理的發生史的方法に對して既に多くの方面から向けられてゐる非難についても木村氏は十分に顧慮されてゐないやうである。

このやうに云はれ得るにしても、それだからといつてこの書物がそれ自身としてもつ價値にもちろん變りはない。讀者はそこに要領よく書かれた參考書をもち、それによつて彼の生活常識の要求を多少とも滿足させることが出來るであらう。

然しながら一層重要な點は他の處に横はつてゐる。人間の社會的生活の變化するに應じて、それぞれの時代に於て、彼等が哲學といふ言葉の中へ自然的に、常識的に投入するところの內容もまた異つて來る。哲學の自然的概念ともいふべきものが變化するのである。このとき哲學の學問的概念もまたそれに相應して變らざるを得ない。現に我々の生活はまのあたり目覺しい轉化を成就しつゝある。我々のもつ哲學についての生活常識はそれと共に變化することを餘儀なくされつゝある。木村氏の書はかくの如く變化しつゝある生活常識の要求に相應するものであらうか。私は遺憾ながら否と答へざるを得ない。そしてそれが決定的なことである。(菊版 定價 二・八〇 文資堂)

書の努力は殆んど充分に報ひられて居る。(菊版六三〇頁、定價三・八〇、第一書房)

神樂の研究(小寺融吉著) 神樂の形式に關する一般的研究である。民族藝術叢書の一(四六版一六九頁、定價一・〇〇、地平社書房)

生命の四大屬性(山川智應著) (小四六版五十頁、定價三〇、天業民報社)

群集社會學(新明正道著) (小四六版二八九頁、定價九五、ロゴス書院)

阿佐緒抒情歌集(原阿佐緒著) (四六版二九二頁、定價一・八〇、平凡社)

スパイクの跡(人見絹枝著) (四六版四〇六頁、定價一・八〇、平凡社)

情熱的論理(北村兼子著) (四六版六〇四頁定價一・八〇、平凡社)

衞生長壽法(三宅廉著) (菊判四〇八頁、定價二・五〇、富山房)

詩集野(木山捷平著) (四六版八三頁、定價八〇、抒情詩社)

教育技術學(鈴木德成著) (四六版二〇五頁定價一・五〇、光學堂)

小說靜夜曲(吉田絃二郎著) (四六版五三〇頁定價一・八〇、東京牛込矢來新潮社)

角兵衞獅子(大佛次郎著) (定價一・五〇、東京本郷駒込上富士前先進社)

スプリングコート兼用

バーバリーレインコート

英國製と同樣の生地を用ひ純國產品。品質も仕立も非常に吟味されたもの、色は紺及茶系統の最も嶄新な流行色。

寸法襟下鯨二尺六寸より二寸每に各種

定價　一着　十九圓



純良レインコート

上質の羽二重にゴムを裏付して、上品な縞柄を染出したもので如何なる豪雨にも絕對に水の透る事なく、折疊んでサツクに入れゝば少しも嵩ばらず、一番輕量で、夏期流行中突然の急雨に備へるには最適。色はネヅミ、茶、テツ系統の最も嶄新なもの。

定價　一着　十三圓

送料東京市內十二錢・內地二十七錢・領土五十五錢

小型活動寫眞撮影器

本社代理部特選のシネニゾー小型活動寫眞撮影器は、科學の國ドイツの最優秀品です。

シネニゾーは自動式と共に手動式を兼ね一齣づゝの撮影から、高速度撮影に至るまで小型活動寫眞撮影器としては他に見られない一切の條件を具備してをります。時には撮影者自らの姿を撮る事も出來、高速度撮影では飛び交ふ小鳥のみ巧な空中の動作を分解する事も出來、シネニゾー一臺を持つ事によつて本日の行樂を永遠の生ける記憶として隨時隨所に再現する事が出來ます



定價　九ミリ半用　百六十圓以上
　　　十六ミリ用　百六十五圓以上

先づカタログを御覽下さい。

ガリレオ双眼鏡

本器は普通オペラグラスと云はれてゐるものゝ中で、最優秀品です。高級な光學ガラスのレンズ十二枚使用、嚴格な試驗濟ですから、レンズの周邊まで明るく見る者の眼に愉快な感じを與へます。

定價　A(少しく小型)十八圓　B十七圓

送料　東京市內十二錢、內地十八錢。領土四十五錢

經濟と實用とを兼ねた

替ズボン

地方在住の方々のために、最も經濟的實用的な替ズボンを左記の特價で提供致します。

茶褐スレン園藝用　二圓十錢

鼠綿綾セル執務用　二圓四十五錢

黑セル　五圓四十錢

上等黑・紺セル　五圓八十五錢

絹セル黑・紺セル　七圓

鼠フラノ(蒲ラシヤ)　六圓

夏物

白地縞綿セル　二圓三十錢

白綿ギヤバジン　三圓二十五錢

純毛白絹セル　八圓八十錢

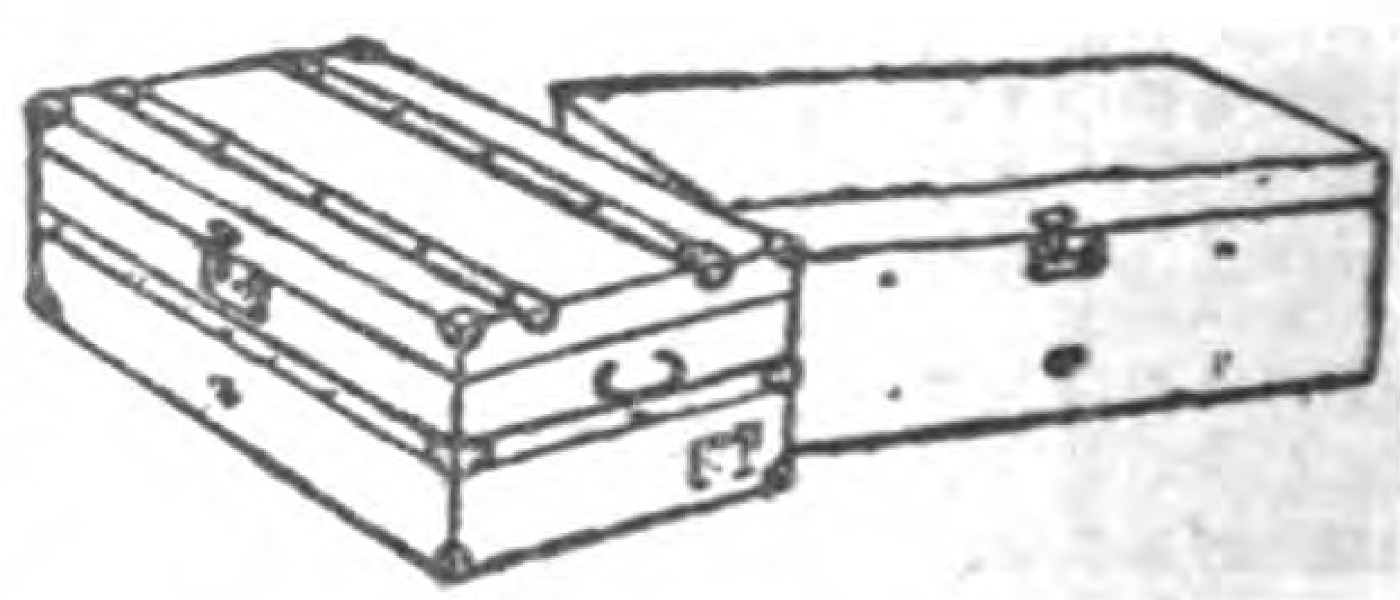
寸法

	腹廻	股下
大	鯨約二・五尺	約一・九尺
中	二・三尺	一・八尺
小	二・二尺	一・七尺

送料　東京市內十二錢　內地十八錢　領土四十五錢

昭和文庫

厚い鐵板張り、タテ二尺七寸、幅一尺二寸、厚サ八寸五分の堅牢な容器で、內壁の四方を丈夫な木板で圍み、中にナフタリン擋鹽入れを備へ、外面には漆の燒附けを施して立派に仕上げ、絕對に外氣の侵入を防ぐ樣工夫された、毛織物又は貴重書類等をしまつてをくのに必須な品です。



特製はトランクとして、そのまゝ送り出す事が出來、鐵筒や支那鞄より遙かに便利です。

定價　特製　九圓八十錢
　　　並製　六圓八十錢

送料東京市內十二錢　地方運賃先拂

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備した特殊紙製品で、而も洗濯が出來、布よりも丈夫です

改正定價　大一圓　小六十錢

送料　東京市內十二錢　內地十八錢　領土四十五錢

萬能書見臺

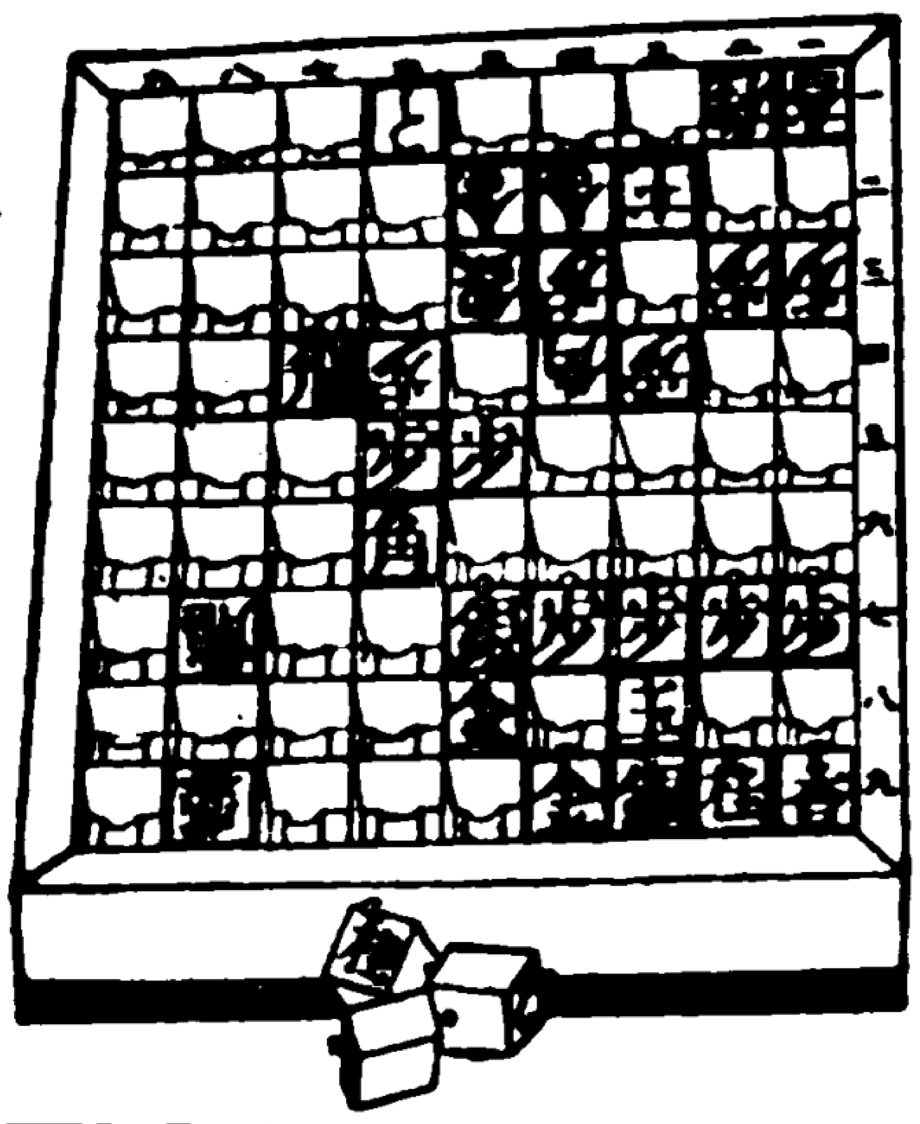
小には机上の書見臺から、大には約五尺五寸位までの自由な高さになり、腰掛けて見る場合、寢て見る場合等には各々に適合した形となり、書架の部分には頁止めを附してありますから、夏期緣蔭に立てても風に吹きめくられる心配もなく、音樂用の譜面臺にも好適、屋外ではスケッチ用の畫架ともなり、橫に曲げて氷嚢つりとなり、寢臺に取附ける事も出來ます。

大部分は鋼鐵製ニツケル鍍きの、木箱入携帶至便、分解組立共に自在な、文字通り萬能書見臺です。

寢ながらの書見には、下向の書物を完全に把持し、而も高低左右角度長短傾斜等、意の欲するまゝです。

定價　一臺　八圓五十錢
送料　東京市內十二錢內地五十五錢領土八十五錢

最小型將棊盤



縱三寸七分橫三寸二分厚さ五分の最小型輕便將棊盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから、ポケツトに入れて少しも重く感じる事なく、駒には一個一個磁針が附けてある等、婦女子の眼にも可愛らしい程のものです。

駒は標準文字を用ひ、盤には縱橫に數字が記されてありますから、新聞を見ながらの研究には一層便利です。

其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に、或ひは机上に、或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價（駒全部附）一圓八十錢
送料　東京市內十二錢　內地十八錢領土四十五錢

最新艶出布

このフレツシユマン　ダスト　アブソーバーは、特殊の毛織物に機械的工程と化學的處理とを施したものでありますから、器物固有の塗色を損ずる事は決してありません。

この布は從來の艶ふきんと異り、埃りを吸ひ取りしかも美しい艶を出す不思議な作用を有して居ります。

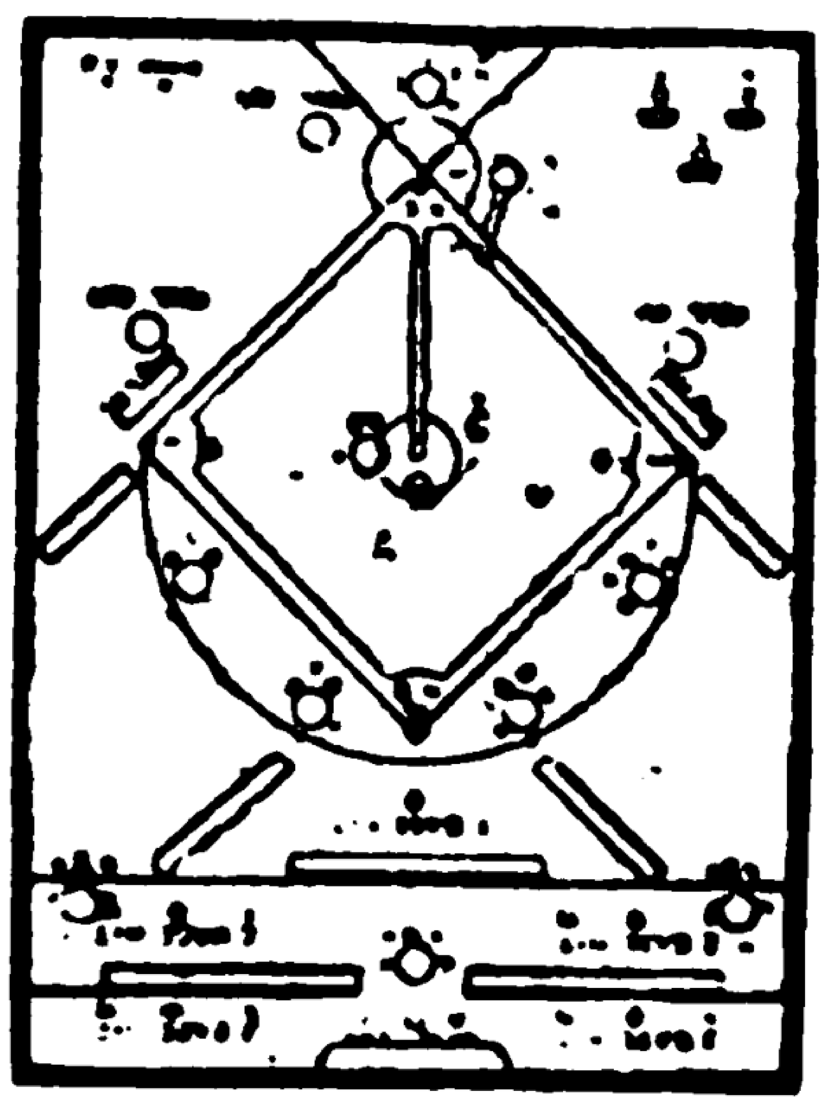
漆器類、殊に蒔繪の器具、ピアノ、オルガン、卓子、自動車等用途は中々廣く蓄音器のレコードをこの布で拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。

定價（金屬製容器入）一圓
送料　東京市內十二錢內地十八錢領土四十五錢

誰にも愉快な　野球競技盤

約二平方尺の盤上へ野球の實戰と同じ興味と緊張味を移す事に成功したのが、この高級式野球競技盤です。

盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、投手は既にあてた指の力一つで、直球、曲球、軟球、剛球自由自在に出す事が出來、打手も亦選手がボツクスに立つた時以上の緊張した氣分で、バツトの振り方で美事本壘打を飛ばす事も出來れば油斷をすれば投手に好く計られて、三振「アウト」にされて了ひます。



實戰に臨む人はもとより、野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尙な新らしい家庭遊戲として、一般の家庭におすゝめ致します。

定價　小　型　一圓三十錢
　　　中　型　三圓八十錢
送料　東京市內十二錢內地小型は十八錢中型は二十七錢領土小型は四十五錢中型は五十五錢

スマドレ・ヘヤトニツク

このスマドレ・ヘヤトニツクは米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニユーヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に愛用されてゐるものです。

洗髮後や朝夕に數滴を毛髮の根元に振りかけて、指頭で輕くマツサージしてをけば、フケを除り拔毛を止める事は妙であとには得も云はれぬ芳香が永く殘り、使用するにつれて、毛髮は絹の樣に軟くなり、日々漆黑の美を增します。

定價　婦人用 紳士用　特大瓶各二圓五十錢
送料　東京市內十二錢內地十八錢領土四十五錢

スマドレ・シヤンプー

理想的洗髮液スマドレ・シヤンプーは短時間に地肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り爽かな艶のある美しい髮にする一方、ちゞれ毛や、癖毛を直す事は全く不思議な程で、スマドレ・ヘヤトニツクと共に、ニユーヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる世界特許品です。

日々忙しい社會に立つて　男子の髮を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、毎もさつぱりとした髮で、自他共に氣持ち良く會談する事が出來ます。

定價　特大瓶　二圓
送料　東京市內十二錢內地十八錢領土四十五錢

春と夏の香水

此の頃は一般に一年中香水が用意される樣になりましたが、それも毎も同じものでなく、その時々の氣分に應じ、出る場所に應じて、變つたものを用ふるために、中央公論社代理部で特に四季の香水を選りました。

中でも、すがすがとした春の梅、夏の鈴蘭の香水は、今りものとして是非おすゝめ致し度いもので、贈答品にもふさはしい樣、素敵な體裁の函に納めてあります。四季何れでもお好みのまゝにお註文下さい。

定價（春・夏・秋・冬）各二圓
（四季組合せ）七圓五十錢
送料　東京市內十二錢內地十八錢領土四十五錢

御注意

◇振替は、一番安全な送金法ですが、普通近い所で四日位かゝりますから、その御積りで、毎も御註文は少々お早目に願ひます。

スタイルセット

油やアルコールを含まず、しかも艶りさばさばしない理想的の新養髪料で、香水とポマードとを兼ねた合理的新製品です。使法はまづ髪を少量の水で濡らして(髪全體にゆきわたる様に塗りつけ、後は普通に梳で自由自在の型に整へます。

定價　六十錢
送料東京市内十二錢。内地十八錢
領土四十五錢

にきび取美容水

脂肪過多で年中にきび其他の吹出物が出來てゐるのは男子でも隨分に見苦しいものです、このにきび取美容水はさうした人のために造つたもので、これを常用すれば何日の間にかにきびも吹出物も忘れてしまひます。但し荒れ性の人には適しません。

定價　一圓五十錢
送料東京市内十二錢、内地十八錢
領土四十五錢

ユトマポマード

毛髪の愛護を兼ねた純良なポマードを簡單輕便な容器につめたものです。使用法は蓋をとつて容器から直接に毛髪に塗りつけるだけで、少しも手に脂がつかず使はれた丈の脂は常に表面の紙を破つて出て來る装置の、一抹の無駄もない至極便宜な、殊に外出前の急がしい髪の手入れや旅行先での使用には一層便利を感じます。

定價　六十錢
送料東京市内十二錢、内地十八錢
領土四十五錢

シエービング ローション

顏剃、髭剃りの後につけると、剃刀まけもせず、肌を締めたいので好評を得てゐます。粗悪品と異り、ぶつぶつの出來る心配もない、完全な皮膚の保護料です

定價　一圓五十錢
送料東京市内十二錢、内地十八錢
領土四十五錢

バレイ安全剃刀

バレイ型完全且簡便な優秀品は只今の所どこにもありません、如何な場所でどんな素人にも、毎日研ぎたての刃で剃る事の出來る爽快さ、そして一枚の刃が半年以上も毎日の使用に堪へ、經濟的にも他の普通の安全剃刀の比ではありません。

(C型(替刃二枚付)　一圓五十錢
同　二圓
B型(ニッケル函入上等品)　十三圓五十錢
送料東京市内十二錢、内地十八錢
領土四十五錢

インターナショナル式 新聞綴器

近來の新聞はみな欄外が狹くなつたために普通の新聞綴器では折目に近い部分は讀む事が出來ず一々はずすのは割りに面倒極まると云ふ缺點を完全に一掃した、新工夫の新聞綴器です。本器は新聞を挾んだまゝ欄外までも完全に讀む事が出來、又新聞紙面で任意の一枚でも容易に取はずせる點に最も工夫をこらした、凡そ新聞を讀む家庭には是非備へたい品です。

定價　一圓二十錢
送料東京市内十二錢、内地十八錢
領土四十五錢

アテナ萬年筆

使ひ出せば、間もなく執筆者の手と共によくなじみ、使へば使ふ程いよいよ書きよくなると云はれ、舶來品に勝る國產第一の優秀品です

定價　三圓五十錢　四圓　四圓五十錢
(両切吸入式)　三圓五十錢
送料　内地十八錢　領土四十五錢

除毛劑タキー

顔に危險な剃刀を用ふる時代は過ぎました、このタキーは、手足、腋の下、襟髪任意の所に塗つて五分乃至十分後に水で洗ふと、剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり毛が取れてしまひます。これを數回繰返へして使用する間に、次第に毛が毛色の弱いものとなり、遂には全く發生しなくなつてしまひ、又腋臭を除く效果があります。

皮膚に害はないかと云ふ問合せが澤山參りますが、一個毎に添附の說明書に反した使用法をせざる限り、全く無害で、效果は一層確實です。

定價(マスクリーム付)一圓二十錢
送料東京市内十二錢、内地十八錢
領土四十五錢

新發明の産兒調節器

獨逸製オクルサトルは、海綿様纖維質の部分と絶對に水液の通過を妨げるゴム被膜と把柄から成つてゐる新發明の産兒調節器です。

このオクルサトルに添附の殺菌用發劑を挿入して使用すれば、殺菌は内部で溶解してカーボニックホームを形成致します。この泡は隙間なく浸り、精虫はみな殺されて了ふもので、オクルサトルの海綿部分はこの殺菌液を吸收して萬一への用心に備へいたします。

オクルサトルは、構造に簡單で且巧妙に工夫されてをり、實際使用中でも、本人自身氣がつきません。これは永久的使用に堪へるものですから、二回目からの御注文のために、別に殺菌劑だけが用意されてをります。

一度お產した人までは　〇番
三度お產した人までは　一番
四度以上の人は、二番を使用
定價（殺菌劑十二個附）　六圓
殺菌劑のみ十二個　二圓
送料東京市内十二錢、内地十八錢
領土四十五錢

痔の妙藥 ネオラヂオリン

慢性痔病にも、急性痔病にも著しい效果を持つネオラヂオリンは、驚嘆的なきゝめありと、某醫學博士も推奬されて居ります。

定價(大)　二圓　(小)一圓
送料東京市内十二錢、内地十八錢
領土四十五錢

オプチサナ

獨逸製品の偉力は世評の認める所ですが特にこのオプチサナはせきを止めるに著しく效果があります。甘くておいしいので百日せきの子供も喜んで呑み、一週間服用すれば效目があらはれ、殊にぜんそくのせき止めには賞はれてゐます。

各所々から讚賞の便りつた注文がありましたが、今後十個以上纏つた御注文には、多少の割引をいたします

定價　二圓
送料東京市内十二錢、内地十八錢
領土四十五錢

華僑物語

長永義正

支那を動すものは華僑である。

少くとも、清朝末期から今日までの間、支那の政治的經濟的推移に華僑がいかに大きな役割を演じてゐたかを見逃してはならない。孫文が三民主義革命のため東奔西走のとき、蔣介石が國民革命の大旆を翳して廣東出師のときにも、華僑はその力強い支持者であつた。民國十四年の五三十事件に端を發し、漸く瀕發した支那の排外風潮に、直に呼應する聲援者は實に華僑であつた。ごく最近、澎湃として擡頭した經濟獨立、國貨提唱、産業自主に敢然投資、後援せんとしつゝある者も華僑である。

わが國の海外移民が年額五六千萬圓の送金をなし、僅かながらも國際貸借の改善に資してゐる以上に、この華僑は本國の政治外交と經濟に極めて密接な關係を持つてゐることを忘れてはならない。

過去の華僑

華僑の僑は僑居の熟語に見るやうに一時的在留の意味ではあるが、支那人が普通に解してゐる如く、また Prof MacNair が華僑研究の著書に題して"Chinese Abroad"とした如く『海外に在る支那人』と解して置きたい。支那人の海外移住の古く、かつ有名なものは秦の始皇から頼まれて、東海蓬萊島に不老不死の仙藥を採りに出た方士徐福であつた。徐福は童男童女數千と共に紀伊の熊野に漂着歸化したといふことであるから華僑の先驅者であつた譯だ。唐の時代には南方經濟人いはれ、海舶の往來旺盛となつたが未だ移住を出すまでには至つてゐなかつたやうだ。宋の時代に入つて、宋史地理志の記す如く、福建の土地迫隘、生籍繁夥、磽确の地と雖も耕耨殆んど盡すと、支那移民の近代的原因がすでに萠芽を現してゐる、と同時に泉州を中心に移民の端を開いてゐる。元の世祖が兵二萬を派してボルネオ、スマトラを南征し、爪哇に至つて大敗した。この敗軍の一部が爪哇に土着し南洋華僑の元祖をなすものだとも稱される。明の成祖永樂三年(一四〇五年)三保大監の鄭和は六十四隻の大船に二萬八千人を載せ、南洋を巡遊して威を海外に示した。鄭和は永樂三年から宣德八年(一四三三年)の間に七度の航海を續け、スマトラ、マラッカ、錫蘭、印度、波斯等三十餘國を歴訪してゐる。南洋華僑の間に『三保大監西洋を下す』と俗傳せられてゐるのは、この明初の盛事を指すのである。明史呂宋傳に『是より先、閩人(福建人)其地近く且つ饒富なるを以つて、商販に至る者數萬人、往々久しく居して返らず、長く

子孫に至る」と記してゐるのは元宋の移民を指したのであらう。今日、南洋華僑の中に十數代の家歷を有してゐるものあるは恐らくその子孫であらうと、いはれてゐる。

明に次で、滿人の鐵騎、中原を蹂躪するに及んで時の遺老義民は漢族の淪亡に忍べず、洪門會を結んで祕かに反抗し、あるひは亡命者避難者として南洋の天地に去つたものが少くない。

アメリカの華僑の中にはなほ洪門會館（あるひは致公堂）を立てるものが多いが、これは反淸復明をモットウとした明朝遺老の傳統を續いだものである。

獨り淸朝だけではなかつたが、海外移住に對する禁止的態度は淸朝が特に峻嚴を極めた。大淸律例二二五條には、人民の海外に至る者は盜に通じ敵に通ずる罪に等しく斬首の刑に處する、と規定してある。北方に興起した淸朝が南海を顧ることを怠つてゐたのはその一の理由ではあるが、南海に於る明朝遺臣の占據、三藩の亂、海賊の跋扈等は明の政策に反して海外通商、移民に抑壓政策を採らしめるに至つたのである。事情は異つてゐるが時を同ふした德川の鎖國政策と對比して面白い現象であらう。淸朝の海外移民に對する態度は斯の如くであつたから、乾隆五年（一七四〇年）オランダ人が爪哇の華僑六萬餘人を慘殺した事件があつても淸朝はこれを明かに知りながら拱手傍觀した。

十九世紀に入つてアメリカ其他に於る奴隷解放は低廉な賃銀勞働者として支那人の需要を喚起した。澳門、香港を中心に所謂猪仔貿易が開始され、誘拐強迫によつて多數の支那人が西印度、南米等に送られた。これらの支那人は一種の奴隷とも見るべく、勞働を強制され、その取扱は全く文字通り豚の子同樣で慘悲を極めた。實に、淸朝の海外渡航禁止の方針が外人に斯の如き奸策を行はしめる原因となつた。咸豐八年（一八五八年）の英支條約、十一年（一八六〇年）の露支條約によつて、初めて支那人に海外渡航の自由が認められた。猪仔貿易はこれによつて廢され、契約勞働移民として多數の支那人が南洋を中心とする世界の各地に流れ込んだ。實に、當時、汽船といふ新しい交通機關が東洋にも出現して、極めて多數の支那人を世界の各地に送つた。賃銀の低廉と、勤勉と、刻苦に耐へ得る支那人の性情は勞働者の乏しい各國屬領の歡迎するところであつた。

前述のやうに、華僑は古い先祖を持つてはゐるが、今日の旺盛を來したのは實に十九世紀の後半に行はれた勞働移民によつてゞある。十九世紀の末から廿世紀の初めにアメリカ、濠洲等に黃色人勞働者の入國禁止が行はれ、南洋華僑の居住地の官憲がその取締を嚴重に行ひだしたのは、勞働の供給が飽和狀態に達したゝめである。支那人勞働者の必要な場合には猪仔貿易といふ非人道的な手段によつてさへも吸收した先進國が、すでに今日、その必要を滿したのと、若干の脅威すらも華僑の存在に感じ初めた。華僑居住地の官憲が今日、噛んで吐き出すやうな態度をとりつゝあるのもこんな理由からである。

華僑の生活

支那本國の人口數さへ正確に知り得ないの

であるから、海外在住支那人數を求めることは無理である。從つて、いろ〳〵と推定される。最少數は六百萬人（小林氏）、次は六百三十八萬人（陳氏）七百萬人（モールス氏）七百十三萬人（中國年鑑）七百六十三萬人（支那政府駐外領事調査）八百六十七萬人（支那政府農商部發表）といふ譯であるが、マックネイル教授は少くとも八九百萬人の華僑があると見てゐる。

この八九百萬の華僑が、どのやうに分布してゐるかといへば、恐らく世界の隅々までその姿を現はさないところはあるまいと思はれる程に廣汎な地域に散布してゐる。國旗の翻るところ、太陽の照さゞるところ無しとヂヨン・ブルが誇るのなら、人の住むところ何處においてもあの悠長な黄色の顔と支那服の姿を現はさゞるところ無しと、新興中華民國人は誇るであらう。それほど彼等は黄金と安住の地を追つて世界の端々まで隈なく步るいてゐるが、華僑の中心地とし集團的な勢力を把持してゐるのは所謂南洋華僑である。南洋といへば、中國々民黨の規定する南洋總支部の如き僅にイギリス、和蘭の南洋に於る屬領を指すに止るが、普通には佛領印度支那、暹羅、緬甸、馬來半島、スマトラ、ヂヤバ、ボルネオ、フイリッピン等一帶を包括して南洋と稱してゐる。

しからば、これらの南洋華僑はどんな生活をしてゐるであらうか。

佛領印度支那の華僑數は三十五萬人と稱されサイゴン市に連接するショロン市が華僑の中心地で、カンボヂヤにも華僑の數は少くない。安南、トンキンの北方には多く居住してゐない。佛領印度支那の華僑の多くは商人で米の輸出と廣東の生糸陶器の輸入に土人とフランス人の仲介に立つてゐる。筆者はカンボヂヤの首府プノンペンで彼等が殆んど商權を獨占してゐる盛況を目擊した。單に、これらの都府地のみではなく數十人の土人部落にあつても雜貨をひさぐ小賣商人が殆んど華僑であることを見た。土人の遊惰に乘じて、中小商業の實權を握つた彼等をフランス官憲が次第に忌み初めたのは故ありとせねばならない。

歷史的關係からもシヤムの華僑は多い。全人口の一割に當る七十萬人は華僑で、その首府バンコックには廿萬人の華僑が居住してゐる。概して、シヤム人は對外的偏見がなく、支那人もこれに對しよく同化してゐるのでシヤムほど濃厚な混血關係の國はないと稱されてゐる。『シヤム全國人民と中華民族は血統上の密接な關係があり、シヤム人中の優秀分子の八九割は我族の子孫である』と、ある支那人の著書に傲語してゐるほどである。

シヤム華僑の大多數は廣東の潮洲人で、次は瓊州人である。バンコックでは潮州語が普通語として用ひられてゐる。廣東人華僑の三割は行商に從事し、農耕に從事する者五割、船頭、漁夫、開墾、等の勞働に從事する者が三割といふ有樣で、シヤム全土、窮鄕、僻港山野、深林といへ華僑の足跡いたらざるなしといふ有樣である。シヤム華僑の經濟的活動は輕視することが出來ない。金融、保險等華僑の手によつて行はれてゐるものが少くない。特にシヤムの特產品である米木材の輸出は華僑の手を經なければならない。華僑にとつて理想鄕であつたこのシヤムも、近年新

興の氣運旺盛で、各種の改革が行はれ大分に華僑の自由が利かなくなつた。從來、華僑がシャム婦人との間に生んだ子女は支那籍に入つたものが新しい法律によつてシャム人籍に入れられることになつた。また、華僑の設ける學校の校長、敎員はシャム語に通曉せねばならないといふ制限も設けられた。一面から見れば、シャム人のシャムといふ新氣運の擡頭であるが、華僑には少々苦手な變革である。

單に、シャム華僑に限つた譯ではないが、華僑の生活には鄕土を異にすることによつて生ずる鬪爭反目が可成りに濃厚である。同じ華僑といつても潮州人と廣州人とは氣風が相當異つてゐるから、各々黨派を結んで相反目衝突してゐる。この支那人の通弊はどこの華僑にも拔け難いものとみえて至るところに暗鬪明爭を繰返してゐる。もう一つ、シャム華僑の惡い風俗は蓄妾で、女敎員の如きも甘んじて妾となり、女子學校の男敎師中四五名の妾を蓄へてゐるものがあるとさへいはれてゐる。

馬來半島の總人口數は一九二六年六月の調査によると三百三十五萬人で、その中、百十七萬人が華僑である。半島の南端シンガポールだけで華僑は三十二萬人、全島人口の四分の三を占めてゐる。馬來半島の錫鑛とゴム園は殆んどこれら華僑の勞働に依つてゐる。小賣商人を營む華僑も少くない。また、金を蓄へてゴム園を經營する者も可成あるやうである。世界の錫産額の半ばを占める馬來半島の錫鑛が、華僑の勞働によつて採掘されてゐることは華僑の誇りとするところである。シンガポールの辯護士で民國二年廣東の高等廳長であつた黄兆珪氏はいまヂョホール王の議政員の職にあるが、ヂョホール王が議政員の榮職を彼に與へたのは、彼の父黄福がヂョホールの開拓に功勞があつたからだといふことである。先王がヂョホールに遷都したとき、ヂョホールは今日の繁盛な夢想だに出來ない荒涼の地であつた。先生は華僑の力を利用してこの新都を賑はそうと華僑を重用した。その王妃も潮州出身の支那人であつただけ萬事都合よく運んだらしい。このころ、王宮に出入してゐた黄福といふ至極誠實な大工さんがあつたが、王と王妃のお氣に入りで新宮建築の請負にとやかくと盡力したといふことである。黄兆珪氏はこの黄福の長子で、父の功によつてヂョホール王政に干與するに至つたのであるといふ。これに徴しても馬來半島は半ば支那人の國となつてゐる。

馬來半島だけではないが、南洋一帶に喫茶店、ホテル、汽船、家庭のボーイは廣州人が大部分を占めてゐる。また、喫茶店の經營者は多く廣州人であるが、若し廣州人でなかつたならば、茶を煮るために必ず廣州人を雇つてあると思つて間違はない。と、いふのは廣州人が珈琲を炒つたり煮たりすることに獨特の妙技を持つてゐるからである。

蘭領東印度の華僑はその數七十萬人と稱されヂャバ一島だけでも三十萬人から住つてゐる。バタビア、スマラン、スーラヴイヤの三都市が華僑の中心地で、これらの街に五萬人以上の華僑が居り、その他はバンカ島、スマトラの東海岸に居住してゐる。華僑の多くはまづ中等階級の生活をしてゐるが、職業は主として土人とヨーロッパ人、日本人等の間

立つて小賣商、輸出入ブローカーをなしてゐる。中には大商店、大工場、大農園を經營するものもあり、單なる勞働者の數も少くはない。

バンカ島の華僑は大部分が客家族(Hakkas)である。客家は古昔、福建地方から侵入して來た北方の漢人兵士が土人の婦人と混血して出來た民族で廣東省の梅縣を根據として廣東省の北方一帶に居住してゐる。體力强健、いかなる困難にも耐へ得るといふ移民向の民族ではあるが、本國では下層階級の生活をしてゐるので一般からは輕蔑されてゐる。しかし客家とて決して馬鹿には出來ない、淸末一世を震駭した長髪賊の頭領洪秀全の如き廣東省花縣の客家族であつた。今日に於ても、南洋華僑の客家族の中で財的に成功してゐる者は少くない。

南洋華僑の中で南洋に生れたものが約二割を占めてゐることは一寸驚かされる。この種の南洋生れの華僑を峇峇(ババ)(Baba)と俗稱されてゐる。峇峇は勿論、支那語でも馬來語でもないが、Bapa(父)といふ馬來語の類似發音語から轉化したのではないかといふ說もある。蘭領東印度では同地出生の華僑を馬來語でPranakans(プラナカン)(土地ッ子)と稱してゐる。この南洋生れの土地ッ子と支那から來た移民(新客といふ)とは思想感情の相違するのが當然で、元は同じ支那人同志でもいろ／＼の反目を重ね、各地に面白からぬ空氣を作つてゐる。

華僑の生活を詳述すれば際限が無い、南洋華僑の生活振でその一斑が現れるやうに、主として商業と勞働に從事する者が多い。例へば、北米合衆國では洗濯夫やコックに、シベリヤでは農夫にといふやうに、その土地／＼によつて從事する仕事に相違はあるが、最初は勞働移民となるのが定例のやうだ。勞働してゐる中に小金を蓄へ、小賣商を初め、次に經紀商(ブローカー)となり、大商人あるひは大農場主となるのが彼等の成功の目標である。勞働を許されない日本ではまづ『瀨戶物サランパン直します』と怪しげな言葉を操つて歩く。次は、日本製の繭紬を背負つて『支那ケンチユ買ワンか』と戶毎に訪れる。サランパンからケンチユーに至れば彼等は多少の小金を蓄へたのだ。繭紬賣りで蓄へた金を持つて本國へ歸るか、神戶橫濱に店舖を持つに至ればまづ尋常の成功である。しかも、この間、彼等の刻苦精勵はたゞ／＼驚嘆に價するのみである。

本國との關係

廈門(アモイ)のコロンス島を訪れた人は、あふれるやうな日の光と、靑々とした榕樹の影に包れた幾十百の瀟洒な建物を見たであらう。この島に住む過半の人々は華僑成功者で、常夏の國に餘生を樂んでゐるのだ。上海のフランス租界に、極めてモーダンな建物、出入には自働車を驅り、觀劇と麻雀に日を送る幾十百の家族のあるを知つてゐる人が多からう。華僑成功者が、いかにして過半世の勞苦をねぎらはんかと歡樂を漁る生活であり、その子女が餘慶に浴する生活振なのである。コロンス島やフランス租界のみではない廣東、福建の片田舍に、紅磚白堊の壯麗な建物のたちならぶ村落をみるであらう。これらは華僑の家族がその仕送りによつて生活する一面なのである。

華僑が一年にどれほど故郷に送金するか、その推定額は區々であるが、一億五六千萬弗には達しようとみられてゐる。華僑の送金期である舊正月前には廣東、福建方面へ銀の移出が旺盛に行はれるので、上海の銀市場にも影響を及すといふ程であるからその旺盛さを察しられやう。この送金が年々二三億兩からの輸入超過を示す支那の對外貿易をいかに救つてゐるか、この華僑の送金なかりせば、支那の國際貸借はとつくの昔に破産してゐたであらうとさへ思はれるのである。

最近では華僑が單に送金するのみでなく、資本を擁して歸國し、母國の振はない産業界に投資しやうといふ傾向さへ現れて來た。支那の代表的百貨店（デパート）先施、永安公司なども華僑の出資によつてゐることは贅言するまでもない。今や、各方面への投資によつて、資本の乏しい本國財界に力を貸そうとするのが目立つて來た。華僑の勢力は單に本國財界に對してのみではない、本國の政治外交にも相當力強い影響を與へてゐる。

民國革命の先驅をなした孫文の興中會などもアメリカの華僑を糾合して創立されたものであるし、革命の中樞をなした中國同盟會などもアメリカ、南洋等の華僑がその主な會員であつた。華僑が孫文の革命運動に財的支持を與へたのみでなく、青年華僑の中には身を挺して革命運動に參加する者も少くなかつた。蔣介石が北伐のときにも、その軍費は華僑に仰ぐところが多かつた。

民國十四年の五三十事件——支那が最も露骨に排外風潮を示した劃期的事件であつた——に行はれた殆んど全國的の罷市罷業罷課の運動資金は華僑の出資が少くなかつた。おそらく、華僑はこのとき數百萬元の寄附を行つたであらう。最近では、濟南事變後の排日、排貨運動に南洋華僑がいかに熱心に共鳴したか。——日貨を購つたゝめ耳を切りとられた華僑がある。不買、不賣を飽迄も強硬に守つて彼等は本國の排日運動に氣勢を添へたのであつた。

國旗の保護を全く受けず、單身、忍耐と勤勉のみを味方に、海外に奮鬪しつゝある華僑の身にとつてみれば、本國支那が速かに近代的な統一した國家になることは最も熱望されることであらうし、また、彼等自らが海外で體驗する國際的障碍を同じく本國が蒙むつてゐることは耐へられない苦痛であらう。彼等は本國支那が統一和平の國家に向ふ革命に贊助を惜まないと同様に、不平等な國際的地位を脱せんとする外交策としての排日運動にも加擔するに躊躇しなかつたのであらう。華僑が本國支那の政治、外交、經濟に無關心でゐられないのは彼等がたゞ海外に在るが故である。海外に生活した何人でもこの華僑の心持をくむことが出來やう。

華僑の起す問題

華僑が本國に對しかく力強い關係を持つてゐる上に、國民黨とはその革命運動の當初から少なからぬ因縁を有してゐるので、國民政府の華僑對策も相當行屆いたものがある。民國十五年の國民黨中央及び各省區聯席會議で決定した政綱には華僑に對し、一、法を設け華僑居留地に在つて不平等の待遇を得せしめる。二、華僑の子女にして歸國求學の者に

當の便利を許る。三、華僑が歸國して實業を興辦せんとするものには特別の保護を與へる、の三綱を掲げてゐる。さらに、同年國民政府は華僑の保護取締其他一切の事務を司るため僑務委員會條例を公布した。民國十六年十二月に僑務局を外交部に設けたが、この僑務委員會は民國十七年十月の國民政府行政院組織法によつて行政院に所屬することゝなつてゐる。民國十七年十一月、華僑興辦實業條例が公布され（華僑關係の法規はなほ數多あるが）着々として國民政府の華僑尊重の政策が實施されつゝある。排日貨の急先鋒をつとめる南洋華僑と、さらにこれを利用して對日外交の具に供しやうとする國民政府、國民政府の華僑對策が成功すればするだけ兩者は氣合をあわせて日本の外交と南洋貿易を壓迫し來るであらう。南洋華僑の手によつて少なからぬ商品を消化せしめてゐるわが製造工業と貿易業にとつては、この華僑と國民政府の風潮に對し、如何にして商權を維持するか？わが財界にとつては決して輕視を許されない問題である。

次に、華僑自身の問題としては、列國の華僑壓迫といふ大きな痛手が伸びつゝあることである。支那初期の社會主義者であつた江亢虎氏は南遊廻想記にこんなことを云つてゐる『南洋の各地に往けば、支那人の眞の地位を見ることが出來る。白人種の士女は支那民族を直視して野獸とし、洋裝し西洋語を語るものは半開の熟蕃と目してゐる』と。彼は南洋の天地を以つて滿地荊棘なりとし同胞のために悲憤の涙を下してゐる。

江亢虎氏の言を客觀的に肯定し得るか否かは疑問ではあるが、華僑の到る處、多くは歡迎されてゐないことは事實である。勞働者を必要とした場合には華僑の渡來を歡迎した國も、彼等の性情と生活と、その續々として來る夥しい數とには辟易した。辟易したのみではなく若干の不安さへ懐くに至つたのである。本國支那が戰禍と生活苦に惱みつゝある今日、華僑の渡來をなほ歡迎すれば四億人の數分の一が本國を空にしてやつて來まじき氣配である。母屋を借して庇を奪れる危險を各國が懐き初めたのも決して無理ではない。また、華僑の生活が金を蓄へることの外は何者もないといふ拜金振と、その蓄へた金を本國に送金するか、持歸つてしまふことが、一層華僑の存在に不安をつのらせる原因をなしてゐる。巧妙なる搾取者として華僑が警戒されてゐるとみねばならない。次は、華僑の住むところ必ず陰鬱な罪の町を作らねば止まぬ支那人的性情を忌まれてゐる。ホリーウッド映畫の支那物が如實に示すやうに、阿片、賭博、誘拐、賣淫、殺人、等々と、うす氣味の惡い惡の華を咲す街を華僑は世界の端々までも作らねばやまない。華僑の罪の街は、やがて本國人の通路にもなる。治安をみだすものとし華僑の存在を厭ふ國が少くはなからう。

こんな種々の理由から華僑は十九世紀の後半から二十世紀の初めまでに見せたほどの躍進的な發展は今後とても望まれないであらう。が、あの根強い支那人の性格はこの難關をどうにかして切ぬけてはゆくであらう。今後、華僑がいかにして發展するか？　それは華僑自らが負ふ問題である。

オクスフオードの支那語教授 Soothill 氏は

"China and the West" の中でこんなことを云つてゐる。

支那人が外國人に『何故君達外國人は支那へ來るんだ』といふ質問は、外國人が支那人に『何故、君達は外國へ出掛るんだ』といふ質問と同樣に無駄なことだ。

成程、これは思ひつきの言葉だ。支那人へ物を賣るから、支那で物を作るから經濟侵略だと叫ぶ支那人が、他面自らが華僑によつて南洋を中心に至るところ經濟侵略をやつてゐる。これに想到すれば、わが國に對する經濟侵略の非難など敢て問題ではない。また、問題にすることすら無駄の沙汰ではあるが、たゞ一つ支那へ來る外國人と、外國へ出る支那人との間に著るしい相違の現象があることを記して置かねばならない。支那へ來る外國人例へば日本人にしろ、英米人にしろ、そう無暗に支那人と結婚して混血兒をもうけるものはない。恐らく、支那全土を通じて外人と支那人との混血兒は千を數へることはあるまい。反之、外國に在る支那人――華僑――は居住地の婦人と結婚し、その旺盛な精力をもつて混血兒の生產に努めてゐる。南洋に於ける華僑との混血兒は數十萬の多數に上るほど多いそうである。

西印度諸島に於て白人と土人との混血は多く黑人に近い色となるが、支那人と黑人の混血は支那人に近い色の子孫を生むため、西印度諸島土民の色を緩和する效果があるといふことである。これは單に、西印度諸島に於る場合のみでなく、南洋に於ても華僑が人種的褪色運動に大いに努めてゐることを認めねばならない。

この支那人の混血が前にも記したやうに Peranakans といひ Baba といふ支那人でもなければ土人でもないといふ、一種の土地ッ子を作り出すことになるのである。

支那の華僑が金を蓄へる一面に、かく人種的征服をなしつゝある事實が、將來どんな影響を齎らすであらうかと、秘かに興味を喚起させられる。黑人が、黑い皮膚によつて劣等視されることが當然とすれば、その黑人を漸次褪色せしめ、鼠色に變へてゆく華僑はまさに黑人のための救世主でなくてはならない。また、支那人でもない、土人でもない中間の一民族を創り出すとすれば、華僑は造物主以上の偉大な働きをなしつゝあるものといはねばならない。華僑が、いかに世界の人種を征服し改變してゆくか？ 未來に殘す華僑の大きい問題はこれであらう。（終）

離婚問題と
性的苦悩の解決

……覆面山人……

×

現代アメリカに於ける最大の社會問題は離婚問題であるといふ。何事にもアメリカニズムを以て良しとする近代風潮は日本に於ても今や離婚問題が必然的に擡頭せんとしてゐる。しかも注目すべきは離婚の理由として夫の性的退化が重要性を持つて來たことである。

×

性慾！　それが翠帳紅閨にかくれて、絶對的神祕の裡に埋沒してゐたのは昔の話現代は化學の偉力をもつて、あらゆるものを解剖し、暴露する。「家風にあはぬ」といふ抽象的理由で、いやいや乍ら去られた嫁御が、今はアベコベに、「妾の良人は結婚生活の不能力者です」から離婚を迫るといふ。世の良人たるもの、夢々精力の補給を忘るべけんや！

×

しかもこの問題の最も起り易いのが、男女共四十前後、即ち性愛のらん熟期。——對社會的にも漸く重きを加え、人生の働き盛り、此時此際、ひそかに惱む性慾精力の衰退！（自覺症狀、感覺缺乏、內分泌減少、早漏、無精、○起力減退、無力、陰萎！）

×

敢て離婚問題はさて置くとしても、此性的危機だけは是非共切り拔けねばならぬ。そこで、肉食、鷄卵、滋養品、藥劑しかも一つとして良好なる結果を齎らさない——としたらどうするか！　殘された只一つの方法！　それはトッカピンの服用！

×

トッカピンは有名になりすぎてゐる故を以て常識だと笑つてはいけない。風邪熱にアスピリン、梅毒に六〇六號が最上とするなら、性慾精力の回春祕法は何といつてもトッカピンである。

×

第一に血液の青春化！　生殖腺內分泌の增進、肉體精力の根本的改造、頭腦神經の強健化！　トッカピンは日本の生んだ世界的名藥であらう。

×

提灯はこれ位にして置く、何故なら凡ては實際の效目が解決するからである。終りに夏負けの征服に夏季は特に精力の衰へる季節であるからトッカピン服用を奬める。

廣告

時流と古代

室生犀星

エロチシズムの精神

どういふ時代にもエロチシズムの流行は、その文明の中を一本刺し貫いてゐる。エロチシズムの微妙な作用とその效果は、人間に優美な感情を注ぐ時にのみ、その精神が讃美される。頽廢的傾きや荒唐的な趣きを呈する時は、エロチシズムの精神が、誤謬された時でなければならない。エロチシズムの存在は飽迄藝術的な感覺、調和、觀照を主體とした時にのみ、善い意味での、藝術的存在たり得るのである。

エロチシズムは凡ゆる文明、科學、流行に伴うて併行する。エロチシズムが、時代精神を離れて存在する理由はない、ローマ時代のエロチシズムはそれの時代を形造つてゐたやうに、風俗習慣をもその精神に加へてゐる。近代にあつて映畫に藝と印刷工藝が、その記錄的な成績をあげてゐるごとく、エロチシズムの業蹟は寧ろ文明史的現象であり、或意味での時代的唱導であるとしなければならない。映畫に於けるエロチシズムの進路は、これのみに據る興業成績と統計に依るまでも無く、殆今日の映畫を提進させたものに外ならない、すくなくとも映畫のごとくエロチシズムの精神的經過を如實に表現

し得たものは無かつたごとく、これに據るエロチシズムの流行と習慣及び覺醒を捉したものは、他に比類が無いと言つてよいであらう。その卑近なる一例を考察すれば、輓近の女性の化粧及び其容姿上の運動、聲量や表情、殊にその足つきや手のつかひ樣に至つては、映畫内容の諸風俗が、自然に教へたも同樣な效果を持つてゐる。これらの自然に攝取された肉體的諸運動は、寧ろ艶やかな成績と效果を以つて今日の女裝考の幾頁かを印刷してゐるのである。エロチシズムの流行が、單に卑しめられた時代はともかく、今日のごとく重要な役目を負うてゐるの時はない、殊に最も肝要なことは此處十年間くらゐに凡ゆる女性が一種の圓狀を描いた西洋人の肉體を模倣し出したことであり、その模倣は單に肉體の上ばかりでなく凡ゆる生活樣式の中にも、その傾向化の顯著さが證明されてゐる。彼女らは勢ひヤルボチヤでなければならないといふことは往昔の細腰的美人の流行時代と同じい意味で、それの流行と時代的好尚があらはれてゐる。クララ・ボオやコーリン・ムーアが單にアメリカばかりの好みではなく、東洋の諸精神のなかにもクララ・ボオやコーリン・ムーアが胎んでゐたのである。歌麿は肌や足を描く時にのみ近代的好みに投じてゐたことは、歌麿のなかにあるエロチシズムの檢討がたまたま今の時代と同じい步みをもつてゐたに過ぎない。彼の持つエロチシズムが藝術的なものを一すぢ、刺し貫いてゐたことが理解できるのである。

優しいエロチシズムは詩であり慰さめであり美であることに變りはないが、それの流行は廢頽期文明と同樣な速度をもつことは、恐怖すべきことかも知れない、それの廢頽期には諸種の犯罪的な形式をもつて表現される憂ひがあるからである。エロチシズムの中に美をとどめよ、その優しい表現の中に詩を生みつけしめよ、これらの呼聲はエロチシズムの內容を可成に藝術的な立場に引き据え、目的されるであらう。

戀愛の移乘

自分の如きは大した戀愛的感情の經驗に乏しいものであるが、何時も戀愛的な雰圍氣を愛してゐるものである。さういふ感情上の漂ひを感じてゐる時にのみ、作り僞す機會を與へられることは當然である。戀愛に對する實行的な煩さは、今日に於ては殆一人の異性を執念深く戀するといふことは稀になつてゐる。或種類の異性的な條件を持つてさへ居れば、必らずしも戀する女性に限らない。より以上に入りやすい女性に近づくことが出來れば、時間や煩雜さを避けるためにも、又は感情上の蹉跌を阻止する上にも、經濟的であり計算的であるとしなければならない、一人の異性を何時迄も考へ通し、又はそれに打込むことは最早愚の骨頂としなければならない、スピードを要する近時の戀愛にあつては、何よりも東洋風な長たらしい歳月を閲する戀愛的事業は、次第に改革され更新されなければならない、今の時代にあつて二年も三年も同じい異性を思ひ詰め、それの成就を夢みるといふことは無能に近い努力であり、さういふ間に我々は仕事迄放擲することは出來ず、さういふ不經濟なお義理めいた戀愛を敢行することを最早必要としない。

或種類の條件、例令へば性質とか肉體とかの問題に於いて、我々はよく似た人物を物色する。それが條件の完きまでと言はずに、その半ば以上に達せられた時には最早長たらしい手數を踏む必要はない、我々は最も速度のある正確な的を射ることで目的が遂げられゝば、Aに對する戀愛感情を放擲することが出來るのである。我々人間としての面白味もそこにあり、又我々の自由でしかも結局さうしなければならない運命への先廻りをも、僞し遂げることができるからである。そしてBに對する速度ある感情を我々の中に掻き起すことは決して無理ではない、Aへの戀愛感情がBに轉換され乘り移り、極めて素直に恰もAに對するごとくBを愛しいつくしむことで出來ることは、もはや虚僞の分子を交へずに行はれる、戀愛に於ける結果は同種類の眞實性であり、その眞實はその選擇された性質や肉體に向うて發露されるとすれば、何等の愛讐や苦悶無くして遂行されるのである。

併乍我々の年齢に達するものは、それらの戀愛的確實性にふれること無くして、單に常にその雰圍氣を愛することにの

み止まつて、絶え間なく戀愛してゐるといふことも一傾向と見なければならない、街上、料理店、百貨店、カフエ、さういふ至るところに於いて自分勝手に美人を美人として見、それを彼自身の美の漂ひに搗き交ぜるといふ、取止めない日常の感情的發露もかなり重要な時間と煩雜さを避ける戀愛的な作用としなければならない、かういふ感情は常に一笑に附されがちではあるが、それらの美に對する印象は可成に重要な經濟的な精神的事蹟であり、それのみに依つて人生に慘敗した人々を此世に止めて置くこともあるに違ひない、最もセチ辛い生活苦の中にあがくものに取つて電車や街上の美を美として眺めることは、もはや彼自身が文明や科學を讃美すると同樣に、彼女からの文明美を取り入れることが存外に緊要な問題として考へなければならない。凡ゆる美人の持つ美しさは或意味で視覺的に美を攝り入れる點で共有的であり、美人は美人としての單獨的存在であり、美術的な立場にさへあり得る。さういふ一種の美術的乃至繪畫的(生ける)存在としての彼女には、それの所有權はあり得ない、彼女は最も第一義的な美人としてのみ存在し、我々はそれを美しいと見る權利を持つが爲に、その意味での人生的な約束、夫や亭主といふ問題に對して極めて冷淡であることは詮方のないことである。彼女が一つの美術的な存在であるといふことは、凡ゆる名畫や古陶や社寺佛閣の展望と同種類の共通的な、大衆的觀照の下にあるものとしなければならず、そのことに據つて瞭かに美人は美人として價値ある生存を保たなければならぬ。

美人は美人的である意識を留保すると同時に、可成に宿命的な立場にあることも仕方のないことである。他の有たない亦模倣することの出來ない美貌が既に運命的であるといふことは、此の世にあつてはこれまた仕方の無いことである。美貌ある婦人が社會的に隋落することは屢々聞くところであるが、それは美貌が持つ宿命の表れであり、さういふ事實に依つて美貌の價値を失ふものではない。美貌を持つ婦人が隋落しようが、その事に依つて社會的地位を失はうが自分にはそれは問題ではない。——美人は美人であるために記憶され觀照され、讃美もされるからである。彼女が美人でなかつたら彼女はもはや何事も問題化されるものではない、それ故にこそ彼女が確かに標準以下の白痴的な女であらうが、惡婦とし

て停止しがたい女であらうが、その事はもはや第二義的註釋によるものであつて、その美人といふ本質價値によつて何事も問題的であることを否めないのである。

食物考

季節を感じることは自然現象に見るよりも、寧ろ朝夕の食物などに著しい對照が感じられる。春なら春、秋なら秋を食物に就いて身に沁みて思ふことの多くなつたのは、相應の年齢に達した爲であらう。少年時代に飽くことも無く美味珍肴のごとく味ふたものも、此頃では何等の味覺の上では刺戟されなくなつた。味覺は年齢とともに複雜になり、今は纖細な枯淡な食物を愛するやうに、味覺の上でも荒唐無稽の物を退けるやうになつてゐる。少年の時代に美味だつたものも、その少年時代に亡びてしまうて、一生を通じて旨いといふことは稀である。態々少年時代に嗜んだ食物を料理して味うて見ても、却つてその拙いことに失望を感ずるだけである。その失望の中に人生の叙情詩を失ふやうな氣がして淋しく思ふことが屢々あるのだ。

蕗や筍、蕨(わらび)、ぼうふ、獨活、嫁菜、蒲公英の芽などを食べて見ると、その淡さりした味ひの中に濃々たる春を感じられてならない、街や公園に出て物見遊山をするよりも、一層生理的な春が感じられるのである。お茶屋の料理に木の芽の匂ひを嗅ぎ當てる時も、又西洋料理にパセリィの緑を見ることも、精神的に季節を感じることに變りはない。西洋料理に日本の野菜が旨く鹽梅され調理されて來たのも、日本の材料を生かす爲になされたコックの叙情詩でなければならない。コックがよい材料を得るために市場に出掛け、板前が千葉や房州の出處の定つた野菜類を扱ふ心づかひも、次第に接近して來たやうである、

自分などは書齋の中で常に天下の春や秋を思ふものであるが、不意に新しい野菜などを食卓の上に見ると、季節かどの

あたりにまで漂うて來てゐるかが分り、時として食物の上に文學をも感じるのである。春の芽を吹く時分には毒草をのぞく外は、凡そ食べられない草木は無いと言つてよいであらう、草木の精分が柔かい芽の形になつて吹き出ることすら、既に自然現象が多くの食物的調和を持つてゐることで分る。野に育つ獸もまた是等の優しい木の芽草の芽を食べ、體軀に調和を保つことも自然が訓育した胃藥のごときものであらう。

魚鳥の肉は容易に凡婦の手によつても料理れるが、野菜にその味ひと新しさとを保ち、高雅な淡泊さを味づけることは容易なことではない、尠くとも第一流の料理は野菜をどういふ風に生かすかといふことにあり、又野菜の美味さをその儘捉へることは、並々の手腕では難かしいのである。或意味で凡ゆる料理の奧の手も季節の感情を生かすことに於いて、これらの野菜を料理るところの板前の手腕にあるのであらう。自分は料理のことには詳しくはないが、野菜は料理の極北にあることが疑へないのである。

自分は或海濱の尼寺に寄宿したことがあるが、そこの尼さん達は砂丘や松林の中から樣々な草の芽や莖を採つて來て、和えたり、鹽押しにしたりして食べさせたが、我々の名前の知らない雜草の類まで料理して食べてゐた。それらの雜草の中にはネバ／＼した液體を含むものなどがあつた。彼女等は殆年中野菜類ばかり食べてゐる關係上、烏渡した焚き煮などにも不思議な味ひを現はしてゐた。蕨などは固く干しあげて置いたものを用ゐる時は水浸しにすると、殆ナマの蕨のやうになつてゐた。彼女等の說によれば食へないものは無いと言つてよいらしかつた。

日本の料理は味の細かい點では世界に比類が無いと言つてよい、ことにそのあつもの風なつゆの味覺的密度に至つては、支那料理に於ける密度の比ではない、それは淡泊さの折り重なりであり、微妙さが觸れ合ふ柔らかいゆめやまぼろしの類である。西洋に於けるスープの如き表面的なものではなく、內へこもる深い味覺的殿堂である。それに東洋では決してつゆやあつものには重みを含んでゐない、何處までも輕くて量を盛るのだ。量を積み上げることに於いて日本料理の苦衷が

あり川意がある。東洋の文化精神が長い間に茶や花の教養からも、自然にこれらの料理の方面にも學ひ得させたのも、茶や花や料理の精神が一すぢ徹つてゐる枯淡主義に徹底してゐるからである。

野趣美と肉體

野趣を完全に現はしたものは萬葉以後、發句俳諧の類だつたかも知れぬ、或いは亦野趣の美しさを說き進めたものは、近頃の女性美の中にあるのかも知れない、兎も角、野趣は同時に文明と相表裏して進行してゐることは事實である。

自分は茶畠の乾いた日南の土に、此頃物の芽生えを見出すごとに激しい野趣を感じてゐる。その灰ばんだ土の上にある青い一すぢの色は、肉感的でさへもある野趣の美に疼いてゐる。

凡ゆる野趣の美しさは近代の女性の風俗流行のなかに、烈しい勢力的な發露をも爲してゐる。その皮膚の美と健康をそのまゝ表現するために、彼女らは最早或る種類の婦人以外には殆白粉を白粉のままで粧ふことをしない。皮膚と同じい黄や血色を增益する色をつかひ、或は亦その皮膚に些しばかりの香料を加へるに過ぎないところの、質と量の美しさを保存してゐる。彼女らはその各々に異なる「野趣」を或意味での肉感的な、それ故に美しかるべき本來の「皮膚」のままで表情してゐるのである。

女性美について論議さるべきものは常に肉感的である以外に、それの本質論は没却さるべきである。だが此の肉感的なといふ言葉の内容は、同時に特に「上品」な「高雅」な肉感的なるものを言ふべきであり、上品で高雅なる肉感はそれ自身の作用は權威ある、肉感的であるための威厳を持たねばならず、必らず具はつてゐるところの美しさである。肉感が發展された戀愛にのみ永遠と持續性とがあり、それ以外小說的或は叙情詩的戀愛は或る歲月を經た後、それらの叙情詩的情藻は當然に凋落すべきものである。肉感から割れ込んだ戀愛はそれ自身でのみ存在し、人間的な持續性に妥協するのであ

る。勿論性欲心理の中には敍情詩的傾向があるに拘らず、それの目的は同時に肉感的であるためにのみ、性慾本能の内容に可能あらしめるからである。

肉感的なことは同樣に野趣の存在表現であり、野趣は女性の中に最も本質的な美を加へてゐるからである。これとは反對に少女などに見る野趣は清潔な野趣的なものの精髓であつて、長ずるに從ひ、泥の匂ひを失ひ、活達の情を沈靜ならしめ、漸くに野趣の情が開けた狀態に入るのである。

ルウベンス

昔、好愛したルノアルの美しさが自分には重過ぎる感じがする。昔、自分の驚いて見た彼の世界がもう最大の驚きとはならない、その壯麗な美しさも馬鈴薯のやうにさへ無意味に目に映ることがある。或いは今十年も經つたらルノアルに對する自分の考へに變化を見るかも知れない。

ルノアルは平凡な寫實派であることが、何等の手強いユニックを自分に示さない點でも分る。最早、その豐滿な女の肉體をのみ描き出した彼に、肉感的であるものをさへ自分は見失うてゐるのである。或いは自分の年齡や其神經の衰へた時に見た彼への誤謬かも知れないが、自分はルノアルに魅力を感じられなくなつたことは事實である。それは善い意味にもエロチシズムが其處に蟠つてゐる不安があるのである。

ルウベンスを見ると或意味でルノアル以上に近代的な、獅子のやうな肉體が感じられる。極めて明眸の大きい、豐麗な女が此のクラシックな畫家によつて、既に今日の女を暗示してゐる。神經的な特徴のある近代の女は見ることは出來ないが、その表情にあふれる烈しい善い意味の肉感的なものが、ルウベンス風な春を感じさせてゐる。腰、腕、胸、足や手にいたる迄、實に新しいあざやかさを以て迫眞されてゐる。チントレツトなどの持つ「頭」の女ではなく、寫生と素材によ

つて生かされてゐることが解る。たつぷりした肉置の中に女の肉體の中でも、就中美麗な善良な美ひが含まれ描かれてゐる。今の自分はどれほどルウベンスに親しむ事が幸福であるか分らない。

夢について

昨夜は何年か前に見た夢を繰り返し見て、夢の正體のなかにも、一種の記憶力が殘つてゐることを發見した。

夢の中では人間はその性情を露骨に行爲するものらしい。多くの場合、夢の中では體面や名譽を重じないで自然に人間的性情を發露するものらしく思へる。又夢の中にある錯誤や忘却、混沌の諸感情は、我々の生活に於ける最も價値のない、ダラケた情藻のやうにも思へる。夢が藝術的内容を持つことは滅多にない。夢が藝術的輪郭を描くといふことは餘程甘いものであり、何等の嚴肅さをもたないものである。多くの夢が夢であるために誇張されてゐることも事實である。自分は多くの夢を見た後の氣持、——或る漂ひを感じる時にのみ夢に美を感じる位のものである。只、夢の中で殊に性欲上に於ける假想行爲の如きは、辛辣に發展してゐて自分ながら驚くことがある。しかも其等の夢の中で皮肉に取扱はれてゐる自分自身は、飽迄假面と虚飾を脱がされた「自分」自身であることは、痛快でないこともない、義理や人情、法律や德望を失うた自身の行爲が瞭然と具體的に行爲され見えて來ることは、夢の中でないと見られない「自分」でもある。

人間は夢の中で凡ゆる卑賤の行ひを知ることが出來、亦我々が抱いてゐる日常の感情方面では甚しい墮落美や性慾快感を異常に欲してゐるかが解る。我々の守る道德感などといふものは絕えず破壊され、毎日のやうに樹て直されてゐることが、夢の現象に於て見ても解ることが多い。惡夢程人間的で、夢が作用する最も目的らしい目的でなければならない、惡夢の中に初めて夢の要素を認めなければならない、それ故にこそ夢の存在も的確に影響して來るのである。映畫や小說の中にある夢に對する解釋は、藝術的に取扱はれた後の「夢」に過ぎない、多くの淡々たる夢はその醒めた後はその微妙な漂

ひ」と「雰圍氣」とから剝脱され、何等の眞實性ある夢の狀態ではないからである。夢はそれを夢見てゐる間だけに朦朧性の美があり、到底これを完全に捉へることができないものである。夢はさめた後に價値判斷をつけられるものでなく、その夢の境致に於いて生活されるべきものであるからである。

夢の中でその夢の組立及び持續性を一度さめた後に持ち越させることが可能であり、夢を夢としての自覺狀態のなかに置いて、我々は命令や懇望的な祈願の數によつて、戀愛なら戀愛を一層夢の中で長持ちさせることが出來るのである。例令、最初の如き濃き記憶に據らないまでも我々は一晩に同じ場面的な運命を見ることが出來る。夢は創造的であるよりも常に模倣され組み立てられてゐるものだからである。

故小山内薫氏の印象

正宗白鳥氏の送別宴のあつたのは風寒い去年の十二月であつたが、その晩偶然に小山内薫氏とならんで自分は着座し、映畫の話を二三取り交した中に、文藝作品の映畫試乘の不成功なことや、時代劇映畫が無限に發展すべき餘地を將來に持つてゐることや、大河內傳次郎氏の藝風などを話し合ひ、氏が誰にでも人見知りをしない社交の外に、特に純情派の人品であることを知つたのである。心臟が惡いと言つて顏色蒼白を極めてゐられたが、氏の中にある「青年小山內薰」の相貌は、病んだ爲に一層自分は青年らしいものを感じてゐた。

自分が「中央公論」の映畫批評を續けて書いてゐた去年の春、特に或る試寫會があり東京會館に招待されたが、その折に小山内氏の名前が出てゐたけれど、批評の責任と自分の氣質からその宴席には出なかつた。晩餐附の試寫會に出席して、自分のやうな純情派は誠實ある批評が、低迷されるからであつた。その後に小山内氏から使が來て自分ら外三四名のために、此間の試寫をもう一度寫すから來てくれぬかといふことだつた。小山内氏は自分と同樣「中央公論」の批評を擔當せ

られてゐる關係上、斯樣に親切に招いてくれた上に、その發賣所の重役と小山内氏と少年時代の友人同士の關係があり、小山内氏はその友誼からその友人への慕はしい氣持からも、自分を招いてくれたのであつた。自分は斯樣に前後三四回位しか會はない小山内氏であつたに拘らず、演劇方面、映畫方面の名ある人々から敬慕されてゐるだけのものを、小山内氏は自分にも示し、自分にも分け前を頒けられてゐる氣がしたのである。曾つて「新潮」誌上で作品をよく批評しなかつたことに少しもコダわらずにゐられる小山内氏は、自分には最も紳士的な好印象を與へられた。

自分は文壇の人々を好慕してゐても、それの感情をあらはすことが出來ない人間である。葛西善藏氏にせよ、小山内氏にせよ、物故されてから自分は蒼白い顔をして横に座つてゐられた星ヶ岡の晩を思ひ出し、追慕の情に温かい氣持が加へられるのである。先夜、「改造社」十週年招待宴の席上で、特に紳士淑女の多い客の中に、背廣服の正しい一人の少年紳士を見受けたが、その顔は曾ての小山内氏によく似てゐる、自分は後に當夜の少年の客が矢張り小山内氏の遺子だつたことを知つたのである。自分は當夜この少年を見、心に小山内氏の家庭内の愛情を瞭然と感じることが出來、ひそかに此のちいさい小内山君を祝福せざるを得なかつた。我々文士は我々の死後、子供が立派に成人してくれなければならない、どれだけ墮落しても取り返しをつけるだけの堅實性をも持つてくれなければならない、――さういふ思ひが烈しく自分を打つたのである。

自分は遲ればせながら曾つては映畫批評の先輩であり、一生造形的な文獻以外の、人にはできない困難な新演劇の組立をしてくれた小山内さんを、今日は心から悼む氣持でこの文を書いたのである。

文學者の死

文學者詩人はその生きてゐる間よりも、死後に眞實ある讀者を得ることは事實であるが、死後に幾らもて囃されたとて

ひ」と「雰圍氣」とから剝脫され、何等の眞實性ある夢の狀態ではないからである。夢はそれを夢見てゐる間だけに朦朧性の美があり、到底これを完全に捉へることができないものである。夢はさめた後に價値判斷をつけられるものでなく、その夢の境致に於いて生活されるべきものであるからである。

夢の中でその夢の組立及び持續性を一度さめた後に持ち越させることが可能であり、夢を夢としての自覺狀態のなかに置いて、我々は命令や懇望的な祈願の數によつて、戀愛なら戀愛を一層夢の中で長持ちさせることが出來るのである。例令、最初の如き濃き記憶に據らないまでも我々は一晩に同じ場面的な運命を見ることが出來る。夢は創造的であるよりも常に模倣され組み立てられてゐるものだからである。

故小山内薫氏の印象

正宗白鳥氏の送別宴のあつたのは風寒い去年の十二月であつたが、その晩偶然に小山内薫氏とならんで自分は着座し、映畫の話を二三取り交した中に、文藝作品の映畫試乘の不成功なことや、時代劇映畫が無限に發展すべき餘地を將來に持つてゐることや、大河内傳次郎氏の藝風などを話し合ひ、氏が誰にでも人見知りをしない社交の外に、特に純情派の人品であることを知つたのである。心臟が惡いと言つて顏色蒼白を極めてゐられたが、氏の中にある「青年小山内薫」の相貌は、病んだ爲に一層自分は青年らしいものを感じてゐた。

自分が「中央公論」の映畫批評を續けて書いてゐた去年の春、特に或る試寫會があり東京會館に招待されたが、その折に小山内氏の名前が出てゐたけれど、批評の責任と自分の氣質からその宴席には出なかつた。晩餐附の試寫會に出席して、自分のやうな純情派は誠實ある批評が、低迷されるからであつた。その後に小山内氏から使が來て自分ら外三四名のために、此間の試寫をもう一度寫すから來てくれぬかといふことだつた。小山内氏は自分と同様「中央公論」の批評を擔當せ

られてゐる關係上、斯様に親切に招いてくれた上に、その撮影所の重役と小山内氏とが少年時代の友人同士の關係があり、小山内氏はその友誼からその友人への慕はしい氣持からも、自分を招いてくれたのであつた。自分は斯様に前後三四回位しか會はない小山内氏であつたに拘らず、演劇方面、映畫方面の名ある人々から敬慕されてゐるだけのものを、小山内氏は自分にも示し、自分にも分け前を頒けられてゐる氣がしたのである。曾つて「新潮」誌上で作品をよく批評しなかつたことに少しもコダわらずにゐられる小山内氏は、自分には最も紳士的な好印象を與へられた。

自分は文壇の人々を好慕してゐても、それの感情をあらはすことが出來ない人間である。葛西善藏氏にせよ、小山内氏にせよ、物故されてから自分は蒼白い顏をして横に座つてゐられた星ヶ岡の晩を思ひ出し、追慕の情に温かい氣持が加へられるのである。先夜、「改造社」十週年招待宴の席上で、特に紳士淑女の多い客の中に、背廣服の正しい一人の少年紳士を見受けたが、その顏は嘗ての小山内氏によく似てゐる、自分は後に當夜の少年の客が矢張り小山内氏の遺子だつたことを知つたのである。自分は當夜この少年を見、心に小山内氏の家庭内の愛情を瞭然と感じることが出來、ひそかに此のちいさい小内山君を祝福せざるを得なかつた。我々文士は我々の死後、子供が立派に成人してくれなければならない、どれだけ墮落しても取り返しをつけるだけの堅實性をも持つてくれなければならない、——さういふ思ひが烈しく自分を打つたのである。

自分は遲ればせながら曾つては映畫批評の先蹤であり、一生造形的な文獻以外の、人にはできない困難な新演劇の組立をしてくれた小山内さんを、今日は心から悼む氣持でこの文を書いたのである。

文學者の死

文學者詩人はその生きてゐる間よりも、死後に眞實ある讀者を得ることは事實であるが、死後に幾らもて囃されたとて

何の風情もないといふことは誰でも感じることである。併し死後になほ一瞥をも與へられないといふことは、一層滅入る氣持になるものである。我々の子孫が偶に讀む位に止まる、我々の全生涯の熱情も死と同時に立消えになることは、齡四十に達すると沁々と心に影響して來る問題である。我々は生涯の間に無駄書を續けてゐる、何等後世を托むべき無きを考へることは淋しいものである。我々も他の有爲の文人のやうに、靜かに世を去つた後にも木かげに佇んで、我々の詩や文を讀む佳人を想ふことは決して悪いことではない。我々はやはり或意味で死後の文學をも思はねばならない。貪婪に慾張り強く我々は永い間、我々の詩や文を後の人々に作用しなければならない、さういふ考へをもつことは、死後はどうでもよいではないかといふ棄鉢的な考へとは質の上で異うてゐる。詩文をもつて立つ人々の中に此の考へが無ければ、彼はその折々にのみお座なりで書きなぐつた人々であらう、詩文本來の仕事は永い間人間の心を捉えることに於いて、執念深くあつてもよいのである。

最近文學者の物故した中に葛西善藏、小山内薫、若山牧水の諸氏があるが、彼等はそれぞれに意味の異つた仕事を遺してゐる。殊に若山牧水氏の如き眞情ある詩歌を殘してゐる歌人は、生前文壇以外にあつた人で榮えない生活のやうに見受けられたが、小說の方面と違ひ、詩歌の道は次から次へと新しい讀者が交替し、それらは若山牧水氏の道をも是非に一通り見て次の時代の詩歌の道につく關係上、此の歌人の讀者は死後と雖も決してその數を減らさないであらう。詩歌の精神及びその形式内容の特種性は、散文藝術と違つて短詩形であるだけでも、又それが詩歌であるためにも、時代と時代に承繼する亡びない眞實を持つてゐるからである。小說の古くなつたのは讀む人は無いが、詩歌は古くなるほど其讀者を增して行く、既に質と密度とが散文藝術よりも濃く、その熱情にも直ぐさま直接に打込めるからである。詩歌の廢れないのはその詩形の短かい原因と、文藝的入門の時代に誰でも一應はそれに接する可能性がある爲であらう。

劍

劍は身を護ると言はれてゐるが、身を護ることは敵手を斬ることと均しい。自分を護る爲に敵手に突き入られることは愚劣である。少くとも敵手の抵抗を殺ぐ程度にまで挫き立てることは必要である。敵手を斬らずともよい、敵手が再び立ち上れない致命的な危地に入れなければならないであらう。敵手が到底此人に及ばずといふふうに刄を引く迄に挫き立てる必要がある。身を護るといふことも此程度に於いてその術を建てることが出來るのであらう。

劍の術に入れば思はず敵手を殺めることもあり、劍の冴えはその人の意表を出たところに殺人ならざる殺人を敢て爲すこともあるに違ひない。拔刀と同時に精神力の加はることを考へれば、過つて敵手を斬ることは勿論ある。眞劍に臆病であることは經驗の度合によることもあり、膽の据はりに據つて存外達人をも倒すことができよう、劍の術を得ることのみに依つて對手を倒すことよりも、寧ろその人の膽力による構へが存外大きく眞劍の場合、有意義な働きになるに相違ない。

達人は拔刀を容易にしなかつたのは自信に據るものであるが、それは敵手の力量を直覺した後に行はれることであらう、又劍を拔くことは大抵の場合達人に取つて必要が無かつたことに違ひない、劍を把ることはよくよくの危地に立つか、敵手がそれに相應する手腕を髣髴させた時にのみ、それの型と術と構へに入つて行くのであらう、徒らに劍を以つて衆を對手としたり辻斬りを行うたりするのは、若い劍道者に多かつたのであらうから、相應な達人者になれば劍などは問題にならなかつたのだ、扇子や火箸や何か身を隱すべきものがあれば彼はそれに轉身出來たものであらう。

要するに劍道の奧義に入るに從つて却つて枯淡な氣持に練れてゆき、禪の道と同樣の鎭靜さ虛無とを學び得るものであり、何等の殺氣をも感じない平淡無味の境に入るのであらう。それでこそ劍が身を護るといふ言葉も漸く身に沁みるのである。達人が衆に圍まれて刄を受ける時に、寧ろ數學的な劍の構へや拂ひを持つて立ち、それらの持續に依つて殆氣合で

對手を散らすことを專念することも、また劍道の一端であると言つてよい。徒に殺人道を以つて劍の道を說くは劍に早まるの徒を言つたものであらう。

國定忠次とか淸水次郞長とかいふ人々は、寧ろ劍道との比較では腑の据り方が練れてゐたゝめに、常に自分以上の劍の中に立つことが出來たのである。此種の魂を以つて立つ人間に劍の心得と構へとがあれば、常に實力以上の增益された開きを爲し遂げることが出來、劍と魂の關係では代表的な人物かも知れない、宮本武藏や關根彌次郞、柳生何某の如きもその道の達人であるが、彼等に取つても其劍の道の最後に學び得るものは、一種の虛無主義であつたに違ひない、――ともあれ往昔の彼等劍道に學ぶの輩は、どれほど劍の道の微妙さを憧れてゐたものかは想像するに餘りある。自分等文學の蒼蠅時代に母の眼を忍んで、夜更けまで燈下に偸み讀みをつづけてゐたことも、又往昔の武人がその道に從く爲に苦學したと同じである。

書物と友愛

自分は一册の書物の裝幀や校正を終えてから、それが新しい書籍となる時に、何時でも誰と誰とに送るべきかを考へる。喜んで讀んで吳れる人を心で搜ねて見る。成るべく書物の中に名前を借りた人にも送りたい、或は永い間消息なしに暮し合うた友人にも讀んで貰ひたい、作品の載つた關係のある知己にも送りたい、さういふ子供らしい好意のある氣持で一杯になり、昂奮に似たものを感じるのが常である。併し實際は作家の手に屆けられる册數は僅か五册位のものであるから、二十册でも三十册でも買ひ取らないかぎり送れないので、少し憂鬱に氣持に挫折を感じるのである。

實際書物を送られて迷惑になる場合がないでもない、自分の手元に新人の詩集などは殆一ト月に四五册位送られることがあり、忙しい時間の無いときには讀むことが出來ないことがある、さういふ事を考へると徒らに著作を求めらずれして送ることも、一家を爲した時は遠慮すべきことではなからうか、自分の著作などは自分を好愛しない人に讀んで貰ひたく

ないから、冷たい後憂の思ひを抱くことはないが、[illegible]に送り付けにすることが控へられる時がある。今の時勢は書冊の價格も低廉になり、散歩の折などに友人の著書に數金を投じるに便なる時であるから、心ある友と友の間にはお互ひの著書位買ひ求めることは、美しい我々の隱れた交際であらねばならない、此頃になつて自分の書物も出版される愉快さを身に感じるが、三四年前何處からも本の出ない或る時期があつた。その折第一書房が自分の詩集を出すと言つて來て呉れたが、自分の家に遊びに來る青年諸氏は皆して一册あて買ふことに話を決めてゐたさうで、自分はそれでは困るから此方から送るといふことも話し合うた位、自分と書物の緣が遠く、そのことで隱れた友情を發見することは嬉しいことだつた。

芥川君は必らず出版毎に書物を自分に屆けてくれ、僕の詩集なども買つて人に贈つた例も聞いたが、僕もまた福士幸次郎君やその他詩友の古本は必らず買ひ入れることにしてゐる。萩原君などはその著書の出版毎に恐らく第一番に僕に送つてくれ、僕も又彼と印税を割いて貧しい酒杯（さかづき）を上げることを怠らないのである。佐藤春夫君などは氣に入らない本は送つて來ないので、自分で買ふか請求するかしない限り送つて來ない、或意味で我々は友人の書物はお互ひに買ひ合うて讀み、友人が遊びに來た時に署名して貰ふことが、美しい友愛の情も窺へるし亦さうあることも自然でもある。

一册の書物は最初その原稿蒐集の時から上梓される迄、五ケ月位校正や裝幀で道草や苦勞をするのが自分の經驗である。その間絶えず頭の中に往來する書物の幻影と出來上りが、或時は樂しく又憂鬱に重りかゝつて來る。以前は賣れても賣れなくとも神經に障らなかつた事だが、此頃は自分の書物が多く讀まれることが神經的になり影響する。最も適當で快心的な部數は二千部であればよい、自分はそれ以上を望まない、それ以上は自分の場合不必要であるからである。自分は自著の賣行に就いて謙遜であるが、此頃のやうに相當の部數が捌けることを聞くと、仕事甲斐があり一層刻苦精進すべきことが誓はれるのである。飛ぶが如き賣行は時勢的な際物であり、その眞實の讀者の程も窺はれるが、二千部から三千部を賣れるといふことは、カッチリした讀者層であるらしい、自分の書物を出版する書店に損失をかけまいといふ德義の觀念は、結局その印刷さるべき原稿に一層の手入と苦心をするより外に、我々の支拂ふ德義は無いやうである。凡ゆる藝術の徒は

どういふ場合にせよ原稿の上で苦衷するより外に、一切の禮義德望は皆無のやうである。原稿紙的格鬪は結局劍の道にあると言つてよいであらう。

裝幀學

裝幀は內容と一致しなければならないといふ條件は、裝幀學の上で誰でも氣の付くことである。併し裝幀の成功に依つて內容を一層手強く引締めるといふ考へに辿りつく迄は、相當に裝幀の經驗をした後に分ることであつて、最初は文學的內容に拘泥しすぎる傾があるものである。

裝幀は小說や詩の命題のやうな效果と役目を負うてゐる。裝幀自身の力で讀者を惹きつけることが意外に多く、本屋の店先で最初に眼を射るものは裝幀自身の權威であつて、內容の接觸はその瞬間では第二義の位置にある。美しい善き春花を手折らないで、十藥(ドクダミ)の花を摘むといふことは稀なことである。殊に作者に好意を持つ讀者の希望は、飽迄彼の作者は今度はどういふ書物を見せて呉れるだらうかといふ、平常の信賴に據る期待でなければならない、そこに書物に對する明るい喜びが迎えられるのである。命題の不愉快な小說や詩よりも、題名が既に明るい魅力を持つところのものを讀み選ぶのも、一般の人情であり期待でなければならない。——書物はその價格の標準に依つて裝幀されるべきものであるが、價格を廉くしたものにも、きりきりした小締りにしまつた味ひがあれば足るのである。

或意味に於いて裝幀は大膽に文學的內容、——隨筆集や詩集小說集の區別はあるにせよ、それらの莊式な約束を離れて單獨に計劃されてもよいと思ふ、どれだけ單獨に裝幀されてゐても、作者が計劃する場合はそれの部分的な味ひを加へるだけであつて、決して內容を損じることはない、畫家や專門の裝幀家の場合は別であるが、裝幀は作者自身で親切に行爲すべきものであつて、他を煩はす場合は飽迄氣持の通じる畫家や裝幀家に依囑しなければならぬ。自分の子供の着衣は母親や父親が懸ろに選んで遣らねばならぬからである。

裝幀は樣々な意味に於いて澁い好みを持つた時に成功するが、華美絢爛な裝ひを凝らした時は餘り成功してゐない、それは一時的に迎へられても、机の上に二三日置けば飽きてしまふのである。飽かない氣持を續ける爲には凡ゆる裝幀は地道に、日を趁うて生じる書籍愛を繋がねばならない、その好みは目立たない淡泊な澁い好みで行けば間違ひはないのだ。手擦や指垢や埃にまみれて一層その書物に艶を生じるやうなものは、書物の本道を取つたものと言はなければならない、外部からのよごれが書物の美を加へるといふことも、重要な裝幀上の條件でなければならないのである。

書物は讀み棄てるといふよりも、讀んで更に保存されるべき性質のものである以上、何處までも間に合せの裝幀で出版されるべきものではない、低廉な書物にもその品格と雅致を持たなければならず、低廉である爲の用意をも必要とするのである。書物はまた凡ゆる意味に於ける智性的幸福の感情を植えつけるものであつて、どういふ時にも人間を不幸な立場に立たすことがないものである。書物の作用によつて我々は育てられて行くのであるが、その主體である彼の裝幀が地味なら地味で何處までも質素な上品さをもつて表裝されなければならないのである。

ゴチック建築時代にはゴチックを裝幀文字として採用してゐたが、ゴチック建築の衰微と同時に今はこれの流行が沒落した。モザイク時代にもそれがあつたと言つてよい、今は明らかに墨筆をもつて描かれたものが、全集本に應用され成功してゐる。改造社の「石川啄木全集」の題簽は下島勳氏であるが、茶に金で打込んだところ、筆者の題簽は却々立派である。石川啄木の和歌と一應不調和に見える此の筆者が、美事に題簽の上で成功してゐる源因は、啄木が既に故人であり全集本であるために下島氏の高雅な品格と筆勢が助成してゐるのである。新潮社の四五年前の「小説全集」の題簽は菅虎雄氏であつたが、同樣に美事であり全集本を鎧ふべき筆者は亦特種な人物でなければならぬことを痛感した。内容の印刷量に對する墨筆的裝幀の引締め方は、今後は一層計劃され流行するであらう。一種の工藝美術としての建築的裝幀が最近漸く識者の間に論議されてゐることも、自分として喜びに堪えない。かういふ機會に日本の書物は日本的な味ひと姿とを、何處までも材料と苦心とに依つて積み立て研究すべきものであらう。

プロレタリア文學の「大衆性」と「大衆化」について

小林多喜二

問題は「このやうに」つかまなければならなかつた。そして、而もこの問題をこのやうに、誰もつかまなかつた。――我々は、プロレタリア文學の「大衆性」及びそれにからまる雜多な問題と、「大衆化」をまづハッキリ別個に見、そしてこれがプロレタリア文學に於ては、如何に緊密に統一されて考へなければならないかを明かにしなければならない。――さうしてのみ、問題の正しいマルクス主義的な把握があるからだ。

一、「大衆性」について

A。日本の「若い」プロレタリア文學は數百萬のプロレタリアートのうち、せい〴〵一二、三千の讀者――しかも主としてインテリゲンチュアにしか迎へられないことを意識して、悩んだ。その悩みが事實に於て、かりにどの方へ迷つたとしても、この正しい努力をそのことの故に否定することは差控へなければならない。

彼等は勞働者のアペタイトを滿足させるものなら、その邊に轉がつてゐる何物をも取り上げやうとしたし、又逆に、あるものはプロレタリア藝術の「貞操」の純潔を守つて立ち上つた。昨年のことである。然し無駄でなかつた。その若き悩みが生み出したものは素晴らしいものだつたからだ。

――勞働者階級をたゞそのまゝに、一色に觀念することは何物をも勞働者階級について説明することではない。勞働者階級そのものの中には、たゞに決定的に、機械的に、より遅れた層とより進んだ層とがあるのみでなく、それは又作家にとつて、自分の心理的な關心を本質的に差別するところのものである。

――「だから」プロレタリアートの作家は意識的にプロレタリア讀者大衆の「一定の層」を各〻目安に置いて書かなければならない。

ルナチャルスキー、マーッァが云つてゐるやうに、どの層にも同時にあてはまるやうな作品を作ることを、プロレタリア文學の「大衆性」として問題にするならば、そんなことは考へられないナイーヴな希望でしかなく、結果的には、プロレタリア文學の俗惡化(平均化)であり、又は逆に、どつちつかずの遊離を來たすことになる。

B。こゝまで分つた。で、次にどうなるか。それは「一定の層」を具體的に認識することだ。――例へば工業の中心地の勞働者、後れた地方の半手工業的勞働者及び鑛夫の種種な範疇、これ等の層の心理的要求は、云ふ迄もなく異つたものであるからだ。日本のプ

ロレタリア作家がこの事への努力位怠つたことがあつたらうか。

然し、彼が自分の作品を如何なる層のために書くかといふことは、いづれにしても一般的には、その作家自身の社會的、心理的、經驗的條件によつて豫め決定されてゐる。だから、大切なことは、作家がこの「自分」を知ることであり、そしてこの「自分」と「一定の層」との間に、科學的にピントを合はせることだ——各〻の作家が、各〻このことへ精力的に努力することによつて、プロレタリア文學は始めて、大衆の中に入つて行くことになるのだ。

（この點で、やゝ林房雄氏とちがつてゐる。だが、同一作家が種々な層に、意識的に種々な筋、種々な情緒で働きかけ、「種々な使ひわけ」をすることを本質的に不可能だといふのではない。——マーツァが云つてゐる。「フランツ・ユンクは、彼が如何に單純なもの、一般的なものにならうと努めた所で、彼は所詮勞働インテリゲンチュアのために書いてゐる：……。」

（又この「一定の層」と「作家のピント」の關係を理解した上では、一々の層の文學に對して、高級、前衛文學、大衆文學、興味文學、政治的アヂ・プロのための文學と差別立てする本質的な根據は無くなるであらう。）

C。プロレタリア各層のうち、上層部分、既にかなりの文化的水準を獲得した讀者に向けられた作品を、本來的なプロレタリアートの文學とし、後れた層を目安にする文學を然らざるものとして取扱つた、恐ろしくインテリゲンチュア臭い「文化人的傲慢」さに滿ちた考へを、且つて我々は知つてゐる。だが、直ちに清算されてしまつた。これも一つの過渡期だつた。

この清算は、然しその效果では大きかつた。我々作家達がより容易な任務——文化的に高い、狹い讀者範圍のために書くといふ任務に、その注意を集中してゐたことに、恥かしいながら、（これこそ百パアセントのブルジョワ・イデオロギーではないか。）氣付いた。そして！　尊い社會的内容を、比較的單純な、比較的初歩的な内容によつてゞもいゝから、百萬、千萬の人々をすら感動せしめるやうな藝術的魅力で表現しなければならないことに氣付いた。——「プロレタリア大衆文學」が、かくして論議された。

そして林氏はそれを、具體的に、その内容その形式、その方向に於て、率先して問題にすることによつて我々に尊い指導を與へた。（「戰旗」十月號。）

D。これ等の、プロレタリア文學の歩んだジグザッグな道が、日本プロレタリア政治運動の歩んだ道——極左小兒病的・インテル的傾向の清算、プロレタリア黨大衆化への方向の線に沿つて、あまりにも正しい、その「鏡」であつたことを知ることは重要なことである。そして又それとの聯關なしに考へることは自身誤りであり、問題の正當な認識であり得ない。

E。だが、この歴史の貴重な進行は、手品やからくりのやうに、勝手に裏返へしや、逆

正しい出來るものではない。岩藤氏は最近の「時事新報」でこの「手品」をやらうとした。林氏が既に清算した「本來的」「大衆的」プロレタリア文學に逆ひ、「プロレタリア文學は本來大衆的なものだから」と云つて、（このことだけのことから、だが具體的に何が分るか？）血をもつて購ひ得た「プロレタリアートの旗」を一色で塗りつぶす反動をやつてのけた。

岩藤氏は「階級意識」だけを精のやうに取り出してきて、それだけで澤山で、それ以外の要素は雜要素であるとして排斥してゐる。それで見ると、當然どういふことになるか。人間が米や味噌や肉や卵を食ふことをやめて、（雜要素が澤山入つてゐるから。）それ等の中に共通に入つてゐるヴィタミンAを抽出してきて、何時でもその丸藥だけを食つて生きて行かなければならない、といふ事になる。識原氏が嘗つて云つた。――大衆の生活を唯單に客觀的に、百%の階級意識を含ませて描き出したからつて、直ちにそれが大衆的藝術たり得ると考へるならば、それは大いなる誤りである。我々は逆に「大衆に理解され、大衆に愛され、而も大衆の感情と思想と意思とを結合して高め」得るが如き藝術的形式を生み出さなければならない。

ルナチャルスキーも、文學の大衆性を形式的性質のものであると見てゐる。――然し、ある内容を生々と表現するために、鋭意形式に努力することは、何も形式主義者の立場ではないのだ。（否、かへつて、マルクス主義作家にはこの形式への努力が、今迄忘れられてゐ過ぎたのだ。）

又我々は同時に「比較的單純な、比較的初歩な内容によつてもいゝから、大衆を感動せしめる」ことを考へてゐる。（「メス・メンド」でもさう叫んでゐる。）――内容の單純化、初歩化、又形式への努力等々は、潔癖な岩藤氏が心配してゐるやうに、「階級意識」の妥協、内容の歪曲とは、まさに、まさに別概念である。

然し「丸藥の純粹性」が、そんなに大切ならば、ブハーリンを聞かう。――マルクス主義者とは概念の幽靈、純粹數學のやうな存在ではない。やつぱり一本の足を持ち、パンや肉を喰ひ、戀し、[illegible]、[illegible]、性交する生きた人間なのだ。――生きてゐる、具體的な人間、これこそ藝術の對象なのだ。

岩藤氏によると、小說をかく時は何時でも、「資本家を倒せ。勞働者よ、團結せよ！」この十四字しか書けなくなるし、又書いてはならないことになるのではないか。

F、（少し足踏した）――我々は、プロレタリアートの種々なる層を具體的に認識することによつて、「種々なるプロレタリアートの文學」をつかむことを得た。然し、このことは、勝本氏が「新潮」六月號で林氏を批判してゐるやうに、單にかゝる種々の文學の「並列」であつては意味ないことである。――重大なことは、それ等が如何樣に結びつき、影響し合ひ、しかもそれ等すべてに直接、間接に一定の「方向」を與へ、それ等の總體の發展を規定するもの――かゝる指導的文學を認識し出し、それ等の正しい關係を把握することである。

識原氏は「戰旗」十月號の論文の中で、こ

のことに觸れた。たゞ單に「確立のため」と「直接的アヂ・プロ」だけの二つの關係に於てしか云はれてゐない不足を感ずるが、その「方法」は劃期的なものであつた。(勝本氏も「新潮」でこれを發展さしてゐる。)

然し、この辨證法的關係に於て、そんならばこの指導的な文學が「具體的には」如何なる「方向」に向つてゐるか、又向ふべきであるか、といふことには一言も觸れられてゐない。我々は何時でも問題をこのやうに問題する。(H、I參照)

このプロレタリア文學の、指導的分野を受持つ文學は、だが原則的には、プロレタリア文學の大衆性と矛盾するものではない。然し現在の階級社會、文化的に首をしめられつゝある資本主義社會のプロレタリアートについて論ずる場合、直接に大衆的ではあり得ない。然しこれは特に意識的プロレタリアート及びマルクス主義的インテリゲンチュアの間に廣く浸透し、そしてそれによつて、廣汎な大衆と結びつけられることによつて、大衆的である。

G。指導的な文學、種々な層の文學、直接的アヂ・プロのための文學――これ等一系列のプロレタリア文學は、そんならばその「藝術性」に於て、如何なる關係におかれるか。

これ等の間に價値の上下、藝術的、非藝術的の差がないといふことで、勝本氏は林氏と同じであり、ルナチャルスキーもさうである。――藝術性なるものが、多くの人によつて意識的、無意識的を問はず、豫め動かないもの、又は先入主的にかうとされてゐた事を指摘し、その歴史性、條件性を積極的に主張されてゐることは勝本氏の功績であると思ふ。これは、そして、新らしい創造的な作家の活動範圍を指導的に擴大するといふことに、役立つであらう。

H。然し、一系列の藝術性を認めた勝本氏は、その素朴な「並列」の故に、林氏を非難したと同じ非難を受取らなければならないのではないか。あれも、これも式の藝術性の「並列」が、現實に我々作家を、そんならばどうすればいゝかを、ちつとも敎へてゐてはくれない。

かゝる一系列の藝術性が、プロレタリア階級として必然的に、一般的に、如何なる藝術性に近付かうとし、又近付かなければならないか――その具體的な方向こそ、重大なのではないか。藝術性の歴史的、條件的性質、その種々なる存在を認めた上のかゝる態度には、少しの藝術性の固定化の觀念は含まつてゐず、逆に、それ等の一定の方向への發展の、唯物辨證法的な立場であると思ふ。

そんなら、それは如何にして見出されるか?――まさに、プロレタリアートの「特殊性」の具體的解剖のうちに!

他のあらゆる階級の持ち得ない「單純」「素朴」「動的」「プロレタリア・ヒロイズム」かゝるものが作品に表はされる時、それは藝術性を形成する。――土は山ではない。然し土が一定の量だけ積まさるとき、それは山を形成する。この關係がそのまゝ云はれる。――そしてかゝる藝術性にこそ、近付かなければならない「プロレタリア階級的必然」が考へらるべきなのである。

I．最後に、プロレタリア文學の「大衆性」――この問題が同時に、現日本のプロレタリア文學「確立のため」の重要な問題であるといふ「一致」のことを云つて置かう。

インテリゲンチュアが自己のインテリ性を清算することなしに「勞働者・農民の名によつて」創つた過去の名目プロレタリア文學の「總決算期」はかくして今や近付かうとし、真實なるプロレタリア文學が、そこから健康に羽ばたき出やうとしてゐる。

二、「大衆化」について

J．何故「大衆性」と共に「大衆化」問題が問題されなければならないか、それはプロレタリア階級獨自の性質によつて、必然である。この階級は革命階級である、跳ね上る階級である、過去の一切をアウフヘーベンする階級である。ブルジョア文化によつて、限なく築き上げられてゐるあらゆる分野に、「ねぢ込んで」行き、更に「ねぢ込んで」行つて、ダイナマイトのやうに爆破しなければならない。レーニンが云つてゐるやうに、プロレタリア文學に於ては「作者に書き、讀者に讀む」。それで終り！　であつては絶對ならないし、又さうあり得ないのだ。で、この「ねぢ込み」を、「大衆化」といふのだ。このことを缺いて、プロレタリア文學の「大衆性」を論ずるものは（今迄のあらゆる批評家がさうであつた。）無意味である。――こゝに、實にこゝにプロレタリア文學の特殊性がある。

K．「大衆化」はそんならばどういふ形態をとり、具體的にはどういふ風に行はれなければならないか。――マルクス主義的に強固な、伸縮性ある「組織活動」がその機關であり、それはプロレタリアの黨の組織の仕事に從屬し、それと密接に結びつくことによつて、「白蟻」のやうに、ブルジョワ組織の根幹に喰ひ入らうとするものだ。

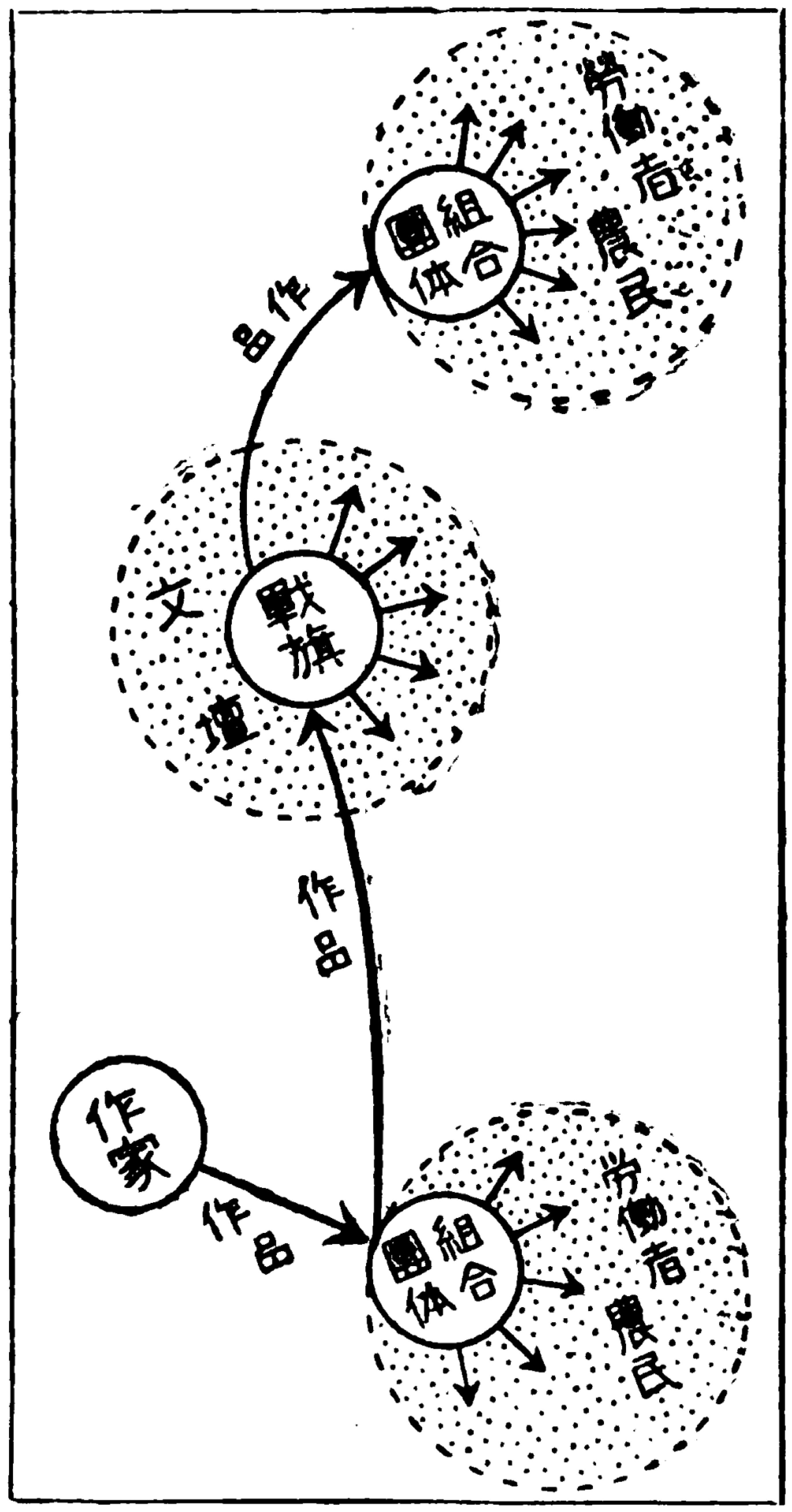
我々はこゝで、この「組織活動」の具體的なことに觸れなければ、結局何事も語らないことになる。然しそれはそれだけで、この小文の範圍を越えた充分な問題である。この詳しいことについては「ナップ」の組織、その歴史的發展の當を全一て貫くことにしなければならない。何故ならば「ナップ」の組織こそは日本に於ける唯一つのマルクス主義的な組織形態であるからだ。

岩藤氏が「大衆化」に對して、たつた一言「我々は、いかにしてこれを大衆化すべきかも深憂してゐない譯ではない。」これだけ！以つて「文戰」の組織理論（理論？）の偉大さを知るべきであらう。

L．最後に、氣付いた一つのこと。

レーニンにならつて云はう、プロレタリア作家は作品を書いて、それを「文壇の中」の雜誌に發表すれば、それでいゝのではない。だが、このことに無意識におち入つてはゐないと云へるか。ブルジョワ作家の方法がそれとどう異つてゐたか、――ことに又、一人の勞働者、農民の讀者のない雜誌にテン然と書くプロレタリア作家に、レーニンの名に於て、呪ひあれ！

その結果何が起るか？――一部の文壇インテリゲンチヤと、そして極く「僅か」だけ影



響がその範圍をぬけて行くだけにしか過ぎないといふことが！　これでい〻のか。では、プロレタリア文學とは一體「誰のものか。」

さうであつては絕對にならないのだ。單純な「戰旗」發表作家であつてはならないのだ。

プロレタリア作家は「直接に」勞働者、農民とゐなければならない。(文壇とではないのだ。)――文化的に窒息されてゐる彼等は、藝術に對しては「自分から」手を出しはしないのだ。だが、村長、署長、村の金持にい〻加減にされてゐる漁民、農民組合のもとにゐる

さうなれば、彼等の「臺所」のことだ。――極度に貧窮化してゐる彼等は、「臺所」のことでしかないと、「自分から」手を出しはしないのだ。――函館の勞働組合が「蟹工船」をカサツカ出稼の漁夫にパラ撒いたとしたらどうか。――ある「海上生活者新聞」に「海に生きる人々」のことを書いたとき、現實に働いてゐる海

大衆に、それと直接な關係にあるマルキシズムの組合の手を通して、「綾里村快擧錄」がパンフレットで配られたとしたら、どうか。

員の中に異常なセンセーションを起したことを、自分は知つてゐる。

――まさに、かうでなければならないのだ。「戰旗」は、か〻る一地方の經驗を、全國的な規模として持ち出し、同時にそれを全國的な經驗となし、かく大衆化されたそのことを契機として、その組織的任務に從はなければならないのではないか。

これは氣付いた一つのことであるかも知れない。然し確かに、小さ過ぎない一つのことであることを、自分は信じてゐる。

（一九二九・六・二）

名投手苦心談

ピッチャースプレイト上の苦樂

小野三千麿

球界の覇者慶應軍監督腰本壽氏に匹敵する好監督飛田穂洲老が數年に渡り家を忘れ子を忘れて築き上げた早大黄金時代の強味は又恐るべきものであつた。

名手綺羅星の如くと云はれる樣に谷口竹内名投手あり、ホームラン田中勝雄氏を始め、猛打者久保田、河合、井口、快選手有田水谷瀬木と、飛田監督膝下に育まれたものはすべて一騎當千の強者となりおほせたのである。

この名監督と名手揃ひの早大軍（又は稻門軍）と戰ひを決する時プレイト上に於けるピツチャーとしての苦心と樂しみは他の何れの試合に於けるよりも痛快であり、又壯快であつた。

早大軍と試合が開始されてまづ頭に閃くものは飛田監督の策戰如何であつた。命令一下全軍が第一球を打ち出して來るか、又は待ち主義に來るかが投手としては何より先きに考へさせらる問題であつた。試合進行の定理として大體二通りあつて、ウエイテングシステムかヒツテングシステムかに區別されてをる。敵投手の球を偵察し當日の投球調子の好惡、カーブの曲り方の如何を見るために待つか、敵投手の球に慣れるため若しくは僅かの疲勞を見越して待つか、而に前試合の最初は待ち氣味に行くウエイテングシステム。これと全く反對に第一回から好球（第一ストライクを逃さぬこと第一球とてボールであれば見逃し第一ストライクを狙ふのである）を打つて行くヒツテングシステムの二通りあつた。

當時の早大軍は飛田監督の意志通りに全軍が動いて待つか打つかは徹底的に行はれたのである。であるからまづ第一にこの兩主義の何れかを始めに判別しないと相手方投手は痛い目に會はされてしまつたのである。この策戰を早く知るためには試合前夜敵方の會合所に入り込んで明日の試合に對する監督の注意を盜みぎきすることであるが、これは當然出來ぬことである。次いでは試合當日の開始直前ベンチの前に集合してその日の主義を全軍に改めて吹き込む時に知れば好都合であるが、これも出來ない。さすればどうしても試合が始まつてから監督の眼光でなく、對戰手

の間に偵察しなければならぬ。そこで私の常套手段として行つたことは第一回第一打者を犠牲にして投球を試みたのである。即ち投手對第一打者との間に偵察球が投げられ敵方が待ち主義に來れば無論第一球は眞中であらうと見逃して來る。若し打ち氣で來ればこの一球を必ず逃さず打つて來る。であるからこの第一球は自分のスピードを十とすれば七八のスピードで輕く眞中へ投げる。逃せば續いて又投げる。そして打たれた時は今日は初めから打つて來るなと云ふことが解る譯である。この輕く投げたストライクを第一打者に長打されたことは稀れで、大體單打であつた。(明瞭に覺えてゐるのは山崎第一打者に右翼越えの三壘打されたことが一度ある)斯うして第一打者に依つて待ち主義が解つた時は輕くどしどしストライクを投げ込んで、二つのストライクを早く得てしまふ。そして後はボールを利用して打者の缺點へ投げ、打たれてもファイか内野ゴロになる樣心掛ける。打ち氣に來れば初めから一球一球丁寧に、しかも打者の缺點と嫌いな所へ狙つて投げる。(打者の缺點は好きな所にもある。最も好き所へ投げ込んだり、又今度はボールを投げねばならぬ時に眞中へストライクを投げることもある)從つてこくボールを投げ打者の打ち氣から逃れると同時に次ぎのストライクを有效にする爲により多くのボールを投げなければならない。

當時の早大軍と一年に十回近くの試合を續けたが、前半大體待ち主義が多く後半に及んで打つことが定つてる樣であつた。(十回の中二三回だけ初めから打つて來る主義が行はれたこともある)

前半待ち主義で後半に打ち出す時はどうして知るかと云ふと、これは對選手でなくベンチの前に集つて飛田監督が命令を發する時を想像して知る。試合回數の四回目か、五回目か、六回目に必ず集る。この時がそれ迄の策戰を一變した命令の出た時だと考へたのである。試合全般の然かも相手方全選手の空氣が大體でも解れば後は對個人の投球であるから基礎をこの兩主義に置いて個人に投げれば間違ひはなかつた。無論個人でも待つべき第一球を打ち、打つべき第一球を逃す癖の人もあつた。が飛田監督の命に違背するものは絶無であつたから、健棒の早大軍には一定の型が出來てゐた譯である、つまり打ち出すとみんな打ち待ち出すとみんな待つ型があつた。又個人の打擊としても大體に打棒を揃いで打ち降し押し付ける型が多く、チョップする打者又大きく振り廻す打者は僅少であつた。一人の缺點は大體全軍の缺點であり、一人の長所は全軍の長所で、この點は共通してヒドク離反したものがなかつた。であるから一人の打者を研究すれば他の八人は研究するに容易であつた。殊にカーブを餘り得意としない私は對早大戰にカーブを多用せずに試合を進められたのは幸運の一つであつた。この好打者揃ひの中、必ずカーブを交へなければならなかつた人は山崎井口の兩左利打者と河合氷室の兩右利打者で、他の人は時々交へてをけば好かつた。山崎君に對してはカーブのストライクを井口君にはカーブのボールを持つて行き打棒を振り向けて貰ふことが必要であつた。同樣に河合君にはストライクになるカーブ、氷室君には外れ氣味のカーブを持つて行くことが必要であつた。全選手中最も安堵を感じながらよく打たれた人は谷口、竹内兩投手であつたが、互ひに投手であり好く打てないことに同情し合つたためか、自然と投球に弛緩して來ることを防ぎ得なかつた。何れにしても愛し得べき好敵手たるを失はなかつたのである。

打者の心の裏の裏

宮武三郎

○

投手苦心談——と云つても、それは投手としての平素の心がけや、練習時に於ける努力など必然にその中に含まれてくるもので、それはまたシーズンの大事な試合を目指しての苦心であり努力でもあるが、試合の一つ〳〵に就いて云つても投手が經驗するそれらの苦心や努力の跡には寧ろ悽慘たるものがある。投手の苦心は投手生活全體を通じて語らるべきだ。

○

投手にとつて最も大切なものは肩である。私はシーズン中は殊に肩を冷さないやうに注意し、寢る時には投げる方の肩、私の場合では右肩を下にして寢ないこと、練習で肩が疲勞を感じた時には入浴して十分肩を溫め、又冷水を浴びて冷し、これを三四度繰返すことに依つて血の循環をよくする方法をとる。

睡眠は十分にとる。私の場合では大概九時間と二三十分位眠る。

試合のある日はいつもより早目に起きて蒼い草木を眺めたり、少時間の散歩の後で燃體運動を十分位試みる。

○

私の中學時代に於ける平素のピッチングの數は二百から三百位であつたが、慶應へ入つてからは投球數を減じて百投げるか投げない位である。投球といふものは非常に疲れるものので、練習時に於いては直球を百投げるものなら曲球は十五か二十位にして置く。然し練習も十分に積み、何時でも試合が出來るやうな體の狀態に在る場合には、投球の際にも直球九十投げれば曲球も九十位投げる。

主としてピッチングをやり出した時分にはなるべくランニングを避けるやうにしてゐる。何故ならばランニングを十分にやれば投球の際にどうしても腰がどつしりと据らないからである。

○

投手生活の中で最も苦しかつた思ひ出——

私の高松商業時代に於ける夏季練習は午後一時半頃から始まつた。炎天下に於ける猛練習——打ち、走り、投げる、體の總ゆる部分は忽ち疲勞する。スパイクは燒け、靴をはいてゐる足は蒸され、頭はくら〳〵して來る。此時一杯の水は全く天の救ひである。

誰れも彼も疲れ切つてゐる。而も投手は特別に疲れるものである。然し今手の出かゝつた水も引つこめなければならない。若し此甘露に口がついたならば投手の力は忽ち鈍るであらう。私の苦心は全く水泡に歸する。何の爲の此練習か。永年の敵である松山を破つて優勝の榮冠を得たいからではないか——私はさう云つて私自身を勵まし、遂に夏季練習中一杯の水も飲まずに過した。

○

今春のリーグ戦中私のコンディションは自分でも呆れる程惡かつた。何んと云つても今

春は雨と風に祟られて、練習も滿足に出來たのは一週間位のものだつた。何しろ雨天キヤツチボール場を建直してゐる間は雨天續きで、それが立派に出來上つた頃にはからりと天氣になり、そして其頃は春の季（シーズン）はもう終つてゐるといふ譯だつた。顧みて、實際ろくに練習もしないでよく戰つて來たものだと思ふ。

○

早慶決勝戰では私は六回からプレートに立つた。私は今迄とは球質を全然變へて投げた。私はアンダスロー、サイドスロー、オバースローの三つを投げ、その投球別にカーブ、ドロツプ、シユートといふ風にあらゆる變化球を以て投げた。それは一、二回戰に於けると同じ投球法をとれば又ノツクアウトされることが目に見えてゐたからで、決勝戰當日のピツチングの練習の時には前回と全然反對の投球法を練習し、運よくば一、二回戰に於けるやうな慘めさから逃れやうとした。然し十分位で仕上げた投球フオームには固より自信もないし、コントロールもない。が、あの場合そんなことは考へてゐられなかつた。私はたゞ打者に對して大きく構へて居る者には第一球をサイドスローで目の高さにシユートさして投げ込み、第二球は低く臍目でストライクになる直球を投げ込むといふ具合に、其豫定に接近するやうに〱と心がけて投球した。又打者に對して一定のタイムを與へ、或は與へずに連發的に投球したりして、異つたタイムをとるやうにした。

早慶決勝戰のやうな白熱したゲームに於いては、投手は投球する前に、ボツクスの中で打者は今何を思つてゐるか、單打主義に出やうとしてゐるか、バアバつてゐるか、焦り氣味になつてゐるかを直感し、打者の心境の裏を或は裏の裏を行つて投球をすれば投手を有利にすることは云ふ迄もない。早く云へばやまかんが適中するか否かで投手は有利にもなり不利にもなる。然しやまかんが適中しなくても、打者の或場合の心理狀態如何に依つて投手は反つて有利な立場に導かれることもある。今春早慶決勝戰九回の裏、一死にしてランナー三壘と一壘にある時、今春のリーデイングバツター水原君がボツクスに立つたが、カウントはツーストライク、スリーボールとなつた。其時水原君がバツトを一寸短く持ち直したことを私ははつきりと見とゞけた。これは單打主義に出るなと私は直感した。此場合私は直球を投げ込まうか、必ず好い當りをされるだらう。ツーストライク、スリーボール、打者は單打主義に出てゐる。而も走者は二人壘にゐる。水原君を四球で出しても滿壘である。さうすれば私自身も十分にボデイスキングをやつて後の投球が樂に出來るといふものだ。併し私は此場合四球を與へるつもりでアウトドロツプを投げやうと突嗟に覺悟した。

結果から見ると、水原君は空振をしたが、いつもの同君ならばあのボールを見送つて、四球で一壘へ悠々と走つてゐた筈だが、水原君自身もあの場合少し緊くなつてゐたのではあるまいか。打主義、卽ち此球はきつと好いボールが來るに違ひないと思つて構へてゐる處へ、ついアウトドロツプが打ちごろのボールに見えたのか、無意識に振つたのかは水原君自身のみがよく知つてゐやう。

此場合の如く私のやまかんははづれてゐるのだが、結果から見れば成功してゐると云へやう。

併し水原君に對して二—三後の最後の投球だけは私としては全く臍を据えて投げたものだが、又一面此時程如何なる球質の球を投げるべきかに就いて苦心したことは未だ嘗てな

かつたと云つてい〻。併しこれはインプレーであるから、捕手のサインを見た瞬間に以上のやうな判斷をするので、時間にして云へば四五秒に過ぎないが、それだけ又苦心も多い譯である。

肩の調子さへよかつたら

小川正太郎

憧れの六大學リーグ戰——私は中學時代にどれほど帝都の球界を望んでは胸を躍らせたことでせう。

今その望みも達せられて大學の球界に身を投ずることを得ました。私の胸の中はいつも歡喜に充されてゐます。

併し私が大學選手となつて、秋のリーグ戰の開始も愈々間近に迫つて來る頃には、さすがに大きな不安に襲はれずには居られませんでした。私のやうな中學を出たばかりの者が初めて帝都の檜舞臺に立つて　どれだけの働きをなし得るか、戰ひ慣れた古强者を相手にどれだけ私の腕が彼等の打撃を食ひとめ得るか、私自身としてもそれは大きな疑問でなければなりませんでした。

對法大との二回戰に私は大學リーグ戰の初舞臺に立ちました。そして結果は一對零のスコアで勝ちましたが、此一戰によつて私は全く氣をよくしました。これなら大丈夫だと息をつきました。

元來私自身はスピードに賴る投手です。

今度大學選手となつて先づ第一に心配したことは、肩の調子の惡い時にはどうして投げてゆかうかといふことでした。

いろ〱苦心をして見ましたが、結局さういふ時には中學時代に使はなかつたスローボールとサイドスローに賴る他はないと考へるやうになりました。これらの球も時々使用することによつて、何んとかして敵の打撃を封じようと苦心しました。たゞしそれは無論私の肩の惡い時に限る話です。

もとから私の球質は極めて素直で、シウトが殆んどありません。即ち意識せずしてシウトを投げることが出來ません。それほど私の球質はいゝのですから、私の肩に疲れが來た時には全く球に威力がなくなります。

かういふ時だけ私はスローボールを用ひましたが、肩の好い時にはこんなボールなどは全く必要がありません。

早慶戰の感想はごく簡單です。

私の肩さへよければ慶應に勝つ自信は十分にありました。肩が惡ければ勝敗はどうなるかゞ殘された面白い問題でした。

慶應の人達は私の球ならいつでも打てると考へて居ます。

で、私の肩の調子がよくて、少しでも勝手が違つて來た時には？さうしたらゲームは？

慶應の人達が私の球に對してみんなアウトコーナーを狙つてゐることは當然のことでありました。だから私は盛んにインコーナーの近い球を使ふ豫定でした。第一回戰には割合によく近い球の低い目にストライクをとりま

したが、第二回戦は球がみんな高目に入つたためによく打ち捲くられました。

若し私がリーグ戦中續けてピッチングの練習をやつてゐたならばと思ひます。病氣のために體力が續かなかつたのです。

來る秋のリーグ戦には春よりももつと面白いゲームをして見せるつもりです。

歴史と背景の力

水　原　　茂

□

僕が投手としての素質、體格、頭腦といふ點から見て、六大學の他の投手の方に比して、劣つてゐても優つてゐるといふ自信はありません。僕は野球を始めてから、內野手としてもその守備は餘り上手な方ではなく、たゞ肩が相當いゝ方でしたから投手をやることは自分ながら好きでした。投手をやり始めたのは高松商業の五年の春からでしたが、此好きといふことが僕にとつてどれだけ幸したか分りません。勿論投手としては此好きといふことに加へるに或るものを以てしなければなりまん。或るものとは練習や研究の必要を指すことは無論ですが、其チームの持つ力、即ち歴史の力を意味します。少くとも僕の場合では如何にそれが頼み甲斐のあるものであるかといふことを入學以來つくづく感じてゐる次第です。慶應といふ歴史の力は私の危機に際してどれだけ頼りとなり救ひとなつたか知れません。英佛戦爭の時に、彼のナポレオンが吾をして英國海峽を六時間使用することが出來たならば大歐洲を吾意の如くして見せると云つたが、ナポレオンは英國海峽を使用することが出來なかつた。僕の場合は大慶應といふ英國海峽を三日間、而も僅か六時間使用することが出來たがために僕の意のまゝに活動することが出來た。ナポレオンには幸運が來らずして僕には幸運が訪れました。

□

春のシーズンの最初、對帝大一回戦に僕はノックアウトの憂目に會ひました。此一蹉跌の爲めに投手としての自信をすつかり失ひ、次の對立教戦の時には其現れが判然たるものがありました。元氣體力がなく、技巧でゆく僕のことですから調子の出ない時には全く施す術もありません。さういふ譯で、早慶戦までには猶一週間といふ時日があるからもう少しピッチングを研究して置きたいと思ひながらも、昨秋のやうに思ふやうに肩の調子も出ず、コントロールも惡いためについそれも怠り勝ちでした。野球をやる者でスランプといふことを知らない人はないでせう。併し打擊のスランプは聞くが、守備のスランプといふことを聞いた人はまださう多くはないでせう。實際打擊のスランプも辛いことですが守備のスランプも實に苦しいことです。僕の場合には今年は正に守備のスランプであつたでせう。昨秋のやうにどうしても自由なピッチングが出來ません。やらうとしても忘れたやうに調子が出ないのです。

投手のスランプがチーム全體に影響し、ゲームに影響することの大きいのは云ふまでもありません。併し此スランプも何かの動機で回復することがあるもので、だから諦めずに平常の通りに練習をしてゐてその動機を摑むより外に道はありません。こんな時に自分としつくり氣の合つた捕手と共にピッチングが出來る位いゝことはありません。さういふ時には自由に思ふやうに投げることが出來るのでスランプを脱する動機となることも有り得るのです。これは僕だけの場合でなく、他の投手でも意氣の投合した捕手とピッチングをやることは、どれだけ投手としての進歩に役立つかといふことを知つてゐるでせう。

□

さうかうする中に一週間の時日もたつて早慶戰の間際になりました。今更あせつて見ても仕方がありませんので、投手としての練習は止めて內野手をやりました。(內野手の練習は對帝大戰が終つて以來ピッチングのひまにやつてゐました。)

一回戰は脆く敗れました。それについての感想といふものはこゝにはありません。

第二回戰は一日をおいて行はれました。當日腰本監督から少しピッチングをやつておけと命ぜられたので、これは投手をやらせられるなと少しひやりとしました。事實投手としての自信を少しも持たずに試合に臨むのですからひやりとするのも無理はありません。併しのるかそるか一つやつて見ようと決心をしました。メンバーが發表された時に三壘手として自分の名が出てゐるので少し意外に思ひましたが、併し是は事によるとリリーフとして立たされるのではないかと思ひました。

案の如く三回目にリリーフとして立たされました。此時に前に云つたやうに「のるかそるか」一つやつて見ようといふ氣持てプレートに立ちました。かういふ氣持が危機の際投球の上で非常に助かるものです。かゝる場合氣持の平穩といふことが大切なのは總ての投手が經驗する所でせう。僕は危機に瀕した場合には危機といふことを考へずに他のことを考へながら鼻歌を唱つたりしてゐます。かういふと水原といふ男は圖々しい男だと思はれるかも知れませんが、事實野球をやる上に於いて圖々しいといふことは甚だ必要なことなのです。此圖々しさがなくては良き選手になれないばかりでなく又成功もしないと僕自身は信じて居ます。

□

かうしてスランプに陷入つたまゝの狀態で僕はリリーフに立ちましたが、此時に僕と一番氣の合つた川瀨君が捕手になりましたので、これなら思ふやうに投げられるなと思ひました。此瞬間のデリケートな氣持が投球を支配する大きな動機となり、昨秋のやうなピッチングが出來ました。とにかく第二回戰は危いながら僕等の勝利になりました。

□

決勝戰は翌日開かれました。其日も前日と同樣ピッチングをやれと命ぜられました。やつて見ると前日よりもスピードもあり、カーブもよく曲るので、これなら今日も投げられないことはないと思ひましたが、體力のない悲しさ、肩がいゝやうに思つてゐても球の重味に缺けてゐたのであのやうに宮武君に救いを求めなければなりませんでした。初めピッチングをやつた時に肩はさほど疲れてゐなかつたので、これならばと早合點をして了つたのが悪かつたのです。この安く見るといふ事程大敵はありません。敵を安く見たが故に思はぬ不覺をとつた例は世間に幾らもあります。投手も自分の肩に信頼することはいゝが、これを安く見て信頼を大きくすることは失敗のもとです。

生來の敗けじ魂

湯淺禎夫

私は土手に向つてピッチングを練習したとか、煉瓦塀に穴をあけたといつた樣な、所謂詩的な苦心談は持つてゐない、といつて私が投手としての素質を多分に惠まれてゐたとは決して思はぬ、なるほど調子のいゝ日には相當なスピードがあり、又ブレーキのかゝつたカーブもあつた、然し投手はスピードとカーブのみでやれるものではない、それはわざわざアメリカの大リーグを例に引き出すまでもないことで、毎年春と夏に甲子園に集る中等學校の投手連を見てゐても首肯けることであらう。

全く自分は、身體が人並より少し許り大きかつた以外には投手としての特別の才能があつたとは思はれぬ。唯速いのみで球質に變化がなかつた。投手になつた當座などカーブは五寸とは出らなかつたものである、その上コントロールのないことはたゞストライクを投げるのに苦勞するくらひであつた、等々と書くと如何にも努力をして來た樣に聞えるが、或は傍で見てゐれば苦勞した樣に見えたかも知れぬが、實は持つて生れた負けじ嫌ひが——それも屢々災ひしたが——遂々、野球の商賣人だなどと野次られる樣にしてしまつたといつていゝ。

そもそも私が投手をやり出した動機がこの負けじ嫌ひからで、始めは三壘、次に捕手をやつたが、如何しても投手が前半はいいのに後半になるとフリーバッテイングの樣に打たれるのが口惜しくて、「俺が投手をやつてみるから君捕手をやれ」と投捕手交代をやつたのが始まりで、先輩やコーチャーに有望視されてやり出したのでないから、如何しても云ひ出した手前、いやが應でも前の投手より好い成績を擧げねばならぬ羽目になつてしまつた。ところがこんなことだからピッチングをしやうと思つても捕手が快く捕つて吳れぬ、仕方なしに下級生に捕手を命じてその冬二三ヶ月間、捕る方は寒くて手が痛かつたであらうが上級生の威光で、毎日雨さへ降らねば少しぐらひ雪が降つてゐやうが引つ張り出して投げた。そしてどうにかストライクが投げられる樣になつて、四月の始め頃投手としての初陣を丁度巡業で米子へ來た出羽の海部屋の力士野球團と試合をやつた、五對零で敗けたが安打は一壘手をしてゐた高の山に一本打たれたのみで四死球は五個かあつたが、敗因は此方の一壘手が新しかつたためで、まあ初陣としては素晴しい成績で、その上「君の投手振は慶應の新田君そつくりだ」などと讃められて有頂天になつたのであつた、然しそれから試合をやる度にコントロールがないため最初の四球が必ず點になつて敗けるといつたやうな理で始めの自信は何時の間にか覆されてしまつた。

私が投手として先づ苦しんだことはこのコントロールで、可なり練習もした心算だが今だに思ふ樣にならずそろ〳〵投手の壽命も終

りになつてしまつた。しかしこの一球のコントロールはどうにかスピードとカーブで誤魔化して來たが最も困らせられたのは負けじ嫌ひな、怒りつぽい心のコントロールであつた、

先づ第一の失敗は中學最後の夏の大會で優勝戰に鳥取中學とぶつかつて一對一で七回に入つて味方の二壘手が凡飛球を落したのに始まり、運も惡かつたのであらう、次の打者のバントが一度ファウルになり乍ら石か土かにはじかれて丁度線の上で止まつて無死で二走者を出してしまつたけれど後がもう七番八番といふところだのでまだ自信はあつたが、捕手のパスボールで一點をリードされた、然しこの一點だけで食ひ止めて居ればまだ勝敗は如何なつてゐたか判らなかつたのに、この捕手のエラーに憤慨した自分は次の球を打者の背後に投げて又一點を獻じ遂々負けてしまつた。

試合が終つて先輩からこの缺點を懇々と戒しめられてそれからは「常に平靜であれ」と試合の始めには必ず思つてかゝるけれど、如何しても持つて生れた負けじ嫌ひは、味方の失策、審判の誤審を平氣で見逃せない、その上觀衆の野次に無關心であり得たいといふ投手としての最も大きな缺點を持て餘してしまつた。

明治に入つて渡邊君不意の退団でいよいよ投手をやるやうになつて、早慶を向ふに廻すとなると益々この神經は鋭敏になるばかりであつたが、震災後秋のリーグ戰に僥倖にもしろ兎に角明大野球部創設以來始めての優勝は、私に「先づ一仕事終つた」といふ安心が私から焦燥だけは除いて呉れた、そして幸か不幸か、その冬三ヶ月間の病院生活で再び運動は出來ぬなどとおどかされて、あきらめに似た一種の悟りを得た、幸ひ恢復して再びプレートに立てるやうになつてからは以前の様に何でも無理矢理に勝たうといふ氣持だけは薄らいで來た、そして、殊更觀衆などに無關心の様に裝ふてゐる態度が傲慢だなどと云はれたこともあつた。

投手として苦しい試合といへば明大時代の對早大戰で、強打者揃ひの早稻田には手古摺つた、何といつても此方がコントロールの不足なところへ選球されるのには全く弱らされた。その中でも最も苦しめられたのが井口氏であつたらう。始めての試合に三壘打でヤヤフンと云はされ、次はこの連中を向ふに廻してもう少しでノーヒット、ノーランといふところを代君の二本の三壘打）一點にならなかつたが折角の記錄をフイにさせてしまつた。卒業して大毎へ入つてから小野氏に一寸云はれてなる程と解つたのであるが、あまり四球を出すのを恐れてストライク、ストライクと球を整へた爲に反對に打たれたもので、もう一すウエストするだけの餘裕と自信があれば早大に對しても、もう少し好い成績を擧げ得たと思はれる。慶應とは丁度相手が非常な沈滯期にあつた關係で樂に試合することが出來た。永井氏などは強打者として恐しい相手であつたが、君を敬遠さへすれば大事に至らずに食ひ止められるので屢々この戰法を採つた、今でも三對一でリードしてゐる試合の八回に二死滿壘で君が打者に立つたとき故意の四球で一點を押し出して三對二にして辛くも危機を脫したあの試合は苦しかつただけに成功したときの氣持を忘れることが出來ぬ　こんなことで左打者に苦手（實は誰にでも苦手である強打者ではあるが）が多いため左打者に弱いなどと云はれて左打者がボックスに立つと中學生でも一時は變な氣になつたりしたものであつた。

中央公論五百

大懸賞原稿募集

舊きもの必ずしも貴くはない。舊くして而も新たなる、日月の如くにして始めて貴い。わが中央公論は來る九月號を以て五〇〇號を算へんとしてゐる。創刊實に四十有四年である。起伏興廢恒なきわが雜誌界において確かに異數とするに足りる。而も四十有餘年儼として太陽の如く、わが言論界唯一の最高標準としてその存在を保つて來たことに至つては、何人の前にも誇つていゝと思ふ。われらの歴史は一頁と雖も汚されてはゐない。今も昔も、日本唯一の最高言論機關たるに渝りはない。代は明治、大正、昭和と移り變つたが、その間を縫うて、一貫して言論界に最大炬火をかゝげて來たこと、洵に太陽のそれの如くである。いかに新奇を趁うに氣紛れなる我國人と雖も此事實の前に頭を垂れざるを得ないであらう。五〇〇號雜誌の發刊は一中央公論社の歡びではないのである。

我社はこの未曾有の歴史的事實を祝福するために「五百號記念號」を發刊しようと思ふ。さうしてその史的記念を意義あらしめるためには、一夕の祝宴やお祭り騷ぎを排して我國人大衆と共にその欣びを頒ちたいと思ふのである。

大懸賞原稿募集はその計畫の一端である。即ち來る九月號の大部分を我一般讀書界のために開放して、廣く隱れたる篤學同好の士を求め、一は現代社會の文運に貢獻し、一は多年の愛顧に酬いんとするのである。來り會して、この史的記念を意義あらしむると同時に、無くてはならない唯一の存在たる太陽の光輝をして益々永劫の光榮に輝かしめられんことを希望する次第である。

號記念號豫告

應募規定

一、論　文（社會、經濟、政治、科學、其他一般評論）

枚數　四百字詰原稿紙三十枚以內

一、中間記事（隨筆、讀物、實話、傳說、考證、其他）

枚數　四百字詰原稿紙四十枚以內

一、創　作（小說、戲曲、シナリオ）

枚數　四百字詰原稿紙五十枚以內

（注意）優秀なる原稿は幾篇にても採用す。

一、締　切　昭和四年七月十日

一、應募原稿は總て中央公論編輯局「五百號紀念號應募原稿係」宛と表書する事。

一、住所姓名は最初の頁に楷書にて正確に明記する事。

一、返送を要する原稿は其旨明記の上、郵券を添付する事。

一、掲載の原稿に對しては一枚三圓以上十五圓以下の賞金を呈す。

一、一人にて幾篇投稿するも可なれども各篇必ず住所姓名を明記し各別に綴ぢておく事。

中央公論五百

大懸賞原稿募集

舊きもの必ずしも貴くはない。舊くして而も新たなる、日月の如くにして常あて貴い。わが中央公論は來る九月號を以て五〇〇號を算へんとしてゐる。創刊實に四十有四年である。起伏興廢恒なきわが雜誌界において確かに異數とするに足りる。而も四十有餘年儼として太陽の如く、わが言論界唯一の最高標準としてその存在を保つて來たことに至つては、何人の前にも誇つていゝと思ふ。われらの歷史は一頁と雖も汚されてはゐない。今も昔も、日本唯一の最高言論機關たるに渝りはない。代は明治、大正、昭和と移り變つたが、その間を縫うて、一貫して言論界に最大炬火をかゝげて來たこと、洵に太陽のそれの如くである。いかに新奇を趁うに氣紛れなる我國人と雖も此事實の前に頭を垂れざるを得ないであらう。五〇〇號雜誌の發刊は一中央公論社の歡びではないのである。

我社はこの未曾有の歷史的事實を祝福するために「五百號記念號」を發刊しようと思ふ。さうしてその史的記念を意義あらしめるためには、一夕の祝宴やお祭り騷ぎを排して我國人大衆と共にその欣びを頒ちたいと思ふのである。

大懸賞原稿募集はその計畫の一端である。即ち來る九月號の大部分を我一般讀書界のために開放して、廣く隱れたる篤學同好の士を求め、一は現代社會の文運に貢獻し、一は多年の愛顧に酬いんとするのである。來り會して、この史的記念を意義あらしむると同時に、無くてはならない唯一の存在たる太陽の光輝をして益々永劫の光榮に輝かしめられんことを希望する次第である。

號記念號豫告

應募規定

一、論　文（社會、經濟、政治、科學、其他一般評論）

枚數　四百字詰原稿紙三十枚以內

一、中間記事（隨筆、讀物、實話、傳說、考證、其他）

枚數　四百字詰原稿紙四十枚以內

一、創　作（小說、戲曲、シナリオ）

枚數　四百字詰原稿紙五十枚以內

（注意）優秀なる原稿は幾篇にても採用す。

一、締　切　昭和四年七月十日

一、應募原稿は總て中央公論編輯局「五百號紀念號應募原稿係」宛と表書する事。

一、住所姓名は最初の頁に楷書にて正確に明記する事。

一、返送を要する原稿は其旨明記の上、郵券を添付する事。

一、掲載の原稿に對しては一枚三圓以上十五圓以下の賞金を呈す。

一、一人にて幾篇投稿するも可なれども各篇必ず住所姓名を明記し各別に綴ぢておく事。

應募者諸賢に告ぐ!!

本誌が前號に於いて、本邦誌界未曾有の盛事たる「五百號記念號」計畫の一端として、廣く江湖に大懸賞原稿募集の事を發表するや果然讀者間に白熱的歡迎と熱烈なる支持を受け、其現れとして讀者が苦心と努力の結晶たる原稿は毎日編輯局に殺到して机上に山積する盛觀を呈した。我々は今其整理の爲めに多忙を極めてゐる。實に讀者の意氣込の程も知られて凄じい位だ。豫期してゐた所ではあつたが其反響の大きいのには驚いてゐる。

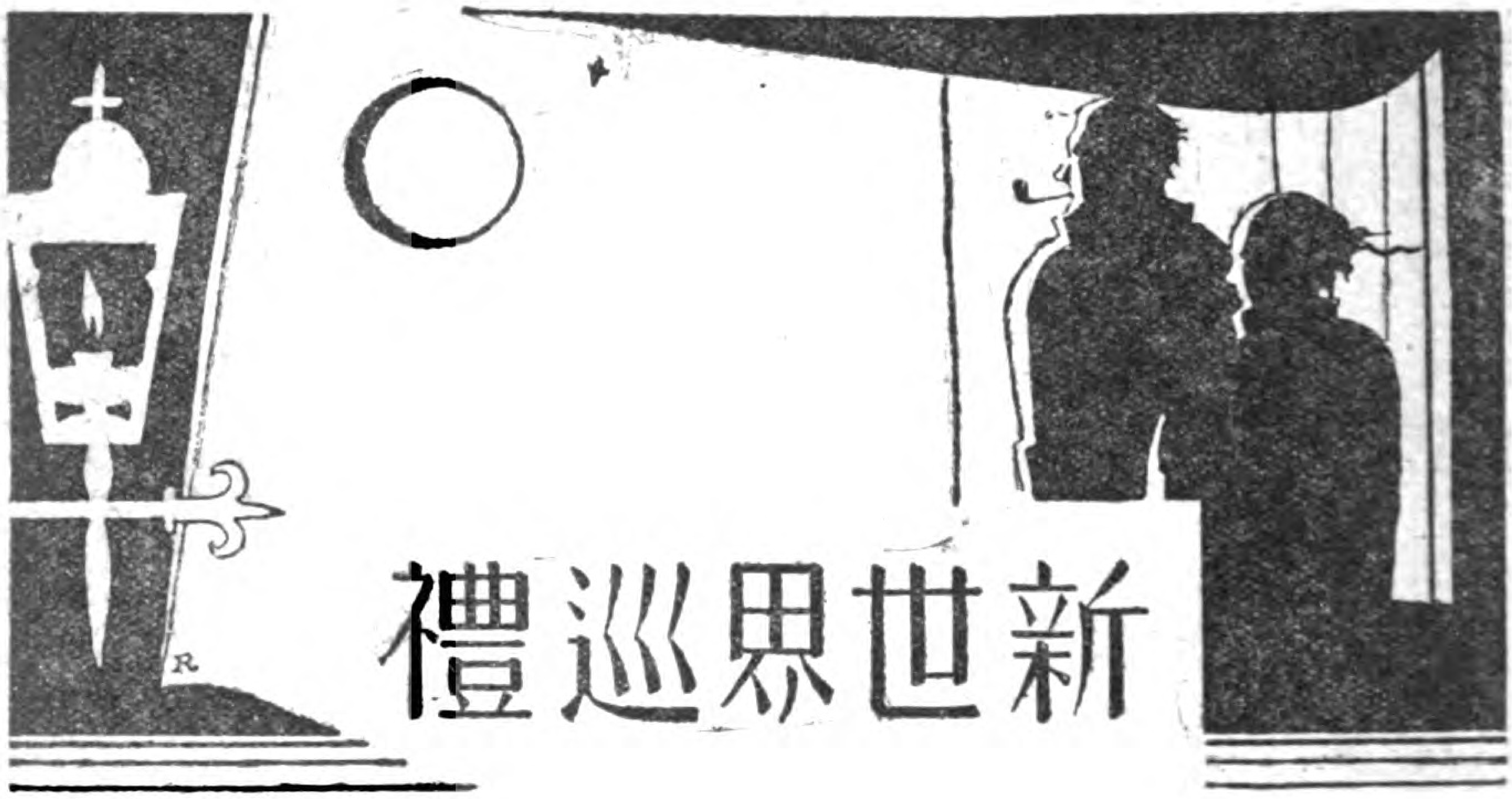
今迄集つてゐる原稿の中にもどんな大物があるか分らないが、これからも名篇力作が多く集つてくることゝ大いに期待してゐる。

猶、募集原稿の締切は六月三十日としてあつたが、其後時日の切迫とゝもに、十分なる推敲と準備のために、締切期日の延期を熱望する人々多く、特にそれらの寄稿家の便宜を計つて**締切を七月十日**に改定した。應募者はそのつもりで前掲詳細規定參照の上奮つて投稿せられんことを希望する。

現れざる珠玉を世に紹介することは本誌の使命であり欣快とする所である。

新人よ出でよ!

本誌は力ある新人の出現を期待すること久しい。



海のモザイク

谷譲次

1

踊る水平線へ――！

がたん！

――といふ一つの運命的な衝動を私達の神經へ傳へて、私たちの乘り込んだNYK・S・S・H丸は、倫敦・横濱間の定期船だけに、ちよいと氣取つた威嚴と壯重のうちにその推進機の廻轉を開始した。

倫敦テムズ河上、ロウヤル・アルバアト波止場(ドック)でである。

こゝで多くの出帆がさうであるやうに、一つの劇的な感傷が私たちの心もちに落ちるんだが、それより、先づ、何うして私たちがこの特定のS・S・H丸に乘船してゐるのか――その説明からはじめやう。

葡萄牙の田舍のエストリルといふ海岸にゐる頃だつた。ちようどホテ

ルの私達の部屋が、海へ向つてヴエランダにひらいてゐた。ホテルは小高い丘に建つてゐて、その上、私たちの室は三階だつたから、そこのヴエランダからは大西洋に續いてゐる大海の一部が一眼だつた。冬だと言ふのに毎日初夏のやうな快晴で、見渡す限りの水が陽炎に搖れてゐた。海岸にはユウカリ樹が並んで、赤土の崖下に戀人達が晝寢してゐた。私たちは何時もヴエランダの椅子にかけて、朝から晩まで、移り變る陽脚と、それに應じて色を更へる海の相とを眺めて暮らした。

日に何艘となく大きな船が水平線を撫でて過ぎた。その多くは地中海巡航や南米行きだつたが、なかには、歐洲航路に往來する日本の船もある筈だつた。かうして日課のやうに沖を望見してゐるうちに、私達はいつの間にか、船體の格恰や煙突の工合で重な會社の船ぐらゐは識別出來るやうになつた。ことにNYK――日本郵船――の船は直ぐにわかつた。私たちは、沖を左から右へ、日本から倫敦へ往く途中の船を見ては、希望とあこがれに燃える故國の人々を載せてゐるであらうことを思ひ、その反對に右から左へ、倫敦から日本へいそぐ復航船を眺めては、私たちもやがて、日本へ歸る日のさして遠くあつてはならないことに今更のやうに氣づいた。そして、それらの日本船に乘つてポルトガルの沖を過ぎる人々のうち、船から見える海岸のホテルの一室に私たち日本人夫婦がもう一月の餘も住まつてゐて、今もかうして望遠鏡を向けてゐやうなどとは、誰ひとりとして考へる人もあるまい。こんなことを話し合つて、まるで島流しにでもされてゐるやうに、私達は淋しい氣もちになつたものだつた。

で、近いうち、あの船の一つに乘つて、この沖を通つて日本へ歸らう――何時しか二人のあひだに、かういふ暗默の契約が成立してしまつてゐた。

じつさい、日本を出てから、その時で既う一年近く經つてゐた。したがつて、もう一度出直して第二次的な土地を廻つてみることにしても、今度はこれで切り上げて兎も角日本へ歸りたいといふ氣が、私には強かつた。それが、葡萄牙エストリルの沖を過ぎる船によつて、かうして無意識に刺激されたのだつた。

それから、モンテ・カアロで新年を迎へて、一月の末から二月へかけて私達は南伊太利のナポリにゐた。ホテルは海岸前の「コンテネンタル」だつた。しかも、二階の私たちの部屋の直ぐ下が、あの、海に突き出てゐる有名な「卵子の城（カステロ・デル・オボ）」で、そのむこうの水面を、こゝでも毎日、東洋通ひの巨船が煙りを吐いて通つた。なかでもNYKの船は一眼で別かつた。丸の字のついた名の船が、よく棧橋に横付けになつたり、小雨のなかを出港し

て行つたり、這入つて來たりしてゐた。ポンペイを見物に行つた日などは、あの、狹い石疊の死都の街上で、その寄港中の船の一つから下りたらしい何十人もの日本人の團體を見かけた。すでに莫然と決まりかけてゐた私達の歸國ばなしは、このナポリで日本の船を眼近に見ることによつて急天直下的に具體化したのだつた。私たちは、明日にでも歸るやうな氣になつて、代理店(エージェント)へ出かけて、倫敦橫濱間のNYKの航海豫告を調べたりした。そして、四月廿日倫敦出帆のH丸といふことに、大體心組みを立てたのである。

　が、歸國のことだけはナポリで決定したもの丶、全歐羅巴を歩きつくすためには、私たちの前には、まだ殘つてゐる土地がある。で、早々に伊太利を離れた私達は、北上して雪の瑞西に遊び、そこから墺太利の維納に出て、そこらを歩き廻つてチェツコスロヴァキアへ這入り、プラアグに泊まり、それから獨逸を拔けて巴里へ歸つたのが三月末だつた。巴里は以前に二度も三度も來てゐるので、旬日滯在ののち倫敦へ渡つて古本の買集めや見物の仕殘しを濟ますために日を送り、やつと廿日のこのH丸に間に合つたのだつた。

　切符も買ひ、仕度も調ひ、暫らくの滯英にも前から色々と知友も出來てゐたので、そこらへの顏出しも濟まして、あとは手を束ねて乘船の日を待つばかりの心算だつたのが、こゝに急に思ひがけない困難が降つて湧いたと言ふのは、實は買ひ込んだ書籍の發送方についてゞあつた。

　と言ふのは、いざといふ實際に大工でも呼んで來て見せたらきつと荒削りの板で幾つか木箱でも作つて呉れるだらう。それが一番格安でもあり、便利だと迂濶に日本風に考へてゐたのだが、出帆の日も迫つたのであちこち聞き合はしてみると、日本と違つて此處らの町角や露路に棟梁の家があるわけではなし、さんざ困つた揚句、それではと箱から荷作りまですつかり運送屋に一任することにした。ところが、これが、箱一つ造るのに十日あまりもかゝるとあつては、とても急場の間に合はない。おまけに、木箱一個十圓以上もする。といふと、ワニスか何か塗つた本棚代用の箱でも想像する人があるかも知れないが、成程、馬鹿固い英吉利人の仕事だけに嚴丈な點は可笑しいほど嚴丈を極めたものに相違ないけれども、要するに、送る途中だけ用に足りればいゝのだから、第一、そんなに非常識に丈夫であることを必要としないし、何と言つても、石油箱の大きさののやうな、碌に鉋もかけてないぶつつけ箱が一磅もするとは驚くのほかはない、しかし、これも考へてみると無理もない話しで、英吉利は、といふより歐羅巴は一般に、石や鐵には事を缺かな

い代りに木村には案外不自由してゐる。おまけに手間賃が高いのだから、荷造り用の雜な木箱でさへこれだけ取らなければ引き合はないのである。早い話しが、ちよつと店へ買物に這入つても、賣子が品物を奬めながら、第一番にいふ言葉は、ちやんときまつてる。「これは hand-made で御座いますから」と言ふのだ。つまり、職人が手で造つた物だから恐ろしく贅澤である。從つて値段も高いといふ意味なのだ。この言ひ草はわれわれ日本人には不思議に響くけれど、機械製品に飽きてゐるむこうの連中にはこの上なく有難いとみえて、ことに亞米利加人なんか「手作り(ハンド・メイド)」とさへ聞けば、何んなにべらぼうな高値をも卽座に肯定して、隨喜の涙とゝもに嫌應なしに買ひ取つて行く。だから各地のお土産店でもすつかり心得てゐて、人形一つ出しても「手づくり(ハンド・メイド)」、ハッピイ・コウト一枚見せるにも「手作り(ハンド・メイド)」、灰皿を買はふとしても「手造り(ハンド・メイド)」——だから値が張つてゐるのだと言ふ。何から何まで「手づくり」の一枚看板で下らない物を高く賣りつけやうとするし、また、さう聞いただけで、詰らないものに大枚の金を投じて惜まない人がすくなくないのだ。そんなことを言つたら、日本人の生活品なんか片つ端から「手作り(ハンド・メイド)」でないものはない。かう言つてやると、みんなびつくりして仲々ほんとにしないから妙だ。それも其の筈である。倫敦のマンフヰイルドで靴を買ふにしても、まあ二磅も出せば相當なのが手に入るんだけれど、これが、ちよつと底の皮を手で縫ひつけたといふだけで、公然と五磅の値を呼ぶ。するとこゝに、そこは好くしたもんで、何かしら他人と變つた高價なものでなければ氣の濟まないといふ、ぶるじよあ階級の凝り屋があつて、そんなのを探し出して得意になつてゐる。品質も見たところも二磅のと同じなのに、單に底が手縫ひだといふところだけで、三磅も餘計に拂つて怪しまないのである。尤も、このマンフヰイルドの靴の場合は事實手縫ひのはうが遙かに丈夫で長保ちすると言ふけれど、買ふ方は何も長もちさせやうと思つて買ふのではない。要するに「手作り(ハンド・メイド)」だから高値い、そして高値いが故にのみ手が出るのである。かうなると、日本における吾々の生活なんか、じつに贅澤を極めてゐて、ざつと身邊を見廻すところおよそ「手づくり(ハンド・メイド)」でない物はないやうだ。考へてみると、西洋では、ことに亞米利加あたりでは、人間の工賃が高くて機械による生産費のはうがずつと安く上るから、何でもかんでも劃一的に機械で多量生産してしまふんだが、機械では巧緻な味が出ないとあつてこの通り手工藝品が大歡迎である。言はゞこの現象は、近代資本主義制度の世の中にあつて過去の產業封建時代の遺物を愛するといつた、變態的骨董趣味のあらはれの一つ

に過ぎないかも知れないが、一體人には、良かれ惡かれ、自分にないものをあこがれ求める共通性があるもので、同じことが「あちら」と日本との生活の主材料の相違についても言へると思ふ。つまり、むこうでは、粗末な荷箱が一つ十圓以上もする程、木材が少く、従つて値段が高いところへ持つて來て、石や鐵の建築材料はふんだんにあるから、それで、あゝいふ様式の文明が發達したわけで、日本では鳥渡した物が凡て「手づくりの木製である」と教へてやると、「何といふ高級な！」なんかと心から恐れ入つてゐる。ところが、本國の日本には、何からかにまで石や鐵で作らなければ文明と思はず、しかも機械製でなければ承知しないで、それが西洋風だと信じてゐる感ちがひの亞流者が多い。飛んでもない穿き違ひだ。ほんとに西洋流で行かうと言ふならば、須らく「手作り(ハンドメイド)」を感謝し、木製物を尊び、さうして日本の生活の手近ないたるところにその極致を發見して大いに得々とすべきである。これは、私のよく謂ふ「西洋を知り拔いて東洋へ歸る心」に、形だけにしろ一脈通ずるものがあるのである。

ところで、理窟は第二に、歸國の日が近いたのに本を積み出す方便がなくてすつかり困つてしまつた。假りに一個十圓でもい、としたところで、十箱も作らせると百圓である。おまけに何う急がせても間に合ひつこないのだ。さんざん考へた末、これは新たに造らせるからこんなに高價いんだらうといふことになつて、そこで方々の青物商、酒屋、乾物商、葉茶屋など八人を急派して探させてみたが、何の商店にもほとんどないし、二三あるにはあつても小さ過ぎたり、概して弱くてお話しにならない。おまけにそれが例の「手藝木製品」だとあつてなかなか安くないのである。詰らない事柄だが、私はこれによつて、今まで氣が付かなかつた大英國の缺陷を發見したと思つた。氣が利かないと言はうか、即座の間に合はないといはうか、とにかくこの時ほど英吉利の社會を不便だ、間が拔けてると感じたことはなかつた。

そのうちに、或る人の話しを聞いて、私は早速タイムスのブック倶樂部へ驅けつけた。こゝでは、大戰中に英吉利の政府が彈藥の輸送に使つた箱を、本を送るためとして一般に賣り出してゐると聞いたからだ。が、飛び込んで行つて實物を見ると、やつはり當てが外れてしまつた。第一、四六版の洋書が二十冊も這入ると一杯になるほどの大きさしかなく、それに、本來の目的が目的だけに莫迦に頑固に出來てゐて、内部がとたん張りか何かで空つぽでも好い加減重いのだ。これで本を送つた日には半分以上は箱の郵税になつてしまふ。送り出すと言つても私

は自分の船へ積んで身體と一緒に往くんだから、何もさう堅牢であることは必要としないが、その代り相當大きくて少數で濟むほうが寧ろこの際の條件なのである。

と言つたふうに、乘船近くなつてから苦しみ拔いた結果、ふつと考へついたのが、何處の店ででも賣つてゐる纖維質(ファイバア)のトランクである。直ぐさま近くの百貨店ボン・マァシエへ出かけて行つてみると、疊一枚に近い大きさのが、たつた十三志――約六圓半――だ。纖維性の布に防水塗料を被せたものでそれでもあちこちに金具が光り、二個處に鍵までかゝるやうになつてゐる。何しろ、持つてこいの大きさで、しかも立派なトランクだ。で、これだと許りにそれを六個揃へて立ちどころに用は足りたが、そこで、私は考へたのである。

只の板を釘づけにしただけの荷作り用の木箱でさへ、約十圓の一磅――廿志(シリン)――もする。タイムスの彈藥箱に到つては、蜜柑箱ほどもなくて十志――ざつと五圓――である。それだのにこの巨大なトランクは、「巨大」であり「トランク」であるにも係らず、「木製」でなく「手造り(ハンドメイド)」でなく「機械による多量生產」であるために、たつた十三志なのだ。これほど私の心を打つた東西文化の方向の相異はない。じつによく兩者の食ひちがひをあらはしてゐると思ふ。これを言ひたいために、長ながとこのエピソウドを書いて來たのだが、煎じ詰めると、徒らに方の眞似をしないで、わが特長を伸ばして往く以外に進展の途はないといふことになる。

このトランクは非常に重寶した。木箱や彈藥箱は、送つて來て日本へ着いてしまふと、毀してお風呂の薪にする位ゐの用途しかないが、トランクなら、物を入れて保存して置くのに子々孫々まで役に立つ。

これらのトランクは、當分私達の家に異彩を放つことだらう。書籍とは限らない。英吉利から何か送るには、迷はず纖維性(ファイバア)のトランクに入れることだ。

2

さて、これでいよいよ歸國の途に就けるといふんで、喜び勇んでゐると、又してもこゝに一大事件が勃發した。旅券(パスポート)を紛失したのである。

そもそもこの旅券たるや、海外における唯一の身分證明であつて、國籍による必要の保護も、金錢關係の保證も、その他すべて公式の場合には、一にこの綠色の小册子が日本帝國としての口を利くんだから、天涯の遊子にとつては正に生命から二番目の貴重品である。第一、これがなくては英吉利を出ることも

船へ乘ることも出來ず、完全に身動きも取れなくなつてしまふ。それ程大事なものを失くするなんて實に愚な話しだが、旅行中は虎の子の信用狀や現金の英貨——旅行に持つて歩くには、五磅乃至十磅のいぎりす紙幣が一番いゝ。相場によつて高低することもすくなく、何處ででも簡單に兩替出來るから——と同居させて始終肌へつけてゐたんだが、それが、もう歸國すれば用がなくなるといふんで其處らへ投げ出して置いたのが誤りの因らしい。すつかり荷作りを濟ましたあとで、旅券の無いことを發見したのだ。

一體旅行もいゝが、出發ごとの荷作り(パッキング)ほど嫌なものはない。西洋人はいゝ加減に誤魔化してしまふが、日本人は、日本人らしい丹念さから、細かい隙間まで利用して實に能率的に詰め込む。あまりに能率的過ぎて却つて能率が上らないやうだが、とにかく、折角何日もかゝつて出來上つた大小幾十個の荷物を、この旅券一册のためにすつかり引つくり返さなければならないことになつた。

口說いてみたつて始まらない。何うしても探し出さなければならない性質のものだから、徹夜して其の事業に着手した。出帆前夜のことである。

が、部屋の内外は勿論、荷物は全部出して、トランクからスウツケースから一枚々々に逆さにして振つて見る位にまでしたけれど、問題の旅券はたうとう出て來なかつた。

この旅券捜査には、下宿の老夫人をはじめ、同宿の連中から女中一同まで總出動で手——といふより眼——を貸して呉れたのだつたが、遂に徒勞に歸して、翌朝早く私たち二人は倫敦の日本領事館へまかり出た。そして平身低頭、泣きを入れてやつとのことで新しい旅券の再交附を受け、それでやうやう乘船することが出來たわけだが——もつとも、歸國の船なら旅券なしでも乘れるけれど、そのかはり、旅券入用の土地、例へば英領殖民地などへは、寄港しても上陸することを許されない——ところが、五十日近い海の旅を終へて先日日本へ歸つて見ると、外遊中の留守宅を頼んで置いた鎌倉の某家へ、私宛に倫敦の下宿から厚い封書が屆いてゐる。シベリア經由だから私より先に疾うの昔に着いたのだ。莫迦に重要めいてゐるが何だらうと思つて開けてみると、出發の時あれ程骨を折らした古い旅券が出て來たには驚いた。手紙がついてゐた。

「御出發後、女中がお部屋を掃除しましたところ、戸棚の敷紙の下からこれが出て參りました。勿論あなた自身が安全のため其處へ入れて置いてお忘れになつたものでせう——。」

まさにその通りの記憶がある。いたつらにかの老婆をして名

を成さしめたに過ぎないのが、私としては今遺憾この上ない次第だ。

ところが、倫敦の領事館で貰つて來た第二の旅券である。これをまた神戸のオリエンタル・ホテルに忘れて來たと言つて大騒ぎをした。

六月三日に神戸入港、八日横濱へ入る筈だつたＳ・Ｓ・Ｈ丸が一日早く――ＮＹＫの船でも豫定より早く着くこともあるといふ實證のために――二日に神戸へ投錨してしまつたので、八日まで一週間近くも神戸棧橋の船内でぶらぶらしてる譯にも往かないから、入港と同時に上陸してオリエンタル・ホテルに二日泊つたのだが、四日の朝、東京へ來る特急のなかで再下附の旅券がないと彼女がいひ出した。なあに、もう日本國內だから旅券なんか要らないさと私は威張つてみたもの、二度も紛失したんでは何うも後仕末が厄介である。困つたことになつたと些さか悄氣てゐると、これは幸ひにして帝國ホテルへ着いて當座の荷を解くと、その鞄の一つから現れたのでは先づほつとした。

が、いくら呑氣だからつて、私たちほど忘れ物を商賣にしてゐるやうなのもあるまい。そのオリエンタル・ホテルででも、部屋を出る時はすつかり檢分したに係らず、小使（ボウタア）の一人が動き出さうとしてゐる私達の車窓へ葡萄牙で買つた銀の煙草入れを屆けて呉れたし、帝國ホテルだつて、いよいよ鎌倉の自宅へ歸るつもりで、勘定（ビル）を濟まして玄關で自動車を待つてゐると、そこへあたふたと部屋付きボウイが私の時計と彼女の帽子を持つて驅けつけて來たくらゐである。

この通り、自慢ぢやないが、一年半に近い外遊中、私達が諸國各地のホテル・停車場・タキシ內――これが一番苦手だ――其他料理店等で置き忘れて來た色んな物品を價格に見積ると、決して馬鹿にならないものがある。就中、その種品別に到つては實に奇拔のいたりで、ことに今では口惜しくて耐らないのは、芬蘭土の內地へ踏み込んだ時――まあ、止さう。愚痴をこぼしたつて何うにもならないし、それに、この置き忘れ・紛失物の一件を書き竝べ出すと、それだけに優に、生活の角度から見た、全般にわたる旅行漫筆が出來上るくらゐで、その土地々々に關する多少の描寫や說明も必要だし、何よりも、今はこゝにその紙數もなければ場合でもない。しかし、のべつ幕なしに驚いたり急いだり狼狽てたりするのが旅行者の特權であり義務であると言ひ條、あれほど色んな國へ雜多な物を撒き散らして來たくせに、よく自分で自分を置き忘れて、自分を西班牙が何處かのホテルの寢臺へでも寢かしたまんまにして來なかつたものだと、

吾れながら感心してゐる。

それはさうと何時の間にかもう日本國へ歸着したやうなことを言つてゐるが、實は、話しの上では、S.S.H丸はいまやつと倫敦テムズ下流のロウヤルアルバアト埠頭（ドック）を離れたばかりのところに過ぎない。

で、これらの大小事件を突破したのち、やうやう船へ乘ることが出來たのだつた。

四月廿日出帆といふのに、潮の工合ひで廿日は早朝に解纜するから、十九日一ぱいに乘り込むやうにといふお達しである。ボウト・トレインは、四時廿分にフエンチヤアチ停車場を出るといふ。その廿分前の四時になつても、私たちはまだ荷拵へが出來ずにゐる。

荷物が餘つて何うにも仕様がないのだ。一たい、室内に山積し散亂してゐる物品を白眼んで、過不足なくその全部を入れるに足る容積のトランクなり鞄なりを豫め想定するには、實に專門的な眼力を必要とするのだが、私達はこの點でも明らかに失敗した。即ち充分這入ると多寡を束つて安心し切つてゐた最後のトランクへ、いざとなつて詰めて見ると思つた半分も這入らないのだ。と言つて、今になつて入れ物を買ひに走る時間はない。仕方がないから、下宿の老婆を煽てゝ家中から買物の空箱やら、クリイニングに洋服を入れて來るボウル紙の箱や何かな有りたけ徴收し、それへ手當り次第に放り込んだのを繩で縛つてタキシへ投げ入れ、狂氣のやうに疾驅させてほんとに間一髪のところで船へ聯絡する汽車の出發に間に合つたのだつた。

けれど、日本で下船する時さう幾つも紙箱をぶら提げるわけにもいかないから、これは、香港で樟（くす）の木製の大型支那箱を買つて、全部をこれへ叩きこむことによつて見事に解決した。この樟材の支那箱は絶えず内部に樟腦の香が滿ちてゐて、ナフタリンなんか入れなくても蟲を防ぐから、毛織物類を仕舞つて置くには、家庭用として特に便利である。それはいゝが、香港でこれを買ふ時、言葉が通じないで大いに弱つた。確かに「くすのき」製に相違ないかと念を押してやらうと考へたのだが、さて、何と言つていゝか判らない。そこで氣が付いたのが筆談だ。紙と鉛筆を取り寄せ、正成公から思ひついて「楠」の字を大書し、箱を叩いて首を傾けて見せた。これで老爺め、會心の笑みを洩らすことであらうと私は内心待ち構へてゐると、彼は不愛想に私の手から鉛筆を引つたくつて、非常に事務的に私の「楠」の字を消して其の傍へ「樟」と訂正した。成程、これでこそ「くすのき」である。計らずも私は、そこで一つの生き學問をしたのだつた。

これも五十日あとのこと。

今はもう一度倫敦出帆へ逆行して、錨を上げる。

四日午前九時、ＳＳ・Ｈ丸はロウヤル・アルバアト・ドックを離れてテムズの河口へ揺るぎ出た。

がたん！

踊る水平線へ！

そして、極東日本へ！

3

では、英吉利よ、「さよなら！」

さよなら！

大きな聲で「さよなら！」

何國の港も同じな殺風景な波止場の景色に過ぎないんだが、長い長い歸りの船路を前に控へてゐる私達の心臓は、いさゝか旅行者らしい感傷に甘へやうとする。が、そんな機會はなかつた。交通機關はつねに無慈悲にまで個人の感情に沒交渉である。私と彼女が、棧橋に立つてる二人の巡査と、數人の近處の子供らと、一個の荷役人夫達に別れの手を振りながら、すこしでも強く長くこの倫敦の最後の印象を持續しやうと焦つてゐるうちに、船は自分の任務にだけ忠實に――ミニ、大きな身體のくせに驚くほど早い。さつさと出てしまつた。私達は船室へ歸る。

皿の上の魚のやうに、彼女は何時までも默りこくつて動かない。何が彼女の腦髓を侵蝕してゐるのか、私にはよくわかる。考へてみると、私達は倫敦で相當根を下ろして生活したものだ。人間といふものは、勝手な生物である。かうしていざ倫敦とろんどんの持つすべて、英吉利と英吉利の提供する凡てから時間的にも空間的にも完全に離れやうとするいま、私達は急に一種白つぽい、妙な不安に襲はれ出したのだ。生れた國へ歸ると言ふのに、これは何とした心もちであらう？　が、それは、ふたりのすこしも豫期しなかつた、そして、それだけまた自然過ぎる、長旅に付きもの、漠然たる「前途を想ふ憂鬱」だつたに相違ない。

しかしこの「去るに臨みて」の萬感こもごもは、ぼうつと黄黑い倫敦の霧ぞらとゝもにすぐに消えて、かはりに私は、この一年あまり歐羅巴地圖の上を自在に這ひ廻つていま家路に就かうとしてゐる二足の靴を想像する。それは言ふまでもなくろんどんチヤアリン・クロスの敷石もクリスチヤニアのフイヨルドも、シヤンゼリゼエの舗道も同じ輕さで叩いたし、マドリツド鬪牛場の砂も附けば、これからはまた印度の緑蔭も踏むことだ

らう。私達の旅のすがただ。詩人の墓も撫でたし、ナポレオンの帽子にも最敬禮した。西班牙の驛夫とも喧嘩したし、白耳義の巡査にも突き飛ばされた。モンテ・カアロでは深夜まで張り續けたし、ムッソリニの家の門口で落葉の一枚を拾つて來る風流記念心も持ち合はせた。獨逸廢帝も付け狙つてみたし、明方近いキャバレも覗いた。裏街の酒場の禮儀も覺えたし、新しい舞踏ステップも一通りは踏める。それから・それから・それから——眼まぐるしく動いたやうで、一個處にぢつと落ちついてゐたやうな氣もする、今となつてはもう一度繰り返したい一年餘であつた。

氣がついてみると、私は、船の進行に合はして何時の間にかこゝろ一ぱいに絶叫してゐた。

がたん・がたん！

がたん・がたん！

Home-coming blues

Home-coming blues

何とそれが調子よく機關のひゞきに乘つたことよ！

これからは當分この連續的に退屈(モノトナス)な低音階と、ぺいんとの香と、飛魚と布張椅子(キャンバス・チェア)と、雲の峰との世界である。

ろんどん——ジブロウタ——馬耳塞——ナポリ——ぽうと・さいど——スエズ——古倫母——シンガポウア——香港——上海——コウブ——よつくへえま！　ふうれえい！

船室は、B甲板の一〇に識。左舷(ポウト)である。

夜、寢臺へ這ひ上る。

同時に、さまざまな斷片が私のこゝろへ這ひあがる。

バクスタア お婆さんの家からフエンチャアチ停車場へのタキシの窓から瞥見を持つた最後の倫敦——うす陽が建物を濡らしてゐた。銀行街にあふれる絹帽(シルク・ハット)と縞ずぼんの人波。その無論の中央に銅像のやうに直立してゐた交通巡査の白い手ぶくろ。

とにかく、これが當分のお別れであらう英吉利海峽——去年の夏はこの上層の空氣を飛行機で裂いた——の晩春の夜を、船はいま經濟速力の範圍内でそれでも廻轉棒(シャフト)を白熱化させて流れてゐる。じぶらるたるへ、マルセイユへ、ころんぼへ、上海へ、やがて神戸へ！

朝は、私たち同行二人の巡禮をすつかり「家を思ひ出して歸らうとしてゐる放浪者」のすこしは殊勝なこゝろもちのなかに發見するであらう。

がたん！

がたん！

と機關が唸る。

船といふ船のなかで、この倫敦發横濱行きＮＹＫ・Ｓ・Ｓ・Ｈ丸——私がそれに何の理由もなしにほとんど運命的な約束をさへ見出しかけてゐると、彼女も眠れないとみえて、下の寢臺で寢返りを打つのが聞こえた。

『何うしたい、すこし搖れてるやうだね。』

『えゝ。大變な浪。』

『もうビスケィ灣かしら——。』

『いゝえ。』

『さうだ。ビスケィは未だだらう。』

『あしたの夕方頃からですつて。』

4

翌日、曇り。

午前十時、非常時の豫行としてボウト・ドリルと消火演習がある。船客一同救命帶を着用してＡ甲板上のそれぞれの短艇位置へ整列する。汽笛や銅鑼が暗い海面を掃き、船員達が走り廻りマストには發火現場眼じるしの旗があがり、稽古とは知つてゐても流石に好い氣もちはしない。

めいめい紙片を渡される。

「海上の安全を期するため、船客各位に對する重要告知」とあるから、何を措いてもあわてゝ讀んでみる。

一　御乘船後先づ第一に左の件々御承知置きを願ひます。

イ　各自割當の端艇の位置。

ロ　それに乘る場處、並びに其處に到る順路。

ハ　救命胴衣或ひは救命浮帶の着用方。

右に就き御不審の廉がありましたら、船員にお尋ねを願ひます。

二　萬一本船遭難の際は、汽笛長聲一發とゝもに銅鑼を連打致します。この信號をお聞きになりましたら、直ぐ救命胴衣あるひは救命浮帶を御着用の上、甲板上に御參集を願ひます。

三　若し各自割當の端艇を降ろすことが出來ない場合には、反對側の甲板上に御參集を願ひます。

四　遭難の際には始終受持指揮者の命を固くお守り下さい。

五　端艇内に手荷物お持ち込みの儀は堅くお斷はり致します。

六　端艇操練。

平素端艇操練を行ふ場合には、豫じめお知らせ致します。而して愈々開始の際には汽笛長聲一發とともに銅鑼を連打致します故、直ぐ救命胴衣あるひは救命浮帶を御

若川のうへ、定めの場所に御參集を願ひます。

私たちのボウトは第二號艇である。

曇天つゞき。

寒いので、まだ甲板(デツキ)ゴルフも輪投げもテニスもはじまらない。雜談と喫煙。酔つてゐるのか、船室に閉じ籠つたきり顔を見せない人も多い。倫敦から乘込みの日本人客はたつた四五人で、他はすべて西洋人だ。

ビスケイ灣——こゝの荒れないことはないと言はれてゐる。例外なく、今度も可成りがぶる。が、私は勿論彼女もすこしも酔つた氣分を知らずに過ぎる。倫敦から三日目の朝、船はビスケイを濟まして葡萄牙の海岸近く東南へ下がる。私達が去年の冬を迸つて何艘ものこゝの航路の船を望遠したエストリル村の家々と、あのホテルの建物さへはつきりと見える。私達は双眼鏡に獅嚙みついて、三階の窓と、そこに張り出てゐるヴエランダを發見して狂喜した。そして、やがてリスボンの町の姿と一しよに、海岸全體が水平線のむこうに消えるまで、眼鏡のあとを眼のまはりに赤くつけて、いつまでも立ちつくしてゐた。

倫敦・じぶらるたる——一三一八浬(ノット)。所要時間、三日と廿三時五十分。

船のへさきに、赭茶けた土と、綠の樹木と、無線電信の高柱と、山巓の大岩とを作つたジブラルタルが、雨の夢のやうにぽつかりと浮かび上つた。

私は、小學五六年生の頃に、何てことなしにこのジブラルタルといふ地名の響きが無精に好きで、當時の小學生らしくこんな歌を作つた記憶がある。

赤き帆のヨット走れり波分けて
ジブラルタルの夏の海をば

と言ふのだ。私が妻にこの話しをすると、彼女は断崖を薫風に與へて微笑した。

夏ではないが、この港はもう夏けしきである。ヨットも走つてゐた。いぎりす海軍の快走艇だ。が、幼い歌人の幻滅にまで、帆の色は赤ではなかつた。陽に褪せて白つぽくなつたカアキいろだつた。ALAS! 同船の誰かれ——日本人學生N氏とN氏夫人の英吉利婦人、T大學醫學部教授T博士、などとみんな一緒に上陸して、出帆まで町の内外をドライヴする。坂・植物・狹い大通り(メイン・ストリイト)・不可思議な活動常設館・兩側の土産物店・貝細工・卓子掛け・西班牙肩掛(スパニッシュ・ショウル)・大櫛・美人畫・闘牛士裝束など。ムウア士族の市場を見、郊外の國境を越えてちよつとすぺいん領へ這入り、山下の道を一巡して歸船。

出港後間もなく、岬を交したところで、横濱からマルセイユ

船といふ船のなかで、この倫敦發横濱行きＮＹＫ・ＳＳ・Ｈ丸——私がそれに何の理由もなしにほとんど運命的な約束をさへ見出しかけてゐると、彼女も眠れないとみえて、下の寢臺で寢返りを打つのが聞こえた。

『何うしたい、すこし搖れてるやうだね。』

『え丶。大變な浪。』

『もうビスケイ灣かしら——。』

『い丶え。』

『さうだ。ビスケイは未だだらう。』

『あしたの夕方頃からですつて。』

4

翌日、曇り。

午前十時、非常時の豫行としてボウト・ドリルと消火演習がある。船客一同救命帶を着用してＡ甲板上のそれぞれの短艇位置へ整列する。汽笛や銅鑼が暗い海面を掃き、船員達が走り廻りマストには發火現場眼じるしの旗があがり、稽古とは知つてゐても流石に好い氣もちはしない。

めいめい紙片を渡される。

「海上の安全を期するため、船客各位に對する重要告知」とあるか、何を措いてもあわて丶讀んでみる。

一　御乘船後先づ第一に左の件々御承知置きを願ひます。

イ　各自割當の端艇の位置。

ロ　それに乘る場處、並びに其處に到る順路。

ハ　救命胴衣或ひは救命浮帶の着用方。

右に就き御不審の廉がありましたら、船員にお尋ねを願ひます。

二　萬一本船遭難の際は、汽笛長聲一發とゝもに銅鑼を連打致します。この信號をお聞きになりましたら、直ぐ救命胴衣あるひは救命浮帶を御着用の上、甲板上に御參集を願ひます。

三　若し各自割當の端艇を降ろすことが出來ない場合には、反對側の甲板上に御參集を願ひます。

四　遭難の際には始終受持指揮者の命を固くお守り下さい。

五　端艇内に手荷物お持ち込みの儀は堅くお斷はり致します。

六　端艇操練。

平素端艇操練を行ふ場合には、豫じめお知らせ致します。而して愈々開始の際には汽笛長聲一發とともに銅鑼を連打致します故、直ぐ救命胴衣あるひは救命浮帶を御

若川のうへ、定めの場所に御參集を願ひます。

私たちのボウトは第二號艇である。

曇天つゞき。

寒いので、まだ甲板(デッキ)ゴルフも輪投げもテニスもはじまらない。雜談と喫煙。醉つてゐるのか、船室に閉じ籠つたきり顏を見せない人も多い。倫敦から乘込みの日本人客はたつた四五人で、他はすべて西洋人だ。

ビスケイ灣――こゝの荒れないことはないと言はれてゐる。例外なく、今度も可成りがぶる。が、私は勿論彼女もすこしも醉つた氣分を知らずに過ぎる。倫敦から三日目の朝、船はビスケイを濟まして葡萄牙の海岸近く東南へ下がる。私達が去年の冬を送つて何艘ものこゝの航路の船を望遠したエストリル村の家々と、あのホテルの建物さへはつきりと見える。私達は双眼鏡に獅嚙みついて、三階の窓と、そこに張り出てゐるヴエランダを發見して狂喜した。そして、やがてリスボンの町の容と一しよに、海岸全體が水平線のむこうに消えるまで、眼鏡のあとを眼のまはりに赤くつけて、いつまでも立ちつくしてゐた。

倫敦・じぶらるたる――一三一八浬(ノット)。所要時間、三日と廿三時五十分。

船のへさきに、赭茶けた土と、綠の樹木と、無線電信の高柱と、山腹の大砲とをかついだジブラルタルで、海の砦のやうにぽつかりと浮かび上つた。

私は、小學五六年生の頃に、何てことなしにこのジブラルタルといふ地名の響きが無精に好きで、當時の小學生らしくこんな歌を作つた記憶がある。

赤き帆のヨット走れり波分けて
　ジブラルタルの夏の海をば

と言ふのだ。私が妻にこの話しをすると、彼女は斷然を薫風に與へて微笑した。

夏ではないが、この邊はもう夏げしきである。ヨットも走つてゐた。いぎりす海軍の快走艇だ。が、幼い歌人の幻滅にまで、帆の色は赤ではなかつた。陽に褪せて白つぽくなつたカアキいろだつた。ALAS! 同船の誰かれ――日本人學生N氏とN氏夫人の英吉利婦人、T大學醫學部教授T博士、などとみんな一緒に上陸して、出帆まで町の內外をドライヴする。坂・貝植物・狹い大通り(メイン・ストリイト)・不可思議な活動常設館・兩側の土産物店・貝細工・卓子掛け・西班牙肩掛(スパニッシュ・ショウル)・大櫛・美人畫・闘牛士裝束など。ムウア士族の市場を見、郊外の國境を越えてちよつとすぺいん領へ這入り、山下の道を一巡して歸船。

出港後間もなく、岬を交したところで、橫濱からマルセイユ

を經て來てこれから倫敦へ行かうとしてゐる同じNYKのH・Z丸に出會した。巨船二艘、舷々相摩さんばかりの壯觀である。

往き大名と歸り乞食が洋上に挨拶する。

マストに高く信號旗がひるがへるのだ。

赤と黃の斜の染分け・白に靑の先が切れ込んだの・赤白靑の縱の三色——この三旗は夫々にO・A・Tの羅馬字を示し、O・A・Tはこゝに一つの意味を綴る。それは、I am glad to see you.「お眼にかゝつて嬉しい」といふのである。

これに對する應答——T・D・Lの三つの旗。卽ち Bon Voyage!「安全なる航海を祈る。」

同時に相方で、X・O・Rの旗を上げる。「多謝」である。そして、擦れ違ふ。

海の通行人は騎士のごとく慇懃だ。が、全船員は各自その船べりに重なり合つて、船同志の儀禮を破壞して日本語で叫びかはす。

わあうい！
やあうい！
しつかりやつてこううい！
ばかやろううつ！
さきへけえるぞううつ！
うまくやれようううつ！

ジブラルタルから馬耳塞まで——六九七浬。二日と一時間五十分。

マルセイユ——「世界惡の輸出港」。朝は灰色、正午は暗く、夜は明るい市街、雨で蛇の鱗のやうに光る步道。それを反映して赤い空。キャナビエルの大街。裸女見世物の勸誘人。頰の紅い女達の視線。醉つてふざけ散らして步くP・Oの水夫連。はだか人形を並べた煙草屋の飾窓。MATTIの綠色タキシ。ヴオウ・ポルトの入江の帆柱。花環を擔いだ男たち。笑つて來る陽やけした女の一軍。點々と彼女らの腕から溢れる花。諸靈祭の夜。ケエ・デ・ベルジエの混雜。シャトオ・ダフ往きの小蒸汽船。星と街燈に裝飾された新聞賣店。ジョリエットや聖ラザアルの貧民街から出て來る船乘りの遺族たち。海岸の木柵の共同墓碑銘。「故何のたれ——海で死んだ。その父のごとく、また祖父のごとく。」午後は滿潮を待つて花流しの式。每年の例。長い棧橋の列。重い貨物自動車の示威運動。後からあとからと續く滿員電車。石炭の山。荷物の丘。塵埃の堆積。汗をかく起重機。耳を突く合圖の呼子。骸骨のやうな貨物船　赤く錆びた鐵材の荒野。鳥打帽をかぶつて首に派出な巾を卷いた波止場の伊達

肴っ眼の圓い茶門番たち。頸の太い駄馬の下を潜つて運ぶ子供らの群。蒼いアウク燈の塔列。錨の音。汽笛。マンドリンで「君が代」を奏しながらH丸の下で投げ錢を待つ伊太利人の老夫婦。ドックに響く夜業の鐵槌。古着と安香水を賣りに船へ來る無帽の女。尼さんの一行。白衣の巴里ベネデクト教團。黑服の聖（サン）モウル派。ノウトルダムの高塔。薄陽。マルセイユ出帆。

錨を上げる。

ナポリまで四六二浬。一日半の地中海だ。

5

砂漠 暑い風・油ぎつた水・陽に搖れる遠景・金屬製の塔壁（パイロン）・伸び上つたり縮んだりする起重機の媚姿（ポウズ）・その媚眼的な會話――かた・かた・かた――黑い荷船の群集・乾燥した地表の展開・業病に傾いた建物の列・目的のはつきりしない小舟の戰爭・擾亂と狂暴と異臭の一大渦紋・其のなかを飛び交すあらびや語の彈丸・白い樹木・黃色い屋根・密雨のやうな太陽の光線――PORT SAID

ボウト・サイド。

倫敦から三五八八浬。十一日二時間五十分。

横濱まで八四七〇浬。三十六日。

西洋の出口であるこの奇妙な門は、同時に、東洋への入口の・・より奇妙な門でもある。だから、PORT・SAIDは、白・黑・黃・赤の各人種によつてアラビヤ風に極彩色された二面神の象徵模型なのだ。

スエズ運河はこゝからはじまる。

「明朝早くボウト・サイドに着きますが、入港と同時に石炭の積込みを始めますから、今夜おやすみになる時に窓を閉めたはうがいゝでせう。よく忘れて開けて置いたゝめ、窓から石炭の粉が舞ひ込んで、部屋ぢう眞黑になつた人があります。」

と、昨夜の食卓でナイフとフオウクのあひだからかういふBROADCASTをした人があつた。

で、窓を締めきりにした船室で、寢苦しい一夜を明かす。

それでも、朝になつてうとうととしたらしい。

わ・わ・わつ！

わ・わ・わつ！

といふ不可思議な叫喚を、最初私は夢のやうに聞いてゐた。

が、氣が付くと、私の耳には、慣れたエンヂンの鼓動がない。

停まつてるな！ と思ふや否、その時まで遠くの蓄音機のやうにぼやけてゐた「わ・わ・わつ！」が、急に恐しい正確さで一度に私を揺り起した。

ボウト・サイドの朋友、埃つぽく騒ぎ立てながら、舷窓から

私を招いてゐたのだ。

疾くの昔に石炭の荷役が開始されて、幾艘となく兩側の船腹に横付けされた、艀のやうな巨大な舟から、あんぺらの石炭袋を擔いだ半裸體の土人のむれが、甲板へ渡した板を傳はつて一個師團ほど上下してゐる。それは實に、規則立つた鎖の動作だつた。二枚並べて架けた板梯子を踏んで、一定の間隔を置いた黑人達が、一つを驅け上つて他の一つから走り降りる。銘々石炭を詰めたふくろを運んで、それを、投げるやうに炭庫(バンカア)の口へ空けては、遅れまいと熱狂してゐる。見てゐると、まるで一連の機械のやうに、後からあとからと續いてゐるのだ。立ち昇る石炭の粉に、人も船も言語も眞つくろである。「わ・わ・わつ！」は彼らの掛け聲だつた。私は、この、細い脚を持つた蟻のやうな人たちの、驚くべき多數の努力を目前にして、同じやうな光景を呈したであらうピラミッド工事の當時を思つた。

そこで、私もいそいで、ジレットを揮ひ、コルゲエトの泡を吐き、オウトミイルに首を突つ込み、ヘルメットを頭に、追ひ立てられるやうにA甲板へ出る。

粉炭の濃霧を通して、ポウト・サイドは砂漠の蜃氣樓だ。

そして甲板は、何時の間に乘船して來たのか、土耳古人・埃及人・あらびや人の大雜沓である。とるこ帽・金いろの腕輪・赤銅の肌・よごれた白衣・大阪製緞縞の木綿洋服・錫に光る齒・動物的な體臭――。

その間を縫つて、久しぶりの陸地に昂奮した船客達が、眼の色を變へて右往左往してゐる。異境人間は土の上の生物だ。一刻も早く大地を踏みたい衝動に驅られて、みな無意識に脚がむづむづしてゐるのだ。一同誰もかれも、非常に重大な要事をもつて人を探してゐると言つたやうに、そのくせ、只わけもなく甲板を歩き廻りながら、先刻から何度も訊き合つた無意味な質問を、會ふ人ごとに、双方から同時に發してゐる。

「上陸なさいますか。」

「上陸なさいますか。」

「は。一寸。」

「は。一寸。」

向うでもやつてる。

「上陸なさいますか。」

「上陸なさいますか。」

「は。一寸。」

「は。一寸。」

相手の返事を聞かないうちに、反撥するやうに別れる。と思ふと、出あひ頭にまた、「上陸なさいますか」なのだ。何とい

ふ輕跳な、無責任に晴れ渡つた傍觀者の感情！——それは其の傴ボウト・サイドの空の色でもある。

後部の舞踏甲板は、歐羅巴人によつて黄金の力を賞示された被征服民族の商隊で一ぱいだ。

狡猾な微笑で全身を裝飾した寶石賣り——獨逸高熱化學會社産の色硝子の小片を、彼らは「たくさん安いよ」の日本語と、もに突きつけて止まない——と、二三間先からお低頭をしながら接近して來る手相見の老人——「往年倫敦タイムス紙上に紹介されて全世界の問題となれる科學的手相學の豫言者バガト・パスチエラ博士其人」と印刷した紙を、證明のため額に入れて提げてる——と、繪葉書屋と兩替人——これは英語で、人の顏を見次第「兩替は？（チエンヂ・モネ）」とか「旦那（マスタア）」とか「長官（ガヴアナア）」とか「大佐（カアネル）」とか、對者の人品年齢服裝で呼びかけの言葉を使ひ別けする——と、埃及模樣の壁掛け行商人と出張煙草屋と、さうして再び、寶石賣りと、手相見と、繪葉書屋と兩替人と、壁かけ行商人と出張煙草商と、これらは何處にでも氣ながに潜伏してゐて、甲板上のあらゆる意表外の物蔭から、砂漠の突風のごとく自在に現れて各自その商行爲を強要する。奇襲された人は、逃げながらも樂しさうだ。「No! No thank you.」のん・めあし・はぶそおん——」

愛すべき怠惰癖の讃美さ！

Galla! Galla! Galla! Galla!

Galla! Galla! Galla! Galla! Brrrrr!

聲がする。

矢張り土人だ。奇術師である。

若い黒人が甲板に胡座をかいて、眞鍮のコップみたいな物を二つ並べて伏せては、大聲に呶鳴つてゐるのだ。

人寄せの呪文であらう。

がら・がら・がら・がら

ぶるゝゝるるゝるゝゝる

Brrrrと口唇をふるはして、彼は、金屬製の扣鈕を二つ三つコップへ入れて振る。するとそれが、一羽の雛つ子に早變りして出て來る。見物が集まる。今度は手品師は、その中の女の一人にひよつこを握らせて置いて、また「GALLA・GALLA・GALLA」をやる。女が手を開くと、雛は解けて空氣になつてゐた。

ぽかんとしてる女の顏へ、一同爆笑が集中する。無くなつた雛鳥は、一番大きな口を開けて笑つた、女の同伴者の咽喉の奧から、黒い魔術師の指先に摘み出された。眞晝間のアラビアン・ナイト。

がら・がら・がら・がら！

ぶるるるるるるるるるる！

黒人の眼は異様な輝きを増し、扣鈕だけでは面白くないからと客に投げ錢を求める。あちこちからお錢が降る。その白銅や銀貨が次々に彼のポケットへ消えて、代りに何羽ものひよつこが甲板を這ひ出す。「もつとお金を！　もつとお金を！」と黒人が叫ぶ。やうやく氣が付いた觀客は金のかはりに苦笑を與へて散らばり始める。この浮き足立つた群集を食ひ止めやうとして、黒人の額には黒い汗の粒々が滲み、その一つ一つをかつと照りつけて、ボウト・サイドの太陽は、麵麭屋(パエカリイ)の仕事場のやうに暑い——「がら・がら・がら・がら」船客中の子供達のあひだに、直ぐもう甲板の方々でこの眞似が流行り出してゐる。

船の周圍は、商隊の乘り捨てた小舟で埋立地のやうだ。遠くからは、蟬の死骸に蟻がたかつたやうに見えるに相違ない。海上のそこ此處に同じ集團が散在してゐる。青煙突(ブルウ・ファネル)は英吉利の貨物船・黄地にQ字の檢疫旗を揚げたメサジエリイのふらんす船・デラクサ號は伊太利船だ。下に、船籍港ナポリといふ字が運河の水に白く搖れてゐる。

九時半上陸。

棧橋までさんぱん。

甲板給仕(デッキ・スチュワアド)が船腹梯子(ギャングウェイ・プランク)に立つて艀舟を呼ぶ。聲に應じて、幾つもの赤い土耳古帽が櫓を操つて殺倒する。上陸する女客たちは、大げさに怖がつて、水夫の手で小舟へ助け下ろされる。彼女らは、ボア・ドュ・ブウロウニュへでも散歩に行くつもりで粧し込んだのだ。みんな、これから探檢しやうとする異國情緒の期待に上氣して、頰を紅くしてゐる。何の小舟も、さういふ女達を滿載して、用もない嬌笑とはしやいだ歌聲が水面を流れる。

Pardonnez à mon bavardage
J'en suis à mon premier voyage.

BRAVO!

形式として、稅關の柵内を通り過ぎる。

ち・ち・ち・ち——と手の中の土耳古銀(ピアストル)を鳴らして往手に立ち塞がる兩替屋の群、摑み掛るやうに乘用を促す馬車屋の一隊、それらを擊退して市街へ出ると、町角、店先、往來の到るところに、同じ船の連中が三々伍々してゐる。寄港は、長い航海中での祭日だ。誰もかれも必要以上に着飾つて、石炭の風と起重機(クレイン)の唸りの木船から脫出して來たらしい。

婦人客たちは、久しぶりに帽子をかぶつたので、すつかり顏違ひがしてまるで別人のやうだ。みんな惡戲好きらしい眼つき

そして歩道の石疊を蹴つてゐる。

　私達の一行も、兒童のやうに驚異と好奇とで一ぱいだ。

やあ！　來たぞ！　來たぞ！　アラビヤ人が來たぞ！　うふつ！　堂々たる髯だなあ！

　さうかと思ふと――。

あ！　何だいあれあ？　え？　埃及の女だつて？　鼻柱へ輪の付いた棒みたいな物を立てゝ、黑いヴェイルを垂らしてるぢやないか。おい君、傍へ寄つて其のあらたかなヴェイルを引つ張つてみたりしちやあ不可ないよ。だから外國人は下品だつて言はれるんだ。默つて遠くから感心して居給へ。通る人が笑つてるぢやないか――。

「あのアラビヤ人は贋ものね。」

「何故？」

「だつて駱駝に乘つてないぢやありませんか。」

　なんかと、きよろきよろ立話しゝてゐると、その問題のあらびや人が引つ返して來て、そつと私の肘を突ついた。そして「堂々」たる白髯の奥から彼がさゝやく。

「旦那（マスタア）！　春畫（オブシイン）！　春畫（オブシイン）！――ちよつと婦人方に背中を向けてまあ、一眼でいゝから私の手許を御覽なさい。ほう！　素適だね！　え？　早く！　旦那（マスタア）、春畫（オブシイン）だよ、ほら！」

辟易して、出鱈目に歩き出さうとする。

　と、何か足に引つ掛るものがある。人間だ。人間の手だ。うつかりしてるうちに、この少年は無斷で私の足に摑まつて、靴磨きを開始してゐたのだ。危ふく踏まれさうになるのも構はず膝で追つかけて來て、すつかり磨かせて呉れと言ふ。そして既う片手では、代を要求してゐるのだ。

　かうなると、立ちどまることは許されない。停まるが早いか、件の靴磨き少年をはじめ、例の春畫賣り、繪葉書屋、煙草屋、兩替屋、首飾屋、指輪屋、更紗屋、手相見、人相見のやからが翕然と集合して來て身動きが取れなくなる。街上をあるいてゐてさへ何處からともなく、いきなり駈けて來て足下に平伏する奴があると思ふと、すでに其處で二つの眞鍮のコップを叩いてがら・がら・がら・ぶるるるるゝを遣り出してゐる。蹴り飛ばして前進するわけにもゆかず、悪闘々々立往生をしてゐて見給へ。直ぐさま背後には物賣りが人垣を作り、まへの商店からは腕力家の番頭が跳り出て來て、有無を言はさず件を店内へ拉致するだらう。

　ボウト・サイドは、都會と呼ぶべくあまりに統一を缺いてゐる。それは、歐羅巴でもなし、亞細亞でもなし、さうかと言つてあふりかでもない。言はゞ、この三つの大陸を結ぶ運河の口

の、共同バザァなのだ。白色と有色と、二つの文明の何方から見ても堰に當つてゐる。だから、まるで蛇籠(じやかご)のやうに、兩系統の文化の流れの汚物ばかりが引つかゝつて、ボウト・サイドはこんなにも、此の強烈な日光に臭く蒸れてゐるのだ。

これは、商店だけで出來てゐる町なのかしら。住宅といふものが眼に付かない。

安寶石の店の猶太人の鼻、菓子屋の女のエプロン、佛蘭西語の本屋の窓に出てゐる裸體寫眞、東洋煙草店、大道でメロンの切賣り、果物屋の蠅、自動車庫の油の小川、塵埃だらけの土産物店の硝子箱、その中の銅製花瓶、象形文字の敷物、ダマスカス鐵の小武器、すふいんくす形の卓燈、金箔塗りの裝飾網、埃及柱(オベリスク)を象どつた鉛筆、その他考へ得られるすべてのナンセンスが憧憬の東洋の夢として賣りに出てゐる――BRAVO!

それにしても、全市民が家を空に、街頭に伏兵して私達を待ち構へてゐたに相違ない。

裸足の少年靴みがき團を筆頭に、花賣り娘、燐寸賣子、いかさま賽の行商、魔窟の客引き――さう言へば、このボウト・サイドには、土人區域の市場を抜けて回教堂(モスク)の裏へ出ると、白晝數時間寄港の船員や旅行者を相手にする、陰慘な點で世界的に有名な一廓がある。波止場で馬車に乗つて、たゞ默つて笑へば心得て其處へ案内するにきまつてゐるほどだ。

では、レディ達をルウ・ドュ・コマルス街の珈琲店の椅子へ一時預けにして置いて、出帆前にちよつと其のボウト・サイドの奥の奥と言ふのを覗いて來るとしやうか。

馬車で行かう。

がら・がら・がら・がら――焼けた敷石に車輪を鳴らして、僕らはいま、あらびつくで何々街(シアリ)――Sharich――と呼ばれる大通りを走らせてゐる。

兩側は、マホメッドの人種市(いち)だ。

店といふ店から人が出て來て聲をかける。

"This way, monsieur colonel!"

"Here you are, anata――anata!"

片眼を殘して顏半分潰瘍し去つた埃及人が、何かを賣りつけやうとして馬車を離れない。これでまだ動いてゐるからいゝやうなもの、、若し、そこらのキャフエの張出(タレス)にでも腰を下ろしてこれでまあ行商人達を擊退して宜かつたなどとほつと安心してでもゐやうものなら、たちまち、蠅のやうな彼らに包圍されて靴磨きの子供は足へ取りつき、春畫賣りは恐るべき色眼を使つて袖の陰から繪を覗かせ、寶石屋は君の鼻先へ首飾りをぶら下げ――さうして君は、たうとう肝癪を起して靴みがきの耳を引

つ張り、春畫賣りを大聲叱咤し、寶石屋を殴り飛ばして、あわれ逮捕の憂眼を見ることゝなるであらう。

通行の群集はまるで世界中の敗殘者から成り立つてゐる。希臘人・東邦人(レヴァンテン)・あらぶ・埃及人・とるこ人・しりあ人・回教を信じやうとしない「西から來た白い悪魔」たち・遊牧の貴族べづいん人。黒くうるんだ大きな瞳・鼻筋から兩眉のあひだへ圓く卷いて渡した銅の針金・房付帽(タアブウシユ)・長袖下衣(キヤフタン)・薄物・布頭巾(タアバン)・冠物附外衣(ブルヌウス)・頬を線狀に燒いた裝飾・二の腕の桃の刺青。

狹い東洋の門戶――PHARAOHの國。

Rue du Nil 街は、木造建築の銀行と煙草の屋臺店――こゝを南下して、土人街へ這入る。

巴里でいへば古着古物屋町(ラグ・ピッカアス・セクション)だ。半暗と濕氣と悪臭の横町が、迷園のやうに縱横に走り、やけにひさしの突き出た、原色塗りの低い建物がお互に助け合つて竝んで、誰かの言つた「天刑病市ポウト・サイド」の感じを適切に裏書きしてゐる。砂と埃り・半裸體の街上の少年少女・トラホウムで赤い彼らの眼と細い腕・病菌の沈澱してる路傍の黒い水溜り・胴だけで地べたに笑つてる乞食・骨と皮と耳ばかりの驢馬・其の脚の關節の眞赤な傷口に群れてる虻・邪悪そのもの、やうなキヤフヱの土間口・そこの軒下に立つて慾を噛つてゐるアラビヤ人の木炭賣り・往來の中央で反芻に口を動かしてゐる山羊のむれ・通りを隔て、喚き合ふ會話・これら一切のうへに往き渡るむつとするにほひ・就中、こゝらの臺所は共同で、しかも野外である。道路の横に大釜が据えられて、口きり一ぱいに羊の脂肪が沸騰してゐる。この釜のまはりの子供と蠅・それを叱る母親・一せいに哄笑する町の人々・じつに盛大に混沌を極めてゐる。

波止場の附近では行商人に惱まされた。しかし、彼らはそれでも賣るべき何ものかを持つてゐたが、もう此處まで來ると、人は、賣るべき何ものをも所有してゐない。だから、乞食は默つてその病毒の患部を示し、子供達は譯もなく馬車を追つて競爭し、女はしきりに車上の行人に媚をあらはす。

肉屋がある。血だらけな肉切り臺は銀蠅で覆はれてる。何といふ腐爛した臭氣！　そして、これはまた、何と悲しい麵麭屋だ！　店頭のぱんは、數度の發疹に蒼白く横たはつて息づいてゐる。不潔と醜怪。狹い町筋は病氣の展覽會だ。狼瘡(ウパス)、風眼、瘰癧あらゆる期程の梅毒――。

馬車は急ぐ。

老人の忘八(ホア・マスタ)が、馬車と竝んで走る。

「あらびやの女がゐますよ。アラビヤの女が――。」

右からも左からも色んな聲が馬車を包圍する。

「佛蘭西の女！　大佐（ムシウ・カアネル）さん！」

　モハメッドのために！

　モハメッドのために！

と祈るやうに私語くのは、盲目の老婆の手を引いた、ベズィン族の少女である。兩頰に三本細く文身してるのが、靑い鬚のやうに見える。「モハメッドのために」幾らか異れと言ふのだ。乞食には違ひないが、それは表面で、內密には、卽座に物好きな旅行者の求めに應ずる。道理で、乞食のくせに、こゝらの住民の何れよりも小ざつぱりした服裝をして、顏には白粉のやうなものを斑らに叩いてゐた。

　この邊一帶がその町なのである。

よろめいて立つ塔婆（パゴダ）の竝列。家々の窓から覗く土耳古宮廷姿（オダリスクス）と王公側室（サルタナス）と囘教女。何と貧しい淫樂の巷であらう！　殖民地兵營の喫煙室みたいな前庭、その奥に、薔薇色の壁紙に廣告用の掛け曆と、罅の入つた鏡とを飾つた客間。全然生の興味を缺いた女達の顏。洞穴のやうにうつろな胸、睫毛のない眼、汚點だらけの肌、派出なＫＩＭＯＮＯ、雜物の下着（シミイズ）、前だけ隱すための無花果の葉の形のエプロン――そんなものが瞥見される。

　彼女らは先を爭つて戶口から走り出てくる。キモノが街に飛んで、身體に陽が當る。が、慣れた光景とみえて、誰も何らの注意を拂はうとしない。或る一軒の家からは、純粹のあらびや女がふたり、瘠せこけた兩腕を伸ばして何か盛んに我鳴り立てた。英語の解る御者に訊くと、土地特有の生ぬるいビールを一杯づゝ飲ませろと言つたのださうだ。

　この恐るべきボウト・サイドの後宮（ハレム）をＰＡＳＨＡのごとく一順して、私たちは港へ歸つた。

　あらゆる天候によごれたＳ・Ｓ・Ｈ丸の姿が何と有難く見えたことよ！

　午後一時、石炭補充を終つて出帆。

がら・がら・がら・がら――錨を上げる。

　これから、今夜晩くまでスエズ運河がつゞく。

右舷（スタボウド）の岸を船と平行して、白く塗つたカイロ行きの汽車が、砂漠と熱帶植物を背景にことことこと這つてゐた。

6

紅海のある日。

蒸し殺されるやうに暑い。それでも今日は幾分涼しいはうである。

速力。十三哩半。

南三八度E。

北風。輕風2。

溫度。大氣八四度。

海水度。八一度。

晴。

この「輕風2」といふのは、1がLight air, 2がLight breezeの2である。

馬耳塞とナポリから大分の日本人が乘り込んで來て、船はいよいよ日本村の觀を呈する。

獨逸から歸國の途にある作曲家のH・R氏――日本風に姓が上である――の一家や、K大學精神病學教室のK博士、A大學法醫學部のK教授。それに、倫敦から一しよに來たT博士と、大分お醫者が多い。そのほかO鐵工所のK工學博士、建築家のY博士、倫敦正金支店のK氏一家、N氏夫妻、砲兵大尉だの學生だの、外務書記生だの在外商店の人々だの、仲々の賑かさだ。

甲板ゴルフ、麻雀、ブリッヂ恭、輪投げ、散歩、デッキに設らへたプウルの水泳。夜は映畫、音樂會、舞踏。

がたん・がたん、と細かく機關が唸る。

ぺいんとの香。海の色。甲板椅子。雲の峰。

私は每日、私達の食卓のテエブル・マスタア一等運轉士I氏の部屋へ出掛けてモウルス信號（コウド）の幾らかを覺えやうと努力した。

船から船へ、發火、無線、旗などによつて意思を通ずる浪漫的な海上國際語である。

U――君は危險に遭遇してゐる。

V――助力を求む。近くに居て吳れ。

R――貴船の位地は本船の航路外にあり。靜かに通り過ぎよ。

L――停船！　重用あり。通信したし。

F――自航力なし。通信を求む。

DS――危險！　注意せよ。

BFY――不可能。

HOK――然し。

MRZ――何時君はのし上げたのか。

MST――遠方。

AG――船を捨てるほか途なし。

AN――前進し得る狀態にありや。

BJ――機關不能。

BK――何事が起つたのか。

DF――幾らかの應援あらば復舊することを得べし。

ETC・ETC・ETC。

暗記しては、片つぱしから綺麗に忘れる●

或る日の無線新聞。

伯林。月曜日夜、ボッツァレル・プラッツに三百人を一團とせる共産黨員の暴動起り、警察を襲ふ。大部隊警官の出動を見て、間もなく平穏に歸す。

フリイドリッヒシャアフン。天候可良ならば、ツェッペリン伯號は五月二日に維納を訪問すべし。

テユニス。伊太利新聞組合の戸外にて機關銃爆發。原因損害等一切不明。

スエズから古倫母に至る十日十六時四十分の紅海横斷。この間、三三九六浬。

甲板洋燈の無礙な光線が、私を熟睡から引き捲つた。水夫たちが朝早くデッキを洗つてゐる。で、また眠りかけやうとしてゐると、只ならない跫音が廊下を走つて階段に上下した。聲がする。

「コロンボ！」

水をかぶつたやうに、私は寢臺を撥ね降りた。そして、パジヤマに上履きを突つかけたまゝ、何うしてから陸地の片影さへもが戀しいのだらうと自分で不思議に思ひながら、船室を飛び出して甲板に立つた。

まだ、空氣はひやりとして薄暗い。

近くの海面を緑と白の灯を長く引いて、大きな帆前船が滑つて行く。海岸の突起線は燈臺だ。セイロン島である。

とてもぢつとしてはゐられない奇妙な感激だ。矢鱈に甲板を歩き廻る。東の水平線は薔薇色に明けかゝつて、猛烈な速力で陽が昇るものだから、うしろには、まだ闇黒の尖形が山のやうに聳えてゐる。と見てる間に、全海面が火山口のやうに燃えて、雲は紫に色どられ、椰子に圍まれたコロンボの町が私の眼前に伸び上つて來た。

水先案内の小舟を抱くやうにして、船は徐々に灣内へ進む。停泊中の軍艦、貨物船などの舷側に寶石のやうに灯がきらめいてゐる。朝の微風は、この港で一層享樂すべきものだ。水蜘蛛のやうに大帆を張つた漁船の群が、お互ひに影を重ねて搖れて過ぎる。その間を、竹や丸太を船べりから水面へ組み出して顚覆を防いでゐるセイロン島の土人舟が、何か大聲に叫び合ひながら漕ぎ廻つてゐるのだ。身體の据らない程の狹い獨木舟（バラクワ）なので、土人はみな片膝ついただけで水搔きのやうな櫂をあやつゝてゐる。遠くから見ると、まるで曲馬團の綱上踊子（ロウプダンサア）のやうだ。

朝の闇黑から滲み出て來る港の活氣は、魔術的である。ちようどバレイの幕あきのやうな照明效果をもつて、コロンボはい

え私達のまへに出現しやうとしてゐる。

市街は人家と高層建築物の點綴だ。そして、島は起伏する山頂の連結。

甲板には人が増してくる。あらゆるバス・ロウブとガウンの陳列會だ。すると、丸窓は一つ一つ眠い顔をはめて、肖像の額緣になる。

もう陽は高い。霧は海に落ちた。椰子の木の町は、そのホテルの高樓と印度塔の急傾斜屋根と、未落成のやうな前庭（ファサアド）をもつてくつきりと天空を限り出す。

港は、H丸の欄干（レイル）の下に、その一日の生活を開始した。檢疫を迎へる小梯子の周圍は、黄色い旗をかざした檢疫艇と、一刻も早く上船しやうとする土人の商船と兩替舟とで、水の見えない程詰つてゐる。白い袴（スカアト）をはいて頭髮を髷（シイニヨン）に結んだ長身の男たち。青い海を背に、眼の大きな鳶いろの彼らの顏と、その獨木舟（パラグワ）と、微かに漂ふ香料と、原色縞の首巾（スカアフ）と、隱見する黄金の腕輪と——私は、印度のすべてを、一望のうちに看取した氣がした。

ポケットに印度貨（ルピイ）を鳴らす兩替人、ロリアンテルやル・ギヤレ・ファスなどのホテルの客引きなど、みんな眞卒で、氣高い美男に見える印度の人達で船は急に重くなり出した。

結髮（シニヨン）に挿した貝の櫛、サァロンと呼ぶ二色の腰布、ウエテといふ着物、なかにはベルト付きの恐くモダーンな上衣（コオト）や、理髮師の仕事着を一着に及んでゐるはいからなのもある。

小蒸汽で上陸する。

棧橋を出ると直ぐハシイムの寶石店だ。微笑してゐるシンガリイス人の一團と、眼を射るやうな彼らの陣羽織（チユウニツク）だ。特産と好奇の店頭とライス・カレイの料理店だ。そして、カルジルの洋物百貨店と、マカン・マアカアの裝身具屋だ。白孔雀は路傍の大籠に飼はれ、手長猿は人の肩に止まり、蛇使ひの女は鼻孔から蛇の頭を覗かせて、喇叭と腕輪のじやらじやらで人をあつめる。

見るべきものがあまりに多く、それが一時に四圍に殺到して來る。船中の倦怠に慣れた耳と眼の感覺には、何うかすると、これは強過ぎる色彩であり刺激である。何にしても太陽美の甘醉！　直視すべく眼が痛い氣がした。

近くはこの歐羅巴區域だ。

廣い散歩街の兩側に、屋内通路（アルケイド）と、赤、綠、白の表て口、漆喰細工の稚い裝飾、不可解に垂れ下つた屋根、多角形に張り出てゐる軒、寶石・象牙・骨董を商ふ店、絹地屋——商店は何處も象の模樣で食傷してゐる。象の刺繍、象の置物、色球瑚製の象

の吊垂燈(ペンダント)——そして、ちよん髷の人力車夫とヘルメット帽の赫顏いぎりす紳士。

靴を穿いてゐるのが歐羅巴人で、裸足で歩いてゐるのが印度人。天鵞絨の骸骨頭巾は馬來人だ。

が、ほんとのコロンボは土人區にある。

先づ市場。

果物市場。

パイナップルと青香蕉の盛大な山脈。檸檬の實・檳榔樹の實・汁を含んだ蕃瓜樹の實・膚の白い二倍大のココナッツ・椰子玉菜・多液性のマンゴステン・土人はこれで身代を潰すと言はれてゐる麝香猫(ドリアン)の實・田舍の少女のやうなパパヤの實・龍眼・茘枝(らいち)・麵麭の實・らんぶたん——

住民は男か女か——ちよつと判斷のつかない服裝をしてゐる。鬚のない顏に、長い睫毛、頭髮をうしろに垂らすか結び上げるかしてゐるから、成程紛らはしいわけだ。そして、その家である。セイロン島の住宅は、すべて往來へ向つて開けつ放しになつてゐて、形ばかりの椰子の葉の衝立が仕切りに立つてゐるに過ぎないので、商店でも居間でもおもてからすつかり見える。床屋がある。易者の店がある。高利貸、質屋、陶器師の土間、RAJAHのやうな魚屋の主人、糊つぎの網紺で面覆(トウル)をした婦人たち、彼女の不可解な胴衣(ボディス)、ずぼんの上から歐風襯衣の裾を垂らして北東に歩く金融業者(チェティス)、階級模樣と家紋を白く眉の上へ描いてゐる老貴族、額部へ寶石を飾つた女の一行、そのあひだに砂塵を上げて、滿員電車と、レヴィニア丘行きの乘合自動車が驀進してくる。

私達も、自動車を驅つて郊外へ出た。

市街をあとにするが早いか、すぐに田舍である。それでも夢が私たちを追つかけて來る。綠樹に挾まれた赤土の道が、長く一本私たちの前に伸びて、到るところに新式の農園が拓かれつゝあるのを見る。古い土に若い力が感じられるのだ。ココナッツの森を越すと、陽にたぎつてゐる水田の展望だ。玉突臺のやうな綠野の斜面だ。そこ此處に小屋がある。

花壇のなかに白く建つてゐる。マグノリアのにほひがする。村の入口では子供が出迎る。車が通る。馬のかはりに水牛が牽いてゐる。瘤牛(ジブ)が畑を耕してゐる。その角はすべて美々しく色彩され、頸には貝殼の襟飾りだ。田園のあちこちに働く赤銅色の男達、腰に卷いた白いきれ、肩や脊に重い竹籠を載せて市場へ通ふ人々——女が道ばたで石を割つてゐる。道路工事だ。

セイロンは未だ巨大な處女地である。

私の足許の池にはかうして水蓮の花が浮かんで、野には雲の

影が落ちてゐる。

子供を背負つた母親が水瓶を提げて白い道を行く。

何てくらくらする日光だらう！

7

しんがぽうるに一泊。

ンンガポウル——永久に新開地めいた町。支那街と馬來芝居と支那映畫「愛國魂」五卷。「打倒日本主義」の貼紙。孫中山先生の肖像。土人の水上生活。濟民學校。適南學校。トモエ自動車商會。鍼灸採療治所。御料理仕出し「みさを」。萬興公司。中西洗衣。コンノウト・ドライヴ。旅人の木。水源地の夕涼み。植物園の月明。

船は、スマトラの北端、マラッカ海峽の入口にさしかゝる。

正午。

北緯五度五十二分。

東經九十四度五十八分。

香港——九龍(クウロン)に一泊。わんちやいの支那魔窟。緣日。革命屍體の寫眞。水汲み行列。麻雀賣り。砲臺。

上海——五三事件の記念日とかで城内には朝から不穩の氣あり。果して共產黨の小暴動隨處に勃發。散策・買物の後、南京路で精進料理を試み、自餘の時間は、街上に船中に、ひたすら麻雀賣りの撃退に専念す。

それから神戸——たうとう日本へ歸りました。その證據には、この滿目のＫＩＭＯＮＯです。女の帶です。耳を聾する下駄の音です。小さく突つ掛るやうな日本語の發音です。

倫敦を外套で出て、日本へ着いてみると初夏の六月だ。

長い「海のモザイク」だつた。

がたん・がたん——と、まだ機關の音が耳についてゐるやうだ。

私たちも、今度こそは此處に落ちついていゝのかしら？　もう汽車を掴まへて旅に出なくてもいゝのかしら？——しきりにそんな氣がしてゐる。

神戸に二日休んだのち、間もなく私達は、上りの特急の窓から、約一年半前に別れた風物に異常な感激をもつて接してゐる自分達を發見した。

はるばるも歸り來しものかな——やがて東洋のメトロポリスへ、汽車は走り込むのだ。半球の旅のおはりと、空を焦す廣告塔の灯とが私達を待つてゐるであらう。

附記

旅から歸つて、はじめて鄕國の眞價値がその額面通りに買ひ得るといふものだ。今の僕がそれである。もう、實を言ふと原稿なんか何うでもいゝんで、たゞ矢鱈に日本の着物を着て、たゝみに寢ころんで、好きな日本の食物を竝べておいて、片つ端から食べてゐたいだけだ。下素だが、眞情だから仕方がない。が、この二三日、半夜孤座して、持ち歸つた荷物の整理をしてゐる。すると、實に下らない色んなものが出て來るんだが、それが、僕の嗅覺へぷうんと「あ・ち・ら」のにほひを送つて、何うかすると、倫敦の霧、巴里の雨なんかと獨りで遊子ぶつたりすることもないではない。僕にとつては、洋服のしみ一つにも、忘れられない思ひ出が藏されてゐるかも知れないのだ。

とにかく、一年にわたる「新世界巡禮」は、こゝに諸君の御後援によつてENDを全うするを得た。歸來僕は、一さう印象の沈澱するを待つて、亞米利加風に言へば「古い叩に鼠を起し」てやらうと待ち構へてるだけだ。

一年の間あちこち僕達について來て下すつた讀者諸君に、この機會に厚くお禮を申し上げたい。そして特に、終始一貫、有形無形に多大の援助を賜はつた中央公論社長島中雄作氏に、僕は心からなる感謝と握手の手を差し伸べる。

僕の知人に偉大な文化人がある。彼は、夕刻歸宅すると玄關へ出迎へる細君へ向つて大喝一聲するのだ。「NOW!」と。

けだし此のNOWは「只今!」の意であらう。

で、新歸朝者の僕たるもの、一つ英語で諸君に御挨拶しなければなるまい。

そこで、大きな聲で、

『NOW!』

新綠の鎌倉にて

讓次

島崎藤村先生の足跡
(貝殼追放)

水上瀧太郎

明治の小説のうみの親は、坪内博士の「小説神髓」だといはれる。それがはじめて世に出たのは、明治十八年の事で、その目的は寫實主義の提唱にあつた。同時に見本として、小説「當世書生氣質」が公けにされ、理論と實際と兩方面から新旗幟を明かにした。博士は「當世書生氣質」の序文の中で、全編の趣向は專ら傍觀の心得にて寫眞を旨とし、勸善懲惡を度外に置いたから、これを訓誨の料にするとも、奬誡の資にするとも、讀者の心まかせであると、勇しく宣言した。爾來我國の小説の主流は、近代歐羅巴の文學に追隨して、寫實主義を旨として今日に及んだ。

世態人情を寫すといふモツトオは、硯友社全盛時代をも貫き、やがて自然派の運動の勃興に伴ひ、一層徹底的になつた。いふ迄も無く自然派は、人生に對して科學者の態度を以て臨む事を主義とし、浪漫主義の排除、詩の追放に努めた。小説の目的は、面白をかしい架空のお話をつゞるのではなく、人生の眞實を描寫するにありとした。既に架空をしりぞけるのであるから、經驗が重んじられるのは當前である。その經驗偏重の傾向は、やがて我國の小説の總括的特徴として、身邊小説或は心境小説の發達を促し、遂にはその弊に苦む有樣となつた。

身邊小説の味ひにも捨て難いものゝある事は否めないが、作家の生活が豐富で無く、經驗が廣く深くない場合、平凡單

調に陷り易いのは自然の數である。尤も、身邊小說や心境小說の味は、文人の味だともいへる。文人でなければ深くは理解出來ない傾がある。だから、世間一般の讀者があきあきして顧みなくなる迄、文壇人は安んじて俳諧的陶醉にひたり、箱庭式技巧を弄んだ。おまけに、我國の文壇の他の特徵として、專門批評家が極めて少なく、作品に對する批評は、作家自身がお互にやりあふので、愈々讀者の求めるものとはかけへだゝつてしまふ結果を招いた。纎細なる神經の遊戯は、多數の讀者の感得しない所である。

小說もいゝけれど、面皰靑年の戀愛小說にはあきあきしたとか、いつもいつも三文々士の家庭悲劇ではつまらないと云ふやうな非難は、明治文學の發生と共に綿々として今日に及ぶものである。

若しも小說の素材として戀愛を取扱ふ事を禁壓したならば、その寂しさは想像も出來ない。若しも古今東西の小說から、戀愛に關する場面を取除いたら、殆んど九割迄の小說は姿を消すに違ひ無い。誰が何と云はふとも、小說の內容として永久に勢力を振ふものは、戀愛とエロティシズムであらう。例を明治の文學にとれば、硯友社全盛時代には狹斜の街が戀愛道場の主たるものだつたから、おいらんや藝者といゝ男の若旦那やいなせな職人の情事が繰返して描かれ、さういふ都會文學にあきたりないか、或は田舍育の作者にとつては、野邊の少女に對する若者の戀がうたはれた。やがて女學生といふ階級の靑年の戀の對象として出現すると、「靑春」や「魔風戀風」がその方面の代表作となる、奧さん令孃階級には、蘆花や北星が戀愛寶典を捧げた。時代が移つて、はかなく美しいロオマンスが排斥され、人生の事實を暴露し、醜を描く事を主とする傾向に迄進んで來ると、戀愛情事の取組は愈々千態萬様となつた。若樣と小間使、書生と女中も事古りて、中年の小說家が若い女弟子に對し悶々の情やるせなく、移香のする蒲團に顏を埋める小說は、中年の戀といふ主題を提供して世の中を騷がした。更に進んでは、一人と一人の戀愛の單調にあきたらず、三角關係四角關係から、甲と乙との間を屢々往來するシイソオな史や、キヤッチボオル・ガアルに迄發展した。しかも、むかしのやうに戀愛を美しいものときめて空想憧

憬し、想像によつて描くのとは異り、多くは身邊小說の形式にそのまゝあてはまる自分の實驗記錄なのである。プロレタリア文學が喧しく鼓吹され、月々の同人雜誌を讀むと、淫賣婦と勞働者と巡査を登場人物とする戲曲、共產黨とおまわり、地主と小作人、工場主と職工を對立させた無數の小說にうんざりするが、それよりも更に多いのは、青年と有夫の婦、ダンサア、ウエイトレス、ストリイト・ガアルの交涉だ。それが、若い作者にとつては、單に有夫の婦であるといふ丈で冒險を感じ、單にダンサアだといふ事で新味を感じるのであらうが、悲しい事には何等の力ある解釋が伴はないから、むかしながらの戀愛小說の常套手段ばかり陳列される事になり勝である。

小說もいゝけれど、面皰青年の戀愛小說にはあきあきしたといふ非難の、綿々として盡きないのも無理は無い。尤も、さういふ非難の中には、全然文學に對する無理解から出てゐるものも多いに違ひ無い。戀愛を極端に危險視する立場から出て來るものもあるであらう。學校が小說を蛇蝎視し、家庭が小說を毒藥視するのは、其の適例である。

明治文學興隆期の批評家の中にも、極力戀愛小說を排して、英雄小說の出現をのぞんだ人もある。より廣き社會的背景を持つ小說の出現を希望した人もある。曾て、無戀愛小說といふ新語が文壇を賑はした事もあつた。夏目漱石國木田獨步島崎藤村の諸氏が競つて力作を發表した頃、偶然それらの作品が戀愛小說以外のものだつたので、無戀愛小說と銘を打たれ、新領土が開拓されたやうにうたひはやされたのであつた。

何といつても明治以後の文學は未だ若い。批評家側、讀者側からいろ〳〵の註文が出ても、それに應ずる作品の出現はこれからでなければならない。紅葉露伴鷗外美妙二葉亭といふやうな諸先蹤が一時にあらはれ、未開拓の地面におもひおもひの鍬を入れ、忽ち收獲を得たのは二十歲を越えるか越えないかの年齡である。紅葉山人はあれ丈の作品を殘したが、享年僅かに三十八歲であつた。それから一時代後の鏡花風葉春葉秋聲天外の諸氏も、若くして一家を成した。樋口一葉の如きは、二十五で死んでしまつた。あれ程大人びた口をきいてゐた齋藤綠雨さへ、四十歲にならずに死んだのだ。獨步も

早く世を去り、その外の誰彼も、若くして死んだ。「蒲團」の作者が中年の戀を描いたのも四十前で、當時作者は既に老人に近いものと自分自身を考へてゐたらしく、世間も亦い丶年をしてどうしたものだといふ心持を露骨に示した。その頃は未だ日本も若かつた。小説作家にも不惑に達した人は少なかつたのだ。

けれども時代は何時の間にか推移し、作家の年齢も加はり、人生經驗も豐富になつた筈である。世態人情をうつす小説も、身邊小説も、心境小説も、ほんとに深味のある作品はこれから生れる可きである。

小説もい丶けれど、いつも〳〵面皰つらの男女の痴情では面白くないといふ非難に對し、若い者が若い者の心で小説を書くのはあたりまへだ、と思つてゐた私も、流石に年をとつたと見え、單なる戀愛小説は最早通俗小説家に任せて置けと叫び度くなつた。それは少女雜誌を賑かにし、安價なる涙と同情をもつて酬ゐられるがい丶。吾々は、大人の小説を求め度い。

幸田露伴先生が、いつしか小説の筆を斷ち、廣津柳浪先生が、晩年一切筆を執らずに終つた心持は、最近やうやく推知する事が出來るやうになつた。四十代になつてはじめて小説を書いた夏目漱石先生が、づつと年齢の若い自然派の連中と一緒になつて、現實暴露の悲哀にひたれなかつた心持もわかるやうになつた。晩年の森鷗外先生が、先生から見れば遙かに若い連中の向ふ見ずの强さを、あまり愉快に思はれず、時々揶揄嘲笑せられたのも無理はないと思ふやうになつた。若い者には若い者の文學があると同時に、それとは趣を異にした大人の文學がある可きだ。吾々が吹き出し度くなる程あさはかな少女小説なるものも、乳首の紅らみはじめた連中には、涙流れて果てなきおもひをさせるのである。

そんな憎まれ口はきくもの丶、私もむかしは感傷的な小説に涙組む事を知つてゐた。それが段々成長し、容易には涙を誘はれなくなつたが、文學の味ひは愈々深くわかるやうになつた氣がする。四十にならなければ、人生の味も文學の味も、わかるものかと、同年輩の友達と共に、常日頃いひあふやうになつた。

小説の作家だつて、二十や三十で、持つて生れた力の全部を出し切れやうとは思はれない。トルストイもユウゴオもドストイエフスキイもメレデイスもハアデイも、その傑作を世に問ふに至つたのは中年以後の事である。天賦の才能豊かなる作家は、年と共に益々思想も感情も深みを加へ、構成能力も大きくなるに違ひ無いのだ。たゞ天分が乏しいか、勉強が足りないか、若い中に何から何迄ちいさく固まつて、早老の歎を見る例の多いのは殘念である。

そんなら明治以降の作家の中で、誰が一番よく年と共に推移したか、若年寄とならず、情熱を失はず、省察の深さを加へて延びて行つたか。私は誰よりも先に島崎藤村先生に一票を捧げ度いのである。殊に近頃の作品「伸び支度」「嵐」「分配」を讀んでその感を深くした。

明治年代の産物である新體詩は、明治十五六年頃赤門の教授達の提唱によつて生れたものときくが、その人々は眞に詩人と呼ばる可き人ではなく、單に西洋事情を我國に移植すると同じ心持で、三十一字又は十七字の約束によらぬ詩を紹介したに過ぎない。緑雨が、新體詩見本と稱して、外山調を次のやうにからかつたのは、隨分きびしい皮肉だつた。

火鉢の上に鐵瓶が
落て居るとて無斷にて
他人の物を持行くは
取も直さず泥坊で
泥坊元來不正なら
雲を霞と逃ぐるとも
早く繩綯ひ追駈けて
縛せや縛せ犯罪人

たしかにその人々の詩は、たかだか軍歌の域に低迷するものであつた。散文的思想、常識的教訓を、七五調をかりてあらはしたに過ぎない。それが純粹の抒情詩となり、清新の格調を以て一代の青年子女の心に、一生涯忘れ難い程の感銘を與へたのは藤村先生の仕事であつた。文學史家は、他の多くの詩人の名を數へて功績を讃へるであらうが、作品價値からいつても、人心に與へた影響からいつても、到底比較にならない存在である。それらは總て今日は忘れられたに等しく、今日もなほ昔日の如く若いもの丶愛誦感激するのは「藤村詩集」である。

「藤村詩集」は四卷の詩集の合本である。「若菜集」「一葉舟」「夏草」「落梅集」の四つだ。藤村先生は、詩集の序文の中で下のやうに云つてゐる。

新しきうたびとの群の多くは、たゞ穉實なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた僞りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙はかれらの頰をつたひしなり。

ほんとに當時の詩人は、多感の若者に違ひ無く、まだ詩形の研究も深くは行はれてゐなかつた時代だから、たゞ〳〵感激のあふるゝまゝにうたつたものと見て差支ない。藤村先生の詩と雖も、幼稚には違ひ無いのだ。しかし、その幼稚な詩が、其の當時の幼稚な讀者の胸を打つたばかりで無く、その後三十餘年を經過した今日もなほ、若いもの丶心を打つのは何の爲めか。年少の日の私も亦「若菜集」や「夏草」を讀んで涙を流した一人だ。それは多分、小學校から中學校へ移る頃の年配だつた。私は兄の本箱に祕滅してある詩集をひそかに拔出して、幾度となく繰返し、就中愛誦するもの丶いくつかは、完全に暗誦する事が出來た。少年時の記憶力は強く、今もなほその幾節かを空に思ひ出す事が出來る。近年全く散文的の人間になつて、詩歌には多くの興味を持たない筈なのだが、頃日久しぶりで「藤村詩集」を手にして感慨深いものがあつた。勿論昔日の生々しい感激を再現させる事は無理だつたし、殊に古今集あたりから傳統的に脈を引いてゐる優雅な字句の、既に全く實感を作はない事を痛切に感じたが、しかも私は此の詩集を、明治の生んだ第一の詩集なる事を否めない。

むかし私が全部暗誦し、いつも涙を催した「終焉の夕」の如きは、詩集中最高位を要求すべきものでは無いのだが、繰返して、不覺にも涙腺に熱を覺えた。それは或は詩の力では無く、少年時の感激が今なほ私の肉體に殘つてゐる爲めかもしれないが、何れにしても私は詩人に對する感謝を新しくし、さういふ賜を受けた事を幸福に思つた。

私は思ふ。文藝作品の價値も時代と共に變化するには違ひ無いが、「藤村詩集」の如きは永久に若きもの、心に喜びを與へる力を持つてゐるのではないだらうか。萬葉集の秀歌は今日なほ吾々に情熱をもつて迫つて來る。「藤村詩集」もそれに等しいものでは無いだらうか。いふ迄も無く詩形は單純で、詩想は感傷的であるが、それだけ形式に捉はれず、思ふがまゝに青春のおもひをうたひ盡す事が出來たのでは無いだらうか。自分自身の心の要求のまゝにうたふ純粹の美と力がある。しかも極めて健康な美しさだ。湧出る泉の清さ、晴れわたる空の朗かさ、憂愁も悲哀も、すべてが新鮮なる色彩と香氣につゝまれてゐる。それら永久に若いもの、心を打つ所以であらう。

しかし「藤村詩集」一卷の中にも、時と共に作者の心境の推移した跡はうかゞはれる。戀愛と自然とを素直にうたひ憧れた心は、次第に藝術愛慕に傾き、人の力を讃美すると同時に、人生の行路におもひを惱ますに至つた。更に進んでは勞働を讃へ、感情よりも意志の力を慕ひ求め、人生の闘士を稱揚する詩人となつた。絢爛は次第に淡靜となり、感傷はやうやく涙をかくし、線のふとくたくましい意力が漲つて來た。「落梅集」は明治三十四年に刊行されたのであるが、「若菜集」に比べて著しく男性的の感じを作ふものである。けれども、此の集上梓の後、先生はふたゝびうたはず、淺間山麓の町に教鞭をとりつゝ、次の飛躍の準備にとりかゝつた。

藤村先生の小說の處女作「舊主人」は、不幸にして風俗壞亂のかどで發賣禁止の厄にあつたが、今日ならば決して禁止さる可きものでは無い。何とかして版を新たに起し、廣く人々に讀ませ度いものである。それは三十五年の「新小說」に出たのだから、詩作を終つて引續いての起稿と見られるのであるが、先生が小說家として文壇の中心に乘出したのは、長

篇「破戒」を携へて信州から出て來た時である。第一の詩人が突然うたはなくなり、今度は長篇小說をひつさげて世に問ふのであるから、そこには何か急激な變化が起つたやうであるが、上記の詩集の變遷を見れば、先生の思想は一歩々々と移つて來たので、決して突然の轉換では無い。

私はさきに、先生は強い感情を抑える更に一層強い意力を培つた事に言及した。散文の創作には、詩よりも多くの客觀的態度を持する事が必要である。情熱を內に抑えつけなければならない。感情と意志との闘爭こそは、島崎藤村先生の一生を貫く努力であり、惱みであつたであらう。先生の詩の魅力は感情の強さから生れ、先生の小說の價値は意志の力の賜である。

先生の著書「嵐」の卷頭には、有島生馬氏の筆になる芭蕉の繪が寫眞版で掲げてある。それは何等かの重要なる意味をもつてゐるのかどうか審かにしないが、先生の飯倉片町の家の庭には芭蕉が植ゑてある。その葉を干して風呂に入れると、大變あたゝまると先生は話された。春になつたら根分けしてあげるとも云はれた。先生は芭蕉を好むらしい。

又先生は、俳人芭蕉の生涯とその仕事に深く心を打たれてゐるらしい。巴里の宿で、先生は芭蕉の書いたものを熟讀して居られた。折々の隨筆にも、芭蕉の事がよく引合ひに出て來る。曾て或る短歌雜誌の經營者の爲めに、資金の一部に充當する意味で、幾枚かの色紙を寄贈された事がある。その一枚を私が讓受けたが、それには、

　　あさをおもひ又夕をおもふべし

といふ芭蕉のことばが書いてあつた。

隨筆集「後の新片町より」に收められた「芭蕉の一生」といふ短文の中には、芭蕉の一生は生活を藝術とする努力だつたと說いてある。それは又藤村先生の一生にもあてはまる言葉であらう。長い間肩を並べて步いて來た多くの文人の中で、先生の殘した足跡は、他の人のとは遙かに離れて、最も力強い印象を殘した。それは主として先生が、獨自の生活樣

式を固守した事に基づくと云つてもいゝ。日常生活に於ては、厳粛なる簡素清貧の中に身を置きながら、先生の心は高き矜持に燃えたであらう。「破戒」を書く時の先生の貧困は、到底想像も及ばないものらしい。先生の作品の中には、榮養不良で妻が鳥目になり、子が病んで死ぬ悽惨たる光景が描かれて居る。寧ろ殘酷といふ可きだ。人道上許し難いといふ氣持さへ禁じ兼ない。恐らく往年の多感の詩人、藤村先生は冷かにこれを眺めてはゐなかつたであらう。しかし、その惱みも、意志の強さが抑えつけてしまつたのだ。先生が「藤村詩集」時代からの美に對する憧憬、仕事に對する思慕は、藝術創作の一途に集中されて、他のあらゆる慾望はすべて犧牲に供されたのだ。感傷の涙は人前にはかくされて、ひそかに書齋の内に於て、原稿紙を濡らす事屢ゝなるものがあつたであらう。

「後の新片町より」の中には「Life」と題する短章がある。

Life をして趣くまゝに趣かしめよ。

ただそれ丈でおしまひだ。先生は十九世紀末から二十世紀初頭へかけての我國の最高知識階級の一員として、當然自由主義者である。それが自然派的觀照態度を執る時、右のやうな短章を成さしめるのは寧ろ當然である。先生は強くうたはんとする小熱を殺して、人生の趣くがまゝの姿を冷酷に眺める事を欲した。けれども、いくら抑えつけても天賦の詩的情熱は燃えさかる。當年の自然派が、先生をかついで自派のチャンピオンとして推稱したが、先生の作風は果して自然派のものであつたらうか。自然派的客觀主義は、或は當時の先生の理想であつたかもしれない。しかし本質に於て、先生は又浪漫派でもあつた。少なくとも自然派が極力排除し、又先生自身も努めて抑壓しようとしたに違ひ無い詩情は、どの作品をも貫いて流れた。情意の醱酵の結果、おのづから二者が融合されて、覆ひ難き特徴となつたのであらう。主觀と客觀の融合は、此の詩人小説家によつて完成された。詩のある小説。これあるが爲めに、先生の作品の讀者には、女性が際立つて多いのであらうと思ふ。

先生は、人生は趣くまゝに趣かせるが、自分自身に對してはストイシズムの使徒の如く戒律をもつてのぞむ。こゝにも情意の闘爭がある。若しも先生が、「新生」を文字に書く事が出來なかつたらどうだつたらう。「新生」ばかりでは無い。萬一此の作者に、文學をもつて一切の心的苦惱を發表する道が與へられてゐなかつたら、或は今日迄の人生の行路の中途で、自ら命を絶つに至つたのではないだらうか。それ程自分と闘つてゐる人だ。あく迄も自分の築きあげた生活様式を固守し、その堅牢に石の如く腰を据えながら、人生の諸相を見守つてゐる。それもたゞ科學者の如く見てゐるのではない。

物を觀るには眼を開いた丈では足りない、心の働が無くてはならぬ。

といふミレエのことばのやうに、眼と心とを、共に鋭く働かせてゐるのだ。

さういふ半生を經て來た先生が、五十代のなかばを過ぎて書上げた代表作が「伸び支度」と「嵐」と、分配だ。

此の三つの作品は何れも所謂無戀愛小説だ。又身邊小説でもある。人生經驗の充分豐富になつた作家の、素晴しい構成力によつて、完全に組立てられた人生圖である。

「伸び支度」は、妻に別れ、男手で二人の男の子と、一人の女の子を育てゝ來た父親の靜かにうたふ詩である。父親は、近代日本の社會相を書齋から見守つてゐるのと同じ態度で、子等の成長を見てゐる。眼を開いた丈ではなく、たしかに心を働かせつゝ見てゐる。正にそれだ。

この子を生んだ母親は死んだ。その娘も十四五になり、人形をもてあそばなくなつた。原作のかき出しは下の通りだ。

十四五になる大概の娘がさうであるやうに、袖子もその年頃になつて見たら、人形のことなどは次第に忘れたやうになつた。

これが藤村先生のかきかたの特徴だ。「袖子も十四五になると人形の事は忘れた」とは書かない。描かんとする一個の人間の記述を避けて十四五になる娘といふ一般的特性に筆をつけた。その效果は充分きいて、作品に觀念的の味を含ませる。

人形と遊ばなくなつた娘は、ひと頃はよく遊びに來た近所の年下の娘ともうとくなつた。そのかはりに、數へ歳二つにしかならない金之助さんを抱いて來て、遊ばせるやうになつた。突然娘のからだに變化が來た。それ以來一切のものを見る眼が違つてしまつた。女中が金之助さんを抱いて來ても、

柚子はもう以前と同じやうにはこの男の兒を抱けなかつた。

「伸び支度」には、作者の親としての慈愛があふれてゐる。しかしその慈愛の底には、人生の從軍記者である作家の眼が鋭く光つてゐる。たゞの親の愛よりも、その人生の解き難い不可思議を讃美する詩情がゆたかに盛られてゐる。この作はよくまとまつた逸品で、いかにも老大家のおちつきを見せたものである。

「嵐」の方はそれとは違つて、頗る野心にみちた作品だ。「伸び支度」に穩かな父親の詩情がありとすれば、これには人生と闘ふ父親の剛壯な意氣がある。此の一作を以て、文壇の第一線にはなばなしく陣を敷かうとする意氣組みだ。

此の作でも、妻を失つた父親が、三人の男の子と一人の女の子を育てながら、その成育に對して眼を開き、心を働かせて觀察して居る。

太郎は郷里で自作農をやつてゐる。自作農といふ好みは、いかにも自由主義の詩人の理想らしい。各人が、みづから耕し、みづから喰ひ、みづから詩をつくり、みづから歌ふ事が出來るならば何よりも樂しいだらう。だが、此の場合の父親の考へは、氣の弱い長男を、人間として強くする爲めに歸農させたのだ。そして、自身作れるだけの田と畑と、薪材を取りに行く爲めに要する丈の林と、それに家をあてがつた。餘分のものは一切やらない方針なのだ。かれこれ考へ合せて、これも亦先生のストイシズムのあらはれと見てもいゝのでは無いだらうか。但しさう考へると、我が子を犧牲にして迄も好むところに趣くのかといふ疑も避け難くなる。

次郎と三郎は夫々賦性を異にする畫學生だ。互に制作を見せ合はない程、別々のものを持つて生れて來た兄弟だ。末子

も次第に成長して九文の足袋をはく年頃になつて來た。

父親にとつては、單に體の延びて行くのを見守つてゐる時ではなくなつたのだ。子供等には子供等の、これから出て行く世の中に對する不安も喜びも芽ぐみはじめた。只管父親に縋り、頼つてゐたのが、次第に獨立した考へから、父にもあらがひ得る一本立ちの人間になりかゝつて來たのだ。

その一家の内部と照應させて、作者は時々家の外の世の中の變遷動搖を暗示的に描く事によつて、效果をあげる事に努めた。

幼い子供達の養育はむづかしかつた。中には寢小便をするのもある。それが大きくなつて、父親の兵兒帶の間にしまつてある蟇口から半月に一圓づゝの小使を貰ふ年齡になると、一層親心は負擔を感じる。おまけに父親には病氣が起つて來た。

丁度町では米騷動以來の不思議な沈默がしばらくあたりを支配した後であつた。市内電車從業員の罷業の噂も傳はつて來る頃だ。

地震も亦單なる天災として取扱はれたばかりで無く、それに伴ふ社會的出來事を見逃さず、作者は詩人らしい驚きを深くしてゐる。今の國政に反するものとして、此の大騷動のどさくさまぎれに殺された「早川賢」は、三郎の心に强く衝動を與へた。新しいものを求めてゐる子供等の心の中迄も、父親はぢいつと見守つてゐる。人生をして趨くまゝに趨かせよといふ理想は、子供の上にも延長されて、欲するがまゝに進ませ度いのだ。

よりすぐれたものとなるためには、自分等から子供を叛かせたい。

さういふ態度をとつてゐる。

内も外も多事だ。その交錯を、藤村先生は混雜させずに、靜かにおちついた筆致で書いた。しかし、その生活を「嵐」と觀じてゐるのである。

「家の内も、外も、嵐だ。」
「強い嵐が來たものだ。」
　過ぐる七年を私は嵐の中に坐りつゞけて來たやうな氣もする。

と隨所に感慨をもらしてゐる。

そして此の父親は、長男を自作農にしたと同じ詩的憧憬から、次男を半農半畫家たらしめようとする考へをいだき、實行する。そして、鄕里と東京と、太郎次郎の住む山と自分の住む都會とに、親と子の感情の交流を感じて、

　子のために建てたあの永住の家と、旅にも等しい自分の假の借家住居の間には、虹のやうな橋が掛つたやうに思はれて來た。

といつてゐる。先生といふ人は、嵐の中にもなほ詩を見出す。おし殺してもおし殺しても、先生の浪漫主義が承知しないのだ。

「嵐」がその題名に時代を暗示する意圖を含んでゐると同樣に、「分配」も亦新時代を匂はせる意識を有するものであらう。しかし、作品の主題は「嵐」に描かれた後の一家の私事にかゝはる。

太郎は鄕里の山の中で農業に從事してゐる。次男は兄と共に住み、半農半畫家の生活を送つてゐる。三郎は社會運動に憧憬し、父の家を離れて仲間と一軒の家を借りてゐる。勿論親の脛嚙りだ。結局父の膝下には末子がゐるばかりになつた。その末子もやがては嫁ぐ日が來るであらう。老いたる父を殘して、家を出て行く日が來るであらう。父親の胸には、一脈の寂しさが迫つてゐる。彼は七十いくつかになつても生活を單純化しようと考へて、家も妻子も捨てゝ遁れんとしたトルストイにひきくらべ、自分の場合はその反對に、妻に死なれ、子供はやつと成長させると、順々に出て行つてしまつて、自分一人だけになる道を歩いて來たのだと感慨に耽る。

其處に思ひもかけない收入のある話が提供された。はつきりいへば、出版界の革命的騷ぎを招來した圓本の印税が、お

よそ二萬圓入る事になつたのだ。

自分も矢張、金でも貯へて餘生を送らうとする年頃になつたのかも知れないと父親は考へては見たものゝ、彼は曾て金錢慾に惱まされた事の無い人間であつた。富とは生命より外の何物でもないといふ言葉に勵まされて來た人間なのだ。彼は結局その金を、子供達に分配する事にきめた。既に田畑を貰つてゐる太郎にも爲替が組まれた。次郎と三郎には各五千圓宛が與へられ、それは六ケ月の定期預金となつて銀行に預入れられる。末子も幾何かの金が預金證書となつて與へられる。

分配が終つて、子等の樂しい笑聲にかこまれながら、父親には深い感慨が來る。

出版界が、あの世界の大戰以來順調な道を辿つて來てゐるとは、私には思へなかつた。その前途も心に掛つた。うくわつには調子に乘らない大事とりの先生の心には、他の文人のやうな浮々した歡喜は湧かなかつたであらう。やがて來る出版界の混亂が、經濟理論を辿る迄もなく直感されたのだ。

私は玆に、三つの作の細かい批評をする企てを持つてゐない。たゞ私が深く感じる事は、明治の中頃に起つた現代文學も、多くの先輩の苦闘によつて、こゝ迄發達して來たといふ喜びである。面皰青年の戀愛小說を踏み越えて、作家生活の豐富な、人生經驗の深く廣い人によつて、よなげた小說の出現する事は何たる慶事であらう。寫眞風に世態人情を寫すには、たゞ眼を開くだけでよかつたが、こゝには心の働が、冷かなる觀察に熱を加へ、うるほひを與へた。年齢をとつて、觀る眼は愈々廣く、おもひやりは益々深くなつた。「嵐」の中には「若者萬歳」と叫ばんとする心持が書いてあつたが、私はとしよりばんざいと叫び度い。身邊小說と雖も、こゝ迄來れば個人の私事では無く、普遍性を帶びた人生詩として、大衆の心を打つであらう。

今、分配を終つた藤村先生は、更に新たなる氣力をもつて、一世一代の大作「夜明け前」にとりかゝつた。よき意味に於る野心と、情熱とが、豐かなる詩想を刺戟して、仕事の成就を完からしめん事を切に祈る。（昭和四年六月一日）

編輯者雜記

○

「夏季特別號」といふ感じはフレッシュな感じを與へるが、其内容も新鮮で且つ充實してゐるといふ點に於て大いに自負するに足るものがある。本月號は文字通り汗と努力の結晶だつた。編者の苦心の跡は十分に見て頂けると思ふ。

○

文壇に一大センセイションを惹起した問題の島崎藤村氏の「夜明け前」は本號から愈々本舞臺に入つた。其分量から云つても本號の分だけでも百十枚の長篇である。今後展開さるべき此大作をしのぶにふさわしい堂々たる筆致を示してゐる。本月文壇の偉觀だ。

十一谷氏の「街の斧博士」は氏のアンピシャスな作品で優に百枚に達するものであつたが、例の骨をきざむ氏の苦心は〆切間際に至つても筆をおく能はざらしめたので、止むを得ず本號の分だけでまとめて頂くことにした。これだけ見ても立派な作品である。

和田氏の「最後の鐘」は亡び行く農村と農民の運命を描いた力作で、新人努力の作として十分認めらるべきものだと思ふ。

前田河氏の「支那」は作者が家事上の都合で十分に書くことが出來なかつたのは遺憾である。來月號はもつと長く書いて頂いて埋合せをするつもりである。

○

「名投手苦心談」は近來の快文字、さすが一流の名選手の云ふ所、一々うなづかせられる。ファンの必讀文字だ。

□

我が中央公論社特派員谷讓次氏夫妻は約一年間に亘る欧洲巡禮の旅を終へてこの度無事歸朝された。七月號發表の新世界巡禮第十二信「海のモザイク」は、だから本誌に連載されて異常な人氣を博した氏のヨーロッパ通信としては最終のものである。是非讀んでいたゞきたい。そして氏が今後の活躍に充分の期待を持たれむことを――。

後藤信夫氏の「イギリス總選擧の結果と勞働黨内閣」は必讀の文字、確たる自信を以ておすゝめする。イギリスでは總選擧が終つて保守黨の破るゝや首相は逃座にキレイさつぱり内閣を投げ出してしまつた。その英國の何と男性的な潔い態度であることよ、我が首相の意地ぎたなさと隔たることの何ぞ遠き！彼は中天に輝くお月様なんです、そしてこちらは泥みどろになつてあがきまはつてゐるスッポンだといはれても殘念ながら仕方がないでせう。日本人は、人の鑑といはれた武士はこんな筈ぢやなかつたんですがね。

七年振りで一寸歸朝された武林無想庵氏の「ミニヨンヌリイ」は氏の新日本觀として興味あるものです。無想庵氏のいふ通り浸潤過程にある欧洲文明の模倣にこれ日もこれ足らぬ日本人は何たる馬鹿者でせうと云ひたくさへなります。

中央公論社は今まで丸ビルの七階にありましたが事業の發展と共に手狹でどうにもならないので、來る七月一日から同じ丸ビル五階の少し廣い所に引越すことになりました、何卒倍舊の御愛顧を――。

◇

今日は六月十二日、校了になる日である。―校了にならないうちに、もう八月號の、九月號の、そしてその先の、又は又其他の企てに、思ひを廻らして居るのが、今のこ

身の喜ばしき運命である。讀者よ！　多角的な第六感的なこの明るい運命線がいかに展開し、いかにうねりいくか!?　若き編輯子の胸ははちきれるやうにふくらんで居る。

◇

百パーセントの興味、百パーセントの聰明、百パーセントの價値、それは讀者の攝取せざるを得ない本誌の持ち味である。杉森教授の戰慄すべき聰明な認識、無想庵氏の慈味圓熟纖細、猪間氏の剴切な思惟とタッチの流暢、土田氏を筆者とせる河上博士への精察、相も變らず透徹した馬場氏の筆、そして鈴木氏はブルジョア政府の經濟的カラクリを痛烈にあばき、「蟹工船」の多喜二氏は岩藤、林兩氏を克服せんとするプロレタリア大衆文學論に氣を吐き、後藤信夫氏は英國總選擧の結果を語りて餘蘊ない、などと並べてきたら、宮代、水上、太田、高田と次々に出てくる何とすばらしい其顔觸れとその內容とに、何とかいてよいやら一騎當千の筆も醉ふ。ましてや歸來第一筆のヂョージ・タニは、その新世界巡禮にいかなる止めをさし、われらの藤村はすきなき堂々百餘枚のその筆端に何を描き、鐵刻の香氣高き十一谷氏は……。われらは、讀者と共にまばゆき本誌の出來榮えに、喜びを頒たざるを得ないのであります。

×

社會の諸相・諸形態の亡ぶべきものは亡び展かるべきものは展かれねばならぬ。然るに現代我國の、昨是今非、無軌道的なるどうした事か。就いて語る言辭にも窮する底のもの多いのは痛心に耐えぬ處だ。——海を超えてイギリス總選擧の結果は近來の快よい報道だつた。下野すると云つて直ちに下野したボルドウイン、下野すると云つて却々下野せぬ將介石、下野するとも云はず下野もせぬ田中內閣、憲政の常道に立つて保守黨ヒッコミの鮮かなることは彼此思ひ併せると天地霄壤の隔りがある。政權委讓の圓轉を期する事が出來ない現代日本の今日。

本號は見らるゝ通り、作・材共に偉觀を極めた立派な編輯だ、而かも頁の都合や或は時局的の意味からして本誌に收錄出來なかつた原稿も尠くなかつたのは吾等として非常に遺憾とする處だ、と同時に執筆下さつた方々に深くお詫びし、また讀者諸君に來月號まで御寛恕を願ふ次第である。

卷頭論文杉森氏の田中王堂論は土田氏の河上肇論と共に初夏論壇の双璧たるを信ずる。いゝへんぺんたる印象や觀察に基く評論を排して、構成要素と外貌とを把握し剔抉しその本質を眞向より論ぜる本格ものだ。

また東京の發展に關する猪間氏の「省電を繞る所得鬪爭の鳥瞰」は、登山シーズンを迎へるに當つて必讀すべき伊藤氏の「山岳受難史」と相並んで好個の讀物であらう。

プロレタリア大衆文學論の紛々たる秋、三・一五事件や蟹工船を携げて新進氣鋭の小林氏のプロレタリア文學論はまた一石を投ずるものであらう。

×

前號に發表した懸賞作品募集は幸ひに江湖の熱心なる支持を受けた、作品は陸續と殺到しつゝある。と同時に熱烈なる締切延期の勸說と要望に接した。依つて玆に、別掲の如く締切七月十日として、投稿家の切なる要望に副ふ事とした。吾等は作品力作に接し得ることを深く信じ期待する。

夜明け前（第一篇）

島崎藤村

第一章

一

馬籠の宿役人、小竹金兵衛は氏神の參詣を濟ました後で、社頭の鳥居に近い杉の切株の上に腰をおろした。いつも村社への參詣といふと、きまりで常用の紙入を懐にしてゐる。その紙入は布で造つてある。裏には木綿更紗がつけてある。それほど持物も質素に、雪踏ばきで、その古い切株に腰掛けた。

木曾街道は直ぐ眼の前に續いてゐる。その邊の樹蔭は往來のもの丶よく立寄るところで、旅の枇杷葉湯賣なぞまで荷をおろす街道の傍である。過ぐる日の村での雨乞の折に、二本の樅の伊勢木を引き出したのも、その鳥居の前からである。最早舊暦六月末の日もさして來てゐた。金兵衛はその切株の位置を選んで、日毎に行きかふ人馬のために踏み堅められたやうな街道の方を眺めながら休んだ。

事の起つて來る大概の場合がさうであるやうに、東海道浦賀の方に黒船のあらはれたといふ噂を耳にした時にも、最初金兵衛はそれほどにも思はなかつた。江戸は大變だといふことであつても、そんな騷ぎは今に止むだらうぐらゐに考へてゐた。江戸から八十三里の餘も隔たつた木曾の山の中に住んで、鎖國以來の長い眠りを眠りつゞけて來たものは、亞米利加のやうな異國の存在すら初めて知るくらゐの時だ。

この街道に傳はる噂の多くは、諺にもあるやうに、轉がる度に大きな塊になる雪達磨に似てゐる。六月十一日の晩に彦根の早飛脚が殘して置いて行つた噂もそれで、十四日には唐人船八十六艘もの驚くべき大きな話になつて傳はつて來た。寛永十年以來、日本國の一切の船は海の外に出ることを禁じられ、五百石以上の大船を造ることも禁じられ、和蘭、支那朝鮮をのぞくの外は外國船の來航をも堅く禁じられてある。その國のおきてを無視して、故意にもそれを破らうとするものが、驀地にあの江戸灣を望んで直進して來たとは。當時幕府が船改めの番所は下田の港から浦賀の方に移してあつた。そんな番所の所在地まで知つて、あの唐人船がやつて來たことすら、すでに不思議の一つであると言はれた。

種々な流言が傳はつて來た。宿役人としての金兵衛等は、そんな流言からも村民を護らねばならなかつた。そこへ通行の前觸だ。間もなくこの街道では江戸出府の尾張の家中を迎へた。尾張藩主の名代、成瀨隼人之正、その家中のおびたゞしい通行の後には、かねて待ち受けてゐた彦根の家中も追々やつて來る。公儀の御茶壺同樣にとの特別扱ひの御觸れがあつて、名古屋城からの具足長持が十棹もその後から續いた。それらの警護の武士が美濃路から借りて連れて來た人足だけで

も、百五十人に上つた。継立ても難澁であつた。馬籠の宿場としては、山口村からの二十人の加勢しか得られなかつた。例の黒船はやがて殘らず歸つて行つたとやらで、江戸表へ出張の人達は途中から引返して來るものがある。ある朝馬籠から送り出した長持は隣宿の妻籠で行き止まり、翌朝中津川から來た長持は馬籠の本陣の前で立往生する。荷物はそれ〴〵問屋預けといふことになつたが、人馬継立ての見分として奉行まで出張して來るほど街道はごた〳〵した。

狼狽そのもの〻やうなこの混雜が沈まつたのは、八日程前にあたる。浦賀へ押し寄せて來た唐人船も行衛知れずになつて、先づ〳〵恐悦だ。そんな報知が、江戸方面からは追々と傳はつて來た頃だ。ちやうど、木曾福島の役所から來た差紙のことで、村々の庄屋は呼出されてゐた。吉左衛門もその一人として、福島の方へ出張中であつた。年寄役としての金兵衛は村全體の留守を預かる思ひで、平和であつて欲しい土地のためにも、また自分の家内一同のためにも、かうした氏神への參詣を怠らなかつた。

思はず時を過ぐしたといふ風で、金兵衛は腰を持ち上げながら言つて見た。

『どれ、ちよつと本陣へもお寄り申して行かう。』

二

荒町、峠、共に馬籠の宿内の小名であるが、路傍にあらはれた山石の多い橋詰の邊を間に置いて、荒町は馬籠の本宿につゞき、岩田から先の淺い谷間をへだてゝ、峠は本宿より一段高い坂上の位置にある。金兵衛が荒町にある村社から引返して行つた道は、石屋の坂のあたりで馬籠の町内の入口にかゝる。多人數の通行でもある毎に、そのあたりの農家で旅籠屋を兼ねない家は稀なくらゐのところだ。

『伏見屋の旦那、どちらへ。』

聲をかけて、行き過ぎるものがある。一里も二里もある林の方から杉の皮を背負つて、町を降つて來るやうな男でも、宿役人と見れば頰冠してゐる手拭を取つた。伏見屋とは金兵衛の屋號で、土地では小竹の苗字よりも、伏見屋の金兵衛で通つた。

木曾路を通る旅人を相手に、各自の生計を營む助けとしてゐるものは、もとよりこの街道筋に多い。さういふ人達は驛路のために働く。しかしそれほど直接緣故のないやうなものでも、驛路時代の一員として、當時の交通機關のためには皆相應に働いた。杁の三軒屋、栃が洞の一軒屋と數へて來ると、そこゝの谷陰に煙を立てゝ、隨分人里から離れたところに住む民家もある。繼立て、繼立てに、手の足りない時になると、宿の定使はそんな方まで走り廻る。その度に村民は鍬を捨て、問屋場のあるところへ集まつて來た。町の傳馬役、水役はもとより、極めて貧窮な黑鍬まで、この界隈に住む男ざかりのもので、一人として驛路のつとめに參加しないものはなかつた。

宿場として發達したどこの村にも見るやうに、この馬籠でも、主なる家々はいづれも街道の兩側に對ひ合つてゐた。年寄役與次衛門の家は本陣の前に、問屋九太夫の家は金兵衛宅の前に、年寄役儀助の家は同役新七の家の前に。

世襲を重んじ、家柄を重んじ、武士に高い權威を與へ、士族以外の苗字帶刀をも禁じた封建時代には、特別の恩典にでもあづからないかぎり、當時の百姓町人で公然と姓を名のることすら許されない頃である。自由なのは、たゞ屋號だ。この屋號を呼ぶことの便利から、村では本陣問屋以外のどの家にもそれがつけてある。與次衛門方の梅屋、儀助方の枡田屋、新七方の蓬萊屋といふ風に。さういふ中でも、金兵衛と吉左衛門とは互に會所で顏を合はせる宿役人同志であるばかりでなく、二人は石垣一つを境に坂になつた町の上下に住む隣人同志でもある。そのよしみに加へて、金兵衛の義理ある甥には吉左衛門が娘のお喜佐をめあはせ、若夫婦には別に上の伏見屋といふ家を持たせてある。

會所も割合に閑な時であつた。御貫目改め所であり問屋場でもある會所は、二ヶ所に設けてあつて、毎月上半期の事務

は吉左衞門の家で、下半期は九太夫の家で扱つた。金兵衞はその會所について本陣の門をくゞつた。曾て背代りの吟味がその門内であつたほどの廣さで、店座敷の前には松、牡丹なぞが植えてある。蟲干する日と見えて、表玄關も明けひろげだ。屛風唐紙の類を風に曝した廣い奥の方の部屋まで見透される。表玄關の長押にかけてある御家傳來の二本の古い鎗までがこゝの家柄をよく語るかに見えてゐた。

『實は、昨夜のことですが、三留野の藤屋へ賊が這入りました。なんでも品數を十七品も盗んで行つたさうですよ。吉左衞門さんからも、彌平(目證)からも、荒町の七之助へその言傳てがありました。町内でも用心するやうにつて、定使に觸れさしては置きましたが――』

留守見舞かたがた、ちよつとその話を置いて行くつもりで、金兵衞は本陣の門口まで訪れた。そこへ挨拶に出たのは吉左衞門が後妻にあたるおまんである。本陣の『姉さま』と言はれるこの人も山家風な手拭冠りで、主人の留守に蟲干などしてゐるところであつた。

『この節は盗賊の話をよく聞きます。』と金兵衞はおまんに話した。『先達も、三留野の宮川で這入られて、あの時に盗まれたのが當百十二文。外にもいろいろ。それからあなた、だん〴〵吟味しましたところが、その賊は大平の加納屋へ這入つた奴でしたよ。あそこでも二分二朱、その外いろ〳〵な物を盗んで、飯田まで這入り込んだそうです。到頭飯田で捕まつて、その賊は尾州の方へ引渡されたそうですが。私は飯田のものゝ話でそれを知りました。』

『どうも物騒なことですこと。』

『まあ、お宅でも御用心なすつて下さい。』

金兵衛は簡單な留守見舞にとゞめて、その日は爐邊までも上らなかつた。爐邊に近い上り端のところに腰掛けて話した。表玄關とは別の入口から臺所へ通ふ土間の廣くとつてあるところで、一方の裏口からはすゞしい風も來る。手桶の水をかついで井戸の方から通つて來る下女などもある。

『金兵衛さん、そこはあまり端近です。いかがですか、すこしお上り下すつては。お袋もお目に掛りたいと申して居りますよ。』

とおまんが言つてゐるところへ、奥の部屋の方から隱居がそこへ挨拶に來た。最早七十の上を越したお婆さんだ。當主吉左衛門から言へば、この隱居は義理ある母親にあたる。もともと吉左衛門は本陣系統の親戚から來て青山の家を繼いだので、同村同族の生れとは言ひながら、養子としてこの隱居にかしづいて來た人だ。

『いや、すみませんが、こゝで御無禮しますよ。今日はお宮參りを濟まして、ほんのお門口までお寄り申したのですから。』

さういふ金兵衛の聲も、本陣の隱居にはよく通じなかつた。おまんは側にゐて、

『お袋も耳が遠くなりまして、大きな聲でないと聞えません。この節は、人さまの前へも出たがらないんですけれど、昔馴染の方はおなつかしいと見えて、めづらしく部屋から出てまゐりました。』

『えゝ、えゝ。』と隱居はおまんが言ひ終るのを待つて、手持無沙汰らしい樣子をしながら、『耳は遠くなる、覺えは惡くなる。金兵衛さん――わたしもへぼく（弱く）なりましたよ。』

『これでお袋も、古い事なら覺えてゐますが、今の話はさつぱり分りません。』

とおまんは言ひ添へて見せた。

その日、金兵衛は吉左衛門が伜の半藏も見ず仕舞に、本陣の門を出た。田舍にめづらしく學問好きな半藏はせつせと自

分の支度を急いでゐるやうな人であつたが、いざと言へば父の名代として、福島あたりへも出張する程の年頃になつて來てゐる。それに、高遠の藩士を實父に持つほどの婦人だけあつて、盜賊の話ぐらゐには驚かないおまんもゐる。吉左衞門の留守宅もまづ〳〵無事であつた。

三十年一日のやうに驛路の世話をして來た金兵衞に取つて、何となく周圍にある空氣の重く感ぜられて來たことは、その嘉永年代の末に始まつたことでもない。過ぐる十五年は彼自身の生活を變へたばかりでなく、彼の周圍にある人達の生活をも變へた。木曾街道そのものすら變りつゝあつた。ちやうど村では、旅人相手のかたはら、いそがしい百姓の仕事を濟まして、一ト息入れてゐるやうな時であつた。小草山の口明けは疾くに過ぎ去り、大根蒔きの季節も過ぎ、田の草取りも濟み、麻引きにはやゝ遲く、手廻しのいゝ家では既に新茶の一番干しを終つた頃である。そこいらの筵の上にひろげられたものから、焙爐に匂ふ若葉の香まで、この街道の混雜しない時を語つて見せてゐないものはない。金兵衞は自分でも息を吐くつもりで、本陣の隣に造り酒屋をしてゐる伏見屋の自宅の方に戻つた。

三

清酒あり。それを表看板の文字にあらはさないで、金兵衞の家では古風な杉の葉の束であらはしてある。その杉の葉の束は毬の形に丸く大きく造つて、街道に向いた軒先に懸けてある。

金兵衞は後妻のお玉を相手に、店座敷の格子先に新しい暖簾を掛けたところにゐて寛いだ。

「今、本陣へもお寄り申して來た。あの隱居さんが急にふけてしまつたには驚いた。髮なぞはお前、眞白さ。年をとつて連合に死別れると、あゝいふものかなあ。」

隣家の隠居の噂は、舊い話を引き出した。高遠から來た本陣のおまんよりも後れて、お玉は美濃の大井から金兵衛の後妻として來た人である。

『もう二昔の餘にもなる。』と金兵衛は言つた。『あの本陣の隠居さんの顔を見ると、亡くなつたお袖さんのことを思ひ出す。お袖さんは家付きの娘、吉左衛門さんはその養子に來た人だからね。俺はこの隣にゐてよく知つてゐるが、あの半藏さんを生むと間もなくお袖さんは亡くなつた。それがあの人の三十二の歳さ。そりやお前、今のおまんさんに比べるとお袖さんの方は木曾第一と言はれたくらゐの美しい人だつたからね。』

お玉はこの話を聞いてゐたが、何か思ひ出したやうに肥つた肩をゆすつて、

『わたしは、お袖さんといふ人は知らない。』

『でも、ひどいものぢやないか。吉左衛門さんも二度目なら、俺のところでも二度目だ。』

今更のやうに金兵衛はそんなことを言ひ出した。五十を過ぎて夫婦の情愛に、最初の結婚生活を比べて見て、つくぐ身世の推移に想ひ當つたやうに。

『ひどいものゝやうなことだ。』

とお玉はそこへ笑ひ轉げた。

『そこだよ、俺の話は。』と金兵衛は言葉をついで『まあ、吉左衛門さんのやうに、本陣のやうなところへ養子に來たと思ひな。そこの家付きの娘に、頭があがらなくて出來た子供と、自分で貰つた後の人に出來た子供と、どつちがお前、可愛いと思ふ。』

『知りませんよ。』

金兵衛が噂してゐる隣家の半藏は吉左衛門が先妻の子、上の伏見屋のお喜佐は今のおまんの實の娘にあたる。言はゞ二

人は腹ちがひの兄妹である。お玉は、その時、金兵衛に言つた。
『さう言へば、お喜佐さんの噂は本陣で出ませんでしたか。』
『なんにも。』
『こないだの晩、本陣へお風呂を呼ばれに行きましたら、おまんさんからその話でしたよ。お喜佐にも困つたものです――どうもあれは夫婦喧嘩の味を覺えたらしい――なんて。』
これには金兵衛もすこし眉をひそめた。美濃の方の親戚から迎へた仙十郎を婿養子とし、お喜佐をその若い妻として、上の伏見屋を持たせてから、まだそれほどの年月も經つてゐない。
『まあ、わたしに言はせると、お喜佐さんもすこし疑ひ深いかと思ひますよ。あれはいつのことでしたつけ。わたしが仙十郎さんの羽織のほころびを縫つてあげたことがあるんです。見ると袖のほころびが切れてゐる。その羽織が脱ぎちらしてある。わたしはそれを縫つて、默つて元のところに置いてあげました。男のことだから、仙十郎さんは何も氣がつかずに、上の伏見屋へ歸つたといふものです。お喜佐さんの言草がいゝぢやありませんか。――このほころびは誰に縫つて貰つた――よつぽど心易い女の人でなくつちや、こんなに縫つて見れない」ですとさ。わたしは後でその話を聞いて、反つて氣の毒なことをした、とさう思ひましたよ。お喜佐さんはさういふ人なんですもの。』
お玉の話も、金兵衛はたゞ聞いて置く程度にとゞめて、そんな若いもの同志の夫婦喧嘩ぐらゐは氣に掛けなかつた。
この金兵衛には一人の祕藏子息がある。鶴松といふ名で、數へ年十一になる。お玉を母親とする鶴松は、金兵衛が四十七歳の頃に出來た掛け替えのない一粒種でもある。もともと金兵衛のつもりでは、上の伏見屋を再興し、そこに養子仙十郎を迎へ、兄の名跡を繼がせることにしたといふのも、行く行くは自分の片腕と頼みたいばかりでなく、鶴松の相談相手にもと考へたからで。何一つ不自由のない金兵衛の跡繼はまた、世にも弱く生れついて來た子供の一人であつた。

ちやうど店先へは、飯田の呉服屋が去年の秋の祭の頃の買物代を受取りに來た。一分二朱の拂ひを濟まして見ると、釣錢が五十二文ばかり來た。金兵衛はその勘定を濟ました後で、またお玉のゐるところへ來て言つた。

『例の一件はどうしたものかなあ。』

この『例の一件』とは本陣への入學のことを指す。半藏に就いて學びたい、もし許されるなら明日からでも隣家へ通ひたい、その願ひを鶴松は子供心にも叶へさせて欲しいと言ひ出すやうになつた。鶴松も家で手習ひする『庭訓往來』や『商賣往來』では滿足しない年頃になつて來てゐた。

翌日、名古屋の升丸といふ店へ頼んで置いた刀拵へ、それに鶴松のために注文した秋の祭の狂言の大小、その二品が金兵衛のもとに屆いた。

『お玉、鶴の刀が出來て來たぜ。これさへあれば、あの子にはどんな狂言でもさせられる。』

吾が兒に村の舞臺を踏ませる折のことを想像して、金兵衛はその樂しい考へをお玉にまで分けやうとした。

『俺はこんな馬鹿な男だ。』

とまた金兵衛は言つて、子供用の大小を抱きながら店座敷のなかをあちこちと歩いた。造り酒屋の伏見屋では、ちやうど三番火入を終つた頃である。金兵衛は酒藏の見廻りをも忘れてはならなかつた。その足で、店先から嫁達の側の土間を通つて、ちよつと裏庭の方へ歩きに出た。

金兵衛も古い心の調子でゐる時であつた。百姓は分別もなく末の考へもないものとされ、日常生活の末までもあらゆる干渉を加へられ、その人格なぞは初めからお話にならないものとされて來た封建時代の空氣の中で、宿役人としての彼は

次第にその新しい位置を築きあげた。五十七歳を迎へる頃の彼は最早福島あたりの役人から輕く使はれる器械のやうな人間ではなかつた。當時は福島の役所に納める租税、附加税もまだ金納とたつてゐない。村方で役錢する本途見取何程、小物成何程と言つた頃に、御傳馬宿の入用から夫食代の返納まで、成るべく村民の利益を考へて年貢米の皆濟目錄を作る吉左衛門が相談相手となるのも彼であつた。彼が關係してる村方の仕事も多く順調に進みつゝあつた時だ。

「ほんとに、これであの鶴さへ弱くなかつたなら。」

その考へは、酒藏を見廻りに歩く間でも、金兵衛から離れなかつた。

お玉は火の氣のない爐邊にゐて、中津川から見えた吳服屋の手代を相手に、夫の戻つて來るのを待つた。そこへ金兵衛も一緒になつて、鶴松の夏着にと、男の兒に似合ひそうな反物を見立てた。涼しさうな帷子一枚。それに紺地の飛白。金兵衛夫婦は子供のために求めた藍の香のするやうな反物を店座敷の格子先にまで持つて行つて、二人でその縞柄も好ましく手觸りもさはやかなやつを新しい簾のかげの明るいところで見た。

「時に、例の一件はどうする。」と金兵衛は言ひ出した。

「あんなに鶴も本陣へあがりたがつてるんですもの。」とお玉も受けて、「桝田屋の子もあがると言ふもんですから、餘計にあれもさう思ふんでせう。まあ、半藏さんがお師匠さまなら、わたしはあの子のためにも好からうと思ひますよ。」

「相談は、そこだテ。」

「でも、あなたはあの半藏さんをほめてるぢやありませんか。お隣の吉左衛門さんも好い子息を持つたものだなんて、日頃あなたはさう言つてるぢやありませんか。」

「それはお前に言はれるまでもない。半藏さんはまだ、ことし二十三にしかならない。あの若さで、お前、この界隈にあれほど學問の出來る人はないといふ評判だ。そりや中津川の寛齋先生だつてさう言つてる。寛齋先生は半藏さんの師匠さ。」

その人が半藏さんには驚いてるくらゐだもの。』

『そんなら、あなた、強い、ぢやありませんか。』

『まあ、俺の話を聞けよ。俺もこの隣家に住んで、あの人のごく幼少い頃からのことを知つてるが、もう十六ぐらゐの時分に大概の本は讀んでしまつたといふよ。なんでも一度『うゝん』といふ唸り聲を出して、あをのけさまに後方へ倒れたことがあるさうだ。學問に凝ると、そんなになるものかねえ。吉左衛門さんが驚いて見に行くと、眞白な顔をしてゐたといふ話さ。その時、吉左衛門さんも思ひついて、あの半藏さんを一つぶん擲つて見たさうだ。「お前のやうに本が好きだつて、それではまるで學問に縛られてるやうなものだ」――さう言つたさうだ。それから半藏さんも思ひ直したと見える。俺はまだあの本陣の親子が三河の方へ旅に出掛けたことを覺えてる。あの時だつて吉左衛門さんは心配して、自分の子は氣でも違うんぢやないか、こんなことで馬籠の本陣の後が繼げるかと思つたさうだ。ちやうど年の暮のいそがしい時分に、吉左衛門さんは會所へも顔も見せず、自分の子は病氣だからと言つて、しばらく引籠つてゐたこともある。豐川稻荷の參詣をかねて、半藏さんを連れ出したのも、あの時の旅さ。御覧な、半藏さんはお前、さういふ人だ。でも、半藏さんには、それだけ無理のきく體軀がある。』

金兵衛の口振りには、眞實吾が兒をいたはらうとする心持が籠つてゐた。お玉もさういふ夫の顔を眺めながら、

『そりや、わたしだつて、あの子の弱いぐらゐは思はないぢやありません。』

『さうかと言つて、俺は本陣にケチをつけるつもりはない。お隣の子息を惡く言ふやうな、そんな金兵衛だと思はれても困る。どうして、半藏さんは繼母にもよく仕へたものさ。なか〳〵親孝行な子だ。今の隱居の連合が半六さんだが、あのおぢいさんの亡くなる前だつて、よく看病してあげたものだ。側にゐて、夜もろく〳〵眠らないくらゐに。その半藏さんのおかげで、扇屋の子息も同じやうに自分の家のお婆さんを看病してあげる。笹屋の子息も同じやうに。そりや、お前、

木曾で死ぬなら馬籠で死にたいなんて、そんな村の評判までたてられたこともあつたくらゐさ。好かれたものさな。どうして、俺は決しておの半藏さんを惡く言つてるんぢやない。」

「分りますよ。」

「今、この村に讀書の出來るものは幾人もない。それを思ふと、自分の子供には學問させて置きたいな。本陣へあげたいのは俺だつて山々さ。一體なら、もつと早く本讀みにあげるところだ。一昨々年の春あたりから、俺はもうその事を考へないでもなかつた。あの子が弱いばつかりに、お前、今まで引き留め引き留めして來た。八つの歳の學文始めも吾家で間に合はせて置いたなんて、俺の本意ではなかつたのさ。」

それぎり金兵衛は口をつぐんで、あちこちと店座敷の中を歩いた。夕立でも持つた雲が石を載せた板屋根の上を急ぐと見えて、そこいらはにはかに暗くなつたり明るくなつたりする。お玉は十一になる子供の母親とも見えないみづみづしさで、風を感じる簾のかげに街道の靜かな時を樂んでゐた。そのうちに、涼しい雨が格子の外へ來た。

一本の傘の中に二人で這入りながら、仙十郎と鶴松とが屋外から伏見屋の門口へ馳け込んで來た。俄か雨となると、溢れる雨水が石垣の多い坂になつた町を流れる。やがて若い人達は店座敷に集まつて、金兵衛夫婦が談話の仲間に入つた。

「今、桝田屋の表で、おもしろい人を見て來た。」と言ひ出すのは鶴松だ。「子供はみんなお出なんて、そんなことを言つて、往來の眞ん中で芝居の眞似さ。あれはお酒に醉つぱらつてるんだよ。」

その醉漢は善光寺仁王門の建立のことで、觀化の依賴に來た榊村のものであつた。この街道へはよくさういふ男が入り込む。そして奉加帳などを持ち廻る。

『ねえ、鶴さん、あの醉つぱらひの忠臣藏には弱つたねえ。』と仙十郎も笑つた。

『何でも一人でやる。』

『それさ。定九郎から與市兵衞に早替りだ。獨り舞臺だ。』

『雨が降つて來ても、まだやつてる。仙さんとわたしは、もう少しでびしよ濡れになるところ。桝田屋のおばさんが傘を貸して下すつた。』

『さう言へば、鶴、お前の留守に好い物が來てゐるよ。』とお玉は二人の話を引取つて『まあ、當て丶御覽。お前が當てたら、出してあげる。』

『何サ。』

といふ鶴松はあたりを見廻して、子供用の大小を見つけた。

『や、これは本物だぞ。脇差までついてる。』

と言ひ添へる仙十郎の言葉も子供の心をよろこばせた。

金兵衞は何がなしに込み上げて來るうれしさを制へ切れないといふ風で、快活な聲を出して笑つて、若竹のやうに成長して來た自分の子供を仙十郎に見比べた。鶴松は昔風に、まだ八つ口のあいた着物を着て、守り袋を腰にさげてゐるほどの年頃だ。この鶴松の側に仙十郎を置いて見ると、二人は義理ある從兄弟同志と言ふよりも、ずつと年のちがつた兄弟のやうに見える。その時、鶴松は父がつくつて呉れた大小を腰に差し、さも得意らしく兩手を振つて、大股に部屋の内を歩きながら、

『さあ、どんなもんだい。』

と誰かの口吻を眞似て見せた。

「ヨウ〳〵。」

仙十郎は手を打つて、笑つた。その笑ひ聲は、物に誘はれ易い上の伏見屋の若主人をそこへさらけ出しにした。

「鶴、刀はそこに置いて、こないだのお草紙を仙さんに出して來てお見せ。」

さういふ金兵衞は自分で手本をつくつて、それを吾が兒に與へるほどあつて、なか〳〵筆も達者に、お家流をよく書いた。金兵衞はまた仙十郎の方を見ながら、

「鶴も俺に似たと見えて、あれで手習は好きだよ。あれが九つになる時分のことさ。まあ、紙にむかつて、いろはのはの字を書いたと思ひなさい。子供といふものはおもしろいもので、その右の方をどこで曲げていゝか、それが分らない。そのはの字さ。上から引いて來た棒をどこまでゞも引いて行く。俺が側に附いて見てゐて、そこだと一つ聲を掛けてやる。よいしよ――はの字が出來たねえ。そんな子供だつたんだよ。驚くぢやないか、その鶴がお前、もうあんなに大きくなつたんだもの――」話が盡きなかつた。

俄か雨が通り過ぎた頃には、鶴松は部屋の内にぢつとしてゐなかつた。ぷいとどこかへ飛び出して行つた。この鶴松は本陣入學のことを母親にせがんでも、父の前には言ひ出しかねてゐるやうな子だ。いつでも金兵衞の我を折らせ、子の言ふことを聞かなければ成らないやうに思はせるのも、見るからに細く弱々しいその首筋と、子供らしいその額つきと、そして可憐なその前髮とだ。

金兵衞は結局吾が兒の願ひを容れずにゐられないやうな、いつもと同じ彼自身を妻のお玉の側に見出すやうになつて行つた。吉日を選んで、本陣へ鶴松をあげやうと考へて見るやうになり、もし枡田屋の子供の入學が事實なら、土産として、餅米の三斗に小豆の五升ぐらゐは二軒の家で心掛け、それに熨斗でも添へて贈らねばなるまいとも考へるやうに成つた。

本陣への入學は、可愛い子供の願ひであるばかりでなく、學問の師匠と賴むべき人もまたこの村には年若な半藏以外に見

出せなかつたからで。

四

七月に入つて、吉左衛門は福島の用事を濟まして出張先から引取つて來た。その用向きは、前の年の秋に、福島藩の勘定所から依賴のあつた仕法立ての件で馬籠の宿としては金百兩の調達を引き請け、暮に五十兩の無盡を取り立て、その金は福島の方へ廻し、二番口も敷金にして、首尾よく無盡も終會になつたところで、都合全部の上納を終つたことを屆けて置いてあつた。今度、福島藩からその挨拶があつたのだ。

金兵衛は待兼ね顏に、無事で歸つて來たこの吉左衛門を自分の家の店座敷に迎へた。吉左衛門は福島藩から受取つて來たものを風呂敷包の中から取出して、

『さあ、これだ。』

と金兵衛の前に置いた。村の宿役人仲間へ料紙一束づゝ、無盡の加入者一同への酒肴料、まだその外に、二巾の縮緬の風呂敷が二枚あつた。それは金兵衛と桝田屋の儀助の二人が特に多くの金高を引受けたといふので、その禮の意味のものだ。

吉左衛門の報告はそれだけに留まらなかつた。最後に、一通の書付をもそこへ取出して見せた。

『其方儀、御勝手御仕法立てに就き、頼母子講御世話方格別に存じ入り、小前の諭し方も行屆き、その上、自身にも別段御奉公申し上げ、奇特の事に候。依て、一代苗字帶刀御免なし下され候。その心得あるべきもの也。』

嘉永六年丑六月

三逸作

石團之丞

萩　丈左衛門
同　新五左衛門

青山吉左衛門殿

『ホ。苗字帯刀御免とありますね。』
『まあ、そんなことが書いてある。』
『吉左衛門さん一代限りともありますね。それにしても、これは名譽だ。』
と金兵衛が言ふと、吉左衛門はすこし苦い顔をして、
『これが、せめて十年前だとねえ。』
　兎も角も吉左衛門は役目を果したが、同時に勘定所の役人達がいやな臭気（にほひ）をも嗅（か）いで歸つて來た。苗字帯刀を勘定所の遣繰算段に替へられることは、吉左衛門としてあまり好い心持はしなかつた。
『金兵衛さん、君には察（さつ）して貰へるでせうが、庄屋のつとめも辛（つら）いものだと思つて來ましたよ。』
　吉左衛門の述懐だ。
その時、上の伏見屋の仙十郎が顔を出したので、しばらく二人はこんな話を打ち切つた。仙十郎は金兵衛の仕事を手傳はされてゐるので、ちよつと用事の打合せに來た。金兵衛を叔父と呼び、吉左衛門を義理ある父としてゐるこの仙十郎は、年も半藏より三つほど上で、腰にした煙草入の根附にまで新しい時の流行を見せたやうな若者だ。
『仙十郎、お前も茶でも飲んで行かないか。』
と金兵衛が言つたが、仙十郎は吉左衛門の前に出ると妙に改まつてしまつて、茶も飲まなかつた。何か氣づまりな、おつとしてゐられないやうな風で、やがてそこを出て行つた。

吉左衛門は見送りながら、

「伊十郎さんも、うまくやつて呉れるといゝがなあ。」

この「うまくやつて呉れると」が金兵衛を笑はせた。何事でも金兵衛は笑つてしまはうとした。

「どうもこの節の若い者は、長崎あたりへでも行つて大儲けでもして來るやうなことばかり考へてゐる。こんな山の中で、遠い長崎あたりの夢でも見てゐればいゝのでさ。」

若者への關心にかけては、しかし金兵衛とても吉左衛門に劣らない。黑船來訪以來のあわたゞしさはおろか、それ以前からの周圍の空氣の中にあるものは、若者の目や耳から隱したいことばかりであつた。殺人、盜賊、駈落、男女の情死、諸役人の腐敗沙汰なぞは、この街道でめづらしいことではなくなつた。

同宿三十年――何と言つても吉左衛門と金兵衛とは、その同じ驛路の記憶につながれてゐた。この二人に言はせると、日頃上に立つ人達からやかましく督促せらるゝことは、街道の好い整理である。言葉をかへて言へば、封建社會の「秩序」である。しかしこの「秩序」を亂さうとするものも、さういふ上に立つ人達からであつた。博打は以ての外だといふ。しかし毎年の毛附け(馬市)を賭博場に公開して、土地の繁華を計つてゐるのも福島の役人であつた。袖の下は以ての外だといふ。しかし御肴代の青銅何十匹、御祝儀何百文の獻上金を納めさせることなしに、曾てこの街道を通行したためしのないのも日光への例幣使であつた。人殺しは以ての外だといふ。しかし八澤の長坂の路傍にあたるところで、口論の末から土佐の家中の一人を殺害し、その仲裁に入つた一人の親指を切り落し、この街道で以後の手本を示したのも小池伊勢の家中であつた。女は手形なしには關所をも通さないといふ。しかし木曾路を通る毎に女の乗物を用意させ、見る人が見ればそれが正式な夫人のものでないのも彦根の殿樣であつた。

「あゝ。」と吉左衛門は嘆息して、「世の中はどう成つて行くかと思ふやうだ。あの御勘定所の御役人なぞが御殿樣からの御

言葉だなんて、無盡の世話を頼みに出張して來て、母家の床柱の前にでも座り込まれると、私は[illegible]、金兵衛さん、その御役人の行つてしまつた後では、私はどんな無理なことでも聞かなくちや成らないやうな氣がする――」

警護の武士を先に立てた尾張の家中の一隊が西から街道を進んで來た。吉左衛門と金兵衛とは談話半ばに伏見屋を出て、この一隊を迎へるために他の宿役人等とも一緒になつた。尾張の家中は江戸の方へ大筒の鐵砲を運ぶ途中で、馬籠の宿の片側に來て足を休めて行くところであつた。本陣や問屋の前あたりは檜木笠や六尺棒なぞで埋められた。騎馬から降りて休息する武士もあつた。肌脱ぎになつて背中に流れる汗をふく人足達もあつた。よくあの重いものを舁ぎ上げて、美濃境の十曲峠を越えることが出來たと、人々はその話で持ち切つた。吉左衛門はじめ、金兵衛等はこの勞苦をねぎらひ、問屋の九太夫はまた桝田屋の儀助等と共にその間を奔り廻つて、隣宿妻籠までの繼立てのことを斡旋した。

村の人達は皆、街道に出て見た。その中に半藏もゐた。彼は父の吉左衛門に似て背も高く、青々とした月代も男らしく眼につく若者である。ちやうど暑さの見舞に村へ來てゐた中津川の醫者と連立つて、通行の邪魔にならないところに立つた。この醫者が宮川寛齋だ。半藏の舊い師匠だ。その時、半藏は無言。寛齋も無言で、たゞ醫者らしく頭を圓めた寛齋の胸のあたりに、手にした扇だけが僅かに動いてゐた。

『半藏さん。』

上の伏見屋の仙十郎もそこへ來て、考へ深い眼付をしてゐる半藏の側に立つた。目方百十五六貫ばかりの大筒の鐵砲、この人足二十二人掛り、それに七人掛りから十人掛りまでの大筒五挺、都合六挺が、やがて村の人々の眼の前を動いて行つた。こんなに諸藩から江戸の邸へ向けて大砲を運ぶことも、その日までなかつたことだ。

間もなく尾張の家中衆は見えなかつた。しかし、不思議な沈默が殘つた。その沈默は、何が江戸の方に起つてゐるか知れないやうな、そんな心持をこの深い山の中にゐるものに起させた。

金兵衛は吉左衛門の袖を引いて言つた。

「いや、お歸り早々、いろ／＼お骨折で。まあ、お陰でお繼立ても濟みました。今夜は御苦勞呼びといふほどでもありませんが、お玉のやつに支度させて置きます。後でお出を願ひませう。そのかはり、吉左衛門さん、御馳走は何もありませんよ。」

酒のさかな。胡瓜もみに青紫蘇。枝豆。到來物の疊みいわし。それに茄子の新漬。飯の時にとろゝ汁。すべてお玉の手料理の物で、金兵衛は夕飯に吉左衛門を招いた。

店座敷も暑苦しいからと、二階を明けひろげて、お玉はそこへ二人の席を設けた。山家風な風呂の用意もお玉の心づくしであつた。招かれて行つた吉左衛門は、一風呂呼ばれた後のさつぱりとした心持で、廣い爐邊の片隅から二階への箱梯子を登つた。黑光りのするほどよく拭き込んであるその箱梯子も伏見屋らしいものだ。西向きの二階の部屋には、金兵衛が先代の遺物と見えて、美濃派の俳人等の寄せ書が灰汁拔けのした表裝にして壁に掛けてある。八人のものが集まつて馬籠風景の八つの眺めを思ひ／＼の句と書の中に取り入れたものである。この俳味のある掛物の前に行つて立つことも、吉左衛門をよろこばせた。

夕飯。お玉は膳を運んで來た。ほんの有り合せの手料理ながら、青みのある新しい野菜で膳の上を涼しく見せてある。やがて酒もはじまつた。

「吉左衛門さん、何もありませんが召上つて下さいな。」とお玉が言つた。「吾家の鶴松も出ましたし、お世話さまでございます。」

『さあ、一杯やつて下さい。』と言つて、金兵衛はお玉を顧みて、「吉左衛門さんはお前、苗字帯刀御免といふことになつたんだよ。今迄の吉左衛門さんとは違ふよ。」

『それはお目出度うございます。』

「いえ。」と吉左衛門は頭をかいて、「苗字帯刀も斯う安賣の時世になつて來ては、それほどありがたくもありません。」

「でも、悪い氣持はしないでせう。」と金兵衛は言つた。「二本さして、青山吉左衛門で通る。どこへ出ても、大威張りだ。」

『まあ、さう言はないで呉れたまへ。それよりか、盃でも頂かうぢやありませんか。』

吉左衛門も酒はいける口であり、それに勸め上手なお玉のお酌で、金兵衛とさしむかひに盃を重ねた。その二階は、曾て翁塚の供養のあつた折に、落合の宗匠崇佐坊まで集まつて、金兵衛が先代の記念のために俳席を開いたところだ。あの宗匠も最早故人だ。さう言へば、吉左衛門や金兵衛の幼馴染で最早この世にゐない人も多い。馬籠の生れで水墨の山水や花果なぞを得意にした畫家の蘭溪もその一人だ。崇佐坊も、蘭溪も、黒船騒ぎなぞは知らずに亡くなつた。

「お玉さんの前ですが。」と吉左衛門は言つた。「かうして御酒でも頂くと、實に一切を忘れますよ。わたしはよく思ひ出す。金兵衛さん、ほら、あのアトリ（獵子鳥）三十羽に、茶漬三杯――。」

『それさ。』と金兵衛も思ひ出したやうに、「わたしも今それを言はうと思つてゐたところさ。」

アトリ三十羽に、茶漬三杯。あれは嘉永二年にあたる。山里では小鳥のおびたゞしく捕れた年で、殊に大平村の方では毎日三千羽づゝものアトリが驚くほど鳥網にかゝると言はれ、この馬籠の宿までたくさん賣りに來るものがあつた。小鳥の名所として土地のものが誇る木曾の山の中でも、あんな年はめつたにあるものでなかつた。仲間のものが集まつて、一

興を催すことにしたのもその時だ。そのアトリ三十羽に、茶漬を三杯食へば、褒美として別に三十羽貰へる。もし又、その三十羽と茶漬三杯食へなかつた時は、あべこべに六十羽差出さなければならないといふ約束だ。場處は蓬萊屋。時刻は七つ時、食ひ手は吉左衛門と金兵衛の二人。食はせる方のものは組頭笹屋の庄兵衛と小笹屋の勝七。それには勝負を見屆けるものもなくてはならぬ。蓬萊屋の新七がその審判官を引受けた。さて、食つた。約束の通り、一人で三十羽、茶漬三杯、殘らず食ひ終つて、褒美の三十羽づゝは吉左衛門と金兵衛とで貰つた。アトリは形もちひさく、骨も柔く、鶫のやうな小鳥とは譯が違ふ。それでもなか〳〵食ひではあつたが、二人とも腹もはらないで、その足で會所の店座敷へ押し掛けて澤川茶を飲んだ。その時の二人の年齡もまた忘れられずにある。吉左衛門は五十一歲を、金兵衛は五十三歲を迎へた頃であつた。二人はそれほど盛んな食慾を競ひ合つたものだ。

「あんな面白いことはなかつた。」

「いや、大笑ひにも、なんにも。あんな面白いことは前代未聞さ。」

「出ましたね、金兵衛さんの前代未聞が――」

こんな話も酒の上を樂しくした。隣人同志でもあり、宿役人同志でもある二人の友達は、しばらく街道から離れる思ひで。盡きない夜咄に、とろゝ汁に、夏の夜のふけ易いことも忘れてゐた。

五

馬籠の宿で初めて酒を造つたのは、伏見屋でなくて、桝田屋であつた。そこの初代と二代目の主人、惣右衛門親子のものであつた。桝田屋の親子が協力して水の量目を計つたところ、下坂川で四百六十目、桝田屋の井戸で四百八十目、伏見屋の井戸で四百九十目あつたといふ。その中で下坂川の水を汲んで、惣右衛門親子は初めて造り酒の試みに成功した。馬籠

の水でも良い酒の出來ることを實際に示したのも、親子二人のものであつた。それまで馬籠には造り酒屋といふものがなかつた。

この惣右衛門親子は、村の百姓の中から身を起して無遠慮に頭を持ちあげた人達であるばかりでなく、後の金兵衛等のためにも好かれ悪しかれ一つの進路を切り開いた最初の人達である。桝田屋の初代が伏見屋から一軒置いて上隣りの街道に添うた位置に大きな家を新築したのは、寶暦七年の昔で、その頃に初代が六十五歳、二代目が二十五歳であつた。親代々からの百姓であつた初代惣右衛門が本家の梅屋から分れて、別に自分の道を踏み出したのは、それより更に四十年も以前のことにあたる。

馬籠は田畠の間にすら大きくあらはれた石塊を見るやうな地方で、古くから生活も容易でないとされた山村である。初代惣右衛門はこの村に生れて、十八歳の時から親の名跡を繼ぎ、岩石の間をも厭はず百姓の仕事を勵んだ。家は代々の年寄役でもあつたので、若輩ながらにその役をも勤めた。旅人相手の街道に目をつけて、旅籠屋の新築を思ひ立つたのは、この初代が二十八九の頃にあたる。その頃の馬籠は、一分か二分の金を借りるにも、隣宿の妻籠か美濃の中津川まで出かければならなかつた。師走も押し詰まつた頃になると、中津川の備前屋の親仁が十日あまりも馬籠へ來て泊つてゐて、町中へ小貸しなどした。その金で漸く村のものが年を越したくらゐの土地柄であつた。

四人の子供を控へた初代惣右衛門夫婦の小歴史は、馬籠のやうな困窮な村にあつて激しい生活苦と闘つた人達の歴史である。百姓の仕事とする朝草も、春先青草を見かける時分から九月十月の霜をつかむまで毎朝二度づつは刈り、晝は人並に台所の役を勤め、晩は宿泊の旅人を第一にして、その間に少しづつの米商ひもした。おゑさん（内儀）はまたおゑさんで、内職に豆腐屋をして、三四人の幼いものを控へながら夜通し石臼をひいた。新宅の旅籠屋も出來あがつた頃は、普請の折に出た木の片を燃して、それを油火に替へ、夜番の行燈を軒先へかゝげるにも毎朝夜明け前に下掃除を濟まし、同じ布

興を催すことにしたのもその時だ。そのアトリ三十羽に、茶漬を三杯食へば、褒美として別に三十羽貰へる。もし又、その三十羽と茶漬三杯食へなかつた時は、あべこべに六十羽差出さなければならないといふ約束だ。場處は蓬萊屋。時刻は七つ時。食ひ手は吉左衞門と金兵衞の二人。食はせる方のものは組頭笹屋の庄兵衞と小笹屋の勝七。それには勝負を見屆けるものもなくてはならぬ。蓬萊屋の新七がその審判官を引受けた。さて、食つた。約束の通り、一人で三十羽、茶漬三杯、殘らず食ひ終つて、褒美の三十羽づゝは吉左衞門と金兵衞とで貰つた。アトリは形もちひさく、骨も柔く、鶫のやうな小鳥とは譯が違ふ。それでもなか／＼食ひではあつたが、二人とも腹もはらないで、その足で會所の店座敷へ押し掛けて澤山茶を飲んだ。その時の二人の年齢もまた忘れられずにある。吉左衞門は五十一歳を、金兵衞は五十三歳を迎へた頃であつた。二人はそれほど盛んな食慾を競ひ合つたものだ。

「あんな面白いことはなかつた。」

「いや、大笑ひにも、なんにも。あんな面白いことは前代未聞さ。」

「出ましたね、金兵衞さんの前代未聞が――」

こんな話も酒の上を樂しくした。隣人同志でもあり、宿役人同志でもある二人の友達は、しばらく街道から離れる思ひで。盡きない夜咄に、とろゝ汁に、夏の夜のふけ易いことも忘れてゐた。

五

馬籠の宿で初めて酒を造つたのは、伏見屋でなくて、桝田屋であつた。そこの初代と二代目の主人、惣右衞門親子のものであつた。桝田屋の親子が協力して水の量目を計つたところ、下坂川で四百六十目、桝田屋の井戸で四百八十目、伏見屋の井戸で四百九十目あつたといふ。その中で下坂川の水を汲んで、惣右衞門親子は初めて造り酒の試みに成功した。馬籠

の水でも良い酒の出来ることを實際に示したのも親子二人のものであつた。それまで馬籠には造り酒屋といふものもなかつた。

この惣右衛門親子は、村の百姓の中から身を起して無遠慮に頭を持ちあげた人達であるばかりでなく、後の金兵衛等のためにも好かれ悪しかれ一つの進路を切り開いた最初の人達である。桝田屋の初代が伏見屋から一軒置いて上隣りの街道に添うた位置に大きな家を新築したのは、寶暦七年の昔で、その頃に初代が六十五歳、二代目が二十五歳であつた。親代々からの百姓であつた初代惣右衛門が本家の梅屋から分れて、別に自分の道を踏み出したのは、それより更に四十年も以前のことにあたる。

馬籠は田畠の間にすら大きくあらはれた石塊を見るやうな地方で、古くから生活も容易でないとされた山村である。初代惣右衛門はこの村に生れて、十八歳の時から親の名跡を繼ぎ、岩石の間をも厭はず百姓の仕事を勵んだ。家は代々の年寄役でもあつたので、若輩ながらにその役をも勤めた。旅人相手の街道に目をつけて、旅籠屋の新築を思ひ立つたのは、この初代が二十八九の頃にあたる。その頃の馬籠は、一分か二分の金を借りるにも、隣宿の妻籠か美濃の中津川まで出なければならなかつた。師走も押し詰まつた頃になると、中津川の備前屋の親仁が十日あまりも馬籠へ来て泊つてゐて、町中へ小貸しなどした。その金で漸く村のものが年を越したくらゐの土地柄であつた。

四人の子供を控へた初代惣右衛門夫婦の小歴史は、馬籠のやうな困窮な村にあつて激しい生活苦と闘つた人達の歴史である。百姓の仕事とする朝草も、春先青草を見かける時分から九月十月の霜をつかむまで毎朝二度づゝは刈り、昼は人並に台所の役を勤め、晩は宿泊の旅人を第一にして、その間に少しづゝの米踏ひもした。おかみさん（内儀）はまたおかみさんで、内職に豆腐屋をして、その四人の幼いものを控へながら夜通し石臼をひいた。新宅の旅籠屋も出来あがつた頃は、普請の折に出た木の片を焚して、それを油火に替へ、夜番の行燈を軒先へかゝげるにも毎朝夜明け前に下掃除を済まし、同じ布

で戸障子の敷居などを拭いたのも、そのかみさんだ。貧しさに居る夫婦二人のものは、自分の子供等を路頭に立たせまいとの願ひから、夜一夜ろく／＼安氣に眠つたこともなかつたほど働いた

その頃、本家の梅屋では隣村湯舟澤から來る人足達の宿をしてゐた。その緣故から、初代夫婦は馴染の人足に頼んで、春先の食米三斗づゝ内證で借りうけ、秋米で四斗づゝ返すことにしてゐた。これは田地を仕付けるにも、旅籠屋片手間では芝草の用意もなりかねるところから、麥で少しづゝ苅り造ることに生活の方法を改めたからで。

初代惣右衞門はこんなところから出發した。旅籠屋の營業と、そして骨の折れる耕作と。もと／＼馬籠には他に好い旅籠屋もなかつたから、新宅と言つて泊る旅人も多く、追々と常得意の客もつき、小女まで置き、その奉公人の給金も三分がものは翌年は一兩に增してやれるほどに成つた。飯米一升買の時代の後には、一俵買の時代も來、後には馬で中津川から呼ぶ時代も來た。新宅桝田屋の主人は最早たゞの百姓でもなかつた。旅籠屋營業の外に少しづゝ商賣などもする人であつた。

二代目惣右衞門はこの夫婦の末子として生れた。親から仕來つた百姓は百姓として、惣領にはまだ家の仕事を繼ぐ特權もある。次男三男からはそれも望めなかつた。十三四の頃から草苅奉公に出て、末は雲助にでもなるか。末子と生れたものが成身しても、馬追ひか駕籠かきに極つたものとされたほどの時代である。さういふ中で、二代目惣右衞門は親の側にゐて、物心づく頃から草苅奉公にも出されなかつたといふだけでも、親惣右衞門を德とした。この二代目が又、親の仕事を幾倍かにひろげた。

人も知るやうに、當時の諸大名が農民から收めた年貢米の多くは、大阪の方に輸送されて、金銀に替へられた。大阪は米取引の一大市場であつた。次第に商法も手廣くやる頃の二代目惣右衞門は、大阪の米相場にも無關心ではなかつた人である。彼は又、優に諸大名の千兩無盡にも應じたが、それほど實力を積み蓄へた分限者は木曾谷中にも彼の外にないと言

はれるやうになつた。彼は谷間を征服しようとした親惣右衛門の心を飽くまでも持ちつゞけた。誇るべき傳統もなく、さうかと言つて煩はされ易い過去もなかつた。腕一本で、無造作に進んだ。

天明六年は二代目惣右衛門が五十三歳を迎へた頃である。その頃の彼は、大きな造り酒屋の見世に座つて、自分の子に酒の一番火入などをさせながら、初代在世の頃からの八十年に亙る過去を思ひ出すやうな人であつた。彼は親先祖から讓られた家督財産其他一切のものを天からの預り物と考へよと自分の子に諭へた。彼は金錢を日本の寶の一つと考へよと諭へた。それをみだりに我物と心得て、私川に費さうものなら、いつか「天道」に洩れ聞える時が來るとも諭へた。彼は先代惣右衛門の出發點を忘れさうな子供の末を心配しながら、死んだ。

伏見屋の金兵衛は、この惣右衛門親子の衣鉢を繼いだのである。さういふ金兵衛もまた持ち前の快活さで、家では造り酒屋の外に質屋を兼ね、馬も持ち、田も造り、時には米の賣買にもたづさはり、美濃の久々里九人衆として知られたやうな旗本にまで金を貸した。

六

二人の隣人——吉左衛門と金兵衛とをよく比べて言ふ人に、中津川の寛齋がある。この學問のある川合醫者に言はせると、馬籠は國境だ、おそらく金兵衛にも、あの惣右衛門親子にも、商才に富む美濃人の血が混り合つてゐるのだらう、そこへ行くと吉左衛門は多分に信濃の百姓であると。

吉左衛門が青山の家は馬籠の裏山にある本陣林のやうに古い。木曾谷の西のはづれに初めて馬籠の村を開拓したのも、相州三浦の方から移つて來た青山一族の一人であつた。こゝに一寺を建立して、萬福寺と名づけたのも、これまた同じ人であつた。萬福寺殿昌屋常久禪定門、俗名青山七郎左衛門、隱居しての名を道齋と呼んだ人か、自分で建立した寺の墓地

で戸障子の敷居などを拭いたのも、そのかみさんだ。貧しさに居る夫婦二人のものは、自分の子供等を路頭に立たせまいとの願ひから、夜一夜ろく／＼安氣に眠つたこともなかつたほど働いた

その頃、本家の梅屋では隣村湯舟澤から來る人足達の宿をしてゐた。その緣故から、初代夫婦は馴染の人足に頼んで、春先の食米三斗づゝ內證で借りうけ、秋米で四斗づゝ返すことにしてゐた。これは田地を仕付けるにも、旅籠屋片手間では芝草の用意もなりかねるところから、麥で少しづゝ刈り造ることに生活の方法を改めたからで。

初代惣右衛門はこんなところから出發した。旅籠屋の營業と、そして骨の折れる耕作と。もと／＼馬籠には他に好い旅籠屋もなかつたから、新宅と言つて泊る旅人も多く、追々と常得意の客もつき、小女まで置き、その奉公人の給金も三分がものは翌年は一兩に增してやれるほどに成つた。飯米一升買の時代の後には、一俵買の時代も來、後には馬で中津川から呼ぶ時代も來た。新宅桝田屋の主人は最早たゞの百姓でもなかつた。旅籠屋營業の外に少しづゝ商賣などもする人であつた。

二代目惣右衛門はこの夫婦の末子として生れた。親から仕來つた百姓は百姓として、惣領にはまだ家の仕事を繼ぐ特權もある。次男三男からはそれも望めなかつた。十三四の頃から草刈奉公に出て、末は雲助にでもなるか。末子と生れたものが成身しても、馬追ひか駕籠かきに極つたものとされたほどの時代である。さういふ中で、二代目惣右衛門は親の側にゐて、物心づく頃から草刈奉公にも出されなかつたといふだけでも、親惣右衛門を德とした。この二代目が又、親の仕事を幾倍かにひろげた。

人も知るやうに、當時の諸大名が農民から收めた年貢米の多くは、大阪の方に輸送されて、金銀に替へられた。大阪は米取引の一大市場であつた。次第に商法も手廣くやる頃の二代目惣右衛門は、大阪の米相場にも無斷心ではなかつた人である。彼は又、優に諸大名の千兩無盡にも應じたが、それほど實力を積み蓄へた分限者は木曾谷中にも彼の外にないと言

はねるやうになつた。彼は貧困を征服しようとした親惣右衛門の心を飽くまでも持ちつゞけた。誇るべき伸張もなく、さうかと言つて煩はされ易い過去もなかつた。腕一本で、無造作に進んだ。

天明六年は二代目惣右衛門が五十三歳を迎へた頃である。その頃の彼は、大きな造り酒屋の見世に座つて、自分の子に酒の一番火入などをさせながら、初代在世の頃からの八十年に亘る過去を思ひ出すやうな人であつた。彼は親先祖から譲られた家督財産其他一切のものを天からの預り物と考へよと自分の子に諭へた。彼は金銭を日本の資の一つと考へよと諭へた。それをみだりに我物と心得て、私用に費さうものなら、いつか「天道」に洩れ聞える時が來るとも諭へた。彼は先代惣右衛門の出發點を忘れそうな子供の末を心配しながら、死んだ。

伏見屋の金兵衛は、この惣右衛門親子の衣鉢を繼いだのである。さういふ金兵衛もまた持ち前の快活さで、家では造り酒屋の外に質屋を兼ね、馬も持ち、田も造り、時には米の賣買にもたづさはり、美濃の久々里九人衆として知られたやうな旗本にまで金を貸した。

六

二人の隣人——吉左衛門と金兵衛とをよく比べて言ふ人に、中津川の寛齋がある。この學問のある田舎醫者に言はせると、馬籠は國境だ、おそらく金兵衛にも、あの惣右衛門親子にも、商才に富む美濃人の血が混り合つてゐるのだらう、そこへ行くと吉左衛門は多分に信濃の百姓であると。

吉左衛門が青山の家は馬籠の裏山にある本陣林のやうに古い。木曾谷の西のはづれに初めて馬籠の村を開拓したのも、相州三浦の方から移つて來た青山一族の一人であつた。こゝに一宇を建立して、萬福寺と名づけたのも、これまた同じ人であつた。萬福寺殿昌屋常久禪定門、俗名青山七郎左衛門、隱居しての名を道齋と呼んだ人か、自分で建立した寺の墓地

に眠つたのは、天正十二年の昔にあたる。

「金兵衛さんの家と、俺の家とは違ふ」

と吉左衛門が自分の伜に言つて見せるのも、その家族の歷史を指す。さういふ吉左衛門が青山の家を繼いだ頃は、十六代も連なり續いて來た木曾谷での最も古い家族の一つであつた。

遠い馬籠の昔は委しく知るよしもない。青山家の先祖が木曾に入つたのは、木曾義昌の時代で、おそらく福島の山村氏よりも古い。その後この地方の郷士として馬籠その他數ケ村の代官を勤めたらしい。慶長年代の頃、石田三成が西國の諸侯をかたらつて濃州關ケ原へ出陣の折、徳川台徳院は中山道を登つて關ケ原の方へ向つた。その時の御先立には、山村甚兵衛、馬場半左衛門、千村平右衛門などの諸士を數へる。馬籠の青山庄三郎、又の名重長（青山二代目）もまた、徳川方に味方し、馬籠の砦に籠つて、犬山勢を防いだ。當時犬山城の石川備前は木曾へ討手を差向けたが、木曾の郷士等が皆徳川方の味方をすると聞いて、激しくも戰はないで引き退いた。その後、青山の家では歸農して、代々本陣、庄屋、問屋の三役を兼ねるやうになつたのも、當時の戰功によるものであるといふ。地名として殘つた馬籠の砦には、こんな古い物語もある。

青山家の古い屋敷は、もと石屋の坂を下りた邊にあつた。由緒のある武具馬具なぞは、寛永年代の馬籠の大火に燒けて、二本の鎗だけが殘つた。その屋敷跡には代官屋敷の地名も殘つたが、尾張藩への遠慮から、享保九年の檢地の時以來、代官屋敷の字を石屋に改めたともいふ。その邊は岩石の間で、附近に大きな岩があつたからで。

子供の時分の半藏を前に坐らせて置いて、吉左衛門はよくこんな古い話をして聞かせた。彼はまた、酒の上の機嫌の好い心持なぞから、表玄關の長押の上に掛けてある古い二本の鎗の下へ小伜を連れて行つて、

「御覽、御先祖さまが見てゐるぞ。惡戯するとこわいぞ。」

と戯れた。

隣家の伏見屋などにない古い傳統が年若な半藏の頭に深く刻みつけられたのは、幼い頃から聞いたこの父の炉邊話からで。自分の倅に先祖のことでも語り聞かせるとなると、吉左衛門の眼はまた特別に輝いたものだ。

『代官造りといふ言葉は、地名で殘つてゐる。吾家の先祖が代官を勤めた時分に、田地を手造りにした場所だといふので、それで代官造りさ。今の町田がそれさ。その時分には、毎年五月に村中の百姓を殘らず集めて植付をした。その日に吾家から酒を一斗出した。醉つて田圃の中に倒れるものがあれば、その年は豐年としたものだそうだ。』

この話もよく出た。

吉左衛門の代になつても、本陣へ出入りの百姓の家は幾軒かある。その多くは主従の關係に近い。吉左衛門が隣家の金兵衛とも違つて、村中の百姓を殆んど自分の子のやうに考へてゐるのも、由來する源は遠かつた。

七

七月の二十六日には、江戸からの穩便が十三代將軍徳川家慶の薨去を傳へた。道中奉行から、普請鳴物類一切停止の觸れも出た。この街道筋では中津川の祭禮のある頃に當つたが、狂言も稽古ぎりで、興行なしに謹愼の意を表することになつた。

『復、黒船ですぞ。』

問屋九太夫のこのさゝやきが、吉左衛門をも金兵衛をも驚かしたのは、それから僅かに三日過ぎのことであつた。

『一體、けふは幾日です。七月の二十九日ぢやありませんか。公儀の御穩便が見えてから、まだ三日にしかならない。』

と言つて吉左衛門は金兵衛と顔を見合はせた。長崎へ着いたといふその唐人船が、亞米利加の船ではなくて、他の異國の

船だといふ噂もあるが、それさへこの山の中では判然しなかつた。多くの人は、先に相州浦賀の沖合へあらはれたと同じ唐人船だとした。

『長崎の方がまた大變な騷動だそうですよ。』

と金兵衛は言つたが、俄かに長崎奉行の通行があるといふだけで、先荷物を運んで來る人達の話はまちまちであつた。奉行は道筋を急いでゐるとのことで、道割もいろいろに變つて來るので、宿場宿場では繼立てに難澁した。八月の一日には、この街道では江戸方面から進んで來る新任の長崎奉行水野筑後の一行を迎へた。

ちやうど、吉左衛門が裃を着けに、大急ぎで自分の家へ歸つた時のことだ。妻のおまんは刀に脇差なぞをそこへ取出して來て勸めた。

『いや、馬籠の驛長で、俺は澤山だ。』

と吉左衛門は言つて、晴れて着せる大小も身に着けようとしなかつた。今迄通りの丸腰で、着慣れた定紋付の麻裃だけに滿足して、やがて奉行の送り迎へに出た。

諸大名が通過の時の慣例のやうに、吉左衛門は長崎奉行の駕籠に近く挨拶に行つた。旅を急ぐ奉行は乘物からも降りなかつた。本陣の前に駕籠を停めさせてのほんの御小休であつた。料紙を載せた三寶なぞがそこへ持ち運ばれた。その時、吉左衛門は輕く袴の股立を取り、駕籠の側に跪いて、言葉も簡單に、

『問屋、お目通りを願ひます。』

と聲を掛けた。

『おゝ、問屋か。』

奉行の挨拶だ。斯ういふ場合の吉左衛門は馬籠の問屋としてで、九太夫とかはるがはるその役を勤めてゐた。

水野筑後は四百石の知行といふことであるが、特にその旅は十萬石の格式で、重大な任務を帶びた上に遠く西へと通り過ぎた。

街道は暮れて行つた。會所に集まつた金兵衛はじめ、その他の宿役人もそれぞれ家の方へ歸つて行つた。隣宿落合まで荷をつけて行つた馬方なぞも、長崎奉行の一行を見送つた後で、ぽつぽつ馬を引いて戻つて來る頃だ。子供等は街道に集まつてゐた。夕空に飛びかふ蝙蝠の群を追ひ廻しながら、遊び戯れてゐるのもその子供等だ。山の中のことで、夜鷹も啼き出す。往來一つ隔てて本陣とむかひ合つた梅屋の門口には、夜番の軒行燈の燈火もついた。一日の勤めを終つた吉左衛門は、しばらく自分の家の外に出て、山の空氣を吸つてゐた。やがておまんが二人の下女を相手に働いてゐる爐邊の方へ引返して行つた。

「半藏は。」

と吉左衛門はおまんにたづねた。

『今、今、仙十郎さんと二人でここに話してゐましたよ。あなた、異人の船がまたやつて來たといふぢやありませんか。仙十郎さんは誰に聞いて來たんですか、オロシヤの船だと言ふ。半藏はアメリカの船だと言ふ。オロシヤだ、いやアメリカだ、そんなことを言ひ合つて、また二人で屋外へ出て行きましたよ。』

「長崎あたりのことは、てんで樣子が分らない——なにしろ、けふは俺も草臥れた。」

山家らしい風呂と、質素な夕飯とが、この吉左衛門を待つてゐた。ちやうど、その八月朔日は吉左衛門が生れた日にも當つてゐた。誰しもその日となるといろいろ思ひ出すことが多いやうに、吉左衛門もまた長い驛路の經驗を胸に浮べた。

雨にも風にもこの交通の要路を引き受け、旅人の安全を第一に心掛けて、馬方、牛方、人足の世話から、道路の修繕、助郷の掛合まで、街道一切の面倒を見て來たその心づかひは言葉にも盡せないものがあつた。

吉左衛門は爐邊にゐて、妻のおまんが温めて出した一二本の銚子と、到來物の鮎の鹽燒とで、自分の五十五歳を祝はうとした。彼はおまんに言つた。

『けふの長崎奉行には俺も感心したねえ。水野筑後の守――あの人は四百石の知行取りだそうだが、けふの御通行は十萬石の格式だぜ。非常な昇進さね。』

『四百石と言へばあなた、士分としても、まあ中以下のところですに――そりや潘にもよりますけれど。』

『だらう。その人が一足飛びに十萬石なんて、今まで聞いたこともない。福島の旦那様だつて一萬六千石ぐらゐだからねえ。それだけでも德川の代は變つて來たやうな氣がする。そりや泰平無事な日なら、いくら無能のものでも上に立つ御武家様で威張つてゐられる。一旦、事ある場合に際會して御覧――』

『なにしろあなた、この唐人船の騒ぎですもの。』

『斯ういふ時世になつて來たのかなあ。』

寛ぎの間と名づけてあるのは、一方はこの爐邊につづき、一方は廣い仲の間につづいてゐる。吉左衛門が自分の部屋として臥起きをしてゐるのもその寛ぎの間だ。そこへも行つて周圍を見廻しながら、

『しかし、御苦勞、御苦勞。』

と吉左衛門は繰りかへした。おまんはそれを聞きとがめて、

『あなたは誰に言つていらつしやるの。』

『俺か。誰も御苦勞とも言つて呉れるものがないから、俺は自分で自分に言つてるところさ。』

おまんは苦笑ひした。吉左衛門は言葉をついで、

『でも、世の中は妙なものぢやないか。福島の旦那様のために、無盡の御世話もしておいたれば、苗字帯刀御免といふことになる。三十年この街道の世話をしても、誰も御苦勞とも言ひ手がない。この俺に取つては、眼に見えない街道の世話の方が何程骨が折れたか知れないがなあ。』

そこまで行くと、それから先には言葉がなかつた。

馬籠の驛長としての吉左衛門は、これまでに何程の人を送つたり迎へたりしたか知れない。彼も殺風景な仕事に齷齪として來たが、すこしは風雅の道を心得てゐた。この街道を通るほどのものは、どんな人でも彼の眼には旅人であつた。

八

遠からず來る半藏の結婚の日のことは、既にしばしば吉左衛門夫婦の話に上る頃であつた。隣宿妻籠の本陣、青山壽平次の妹、お民といふ娘が半藏の未來の妻に選ばれた。この忰の結婚には、吉左衛門も多くの望みをかけてゐた。早くも青年時代にやつて來たやうな濃い憂鬱が半藏を苦めたことを想つて見て、もつと生活を變へさせたいと考へることは、その一つであつた。六十六歳の隱居半六から家督を讓り受けたやうに、吉左衛門自身もまた勤められるだけ本陣の當主を勤めて、後から來るものに代を讓つて行きたいと考へることも、その一つであつた。半藏の結婚は、やがて馬籠の本陣と、妻籠の本陣とを新たに結びつけることになる。二軒の本陣はもと／＼同姓を名乘るばかりでなく、遠い昔は相州三浦の方から來て先づ妻籠に落ち着いた青山監物を父祖とする兄弟關係の間柄でもあると言ひ傳へられてゐる。二人の兄弟は二里ばかりの谷間をへだてて分れ住んだ。兄は妻籠に。弟は馬籠に。何百年來のこの古い關係をもう一度新しくしたい、若い壽平次を半藏の義理ある兄弟と考へて見ることも、その一つであつた。

この緣談には吉左衞門は最初からその話を金兵衞の耳に入れて、相談相手になつて貰つた。吉左衞門が半藏を同道して、親子二人連れで妻籠の本陣を訪ねに行つて來た時のことも、先づその報告をもたらすのは金兵衞の許であつた。ある日、二人は一緒になつて、秋の祭禮までには間に合はせたいといふ舞臺普請の話などから、若い人達の噂に移つて行つた。

『吉左衞門さん、妻籠の御本陣の娘さんはおいくつにお成りでしたつけ。』

『十七さ。』

その時、金兵衞は指を折つて、親指、人差指、中指と、順に一本づゝ繰り數へて見て、

『して見ると、半藏さんとは六つ違ひでおいでなさる。』

好い一對の若夫婦が出來上るであらうといふ風にそれを吉左衞門に言つて見せた。さういふ金兵衞にしても、吉左衞門にしても、二十三歲と十七歲とで結びつく若夫婦をそれほど早いとは考へなかつた。早婚は一般に當り前の事と思はれ、むしろ好い風習とさへ見做されてゐた。當時の木曾谷には、新郎十六歲、新婦は十五歲で行はれるやうな早い結婚もあつて、それすら人は別に怪しみもしなかつた。

『しかし、金兵衞さん、あの半藏のやつがもう祝言だなんて。早いものですね。わたしもこれで、平素はそれほどにも思ひませんが、こんな話が持ち上ると、自分でも年を取つたかと思ひますよ。』

『なにしろ、吉左衞門さんもお大抵ぢやない。あなたのところのお嫁取りなんて、御本陣と御本陣の御婚禮ですからねえ。』

九

『半藏さま――お前さまのところへは、妻籠の御本陣からお嫁さまが來さつせるさうだなし。お前さまも大きくならつ

せいたものだ。』

半藏のところへは、こんなことを言ひに寄る出入りのおふき婆さんもある。おふきは乳母として、幼い時分の半藏の世話をした女だ。まだちひさかつた頃の半藏を抱き、その背中に載せて歩いたりしたのもこの女だ。半藏の縁談が纏まつたことは、本陣へ出入りの百姓の誰にも勝して、この婆さんを悦ばせた。

おふきは又、今の本陣の『姉さま』（おまん）のゐないところで、半藏の側へ來て歯のかけた聲で言つた。

『半藏さま、お前さまは何も知らつせまいが、俺はお前さまのお母さまをよく覺えてゐる。お袖さま――美しい人だつぞなし。あれほどの容色は江戸にもないと言つて、通る旅の衆が評判したくらゐの人だつたぞなし。あのお袖さまが煩つて亡くなつたのは、あれはお前さまを生んでから二十日ばかり過ぎだつたずら。俺はお前さまを抱いて、お母さまの枕もとへ連れて行つたことがある。あれがお別れだつた。三十二の歳の惜しい盛りよなし。それから、お前さまは又、間もなく黄疸を病まつせる。あの時は助かるまいと言はれたくらゐよなし。大旦那（吉左衛門）の御苦勞も一通りぢやあらすか。あのお母さまが今まで達者でゐて、今度のお娵取りの話なぞを聞かつせいたら、どんなだらず――』

半藏も生みの母を想像する年頃に達してゐた。又、一人で兩親を兼ねたやうな父吉左衛門が養育の辛苦を想像する年頃にも達してゐた。しかしこのおふき婆さんを見る度に、多く思ひ出すのは少年の日のことであつた。子供の時分の彼は、あれが好きだつたとか、これが好きだつたとか、そんな食物のことをよく覺えてゐて、木曾の焼米の青いにほひ、蕎麥粉と里芋の子で造る芋焼餅なぞを數へて見せるのも、この婆さんであるから。

山地としての馬籠は森林と岩石との間であるばかりでなく、村の子供等の教育のことなぞにかけては耕されないにも同然であつた。この山の中に生れて、周圍には名を書くことも知らないやうなものの多い村民の間に、半藏は學問好きな少年としての自分を見つけたものである。村にはろくな寺小屋もなかつた。人を化す狐や狸、其他種々な迷信はあたりに暗

く跋扈してゐた。さういふ中で、半藏が人の子を教へることを思ひ立つたのは、まだ彼が未熟な十六歳の頃からである。ちやうど今の隣家の鶴松が枡田屋の子息などと連立つて通つて來るやうに、多い年には十六七人からの子供が彼の許へ讀書習字珠算などの稽古に集まつて來た。峠からも、荒町からも、中のかやからも。時には隣村の湯舟澤、山口からも。年若な半藏は自分を育てようとするばかりでなく、同時に無學な村の子供を教へることから始めたのであつた。

山里にゐて學問することも、この半藏には容易でなかつた。良師のないのが第一の困難であつた。信州上田の人で兒玉政雄といふ醫者が一頃馬籠に來て住んでゐたことがある。その人に『詩經』の句讀を受けたのは、半藏が十一歳の時にあたる。小雅の一章になつて、兒玉は村を去つてしまつて、最早就いて學ぶべき師もなかつた。馬籠の萬福寺には桑園和尚のやうな禪僧もあつたが、教へて倦まない人ではなかつた。十三歳の頃、父吉左衛門に就いて『古文眞寶』の句讀を受けた。當時の半藏はまだそれほど勉强する心があるでもなく、たゞ父の側にゐて習字をしたり寫本をしたりしたに過ぎない。そのうちに自ら奮つて『四書』の集註を讀み、十五歳には『易書』や『春秋』の類にも通じるやうになつた。寒さ、暑さを厭はなかつた獨學の苦心が、それから十六七歳の頃まで續いた。父吉左衛門は和算を伊那の小野村の小野甫邦に學んだ人で、その術には達してゐたから、半藏も算術のことは父から習得した。村には、やれ魚釣りだ碁將棊だと言つて時を送る若者の多かつた中で、半藏獨りはそんな方に眼も呉れず、また話相手の友達もなくて、讀書をそれらの遊戯に代へた。幸ひ一人の學友を美濃の中津川の方に見出したのはその頃からである。蜂谷香藏と言つて、もつと學ぶことを半藏に說き勸めて呉れたのも、この香藏だ。二人の青年の早い友情が結ばれはじめてからは、馬籠と中津川との三里あまりの間を遠しとしなかつた。ちやうど中津川には宮川寛齋がある。寛齋は醫者ではあるが、漢學に達してゐて、また國學にも精しかつた。馬籠の半藏、中津川の香藏——二藏は互に競ひ合つて寛齋の指導を受けた。

『自分は獨學で、そして固陋だ。もとよりこんな山の中にゐて見聞も寡い。どうかして自分のやうなものでも、もつと學

びたい。』

と半藏は考へ考へした。古い青山のやうな家に生れた半藏は、この師に導かれて、國學に心を傾けるやうになつて行つた。二十三歲を迎へた頃の彼は、言葉の世界に見つけた學問の歡びを通して、加茂眞淵、本居宣長、平田篤胤などの諸先輩が遺して置いて行つた大きな仕事を想像するやうな若者であつた。

黑船は、實にこの半藏の前にあらはれて來たのである。

十

その年、嘉永六年の十一月には、半藏が早い結婚の話も妻籠の本陣宛てに結納の品を贈るほど運んだ。最早惠那山へは雪が來た。ある日、おまんは裏の土藏の方へ行かうとした。山家のならはしで、めぼしい器物といふ器物は皆土藏の中に持ち運んである。皿何人前、膳何人前など、箱書したものを出したり入れたりするだけでも、主婦の一役だ。

ちやうど、そこへ會所の使が福島の役所からの差紙を置いて行つた。馬籠の庄屋宛だ。おまんはそれを渡さうとして夫を探した。

『大旦那は。』

と下女にきくと、

『藏の方へお出たぞなし。』

といふ返事だ。おまんはその足で、母屋から勝手口の横手について裏の土藏の前まで歩いて行つた。石段の上には夫の脫いだ下駄もある。戸前の錠もはづしてある。夫も矢張同じ思ひで、婚禮用の器物でも調べてゐるらしい。おまんは半藏の

二階の方にごとごと音のするのを聞きながら梯子を登つて行つて見た。そこに吉左衞門がゐた。

『あなた、福島からお差紙ですよ。』

吉左衞門は僅かの閑の時を見つけて、その二階に片付け物なぞをしてゐた。壁によせて幾つとなく古い本箱の類も積み重ねてある。日頃彼の愛藏する俳書、和漢の書籍なぞもそこに置いてある。その時、彼はおまんから受取つたものを窓に近く持つて行つて讀んで見た。

その差紙には、海岸警衞のため公儀の物入も莫大だとある。國恩を報ずべき時節であると言つて、三都の市中は勿論、諸國の御料所、在方村々まで、めいめい冥加のため上納金を差出せとの江戸からの達しだといふことが書いてある。それには又、浦賀表へアメリカ船四艘、長崎表へオロシヤ船四艘、交易のため渡來したことが斷つてあつて、海岸防禦のためとも書き添へてある。

『これは國恩金の上納を命じてよこしたんだ。』と吉左衞門はおまんに言つて見せた。『外は風雨だと言ふのに、内では祝言の支度だ――しかしこの御差紙の樣子では、俺も一肌脱がずばなるまいよ。』

その時になつて見ると、半藏の祝言を一つのくぎりとして、古い青山の家にもいろいろな動きがあつた。年老いた吉左衞門の養母は祝言のごたごたを避けて、土藏に近い位置にある隱居所の二階に隱れる。新夫婦の居間にと定められた店座敷へは、疊屋も通つて來る。長いこと勤めてゐた下男も暇を取つて行つて、そのかはり佐吉といふ男が今度新たに奉公に來た。

おまんが梯子を降りて行つた後、吉左衞門はまた土藏の明り窓に近く行つた。鐵格子を通して射し入る十一月の光線もあたりを柔かに見せてゐる。彼は獨りで手を揉んで、福島から差紙のあつた國防獻金のことを考へた。徳川幕府あつて以來未だ曾て聞いたこともないやうな、公儀の御金庫が既に空つぽになつてゐるといふ内内の取沙汰なぞが、その時、胸に

浮んだ。昔氣質の彼はそれらの事を思ひ合せて、若者の前でも何でもお構ひなしに目下も大袈裟に叱り廻るやうな人達を憎んだ。そこから子に對する心持をも引き出されて見ると、年もまだ若く心も柔く感じ易い半藏なぞに、今から醜い世を覗かせたくないと考へた。いかなる人間同志の醜い秘密にも、その刺激に堪へられる年頃に達するまでは、ゆつくり支度させたいと考へた。權威はどこまでも權威として、子の前には神聖なものとして置きたいとも考へた。おそらく隣家の金兵衛とても、親としてのその心持に變りはなからう。そんなことを思ひ案じながら、吉左衛門はその藏の二階を降りた。

かねて前觸のあつた長崎行の公儀衆も、やがて中津川泊りで江戸の方角から街道を進んで來るやうになつた。空は晴れても、大雪の來た後であつた。野尻宿の繼所から落合まで通し人足七百五十人の備へを用意させるほどの公儀衆が、さく／＼音のする雪の道を踏んで、長崎へ、長崎へと通り過ぎた。この通行が三日も續いた後には、妻籠の本陣からその同じ街道を通つて、新しい夜具のぎつしり詰まつた長持なぞが吉左衛門の家へ擔ぎ込まれて來た。

吉日として選んだ十二月の一日が來た。金兵衛は朝から本陣へ出掛けて來て、吉左衛門と一緒に客の取持ちをした。臺所でもあり應接間でもある廣い爐邊には、手傳ひとして集まつて來てゐるお玉、お喜佐、おふきなどの笑ひ聲も起つた。仙十郎も改まつた顔付でやつて來た。寛ぎの間と店座敷の間を往つたり來たりして、半藏を退屈させまいとしてゐたのもこの人だ。この取込みの中で、金兵衛はちよつと半藏を見に來て言つた。

「半藏さん、誰か呼びたい人がありますかい。」

「お客にですか。寛齋先生と香藏さんだけを呼んであげたい。」

「それは半藏さん、言ふまでもなし。中津川の御連中は明日といふことにして、もう使が出してありますよ。あの二人は

默つて置いたつて、向ふから祝ひに來て吳れる人達でさ。』

側にゐた仙十郎は、この二人の話を引き取つて、

『俺も――さうだなあ――もう一度祝言の仕直しでもやりたくなつた。』

と笑はせた。

山家にはめづらしい冬で、一度は八寸も街道に積つた雪が大雨のために溶けて行つた。その後には、金兵衞のやうな年配のものが子供の時分から聞き傳へたこともないと言ふほどの暖かさが來てゐた。寒がりの吉左衞門ですら、その日は炬燵や火鉢でなしに、煙草盆の火だけで濟ませるくらゐだ。この陽氣は本陣の慶事を一層樂しく思はせた。

午後に、壽平治兄妹がすでに妻籠の本陣を出發したらうと思はれる頃には、吉左衞門は定紋付の裃姿で、表玄關前の廣い板の間を歩き廻つた。下男の佐吉もぢつとしてゐられないといふ風で、表門を出たり入つたりした。

『佐吉、めづらしい陽氣だなあ。この分ぢや妻籠の方も暖かいだらう。』

『さうよなし。今夜は門の前で篝でも焚かずと思つて、俺は山から木を背負つて來た。』

『かう暖かぢや、篝にも及ぶまいよ。』

『今夜は高張だけにせずか。なし。』

そこへ金兵衞も奧から顏を出して、一緒に妻籠から來る人達の噂をした。

『一昨日の晩でさ。』と金兵衞は言つた。『桝田屋の儀助さんが夜行で福島へ出張したところが、往還の道筋にはすこしも雪がない。茶屋へ寄つて、店先へ腰掛けても、凍へるといふことがない。どうもこれは世間一統の陽氣でせう。あの儀助さんがそんな話をしてゐましたつけ。』

『金兵衞さん――前代未聞の冬ですかね。』

「いや、全く。」

日の暮れる頃には、村の人達は本陣の前の街道に集まつて來て、問屋の格子先あたりから問屋の石垣の邊へかけて黒山を築いた。土地の風習として、花嫁を載せて來た駕籠はいきなり門の内へ入らない。時を移さず出迎へたものが案内にして、壽平治等の一行は先づ門の前で停まつた。提灯の灯に映る一つの駕籠を中央にして、木曾の『なかのりさん』の唄が起つた。荷物をかついで妻籠から供をして來た數人のものが輪を描きながら、唄の節につれて踊りはじめた。手を振り腰を動かす一つの影の次には、また他の影が動いた。この鄙びた舞踏の輪は九度も花嫁の周圍を廻つた。

その晩、盃をすました後の半藏はお民と共に、冬の夜とも思はれないやうな時を送つた。半藏がお民を見るのは、それが初めての時でもない。彼はすでに父と連れ立つて、妻籠にお民の家を訪ねたこともある。この二人の結びつきは當人同志の選擇からではなくて、たゞ父兄の選擇に任せたのであつた。親子の間柄でも、當時は主從の關係に近い。それほど二人は從順であつたが、しかし決して安閑としてはゐなかつた。初めて二人が妻籠の方で顔を見合せた時、すべてをその瞬間に決定してしまつた。長くかかつて見るべきものではなくて、一目に見るべきものであつたのだ。

新座敷は東向きで、戸の外には半藏の好きな松の樹もあつた。新しい青い部屋の壁は、鶯でも啼き出すかと思はれるやうな溫暖い空氣に香つて、夜遊び一つしたことのない半藏の心を逆上せるばかりにした。彼は知らない世界にでも入つて行く思ひで、若さとおそろしさのために震へてゐるやうなお民を自分の側に見つけた。

「お父さん——わたしのためでしたら、祝ひは成るべく質素にして下さい。」

「それはお前に言はれるまでもない。質素は俺も賛成だねえ。でも、本陣には本陣の慣例といふものもある。呼ぶだけの

默つて置いたつて、向ふから祝ひに來て呉れる人達でさ。』

　側にゐた仙十郎は、この二人の話を引き取つて、

『俺も――さうだなあ――もう一度祝言の仕直しでもやりたくなつた。』

と笑はせた。

　山家にはめづらしい冬で、一度は八寸も街道に積つた雪が大雨のために溶けて行つた。その後には、金兵衛のやうな年配のものが子供の時分から聞き傳へたこともないと言ふほどの暖かさが來てゐた。寒がりの吉左衛門ですら、その日は炬燵や火鉢でなしに、煙草盆の火だけで濟ませるくらゐだ。この陽氣は本陣の慶事を一層樂しく思はせた。

　午後に、壽平治兄妹がすでに妻籠の本陣を出發したらうと思はれる頃には、吉左衛門は定紋付の裃姿で、表玄關前の廣い板の間を歩き廻つた。下男の佐吉もぢつとしてゐられないといふ風で、表門を出たり入つたりした。

『佐吉、めづらしい陽氣だなあ。この分ぢや妻籠の方も暖かいだらう。』

『さうよなし。今夜は門の前で篝でも焚かずと思つて、俺は山から木を背負つて來た。』

『かう暖かぢや、篝にも及ぶまいよ。』

『今夜は高張だけにせずか。なし。』

　そこへ金兵衛も奥から顏を出して、一緒に妻籠から來る人達の噂をした。

『一昨日の晩でさ。』と金兵衛は言つた。『桝田屋の儀助さんが夜行で福島へ出張したところが、往還の道筋にはすこしも雪がない。茶屋へ寄つて、店先へ腰掛けても、凍へるといふことがない。どうもこれは世間一統の陽氣でせう。あの儀助さんがそんな話をしてゐましたつけ。』

『金兵衛さん――前代未聞の冬ですかね。』

「いや、全く。」

日の暮れる頃には、村の人達は本陣の前の街道に集まつて來て、問屋の格子先あたりから問屋の石垣の邊へかけて黑山を築いた。土地の風習として、花嫁を載せて來た駕籠はいきなり門の内へ入らない。峠の上まで出迎へたものが案内にして、壽平治等の一行は先づ門の前で停まつた。提灯の灯に映る一つの駕籠を中央にして、木曾の『なかのりさん』の唄が起つた。荷物をかついで妻籠から供をして來た數人のものが輪を描きながら、唄の節につれて踊りはじめた。手を振り腰を動かす一つの影の次には、また他の影が動いた。この鄙びた舞踏の輪は九度も花嫁の周圍を廻つた。

その晩、盃をすました後の半藏はお民と共に、冬の夜とも思はれないやうな時を送つた。半藏がお民を見るのは、それが初めての時でもない。彼はすでに父と連れ立つて、妻籠にお民の家を訪ねたこともある。この二人の結びつきは當人同志の選擇からではなくて、たゞ父兄の選擇に任せたのであつた。親子の間柄でも、當時は主從の關係に近い。それほど二人は從順であつたが、しかし決して安閑としてはゐなかつた。初めて二人が妻籠の方で顔を見合せた時、すべてをその瞬間に決定してしまつた。長くかかつて見るべきものではなくて、一目に見るべきものであつたのだ。

街座敷は東向きで、戸の外には半藏の好きな松の樹もあつた。新しい青い部屋の壁は、鶯でも啼き出すかと思はれるやうな溫暖い空氣に香つて、夜遊び一つしたことのない半藏の心を逆上せるばかりにした。彼は知らない世界にでも入つて行く思ひで、若さとおそろしさのために震へてゐるやうなお民を自分の側に見つけた。

「お父さん――わたしのためでしたら、祝ひは成るべく質素にして下さい。」

「それはお前に言はれるまでもない。質素は俺も贊成だねえ。でも、本陣には本陣の慣例といふものもある。呼ぶだけの

お客はお前、どうしたつて呼ばなけりやならない。まあ、俺に任せて置け。』

半蔵が父とこんな言葉をかはしたのは、客振舞の續いた三日目の朝である。

思ひがけない尾張藩の徒士目附と作事方とがその日の午前に馬籠の宿に着いた。來る三月には尾張藩主が木曾路を經て江戸へ出府のことに決定したといふ。この役人衆の一行は、冬のうちに各本陣を見分するためといふことであつた。斯ういふ場合に、なくてならない人は金兵衛と問屋の九太夫とであつた。萬事扱ひ慣れた二人は、吉左衛門の當惑顔を看て取つた。先づ二人で梅屋の方へ役人衆を案内した。金兵衛だけが吉左衛門のところへ引返して來た。

『先づありがたかつた。もう少しで、この取込みの中へ乘込まれるところでした。オツト。皆さま、當宿本陣には慶事がございます、取込んで居ります、恐れ入りますが梅屋の方でしばらく御休みを願ひたい、さうわたしが言ひましてね。そこは御役人衆も心得たものでさ。御晝の支度もあちらで差上げることにして來ましたよ。』

金兵衛の報告だ。

梅屋と本陣とは、呼べば應へるほどの對ひ合つた位置にある。午後に、徒士目附の一行は梅屋で出した稻草履にはきかへて、乾いた街道を横ぎつて來た。大きな髷のにほひ、帯刀の威、袴の摺れる音、それらが役人らしい挨拶と一緒になつて、本陣の表玄關には時ならぬ厳しさを見せた。やがて、吉左衛門の案内で、部屋部屋の見分があつた。

吉左衛門は徒士目附にたづねた。

『甚だ恐縮ですが、中納言様の御通行は來春のやうにうけたまはります。當宿ではどんな心支度をいたしたものでせうか。』

『さあ、ことによると御晝食を仰せ付けられるかも知れない。』

婚禮の祝ひは四日も續いて、最終の日の客振舞にはこの屋敷に來て働いて呉れた女達から、出入りの百姓、寺の住持などまで招かれて來た。大工も來、疊屋も來た。日頃吉左衛門や半藏のところへ馴じみた台箱を提げて通つて來る髪結直次までが、その日は羽織着用でやつて來て、膳の前にかしこまつた。町内の小前のものの前に金兵衛、髪結直次の前に仙十郎、涙を流してその日の來たことを喜んでゐるやうなおふき婆さんの前には吉左衛門が座つて、それぐ取持ちをする頃は、酒も始まつた。吉左衛門はおふきの前から、出入りの百姓達の前へ動いて、

『さあ、やつとくれや。』

とそこにある銚子を持ち添へて勸めた。百姓の一人は膝をかき合せながら、

『俺にかなし。どうも大旦那に御酌していただいては申し譯がない。』

隣席にゐる他の百姓が、その時、吉左衛門に話しかけた。

『大旦那――こないだの上納金のお話よなし。他の事とも違ひますから、一同申し合せをして、御受けをすることにしましたわい。』

『ああ、あの國恩金のことかい。』

『それが大旦那、百姓はもとより、豆腐屋、按摩まで上納するやうな話ですで、俺達も見てゐられぬか。十八人で二兩二分とか、五十六人で三兩二分とか、村でも思ひ思ひに納めるやうだが、俺達は七人で、一人が一朱づつと話を纏めましたわい。』

仙十郎は酒をついで廻つてゐたが、ちやうどその百姓の前まで來た。

『止せ。こんな席で上納金の話なんか。伊勢の神風の一つも吹いて御覧、そんな唐人船なぞはどこかへ飛んでしまう。く

よくよするな、それよりか、一杯行かう。」

「どうも旦那はえらいことを言はつせる」と百姓は仙十郎の盃をうけた。

『上の伏見屋の旦那』と遠くの席から高い聲で相槌を打つものもある『俺もお前さまに賛成だ。徳川さまの御威光で、四艘や五艘ぐらゐの唐人船が何だなし。』

酒が廻るにつれて、こんな話は古風な石場搗きの唄なぞに變りかけて行つた。この地方のものは、一體に酒に強い。誰でも飲む。若い者にも飲ませる。おふき婆さんのやうな年をとつた女ですら、なかなか隅へは置けないくらゐだ。そのうちに仙十郎が半藏の前へ行つて座つた頃は、かなりの上機嫌になつた。半藏も方々から來る祝ひの盃をことはりかねて、顔を紅くしてゐた。

やがて、仙十郎は聲高く唄ひ出した。

木曾のナ
なかのりさん、
木曾の御嶽さんは
なんちややらほい、
夏でも寒い、
よい、よい、よい。

半藏とは對ひ合に、お民の隣にはお喜佐も來て膳に就いてゐた。お喜佐は眼を細くして、若い夫のほれぼれとさせるやうな聲に耳を傾けてゐた。その聲は一座のうちの誰よりも清しい。

『半藏さん、君の前でわたしが唄ふのは今夜初めてでせう。』

と傭十郎は軽く笑つて、また手拍子を打ちはじめた。百姓の仲間からおふき婆さんまでが右に左に身體を振り動しながら手を打つて調子を合せた。鹽辛い聲を振り揚げる髮結直次の音頭取りで、鄙びた合唱がまたその後に續いた。

袷ナ
なかのりさん、
袷やりたや
なんぢやらほい、
足袋添へて、
よい、よい、よい。

十一

本陣とは言つても、吉左衞門の家の生活は質素で、芋燒餅（里芋の子を入れて燒いた蕎麥餅）なぞを冬の朝の常食としたっ祝言のあつた六日目の朝には、最早客振舞の取込みも沈まり、一日がかりの後片付けも濟み、出入りの百姓達もそれぞれ引取つて行つた後なので、おまんは爐邊にゐて家の人達の好きな芋燒餅を燒いた。

店座敷に休んだ半藏もお民もまだ起き出さなかつた。

「いつも早起きの若旦那が、この二三日はめづらしい。」

そんな聲が二人の下女の働いてゐる勝手口の方から聞えて來る。しかしおまんは奉公人の言ふことなぞに頓着しないで、ゆつくり若い者を眠らせようとした。そこへおふき婆さんが新夫婦の樣子を見に屋外から入つて來た。

「姉さま。」

「あい、おふきか。」

おふきは爐邊にゐるおまんを見て入口の土間のところに立つたまゝ聲をかけた。

「姉さま。俺は今朝早く起きて、山の芋を掘りに行つて來た。大旦那も半藏さまもお好きだで、こんなものを提げて來た。店座敷ではまだ起きさつせんかなし。」

おふきは藁包につつんだ山の芋にも溫かい心を見せて、半藏の乳母として通つて來た日と同じやうに、やがて爐邊へ上つた。

「おふき、お前は好いところへ來て呉れた。」とおまんは言つた。けふは若夫婦に御幣餅（串差の粘餅に胡桃醬油をかけて燒いたもの）を祝ふつもりで、胡桃なぞを取りよせて置いた。お前も手傳つてお呉れ。」

「ええ、手傳ふどころぢやない。農家も今は閑だで。御幣餅とはお前さまも好いところへ氣がつかつせいた。」

「それに、若夫婦のお相伴に、お隣の子息さんでも呼んであげやうかと思つてさ。」

「あれ、さうかなし。それぢや俺が伏見屋へちよつくら行つて來る。そのうちには店座敷でも起きさつせるずら。」

氣候はめづらしい暖かさを續けてゐて、爐邊も樂しい。黑く煤けた竹筒、魚の形、その自在鍵の天井から釣るしてある下では、あかあかと爐の火が燃えた。おふきが隣家まで行つて歸つて見た頃には、おまんのかはりに半藏とお民とが起て來てゐて、二人で松薪をくべてゐた。渡金の上に載せてある芋燒餅も燒きざましになつた頃だ。おふきはその里芋の子の白くあらはれたやつを溫め直して、大根おろしを添へて、新夫婦に食べさせた。

「お民、お出。髪でも直しませう。」

おまんは奧の坪庭に向いた小座敷のところへお民を呼んだ。妻籠の本陣から來た娘を自分の娵として、「お民、お民」と名を呼んで見ることもおまんにはめづらしかつた。大人の世界を覗いて見たばかりのやうなお民は、いくらか羞を含みな

から、十七の初島田の祝ひの折に妻籠の知人から贈られた櫛笄なぞをそこへ取出して來ておまんに見せた。

「どれ。」

おまんは襷掛けになつて、お民を古風な鏡臺に向はせ、人形でも扱ふやうにその髪をといてやつた。まだ若若しく、娘らしい髪の感覺は、おまんの手にあまるほどあつた。

「まあ、長い髪の毛だこと。さう言へば、わたしも覺えがあるが、これで眉でも剃り落す日が來て御覽――あの里歸りといふものは妙に昔の戀しくなるものですよ。もう娘の時分ともお別れですねえ。女は誰でもさうしたものですからねえ。」

おまんはいろいろに言つて見せて、左の手に油じみた髪の根元を堅く握り、右手に木曾名物のお六櫛といふやつを執つた。額から髪の邊へかけて、梳手の力がはひる度に、お民は眼を細くして、これから長く姑として仕へなければならない人のするままに任せてゐた。

「熊や。」

とその時、おまんは側へ寄つて來る黒毛の猫の名を呼んだ。熊は本陣に飼はれてゐて、誰からも可愛がられるが、唯年老いた隱居からは憎まれてゐた。隱居が熊を憎むのは、みんなの愛がこの小さな動物にそそがれるためだともいふ。どうかすると隱居は、おまんや下女達の見てゐないところで、人知れずこの黒猫に拳固を見舞ふことがある。おまんはお民の髪を結びながらそんな話までして、

「吾家のおばあさんも、あれだけ年をとつたかと思ひますよ。」

とも言ひ添へた。

やがて本陣の若い「御新造」に似合はしい髪のかたちが出來上つた。儀式ばつた時の裝ひは脱れて、さつぱりとした蒔繪の櫛なぞがそれに代つた。林檎のやうに紅くて、そして生生としたお民の頬は、まるで別の人のやうに鏡の裡に映つ

た。

「髪は出來ました。これから部屋の案内です。」

といふおまんの後について、間もなくお民は家の内部を隅隅までも見て廻つた。生家を見慣れた眼で、この街道に生へたやうな家を見ると、お民にはいろいろな似よりを見出すことも多かつた。奥の間、仲の間、次の間、寛ぎの間といふ風に、部屋部屋に名のつけてあることも似てゐた。上段の間といふ部屋が一段高く造りつけてあつて、本格な床の間、障子から、白地に黒く雲形を織出したやうな高麗緣の疊まで、この木曾路を通る諸大名の客間に宛ててあるところも似てゐた。

熊は鈴の音をさせながら、おまんやお民の行くところへ隨いて來た。二人が西向きの仲の間の障子の方へ行けば、そこへも來た。この黒毛の猫は新來の人をも畏れないで、まだ半分お客さまのやうなお民の裾にも纏ひついて戯れた。

「お民、來て御覽。けふは惠那山がよく見えますよ。妻籠の方はどうかねえ、木曾川の音が聞えるかねえ。」

「ええ、日によつてよく聞えます。わたしどもの家は河の直ぐ側でもありませんけれど。」

「妻籠ぢやさうだらうねえ。ここでは河の音は聞えない。そのかはり、惠那山の方で鳴る風の音が手に取るやうに聞えますよ。」

「それでも、まあ好い眺めですこと。」

「そりや馬籠はこんな山の上ですから、隣の國まで見えます。落合から、中津川の方まで見えます。どうかするとお天氣の好い日には、遠い伊吹山まで見えることがありますよ——」

林も深く谷も深い方に住み慣れたお民は、この馬籠に來て、西の方に明るく開けた空を見た。何もかもお民にはめづらしかつた。僅かに一里あまりを隔てた妻籠と馬籠とでも、言葉の訛りからしていくらか違つてゐた。この村へ來て味ふことの出來る紅い「ずゐき」の漬物（里芋の幹、鹽と梅酢にて漬ける）なども、妻籠の本陣では造らないものであつた。

爐邊の方では樂しさうな女の笑ひ聲が起つた。おまんはお民を連れてあちこちと部屋部屋を見せて歩きながら言つた。

「また、あのおふきがおもしろいことを言つて、女中を笑はしてゐると見える。」

まだ半藏夫婦の新規な生活は始まつたばかりだ。午後に、おまんは一ト通り屋敷の内を案内しようと言つて、土藏の大きな鍵に板のつけてあるのを提げながら、今度は母屋の外の方へお民を連れ出さうとした。爐邊では山家らしい胡桃を割る音がしてゐた。おふきは二人の下女を相手に、堅い胡桃の核を割つて、御幣餅の支度に取り掛つてゐた。その時、上り端にある杖をさがして、おまんやお民と一緒に裏の隱居所まで歩かうと言ひ出したのは隱居だ。このおばあさんも一頃よりは健康を持ち直して、食事のたびに隱居所から母屋へ通つてゐた。

馬籠の本陣は二棟に分れて、母屋、新屋より成り立つ。新屋は表門の並びに續いて、直ぐ街道と對ひ合つた位置にある。別に入口のついた會所の建物がそこにある。石垣の上に高く隣家の伏見屋を見上げるのもその位置からで、大小幾つかの部屋がその裏側に建て增してある。多人數の通行でもある時には客間に當てられるのもそこだ。おまんは雨戸のしまつた小さな離れ座敷をお民に指して見せて、そこにも本陣らしい古めかしさがあることを話し聞かせた。ずつと昔からのこの家の習慣で、女が見るものを見る頃は家族のものからも離れ、獨りで煮焚きまでして、そこに籠り暮すといふ。

「お民、來て御覽。」

と言ひながら、おまんは隱居所の階下にあたる物置小屋の戸をあけて見せた。味噌、たまり、漬物の桶などがそこにあつた。おまんは土藏の前の方へお民を連れて行つて、金網の張つてある重い戸を開け、薄暗い二階の上までも見せて廻つた。おまんの古い長持と、お民の新しい長持とが、そこに置き並べてあつた。そんな道具の類もまた性格を持つかのやう

に。

土藏の横手について石段を降りて行つたところには、深い掘井戸を前に、米倉、木小屋なぞが並んでゐる。そこは下男の佐吉の世界だ。佐吉も案内顏に、伏見屋寄りの方の裏木戸を押して見せた。街道と並行した靜かな村の裏道がそこに續いてゐた。古い池のある方に近い木戸を開けて見せた。本陣の稻荷の祠が樫や柊の間に隱れてゐた。

その晩、家のもの一同は爐邊に集まつた。隱居はじめ、吉左衞門から、佐吉まで一緒になつた。隣家の伏見屋からは少年の鶴松も招かれて來て、半藏の隣に座つた。おふきが爐で燒く御幣餅の香氣はあたりに滿ち溢れた。

「鶴さん、これが吾家の嫁ですよ。」

とおまんは隣家の子息にお民を引合せて、串差にした御幣餅をその膳に載せてすすめた。こんがりと狐色に燒けた胡桃醬油のうまさうなやつは、新夫婦の膳にも上つた。吉左衞門夫婦はこの質素な、しかし心の籠つた山家料理で、半藏やお民の前途を祝福した。

（第一章をはり、次回十月號に）

附記。これで第一章を終る。次男の遠い旅に、青山の親戚の不幸に、これを書きかけてから自分の身のまわりにも種々な變化があつたが、まだ梅雨の季節のやつて來ないうちにこの章を書き終へたのは仕合せであつた。一時病床にあつた田山花袋君が快癒を聞くのもうれしい。同君の病氣は以前に私が煩つたものと同じだ。前回の序の章はいくらかでも同君の無聊を慰めたかして、讀『黎明前』序章賦呈として、次の一詩を寄せられた。想起曾騰馬籠驛、萬山雲湧卷還舒、大溪幽壑藍奇淀、仄屋斜簷深奥閭、盛列諸侯騎前驛、亂槍敗將釜中魚、朦朧日出觀今代、君作一篇足起予。附記して同君の厚意を謝する。猶、前回序の章のうち、本馬は『ほんま』、輕尻は『からじり』と傍訓すべきだとのある人よりの注意もあつた。ここに附記してその誤りをも正して置く。（この稿、年四回――一月、四月、七月、十月、本誌分載）



斧

翁久允

1

緩(ゆる)やかな、大きな曲りである。涯しもないセントラル・カリフォルニヤの平原に描かれたサン・オキン川の弓の形だ。白い絃(つる)を渡したやうに、國道が一直線に南へ走つてる。それにつがへた矢のやうに、堀川が、兩側の農園への灌漑となつてる中程に、かかつてる木製の橋。そこから一しきり橄欖の林が續く。そして桃の林だ。ずつと向ふがアモンズの園で、その間に展がつた一面の葡萄園。行つても行つても盡きないその葡萄園の、あひ間あひ間に、森がある。何千年の壽命をもつたかわからない樫の樹が、その太古を物語るやうな老枝を伸ばしてる近所に、移住してから植ゑつけた、アカシヤとかポプラの森に交つて棕櫚の並木だ。その高い並木の下を飾るやうに、氣候の關係で、一年中花咲いてる紅と白の夾竹桃。――三藏は、今、そこから向ふの一軒家、グリンの屋根に白塗りの壁、オランダ風のウィンドミルが、

森の中から手をひろげてるやうな、夕暮の農家の方へと歩いてるのだ。

秋も末である。落つべき葉をもつてる原野のあらゆる樹木は、裸になつてる。これからの靜かな冬を一眠りしてから、見渡す限りの赤土の上が、眞つ青に彩られて陽春三月が來たら、緑の原野と化するこの大農園も、收穫後の疲れたやうな姿を、のべてゐるのである。ぽつり、ぽつりと相當の距離をおいて伏せられてる農家のペンキ塗りも、春から夏にかけての、緑りに燃えた中の生命のやうな旺んさを見せてゐない。かぎりないうら淋しさが、そこに眠つてゐた。

かへり見ると白い粒の、アスファルトの國道の兩側には、まるで細いリボンの兩縁に規律正しくさし立てた針かなんぞのやうな、無數の電柱に、漸やく色づいた櫻ん坊のやうな灯が、さうだ！ この圖を頭の中で、奇麗に描くなら、とても大きな寶石店のショウヰンドだ。大陸の秋が、鼠色のバックとなつてる。貴婦人用の長い／＼首飾りがのべられてる。三藏の瞳には、無限の淋さの奥に、幾重にも包まれた奥の奥に光つてる玉のやうな憧れが、涙の底にすわつてるのであつた。

あの、あこがれの國道。北に向つたら英領カナダのバンクーバーまでも、南を向いたらロスアンゼルスから、メキシコまでも、そして東を向いたらシカゴからニューヨークまでも、自由に飛べる國道だ。その國道を、自分の自動車で滑つて流れてゆく日が、今年こそは、來年こそはと、心に描きながら、不運な賭奕師のやうな農園の失敗に、もう來年の計畫さへも立てる勇氣がないのであつた。

暗い過去をもつた彼は、三年の陰鬱な都會生活に見きりをつけて、飄然この原野に現はれたとき、奇蹟のやうに、この農園主のボール老人に出合つた。人間を信ずることの出來ない、だから誰れの笑の中にも陷穽を發見し、親切げな言葉の裏に隱された毒矢を、感付かずにおれなかつた彼は、野犬が、出逢ふ人毎に疑ぐり深い眼で對するやうな、眼つきで最初その老人の前に立つたのであつた。が、一時間も話してゐると、世の中にはこんなにも善良な人物が存在してゐたのかと、驚かれた程、彼はその老人をぴつたり好くやうになつた。黑いインキで過去の一切を、塗り消し、新しい白紙の上に、鮮かな

ペンで、その抱いてゐる大望への生を、これから初めやうと、決心した彼は、やつてみましやうと云つたのであつた。が、惠まれない三年の月日が、延び出る春の若芽を切り取るやうに、葡萄園の經營を失敗に終らした。だから彼の陰鬱は、切られた若芽の下に燃え立つ幹や根のやうに、月日と共に大望への川の渡しに、あくせくさした。老人は、失敗したんだから仕方がない、來年こそは儲かるだらう。何も氣にかけなくてもいいと、地代を請求しないばかりでなく、經營費の一切を貸してくれるのであつた。が、今年の失敗でもう澤山だ。

「あの老人は、きつとゆるしてくれるだらう」

まだ嘗つて、人からゆるされたことを知らぬ彼は、許された人の幸福と法悦を、しみじみ身に刻り込んで、あの柔和な、舊約書の物語繪に出て來るやうな、老人の姿を眼の前に浮べるのだつた。

――ずつと、東の東の果ての州の、田舍町に小學校教師をしてゐた若かりしポールは、今でも自分の淋しいライフの作例としてあの應接室の隅に立てかけてゐるバイオリンの名手であつたのだ、もう七十に手の届くあの老翁のその頃だつたから、アブラハム・リンカーンが奴隷廢止の爲めに、人類の正義の名に於て、南方の州と砲火を交へた頃であつた。美はしい銀行家の娘クララと、湖水の畔に、綠りの丘に、谷川に、林檎の園に、バイロンやシエレー、はてはロングフアラーの愛の讃歌に、青春の血をわかしてゐた彼は、その藝術の神であり、詩の女像であり、そしてライフの神祕であつたところの戀人を、奪はれて終つたのだつた。奪はれたと言ふよりも、その美はしい極樂鳥は翼をひろげて、他の枝に飛んだのだ。

「ライラックの花の匂が、たまらなく若い戀心をつき刺す晩春の、眞珠のやうな青白い月光の晩だつた！」

老翁は、春もまだ來ない今年の二月、さうだつた、若い人達が戀の日と祝ふ、十四日のヴアランタイン夜の、晩餐の後の、フアイヤプレスの前で、その頃の追懷を、詩のやうな文句で語つた。

「窓に描かれた二つの影繪。私は、そこに何を見たか。若い友よ！ 私の水甕は、そこで微塵に砕かれたのだ！」

さうして若いポールは、鐵砲と軍刀を、間もなく肩と腰にして、討南の義勇兵に加つたのだ。戀なき生は、命なき生であつた。彼は死に向つて出發した。正義の爲めに、人類の平等の爲めに、の美はしい名の裏にかくされた失戀の嘆きに涙して、彼は山に野に川に、その流す可き血、葬る可き命の機會を覗つた。が、彼の傷いたハートはそのままに、彼の運命は彼の生命に一發の彈丸も、一突きのサーベルも見舞はなくて、榮譽ある歸還兵として彼を郷里におくり返したのであつた。

われらの町の英雄を歡迎す可き、その夜會で彼は誰をみたか。美はしい曾つての戀人の腕を抱いてる卑怯な友達をみた。

「何萬言を費しても、恐らく私達の心もちを表はすことが出來ないでしやう。ただ、單なるお目出度う！、この言葉のみで神樣は、何もかも御存じです！」

「有難う！」

彼は、紳士らしくお禮して、そして、くるりとあちらを向くと、こみあげる自分の胸を撫でおろした。女！、呪ふ可き女！ その微笑！

ポールは、あくる朝、その故郷を捨てたのであつた。

西へ！ 西へ！

黄金と機會とを無限に埋めてゐる西の州。カリフォルニヤはヘーヴンのやうに遠く、そして魅力をもつて彼を招いてた。が、そこにはあらゆる苦難が彼をまち設けてゐた。しかし、眞なる生活への道を求めて、彼は急がず荒野から荒野を渡つた。そして、今のところを開拓して、この邊一帶の地主となつた彼は、もう人生終らんとしてゐる今日まで、一人の女も近づけなかつた。

三藏は暇さへあればこの老翁をたづねて、冬だつたら、ファイヤプレスの赤々と焚かれた火の前で、アーミングチエヤに倚つて、夏なら庭の大きなアカシヤの樹蔭へ藤椅子を出して、盡くることない泉のやうな昔話しをきかされるのであつ

た。

「マイ・ヤング・フレンドよ！　お前も一人だ。わしも一人だ。そして人生の旅はいつでも一人だ。」

白い長い銀髪の頭を撫であげ、これも眞つ白な腮髯をしごきながら、いつもその奥に微笑を湛へた目で、ポール老人は自分の子供にでも言ふやうに、そしてこの東洋人には一から十までも理解さしたいと言つたやうに、慾るい調子で、耻ない句で、六つかしくない言葉で、がつきり、がつきり話すのであつた。そこには一滴の惡意もなければ、毒ほどの厭味もなかつた。全く彼を愛し撫でてる姿であつた。

「あの花を御覽！」

ある春の午後、老翁は畑の隅に自分で植ゑ育てたいろんな草花を指して囁いた。

「美くしいぢやないか。花は戀だ！」

そして、しばらく、じつと見つめてゐた老翁の瞳が瞬かれた。

「花は讃することが出來る。が、花を信ずるものがない。それは女を信ずることが出來ないやうに。………」

こんな、ポールの家に゙ゆく每に、いつも思ひ出される光景を、二藏は描きながら、しかし今夜は自分から切り出して話さねばならぬ決心に、微かな動搖を感ずるのであつた。

「そりやいけない！」

とは言ふ人でないに、きまつてゐる。が、

「もう一度、考へ直したらどうだ。」

と來ないだらうか。いつかも、

「わしの墓は、ここにたてくれ。」

と、畑の隅の最初に彼がこの野原に來た時、馬の手綱をつないだと言ふ老樫の樹の下に來て言つたことがあつた。

「わしは、この樫の樹に抱きついて、泣いたもんだ。新らしいライフはそれから始まつた。そして四十何年間、わしを一日として見離してくれなかつたこのオークツリーだ。わしはこの根もとで、靜かに眠りたい。」

何だか、このあとのことは、たのむと言つたやうな口吻を感ぜられないではなかつた。どうせ獨身者の老翁である。死んだら遺産を受けつぐ者がこの世に誰もゐないのである。だから、さうした好運がいつ彼に廻つて來ないとも言へない未來を夢みて、今、自分は非常によい位置に活きてると思つたことがないでもなかつた。しかし、この若さで、一生をこの農園に埋める氣が起らない。ことに不況續きである。かりに好運が降つて來たにしても、その爲めに自分の身元が調査されたり、過去が曝露されたりすると、一代の大望がその爲めに流れて終るのである。とにかく、離れともない、心から信頼する人ではあるけれど、自分の事情を述べて、訴へるより道がないだらう。

大陸の涯てから月がのぼり初めた。日本の田舍の兩側にささやく秋の虫とは、全く感じを異にする虫の交響樂が初められた。長い薄い自分の影が、枯草の色と區別出來ない秋の土の上に泳ぐ縞と歩きながら、

「何處にゐても人生は人生だ。が、若い君は何處かに、より善き人生が、まるでおつ母さんが餓えてる赤ん坊に、乳房を出してまつてるやうに、まつてると思ふのだらう。が――」

老翁は去年の冬の、ファイヤサイドで、あの長い中世紀式なパイプを唇から外して言つた。

「機會なんて女のやうなものだ。これが佳いと惚れ込んで行つたら、そこに失戀あるばかりだ。自分が、あの樫の木のやうに、何千年も動かぬと言つた調子で構へてゐたら、女からやつて來る。その女を選ぶがよい。探したつて求めたつて、機會があるものぢやない。機會は自然に來るのだ。」

豫言者のやうな、斯う言ふ話をやり出すと一種の風格さへもつてる、シェクスピーアの愛讀者であり、デツケンスの

耽讀者であるところのポール老人は、今夜も、

「だから、もう一年やつてみたら、どうだ」

と言ひ相な氣もするのである。さうしたら一體、どう自分を說明しやう。

もう、風に風車(ウインドミル)の軋る音がきこえる程に、ポール翁の家が近くなつた。淋しい口笛を吹きながら、三藏は、この不安な胸を運んでると、突然に、森の中から驅け出して來たジミーだつた。

「おおジミー！」

ポール老人の友達であり、女中がわりであり、そして最も忠實な番人であるところの、足の短かい、耳の長い、不格好な黑犬である。彼は二十年もその主人と生活を共にして來た爲めに、主人の氣心ものみ込んでゐれば、家のまわりのことは、何もかも承知してゐるものの如くに見えた。老人はいつも、このジミーを抱き込んで、たつた一人のときは、彼を話相手にしてゐた。二哩もある村の雜貨店へ、頸から籠をぶらさげて、肉だの、パンだの、罐詰などを買つても來るし、家の中では、箒やバケツを主人の命に依つて、もつて來ることも心得てゐた。主人と共に三度の食事を一つのテーブルでやつてると言ふやうなことから、だから主人思ひで、主人以外の人間は、誰でも彼の敵であつた。しかし一度、主人からたしなめられると、執念深く吠えつかぬが、それでも常に警戒は怠らなかつた。三藏が最初ここに來た時、こつぴどく吠えつかれて弱つたことがあつた。元來犬を恐がる彼であつた。吠えつかれると、全身の血が頭にあがつて來て、くわつとして終ふのであつた。が、二度、三度となるに隨つて、彼の威嚇がやわらいでは來たが、しかし疑の眼光が、いつも彼の手足に注がれてゐた。だから三藏にとつては、不愉快な相手であつた。ポール老人が餘り可愛がり過ぎてるのが、いまいましい位に思はれるのだつた。が、今夜は吠えも唸りもしないで、いきなり驅け込んで來て、三藏のパンツの端をくわへるやうにするのである。噛みつきに來たものと思つた彼は、びつくりして、

「うるさい！」

と一喝、同時に自分を警戒する足が、相手の胴腹をしたたか蹴つた。悲鳴をあげて、再三度くるくる廻つた老犬に對して、彼は恐怖後の敵意に滿ちた眼で睨みはしたが、しかし、老人に見られたらと言ふ不安から、

「カム・オン！　カム・オン！」

と妥協の手を翳して、怖怖ながら近よつてよいことを態度で示した。が、いつもならジミーは、毛を逆立てて唸るところだが、今夜に限つて、憐みを乞ふ者のやうに、その翳された手の下に伺ひ寄るやうにして、鼻を鳴らしながら近寄つて來た。不思議なことにでも、ぶつかつたやうに、彼は、頭の上に手をおろして撫でた。と、彼は何か喋口りたいやうな顏つきで、しきりに三藏を見上げては鼻を鳴らし、ぱつと、手の下から飛び離れて、二三尺の向ふで立ちどまり、前足で、何かを示してみせては、家の方をむき、そして近よつて來ては又彼のパンツをひつぱるのであつた。おかしな奴だと、三藏は思ひながら、何氣なく彼のあとにつくと、彼は顧み顧み先きに立つて家に急ぐのであつた。

2

もうストーブを焚いて、その前で、高い鼻の眞ん中頃に老眼鏡を落して、手をのばした端に新聞でもひろげながら、例に依つて、淋さを忘れた人のやうに讀み耽つてるだらう老人を描きながら、中ば開かれたゲートを、もとのままにして庭に立つた三藏は、窓の隙から洩れてる可き電燈の光が、そこに冷たい感じしか送らない古い農家の、生命でも絶やしたやうにその影を流してゐなかつた。變だな！　瞬間、ちよつと立ちどまつた彼は、森の中の庭を見廻した。靜寂がそこに息を殺して立ち塞つてゐた。變だな！　彼は入口に步を進めた。老ジミーは、訴へるやうに先きに立つのだ。もう寢たのかな？　しかし、ゲートも、入口の戶も鎖してない。何處かへ行つたのかな？　それにしては彼の愛犬が殘つてゐるのもお

かしい。

「ミスタ・ポール！」

秋の夕への靜かな風に、ウインドミールが小さく軌る。それが巨獸の眠りの鼾のやうにも響く。彼の聲は、こだまするのだ。

「ミスタ・ポール！」

再び呼んだとき、ジミーは青い眼を光らしながら彼を顧みた。そして入口の戸をおしあけて、案内役のやうに再び顧みるのだ。

「グット・イブニング！」

フロントに立つて叫ぶ彼の上に、イヴァグリンの蔦の葉が、微かに波打つた。

「ミスタ・ポール！」

しかし廢墟に似た夜氣が彼に迫るばかりであつた。ジミーは、中から飛び出して來て、鈴を鳴らすと、どうか入つて下さいと言つたやうに彼を見あげるのだ。不安が彼を掴んだ。とにかく浮足で、勝手馴れた戸を押すと、その刹那、不可ないことを初めた自分に氣づいたやうに、その心もちを排する爲めに今一度

「ミスタ・ポール！」

を叫んだ。が、聲はもう震へてゐた。

どうしたんだらう。おかしい。應接室に入つた彼は、冒險家が、ある危險な洞穴の前にあらゆる官能を眼と耳にひきよせて、兩手を緊張さしてるやうに、斯うなつたら便るものはジミーの外にないもののやうに、しかし、ちよつと落ちついてマッチを擦つた。パッと光つた、あかるみの中に浮いた應接室の光景には、いつもと變りもなかつた。が、ファイヤプ

レスの上にある蠟燭に火を點じて一通り見廻すと、氣のせいか、何となく取亂したやうに、センターテーブルの上の雜誌類や、ソフアの上におかれた、老人の甘い秘密の一つであるかの如く、彼にいつも思はれたこの家では一番に艶つぽい一つのクッション、そして彼の生命と常に合流してゐるバイオリンが横に倒れてるのも不思議だつた。

「ミスタ・ポール！」

ジミーが、もどかしいやうに、何かを言ひたくて堪らないと言つた風に、短かい前足で彼の靴を撫でたり、パンツをひつぱつたりしては二階の方をみあげるのだ。もしか、老人は二階の寢室で、病氣にでもなつて打ち倒れてるのぢやないだらうか。だから平生から言はんことはない。誰れか世話をしてくれる人を雇つたらいいと。しかし、世を拗ねてる老人は、このジミーがゐれば自分には澤山だと、どう言つてもきき入れなかつた。急病で困つてるに違ひないと、瞬間さうきめつけると、元氣づいた彼は、蠟燭を手にしながら、とんとん階段を踏みしめて、中程から二度も老人の名を叫んだ。何か、返事があり相なものである。二階のホールにあがつて、老人の寢室の前にかけつけた彼は、戸をおしあけて、眞つ暗な室に燭光を流したその刹那、

「あつ！」

そのまゝそこに卒倒して終つた。

鼻から口から、耳から首のまわりから、何か温かい柔かいものを感じ、そして遠い喧騷な叫びが聽へるやうになつて來ると、三藏は自分の意識を取かへした。ぼんやり眼をあけると、そこは眞暗らであつた。ただ頭の上の方に二つの青い眼が光つてゐた。その眼の主はぐんぐんと鳴いてるのである。ジミーだ。おやこゝはどこだ。さつきから自分の露れた肉體

を舐めでもしたらしいのである。一體どうした自分なのだ？　ここは何處だ？　ふと、氣がついて、ポケットからマッチをとり出し、腰から上だけ起きて、ぱつと擦つた。

「あつ！」

これだつた。再び卒倒しかかる自分をとりとめて、もう一本のマッチを擦つて蠟燭をさがし、それに點じて、起きあがつた。――薄い燭光が、淺い波を打つて、その光景を彩るのだ。眞白いベッド。そのベッドから上半身をフロアに落したポール老人だ。白髪頭が腦天から何かでたち割られ、血がどろどろと白髪に、被布（シーツ）に、にじんでるのだ。むつとした血の匂ひが鼻をつく。無念相な眼、喰ひしばられた白い歯、そして何かをひつ掴もうとしてるやうな指。

「一體どうしたんだ！」

三藏は一歩でも動いたら倒れさうになるので兩足を固くそこに踏みしめながら、ぶるぶる聲で叫んだ。ジミーはそれに和するやうに鳴くのだ。蠟燭の瞬きに溶ける蠟が、だらだら指を傳つて掌に流れた。あついと感じた頃には、彼も大分落ちついて來た。そして、ジミーに、

「どうしたんだ、これは。泥棒か？」

人間にでもきくやうに言つてみた。が、哀れな動物は、御返事出來ないのを悲みますと言つたやうな表情で、口惜さうにうなるのだ。彼は、靜かに、ポール老人の死體に近づいた。すると、涙が、熱い涙が、夕立のやうに降るのだ。きつと泥棒の仕業だらう。この善良な老人に誰も恨みをもつてるものがない筈だ。强盜だ！　近頃、方方荒らし廻つてると言ふ伊太利人の三人組の强盜にちがひない。

「ポールさん！　ポールさん！」

彼は哀れな姿のポール老人を見守つて叫んだ。と、足に、靴に、何かひつかかるものがある。なんだらう、と思つて、

蠟燭でみるとそこには一丁の斧（アツキス）が轉つてゐた。血塗れなアツキスが。あつ、これでやつたんだな、これで……彼は呟きながら、それをとりあげて恨みをこめた眼で睨んだ。これがあればきつと何かの手懸りとなるだらう。と、驚きが、くわつと彼の頭を異樣に搖ぶつた。

「えつ！」

今一度眼をこすつて、見直したその斧。それは三藏がことしの春買つて來た斧であつた。畜生！　わかつた！　ではこの犯人は山崎ときまつた。山崎！　山崎！　日本人の癖に惡い奴だ！　一週間前に彼は、薪を割るのだから借してくれと言つてもつて行つたのだ。その斧で、この親切な地主を、彼の爲めにも、全日本人の爲めにも恩人であるこの二人とない善良な人物を、何の爲めにこんな慘酷な殺しやうをしたのだ？　彼はその斧を握りしめながら復讐心に燃えた。その燃え立つた二つの眼が、涙に掩はれて、老人の死體を見守つてゐたが、やがて、その寢臺の頭の方になつてる鏡臺の右手に置かれてあつた金庫の方へ行つた。金庫が開かれてる。しかも、腸（はらわた）のやうに中から書類やら何やら散らばつてはみ出てる。

彼は、よろよろとそこに近づいた。まさしく、これを破りに來たのだ。この部屋に忍込んだ山崎に對して、老人が、誰だとか何とか叫んだのを、近よつて、起きあがらうとしたところを、この斧で、ばさんとやり、それから悠悠とこの金庫を破つて現金と貴金屬を盜んで行つたのだらう。

「ジミー！　貴樣はどうしてゐたんだ？」

彼は、番人のやうな顏をして、後ろから見まもつてゐた犬を顧みた。馬鹿野郎、なぜ、そんなら早くオレを呼びに來ないんだ。と、ひとりで叫びながら、氣を荒々してゐた三藏は、しやがみから立ちあがつた時、ぱつと蠟燭が消へたので、ぎやつとした氣もちに襲はれた。斧をどしんと下に落として、マッチを擦つたが、二度も三度も消へた。そのせつかちな瞬間に、彼を捕へた不安な影であつた。妙な暗影が、この瞬間彼の心を震はし初めた。——再び、蠟燭に火を點じ、斧を

拾ひあげて、老人の死體を顧みたとき、彼は妙な氣もちにさされたのだ。ほつとした淒い氣もちだ。それは　自分が、今大事を果たして、この金庫の中のものを奪つて終つたあとのやうな氣もちであつた。

「漸やく、やつつけた！」

と言つたやうな氣もちが、一種の清清しささへ交へて彼の氣もちのどこかに潛み初めたのであつた。だから、彼は、彼自身の斧を握つて、ここに斯うして立つてる事が、この場合、何だか自然な氣もちでさへあるやうに思はれ初めた。

「お前の仕業だ！　お前に違ひない！」

斯う誰れかが叫んでる。

「その斧が承知しない！」

この斧が！？　なるほどこれは自分のものだ。窓から、戸の隙間から、天井から、掛額の背後から、一齊に靑い眼、赤い眼、灰色の眼の數數が覗いてるやうだ。

「併し、誰が何と言つたつて——」

彼は斧を見直して、抗辯するやうに獨りで叫んだ。ジミーの眼。

「こいつまで俺の仕業と信じてるんぢやないか？」

譬へば、夢に、惡い奴につかまつて、縛りあげられる、面罵される、蹴散らされる、口惜しい自分の心もちを、叫はうとしても、どうしても喉がつかへて、口が角ばつて一言も發せられない、そしてもがき悩んでるやうな時間が、じりじりと彼を締めくくるのであつた。

「お前だ！　お前に違ひない。オレは證人だ。現にお前がここに立つて、自分の斧を揮つて立つてる姿を確かに見たんだ！」

と言ふ人間が、今にもそこから飛び出して來るやうな氣に襲はれると、彼は蠟燭をぷつと吹き消し、自分を隱くすやうに身を縮め、斧を投げ捨てゝ、月光で薄あかるい二階から、夢中に階段を飛びおりて、下に來たが、そこにも誰かが待ち伏してるやうな氣がするので、影から影を廻るやうに、應接間の椅子の影にしやがんでは、足音まで忍ばせて、石垣の間から伺ひ出る蛇かなんぞのやうに、入口の戶の隙間から、外に現はれたのであつた。風車のきしる音。秋の夜の風に、さらさらと波打つ戶外の木の葉。そして、驚き、あきれたジミーであつた。ねえ、どうするんです、それでは私が困りますと言つたやうに、彼のあとをつけるジミーだ。

「うせろ(ゲツトアヴエ)!」

その聲も、忍んだ、鋭い、胸の底から、しみ出る聲である。「ウフ!」ジミーは蹴られて、そこに立ちとまりながら見あげるのだ。來ちやいけない!さア、家の中にゐろ!と彼は手まねで彼を制し、更らに石を拾つて、ぶつつける眞似をして威嚇しながら、ゲートの戶をくぐつて、ジミーが來れないやうに外から閉めて、さて棕櫚並樹の一直線な道を、一目散にかけ出すのであつた。月が、もう中天にかかつてるのだ。秋の夜の靜かさは、彼の足音を、馬の蹄の音くらひに響かせる。と、おつかけて來るジミーだ。こら!歸らんか。來ちやいかん!こん畜生!そして彼は石を投じ、投じ、本道に出たのである。桃林、橄欖の林の黑い月影を縫つて、橋を渡つて、それから畑の中へ飛び込んで、その一哩もある道を、全く人を殺した者が逃げ廻るやうな黑い心理に支配されて、彼の農舍に辿りついたのである。顧みると、ジミーが矢張りついて來てる。困つた。どうしやう!そして彼は、何度も何度も石で嚇かして、あちら向いて、尾を垂れて逃げる隙に、自分の身を交はして、入口の戶をおしあけ、内からかたく錠をおろして、漸やく、最も危險な場所から救はれたやうに胸を撫でおろしながら、太い息をついて、さてあたりを見渡したが、ランプをつけると何かの目標になるやうで、危險だから、そのまま勝手のわかつた寢室へ飛び込み、これも嚴重に錠をかけ窓掛(シエード)をおろし、手早く靴をぬぎ、着物を着更へて、ベツ

ドの中にもぐり込んだ。

「もう大丈夫だ！」ー

彼は頭から布團をかぶつて、安全地帶の上にゐる自分を祝福するものの如く、ほほ笑ましい氣もちで呟いた。と、あの慘殺されたポール老人の死體が眼にありありと浮き初めるのだ。次の瞬間に、自分が斧を揮つて、げらげらと笑つてる姿が描かれる。

「どうしたんだらう！　オレは。どうしてこんな氣になるんだらう。オレは決して、やつたんぢやないんだ」ー

と、地の底から呼びかけるやうに、ジミーの悲鳴が戸外から聞えるのだ。畜生、また來やがつた。執念深い奴だ！　布團をはね返して鋭い聽き耳を立てると、前足で表戸をかさかさ掻いてるのだ。なんて、五月蠅い奴だらう。と、

「もしか……」

彼の頭をかすめた暗い雲だ。ポール老人の死體はもう刑事達に依つて發見された。探偵が四方に飛んでる。忍んでる。そしてあのジミーの厭やな鳴聲をききつける。おや！　これはポールの愛犬だ。あの犬があおしてるところを見ると、この家はきつと犯人の隱れ家に違ひない。……そんなことにでもなつたら大變だ。彼は、がわと、はね起きて滑かな手つきで錠をあけ、表戸を開いたのである。開くといきなり飛びついて來たジミーだ。

「あつ！」ー

彼はその瞬間、眼がくらんで探偵にひつつかまれでもしたやうに思つたのだ。が、

「五月蠅い！　こん畜生！」

蹴飛ばした。しかし、こいつに鳴かれたら爲めにならぬと思ひ直して、手で失敬失敬と言つたやうに眞似して、自分の寢室へつれ込んだ。そして、靜かにしてゐろ。そこにゐろと言つて、ベッドに再びもぐり込むのだつた。と、とんとんと

んと、表の戸を叩くらしい響きがするのだ。耳を澄すのである。誰だ？　探偵ぢやないか？　なんだ！　ジミーが、後ろ足で脇の方を搔いてるのだ。こん畜生、驚かせやがる。——

「馬鹿！　馬鹿！」

彼は自分を罵りながら、冷靜に返らうとした。しびれてゐた全身が、漸やく血液の循環をとりかへしたやうに、彼の昂奮も、だんだん、坂道をおりやうとした。兩眼を堅く閉ぢて、一刻も早くこの惡魔の意思を追ひ拂ひ、早く曉方の淸淸しい自分をみたいものだと念じてゐる暗の洞窟から、赤、紫、黃、靑の玉が浮いたり沈んだり、奧に消えたり、突き當つて來たりし初める。オレンヂ色の玉が一つ、くつきり浮ぶ。だんだん透明になつてゆく中から現はれた女の姿。——

「秋子！」

呪ひの秋子だ！　黑髮をふり亂して、血にまみれてる秋子だ。

「人殺し！」

と叫んだ口をおさへて、胸にぐさりと突込んだ九寸五分だ。この嘘吐き！　この怨みは思ひ當たるだらう。橫濱の夜の町でめぐり逢つた元の戀人を山の手におびき出して、秋の夜の木陰で、いきなりやつつけた兇行だつた。

「よくもオレを欺いたね。だましたね。そしてお前はよくも平氣な面をして、今の男の懷ろに抱かれてるね。」

この言葉の頃から、殺意に覗かれた三藏だつた。

「だつて、仕方がなかつたんですもの！」

「仕方がなかつた？」

きつとなつた三藏は、

「何が仕方がなかつたんだ。えつ？」

とつめ寄つた時に叫ばれた「人殺し！」だつた。……

失戀後の彼は、どうかしてアメリカへ密航しやうと思つて、シアトル通ひの船に水夫として乘り込んでゐたのだ。その足で、明朝出帆する船に逃げこみ、どうせ日本へ歸つてもない命だからと決心して、二三度來たことのあるシアトルだから勝手もわかつてゐたし、月のない夜のスミスオーフから船を棄てたのだ。それきりあの犯罪を忘れ、生れ變つた人間となつて、何でも一つ立派な人間になれたら、日本へ歸つて日本を見返してやりたい。その大望に生きて來た毎日だつた。此處での三年は、暇さへあれば勉强してゐた。そしてポールから愛され、敎へられ、英書もかなり讀め、話もわかるやうになり、これなら東に行つても大丈夫だと自信もついて來た今だつた。——その過去五六年の姿をまざまざ顧みてる彼を呼びさますやうに、ジミーは又も悲鳴をあげるのだ。

「靜かにしろ（キープクワイト）！」

今度は哮へるやうに、喉の奥で何かを轉がすやうな音調で唸るのである。それは、お前のたづねてる犯人が、こゝに潜伏してゐる、早く來なさいと、刑事か探偵を呼び出してゞもゐるやうに響くのであつた。

「靜かにしないか？」

くわつとなつた彼は、ベッドから起きあがると、脫いでおいた頑固な勞働靴をひつつかんで黑い老犬の胴腹に叩きつけた。きあんと叫んだ彼に今一つの靴をおつかぶせるやうに力一ぱい投げつけるのであつた。

「馬鹿野郎！」

そして蒲團を頭からおつかぶつて、馬鹿なことは考へまい。しばらくでも眠らうと眼を閉ぢれば閉ぢるほど、奇怪な意識が彼を強迫するのであつた。

「えつ！」

蒲團をはねのけて起きあがつた頃は、秋の曉きが窓を透して遠くの桃林の上空を染め初めてゐた。燗々たる日輪が、大陸の底から靜々とあがつて來る爲めに、地上のあらゆる惡魔の羽毛をたゝませる爲めに、その孔雀のやうな翼をひろげてるやうに思はれた。
「いやな一夜だつた。なんて馬鹿らしいことを考へたんだらう。夢ならいゝ、夢なら……」
おや！ 顧みると、ジミーが、そこに寢てゐるらしくもないぐんにやりした軀を投げ出してゐるのである。ジミー！ 呼んでも起つて來ない。ジミー！ おかしい。
「ジミー！」
鋭く呼んだが、曉方の靜寂が一種の嚴肅さをもつてこの墓場のやうな一軒家の中に響き渡るのみであつた。死んだか？ たちあがつた三藏はかけ寄つてジミーの軀に手を觸れた。もう冷たくなつてる。
「オ。プーア、ジミー！」
おれが殺したんだ。殺したんだ！ 殺したんだ。ほんとに殺したんだ。
「ジミー！ゆるしてくれ！」
太陽はその第一線を、秋されの葡萄畑におくつた。こして赤々とした空氣の彩りの中に大陸の眞ん中が明けそめた。彼は、この太陽が、全き光をこの地上に塗る前に、一刻も早くやらねばならぬ仕事に追はれてゐる人のやうに、荒々しく室を飛び出すと、小舍からシャベルをこつそりもち出して來て、南の方の畑の隅を掘り初めた。そして、犯罪隱滅者が、自然に自分を保護するやうな、注意深い凄い眼つきで、ジミーの死骸を抱きながら、その穴の中に埋めたのである。もう、最後の土を投げかけた頃は、朝日の光が、シャベルの尖にきらくく映るのであつた。
「もう、大丈夫だ！」

硬苦な笑が彼の顔をかすめた。

3

大きな仕事、もしくは困難な事業、更らにもしくは大きな犯罪を、なし遂げたものは　それを果たしたと言ふ心の緩みから、すつかり疲勞するもので、三藏も困憊した體軀をベツドの上に横へると、ぐつすり眠りに落ちて終つたのであつた。夢も何もない平靜な睡眠の淵から、譬へばひよこつり首をあげた龜のやうに、眼をさますと、大陸の秋の夕陽があかあかと窓にさし込んで、葉のない向ふの桃林に群がり飛んでる小鳥の一群が、湧いた蚊のやうに見られた。箒を立てたやうな三本のポプラの庭木がその白い肌の幹をさびしく立てゝゐる。大陸の夕暮がもつ一種の寂寥。三藏は、窓をあけてそれをながめてゐたが、ひし〳〵逼る空腹に、いつもと變らぬ淋しい夕食の支度にとりかゝるのだつた。

ベーコンをじゆう〳〵鍋の中で燒き、その膏の中へ冷飯に、玉葱の小きざみを入れて、交ぜ返し、トマトソースをぶち込み、一方にはコーヒーを湧かして、たら腹たべ終ると彼は、ふと山崎のことを思出したのであつた。さうだ、昨夕から馬鹿なことで惱んでゐたもんだ。あれは山崎の仕業に違ひないんだ。あの斧は確かに山崎がもつて行つたんだから。

「高飛び？」

奴も、去年も今年も百姓で損をして來たんだから或は今頃、ポール老人の金をもつて夫婦で何處かへ高飛びしてゐるかもしれない。人の女房を盜んでこんな田舍に潛伏してゐた奴だから、きつとさうにちがひない。さうなると、あの斧から足がついて、いよ〳〵自分が殺人の嫌疑者として引つ張られるかもしれない。とにかく、一つ山崎のところへ行つて見やう。ゐなければ、こちらから、ありのまゝを自首して出やう。

さうして三藏は、跡片づけもしないで、帽子さへ冠らずに外へ飛び出すと、どん〳〵山崎のキヤンプに急ぐのであつた。

丁度ポールの家と、彼のところと、山崎の農舎とは、三角の形ちになつてゐた。一哩の道を歩き終つた頃は、もう大陸一面に夕暮れが匂ふてゐた。そして昨日よりも遅い月が、野の末から覗き初めた。

「ランプがついてる！」

葡萄畑の隅に、ポプラとアカシヤの森がある。その中からランプの光がちら〳〵見えるのだ。闘々しい奴だ、まだ高飛びもせずに、まご〳〵してゐるんだ。よし、ポール老人の仇を打つて、斯うなれば、潔く自分が自首しようと、決心しながら、彼は農舍に近づいたのである。

「ハロー！」

庭の隅に井戸があつて、そこに跼んで一人の男が、何か鼻唄を歌ひながら、ごそ〳〵やつてるので、三藏は呼びかけた。顧みた男は、立ちあがつて、

「ハロー！」

と返した。山崎である。

「やあ！」

と言ひ返して近づく三藏の前にぎらりと閃めくナイフであつた。ぎくりとした三藏におつかぶせるやうに、

「やあ、い、處へ來てくれた。實は君を呼びにやらうと思つたゐたところだ。」

と言ひながら、彼は、右手にしてゐたナイフをぽんと、俎板の上にほうり出した。月の光でその兩手が赤黑い血で染つてるのが見られた。

「この調子だ。今晚はな、鷄を一羽叩き殺して、久振りで一杯やらうとしてゐた處さ。丁度よかつた。」

齊生、胡麻化さうとしてゐやがるな！しかし山崎の調子は輕くて明るい。

「なあ君、鷄の一ぴき位殺して、食ふと言ふことが大問題ぢや、生きてる甲斐もないよな。お互に。どうしてこんな不景氣ばかし續くんだらうな。まあ、まあ、僕ア、もうすむんだ。內へ入つてゐてくれ玉へ。おい、おい！」

女房を呼ぶのである。台所で何か支度をしてゐたお房は、窓から、ひよつこり首を出して、

「まあ、お珍らしい、太田さん。――」

と笑顏で、內を廻つて表口から姿を現はし

「山崎が、私に呼びにゆけと言つてゐたところなんですよ。隨分、しばらくですこと。」

お前は何も知らないんだ。お前の亭主は、あゝしてしやく／＼してゐるけれど、ボールを殺した男なんだぞ！オレの斧で！が、しかしこの畜生もグルになつてやつたのかもしれない。そして自分を呼び出して、酒でも飲ましておいて、計略にかけやうとしてゐるのかもしれない。そいつには乘らんぞ！

「君達は、まだゐたのかね。」

おかしな調子なので、山崎は洗つた手を拭き／＼、

「ぢや、もう知つてるのかね。」

いよ／＼確かだと思つた三藏は、

「さうさ。」

「早いもんだな。僕ア、それについて、あんたにも相談しやうと思つてゐたので、が、いい懺悔だ。まあ、一杯やつて、ゆる／＼やらう。おい、もう支度が出來たかい。」

山崎は、皿にのせた鷄肉を片手に、內に入つた。そんな相談の仲間入りなんかして堪つたものぢやない。

「僕ア、夕食をすまして來たんだ。もう歸らう。」

「まあ、太田さんてば、今晩に限つて、どうしたのよ！」

夏の暑い眞盛りに、葡萄摘み人夫が四方から集つて來るが、彼らはこの愛嬌のいゝ、水つぽいお上さんから、今の調子な言葉を浴びせかけられたら、暑さも忘れて、このお上さんの爲めに働かうと言ふ氣になるのであつた。三藏がちよい〳〵淋しい心を捨てに來るのも、この明るい、溫かい聲がき、たかつたのだ。だから、今の場合にも、顏が崩れずにはゐなかつた。

「だつて……」

もぢ〳〵してゐるのである。

「何が、だつて！よ、ねえ、あなた。折角なんぢやない？」

「さうさ、まあ、掛玉へよ太田君。今晩は君心ばかりの留別會だ。」

この惡黨は、そこにあるナイフで切つてやりたいのだが、お房の明るい顏を見ると凡ての暗さが歛られる。

「あ、い、燗だ、さあ一杯」

と山崎が酒をさすのである。

「僕ア、のみたくない！」

「おや、どうして？」

細い長い眉毛の下の黑眼勝ちな大きな魅力ある瞳、薄化粧までした仇つぽい姿である。嘗つてはサンフランシスコの下町で、何百人の男共を惱殺した女だ。その女から横眼でにらまれる。何度その横目に惱まされた三藏か。

「だつて、いけない口ぢやないぢやないの？」

「弱つたな！」

遊々しながら、杯を手にすると山崎は、

「當分逢へないかもしれないからな。」

「はゝゝゝ永久にか。」

「嘘！　嘘！　私、又遊びに來るわ。きつとゆくわよ、太田さん。その時はおごつて頂戴ね。そのかわり、あなたも來て下さるでしやう？」

「ゆきます！」

「ぢや、もう一杯！」

　根が料理人である山崎だから、酒を中心とした皿なんかも、田舎のキャンプではちよつとない揃ひ方である。そして酌婦あがりの女房である。壁にはいつものやうに三味線がぶらさがつてゐる。彼は三週間前に、畑の仕事がすんだので、一夜こゝで飲んだ。丁度ロサンゼルスの友達だと言ふ男が、紀州の男で山崎とは同縣人だと言つて、そしてお房と同縣人だと言ふ奇麗な廣島女をつれて來てゐた。この二組の男女のなまめかしい間にはさまつて若い三藏は、今年も又損をした悲觀をすつかり塗り潰して、いゝ氣もちで醉つ拂ひながら、何處となく自分に柔かいお房からの、餅のやうな感覺にひかれながら、夜を更かしたのであつた。

「ロサンゼルスへ來なさいよ、それや、とてもいゝ處ですよ。金儲けするなら、あちらですな。………」

　その男は、赤々とした丸い顔に陽氣な笑をのせて言つた。

「行きたいですな。僕はどうしてもゆく氣でゐます。しかし、斯うして毎年の不景氣ぢや旅費もないのです。」

「旅費なんか、僅かなものですよ。日傭(デーウォーク)に行つたつて一日五弗だからね。」

　三藏はこんな話を中心に、美はしい南の都會を幻に描くのであつた。そしてハリウッドの豪奢な生活なども見たかつた。

が、このたつた一度しか逢はない男に、弱い自分を見せたくない爲めに酒をぐん〳〵呻つたのである。

「ほんとに百姓も儲かる時はい丶けれど、こんなに損が續いちや何の爲めに働いてるのかわけがわかりませんわ。」

お房は、少し沈み返つて言ふのであつた。

「だからさ。」

相手の女が何か言はふとしたのを、一方の男が、ちよつと顔を顰らしたので、敏感な彼女は、隙間から覗いた鼠が、何かの危險にすつとからだをひこますやうに、兩肩の中へ首を縮めながら、それをてれかくすやうに、杯を山崎におくつた。その態度から三藏はこの女もたゞ者でないと思つた。で、合槌でも打つやうに、

「ほんとに百姓はつまらん！」

そんなことがあつてから、今夜は初めてであつた。

「――實はね太田君。」

山崎は、飲むと陽氣になる男だが、少し考へ込んだ形で言ひかけるのだ。そこで三藏はその瞬間、自分が大罪を犯したので、どうしてもこの土地から草鞋を穿かにやならんと言ひ出すのだらうと、豫感しながら、次ぎの言葉を待つのだ。

「相談にゆかうと思つてゐたんだが。もうこの土地も見込みがないのでね。」

「フン！」

「そこで又、もとの職業（しやうばい）に返らうと思ふんだよ。」

「その方がい丶だらう！　君としては！」

「恐れ入つたね。ぢや、折角堅氣にならうとしてゐた僕は、堅氣になる見込みがなかつたと言ふわけだね。」

「まあ、そんなわけだね。」

三藏はこの場合、淋しい笑を無理にあげるのであつた。

「ぢや、矢張り、素人の方には、さう見へたのね。」

お房は、多少の嘆を自分に見るやうに言つた。

――それから、話をきいてみると、お房の前の亭主だつた男が、山崎のありかを方々たづね廻つて歩いた揚句、ロサンゼルスの下町で、これも女のことから喧嘩をはじめ、殺されて終つた。もう、怨みをもつ男もないからと言ふので、この間ロサンゼルスからわざ／＼友達の石井がやつて來て、――彼はあちらで料理屋をやつてるのであの女は、そこの女將であつた――お房に今一度働いてくれ、そして山崎には臺所をやつてくれと言ふのだつた。ところが、ボール爺さんにはずつと借金になつてる話を言ふと、石井は、そんな金はいつでも出來る。おや、おれは手形を書いてゆかうと言ふので、おいて行つてくれたのである。そして一昨日ボールに逢つてすつかり話をきめ、明日はこゝをひき拂つてゆく決心をつけたのだ。――と言ふのである。うまいことを言つてやがる。それぢや一昨日ボールの家へ行つて、殺して來たのだらう。こして金を盗んで來たのだらう。その金で高飛びするのだらう。が、三藏は、

「それは結構だ。そんなわけかね。……時に、君と斯うしてわかれるとなると、いつ逢へるかわからないのだが、おや、お互に、なんだね、かりたり貸したりしたものは、きれいにしておかうね。」

山崎の顔色がさつと變つた。それ見た、こん畜生と、三藏は心の中で叫ぶのだ。が、山崎にしてみれば、この男に今日まで錢一文借りた覺がない。今、別れると言ふのに、何か、言ひがかりをつけるのだらう。それは、柔らく見へても永年俎板の上でナイフを使つて來た男である。妙な職業的氣質が、そこに偏侠な我の強さがあつた。だが、この場合である。氣質をのみ込んでるお房は山崎の横顔を、ちらつと見ると、

「と仰言ると、山崎が、何かあなたに？」

「まさか、忘れてはゐないだらうね。……」
「太田君！」
「う」
「まさか、言ひがかりぢやないだらうね」
「言ひがかり？」
「さうさ。」
「君も、みかけによらない度胸だね。」
「それりや君のことだ。」
「冗談ぢやない！」
「冗談ぢやない！」
「ぢやあ金でも君から借りてると言ふのか。」
「金？ はゝゝゝ。それや、金は金だが、同じ金でも斬れる金だ。」
「はてな！ 君から何を借りたらう？」
「そんなにとぼけられるものぢやないんだがね。」
「いや、全く忘れてるんだ。何か借りてるなら遠慮なく言つてくれないか。返さないとは言はんから。」
「それぢや言ふが、斧さ。」
「斧？」
山崎は笑つた。快活に笑つた。なんだ、あんなものを。買つたつて一弗か二弗のものぢやないか。しかも、古物だ。戯談ぢやない。で、

「はつはつはつは、う、さうさう！　斧を借りてたね、すつかり忘れてゐた。」
山崎はお房を顧みて笑ひながら、
「あれや、どこにあつたけな、出して來な」
「お、さうさう。爺さんが來てね、ちよつと貸してくれと言つてもつて行つたのだ。これは太田君のだからと言つたら爺さん、よしよし、ぢや、おれが三藏のところへ返しとくからと言つてたから、それですつかり忘れてゐたのさ。」
「えつ？　ポール老人がもつて行つた？　そして僕に返すと言つてゐたつて？」
「ウ、そしてまだもつて來ないかね。」
「冗談ぢやない！」
三藏の顏には眞劍な憂鬱が彫られた。こいつの計略にかゝつてるんぢやないか。夫婦がぐるになつて作つてる狂言ぢやないか。が、何ら不安らしい影に襲はれてゐない山崎は、もうこれですつかり不快な曇が晴れ渡つたやうに
「なんだね、太田君。僕ア又、君は金の百兩も貸してあるなんて言ひ出すのかと思つて、すつかり度膽を拔かれた。眞面目な顏をしておどかすもんだから。はつはつはつ……さア一杯。……」
おかしい。さうしたら犯人は他にあるのかな。山崎の言ふことが眞實としたら、この場合あの慘虐な場面を自分から言ひ出すことが危險である。そして、受けた杯をぐつとのみ下ろして頭を叩いた。――
と、大暴風のやうな音響が秋の茫漠とした平原を切るやうに三人の耳へ瀰々ひゞいて來た。何だらう。三人は同時にきゝ耳を立てた。お房は、たちあがつて窓を覗いた。そこには、森の樹々を透して、二つの大きな怪物の眼玉のやうな、ヘツドライトが爛々と閃きながら、この農舎に近よつて來る自動車であつた。自動車！　滅多にこんなところまで來たこと

「まさか、忘れてはゐないだらうね。……」
「太田君！」
「う」
「まさか、言ひがかりぢやないだらうね」
「言ひがかり？」
「さうさ。」
「君も、みかけによらない度胸だね。」
「それりや君のことだ。」
「冗談ぢやない！」
「冗談ぢやない！」
「ぢやあ金でも君から借りてると言ふのか。」
「金？　はゝゝゝ。それや、金は金だが、同じ金でも斬れる金だ。」
「はてな！　君から何を借りたらう？」
「そんなにとぼけられるものぢやないんだがね。」
「いや、全く忘れてるんだ。何か借りてるなら遠慮なく言つてくれないか。返さないとは言はんから。」
「それぢや言ふが、斧さ。」
「斧？」
山崎は笑つた。快活に笑つた。なんだ、あんなものを。買つたつて一弗か二弗のものぢやないか。しかも、古物だ。戯談ぢやない。で、

「はつはつはつは、う、さうさう！　斧を借りてたね。すつかり忘れてゐた。」

山崎はお房を顧みて笑ひながら、

「あれや、どこにあつたけな、出して來な」

「あ、あれですか、あれはあなた、この間ポールさんが來て貸してあげたぢやない？」

「お、さうさう。爺さんが來てね、ちよつと貸してくれと言つてもつて行つたのだ。これは太田君のだからと言つたら爺さん、よし〳〵、ぢや、おれが三藏のところへ返しとくからと言つてたから、それですつかり忘れてゐたのさ。」

「えつ？　ポール老人がもつて行つた？　そして僕に返すと言つてゐたつて？」

「ウ、そしてまだもつて來ないかね。」

「冗談ぢやない！」

三藏の顏には眞劍な憂鬱が彫られた。こいつの計略にかゝつてるんぢやないか。夫婦がぐるになつて作つてる狂言ぢやないか。が、何ら不安らしい影に襲はれてゐない山崎は、もうこれですつかり不快な蟲が晴れ渡つたやうに

「なんだね、太田君。僕ア又、君は金の百兩も貸してあるなんて言ひ出すのかと思つて、すつかり度膽を拔かれた。眞面目な顏をしておどかすもんだから。はつはつはつ……さア一杯。……」

おかしい。さうしたら犯人は他にあるのかな。山崎の言ふことが眞實としたら、この場合あの慘虐な場面を自分から言ひ出すことが危險である。そして、受けた杯をぐつとのみ下ろして頭を叩いた。——

と、大暴風のやうな音響が秋の汎漠とした平原を切るやうに三人の耳へ轟々ひゞいて來た。何だらう。三人は同時にきゝ耳を立てた。お房は、たちあがつて窓を覗いた。そこには、森の樹々を透して、二つの大きな怪物の眼玉のやうな、ヘツドライトが燗々と閃きながら、この農舍に近よつて來る自動車であつた。自動車！　滅多にこんなところまで來たこと

のない自動車である。農民をおびやかしてる强盜か、で、なかつたら又、あの白衣團か。お房は、驚きに戰き慄ふのだ。

「何だ？」

山崎は顧みた。

「自動車！」

「自動車？」

「自動車？」

三藏は、そこにあつたコップに酒を波々とついて飲みおろした。そして、

「ウン、何か怪しい奴が來たぞ。ホールドアップぢやないかな？」

山崎は、もう酒の醉もすつかりあがつて終つたやうに、三藏を顧みた。

「何が來たつてい・ぢやないか。」

悠々と酒をのんでる三藏だつた。

「出て來ましたよ、大きな奴が――」

お房は、もう山崎の後ろにかくれるのだ。二人の大きな影が、自動車から現はれた。そして入口に立つた。

「今晩は！（グッドイブニング）」

鼻眼鏡の、額の禿げあがつた、六尺餘もある、腹のとび出た男が、帽子も脫がないで、鷹揚に入口の戶をおしあけると言つた。そして、ぎろりと三人を見渡すのだ。

「グッド・イブニング！」

山崎は、凡ての日本人が外國人に對してやるやうな、そしてそれは外國人からは、異樣に感ぜられる腰の曲げ方で、更

に日本人獨特の微笑を口と目に湛へながら、行儀よく挨拶した。と、今一人の黒い縮れ毛を、山高帽からはみ出した、鼻の無暗に高い、そして二つの眼玉が深くぎろりと窪んでる、口のひき縮つた男が、後ろから覗くやうに、これも懐中電燈で洞穴でもみるやうに室内を見るのだ。

「何か御用で？」

山崎は、自分を落ちつかせる爲めに、ダーハムの煙草を巻きながら言つた。

「君は山崎だね。」

鼻眼鏡の男は言つた。

「さうです！」

「こゝに何年住んでる？」

「五年。」

「あの婦人は誰だ？」

「私の女房です。」

「あの男は？」

「太田君つて、私達とおなじ地主の畑をつくつてる友達です。」

縮れ毛の男は、後ろにゐて、一つ〳〵この問答を記帳してるらしかつた。

「何だらうね。」

お房は、泥棒でもないらしい、しかし人相の餘りよくないこの二人の闖入者に對して、別な不安を感じ初めた。

「ねえ、太田さん！」

のない自動車である。農民をおびやかしてる強盜か、で、なかつたら又、あの白衣團か。お房は、驚きに戰き慄ふのだ。

「何だ？」

山崎は顧みた。

「自動車！」

「自動車？」

「自動車？」

三藏は、そこにあつたコップに酒を波々とついて飮みおろした。そして、

「ウン、何か怪しい奴が來たぞ。ホールドアップぢやないかな？」

山崎は、もう酒の醉もすつかりあがつて終つたやうに、三藏を顧みた。

「何が來たつてい・ぢやないか。」

悠々と酒をのんでる三藏だつた。

「出て來ましたよ、大きな奴が――」

お房は、もう山崎の後ろにかくれるのだ。二人の大きな影が、自動車から現はれた。そして入口に立つた。

「今晩は(グッドイブニング)！」

鼻眼鏡の、額の禿げあがつた、六尺餘もある、腹のとび出た男が、帽子も脫がないで、鷹揚に入口の戶をおしあけると言つた。そして、ぎろりと三人を見渡すのだ。

「グッド・イブニング！」

山崎は、凡ての日本人が外國人に對してやるやうな、そしてそれは外國人からは、異樣に感ぜられる腰の曲げ方で、更

に日本人獨特の微笑を口と目に湛へながら、行儀よく挨拶した。と、今一人の黑い縮れ毛を、山高帽からはみ出した、鼻の無暗に高い、そして二つの眼玉が深くぎろりと窪んでる、口のひき締つた男が、後ろから覗くやうに、これも懐中電燈で洞穴でもみるやうに室内を見るのだ。

「何か御用で？」

「君は山崎だね。」

山崎は、自分を落ちつかせる爲めに、ダーハムの煙草を卷きながら言つた。

鼻眼鏡の男は言つた。

「さうです！」

「こゝに何年住んでる？」

「五年。」

「あの婦人は誰だ？」

「私の女房です。」

「あの男は？」

「太田君つて、私達とおなじ地主の畑をつくつてる友達です。」

縮れ毛の男は、後ろにゐて、一つ／＼この問答を記帳してるらしかつた。

「何だらうね。」

お房は、泥棒でもないらしい、しかし人相の餘りよくないこの二人の闖入者に對して、別な不安を感じ初めた。

「ねえ、太田さん！」

「お前默つてゐろ！」
このわけのわからない日本語で話してる女に對して鼻眼鏡は疑ひ深い眼でお房を制した。そして、ダーハムをすぱ〳〵喫んでる山崎を見直し、
「ちよつと君にたづねたいのだが、君はこの」
と言つて、彼は後ろの男から受取つて、
「斧が誰れの斧か知らない？」
「斧？」
山崎は叫んだ。斧？　三藏は、ぎくりとした。そして見ちやならないものでも見るやうにテーブル越しにその男の手にしてる斧をみると、全身を慄はした。
「あ、これや太田君の斧です。………」
「なに太田の？」
相手は一足、家の中へふみ込んだ。
「あ、血が……どうしたんですこの血が？」
二人はもう、家の中に入つて終つた。そして山崎はもう肩から摑まれてゐた。太田は、その斧を見ると、もう氣が遠くなりか・らうとしたが、どうかしてこの場を逃げやうとして窓に倚つたが、縮れ毛は、すかさず後から抱き込むやうに摑んで終つた。
「どうしたんですこれは！」
山崎は叫んでる。

「僕は何の覺もありません！」

三藏も叫んでる。

「靜かにしろ。オレ達は、これだ！」

と言つて、彼らは上衣の襟の裏にかけられた星形の徽章を示した。

「探偵？　しかし、それがどうしたと言ふんです、僕らは何も……」

「默つて警察まで來たらいゝんだ。」

「でも」

反抗しやうとする二人をピストルで脅しながら戸外へ引つ張り出した。

「あの、一體どう言ふわけですか？」

僅かしかわからない英語で、お房は、もう狂氣のやうに叫ぶのだ。

「お前も一緒にゆかねばならない。」

三藏は默々として外に立つて顧みた。

風車が秋の風にぎー／＼鳴つてる。大陸の荒野が底力ある凄みを二人の胸に燒きつけるやうに、秋をおくつた。

自動車は月の下の野を、猛獸のやうに驅け去つた。

4

カリフオルニヤ州各地の諸新聞は勿論のこと、サンフランシスコの數種の新聞には、翌朝の第一面のトップには握りこぶしのやうな活字の見出しで、「惡虐な日本人、善良な米國市民を慘殺す」と言つたやうな題下に、Y村の聖人と言はれて

ゐたポール老人が、一昨夜、斧をもつて脳天を立ち割られ即死の致命傷を與へられて、彼の寢室に斃れてゐたことを報じ、その犯人として有力な嫌疑者、太田三藏と山崎夫妻の寫眞が掲げられた。ある排日新聞などは、日本人のことと言つたら、それはどんな下らない小さな事件でも、第一の特種として常に煽動的な記事を書くので、この際全紙をあげて日本人を罵倒し初めた。その記者は探偵クラークス氏が、ポール老人が、金庫を破りに來た日本人に一喝を與へたので、賊は手にしてゐた斧を揮つて、いきなり闘爭力の弱い彼を一撃したのであらう、と言つたことから、その現場に自分が立つて見てゐたごとくに、斧の所有者である太田三藏の猛惡な姿を描出し、山崎夫妻もその時一緒にやつたものにちがひないと斷じ殆ど全面に亘つて魅力ある記事を書き立てたのであつた。そして論説記者は、吾人は多年東洋人、殊に日本人を排斥し、吾らと共にこのアメリカの地上に共存共榮す可く、彼らはその素質に於て既に缺けたところがあることを説いて來た。その最も適切な日本人の性格がこの事件に現はれたことを愉快とする。日本人の慘虐性は、彼らが二三世紀前に、如何に善良なヨーロッパの傳道家達を、水攻め、火攻め、若くは斷首の刑に行ふて痛快がつたかに見ることが出來、彼らの侵略性は、朝鮮支那に於ける近世の軍國主義に於てこれをみることが出來る。これらの評論は、吾人が十數年に亘つて大衆に説いて來た。斯かる民族は、この太平洋沿岸に一日も生存させてはいけないのである。全日本人をアメリカの地上から追放せよ。彼らは、吾らの建設しゆかんとする文化の敵である。今にしてその根を絶たずんば、布哇は半世紀を出でずして日本の領土となり、この美はしいカリフオルニヤは、黄ろい猿の爲めに占領されるであらう、と言つたやうな激烈な筆法をもつて煽動したものだから、民衆の昂奮が極度に達し、その中にも、アメリカの新聞に、ちよつと何か書かれても、まるで氣の小さな高利貸のやうに、神經をいら立てる日本の官吏、——長い日本の官僚生活が產んだ、何ら意見も見識もない、群小外交官達が腰をぬかさんばかりに驚いたのは、云ふまでもない。そして永年アメリカに生活してゐながら、彼らの生活に自信が立たない爲め、團體をつくり、その團體の背後にいつも日本の政府を守り本尊のやうにあがめてゐる日本人會の役員達

と言ふものは、在米の同胞を指導して、排斥の根を斷つ爲めに、眞面目な努力を續けてゐるかと言へば、さうでなく、因循で姑息で、見識がなくて、それは今は水平社と稱してる人達の祖先が、宿命的に賤民とあきらめてゐたやうに、彼らは、白人と言へば自分達よりも優秀な民族である如く思込んでゐるものだから、英字新聞に掲げられる記事には、いつも辟易して終ふのである。殊に全洲に亘つてのこの激烈なる輿論に出遇したので青くならざるを得なくなつて來た。日本人會の幹部達が、領事館へかけつける。總領事も困つた問題が起つたと、顔をしかめる。彼にしてみれば、自分の在任中は、なる可く悪い方面の材料が尠ないことを祈つてゐるのである。面倒な事件が起つて、それにかかわり合つたら、過去の經驗に照らして一度もよい結果を得ないのである。だから、事勿れ主義が、安全第一なのだ。だから氣が鬱してゐる。日本人會の方でも、自分らの同胞の悪い奴が、善良な米人を殺して、金を盗んだと言ふのだから、それを辯護するわけにゆかない。これはどうしても、吾吾善良な日本人の爲めに、謝罪的な聲明書を發表するに限ると言ふ智惠である。この相談には領事も不賛成でなかつた。そして、領事館に雇つてゐる米人――この人達はアメリカ人から見たら、殊に排日家達から見たら、轉びバテレンなのである――にその聲明書の草稿を依頼したものだ。

ところで、外はどうか。號外！　號外！　である。辛辣な司直の手が、民衆の聲と共に、太田三藏と山崎夫妻につめ寄つた。それはどんな風に、如何なる會話でやられてゐるか、誰もしらぬことである。が、號外は民衆に傳へるのだ。太田三藏は犯人であると自白したと。そして山崎夫妻の嫌疑が晴れたと言ふことであつた。だから、いよいよ犯人が日本人だときまつた以上は、坊主憎くけれやの筆法で、家庭に、倶樂部に、會社に、電車の中に、あらゆる新聞を手にし、號外を手にする老若男女が、彼らの思ひ思ひの日本人の顔を頭に描き、心に映して、その日本人を憎み初めた。ガツデム・ジャップのどいつでも、一つ叩きつけてやりたい氣分が、全洲に燃え初めた。だから煙草屋のスタンドに、鳥打帽を横ちよに冠つた不良組や、下級なレストランに、コンビーフ・キャベツを食つてる勞働者や、酒屋がなくなつてからその株をもら

つたドラッグストアや、ソフト・ドリンクのパーラーなどに集る有象無象共が、寄るとさはると、ジャップ談である。たまたま町を通る日本人を見かけると、スウエヤだ、それ位ならまだよいとして石を投げつける。唾を吐きかける。煙草の吸殼をぶつける。腐れ卵を買つて來て、日本人の家だと言へば、どこにでもなげつける。この際だからと言つて、勞働組合が、彼らの失業者の爲めに、雇主に迫つて、日本人の勞働者を解雇させる。あつちにもこつちにも戰慄す可き事件が起きて來ると、日本字新聞が、それらの種を大きく記事にするから同胞社會の不安が一層濃厚になつて來る。人種保護論が初まる。領事館の無能が責められる。そこで、遂に、領事は警察署長に面會を求めて、日本人保護を依賴する。一方、善良な日本人全體を代表すると稱して、日本人會の聲明書が、英文新聞に掲げられた。が、アメリカの市民は、これだから尙ほジャップがいやだ。自分らの仲間から惡黨が出たからつて、自分達ばかりよい顏して、その同胞を惡く言ふとは何事だ。大體日本人と言ふ奴は國際外交に於ても、自分の國民を馬鹿にし、輿論なんか少しも取りあげない國だ。そして英國にも米國にも獨逸にも、イタリーにもいい顏をしやうとしやがる。あの狡猾さがいやだ。こんな陰險な奴らだから、一層排斥せねばならぬと言つたやうな論文が、その聲明書に隣して出てる新聞もあるのだ。さうすると民衆は、なる程とそれに和する。さあ、民衆大會だ。排日の巨頭達の名前がならんで、大大的廣告だ。あつちにもこつちにも暴風のやうに再起し初めた排日運動である。この民衆の昂奮に水をおくる如く、號外が、刻刻町町に叫ばれた。太田三藏は、確かに自分の斧を揮つてポール老人を殺したばかりでなく、老人の愛犬ジミーまでも慘殺したことを逐一白狀したと言ふのである。そして彼は五年前にアメリカへ密航したものであることもわかつたと言ふことになつて來ると、民衆の激昂はもう極度に達して來た。三藏を民衆に與へよの聲が高く激しく叫ばれた。南部アメリカで、獸のやうな黑坊が白人少女を凌辱するとその復讐として、永くアメリカ人の血を湧かせるリンチ。その私刑を吾らに果させよと、民衆は裁判所へおしかけるのであつた。石段の前の黑山のやうな民衆に對して一人の縮れ毛の背の高い男が、革命當時のフランス人か、ロシヤ人のやう

な態度で、大道演説を初めるのだ。花火のやうな拍手と歓呼。

いよいよ斯うなつて來ると、日本人會の連中は勿論、在留同胞の不安が刻刻增して來た。いつ燒打に逢ひ、或は撲殺、誤殺のうき目に逢はぬとも限らない。彼らの代表者は、判事の事務室に出頭して、青ざめながら誓つた。裁判の結果、彼三藏が、善良なる市民を慘殺したことが明白となつた以上、一日も早く彼を死刑にして、この社會に漲つてる險惡な日本人嫌惡の空氣を一掃してもらひたいと。彼らが、裁判所から出るところを、民衆にとりまかれた。そこで彼らは一日も早く三藏を死刑にしてくれることを頼んで來たと答へると、民衆の代表者は、又石段の上にあがつてそれを報告した。

「リンチ！　リンチ！」

の聲が叫ばれた。そして燃え立つたやうな叫喚が間もなく起つた。日本人の代表者らは、自分達は善良な點に於て、あなた達と少しもかわらぬ日本人である。アメリカの爲めに私達は誓つて働く決心をしてゐる。そして惡い日本人は一人もゐなくなるやうに、私達は努めますと、言つた。

「そいつも、やつつけろ！」

洪水のやうにおし寄せる群衆の中をくぐつて、代表者達は自動車に飛びのり、漸やく敗軍の將が、命から〱逃げのびたやうな心もちに、ほつと息づいた。

——三藏である。毎日〱のきめつけるやうな拷問である。いや、それも相手は英語である。相當に會話の方も自信がついてゐた彼だつたが、斯うした場合に立ち合ふと、手厳しい夕立のやうな詰問が、ある時は半分も、そしてある時は意味を逸つてさへわからなかつた。自然、頭がぼうとする。そのぼうとした頭を更に叩きつけるやうに矢繼ぎ早やにつめよる刑事だつた、探偵だつた。山崎は既に何もかも白狀して終つた。あの斧はお前の斧に違ひはないし、お前でなければあの斧でボールを殺すものは絶對に他にはないとまで言つてる。斯うなつた以上、最早やお前の口から、私が確かに殺しま

したと言ふ言葉を私達がきくだけである。どうだ、どうだとつめよられると、何だか自分が、あの晩、矢張り殺して終つたやうな氣もちに、押されると、夢遊病者となつて殺して來たのかもしれないと言つたやうな、不思議な考が、恰かも自分が經驗したことを目のあたり思浮べるやうに、殺人の光景を描くのだ。あの白髮頭が、暗の屑毫の中から、むつくり起きあがつて、泥棒！ と叫んだ時、何？ と言つて、この斧で――瞬きもせぬ眼でじつと三藏の顏をにらみながら、その口の微動の一つだも逃がすまいとして、黑血にまみれた斧をつきつけてる探偵と刑事の前におのゝきながら――ぐわんとやつて終つたやうな氣にもなるのである。

「ほんとに殺したんだらう？ えつ？」

刑事はその斧を三藏の鼻のさきに、つきつけるのだ。人殺し臭い匂ひが彼の鼻を襲ふと、彼は眼を閉ぢた。

「殺したに違ひがないだらう。」

探偵は、その時、おつかぶせるやうに言つて、彼の肩を鷲掴みにした。と、殺した。殺した。たしかに殺したと言ふ意識が、彼を支配し初めた。秋子の胸からたらたら流れた血潮だ、ぎやつと叫ぶ口を押へて、喉笛にさし込んだ刄だ。暗の綠の中を一さんにかけ出した自分だ――が、それはボールではなかつた。あの秋のすすきの穗を思はせる白い老人ではなかつた。ではなかつたが殺した覺はたしかにある。もう免れ難い何物かが彼の運命を搾つてるかに思はれた。彼は、震ひながら口を開いた。

「違ひありません。」

「違ひない？ たしかに殺した？」

「さうです。ですが、私はボール老人を殺したのではないのです。」

「何を？」

相手の二人は、呪み合つた劍士がその刃を二つかち合せるやうに、鋭い眼光をかち合せた。そして、

「ぢや、誰れを？」

同時に二つの口からピストルの丸のやうな聲が發せられた。

「さあ、それは？」

「ポールを殺したに違ひがないんだらう？」

「いゝや。」

「ぢや、誰れだ？」

斧でテーブルをがちやんと叩いた探偵だ。

「ジミーを殺したんです。」

「ジミー？」

刑事は二つの眼を倍に光らした。「ポール以外に今一人誰れかを殺してるのだと思つたからだ。が、そのジミーはポールの愛犬だつたことがわかつて來ると、その日豫審がそれきり閉ぢられて、彼らは、三藏の說明した畑の隅を掘り返しに行つたのであつた。そこからまだ腐つてゐない黒い犬の死骸を掘り出し、鬨聲をあげて、裁判所へひつ返して來た。もう彼に間違はない。犬についていろんな話も村の者からきいてきた。この犬を殺した位だから、ポールを殺した者は他にないにきまつてゐる。血にまみれた斧と、黒犬の死骸。もうこれで澤山である。――

「ジャップを渡せ！　三藏を出せ！」

裁判所を取りまいた群衆の熱狂したわめきが、窓から彈丸のやうに飛び込むのだ。警戒の巡査達は、もう手のつけやうもないのである。一日も一刻も猶豫したら、いつ暴動が起らぬとも限らぬ場合に、當局が當面したのであつた。

が、晝と夜のこの復讐心に燃えた群衆の包圍の中に、豫審が閉ぢられ、陪審官にとりまかれた裁判が、間もなく開廷された。一言でもききたい。一目でも見たいと、その第二號室に、朝から、男が、女が、群衆がつめかけた。門をひらいて二分間で門が閉ぢられた。殘つた群衆が、窓窓を見あげ、その窓から、今に誰かが何かを報じてくれるのだと、そんなことをあてにしながら、がやがや騒ぎ立ててる。――

さうしたエキサイトメントの中に、三藏は死刑の宣告を受けたのであつた。

「三藏は死刑を宣告された！」

表てに現はれた煽動家の一人は群衆に向つて言つた。

「死刑？　勿論だ。だが、その死刑はオレ達民衆にやらしてもらひたい。三藏を渡せ。ジヤツプを引き出せ！」

斯うした言葉が叫ばれる。

が、その時、三藏は死刑囚として掟てにされた規定通り、手錠をはめられて、暗い一室に監禁された。群衆は、夕暮れになつても散らなかつた。

6

もう一時間もしたら、制帽を冠つたブツチヤのやうな、眼のぎよろりとした、毛虫のやうな髭を鍵形の鼻の下につけてる男に護られて、三藏は庭にひき出されるのだ。そこには高い階段があつて、彼はそこを昇つてゆくのだ。頂きに昇りつめると彼は黑い布を頭から冠させられるのだ。そして上から垂れさがつた繩の輪に首をひつかけられると、お！　今まで大地のやうに彼の足を支へてゐた板が、合圖と共に、ばさんと外される。――それがもう一時間の後に來るのだ。しかし、三藏は一方鐵棒で枠（ワク）された三方コンクリートの監房の中の、もう秋も末の、ひんやり重い冷い部室の隅におかれた寢

窓の、尻の方に兩手で頭を抱へながら、死刑囚の被せられる着物で、じつと動かずに腰をおろしてゐた。一つしかない窓、勿論鐵の棒で枠された窓から、大陸の地平線を輝きに滿ちてあがつて來る太陽の光が、不幸な者よ、私に從れと言つたやうに、母のやうな溫かさ、柔かさで、冷たい黑いコンクリートのフロアにさし込むのであつた。そして三藏の半像が金線で縁とられたやうに浮いてゐるのだ。その瞬間。がちやんと向ふの方で、大きな鍵で鐵の戸をあける響きがすると、微かな足音が、コンクリートのホールに響いた。そして間もなく人の聲がしたと思ふと、彼は、彼の名を呼ばれてゐた。靑山牧師が、そこに立つてゐるのだ。

「もし！」

鐵の枠を透して、長いフロックコートの姿は、近眼鏡の顏をそこから覗かした。

「太田さん！」

しかし、三藏は顧みもしなかつた。

「私は××敎會の牧師です。あなたの爲めに神樣にお祈りに來ました。」

寢臺の端に頭を抱いて、伏してゐた三藏は冷かにその聲の方へ眼をやつた。

「誰に祈るのです。」

「神樣に。」

「あなたは誰です。」

「牧師です。」

「祈つて貰ふなら神樣に祈つて貰ひます。」

「神樣に？」

「人間には何もわかりません！」

「人間には何もわからない！　しかし神は——」

「神のことはもう澤山です。神のことなら神自身からききましよう。」

牧師は、窓から無數の金線が一束になつて投げ伏せられてる暗い監房の隅に、岩のやうに蹲まつてる同胞をふつめた。

「おお神よ……」

牧師の瞳には露が光つた。が、

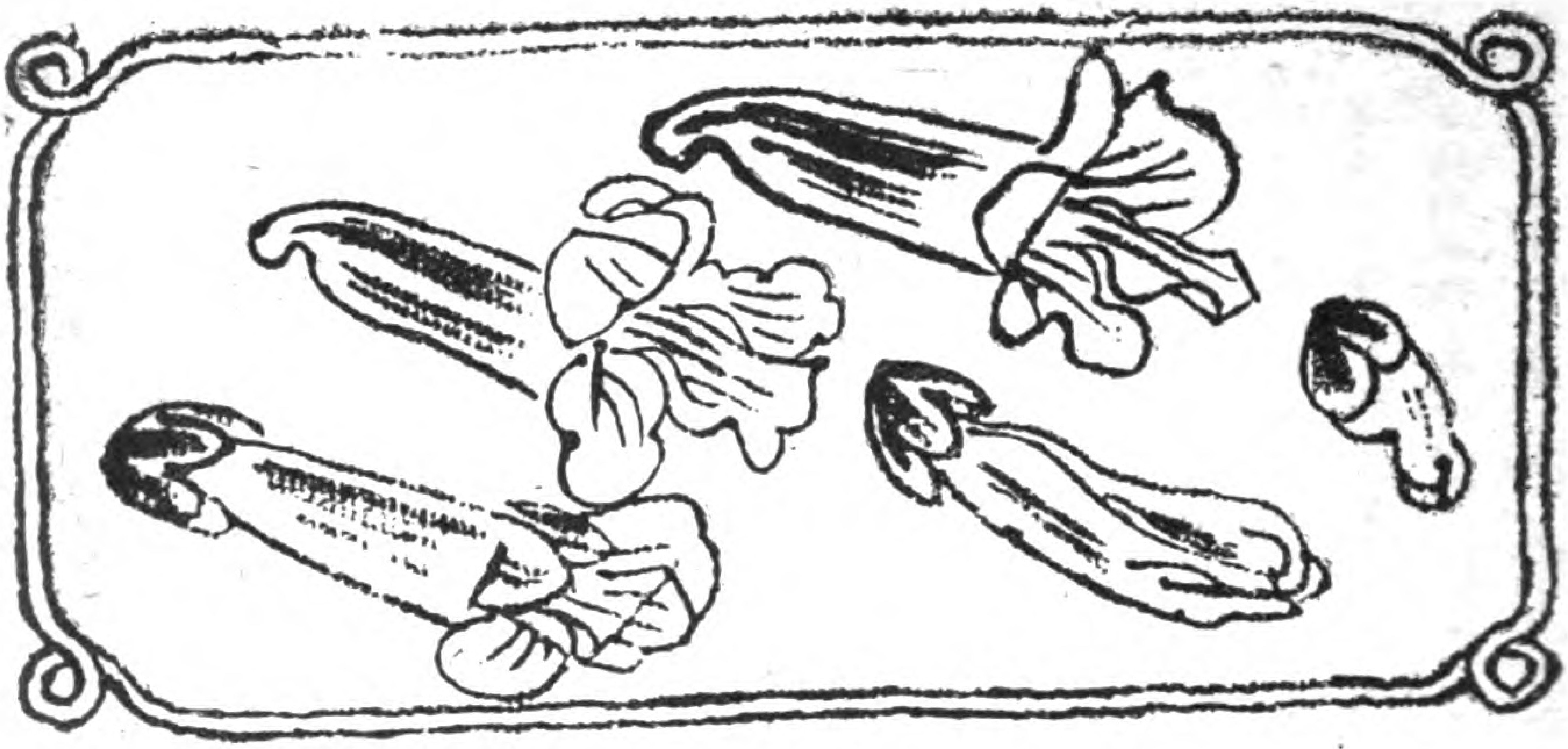
「もう歸つて下さい。」

立ちあがつた三藏は狂つた獸のやうに怒鳴るのであつた。

「…………」

秋の靜かな朝であつた。

——了——



支那（長篇小說）

前田河廣一郎

十七

しばらくすると、印度人の武裝した巡警が、一人の支那歌劇へ出る俳優のやうな老人を中へ挾んで、ハムマーストン氏に面會を求めてゐるのだと云つて來た。

老人は、雲を拂ふ仙人のやうに、黑い印度人達の腕から、麻の袖を振り拂ふと、仰々しく支那風な敬禮をして、流暢な英語で自分を紹介した。

『ユージイン・ウーと申しまする。閣下のもと雇人でありました李刀達の件につきましての御願ひ。ほんの五分間だけ、御多忙の時間を御割き下さるやうに。――』

ハムマーストン氏は、先づ、その濁りのない、非廣東人らしい英語の敎養に氣を奪はれた。

『トム・リーのことかね？』

「人間には何もわかりません！」

「人間には何もわからない！　しかし神は——」

「神のことはもう澤山です。神のことなら神自身からききましよう。」

牧師は、窓から無數の金線が一束になつて投げ伏せられてる暗い監房の隅に、岩のやうに蹲まつてる同胞をみつめた。

「おお神よ……」

牧師の瞳には露が光つた。が、

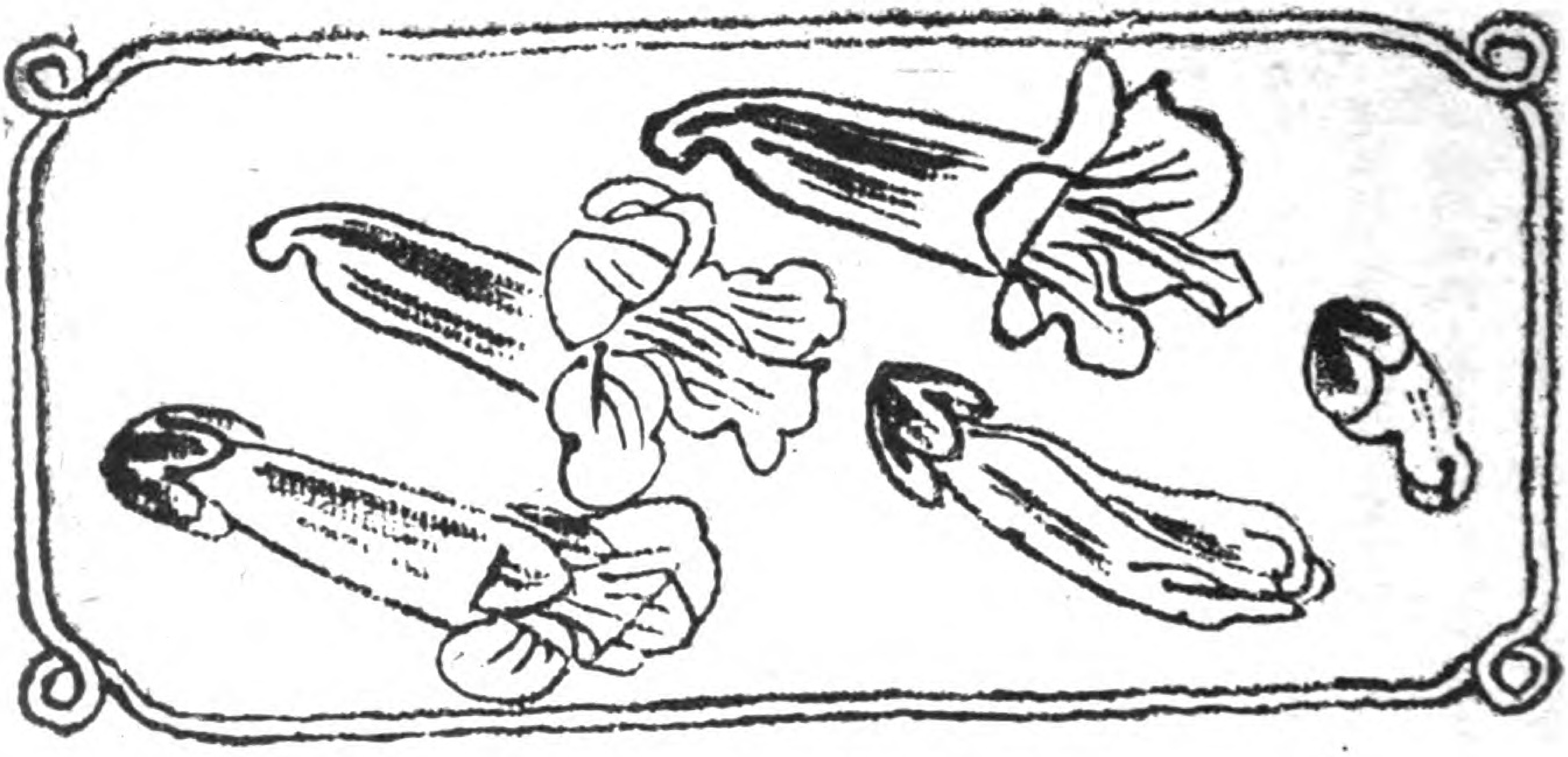
「もう歸つて下さい。」

立ちあがつた三藏は狂つた獸のやうに怒鳴るのであつた。

「…………」

秋の靜かな朝であつた。

——了——



支那（長篇小說）

前田河廣一郎

十七

しばらくすると、印度人の武裝した巡警が、一人の支那歌劇へ出る俳優のやうな老人を中へ挾んで、ハムマーストン氏に面會を求めてゐるのだと云つて來た。

老人は、雲を拂ふ仙人のやうに、黑い印度人達の腕から、麻の袖を振り拂ふと、仰々しく支那風な敬禮をして、流暢な英語で自分を紹介した。

『ユージイン・ウーと申しまする。閣下のもと雇人でありました李刀達の件につきましての御願ひ。ほんの五分間だけ、御多忙の時間を御割き下さるやうに。――』

ハムマーストン氏は、先づ、その濁りのない、非廣東人らしい英語の教養に氣を奪はれた。

『トム・リーのことかね？』

思はず、彼も釣り込まれてゐた。

『はい、その李刀達奴でございまする。』

『まあ、こちらへ御はいり。お前達、よろしい。だが、無闇と支那人を通過させてはならんぞ。』

かう云つて、副領事は、印度人の巡警二人を、指の先きで追ひ返へした。

『李刀達、あれは、閣下。大きな魚でございましたぜ！』

老人は、くるりと眼を剝くと、まじろぎもせずに下から、紅い西洋人の顏を見上げて、練絹のやうな長い髭をさんさんと撫でた。

『大きい魚とは？——この私には、支那の詩的なメタフォーアはよくわからんのだが？』

老人は、輕るく頷いた。

『現在、貴國政府側でも、廣東政府側でも、あの考へても忌はしい記憶を喚び起しまする沙面の開鎗な、あれの最初の砲聲が、どちら側から發したか——御存知のとほり、非常な政治的重要點となつて居りまするだて。閣下は、はたして、あの第一發は、閣下の部下の水兵達が放つたものと御考へになりますかの？』

『フンム——そのことか？　だが、私は、さういふ重大な事柄を貴方と御話しするには、適宜なクレデンシヤルと云つたやうな物の缺乏を惧れてるのだが——つまり、貴方は、どこの何人であるか、どんな資格で私にさういふ會話を御挑みになるか？……』

老人は、乾いた掌を樂器のやうに二つに合はせた。恭しく胸の間から取り出したのは、洋封の紹介狀である。

『英國の御役人達は、きわめて格式を尊重されることは、ダウニング・ストリートの美はしい傳統でしてな。——これは、北京の英國公使閣下からの、御紹介ではございませぬが、私めの職柄に關しての御賞めの言葉で御座りまするて。——骨

蓄屋でありましてな、些か、かの地に於きまして、屢々御意を得て居りましたもので。』

ハムマーストン氏は、數行の文字を素早く讀み取ると、レターヘッドや署名にちよつと眼を留めた上に、折り返へしてその推薦狀を老人の掌へ渡した。

『――隨分と手びろい御商賣ですな。では、トムとの御關係は？』

『そのことで御座りまするて、何よりの要點でな。――李刀達は、あれは、御存知かも知れませぬが支那人でありましてな。』

老人は、稍まぢかに顏を寄せて囁いた。

對手は、西洋人の複雜な動作の一つとして、金色の和毛(にこげ)を生やした手を、片手の指で輕るく叩いてゐたが、その言葉によつて兩手が大きく離れると、空中に輪を描いて、ハムマーストン氏の後頭部へぐるりと廻はされた。その兩手の枠に嵌まつた西洋人の顏は、紅い顏面に、紅い口を開いて、高らかに哄笑してゐた。

『貴方は、たしかに諧謔が上手だ。――だが、私は、この忙しい午前の時間を、ホンコン・クラブのロビィにゐるつもりで過ごしてゐはしないのだからね。』

『ところが――』老人は、險はしい眼を見せて、顏を遠退けた。『これ以上に重要な點が、どこにありませうや？ 閣下に御訊ね申上げたいのですよ。あれが支那人――中華民國國民の一人であればこそ、閣下も、これからの話を御聽きにならうと云ふもの、もしあの青年が英國人や日本人でありましたなら、もう事件の興味は、自から別な方面に向はねばなりませぬてな。――閣下、沙基馬路に於きまして、第一發の砲聲らしい物を起こしましたのは、あの李刀達といふ支那人の仕わざですぞ？』

『どうして、何故、何處でですか――？』

『さ、そこです。何も彼も御話し申上げませう。――ですが、その前に、閣下に御願ひしなければならぬことは、暫時、この附近の御人拂ひをして戴くことです。國家と國家との機密に屬する類ひの報告でございまするてな――。』

ハムマーストン氏は、快活に片手を振つた。彼は好奇心と妥協した。

『おい、お前達、ちよつと遠慮するやうに。――五分間でよろしい!』

それから、外交的に、卓の上の煙草が老人の方へ向けて蓋を開かれた。老人は一禮しながら言葉を繼いだ。

『惡るい青年ですよ、あれは。――閣下も七ヶ月間料理人として御使ひなすつた上は、よつく御見越しのことと存じますが、いたつての惡戯者でしてな。あの火、事もあらうに、横丁の寶湯屋の爐の中へ、あの緊張した一刹那、三ヶの花火を投じましたのですよ。それは、私の方に歷然とした證據のあることなのでしてな。證人は勿論。そこで、それからが、あの修羅場の出現でございます。閣下も御存知のとほり、あの青年、最後まで沙面の方に挑戰的な態度をもつて、學生や士官達とわめいて居りましたでな。――どうです、この事實が、何かの御役には立ちますまいかの? 國際的に?』

副領事は、すべての動作を沈潛させて、ひたすら、巨大な體軀の精力を、唇の間に嚙んでゐる、點火しない葉卷を動かすことにのみ集中してゐるかに見えた。

中庭には、士官の聲高に號令を掛ける響がした。室内の日光は、一吋ごとにじりじりと退くと、不思議にそのあとからむんむんいふ烈暑が加はつて來た。

老人は、汗一滴流さずに、端然と掛けてゐた。

突然、副領事は、野獸のやうに吼えた。

『賣るかね――身柄を?』

老人は、はつとなつて、片手を團扇のやうに擧げた。

『金——ではないので、不肖の値段は。香港と沙面とから、直ちに英國軍人の撤去が欲しいのです！』

開かれた窓の外の光景が、すこぶる單調なものであつたとしても、それは、複雜な心理活動を營んでゐる窓のうちの二人によつてさほど注意されてはゐなかつた。二人は、ただぼんやり、戸外一面にはびこる廣東の夏を感じてゐた。そして、この際、ハムマーストン氏の方が、どちらかと云へば、痛切にその暑さの中にある自分を自覺した。

『個人的御忠告ですか？』彼は、やつとこれだけを云つて、葉巻へ火をつけた。

『いや、いや、閣下、交換條件ですよ。立派な國と國との取引です！——金ならば、まだほかに取り分がありませう。私は、さういふ向の支那人とすこしちがひましてな。』

『問題の外ですな。千八百四十三年……』

『いや、南京條約は、南京條約です。われわれ國民黨員の關知するところではない筈。——案外、お國の外交は、國民の思想生活と懸け隔つて居るではありませんか？　この間まで勞働黨內閣を戴いて居られた大國民にも似合はぬ反動振りですな！』

『ミスター・ウー、何といふ私の愚かな人間だつたことか！　一體、貴方は、かういふ高等政策に關する問題を、この私ごとき、謂はば商取引だけの調査の役にある總領事館員の一人へ御話になつてどうなさるおつもりか！——これは、畢竟、公使館問題ですよ、否、むしろ、本國政府の外交であるとも思はれる。貴方は、たしかに御話しの開拓の方法を第一番に誤まられたのだ！』

彼はかう云つて、麻の手巾で顏中をぐるぐるつと拭いた。

『——トム・リーを御存知の貴方をさし措いてですか？』

『しかし、それは個人的雇傭關係と云ふものだ。』

『よろしい、それで十分なのですよ。私はただ閣下に、それだけを御承任下されば滿足するものです。この問題の持つ屈伸性は、北京公使閣下なり、それともチエムバーレイン氏なりに、いづれ到達するものと思はれます。だが、先達の歐洲大戰によつて、われわれは、尠くともアメリカ大統領から民衆外交といふ一つの新しい政治を教はりました。これからの支那の大衆は、皆その新しい政治をもつて、祕密外交に對抗して行くでせう。それにつけても、私は、先刻も申上げましたやうな交換條件は、明らさまにこれを掲げましても、當事者の間には何の蟠りもないことと思はれます。但し、双方で、一個人李刀達といふ人間を、宣傳の具に使用するといふことの德義上の問題は別でありまするが！　如何でせう、副領事閣下、貴方があれほどまで御認めになる李刀達、貴方の厨房に過去七ケ月間勤務しました李刀達の件について、總領事閣下と一言の御相談がありましては？――』

『殆ど問題ではありますまいな。』

老人は、はじめて象牙の骨の扇を取り出して、ぞろりと擴ろげた。

『――でも、殆ど物の數にもならぬ、アブレ者の學生三人に、多少の機密費を御惠みになるだけの慈善心をお持ちになる閣下のことですから、隨分、御考へになれば、英國の利益かとも思はれますがな？』

彼は涼しさに、私かに微笑んだ。

『澤山だ！――貴方は、妙な云ひ掛りを附けにこの役所へ來られたのだな？　即刻、この驟馬へ乘つたやうなお話を疊んで、ここを出て貰ひたい！そんな閑人のお對手はまつぴら御免だ！』

ハムマーストンは眞紅になつて、白い靴を鳴らした。

『は、は、は、――この老人が、さほど御邪魔なら、即刻退場しませう。だが、よろしいですか、ハムマーストン氏よ、この話はもうこれだけで、英國側とは打切りでございますよ！　私は、東洋に歴史的な執着力を持つ英國のために、この

話は、この事實は、すつかりこのままを廣東政府に讓つてやりませう。――その方が、むしろ私としての愛國的な行爲かも知れませぬてな。然らば、非常に御邪魔いたしました。グードバイ！』

扇は骨の重みで、流れるやうに老人の手へ折り疊まれた。衣服の襞をなほした彼は、恭しく頭を垂れると、絨緞の上をしづかに支那靴で踏んだ。

『ま、ちよつと待ち給へ。――トム・リーは、一體、いま何處に居るのですか？ 具體的な話は、そこからはじまるのぢやないかね？』

副領事はあはてて、先づ自分から椅子へ重さうな腰をおろして見せた。

『さア、』老人は、髯を愛撫しながら、深く呼吸を曳いた。『李刀達は、たしかにこの私が保管して居りまする。と云つて、現在、支那に居るか、日本に居るか――そこまでは、明白に申上げるまで貴方と私の交渉が進んで居るわけでもなし、兎も角、生きてゐることだけは事實です。或ひは、この瞬間、沙面の向ふ側を歩行して居るやも計られませんし、それとも香港のヴィクトリア女皇の尊像を仰いで汗を拭つてゐるかも知れませぬ。日本――この國は、御存知でもありませうが、孫文、黃興以來、われわれの唯一の避難地でありましてな。ま、この話は、これ位で打切りませうて。グードモーニング・ユア・エキセレンシイ！』

吳友仁老人の踏み出した芝生には、烈々とした南の太陽が虎斑のやうに燃えてゐた。彼は、數歩無意識に歩み出してから、自分のパナマ帽から、胸や裾へかけて、手の込んだ綾のやうな濃い陰影を投げてゐる頭上の榕樹を仰ぎ瞻て、何かその間から、洩れて見える蒼空にまでも感じたやうに、

『腰の弱い奴ぢや！――よほど、本國政府も疲れてゐると見えるわい！』

と支那語で呟いて、右の拇指と人さし指の間に、さらさらと自分の髯を捲くやうに撫で上げた。

二人のまつ黒な印度人が、もう一度、銃劍を閃めかしながら、彼れの兩傍にぴつたりと寄り添つた。

『ハロー、英國軍人、お苦勞樣！』

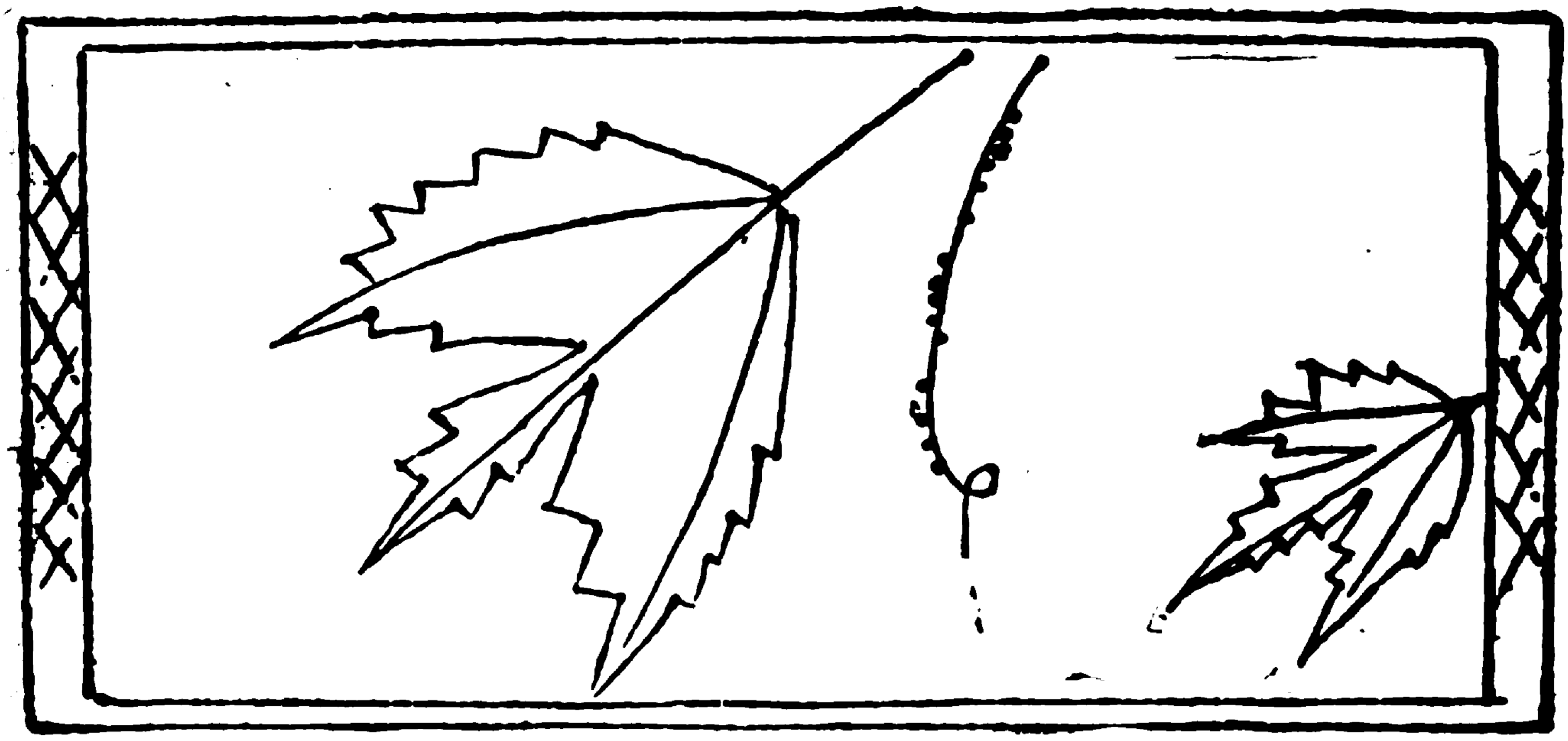
若やいだ聲になつた老人は、かう左右の二人を揶揄つた。

印度人の一人は、馬のやうな大きい眼を剝くと、驚くべき單純さを顏にあらはして、羊のやうな低聲になつた。

『支那人よ、先へ歩ゆめ！』

（つゞく）

作者からの御詫び——今月號の分は、讀者には何とも申譯けがないのですが、私の個人事情によりまして、どうも思ふやうに締切までにペンが運べなかつたのです。來月はきつと、この御失望を償ふつもりで大努力をしますから切に御ゆるしを乞ひます。



最後の墓

和田傳

つひに惣右衛門には、生活を根元から變へなければならない時が來てしまつた。この綠の平野のなかで、金を出して米を買ひ、味噌醬油を買ひ、この日夜近海の波の音を耳にする土地で、もはやふつつりと魚も口にすまいといふ生活が、つひに決定的に來てしまつたのである。

自然との絶え間ない格鬪に生涯を擧げて來た農夫にあつては、老衰が一たび訪れると、その歩みは駿馬よりも速い。老衰は惣右衛門のうちにそのとつておきの場所をたづねあてたものの如く、喜び、躍り、見る見るその行程を進めた。老いて壯者

を凌いだ惣右衛門も、かくて大樹の朽ち倒れる如く仆れたのである。

それは、昨年の收穫時に始まつた。秋冷とともに惣右衛門も、鎌を磨ぎすまし、勇みたつて稲田へ降りたのである。ともすれば泡のやうに消く、身體の衰へに思ひあたる疑惑は、その時ものの見事に吹散してしまふ筈であつた。ところが、そこにはつきりと、彼の力は數字的に正しく計り出された。彼は一日に一反あまりの稲は刈れた。だのに、六畝も刈らないうちに太陽は山に沈んでしまつた。その時彼は、畔に腰をおろし、夕陽を眺めて泣いた。六十八で樂々と米俵を擔ぐこの逞ましい元氣者は、しかし、その年は俵が腰より上にはもちあがらなかつた。彼は、隣人の庄左衛門に擔いでもらつて、俵を土間に積みあげた。

しかし、それでもなほ、働くことを思ひ諦めるには、三ヶ月が費されたのである。三月はじめまでの冬籠りの間、惣右衛門は、なほ陽春とともにたちかへるかも知れない力を冀つた。そして物置の前の日當りに、彼は俵を据ゑて置いた。彼は、肢體のすみ〴〵から力を呼び集めてそれを擔いでみた。そのため、酒の力をかりさへした。けれども、その打つづく必死の格鬪の末にも、俵は、石のやうに重く、腰より上にはもちあがらなかつた。

長い冬が明け、海から温い風が吹きはじめると、惣右衛門は、遂に覺悟を決めて、地主の家を訪ねた。かくて彼は、五十年の間耕して來た田畑を、かへしてしまつたのである。

十年前、一人の息子に神奈川へ逃げられて、やむなく田畑をかへしに行つた時、息子が再び歸つて來たならば、またその田畑は耕らせて貰へるようにと、くどくどと頼み込んだ惣右衛門に向つて、いま、十年の後、地主は訊ねた。

――たうとう神奈川へ行くかな？

――なんの！死んでも行くもんですけ。

彼は顔色を變へて答へた。

——そいでもこれからは、町場者のやうな暮しをせずばなるまい。

地主の言葉の通りであつた。そのわかりきつた言葉が、人の口から言はれてみると、異様な恐しさで彼を打つた。

金は、神奈川で職工をしてゐる長男が、月月送つて寄來す。働けなくなつたとは言つても、それゆゑ彼は、食つてゆくに困りはしないのである。どころか、口の多い水呑百姓から羨まれる、滿ち足りた暮しは、これまでにも増して出來るのだ。

けれども、そのためには、日ごとに財布の紐を解かなければならない！財布の紐を、日ごとに解かなければならない！

これまで惣右衛門の生涯にあつて、財布の紐を解いてなかからゼニをつまみあげることほど、重大な事件はなかつた。

これまで、彼は一年に幾度、その古風な淺黄色の財布をとりあげたであらうか？……

妻女には若死をされ、やがて一人息子の屈強な身體を工場にとられた後も、彼は植物のやうに土地から離れなかつた百姓である。その上、彼の家は、祖先から世世百姓の名人を出して來た。惣右衛門も決してそれに洩れなかつた。そして彼は、ただ一人であつた。年貢を納めて、土間に殘つた俵は、一人や二人で食ひきれるものではなかつた。町では、肥料屋は米屋を兼ねてゐる。彼は肥料代として米を拂へばよかつたのである。

彼は畑から大豆を穫り入れると、それを大釜で煮て、足で踏んで味噌をつくつた。餘つた大豆は、隣村の豆腐屋へ運んだ。豆腐屋は彼の培つた大豆を何處のよりも喜んだ。彼は豆腐や油揚が大好きである。豆腐屋の鈴を聽きつけると、彼は必ず呼びとめた。けれども、金は拂はなくてよかつたのである。

小麥を穫り入れると、彼はそれで醬油を、自ら傳來の機械にかけて絞つた。或は、やゝ巧妙な機械を車に曳いて、村をまはつて來る絞り屋を呼びとめる場合でも、醬油か糀で拂へばよかつたのである。菜種や胡麻を油に絞ることにかけては、彼は町の商人にも負けなかつた。……これらは、その一例に過ぎない。

さて惣右衛門が何よりも好きなものは、海の魚であつた。濱からあがつた鮮しい魚は、夜が明ける頃には運び込まれて來る。町の魚屋は、彼のところには必ず寄つて行つた。なほ彼は、濱の女を呼びとめることもあつた。町の魚屋は、みな青物屋を兼ね、乾物屋を兼ねてゐる。それゆゑ彼は、金を拂ふ必要はなかつたのである。彼ははじめから魚に代へるために、青物を培つておくのだ。濱の女たちにしても、好きなものを彼の畑からとつて歸ればよかつた。魚ばかりでない。彼は鯣(するめ)やごまめや煮干が好きである。彼はそれらをも、町の魚屋から持つて歸れたのである。

相模灘は、季節ごとに豐富な魚族をうちあげる。季節ごとに、かはつた魚が運ばれて來た。彼は例へば冬、その畑に見事にそだつた白菜や葱や、牛蒡や人參を眺めながら、——秋刀魚があたりかな！ といふやうなことを叫んだ。鰤！ かじき！ 鰯！と、彼は青物を魚の名に換へて叫んだ。

惣右衛門をめぐる相手の方でも同じだ。鯖を吊しあげながら、——大根なら二把に負けとけ！といふふうに魚屋は言つた。

それでもなほ、財布の紐を解かなければならないことはあつた。電燈會社の集金人は、ゼニでなければ駄目だよ！と、揶揄(からか)ひながら切符を投げ込む。それこそ、彼にとつては、重大な事件であつた。とは言へ、すでに、述べた通り、彼は決して吝(やぶさ)かであるのではないのだ。どころか、この人一倍の働き者は、養ふべき者もないままに、穫つたものはみな一人で食つてしまふのだ。豚の餌のやうなものしか食べない、口の多い水呑百姓は、彼の老いても壯者を凌ぐ精力を、一つにはその食物に因ると見た。嘗つて流行感冒が人人を蠅のやうに打仆して行つた時、彼は二日寢て、三日目の朝は鍬を擔いで畑に出た。その時、町の賢者もまたその體力を、一つには食物に因ると見たといふ。——

ただ惣右衛門にとつては、ゼニの顏を見るのが厭なのだ。百姓としてのこれまでの生涯にあつて、金錢は實に、人の手に渡すべきものでこそあれ、決して、わが懷のなかにおさめて置けるものではなかつた。ゼニの顏を見る時は、ゼニを人

手に渡す時に限つた。一旦人手に渡せば、それなり二度とかへつて來るものではなかつた。それゆゑ例へば、冬の寒い夜の客に、安い豚肉の少しを買へば濟む時でも、彼には惜しげもなく、牝鷄の首を締めることが出來たのである。

二

田畑をかへしてしまふとはじめて、惣右衞門はわれに歸つたかに見えた。彼は火がついたやうに騷ぎ出した。長い冬の間ぢう、これからの生活のために何等そなへを施すこともなくて蕣してしまつたことを、彼はいまさらながら呆れた。

彼は、庭を掘り起すことから仕事をはじめた。だだつぴろい庭は、百姓をやめたいまはまつたく不用であつた。ばかりか、新しい必要がそこに生れてゐた。彼は庭を掘り起して畑にし、畑に殘つてゐるもの貯つておくものを、そこに移さなければならなかつた。

祖先の者たちが、代代そこで籾を潰し、擴げ乾かし、麥を打ち大豆を打つて來たその庭を、彼は掘り起しにかかつた。庭はだだつぴろく、五畝もあつた。冬の間、霜を呑み雪を呑んで肥え太つた庭土は、力の拔けた彼の鍬にも、かるがると起されて來た。

打起される庭土は、太陽の光を悅んで跳ね起きて來たが、惣右衞門の鍬はなかなかすすまなかつた。この生涯に初めてしでかすいぶかしい畑打は、農夫としての彼の良心を、いつまでも輕くしなかつた。それゆゑやがて、埋もれた石がかきつと音をたてて鍬の刄を彈いた時、彼はぽろりと鍬の柄をとり落した。

彼は暫く、良心を撫ひ鎭めるやうに胸に手をあてた。しかし、片手を翳して太陽を仰ぐと、彼は再び勢よく手唾をして踏み込んだ。

——畜生ッ！

彼は兩手で石を摑んだ。そしてぐいと引いた。大きいといふほどの石ではない。

——ようい しよッ！

彼は全身から力を絞つた。彼は、物置に掛けてある鶴嘴に思ひあたらなくはなかつた。けれども頑に頭を振つてそれを拒んだ。

——馬鹿にすんなこの野郎ッ！

彼は三たび、石と取組んだ。額からたら〳〵と膩汗が流れた。彼はそれでも鶴嘴をとりには起たなかつた。四度目に、彼は意久地なく尻餅をついた。

その時、うしろから自分の名を呼ぶ聲を彼は聽いた。隣家の庄左衞門がそこに起つてゐた。彼は、遽に顏を赧らめた。

——何や？石け？

近づくと庄左衞門は彼と場所を入れ變つた。石は、わけもなく庭に投げ出された。

——笑つてくんろ！　はははは、、、、

惣右衞門は、汗を拭きながら笑つて見せた、再び鍬をとりあげるまでには、彼は、井戸端にまはつて水を飲み、そして長いこと庭隅に蹲んで休まなければならなかつた。

かくて、まだ漸く半分を打起したばかりの頃、地面に長く騎してゐた自分の影が、いつの間にか足もとに縮み込んでしまつてゐたのを彼は見た。

日暮れ時、起こし終つたその庭土を、胸に片手をあてて彼が眺めわたしてゐた時、彼はまた、うしろから自分を呼ぶ聲を聽いた。今度は庄左衞門ではなかつた。つかつかと近づいて來た者は、神奈川の長男であつた。

惣右衞門は、さきごろ書き送つた手紙ゆゑに、長男が自らやつて來ることを少しも期待してはゐなかつた。手紙には、

長男の監督を少しでも促してはやらなかつたのだ。彼は、老衰して耕作はやれなくなつたと書いた。けれども、青物は近に拵ればよい。米も味噌も、醤油もまだ當分はある。言つてやるまで金は送るには及ばないと、はつきりと書いて置いたのである。

もしか？——彼は突差の間に考へた。では、長男は、迎へに來たのでは……？しかし、考へてゐる時ではなかつた。息子をむかへ入れなければならない。……

長男は、春外套のポケットに兩手を入れて彼の側に立つた。そして何言ふともなく、その眞新しい庭木を眺めた。側から彼は、用心深く息子の横顔を覗いた。そこに彼は、何とはない感慨の相を見てとつたが、それに觸れることはしなかつた。

——こいつを起こすのに、まるまる一日かかつてしまつたぞ！

彼は笑つて見せた。

——こんなに急に、かうなるとは思はなかつた！

——息のつづく限りは働きまくる。そんで力を出しきつてしまやあ、もう用はねえ、おつ死ぬんだ。おれたちの生き方つていふはなあ！……かうなれば、いつまでも生き恥はさらしたくねえわ！

——でも見たところは何事もないわ。おれはまた、どんなになつたんかと、案じ案じやつて來た。

長男は、この時はじめて父親をまともから見た。

彼は鷄を締めて、その夜長男と鍋をつついた。息子をむかへて、ありつたけの元氣を振り撒いて見せたが、しかし、彼は決して警戒を怠らなかつた。

息子はやつぱり神奈川に連れて行くつもりではあるまいか？……だとしたら、むかしからの頑強な拒絶に、いまは理由

がなくなつてしまつてゐる。これからの彼の暮しは、すでにはつきりと自推してみたやうに、町場の暮しと少しも違ふところがないのだ。これまで幾年の間、息子の執拗な町暮しの勸めを、かくも必死に拒んで來た理由が、いまは消滅してしまつてゐる。そしてこれからの暮しは、長男からの金に頼らなければならないのだ。

この推論は惣右衛門を嚇した。けれども、何といふ意外な言葉であつたらう！

——ぢやあお父つあんも、これからはおれたちのやうな暮しをすることになるんだが、まさか町場へなんか行く氣にはならないだらうな。

長男は笑ひながらかう言つた。

——なんの！なんで行くものけ！なんの！

一方では呆れながら、彼は強く言つた。

——それがいいだらう。のんきにやるがいいわ。働けるだけは働いた身體だ！ははは、、、

長男は、このいつもながらの父親を、鷹揚に劬はりかけて來た。惣右衛門は、この時、このいぶかしい情愛の流露に足を掬はれて踰めいた。そこから彼は、再び起きあがつて身構へをしようとはしなかつた。いまとなつては、息子の前にただ從順でありたいと願つた。

——それで、こいつを決めにおれは今日やつて來たんだが、月月いくら送つて寄來さうか？二十圓もあれば足れるかね？

長男の言葉は、ますます眞情に溢れ和んで來た。

——なんの！何を言ふ！おれは言つてやつたでねえか。かれこれ今年ぢうくらゐは、米も味噌もあるだ。菜ッ葉は庭に培れるし、なんの、まだまだ金は要るものか。

——なに、そんなわけのものでないわ。魚を買つて食ふがいいし、暖いものも着るがいいわな。まあいい、月月二十圓

としよう。

――なんの！滅相もねえ、二十圓なんてとんでもねえわ。

――あまつたら殘しておくさ。何も、使つてしまへとは言はねえよ。

――とんでもねえ！ぢやあ、五圓でいゝわ、五圓でな！

――五圓も二十圓も、考へやう一つで同じことだ。いいさ、あまつたらとつて置けばいいわ。

――さうかなあ。

彼は息子の前に、いつにもなく從順な父親であつた。けれども、父親の前に、何んと、いつにもなく唆い今日の息子であらう！――これが、その夜惣右衛門が、寢床のなかでのもの思ひであつた。

百姓に愛想をつかして神奈川へ出て行つてからの長男は、職がさだまり生活が肥り出すと、一人殘つた父親を呼び寄せようと、幾度連れに來たか知れなかつた。彼はその都度頑强に拒んだ。父親と息子とのこの執拗な爭ひは、息子の歸省のたびごとに火がついたのである。幾年か前、かの冬の夜の烈しい諍ひを、惣右衛門は忘れることが出來るであらうか？

その時息子は、父親を連れにわざ〳〵歸つたのであつた。斃死した田舍の血に町が馬のやうに肥えてゆく時代であつた。息子の言葉には理があつた。その時息子は、工場の門衛の口を父親にもつて來たのである。

息子は、仕事の樂なことを說いた。勤務時間の少ないことも說いた。そして給料の多いことを細かに說いた。退職手當のことをつけ加へることも忘れなかつた。

聽くうち惣右衛門は怒りに息吹を絕やした。工場の門番と聽いて、彼の逞ましい、壯者にもひけをとらない筋骨がむかつ腹をたてたのも事實であつた。しかし、それはかりではなかつた。

――なに？仕事が樂だと？

彼は、そして息子を組み伏せにかゝつたのである。

――なに？仕事が樂だと？樂だとか骨が折れるとかと、貴樣はいつたいどういふつもりでそんなたわけたことをぬかす？おれはこれまで眼から火を出して稼ぐ奴だと言はれて來た。まつたく、人並以上の稼ぎをして來た。だが、骨が折れて厭だと思つたりしたことは、この年をしてただの一度もないわ。おれの仕事だからだ。貴樣たちは工場へ行つて仕事をする。誰のためにするんだ？貴樣たちには顔も拜めねえやうな御人のために、緣もゆかりもねえ仕事を働きくさるのとはわけが違ふ。貴樣たちはその駄賃でもつてこそ／＼おまんまを買つて食ふ。そんなことにでもなつたら、おれには、金槌一つぶつ叩くのも骨が折れて仕方があるめえわ。貴樣の言ふことは、怠け者の下司根性だぞ！……

――働く時間が少ねえと？だからそれがどうしたといふんだ？おれなぞは、お天樣道といつしよに起き出して、お星樣の顔を見るまで働いて戻るんだ。それで寢るまでにや夜なべにまた一と働きだ。それでも長過ぎるの何んのと思つたことは一度もねえ。その筈だ。貴樣たちの仕事とはわけが違ふ。貴樣たちの仕事は、機械の番人だ。機械の小使だわ。人間樣が、機械の小使になりさがつてゐやがるんだ。仕事の時間が少ねえといつて、それが自慢にでもなると思ふのか？いつも貴樣たちは、仕事を八時間に負けてくれろと、おつそろしい騷ぎをしでかした。だが、よしんば八時間が五時間でも、人間樣が機械の小使になりさがるには違ひはあるめへ。一日一時間でも、おれは糞喰らへだ！

息子はしかし、口の端で笑つた。激した父親に、息子は案外落ちついて答へた。

――聽いてると惚れ／＼するやうなことを言はれる。だが考へてみな。お天道樣といつしよに起き出して、お星樣の降るまで働いて、穫り入れたものはいつたい何處へ消えちまふんだ？二晩や三晩は土間に積み込むさ。だが明けれや何處へ消えちまふんだ？……米を培つて米が食へず、蠶さんを飼つて絹が着れず……

——そんなことは、人から言はれずと百も承知だ。だがこいつは、時世が惡いんだ。そんなことは時世といつしよに良くなつて來るわ。いまこんな有樣だからとて、百姓の仕事が惡いといふわけにはちよつともならねえぞ。これとそれとは、どだいわけが違ふわ。そいつを考へもしねえで、端た金に目先が眩んで、自分だけのことしか考へねえ了見は下司だぞ。かういふ時世ならなほのこと、村の衆といつしよに艱難するが男だ。……おれの家には、代々百姓の名人が出たが、貴樣のやうな變り胤は一人もなかつた。貴樣は御先祖に泥をなびつた馬鹿野郎だ。御先祖の脇に埋められる値打はねえぞ！

それが、彼と息子との最後の諍ひであつた。いまは五六年も昔である。——

寢床のなかでの、惣右衛門のもの思ひはこれであつた。彼は側の息子の寢姿を覗きながら、なほその追憶を味はひかへして見た。

けれどもやがて、彼はおのれの老衰に思ひあたつた。すると、風のやうに、寂しさが夜具の襟もとから流れ込んだ。彼は慌てて、夜具を引かむつた。

三

世の中は春であつたが、惣右衛門の丈高い身軀は、意久地もなく前の方に蹲み込んだ。背は圓く、兩脚も葱の枯葉のやうに撓んで見えた。

壓し狹ばめられて縮んだ臓腑と同じく、心の張りもまた蹲み込み、縮み込んだ。彼は佝僂のやうに、時にはまた聾者のやうに、その獨居の家のまはりをめぐつた。

畑に殘つてゐるのや貯つてある青物を庭に移してしまふと、彼はそれから何もしようとはしなかつた。一仕事するたびに、退潮のやうに速かな、はつきりとした老衰の進行が計り出されるといふ經驗が、彼から仕事の興味を奪ひとつてしま

つたのである。

彼は大豆を豆腐屋に運ぶこともぷつつりとやめた。魚屋を呼びとめるために座を起つこともしなかつた。

——なに、魚を食はねえたつて、生きてゐられるわ！

魚屋の呼び聲を聽きつけるたびに、彼は呟いた。馴染の勝公に向つては、彼はそれを言つて聽かせた。

——おれは人並み以上の稼ぎをして、そいつをみんな一人で食つてしまつた。御先祖の誰でも、おれのやうにうまいものを食つた人は、一人だつてありはしねえ。おれはいままで、あんまりうまいもの食ひをし過ぎたんだ。これからは老いぼれ百姓らしく、菜つ葉ばかりで澤山だ。それにもうおれは働けるでなし、うまいものを食つたつて無駄だわ。

惣右衛門はかう考へた。その生涯の習性から逃れて、そのため淺黄色の財布をとり出さうなどとは、夢にも彼は考へなかつた。

——ソエモン爺さんは金持だつて誰も言ふ。けち〳〵するもんでねえよ。

町の勝公は、賣れ殘つたやうな場合には、荷を下して寄り込んだ。

——一貫五百奮發しなよ。いい鯖だからつていふにさ！

惣右衛門のところに來ても、いまでは勝公は、「一貫五百」と言ふのであつた。

——年をとつて、脂ッ氣はめつきり厭になつたわい。

——チエッ！年をとればなほのこと、脂ッ氣を食はなきや駄目だわな。

——なに、年をとつては精進ものが何よりだわ。

——ほう、そんなら青物を今度はわつちから買つて下せえ。

——何を言ふ！これ！まだ三穴も芋が貯つてあるぞ。それに、これ、この通りだ。

彼は、畦の畑を強く指さして見せた。
——いま直ぐぢやねえ、爺さんがこれを食つちやつたらのことよ。
——なんの！馬鹿ぬかすな。自分で食ふ位のものは、まだ拵れるぞ。
——ぢや拵れなくなつてからのことよ。
——なんの！そん時はおれは、ここにはゐねえわ。
——ゐねえ？
——知れたことよ。
——そん時や神奈川へ行かれるか？
——おれは極樂へ行つてるわ。お前たちから葱一本でも買つて見ろ、おれは地獄へやられるぞ！
勝公は、惣右衛門のこのひたむきの抗辯がつい面白く、遊び半分休み半分に、かうした無駄口をたたきに寄つて行くのであつた。
夏のために、それから彼は、茄子や南瓜や隱元豆を蒔き、馬鈴薯の種を蒔いたりしたが、それには庄左衛門が手傳つた。

四

秋になつた。
惣右衛門の身體は、すでに老衰の淀みに四肢も撓むやうに見えた。人々はそこに、最後の一滴の精力をも搾り出してしまつた、そしてただわづかにその生涯の習性から、機能の空轉を見せてゐる人體を見たでもあらう。
しかし惣右衛門の日常には、突如、一つの變化があらはれた。

何といふ思ひがけない、奇妙な食慾が、だしぬけに、頭を擡げ出したことであらう！そしてそのいぶかしい食慾が、何といふ打克ち難さで、かくまでに牢固なその生涯の習性を、ものの見事に蹴散らしてしまつたことであらう！

ことは、秋のはじめ頃から始まつたのである。一日、街道に煮干賣りの聲を聽きつけると、ものに憑かれたやうに起ちあがつて彼は葛籠の蓋を開いた。そして淺黄色の財布を取り出すと、駈け出して椽側に出た。

煮干賣りは、馴染の濱の女であつた。

——ゼニでなけれやなあ、今日は。……

濱の女は、何故かその日はかう言つて直ぐには天秤をおろさなかつた。

——えいわ、ゼニで買ふわ。

彼は、なほ最後の反省を促すやうに悸ち出した動悸を制しながら、かくておもむろに財布の紐を解いたのである。

——ゼニで買ふかな？

——買ふわ。

——これやお天氣が變つちや大變だ。……ぢやもうお爺さんは宗旨變へか？

女は近寄りながら訊ねた。

——なんの！　けふ一度だけだわ。それに、おれが食ふんではねえ。おれが食ふんではねえわ。

彼はそれを、女に向つて言つたのではなかつた。また、その時前の街道を通りかゝつた庄左衛門の姿を見かけたから言つたのでもなかつた。彼は實際、さう感じたのである。彼はさう信じたのだ。

しかしながら紙袋を受取つて障子を閉めてしまふと、彼は別人になつてゐた。爐の端に坐ると、彼はいきなりそれを摘み出して口に入れた。そして煤けた天井を見あげながら貪り嚙んだ。

嘲笑ひをしながら彼は次ぎ〳〵と袋のなかに手を入れた。彼はかくてそれを忘れ、彼の兩顎は、動物的な熱意をもつて動いた。

――ちエツ！

われに歸つた時には、百匁の煮干ははや半ば過ぎになつてゐた。

翌日目が醒めると、彼は寢床のなかから枕もとの紙袋のなかに手を挿し込んだ。――以前から煮干は、彼の大好きなものではあつた。けれども以前、彼はただの一度でもこんなものを、こんなふうにして間食ひにしたことがあつたらうか？

そしてその日彼は、空つぽになつた袋を膝の上に載せて、呆れながらあたりを見まはした。

――えいわな、年をとると誰でも、意地がきたなくなるもんだわ。

彼はかう言葉に出して言譯けをした。その日彼は、煮干のない一日が、どんなにもの倦く、あじけないかを骨身に泌みて味はつた。

――えいわな、おれは酒もやらねえんだし煙草もやらねんだから。……これ位のことをしたつて、まさか罰もあたるめえわ。

彼は、かう考へることですつかり平靜をとり戻すことが出來た。重大な事件である筈のことが、かうしてやす〳〵と事もなく片づけられたことを、彼は格別不思議にも思はなかつた。それよりも、さうした反省を試みることさへ彼はしなかつた。このいぶかしい食ひ氣がいつたいどこからやつて來たのかといふことについても、彼は考へてはみなかつた。

次ぎの日彼は、慌だしく障子を開けて、前を素通りして行つた勝公を呼びかへしたのである。

――ツエモンさんがたうとう宗旨變へをしたと。

――何を買つたと？

――勝公を呼びかへして何やら買つたと。

――ゼニでか?

――ゼニでよ。

――財布をとり出してゼニ拂つたのを見たものがある。

――宗旨變へかとうとう。……長えこともねえんだから、いまのうち、何でも買つて食ふがいいわな。

――それがいゝだとも!

――それがいゝだが、だけど、端から見る眼にや、惜しいこつた。

――それや惜しいこつた。

――せつかくいままで押通して來たんだから、いつそ死ぬまで――

しかしながら、人々の確定的な噂にも不拘、庄左衛門一人はそれを信じなかつた。なるほど彼は、いつか通りがゝりに、惣右衛門が濱の女を呼び込んで何やら買つてゐたのを見たことはあつた。その時惣右衛門がゼニで買ふことも知つた。けれどもその時惣右衛門が、今日一度だけだと言つてゐたことを、自分で食ふのではないと、繰りかへして言つてゐたことを、彼ははつきりと耳にしたのである。それゆゑ彼は、この噂には格別心が騒がなかつた。

五

けれどもその晩庄左衛門の妻女は、彼の歸りを待ち構へてゐた。

――ソエモンさんゼニ出して勝公から魚を買つたと。

――噓こくな!

庄左衛門は、激動を一時に變へて呶鳴つた。
——ちやーんと見たものがあるだから嘘でねえよ。
——ぢや何を買つたと？
——そこまでや聞かなかつたわ。
——嘘こくな、嘘だ！
——ソエモンさんが宗旨を變へたにもわけがあると思ふだ。……もう今年も十月だわ。去年の味噌醤油も、米もそろく\なくなる頃でねえか？ すれやもうこれからは、何でも彼でもゼニ出して買ふだわ。ゼニ出して買ふとなれや、何を買ふも同じでねえか？
妻女は、前もつて考へておいた理窟を言つた。
それゆゑ次ぎの日魚屋の呼び聲を街道に聽くと、庄左衛門はそのままではゐなかつた。彼はその時裏で畑に出る仕度をしてゐたが、溜の女が前を通り過ぎて隣りの前にさしかかつて行くと、素早く踊み込んで茶の木の茂みを透して窺つた。
——見てゐてみな！
妻女は流し元から聲をかけた。
妻女の聲と同時に、彼は隣りの障子が勢よく開いたのを見た。惣右衛門はなかから、片手で女を手招いた。
——買つてくれんのか？
女はたちどまつて聲をかけた。
——ゼニでなけれやおら……。
——ゼニで買ふわ。煮干をくれろ。
女は軒下へ行つて荷を下した。

――ほう、お爺さんもとう〳〵宗旨變へだな。

――なんの！　おれが食ふんではねえわ。……おれが食ふんでは……

惣右衞門は繰りかへしながら女から紙袋を受取つた。

――何を買つた？

その時妻女は、庄左衞門のうしろに匐ひ寄つて來た。

――見ろ！　自分で食ふんではねえわ！

庄左衞門は妻女を睨みつけた。

それから彼は、安堵したやうな氣持を取戻して家を出た。

その氣持が、それから通りがかりに、彼を隣りへたち寄らせた。彼は軒下に近づくと、元氣よく聲をかけながら、いきなり障子を開けたのである。

すると、彼は思ひがけないものを見て慌てた。それよりも、不意を喰つて惣右衞門はすつかり取亂し、慌てて半ば座を起ちあがつた。けれども遲かつた。惣右衞門は爐の端に胡座をかいて、紙袋のなかから取り出しては、ぼり〳〵と煮干を食つてゐたのである。

――年をとると、ほんに意地がきたなくなるもんだわな！

惣右衞門はすつかり照れて、歪んだ顏で笑つて見せた。

――何かうまいものがあんのか？

――なに、この頃こんなものが矢迦に食ひたくてな。それもおかずにではねえ、間食ひにだ。

――間食ひを？

――おかしいぢやねえか。百匁位いつの間にか食つちまふだ。

庄左衛門は呆れて首を傾けた。

――おらち不思議でかなはねえ。いまになつて、おんちう莫迦な……

――だけどよくゼニ出して買ふ氣になつたな。

――ゼニ出してか？　それがな、食ひ意地つて妙なもんだわ。

――だがゼニ出して買ふからにや、もつとうまいものを買ふがいいわ。

――なんの！　おら、……ほかのものは買はねえぞ。……ほかのもののゼニ出して買はねえぞ。……こいつだけは内證にしとくだよ。…

この言葉には、情がこもつてゐた。

――ぢや宗旨變へつてわけでもねえな。

庄左衛門は笑ひかけた。

――とんでもねえぞ。滅相なことを言つてくれんな！

惣右衛門も笑つたが、そのため鼠顏の相はくづれなかつた。

庄左衛門は呆れながらそこから引返した。彼はたゞ呆れた。その外の感慨はなかつた。

ソエモンも惜しいところで……かう言つて庄左衛門が深い感慨を言葉に洩したのは、それゆゑ、日暮れて家に歸り、妻女と竈の藁火に手を翳した時であつた。

それ以來はじめて、庄左衛門は、惣右衛門の姿に人體の廢墟を會得した。これまで惣右衛門は、たゞ庄左衛門一人にとつては、相も變らずむかしながらの元氣者、むかしながらの百姓の名人であつたのだ、このことは彼に、遂に惣右衛門の影を薄くして見せた。

素通りすることに慣れた濱の女たちは、つい忘れても引返して、必ず惣右衛門の軒下に荷を下しに寄ることになつてる

たが、茶の木の此方から庄左衛門は、よくそれを見かけることがあつた。その時兩手をさし出して女から紙袋を受取る惣右衛門の影の薄い姿は、餓鬼のやうに彼には見えた。

六

丘を引はらつて人々がぽつ〳〵田に下りはじめるやうになつた頃、一日惣右衛門の家の戸は、庄左衛門がお晝にあがつて來た時も開いてゐなかつた。

顔色を變へて駈込んで這入つて見ると、惣右衛門は寢床のなかで、襤褸のやうに横になつてゐた。初冬の冷氣に彼は風を引込んだのである。

熱が高かつた。庄左衛門は觸つてみると直ちに再び腰を起した。

――先生を呼んで來べ。

――なんの！　風を引いてお醫者にかゝる奴があんか？

惣右衛門は笑つてみせた。

――なに、今年の風は莫迦に惡性たつて言ふわ。

――なんの！　何を言ふ。あの流行感冒(はやりかぜ)の時だつて、おれは二日寢て、三日目には畑へ出たわな。

彼は相手を宥めるやうに言つた。

庄左衛門はそれ以上强ひることはさし控へた。彼は、敷蒲團の下に押込まれてゐる紙袋の端が破れて覗いてゐるのを見ながら起ちあがり、庭越しに妻女を呼んだ。

しかしながら翌朝は彼は、惣右衛門の家からまつしぐらに町の醫者へ走つた。

かつて惣右衛門の並はづれた體力に驚いた町の醫者は、見ぬ間にかくも老衰の坂を駈下りた彼を見て眼を瞬つた。

醫者は肺炎と診て歸つて行つた。

けれども彼は、次ぎの日には思はぬ發見をもたらして庄左衛門の家を訪れた。十二指腸が甚だしく犯されてゐるのを醫者は見つけたのである。

問はれて暫く小首を傾けた庄左衛門は、だしぬけにやつて來て人々を驚かした、かのいぶかしい食慾のことを語つた。と、醫者は彼が終りまで言ふのを待たずに、片手をあげて制した。それから、直ちに息子を呼び寄せるやうにと命じた。

——先生むづかしいですけ？

庄左衛門はおろ／＼聲になつて訊ねた。

——かういふ場合の肺炎はむづかしいのだ。十二指腸にいままで氣づかずにゐたのがいけなかつた。

——だめですけ？

——まづむづかしい方だ。

醫者が栗毛に一鞭あてて、路の兩側に蝗の群を追ひたてながら馳去ると、庄左衛門もそのあとから町の郵便局を指して馳出した。

——なんの！　明日おらは里芋を埋けるだわ。

夜になると惣右衛門は、思ひ出したやうにかう言つては跳ね起きようと踠いた。そして取抑えにかゝる庄左衛門たちの言葉も、もはや耳には入らないかに見えた。

——なんの！　それ位のこと、おれがするわ。それに、穴のなかにあ、ゼニが埋けてあるだ。おらはまだ、倅がくれた金にあ、ちよつぴりも手はつけねえぞ。

けれども、それはもはや囈語でしかなかつた。

——庄さん、煮干を賣りに來たでねえか？　百匁ばかり買つといてくんろ！……おれが食ふんではねえと言つてくんろ

よ。……おれが食ふんではねえわ。

煮えたやうな高熱のまま、かくて惣右衛門は、昏睡のなかに溺れ込んだ。

それから夜半すぎて神奈川から息子が歸りついた時には、惣右衛門の身體は、宛らあとに殘つた灰のやうに、もし一陣の風が吹き込んで來でもしたらあとかたもなく吹き散つてしまふやうな脆さで、したがつて屏風をたてかけたやうに醫者と庄左衛門夫婦とをその枕もとに坐らせて、いつもながらの獨りゐの床にあつたのである。

——かういふ病氣にとりつかれると、早い話が二人して飯を食つてゐるやうなわけ合ひになるのです。つまり、自分の分の外に、この蟲の分まで食べてやらないといけないのです。ですから、うまいものを食べて、榮養をよくとつて、つまり蟲の分まで充分に食べてさへおれば、いつまでも氣づかずにゐられるといふわけです。

醫者は、息子の前にすつかり言葉をあらためて語つた。

——この方がこの最もいい例です。榮養がよかつたうちは、あの通り、何のこともなかつたわけです。ところが最近になつて、その榮養ががた落ちになつた。それで、たちまち蟲が身體を犯しはじめたのです。……かうなると誰でも、意地がきたなくなつて、變な物をしよつちうむしや〳〵やるやうになります。つまり人間が食べるのではなくて、……蟲が食べさせるのです。蟲が食べるのです。……多くの場合、おかしなもので、ごまめだとか煮干だとかいふやうなものですが……

醫者のこの言葉を、誰よりも深い感動をもつて聞いたのは、當の息子ではなく、側の庄左衛門であつた。

彼の耳では昨夜の囈語が再び響き出してゐた。彼は胴體が顫え出すのを脇の下に兩手をあてがつて制した。しかしながら、たちまち、彼は安堵したやうな心の靜けさと爽やかさとを取戻した。そしてこの隣人の長い生涯の習性を、かくもだしぬけに打破つたこの最後の破調を、改めて心に刻み直したのである。

ソエモンが食つたのではなかつた！　ソエモンが買つたのではなかつた！　彼は朗らかにそれを呟いた。惣右衛門は、かくて、惣右衛門であつた。

——では、月々私が送つて來たもので、いままでのやうに暮してをりさへしたら。まだまだ……

長男がかう言つて醫者に同意を求めようとした時にも、側にゐて庄左衛門は、それには合槌を持つ氣持は起らなかつた。

彼はひそやかに、その朗らかな氣持のなかに沈默をつゞけた。

七

夜が黎みかゝると、庄左衛門と妻女は、惣右衛門の家のまはりでたち働いた。

彼が裏口にまはつた時、彼は、まだ朝日のささない薄暗い流し元から、妻女が首を出して彼を探してゐる顔を見た。探しあてると、妻女は慌だしく手招きをした。

――何け？

庄左衛門の返事を、妻女は顔を顰め、手を振つて制した。

彼はその顔に、ただならぬ相を見てとると、つか／＼と土間に這入つて行つた。

――何だ？

――來てみな。

妻女は、呟くやうな顫え聲で言つた。

妻女のあとについて、庄左衛門は土間の隅の樽が並んでゐるところに近づいて行つた。

――醤油樽だがな、醤油ももうなくなつてるだよ。

妻女は再び小聲で囁いた。

彼は樽の上に手を置いた。そしてそれを輕く搖すつて見た。なかからは、ものの二合とはありさうもない液體の音が、かすかに聽きとられたに過ぎなかつた。

その時妻女は、側の別の樽から蓋を取りあげてゐた。

――ほら！　見な、味噌ももうなくなつてるだよ。

底にこびりついた味噌は、掻き集めても五百匁とはありさうに見えなかつた。

庄左衛門と妻女とは、薄暗い土間の隅で、樽を挾んで、たがひに顔を見合はせ、見合はせた。

――そいからなあ、來てみな！　米ももうなくなつてるだ！

妻女は土間の他の隅に彼を連れて行かうと歩を起した。

庄左衛門は、けれども、寄つて行つて白米を入れた桶の蓋を開けることはしなかつた。

――來てみな、ほら！

妻女は促したが、彼はそこに棒のやうに立つてゐた。

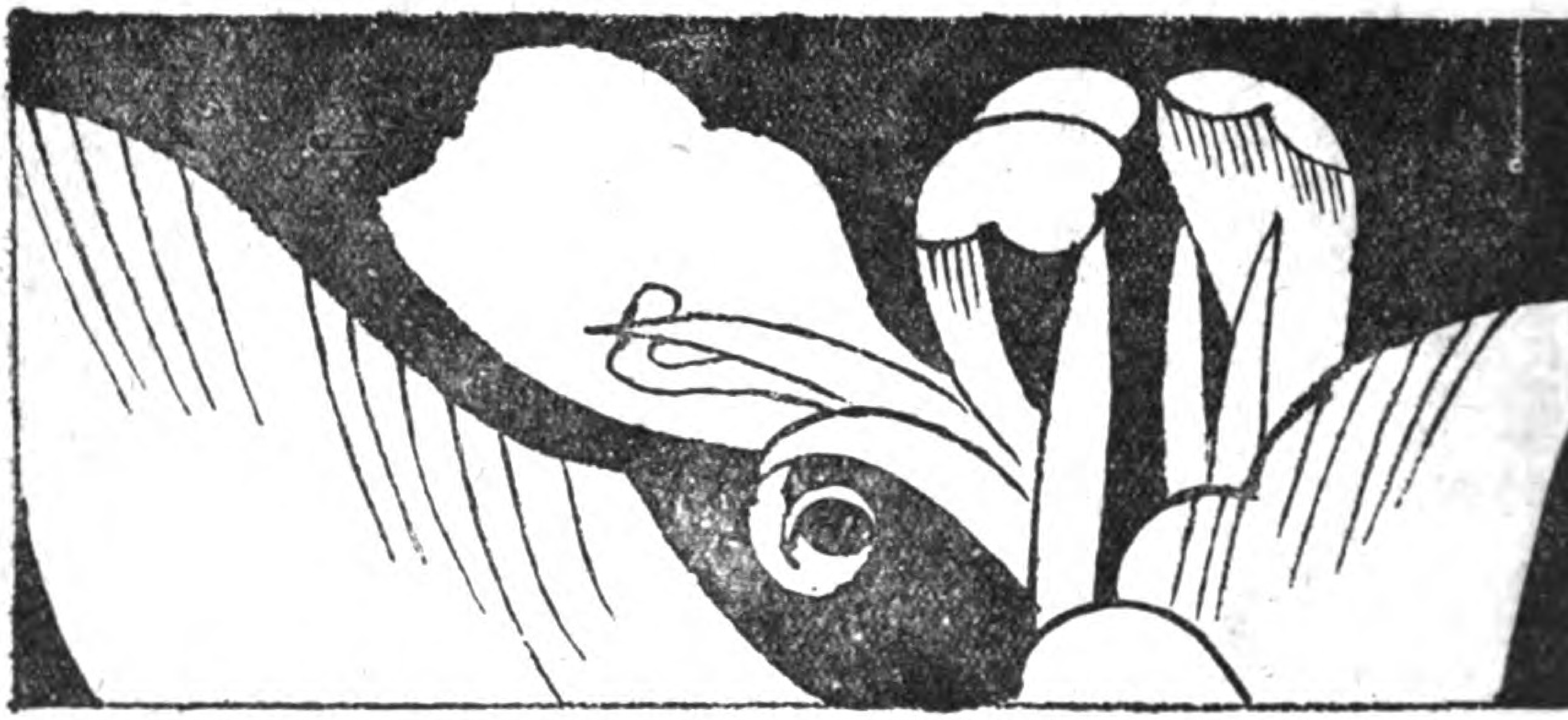
穫入れた大豆を自ら足で踏んでつくつた味噌も、小麥を自ら傳來の機械にかけてしぼつた醬油も、それから米さへも、丁度食ひつくしたところであつた。そして、この綠の平野のなかで、金を出して米を買ひ、味噌醬油を買はなければならない日が、次ぎに猶豫なく始まらうとしてゐたのである。その時、けれども惣右衛門は、他所へ、土のなか深く棲家を求めて行つたのであつた！

丘の中腹の斜面に村の共同墓地はあつた。惣右衛門の家の墓所は、そこの片隅に人目にもつかず、ささやかな野茨の茂みに閑はれてあつた。

そこには、いづれも百姓の名人と名をとつた祖先の者たちが、八つの墓をならべてゐた。

惣右衛門の死屍は、老ひぼれて死んだ貧しい百姓としては珍らしく多勢の村人に見送られて、次ぎの日、日の燿く朝、その墓所に向つた。

棺は埋められた。八つの墓の次ぎに、土饅頭が黝々と盛りあげられた。そしてそれが、そこの墓所が最後の者のために殘して置いた最後の墓であつた。墓所は、それで一ぱいであつた！　（完）



街の斧博士

十一谷義三郎

一

町の器用な連中が、オランダ言葉のZUNDAGを、巧くジャパナイズして、「どんたく」やら、「半どん」を造語つて、日本國中に擴めた。

「どんたく」には異人の老幼男女が、それぞれ自分の國旗を押し立てて、賑かな樂隊を先頭に、足を高らかに揚げて、町ん中を、勞働祭式に「遊覽行歩」したものだが——

その碧眼の陽氣な示威行列者に、敏捷こく叩頭して、生絲の「拜見」が、「不賣」にならぬやうに、譬へばラシヤメンを取り持つたりなど、いろいろ拔け目の無い思案を凝らした、あの進取的な、「白いだんぶくろ股引を穿いた」出稼ぎ連中が、「どん

たく」の旨さに、てんでの故郷を忘れて、この海港町の先祖（くさわけ）になつた。

それが、初代、二代、三代と、大正の後期に入つて、まうぼつぼつお澄ましを始めた素封家——あの、何か問題でも起ると、黴かかつた氣取りと小心から、頑に抑輪機（ブレーキ）にしがみつく、所謂少數の「地主派」と、營利イコオル營生の、冷い公理を體得した土地ッ子の、多數「商人派」とに、だいたい分れて……

で、町一般の氣質（かたぎ）も、大抵見當がつくであらうやうに、敏感を極めた個人主義で、人種の泥滿式（コスモポリティック）で、各人排他で、ちやいこい。

いや、こんな平凡な惡德より、むしろ美德を擧げねばならないが、それは、一種の近代型の英雄の斧氏が、此處に顯れた時分の、町の豪勢さを見れば、結果論的に、點首ける筈だ。

まうあの馬鹿らしい「どんたく」騷ぎも、傳說になつてしまつた。岸壁の上屋（うわや）や倉庫には、五六萬梱（こほり）の生絲が、ぎつしりと詰まつて、異國の市場を威嚇してをつた。

波止場では、毎日、和洋グレート・ネームズの禮儀正しい掌に、テープや花束が握られた。

日本一の梅毒病院——櫻に圍はれた遊步公園——キリンビールと石油のタンク——東洋一の大競馬場——大理石の異人墓地、そのほか、大海港都市らしい、政治的な、また商工業的な施設たくさん……

さうして、幅五間から十五間の掘割が、町の中心區域を網の目に仕切つてゐて、その、とろつと黑ずんだ水面に、たとへば、キユラソオ・スペシアルの壺と屎瓶とを竝べて置いたやうに、この町の生活の最上天（てつぺん）とどん底とが、いつもごつちやに入り混つて、ピクチヤレスクな影を落してをつた、まこんな具合に——

預金利子が一番安くて、その代りに、有閑金（あそび）に對して、近代半神風（デミゴッド）の保證を與へる一流銀行の、石の脊中が、冷々と、足もとの汚水に寫つてゐる。その影の上を、ある瞬間に、紅い縮緬の首輪を穿めた、ひとかど良い家のペットだつたらし

い猫の死骸が、靜に漂うてゆく。そいつをまた無關心に押し退けて、萎びた小傳馬船が、よたよたと、小波をたてゝ、遠へと通り過ぎる。傳馬の上には、頰の陷ちた、黧眼のチラチラする船頭が、その、高く〱外方を向いた神のやうな大銀行と、猫の死體とに、全然「無機的な關係に於て」、皮膚の弛んだ細脛を踏ん張つてゐるのだ。

彼は、動脈の硬ばつた兩手で櫂を攫んで、老いた肋を波打たせて、

「まだ死なねえぞ。」と息を喘ませるのだ。

――「伜が出獄つて來るまでは！」

同じ瞬間に、彼の背中を、あのどんたくの樂隊と云つた風に、呆けた爆音を殘して、警察の巡邏艇が、過ぎてゆく。

彼は、ウツロな顏を、銀行の二階の、小さな石窓へ仰向けて、竹の背を風が脫けるやうな呼吸をする。

彼の足の下の、踏板の下は、二重底になつてゐて、そこに、彼が、街の、息子の仲間から托まれた贓品が、閑まはれてをる。彼は、それを沖へ持つて出て、こつそり處分されるのを待つて、少し許り分け前を貰つて、愛する孫と、嫁と、自分とを養はねばならぬのだ。

いくら巡邏艇だつて、かう身内が貧血ちあ、恐怕なさうな表情をする力もない、と、そんな孤獨な、「無機物的」な顏をして、やつと、彼は、冷い銀行の影の上を渡り終るのだ……

また――

しんと取り澄ました高臺の屋敷町の裾の、黑い木橋の袂の、枝垂柳の蔭に、辻待の車夫が立つて、茫と掘割を見てゐる。

顏も、手脚も、チヨコレエト色で、粗朶みたいにこちこちした男だ。

それが、片手で、冷やりとした青柳の枝を、頰から肩へ押しつけて、唾の白く泡だつた舌の先で、その葉を舐めてゐる――氷嚢の代りだ。脛が、惡感に震へてゐるのだ。

飴色をした、意力のちつとも無い、彼の眼が、こんな「哲學」を考へる——

「朝鮮人は、毎日、米の代りに、柳の葉に味噌をつけて舐ぶるのだ。これあたしかに安くつく。これなら濟せる。欲しい心さえ、小さけれあ、稼ぎの苦勞も、小さくて濟む……それがい、、それがい、、——でも、昔は、こんなことを、考へる必要がなかつた！」

彼は、怯々と、振り返へつて、高臺の坂道を眩耀しさうに見上げる。天邊の遊歩道の櫻並木と、兩側の煉瓦塀や茨垣に圍まれた、高臺居住者らの屋敷が、てんでに、「恒心」を誇つて、超然と靜もつてゐる。

誰も、何も、彼に呼びかけない。

いや、その時、彼の背後の、橋の向うの、家並の中から、ごうつと、電車の音が、彼のゴマ鹽の頭痛へ疼いて來た。

で、また、彼は柳に縋つたまま、もとの水面へ、眼を落して、もう一方の手で拳固を作つて、頭の顱を叩いて、

「市街電車が、出來るまでは、樂だつたなあ。」と影の薄い詠嘆を辿る。——「まう、ふた昔半にもなる。なんでも、あんな怪物を町へ通す市會議員をとつちめろ！　と、仲間が四百人ばかり、豪勢に市役所へ押しかけたが、でも、でも、日露戰爭の年にあ、とう／＼、あいつが、押し廻り始めた……あの時分に、ちつとばかり、異人のペラペラがいけるてんで、東京のホテルのボーイに、連れていかれた仲間があつたが——」

そんなことを、この老車夫が考へ込んでるところへ、ふいと橋桁をとゞろかして、町で指折りの富有の自用車のビウイクが（ナッシユもパカアドもリンカーンも、むろんまだ無く、これが町の最高級車で、此の車夫には、云はば、華族の金紋入りの二輪馬車だつた）一瞬に、彼の鼻の先を掠めて、紫色の臭い瓦斯を吐きながら、高臺の坂道へかかつた。

彼は、柳を、ぎゆつと握り締めて、チヨコレエト色の尖つた腮を突き出して、ぽかあんと口を開けて、それを見送つた——白んだ脣と脣の間に、粘い唾が、しやぼん玉のやうな透明な膜を張つて、それがまるで、動物の死骸に流れ出した脂

肪のやうに、しばあらくちつと兩顎にひつかかつたままで、やがて破れて……だが、彼は、鈍い眼を、その坂を上へ上へ、ついに、天邊の葉櫻から、大競馬場の方角へとつづく紫色の煙に注いで、立つてゐるのだ。

彼は、人力車の全盛時代をすつかり知つてをる。あの櫻の木の輿に幕を垂らした發明期のことも、また、それが、竹の骨にどんぐるすを張つた蒔繪の幌車への改良期のことも、みんな聞いてゐる。それから、鐵輪、ゴム輪と、完成された時代には、彼自身、それで、ひと花咲かせた。

しかし、どうしても、判らないことは——何故、町ぢあ、力俥に滿足しないで、電車をつくつたりするのか!? 何故、また、力俥と電車に滿足しないで、自動車を使ふのか!? つまり、どうして、この町の連中は、かう、矢鱈にぐんぐん伸びて、折角の着物を、間に合はなくするのか!?

そんな風に、彼は、紫の臭い「進歩(ガス)」を見凝めながら、ひと思案するのだ。

彼は、いまさき、車窓にちらと見えた、シルク・ハットとお化粧の濃い二人が、まうぢきに、馬見所の一等席におさまつて、「馬匹の改良と交際」のために、すつかり紅潮して、老車夫(かれ)の二三年分の勤勞所得に當る金を、數時間も經たぬうちにフイにしてしまふであらうことは、別に考へても見ないのだ。

彼は、たた何となく迫つて來る時世の壓力と、惡感とに震へながら、掘割の水面へ、獨り言を云ふのだ。

「柳を食はう、朝鮮人みたいに……」

——ET CETERA

これが、斧氏の斧式英雄術に、一時、すつかりまゐつた町の、ほんの一斑の「粗描」だ——

二

町には、人間が、ざつと四十萬ゐて、醫者が、その約千分の一、醫學博士は、麝香鴨みたいに珍しくて、たつた三人しかない。「町の斧氏」は、この三人の一人だ。

だが、斧氏も、初めは何んでもなかつた。風土病の手帖を抱えて、紫の斑が薄く散つた蛇洋杖をついて、馬尼刺から初めて此處へ來た時分には――

町の中心區域の端れに、「不毛地(カラフト)」とむかし呼ばれた埋地があつて、其處に、年と共に、工場が建ち竝び、職工が蝟集し、鮟鱇(沖仲仕の自由勞働者)やかんかん蟲(煙突掃除小僧)やクモ(立ん坊)などと云つた輩(てあひ)が巣食ひ、まあ云はば一體に小さな「本所深川」を形づくつてゐる。この一隅に、堀割に臨んで、寂びた赤煉瓦の二層舘がある。陽氣な船乘りの組合病院で、灰縞の看護服を着た、髮の亂れた、手の太い女らが、時折り、窓框へ乳房を押しつけて、脫脂綿やガーゼなどのごつちやに浮いた桃色の汚水の甕を、堀割へぶち撒けたりする――お天氣にも濡々とし、雨になるとなほさら濡々としてしまふ、そ云つた病院で、一般の外來患者には、此の町の施療病院とか、平民病院とか、赤病院などと大して格が違はない。

斧氏は、此處の院長だ――

だから來任たてのしばらくは、さすがの臨床の良さも、なかなかぱつとひびかなくて、うすうす名のたつたことと云へば、男摺れに膨れた看護婦の兩手を、タオル越しに握り締めたり、レツエプト・カルテの口授が、そのまゝ變なさゝめきになつたり、突差の靜さの中で、威嚴と媚笑をつき混ぜて、媾曳を強要したり……そんな醫者にはありがち、と云へば云へる好色沙汰が、つぎつぎと、をんなの忍び笑ひほどの大きさで、傳へられた位のものだつた。

それが、二三年經つて、その病院勤めのかたはら、自宅診療を始めると、急に、まるで賢い「東方の博士」のやうに、

「町の芹氏」として、名前を謳はれだした。

あの北ヨーロッパの山毛欅の樹は、一晩に莟を持つて、朝の太陽に、赫灼と花ひらくと云ふが、芹氏の人氣も、ちようどそれに似てゐたのだ。

芹氏は、まうかれこれ五十だが、黒い柔い髪が、まだたつぷりあつて、膚の變に若い鼻や腮に、みづみづと肉がのつてゐる。姿態も、何處か女性的で、それも、あの上下から壓搾されるのを、ちよいと反動的に踏ん張つたと云つた薩摩の女の體つきを聯想させる。

いちばん、それに、忘れられないのが、羊眼とか云ふ、眼がしらが太くて、次第細につぐと反り下がつて、嫋々と笑つてる二皮眼と、幅びろの、イキのいいカイゼル髭だ。

話し聲は、どんな場合にも、ねつとりとしたバスで、それと一緒に、あの眼で、緣なしの金眼鏡の奥から、ぢつと相手へほゝゑみかける——その聲にも、眼差にも、妙に社交的な陰影が潛まつてゐて、それが、コツを窺つて、「皺伸ばしの注射」を提議したりするのだ。

さうたいに陰性で、嫌ふ人は身震ひの出るほど嫌だと云ふが、好きな人は、いや、血壓が高過ぎたり低過ぎたり、わがままでそのくせ心細い、都會病患者たちには、ことに婦人患者には、しつくりと適かつたらしい……

芹氏は、馬尼剌の蛇洋杖をついて、週に四日は、あの薄暗い船乘り病院へ、きちんと顔を出して、時代遅れの體操器具みたいな病人を診て廻る。あとのキーク・ディズが、有名な自宅診療で、その日には、一流のこんな世渡りの哲學を、彼のカイゼル髭や、若々しい膚なんかゝら、ふつふつと醱酵させるのだ——

——自信があれば、町の人間は、みんなひとりでに、こちらを信じて來る。

それから、また

……何よりも、女が大事だ、女をうまく扱ふことが。

『女と云ふやつは、ここが痛いの、かしこが苦しいのと、いろいろ文句が絶えぬ。それが、たつた一箇所から直すことが出來るのだ、そこでこちらが、かなり眞面目にやつてゆくと、やつらはみんな、こちらの手の裏にまるめられてしまふ。お客になつてやつて來たら、人の何年も掛つて障られないところどころを、初對面の××××××××……』――鷗外譯**ファウスト**より――など〻、メフィストの臺詞を素でいつて……

で、日曜日には、伜で、町の富有の邸へ往診つたり、ちよいと「醫學博士」の切り札を出して、絹や香料の際だつた、お上品な「社交」に首をつつこんだり、そでなければ、こつそり、蛇洋杖と相談して、細君ほど重たくない姿のところとか、何處かへ、隱れ遊びに出かけて行く。

いつたい斧氏のいきかたは、町の「どんたく氣質」をひとかど呑みこんだ、神經病的英雄主義で、だい一、「博士の切り札」の出しかたが、微妙を極めてをつた。

ほかの厳かな博士達は、たとへば、助手に聽きとらせた既往症などの控えをすうつと見て、それから、さも機械工のやうに、默々と人間を弄りまわして、時折り間拍子に、羅典か獨逸か、畜生の言葉みたいなのを、ぶつぶつ傍白して、患者をちゞみあがらせる。斧氏は、まつたく別で、あの適度にフェミナイズされた聲で、どんな軽い初診患者にも、たつぷり二時間は親切な「打明け話」をやるのだ。

それから――良い患家のお芽出たや、「公人」として招ばれた席へは、髭を整へて臨席して、立派ないろどりとなつた。

また、季節々々の催し、たとへばあの競馬場などにも、端然と美装した姿を現して、紳士淑女の紅黏の中に、もの堅く微笑みながら靜もつてゐた。

毎年、此町の新聞社が近くの海岸で催す海水浴場には、家族席をひと夏約束して、暇のあるたびに、細君と赤ん坊を連れて、いかにも品の良い家庭生活者らしく出かけていくのだ。

それに……

彼の自宅診療所が、冷い石や煉瓦やコンクリートなどでお傲く鎧つた「博士醫者の玄關」とは違つて、心安い木戸門からひと跨ぎで玄關の待合部屋——その唐紙ひと重奥が診察室——隣りは、一方が三等郵便局の二分の一ぐらゐの藥局で、もう一方が、狹い廊下を距いて、中流の洋風應接間……つまり凡々とした町醫者のそれで、ちよいと流行すれば、贅澤病患者らが、華々しくあふれだすことは、知れきつてゐた。華々しく——さうだ、花瓶は小さいほど、花束は絢爛をきわめるから。

また——

その診療所の位置が、町の中心を遠く南へ離れた、人氣の淡い、地相場の鈍重なあたりで……その散漫な風物を、ざつと數へてみても、大した患家は、ありさうもない。

河豚の妊婦が干乾になつて轉げてゐたり、粗朶に海苔舟がかゝつたりする砂濱——そちこちのペンキ塗りの透垣の傍で、「屋敷」の外人が、コスモスへ大きな欠伸をする。

青田の上の電車の專用軌道が、始終邊鄙な音を立てゝ、あの原色のパット眼に來るアート・ペーパ刷りのやうな女達がところどころ、怪しげな洋館の窓で、脣紅へ來る蠅を追ふ。

松の生へた丘の裾の街道に沿ふて、小商人らが、せちがらい店を、一列に、章魚の吸盤みたいに、往來へ開いてゐる。

息苦しいそれらの連中から、少し退いて、ぽつぽつと、中流の郊外居住者風の住宅——

時折り、斧氏の細君が、彼女の「先生」の好きな買ひ物——いく昔かのコクの濃まつたスコッチ・ヰスキーや、とろけ

さうな舶來ハムや、香蕉の匂ひのぷんと淋巴腺に沁み透るキュラサウなど――を、大事に抱えて、町の「銀座」にすつかり上氣して、戻つて來る。

彼女は、あの掘割を、何遍も渡つて、隧道を脱けて、田の風にしばあらく吹かれて、やつと電車が終點について、歸つて來たのだ。

彼女は、行衛不明に結つた頭へ、小指をつつ込んで、いつも善良で愛想の好い顏を、ふいと無愛想に、庇のさきの、邊鄙な丘の、烏のゐる松に仰向けて

「忘れものをした……」とさう漠然と思ふ――斧氏より、ずうつと年したの、肥滿した彼女が。

つまり、港の海岸線の一方の端と、小高い丘とに圍まれた、そんな區域だ。

斧氏は、診療所を開くと、まづ、この界限を、またたくうちに、彼の「切り札」で風靡してしまつた。

彼は、眞新しいモーニングを着て、鞄と蛇洋杖をもつて、河豚の干物などのぶら下がつてる漁家の軒下へ、こんちは、とカイゼル髭を現した。彼は、冷いアンペラの上に、薄暗く、蟇のやうに兩手をつつぱつてる老船頭の腨へ、注射針を刺して、無雜作に喘息の惡魔を追拂つて、しんみりと、さよならした。むろん、往診料はとらなかつた。

すると、足の蹠のひらべつたい、皮製の坊主枕に髣髴とした女房の雜魚賣りが、早速、「斧先生」への感激を、吃々と、そこらへ吐いて歩いた。

それから――眼の大きい、脣の薄い、ぽつてりとした女が、臭い敷布などの抛り込んであるチャプ屋の物置部屋に轉がつてゐた。彼は、あの髭を捌ゑて、ていねいに石鹼灌腸をしてやつて、嫋々と笑ひながら、血色素補充劑を與へた。――

彼はまた、ある少し寂びた腕木門をくぐつて、沓脫のしんと片づいた女關いつぱいに、堂堂と姿を現した。

此家(こゝ)の主人は、まう結核菌に肛門まで蝕ばまれて、タオルの寢卷の中に萎びてゐた。奥さんは奥さんで、最近また、何番めかの「神の攝理」を、お肚に宿して、喘いでをつた。その二人を、日當りの良い病室で、あの金眼鏡の奥から、すこぶるアト・ホームに眺めながら

「かう亂調子ぢあ、柝を入れねばなりませんな。」と、そんなことを、博士が、檢溫器を弄り〳〵云ふのだ。

「は、は、先生。かう立合ひが苦しくちや、は、は」と、その主人の株屋の二ばん番頭は、何か自分の考へに縋りつくやうに、彼を見上げて、息だけで笑ふ。

いくらか低徊趣味的に、うまあくしかし、コツを抑へた診察が濟むと、玄關へ出て、そこで、奥さんがたんのうするだけ、得意のABC的な「打ち明け話」を嚙んでふくめて、それから、格ばつた、いんぎんなお辭儀を殘して、門の外へ……

……

そんな風で——

街道や、田圃の中や、兎に角ここの風物の間に、斧氏のつや〳〵としたカイゼル髭と蛇洋杖とが、揚々と動いて行くのを認めると、みんなは、われがちに、なにか溫血動物、たとへば、オーストラリヤの山羊が、金の義齒をされたやうに、誇らしげに囁きあつたものだ。

「ちよくで、親切で、偉い、此處の博士(せんせい)!」

それが、週に二日の自宅診療を始めて、二三ヶ月も經たぬうちのことだつた。

三

「此處の博士(せんせい)」が、間もなく町へひびいていつて、町が、その、一種の「抵抗商法」に、大きく木魂し始めたころ——こ

んなことがあつた。

船乘り病院の煉瓦の膚が、ときどきカッと映えるかと思ふと、急にまたうそ寒い雨につつまれたりする、秋ぐちの、氣紛れな空のつづく時分のことで――

ある午前、斧氏が、電車を降りて、健康な脚を暢ばして、掘割の橋へかかると、その中ほどに、水色ペンキを塗つた箱車の梶棒をおろして、欄干に脊を凭せて、男が一人、しわしわと崩ほれてゐた。

男は、世の中と季節の脚に、さんざ踏んづけられて、骨を露呈したと云つた感じの顏を、陰氣にうな垂れて、足コブラの上へ涎を垂らしてをつた。

その、あぐらに寄せた二つのコブラは、米利堅粉の袋の半股引とチカ足袋との間に、まるで、この男のからだぢうの活力を呑んでゐるかのやうに、小さく、セピヤ色に、膨らんでゐた。

細い肩から、反射的に梶棒へかかつた片手は、そのままその梶棒の分身と思はれるほど硬直し、も一つの手は、橋桁の白い地べたへ垂れて、青黒く、掌の胼胝を覗かせてをる。

斧氏が、ちよいと本能的に足をとめて、それらを見下してる間に、見物人がまわりを圍んでしまつた。

みんな、あの瀟々とした病院界隈の居住者で、季節的にシロ眼が冴え、それが、この、行路病者へ首を伸ばして

「ベンタツの父つあんだよ。」

「カンカン蟲の親爺だ。」

「まゐつたかな。」

「臍が動いてらあ。」

「ふうん……　……」

そんなことを囁きあつては、ちよい〳〵斧氏を見上げるのだつた。

斧氏は、大急ぎで絹の手袋を脱いだ。そして、モーニングの腰を落して、柔いまるみをもつた掌を、男の、冷い、鬚の芽のざらつく腮の下へ入れて、靜に顔を持ちあげた。男の涎が、その乳いろの掌を濡らして、ねつとりと金の指輪の大きな寶石にまで絡みつく。

斧氏は、構はずに、カイゼル髭が男の頬を撫でるほど屈みかゝつて、瞳孔や呼吸をしらべた。それから、兩手を男の垢ずんだ法被の肩にかけて、そつと横に寢かさうとすると、それまで、息をつめて、むず〳〵と見まもつてゐたまわりの一人が

「寢かせるんで？」と、感傷的に叫び、斧氏の髭が、點頭くのを見るやいなや、今度は、いきなり三四人の手が、やつぱり感傷的に、その「ベンタッの父つあん」へ群れて、まるで佛體かなんどのやうに、靜々と、橋の上に仰臥させた。

斧氏は、男の米利堅粉の半股引の紐を弛めて、心臓をそつと抑へた。

それから、彼は、おろしたてのハンカチを出して、兩手を拭いて、またそれを疊んで、毛の薄い男の頭の下へ敷いてやつた。

「濟みませんが、」と、彼は、自轉車をもつた小僧に、手帖の走り書をちぎつて渡しながら、あのバスで頼んだ——

「これを、あの病院へとゞけて下さい。」

で、彼は、髭を揚げて、片手を欄干の外へつき出して、圓い掘割の上に、赤煉瓦に蠟燭の灯のやうな太陽を浴びて、眞近に建つてゐる彼の病院を指さした。

「あゝ海員病院ですか。」と小僧が、何となく斧氏に敬禮し、頬を紅くして自轉車を飛ばせた……

間もなく、病院の擔架が、小使らに擔がれて、助手と共に、橋の上へ現れた。

斧氏は、その助手に、こまかい指圖をしておいて、ひと足さきに蛇洋杖をコッコッつきながら、靴を鳴らして病院へ去つた。

「斧博士だ！」

「院長さんだ！」

そんな感きわまつた聲々に、さつさと、基督のやうに、脊を向けて……

彼は、速く、病院へいつて、「ベンタッの父つあん」の涎や、胼胝や、心臟に觸れた手を、消毒せねばならなかつた――

ベッタッの父つあんは、橋の地べたに、斧氏のハンカチを頭の下に敷いて、寢轉がつたまゝ、鈍く瞼を動かした。

紫いろの小瓶を持つた助手と、黑い手帖を開いた巡査とが、その頭の上に蹲んでをつた。

「大丈夫です。氣がついたやうだ。」と助手が低聲で云つた。

「おい、」と巡査が、父つあんの額を、鉛筆のさきで叩いた。

父つあんは、パチリと眼糞の溜つた眼をあけて、また鈍く閉ぢた。

「おい、おい！」と巡査は、叩きつゞけた。

父つあんが、脣をもぐもぐ動かして、微な喉音で何か云つた。

「え？　え？……何だがわからん。おい、もつとはつきり云へ。お前、誰だ？」

だが、父つあんは、眼を半びらきに曇らせたまゝ、不明瞭な喉音をつゞけた。

「兎に角、病院へ連れゆきませう、斧先生もさう云はれたんですから。」と助手が、巡査に云つた。

巡査は、父つあんへ、舌打ちして、立ちあがつて、苛だゝしい刺激の充ちた空へ、胸を反らしながら伸びをした。

それまで、欄干に倚りかゝつて、棹を押してゆく荷足りの、船頭の女房の、行火のやうなうしろつきを見て、何か話し込んでゐた小使らが、助手に呼ばれて、急いで擔架を、父つあんの傍へ展げた。

巡査は、遠まきに群れてゐるみんなへ、退いた、と手をひと振りして、それから、例の水色ペンキを塗つた箱車の前蓋をあけて、

「何だ、ベンタツか。」と呟きながら、そこにぎつしり三十許り詰まつてる木箱の、前側の名札を、ちよい／＼と裏返したりして、手帖に書きとつた。

「食ひたい、何か呉れ、食ひたい……………」

そんな囈言を、擔架に揺られながら、父つあんは、空へ云ひつゞけた——やつぱり不明瞭な喉音で。

それから三日ほどすると、父つあんは、まうまたいつものやうに、町のそちこちの勤人の自宅から、町ッ子の見栄の「自家辨當」を拾ひ蒐めて、例の水色の箱車に滿載して、ジグザグと空腹じくよろけながら、あの時刻に、この橋を、仲間との受渡し場の、美以教會前へと渡つていくのだつた。

いや、忘れてならないことは、父つあんには、空腹さを忘れる爲の、お喋べりの癖がついてゐて、で、むろん、斧氏のことも、

「ちよくで、親切で、偉い、町の博士！」

とそんな風に、勤人の自宅や、勤先や、また仲間うちへ、彼のひもじさの程度に比例して、盛んに傳へたのであつた！

父つあんの連中の辨達夫は、どんたく町らしいユニークな存在で、彼等は、日曜以外の毎午前に、それぞれ受持區域の辨當を蒐めて、八方から、町のほゞ中心點にある古風な煉瓦造りの美以教會前の廣場に寄つて來、そこで、その辨當を受

け渡しゝて、各自の配達區域へ配り、お賣が濟むと、その空箱を蒐めて來て、もう一遍牧會前で受け渡しゝて、さうして八方へ歸つてゆく。この時分には、辨達代は、平均一個あたり月に一圓二十錢で、その歎割は、彼等の親方にハネられるんで、從つて、立ん坊より少し上流だが、父つあんのやうに、不良なカンカン蟲兄妹を子に持ち、その上、蛸引きの女房が孕んでると云つた輩は、みんなひもじく、その空腹を、ゴシピングへの陶醉で紛らしつゝ、町ッ子の見栄の「自家の釜から直ぐの美食」を、毎日、そんな風に運んでる儚ない正行者たちだ。

だから、彼等は、必死の、またもつとも「效果的な」ゴシップ・モンガーだつた！……

四

斧診療所の眞向ひの、低いトタン屋根の下に、潛水夫の女房が、文字通り章魚の吸盤風な、小店を開いて、客を呼んでゐた。

亭主は、あの縣廳や、警察や、港務局あたりに雇はれて捜海作業をやるあんなちやんとした潛水夫ではなくて、隱れ遊びがいつの間にか葉書一枚で、三浦三崎、茅ケ崎、房總邊の網元まで消えてしまひ、時折り、そこらの鮑やタヒラ貝をぶら提げて、ひよいと彼女へ戻つて來るモグリ潛水夫で——そんな所爲か、彼女は、始終、まるで卵巣を剔りとられた女のやうに、焦點の合はぬ濃化粧をして、そのトタン屋根の軒下に立つて、斧家の診療日の往來へ、薄い屑を翻すのだ。

「いかゞでござゐます、お熱は？　あゝそれは宜うござゐました。兎に角、此處の博士は一番なんですから。あ、そちらが、混んで居りましたら、どうぞお寄りなさいませ……」

おでんと、氷とを、夏冬に賣りわけるのが、彼女の本業だつたが——

「まるで、ドック市のさわぎで……」と彼女は、ちかごろ、亭主の留守の間に、ミソッ齒の間へ義齒れたのを、キン

キンと閃めかせて、診療所の賑かさを、愛すべき錯覺から、さう說明するのだつた。

診察は、朝の八時から、たいてい夜も八時ごろまでつゞくが、初診患者は、未明に詰めかけて、順番を爭つた。九時ごろには、まう玄關の六疊がいつぱいで、そこを「華々しく」溢れだしたのが、仕方なしに、向ひの彼女の「吸盤」へ吸ひ込まれて、その土間の腰掛や上り框から、神を騷がせて、看護婦の紅潮した呼び聲を聽いてゐた。

前の晩、此處の奧の、花茣蓙の冷く敷かつた部屋や、一町ばかり離れた煙草屋の二階の、硬い布團の上で、田の風の遠々しい氣配に、こほこほと寢汗に浸りながら、夜明しゝて、朝の一番に、やつと處方箋を貰つて、それをお護符のやうに抱いて、近在へ歸つてゆく連中さへあつた。

肺の腐る匂ひ――痰の絡む音――薄紫色の爪――惡熱…それに、あの、女の小指に繃帶を卷きつけたと云つた程度の感傷病者（むろん、此處へ通つて來るのは、大部分がこれで、つまり、町の上層の有閑な連中が多かつたのだ）――それが、大抵みな、そのころ全盛の、大島や錦紗を着てゐて、時折りは、それに目醒ましいジョウゼットとかリボン地の日傘さへ混つた。さうして、フエルト草履を內輪に曳き摺り、茶鼻緒の南部桐下駄は膝をたるめて、てんでに思案ごとのありさうな面持ちで、さゝやかな斧診療所の木戸門に群れるのだつた――

この華やかな一隊も、地勢の關係から、みんなほとんど、あの邊鄙な電車ひとすじで、はるばると運ばれて來るので、それが窮屈な待合所に肩と膝をちゞめたり、場合によつては、空腹さの我慢もするし、場合によつてはまた、季節と天候への苦痛も嘗めて…つまり、さうした彼等らしい苦勞を經て、はじめて、評判の斧博士の診察を、しみじみ受けることが出來たのだ。

で彼等は、もちろん、その高價なよろこびを、同病者へ吹聽した。

「それあ親切で、偉い博士だが、まあ一度いつて、あの騷ぎをごらんなさい。」

ある日、美しいエナメルの胴に、金紋のまばゆく輝いた自動車が、虚空から天降つたやうに、もぐりの店の、トタン屋根の庇のついさきに止つた。

「まあ自動車！　まあ自動車が來たんだよ、先生んとこへ！」と、女房が、鬢の縮れ毛を震はせてトキをつくつて、彼女のお客らへ鼻を蠢めかした。

「あ、××の奥さんとお孃さんだ！」と、肺炎加答兒が、中腰になつて生々と叫んだ。

「××？　あの生絲の！？」と喘息が、喉佛を擧げて――「ふうん」と滿足氣に唸つた。

兎に角、奇蹟でも何んでもなく、町で屈指の生絲輸出業者××氏の夫人が、年ごろの令孃を先へ、その自用車から降り立つて、門からひと跨ぎの、玄關の待合室の患者連の中へ、窮屈に割り込んだ。さうして、彼女らの自負心を、程よく挫く程度に待たされてから、正面の唐紙の奥の、診察室へ呼び込まれた。

それからは、お定まりの、長い〳〵初診患者檢診の時間がたち、やがて、今度は、應接室へ通じる方の唐紙があいて、上機嫌の彼女らが現れ、そんな大物に同病者を見つけた心強さと誇らしさに、すつかり亢奮してしまつてるみんなの間をすりぬけて、つゝましく傲つた足どりで門前の自動車へ――

その日以來、このきらびやかな自動車は、週に一遍づゝ、町の北の端の高臺から、南の端の斧診療所まで、全市を貫いて、令孃を運んで來た。

圓タクには、まだ三四年、間があり、自家用の自動車の、いろんな意味から、花々しく眼につく時分で、從つて、この××家の自動車は、斧博士への、もつとも鮮かな「廣告の矢」となり、それ許りでなく、一方ではまた、××家階級の人々の間に、妙な虚榮心を煽つた。

たとへば屑絲問屋の、若い、少し舌ッたらずの夫人が、丹念に美装を凝らして、自動車を傭つて洟ッ風邪を診て貰ひに、弁診療所へ現れたり、また、ある砂糖問屋では、わざ／＼迎ひの自動車を寄越し、弁博士が、例の揚々と、それに乘つて出かけると、少しばかり青い、赤ん坊の脱糞をとり巻いて、家内中して心配してゐるのであつた・・・

「ほんとうに、まるで、ドック市の騷ぎだ！」

さう潛水夫の女房が、障子を張り換へたり、花茣蓙を新しくしたり、せいぜい好景氣に、彼女の「吸盤」を粉飾しながら、詠嘆を深めてゆく。

だが、いつたいドック市の騷ぎは、この海港のふところにある船渠の職工の、給料日の騷ぎを云ふので――その日には船渠の門から鍵の手に倉庫に沿うた片側道三町ばかりの間に、職工向きの露店がたちつゞき、その向ひ側には、呑み屋の亭主やお神、何か因縁のある甘ずつぱい女、バクチの相手、などと云つた債鬼連と、それに子を負うた女房たちも混つて、てんでに尖つた眼をして一列にならび、退け時刻が來ると、菜ッ葉服の流れが、その間をいつぱいに埋めて揉み合ひ、そちこちに、殺氣だつた騷ぎをひき起す――

そんなドック市と、弁診療所では、まるで、どん底と天邊の筈だが、女房は、ミソッ歯の金齒を剥き出して、神のやうに無反省に、華々しい往來へトキをつくりつゞける。

「・・・そちらがお狹うござゐましたら、どうぞこちらで、お憩みくださいまし。座敷も、少しは綺麗にいたしました。」

（附　記）

「街の弁博士」は作者の天分の薄さと病弱故に遂に本號締切までに所期の半をすら完成し得ず。讀者並に編輯者の諒恕を乞ふ。

（作者）

定價	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

每月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料
△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和四年六月十八日印刷
昭和四年七月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　竹內喜太郎
印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同長野三二〇五番


世界に於て
マツダに優るランプなし
新マツダ
内は艶消眞珠の表 放つ光は春の色
もちよく明るく
電氣がお節
ギバ体温計
平型

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.